四條畷市文化財調査報告　第50集
寝屋川市文化財資料28
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第252集

四條畷市・寝屋川市

讃良郡条里遺跡

イオンモール四條畷建設に係る文化財発掘調査報告書

－第二分冊－

２０１５年1月

四條畷市教育委員会
寝屋川市教育委員会
公益財団法人　大阪府文化財センター

四條畷市文化財調査報告　第50集
寝屋川市文化財資料28
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第252集

四條畷市・寝屋川市

讃良郡条里遺跡

イオンモール四條畷建設に係る文化財発掘調査報告書

－第二分冊－

四條畷市教育委員会
寝屋川市教育委員会
公益財団法人　大阪府文化財センター

目　　次

－第一分冊－

巻頭図版
序文
例言
凡例
第１章　調査に至る経緯と調査の経過……（濱田延充・村上始・實盛良彦）…1
第２章　調査の方法 ……（後川恵太郎）…5
第３章　地理・歴史的環境
　第１節　地理的環境……（後川恵太郎）…7
　第２節　歴史的環境……（實盛良彦）…8
第４章　調査成果
　第１節　基本層序……（後川恵太郎）…15
　第２節　１・２・４区の調査成果……（後川恵太郎）…16

－第二分冊－

　第３節　３区の調査成果……（村上始・實盛良彦）…415
　第４節　大将軍社跡の調査成果（11－６区、13－６・７区）……（村上始・實盛良彦）…497
　第５節　13－２区の調査成果 ……（後川恵太郎）…511
　第６節　13－３区の調査成果 ……（後川恵太郎）…528
　第７節　13－４区の調査成果 ……（後川恵太郎）…535
　第８節　13－５・８区の調査成果 ……（井上智博）…555
第５章　自然科学分析
　第１節　讃良郡条里遺跡出土ガラス小玉の分析……（降幡順子・後川恵太郎）…573
　第２節　讃良郡条里遺跡出土鍛冶関連遺物の分析……（大澤正己・鈴木瑞穂・真鍋成史ほか）…575
第６章　総括
　第１節　遺構の変遷と出土遺物……（後川恵太郎・實盛良彦）…581
　第２節　小型海獣葡萄鏡および柴垣柳樹双鳥鏡について……（實盛良彦）…593
写真図版
報告書抄録

第３節　３区の調査

３区の調査で確認できた遺構面は、11 面あった。第１遺構面から第３遺構面にかけては、中世から古代にかけての遺構面であり、第４遺構面から第９遺構面は古代から古墳時代にかけての遺構面、第 10´ および第 10 遺構面は弥生時代の遺構面であった。以下、それぞれの遺構面で検出した主な遺構、および出土した主な遺物について詳述する。なお、遺構番号は３区のみ独立させて 0001 番からの番号を遺構の種別に関係なく連続させて各遺構に付与した。また、各遺構面の遺構はそのほとんどが遺構検出面に基づいた面分けであり、各遺構面と各時代が完全に分離できたわけではないことを断わっておく。

この調査区の調査前の現状は他の調査区と同様水田耕作地であった。重機により現代耕土と床土を約 30cm 掘削するとすぐに遺物包含層である灰黄褐色系砂質土を中心とする土層があり、この上面が中世に属する第１遺構面であった。以下、当調査区の基本層序について述べる（図 495 ～ 502、図版 38）。

第Ⅰ層：現代耕土層　厚さ約 20cm。

第Ⅱ層：床土層　厚さ約 10cm。

第Ⅲ層：灰黄褐色系砂質土を中心とする土層　厚さ約 20cm。中世。上面が第１遺構面。

第Ⅳ層：黄褐色系砂質土を中心とする土層　厚さ約 25cm。古代から中世。上面が第２遺構面。

第Ⅴ層：上面が酸化し黄色系になった緑灰色系粘質土を中心とする土層　厚さは約 25cm。古代。上面が第３遺構面。

第Ⅵ層：灰色系シルトを中心とする土層　厚さ約 35cm。古代。上面が第４遺構面。

第Ⅶ層：灰色系粘質土の水田耕土と灰色系中砂の洪水砂層　厚さ約 35cm。古墳時代後期から古代。耕土上面が第５遺構面。

第Ⅷ層：黄灰色系シルトの水田耕土と灰黄色系中砂・粗砂の洪水砂層　厚さ約 35cm。古墳時代後期。耕土上面が第６遺構面。

第Ⅸ層：灰色系粘質土の水田耕土と黄色系中砂の洪水砂層　厚さ約 25cm。古墳時代後期。耕土上面が第７遺構面。

第Ⅹ層：黒褐色系シルトの水田耕土と灰白色系粗砂の洪水砂層　厚さ約 30cm。古墳時代後期。耕土上面が第８遺構面。

第ⅩⅠ層：水田耕土層　黒色系粘土。厚さ約 35cm。古墳時代中～後期。上面が第９遺構面。

第ⅩⅡ層：無遺物層　灰色系粘質土。厚さ約 35cm。植物遺体や炭化物を多量に含む粘土層であり、湿原に葦等が生えるような景観が存在したとみられる。その時期は上下の土層の対応関係等から弥生時代後期から古墳時代前期にかけてとみられる。

第ⅩⅢ層：水田耕土層　オリーブ黒色粘質土。厚さ約 20cm。弥生時代中期。上面が第 10´ 遺構面。

第ⅩⅣ層：地山層　灰黄色粗砂。厚さ約 20cm。弥生時代中期。上面が第 10 遺構面。

第ⅩⅤ層：無遺物層　緑灰色粘土より下層は完全に包含遺物がなくなる。

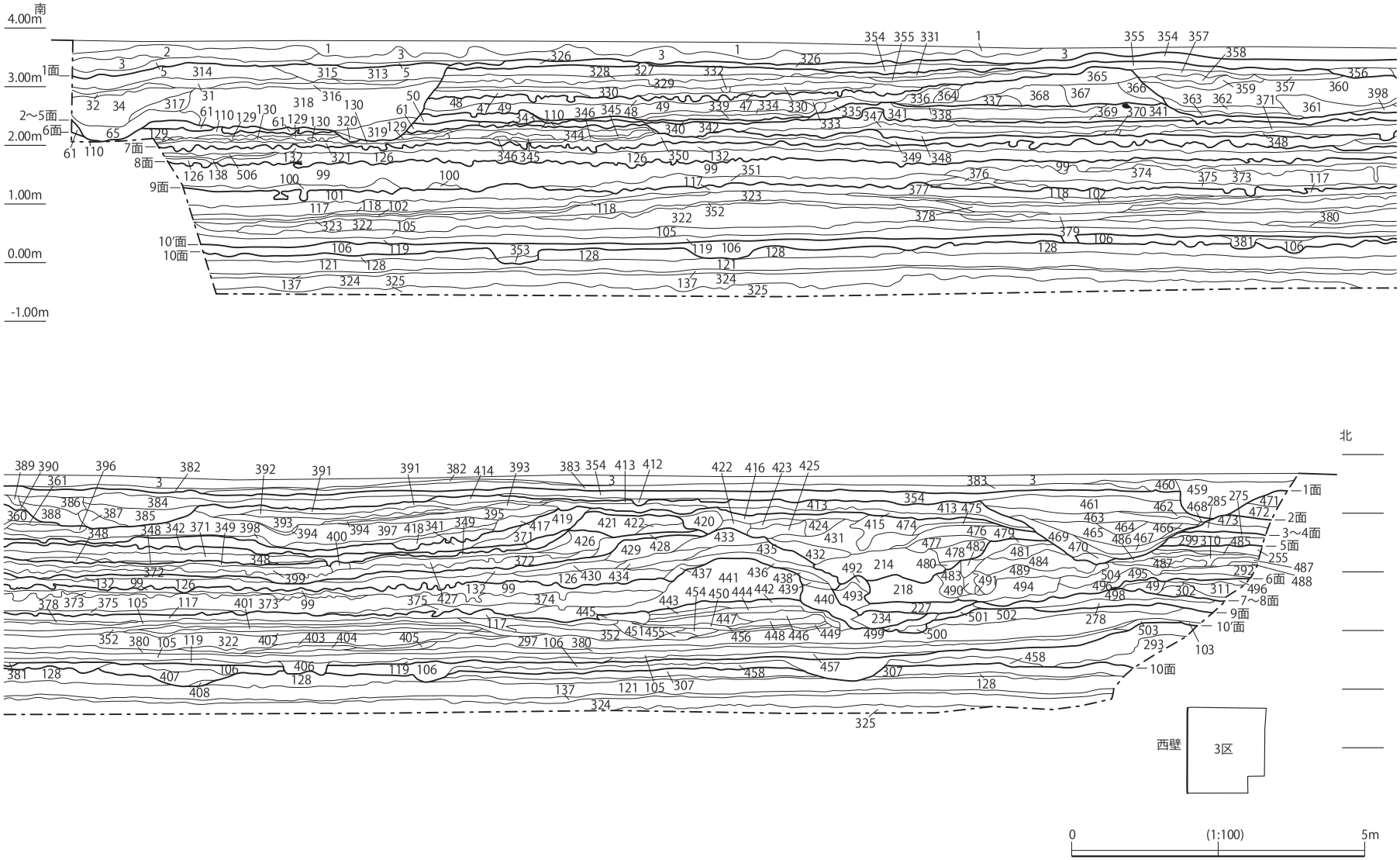


図 495　3 区　調査区西壁断面図

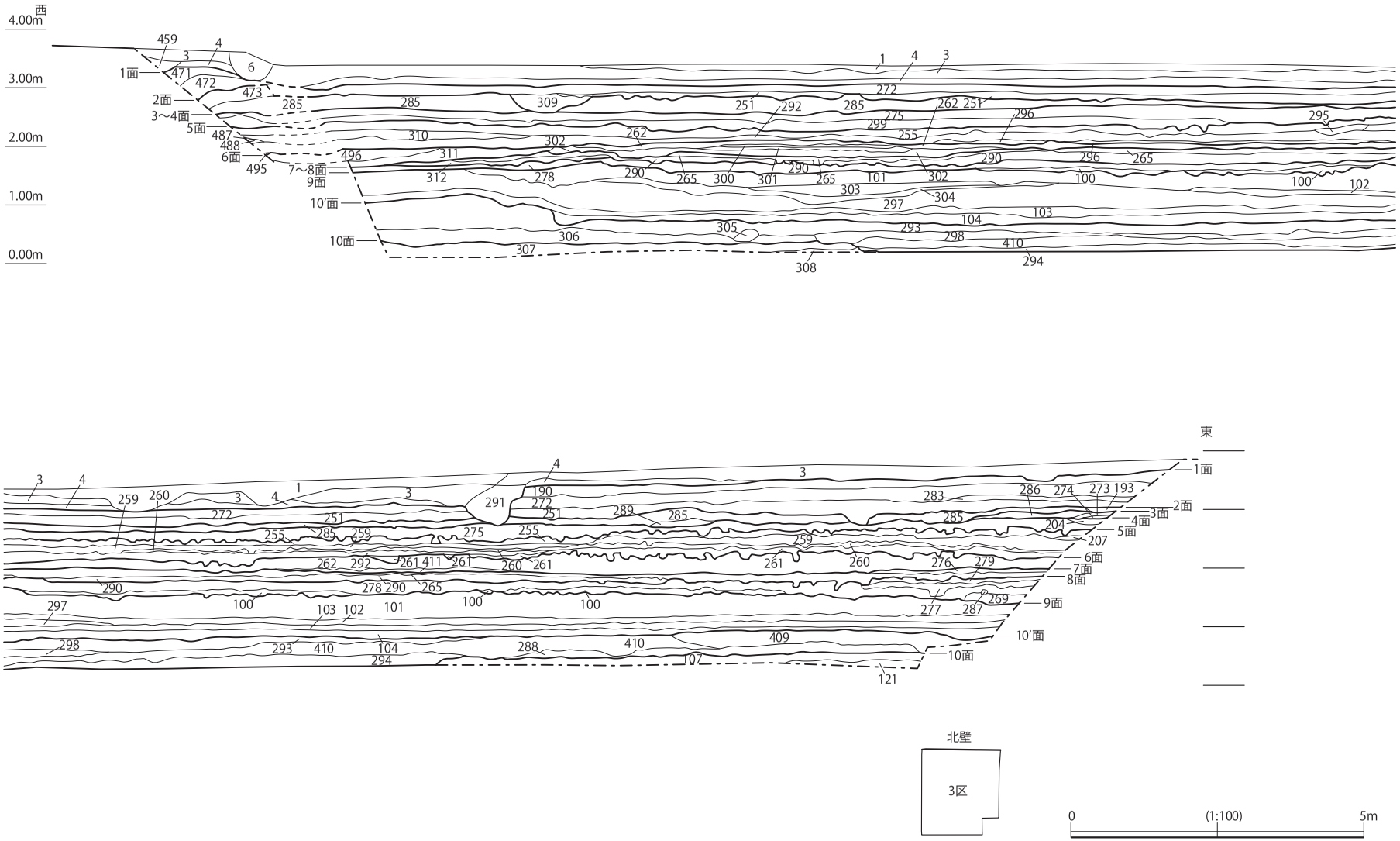


図 496　3 区　調査区北壁断面図

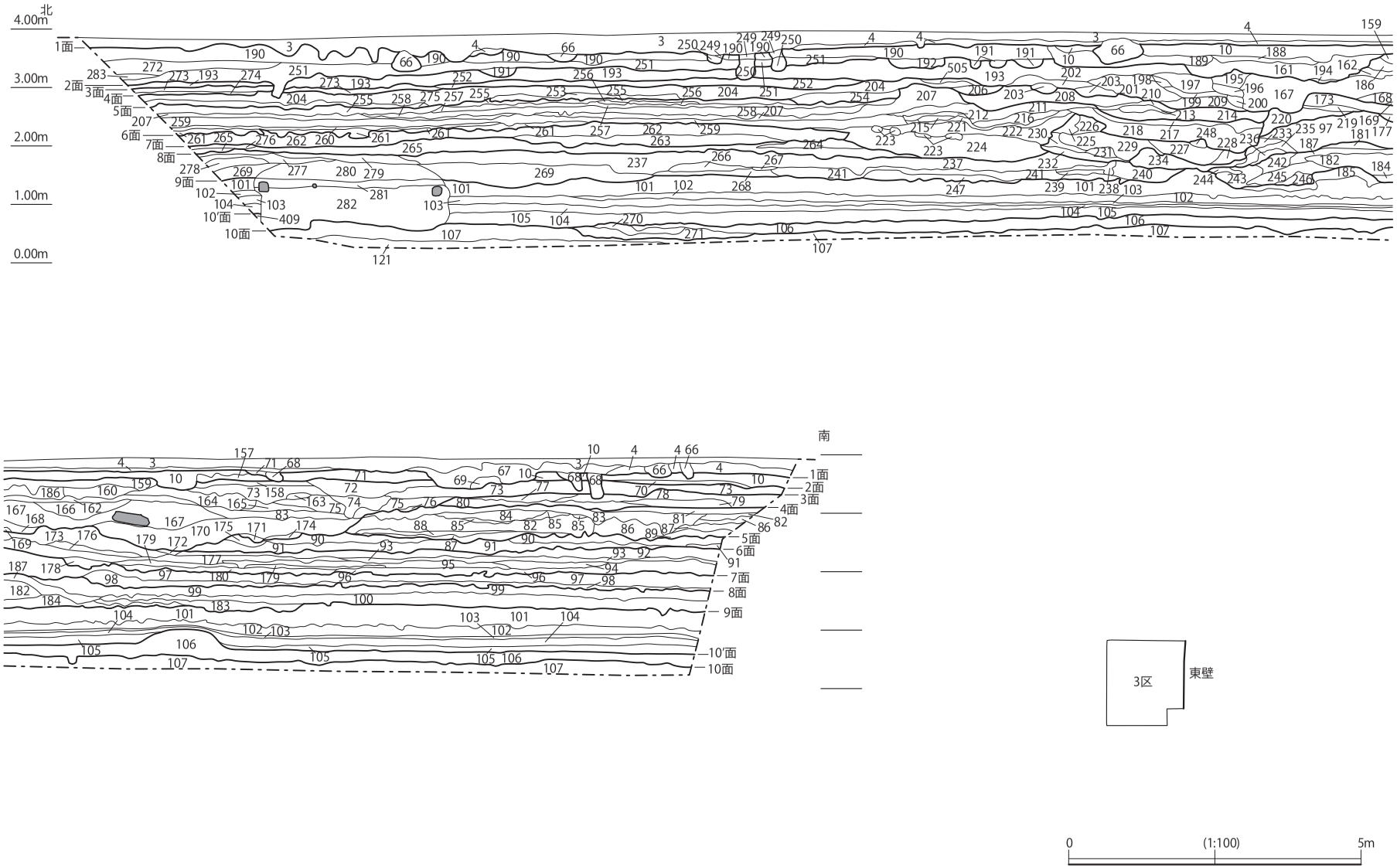


図 497　3 区　調査区東壁断面図

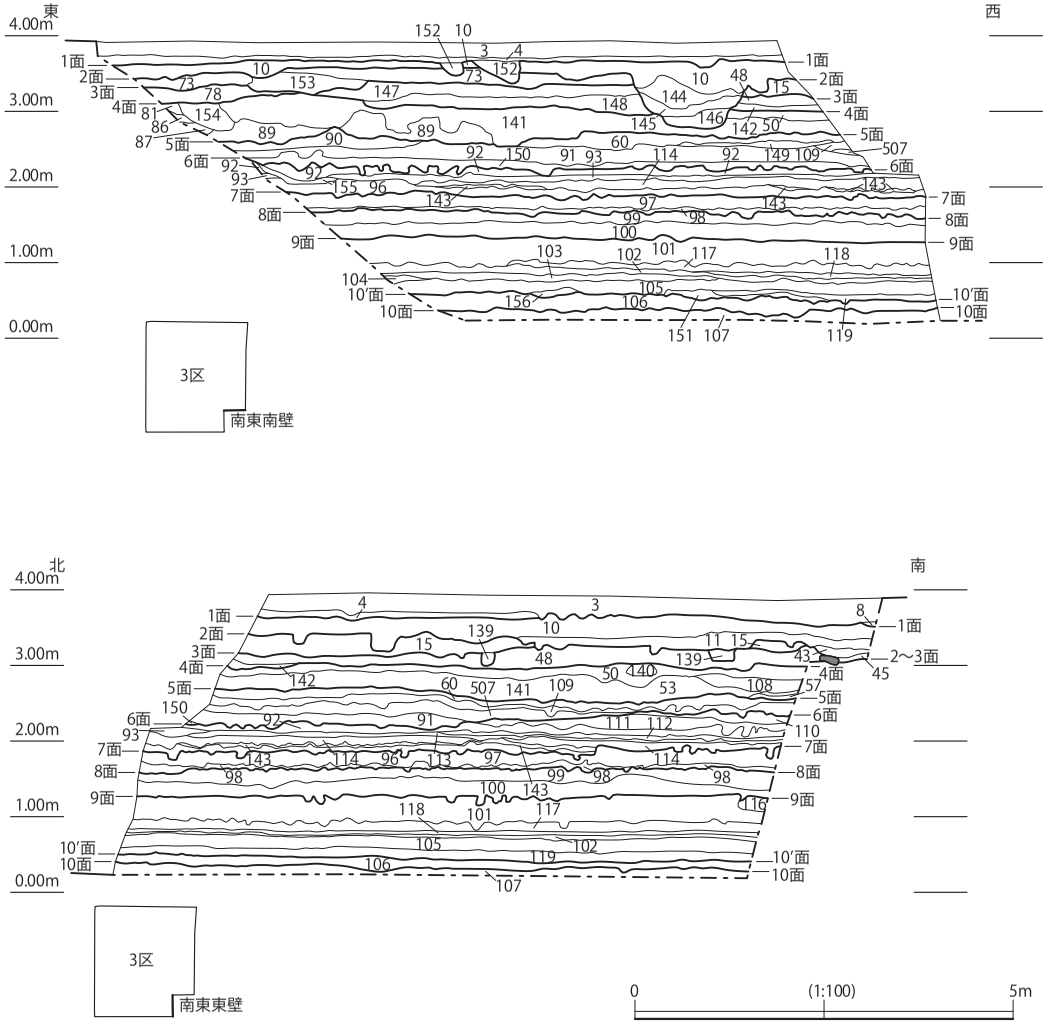


図 498　3 区　調査区南東南壁・南東東壁断面図

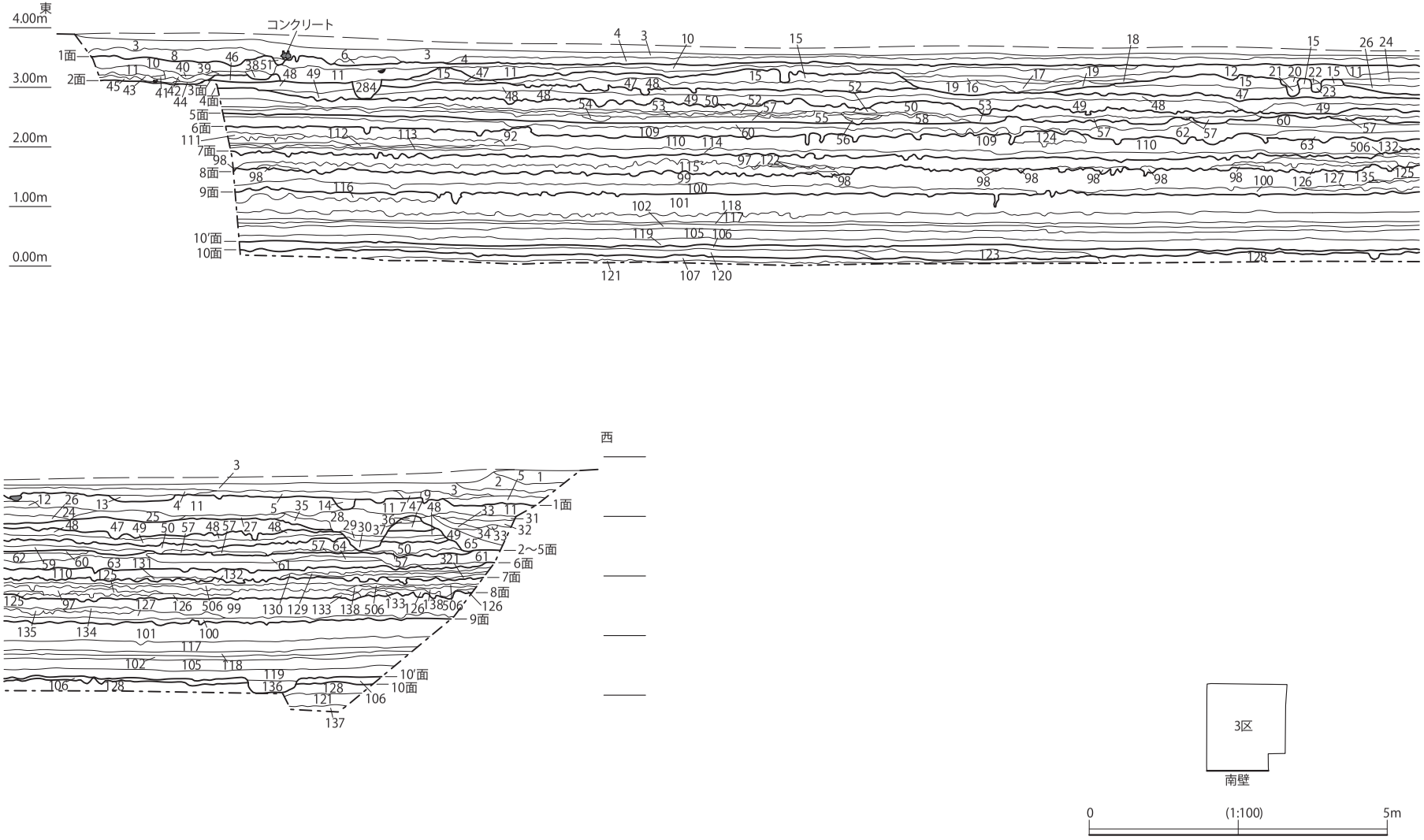


図 499　3 区　調査区南壁断面図

1　5Y6/3オリーブ黄　砂質土　礫混　盛土
2　5Y4/2灰オリーブ　中砂混砂質土　近現代耕土
3　7.5Y3/1オリーブ黒　中砂混砂質土　近現代耕土
4　7.5YR5/6明褐　砂質土　ややしまる　床土
5　2.5Y5/3黄褐　中砂混砂質土　φ～1cmの礫が混じる　床土
6　3層と4層のブロック　撹乱土
7　10YR5/6黄褐　中砂混砂質土　遺構埋土
8　2.5Y5/2暗灰黄　砂質土　φ～1cmの礫がやや多く混じる
9　10YR5/1褐灰　中砂混砂質土　φ～1cmの礫が混じる　床土
10　10YR5/2灰黄褐　砂質土　φ～1cmの礫が混じる　1面地山
11　10YR3/1黒褐　中砂混砂質土　包含層・2面落込埋土
12　7.5YR3/1黒褐　砂質土　φ～2cmの礫が混じる　包含層
13　7.5YR4/3褐　中砂混砂質土　φ～2cmの礫が混じる　遺構埋土
14　2.5Y4/2暗灰黄　中砂混砂質土　遺構埋土
15　2.5Y6/6明黄褐　砂質土　φ～1cmの礫が混じる　包含層　2面地山
16　10YR4/2灰黄褐　砂質土　1518溝埋土
17　2.5Y3/2黒褐　砂質土　1518溝埋土
18　10YR3/3暗褐　砂質土　粘性やや強い
19　10YR3/1黒褐　中砂混砂質土　炭化物が多く混じる　1518溝埋土
20　7.5YR4/2灰褐　砂質土　2面遺構埋土
21　5Y3/2オリーブ黒　中砂混シルト　2面遺構埋土
22　10YR5/4にぶい黄褐　細砂混シルト　2面遺構埋土
23　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂　一部シルト混　2面遺構埋土
24　10YR3/3暗褐　中砂混砂質土　φ～3cmの礫が少量混じる　1391土坑埋土
25　10YR4/2灰黄褐　中砂混シルト　φ～2cmの礫が混じる
26　5Y3/1オリーブ黒　粘質土　一部シルト質　1391土坑埋土
27　5Y4/2灰オリーブ　中砂混砂質土　粘性やや弱い
28　2.5Y4/1黄灰　中砂混砂質土　1971土坑埋土
29　7.5Y3/1オリーブ黒　粘質土　一部シルト混　1971土坑埋土
30　5Y5/2灰オリーブ　中砂混シルト　5BG5/1青灰粘質土がブロックで混じる
しまりがあまりない　1971土坑埋土
31　2.5Y4/2暗灰黄　中砂混砂質土　1977土坑埋土
32　5Y4/1灰　中砂混粘土　1977土坑埋土
33　5Y5/1灰　中砂混シルト　1977土坑埋土
34　7.5Y4/1灰　粘土　1977土坑埋土
35　2.5Y5/1黄灰　粘質土　一部中砂混
36　5Y5/2灰オリーブ　中砂混砂質土
37　5Y4/2灰オリーブ　中砂の多く混じるシルト
38　10YR5/1褐灰　砂質土　φ～2cmの礫が混じる　2面遺構埋土
39　10YR4/1褐灰　砂質土　φ～1cmの礫が少量混じる
40　10YR6/1褐灰　砂質土　1856土坑埋土
41　10YR3/3暗褐　砂質土　1856土坑埋土
42　2.5Y3/3暗オリーブ褐　砂質土　1856土坑埋土
43　10YR3/2黒褐　砂質土　1856土坑埋土
44　10YR2/2黒褐　砂質土　粘性やや弱い　1856土坑埋土
45　10YR4/2灰黄褐　砂質土　1856土坑埋土
46　2.5Y6/4にぶい黄　砂質土　φ～3cmの礫が混じる
47　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　一部シルト混
48　7.5GY5/1緑灰　粘質土　一部中砂混　上面1cm程のみ酸化して、
7.5Y8/3淡黄に変色　3面地山
49　2.5GY5/1オリーブ灰　中砂混シルトに中砂が部分的にブロックで混じる
50　7.5Y4/1灰　中砂混シルト　粘性やや強い　水田耕土　4面地山
51　2.5Y7/2灰黄　砂質土
52　7.5Y6/2灰オリーブ　中砂
53　2.5GY5/1オリーブ灰　シルト
54　7.5GY5/1緑灰　シルト
55　7.5Y7/2灰白　細砂
56　5GY6/1オリーブ灰　シルト
57　7.5Y7/1灰白　中砂　一部粗砂混
58　5GY5/1オリーブ灰　中砂の多く混じるシルト
59　2.5Y7/4浅黄　細砂　2.5Y3/1黒褐粘質土が薄く層状に混じる
60　10BG6/1青灰　シルト　一部粘質土混　5面水田耕土
61　2.5GY6/1オリーブ灰　中砂混シルト　水田耕土？　5面地山
62　2.5Y7/6明黄褐　中砂
63　2.5Y8/1灰白　中砂
64　2.5Y6/4にぶい黄　粗砂
65　5Y3/1オリーブ黒　中砂混シルト　1977土坑埋土
66　2.5Y4/3オリーブ褐　砂質土　撹乱土
67　10Y5/1灰　中砂混シルト　撹乱土
68　10YR4/1褐灰　砂質土　1面遺構埋土
69　2.5Y4/2暗灰黄　砂質土　撹乱土
70　10YR5/2灰黄褐　中砂混砂質土
71　10YR5/3にぶい黄褐　砂質土
72　2.5Y5/3黄褐　砂質土　一部シルトが混じる
73　2.5Y6/3にぶい黄　中砂混砂質土
74　2.5Y6/4にぶい黄　シルト　一部細砂が混じる
75　2.5Y7/2灰黄　細砂　一部中砂が混じる
76　2.5Y5/2暗灰黄　中砂混シルト
77　2.5GY6/1オリーブ灰　中砂混シルト
78　5Y5/2灰オリーブ　砂質土　φ～2cmの礫が混じる
79　5BG5/1青灰　シルト　一部中砂が混じる
80　5Y6/2灰オリーブ　中砂　φ～2cmの礫が混じる
81　5GY5/1オリーブ灰　シルト　4面地山
82　5Y7/1灰白　細砂
83　2.5GY6/1オリーブ灰　中砂混シルト
84　7.5Y6/2灰オリーブ　中砂
85　2.5GY4/1暗オリーブ灰　シルト
86　7.5GY5/1緑灰　中砂混シルト
87　7.5Y7/2灰白　細砂　10Y5/1灰シルトが混じる
88　2.5Y5/2暗灰黄　中砂
89　2.5Y5/1黄灰　細砂混シルト　一部2.5Y7/3浅黄中砂が混じる
90　7.5Y4/1灰　細砂混粘質土　5面水田耕土
91　5Y6/2灰オリーブ　中砂　92層が部分的に混じる
92　2.5Y4/1黄灰　中砂混シルト　粘性やや強い　6面水田耕土
93　5Y5/1灰　中砂混シルト　水田耕土
94　2.5Y6/2灰黄　中砂　一部シルトが混じる
95　2.5GY6/1オリーブ灰　中砂混シルト
96　2.5Y7/2灰黄　粗砂　10Y6/1灰シルトが混じる
97　5Y4/1灰　中砂混粘質土　7面水田耕土
98　2.5Y7/3浅黄　中砂
99　2.5Y3/1黒褐　中砂混シルト　8面水田耕土
100　7.5Y8/1灰白　粗砂
101　5Y2/1黒　粘土　9面水田耕土
102　10Y5/1灰　粘土　炭化物が非常に多く混じる
103　2.5GY6/1オリーブ灰　粘土　植物遺体・炭化物が多く混じる　無遺物層
104　2.5Y4/1黄灰　粘土　植物遺体・炭化物が非常に多く混じる　無遺物層
105　7.5Y4/1灰　中砂混粘質土　植物遺体が多量に混じる　無遺物層
106　5Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土　水田耕土
107　5Y6/2灰オリーブ　中砂混シルト　10面地山
108　2.5Y5/3黄褐　中砂　φ～2cmの礫が混じる
109　5Y7/2灰白　中砂　φ～3cmの礫が少量混じる
110　2.5GY4/1暗オリーブ灰　細砂混シルト　6面水田耕土
111　2.5Y6/2灰黄　中砂　一部92層が混じる
112　2.5Y7/2灰黄　中砂
113　2.5Y4/1黄灰　シルト　水田耕土
114　2.5Y7/1灰白　粗砂
115　7.5Y4/1灰　細砂混シルト　水田耕土
116　10Y4/1灰　中砂混粘質土　9面水田耕土
117　5Y6/1灰　粘土　黒色炭化物が多く混じる
118　10YR6/1褐灰　粘土　炭化物・植物遺体が混じる　無遺物層
119　5Y4/1灰　中砂混粘土　無遺物層
120　10Y5/1灰　粘土　中砂が少量混じる　包含層
121　10Y4/1灰　粘土
122　5Y7/2灰白　細砂
123　N4/0灰　粘土
124　5Y4/1灰　細砂混シルト
125　2.5Y8/2灰白　中砂
126　2.5GY6/1オリーブ灰　中砂混シルト
127　2.5Y4/1黄灰　中砂混シルト　粘性やや強い
128　2.5Y7/2灰黄　粗砂　しまりがやや強い　10面地山
129　5BG7/1明青灰　シルト
130　10YR5/2灰黄褐　中砂混シルト
131　5Y6/3オリーブ黄　中砂
132　5Y4/1灰　細砂混シルト　水田耕土
133　10Y5/1灰　細砂混シルト　粘性やや強い
134　7.5YR4/1褐灰　中砂混シルト　中砂やや多い
135　2.5Y8/3淡黄　粗砂
136　10Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土　植物遺体が混じる　2186土坑
137　5G6/1緑灰　粘土　無遺物層
138　7.5Y5/1灰　中砂混粘質土
139　10YR4/1褐灰　砂質土　3面遺構埋土
140　10Y6/1灰　砂質土
141　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　一部シルトが層状に混じる
142　5Y6/3オリーブ黄　砂質土
143　10Y5/1灰　シルト　水田耕土
144　2.5Y6/4にぶい黄　中砂混砂質土　φ～1cmの礫が混じる
145　10YR5/2灰黄褐　中砂混砂質土
146　10Y5/2オリーブ灰　砂質土　10Y2/1黒シルトがブロックで混じる
147　2.5Y6/3にぶい黄　中砂混砂質土
148　2.5Y6/2灰黄　中砂混砂質土
149　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂
150　2.5Y8/2灰白　細砂　φ～3cmの礫が多く混じる
151　2.5Y7/1灰白　中砂
152　10YR4/2灰黄褐　砂質土　1面遺構埋土
153　2.5Y7/2灰黄　中砂　φ～2cmの礫が混じる
154　5GY5/1オリーブ灰　シルト　一部細砂が層状に混じる
155　2.5Y6/1黄灰　中砂
156　5Y6/1灰　粘土
157　10YR6/2灰黄褐　砂質土　φ～2cmの礫が混じる
158　2.5Y6/3にぶい黄　砂質土
159　5Y7/3浅黄　細砂混シルト　φ～2cmの礫が混じる
160　2.5Y7/2灰黄　粗砂　一部鉄分沈着により7.5YR4/4褐色　φ～5cmの礫が混じる
161　10YR6/4にぶい黄橙　中砂　ややしまる　1169河川堆積土
162　2.5Y6/2灰黄　細砂の多く混じるシルト
163　10YR6/3にぶい黄橙　砂質土
164　2.5Y5/3黄褐　中砂　φ～4cmの礫が混じる
165　2.5Y8/1灰白　細砂
166　2.5Y6/2灰黄　細砂　一部粗砂混
167　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　φ～4cmの礫が混じる　1577河川堆積土
168　5Y5/1灰　細砂混シルト
169　2.5Y7/2灰黄　粗砂　φ～3cmの礫が混じる
170　10YR6/4にぶい黄橙　中砂　φ～2cmの礫が混じる　1577河川堆積土
171　10YR5/2灰黄褐　細砂混シルト
172　2.5Y5/1黄灰　シルト　一部細砂が混じる
173　10Y5/1灰　細砂混シルト　2042流路肩盛土
174　7.5GY5/1緑灰　シルト
175　2.5Y4/1黄灰　シルト　植物遺体・炭化物が混じる
176　2.5Y3/2黒褐　中砂混シルト
177　2.5GY4/1暗オリーブ灰　中砂混シルト
178　2.5GY5/1オリーブ灰　シルト　5Y7/2灰白細砂が層状に混じる
179　N4/0灰　シルト
180　2.5Y6/4にぶい黄　粗砂
181　5Y5/2灰オリーブ　細砂の多く混じるシルト
182　2.5Y6/2灰黄　中砂混シルト
183　5Y3/1オリーブ黒　シルト
184　5Y6/1灰　中砂
185　N3/0暗灰　中砂混シルト
186　2.5Y5/3黄褐　細砂混シルト　φ～2cmの礫が混じる
187　10Y4/1灰　シルト　中砂が少量混じる
188　10YR4/1褐灰　砂質土　φ～3cmの礫が混じる
189　2.5Y6/3にぶい黄　細砂混砂質土
190　10YR5/2灰黄褐　砂質土　1面地山
191　7.5YR3/2黒褐　砂質土　2面遺構埋土
192　7.5YR4/1褐灰　砂質土　2面遺構埋土
193　10YR5/2灰黄褐　中砂混砂質土　2面地山
194　5Y6/2灰オリーブ　細砂混シルト　粘性やや強い
195　10YR7/6明黄褐　細砂
196　5Y6/1灰　シルト　所々2.5Y7/2灰黄中砂が混じる
197　2.5Y6/4にぶい黄　細砂
198　10Y6/1灰　シルト
199　2.5Y7/1灰白　細砂
200　5Y7/1灰白　極細砂
201　N5/0灰　シルト
202　2.5Y5/2暗灰黄　中砂混シルト
203　10Y5/1灰　中砂混シルト
204　10Y5/1灰　中砂混シルト　4面地山
205　2.5Y5/2暗灰黄　中砂混シルト
206　5B6/1青灰　中砂混シルト
207　2.5Y4/2暗灰黄　中砂混シルト
208　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂
209　2.5Y6/2灰黄　中砂と細砂が層状に堆積
210　10Y6/1灰　細砂混シルト
211　5Y4/1灰　シルト　10YR6/3にぶい黄橙中砂が混じる
212　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　植物遺体が多く混じる
213　2.5Y5/3黄褐　中砂
214　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂　2042流路堆積土
215　5Y6/1灰　細砂
216　10YR7/3にぶい黄橙　中砂
217　10YR5/2灰黄褐　細砂　2048流路堆積土
218　2.5Y6/2灰黄　粗砂　φ～4cmの礫が混じる　2048流路堆積土
219　10Y5/1灰　細砂混シルト
220　5Y3/2オリーブ黒　中砂混シルト
221　2.5Y4/2暗灰黄　細砂混粘質土　植物遺体が混じる
222　2.5Y7/3浅黄　極粗砂　φ～3cmの礫が混じる
223　10Y4/1灰　細砂混シルト
224　10YR7/2にぶい黄橙　極粗砂　φ～3cmの礫が混じる　2078しがらみ堆積土

図 500　3 区　調査区断面注記（1）

225　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂
226　5B6/1青灰　シルト
227　2.5Y5/2暗灰黄　極粗砂　φ～3cmの礫が混じる　2100流路堆積土
228　5GY4/1暗オリーブ灰　中砂混シルト　所々2.5Y5/6黄褐粗砂がブロックで混じる　2100流路堆積土
229　2.5Y3/1黒褐　シルト
230　10Y6/1灰　細砂混シルト
231　N8/0灰白　細砂
232　2.5Y4/1黄灰　シルト　N8/0灰白細砂混シルトが混じる
233　2.5GY4/1暗オリーブ灰　中砂の少量混じるシルト
234　N7/0灰白　粗砂　φ～2cmの礫が混じる　2136流路堆積土
235　10Y5/1灰　細砂混シルト
236　N6/0灰細砂と5Y8/2灰白粗砂の混成土
237　2.5Y4/1黄灰　中砂混シルト　8面地山
238　N7/0灰白　中砂
239　N4/0灰　シルト
240　5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　φ～1cmの礫が混じる
241　N8/0灰白　中砂　100層に似る
242　7.5Y4/1灰　シルト　しまりがやや強い
243　2.5Y7/2灰黄　粗砂　φ～2cmの礫が混じる　2163流路堆積土
244　2.5Y5/1黄灰　シルト
245　10Y3/1オリーブ黒　シルト　粘性やや強い　2163流路堆積土
246　7.5Y7/1灰白　粗砂　2163流路堆積土
247　N7/0灰白　シルト
248　7.5Y4/1灰　シルト
249　10YR4/1褐灰　砂質土
250　2.5Y4/2暗灰黄　砂質土
251　10YR4/1褐灰　中砂混砂質土
252　10YR5/2灰黄褐　細砂混シルト　一部粗砂が混じる
253　10YR8/3浅黄橙　中砂
254　2.5Y6/2灰黄　細砂
255　2.5Y5/2暗灰黄　細砂とシルトの混成土　5面地山
256　10YR6/3にぶい黄橙　中砂
257　7.5Y5/1灰　細砂混シルト
258　2.5Y7/2灰黄　中砂　一部細砂が混じる
259　2.5Y8/2灰白　細砂
260　10Y5/1灰　中砂混シルト
261　2.5Y3/1黒褐　中砂混シルト　所々2.5Y8/3淡黄細砂が混じる
262　5Y4/1灰　中砂混シルト　6面地山
263　5Y7/2灰白　細砂　一部シルトが混じる
264　2.5Y6/2灰黄　中砂　φ～2cmの礫が混じる
265　7.5Y4/1灰　細砂混シルト　7面地山
266　2.5Y7/2灰黄　粗砂
267　2.5GY6/1オリーブ灰　シルト　粘性無し
268　2.5Y7/1灰白　細砂　一部シルトが層状に混じる
269　7.5Y3/1オリーブ黒　粗砂混粘質土
270　N3/0暗灰　中砂混シルト
271　10Y5/1灰　中砂混シルト
272　10YR4/2灰黄褐　砂質土　φ～4cmの礫が少量混じる
273　10Y6/1灰　細砂混シルト　3面地山
274　2.5Y6/4にぶい黄　細砂　φ～2cmの礫が混じる
275　7.5Y6/1灰　細砂　2.5Y6/3にぶい黄粗砂が混じる
276　10Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト
277　7.5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルトと7.5Y8/1灰白粗砂の混成土
278　5Y2/2オリーブ黒　中砂混シルト
279　5Y3/1オリーブ黒　粘質シルト　8面地山
280　5Y3/1オリーブ黒　粘土　一部5Y5/2灰オリーブ細砂が混じる　0001井戸裏込土
281　2.5Y4/1黄灰　粘土　0001井戸裏込土
282　5Y4/1灰　中砂混粘質シルト　一部2.5Y7/2灰黄中砂が層状に混じる　0001井戸埋土
283　10YR6/2灰黄褐　砂質土　φ～3cmの礫が混じる
284　10YR4/1褐灰　砂質土　1501土坑埋土
285　2.5Y4/2暗灰黄　砂質土　粘性やや強い　φ～1cmの礫が混じる
286　10Y5/1灰　中砂混シルト　φ～2cmの礫が混じる
287　2.5Y7/1灰白　中砂
288　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　しまりがやや強い
289　2.5Y4/1黄灰　細砂混シルト
290　7.5Y7/1灰白　細砂　一部7.5Y5/1灰シルトが混じる
291　2.5Y4/2暗灰黄　砂質土　φ～2cmの礫が混じる　近世～近代水田護岸杭・溝埋土
292　5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト
293　2.5Y3/1黒褐　中砂混粘質土　植物遺体が混じる
294　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　しまりがやや強い　所々N3/0暗灰粗砂混粘質土が混じる
295　2.5Y6/2灰黄　粗砂
296　2.5Y6/3にぶい黄　中砂
297　2.5Y7/1灰白　細砂　2.5Y7/3浅黄粗砂が層状に混じる
298　105層に2.5Y6/2灰黄中砂がやや多く混じる
299　2.5Y4/2暗灰黄　シルト混中砂
300　2.5Y8/2灰白　細砂
301　5Y6/1灰　細砂　一部シルトが混じる
302　2.5Y7/3浅黄　中砂
303　2.5Y6/2灰黄　細砂
304　2.5GY6/1オリーブ灰　シルト　一部細砂が混じる
305　7.5Y2/1黒　中砂混粘質土
306　5Y6/2灰オリーブ　中砂　しまりがやや強い
307　7.5Y5/1灰　細砂混粘土
308　5Y6/2灰オリーブ　中砂
309　2.5Y4/1黄灰　粘土　遺構埋土
310　2.5Y6/2灰黄　中砂
311　5Y7/1灰白　中砂
312　2.5Y6/2灰黄　中砂　一部シルトが混じる
313　2.5Y6/4にぶい黄　中砂混砂質土
314　10YR4/2灰黄褐　砂質土　φ～2cmの礫が混じる
315　2.5Y5/4黄褐　細砂混粘質土　1977土坑埋土
316　2.5Y5/2暗灰黄　砂質土　1977土坑埋土
317　2.5Y6/2灰黄　細砂　2.5GY3/1黒褐粘質土・2.5GY6/1オリーブ灰シルトがブロックで混じる　1977土坑埋土
318　5Y4/1灰　中砂混シルト　5GY6/1オリーブ灰シルト・10Y4/1灰粘質土がブロックで混じる　1977土坑埋土
319　2.5GY6/1オリーブ灰細砂混粘質土・5Y3/1オリーブ黒細砂混シルト・5Y6/2灰オリーブ細砂のブロック　1977土坑埋土
320　7.5GY6/1緑灰粘質土・5Y3/1オリーブ黒細砂混シルトのブロック
321　5Y7/1灰白　中砂
322　5Y8/2灰白　粗砂
323　2.5Y3/2黒褐　粘土　植物遺体が非常に多く混じる
324　N2/0黒　粘土
325　2.5Y6/1黄灰　粘土　植物遺体が混じる
326　10YR5/2灰黄褐　砂質土
327　10YR6/3にぶい黄橙　砂質土
328　10YR6/2灰黄褐　シルト混粗砂
329　5Y6/2灰オリーブ　細砂混粘質土
330　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト
331　2.5Y6/2灰黄　中砂　ややしまる
332　2.5Y3/1黒褐　砂質土　遺構埋土
333　2.5Y5/2暗灰黄　中砂　φ～3cmの礫が混じる
334　10Y5/1灰　シルト　植物遺体が少量混じる
335　2.5Y4/1黄灰　中砂混シルト　植物遺体が混じる
336　10Y6/1灰　シルト　2.5Y8/1灰白細砂が混じる
337　2.5Y5/2暗灰黄　中砂
338　2.5GY6/1オリーブ灰　シルト
339　2.5Y7/2灰黄　細砂
340　10Y4/1灰　シルト
341　7.5Y6/1灰　細砂　一部粗砂が混じる
342　10Y5/1灰　シルト　5Y3/1オリーブ黒シルトと5Y8/2灰白細砂の混質したブロックが混じる
343　2.5Y8/3淡黄　中砂
344　2.5Y7/3浅黄　中砂
345　N8/0灰白　シルト
346　2.5Y3/1黒褐　中砂混シルト
347　2.5Y7/3浅黄　中砂　一部粗砂が混じる
348　2.5Y7/2灰白　細砂
349　N7/0灰白　シルト　一部5Y3/1オリーブ黒シルトが層状に混じる
350　5Y7/1灰白　中砂
351　5Y5/2灰オリーブ　粗砂　5Y6/1灰シルトが混じる
352　5PB4/1暗青灰　暗青灰　粘質シルト
353　2.5Y2/1黒　粘土　10面遺構埋土
354　2.5Y5/3黄褐　砂質土　φ～1cmの礫が混じる
355　2.5Y6/2灰黄　シルト　一部中砂が混じる　しまりがやや強い
356　10YR5/3にぶい黄褐　細砂　φ～3cmの礫が多く混じる
357　2.5Y7/3浅黄　シルト　ややしまる
358　10YR6/4にぶい黄橙　細砂　シルトが混じる　ややしまる
359　5Y6/1灰　シルト　φ～3cmの礫が少量混じる
360　2.5Y7/2灰黄　粗砂　φ～2cmの礫が混じる
361　2.5Y7/2灰黄　細砂
362　2.5Y7/3浅黄　細砂
363　2.5Y6/1黄灰　シルト
364　5GY6/1オリーブ灰　シルト　5Y6/2灰オリーブ細砂が混じる
365　2.5Y6/4にぶい黄　中砂　φ～2cmの礫が混じる
366　2.5Y6/2灰黄　シルト
367　2.5Y6/3にぶい黄　中砂　φ～3cmの礫が混じる
368　2.5Y5/4黄褐　細砂　一部中砂・シルトが混じる
369　7.5Y4/1灰　シルト
370　5Y4/1灰　粘土
371　2.5Y7/4浅黄　細砂　10Y5/1灰シルトがブロックで混じる
372　2.5Y3/2黒褐　粘質土　中砂がブロックで混じる
373　N8/0灰白　中砂
374　2.5Y3/1黒褐　粘質土　一部中砂が混じる　水田耕土
375　N7/0灰白　粗砂
376　7.5Y4/1灰　粘質土　一部中砂が混じる
377　2.5Y6/1黄灰　粗砂
378　5BG5/1青灰　粘土
379　10YR3/1黒褐　粘土
380　7.5YR3/1黒褐　粘土　植物遺体が多く混じる
381　2.5Y3/1黒褐　中砂混粘質土
382　2.5Y5/6黄褐　中砂混砂質土
383　2.5Y6/4にぶい黄　中砂混砂質土
384　10YR5/4にぶい黄褐　中砂　φ～3cmの礫が混じる
385　10YR6/4にぶい黄橙　粗砂　φ～3cmの礫が混じる
386　2.5Y6/3にぶい黄　細砂混シルト　φ～1cmの礫が部分的に混じる
387　2.5Y7/2灰黄　細砂　シルトが層状に混じる
388　2.5Y7/4浅黄　粗砂　φ～3cmの礫が混じる
389　2.5Y5/4黄褐　中砂混シルト
390　10YR4/3にぶい黄褐　中砂混シルト　φ～2cmの礫が混じる
391　5Y5/1灰　シルト
392　2.5Y7/2灰黄　細砂
393　2.5Y7/1灰白　極細砂
394　10Y4/1灰　粘土
395　2.5Y6/6明黄褐　中砂
396　7.5Y6/1灰　中砂
397　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂　φ～3cmの礫が混じる
398　7.5Y4/1灰　シルト
399　2.5Y7/6明黄褐　粗砂
400　2.5Y3/1黒褐　中砂混シルト
401　2.5Y7/2灰黄　細砂
402　10Y5/1灰　細砂混シルト
403　5Y3/1オリーブ黒　シルト　植物遺体が多く混じる
404　10Y7/1灰白　粗砂
405　2.5Y6/1黄灰　シルト　植物遺体が多く混じる
406　10Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土
407　2.5Y5/1黄灰　シルト混中砂　しまりがやや強い
408　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂
409　7.5Y3/1オリーブ黒　中砂混シルト　粘性やや強い
410　5Y3/2オリーブ黒　中砂混シルト
411　2.5Y8/2灰白　粗砂
412　10YR5/6黄褐　中砂混シルト　しまりがやや強い
413　10YR6/6明黄褐　中砂　ややしまる
414　2.5Y8/3浅黄　中砂
415　2.5Y6/3にぶい黄　中砂混シルト
416　5Y6/2灰オリーブ　中砂混シルト
417　5Y3/1オリーブ黒　中砂混シルト
418　2.5Y7/3浅黄　粗砂
419　2.5Y4/1黄灰　中砂混シルト
420　5Y6/2灰オリーブ　細砂混シルト　φ～1cmの礫が混じる
421　2.5GY6/1オリーブ灰　中砂混シルト　φ～2cmの礫が混じる
422　5Y5/2灰オリーブ　中砂混シルト
423　2.5Y3/2黒褐　中砂の少量混じるシルト
424　2.5GY5/1オリーブ灰　中砂混シルト
425　2.5Y5/3黄褐　中砂混シルト
426　5Y3/2オリーブ黒　粗砂混シルト
427　2.5Y7/4浅黄　粗砂　N7/0灰白シルトが混じる
428　7.5Y3/2オリーブ黒　中砂混シルト
429　5Y8/1灰白　細砂
430　2.5Y3/1黒褐　粗砂混シルト
431　10YR7/4にぶい黄橙　粗砂
432　10Y5/1灰　シルト　粗砂がブロック状に混じる
433　5Y4/1灰　中砂混シルト
434　2.5Y8/4淡黄　中砂　一部シルトが混じる
435　7.5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト
436　5Y3/2オリーブ黒　中砂混シルト
437　2.5Y3/3暗オリーブ褐　中砂混粘質土
438　2.5Y5/2暗灰黄　中砂混シルト
439　5B4/1暗青灰　粘質土　中砂が少量混じる
440　2.5Y8/2灰白　中砂　5Y6/1灰シルトが層状に混じる
441　2.5Y3/1黒褐　中砂混粘土
442　N6/0灰　粘土
443　N5/0灰　粘土　炭化物が混じる

図 501　3 区　調査区断面注記（2）

444　5Y4/1灰　細砂混シルト　炭化物が混じる　一部粘質土がブロックで混じる
445　2.5Y7/2灰黄　粗砂
446　N6/0灰　細砂　一部粗砂が混じる
447　10BG5/1青灰　細砂混シルト
448　10Y5/1灰　中砂混シルト
449　2.5Y6/2灰黄　粗砂
450　10Y6/1灰　シルト
451　2.5Y8/2灰白　粗砂
452　5Y6/1灰　細砂混シルト
453　2.5Y8/2灰白　粗砂　φ～3cmの礫が混じる
454　5Y7/2灰白　細砂
455　7.5Y6/1灰　中砂　φ～2cmの礫が混じる
456　10Y8/1灰白　シルト　5Y4/1灰粘質シルトが混じる
457　5Y5/1灰　シルト混中砂
458　5Y6/2灰オリーブ　シルト混中砂
459　2.5Y5/2暗灰黄　細砂混シルト　近世遺構埋土
460　撹乱土
461　10YR4/2灰黄褐　砂質土　1963溝埋土
462　7.5YR4/3褐　砂質土　1963溝埋土
463　2.5Y4/2暗灰黄　中砂混砂質土　φ～1cmの礫が混じる　1963溝埋土
464　10YR4/1褐灰　中砂混粘質土　1963溝埋土
465　5Y3/1オリーブ黒　中砂混シルト　φ～2cmの礫が混じる　1963溝埋土
466　2.5Y3/1黒褐　中砂混シルト　1963溝埋土
467　5Y3/1オリーブ黒　粘土　植物遺体が多く混じる　1963溝埋土
468　10YR5/1褐灰　細砂混シルト　1963溝埋土
469　2.5Y4/2暗灰黄　中砂混シルト　1963溝埋土
470　2.5Y4/1黄灰　中砂混シルト　1963溝埋土
471　10YR4/2灰黄褐　砂質土
472　10YR5/4にぶい黄褐　砂質土
473　7.5YR5/6明褐　砂質土
474　2.5GY5/1オリーブ灰　シルト
475　5Y6/2灰オリーブ　中砂
476　7.5Y4/1灰　細砂混シルト　粘性やや強い
477　2.5Y4/1黄灰　シルト
478　10Y5/1灰　シルト　5Y6/2灰オリーブ中砂が混じる
479　5Y4/2灰オリーブ　中砂混シルト
480　2.5GY6/1オリーブ灰　シルト
481　5Y4/1灰　細砂混シルト
482　2.5GY5/1オリーブ灰　細砂混シルト
483　7.5Y4/1灰　シルト　植物遺体が混じる
484　2.5Y7/3浅黄　中砂　5B5/1青灰シルトが層状に混じる
485　2.5Y6/3にぶい黄　中砂
486　5Y3/1オリーブ黒　中砂混シルト
487　10Y5/1灰　シルト
488　2.5Y7/2灰黄　中砂
489　5Y4/1灰　シルト　植物遺体が混じる
490　2.5Y8/3淡黄　粗砂
491　5Y4/1灰　シルト
492　7.5Y3/1オリーブ黒　シルト　植物遺体が混じる
493　7.5Y4/1灰　シルト　2.5Y8/2灰白細砂が層状に混じる
494　10Y4/1灰　シルト　2.5Y7/2灰黄粗砂がブロックで混じる
495　2.5Y7/4浅黄　粗砂
496　7.5Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土
497　7.5Y4/1灰　シルト
498　5Y3/1オリーブ黒　粘質土
499　5Y7/1灰白　細砂
500　5Y6/1灰　細砂混シルト
501　2.5Y7/3浅黄　中砂
502　5B5/1青灰　シルト
503　10YR3/1黒褐　中砂混粘土
504　10Y5/1灰　細砂混シルト
505　2.5Y6/3にぶい黄　中砂混砂質土
506　2.5Y7/1灰白　粗砂　一部中砂混
507　2.5GY4/1暗オリーブ灰　細砂混シルト

図 502　3 区　調査区断面注記（3）

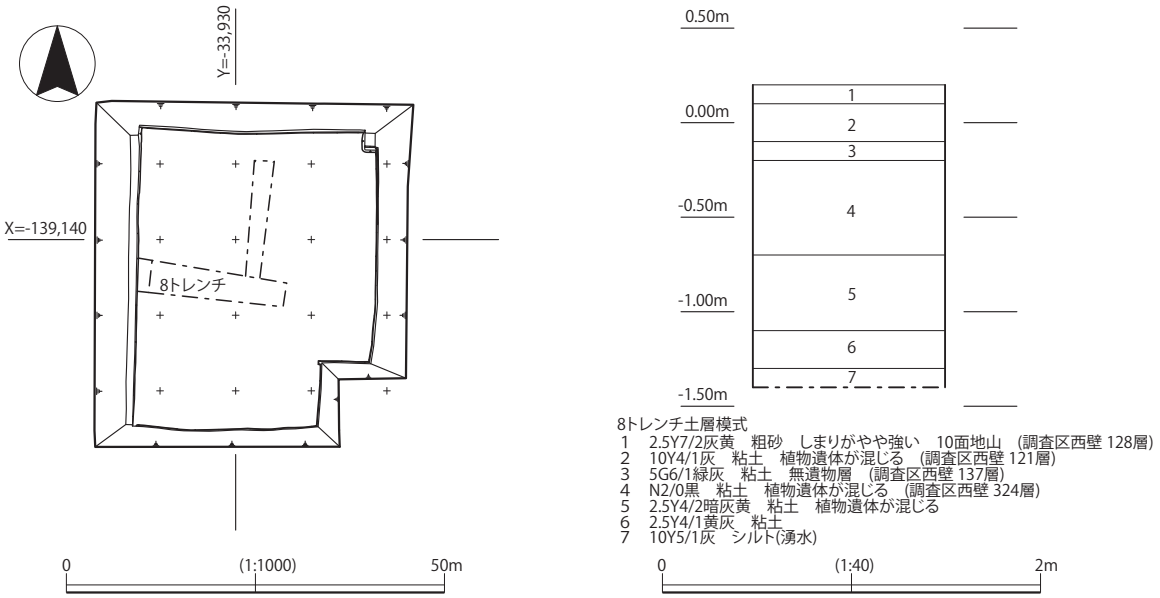


図 503　3 区　8 トレンチ平面図・土層模式図

第 10 遺構面までの調査終了後に調査区内にトレンチ（8 トレンチ）を設定し、下層の確認を行った。その結果、第 10 遺構面より下層では湿原等により形成されたとみられる植物遺体を含む粘土層が主に堆積しており、弥生時代前期以前に積極的に土地利用された痕跡は確認されなかった（図 503）。

1．第 1 遺構面（図 504、図版 30）

第 1 遺構面は、基本層序における 1-3 面に対応する遺構面である。第 1 遺構面の調査で確認した遺構は、平安時代から江戸時代にかけてのもので、井戸 4 基、溝 118 本、土坑 300 基、柱穴 28 基を検出した（図 504）。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 3.339 m、北西隅 T.P. ＋ 3.236 m、南東隅 T.P. ＋ 3.516 m、南西隅 T.P. ＋ 3.345 m であった。調査区北半は耕作溝の検出が多く、南半は集落で土坑等がまとまって検出された。主な遺構の詳細は次のとおりである。

0001 井戸（図 505、図版 119）　最大径 5.88 m、深さ 2.83 m以上で円形を呈する。一辺 2.96 m で隅柱を持つ方形横桟縦板枠井戸である。規模や立地から野井戸として機能した井戸とみる。調査区の北東端付近に位置する。遺物は江戸時代の犬形土製品（図 505 － 1）、瓦を転用した硯（図 505 － 2）などが枠内から出土した。

0026 井戸（図 505、図版 30・119） 最大径 1.03 m、深さ 0.76 mで円形を呈する。二段掘りを行って曲物を二段以上組み上げ設置した井戸であるが、残存していた二段の曲物のうち上部の一段は木質の残存は底部付近の一部のみであった。遺構南東部を他の土坑に切られている。調査区の東側やや南寄りに位置する。出土遺物として瓦器碗２点（図 505 － 3 ・ 4 ）等がある。３は大和型で裏込め土からの出土である。４は大和型で上段曲物の残存底部内側に張り付くように出土した（図 504：505 － 4）。出土遺物から 13 世紀前半の構築と見られる。

0372 井戸（図 505、図版 30・119） 最大径 1.78 m、深さ 2.16 mで円形を呈する。井戸内のほぼ中央付近で三段階にわたってそれぞれ竹紐が一周するのを確認しており、縦板を組み合わせ竹紐で三段以上結桶状に縛られていた円形縦板組の井戸構造であったものが、井戸廃絶時に縦板のみ抜き取られたものとみられる。調査区の南端に位置する。遺物は土師器皿（図 505 － 5 ）等が出土した。14 ～ 15 世紀

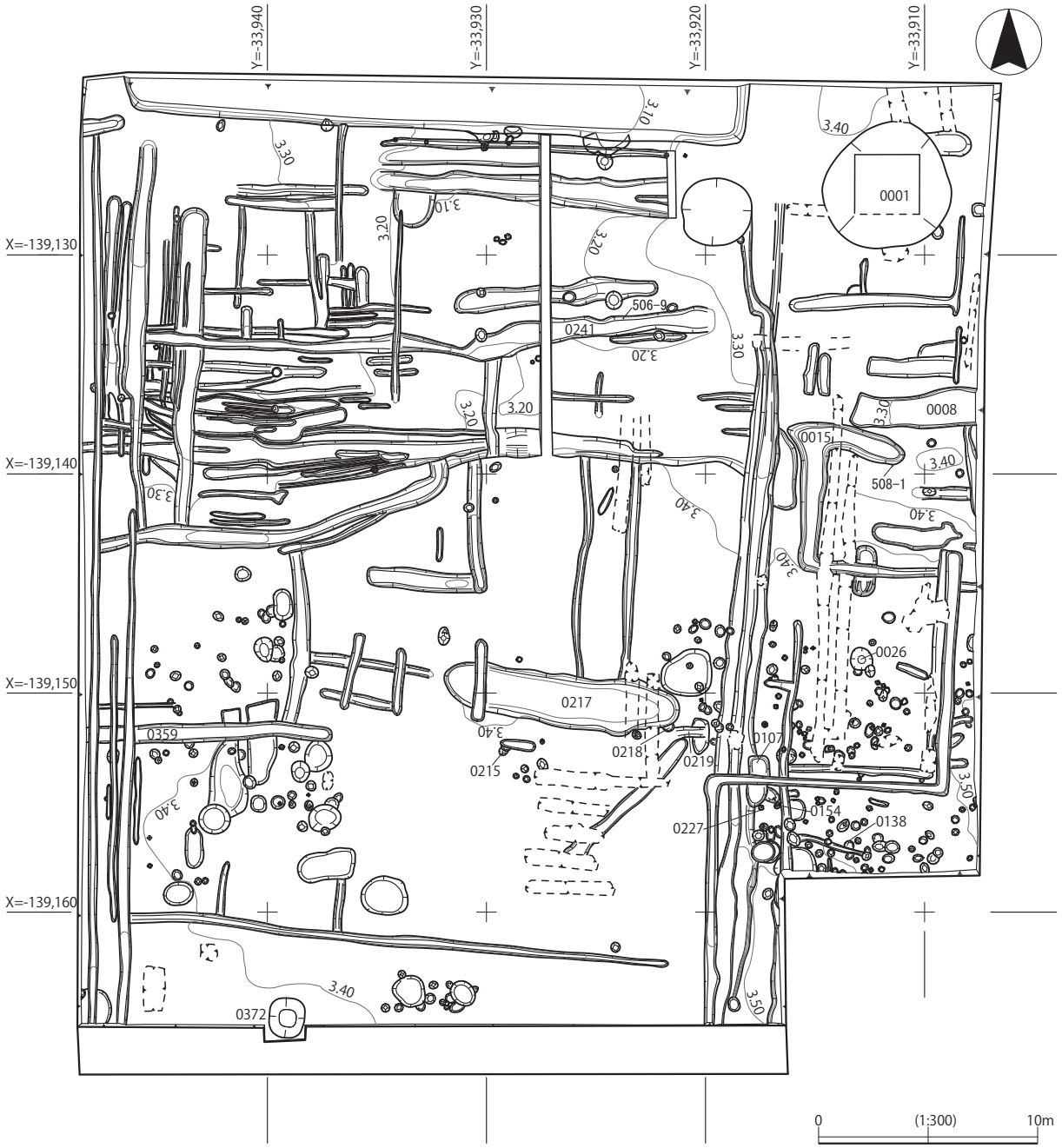
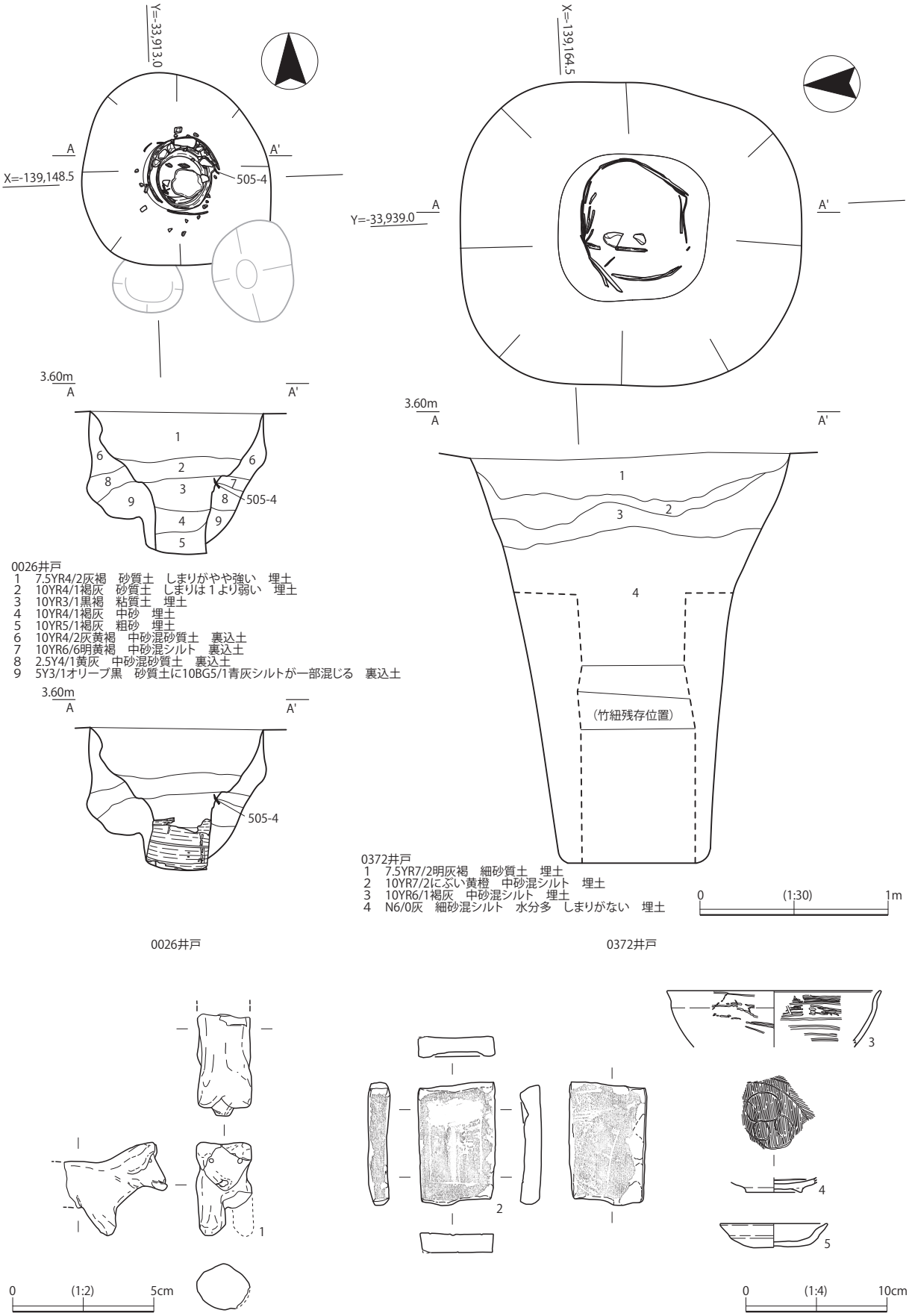


図 504　３区　第１遺構面　平面図



1・2：0001井戸　3・4：0026井戸　5：0372井戸

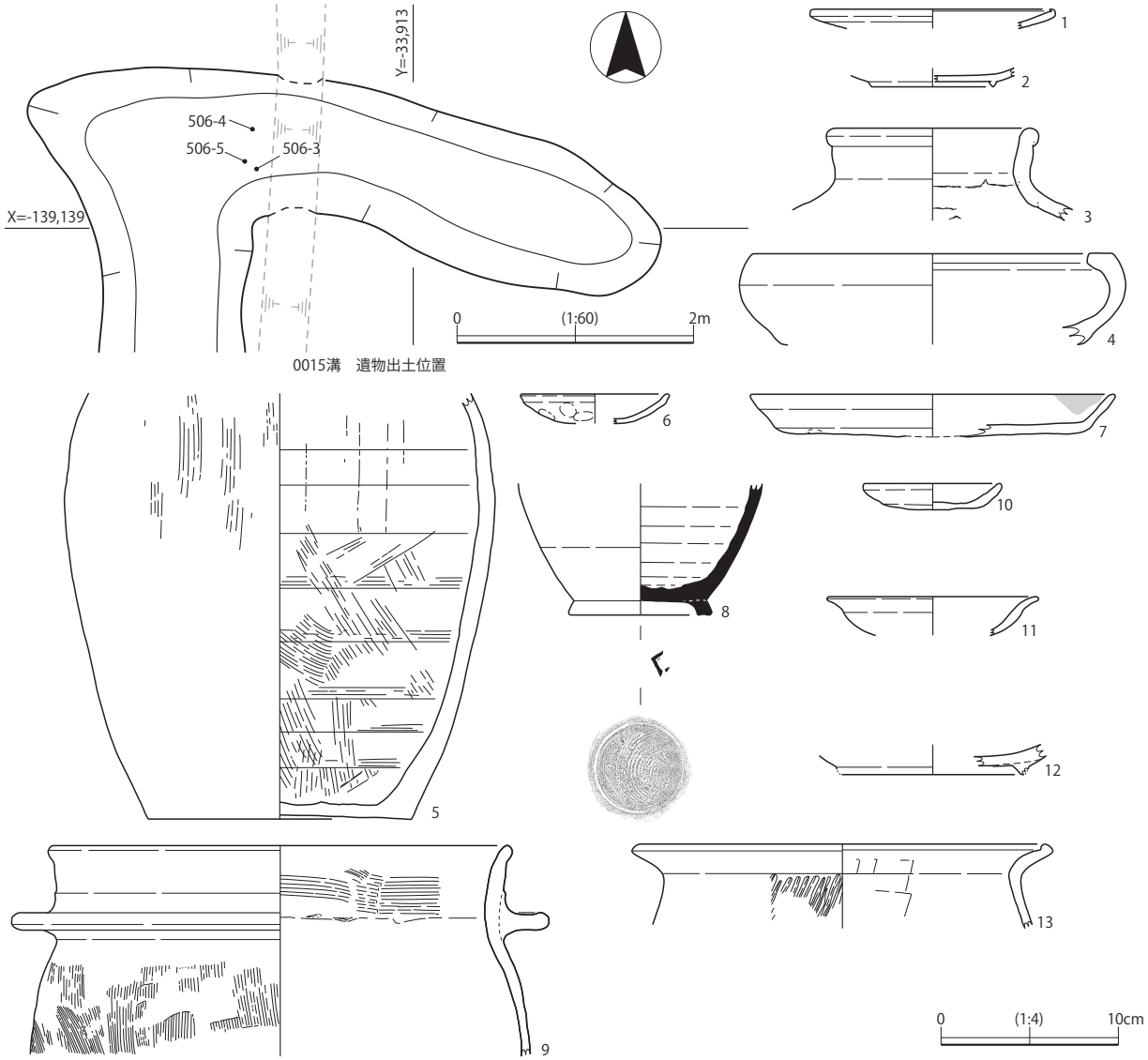
図 505　３区　第１遺構面　1・26・372 井戸平・断面図・出土遺物

頃の遺構とみられる。

0008 溝（図 506、図版 119） 検出できた長さ 5.80 m、幅 1.32 m、深さ 0.15 mで断面U字形であり、東西方向のほぼ直線的な溝である。東端は調査区外へ延びている。調査区の東端に位置する。出土遺物は土師器皿（図 506 － 1）、黒色土器碗（図 506 － 2）等が出土した。 1は口縁部を内側に丸く収める。Ｃタイプのものである。11 世紀のものと見られる。2は黒色土器Ａ類である。9 世紀のものと見られる。これらの図化遺物は混入品の可能性もあると見られる。

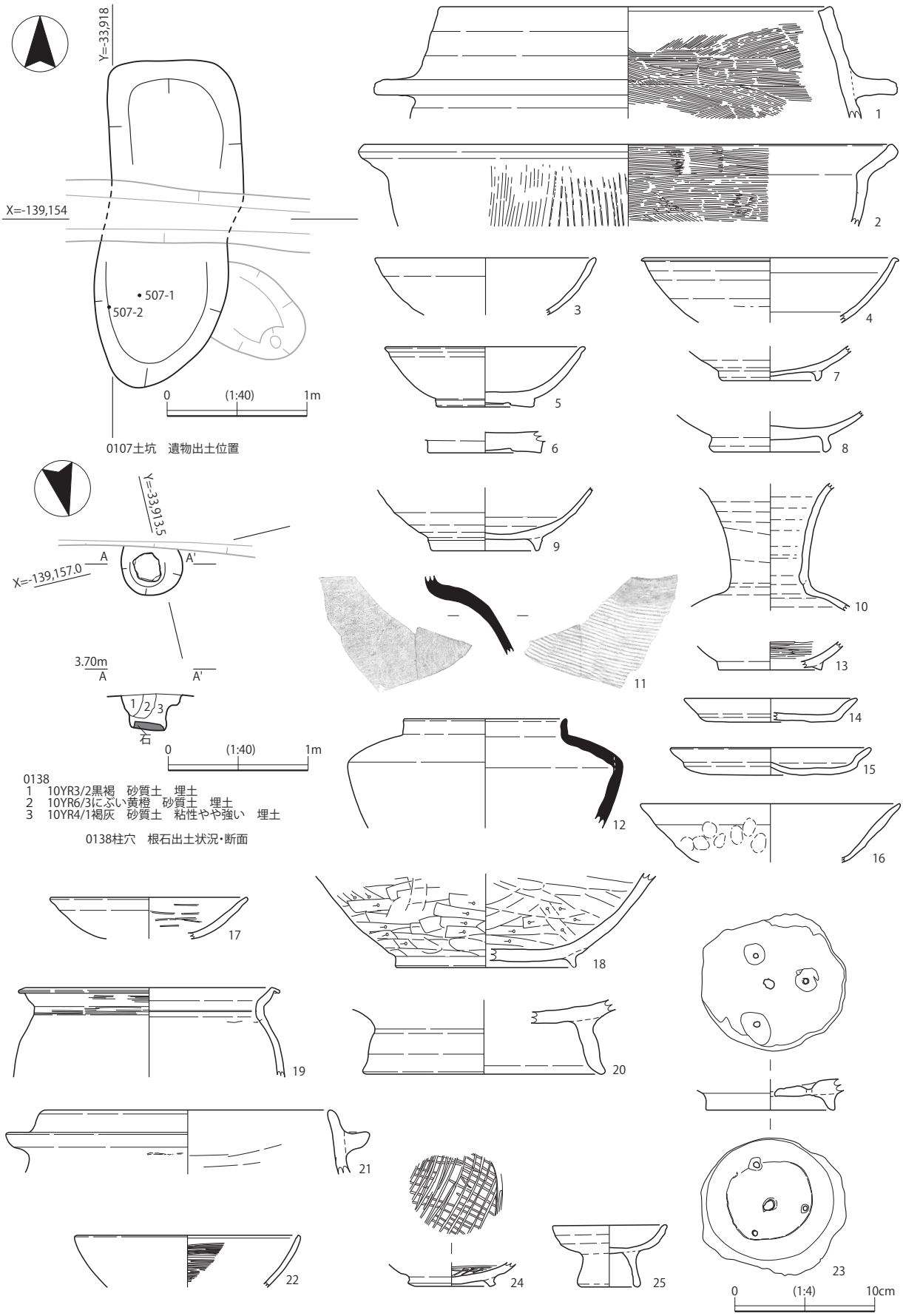
0015 溝（図 506、図版 119） 長さ 15.85 m、最大幅 1.20 m、深さ 0.26 mで断面U字状であり、平面逆コ字状を呈する溝である。遺構南東端を他の溝に切られている。調査区の中央東端に位置する。遺物は遺構北側の方向変換部付近で（図 506）須恵質土器（国産陶器）壺（図 506 － 3）、瓦質土器浅鉢（図 506 － 4）、国産陶器壺（図 506 － 5）等が出土した（図 506）。 3は内傾接合の痕跡が三段観察される。４はいわゆる奈良火鉢である。 5は備前焼とみられる。14 世紀頃の遺構と見られる。

0219 溝（図 506、図版 119） 検出できた長さ 1.35 m、幅 0.46 m、深さ 0.11 mで断面U字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。調査区の東南寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 506 － 6）等



1・2：0008溝　3～5：0015溝　6：0219溝　7～9：0241溝　10~13：0359溝

図 506　3区　第 1 遺構面　8・15・219・241・359 溝平面図・出土土器



1・2:0107土坑　3:0215土坑　4~21:0217土坑　22:0218土坑　23・24:0227土坑　25:0154柱穴

図 507　3 区　第 1 遺構面　107・215・217・218・227 土坑、138・154 柱穴平・断面図・出土遺物

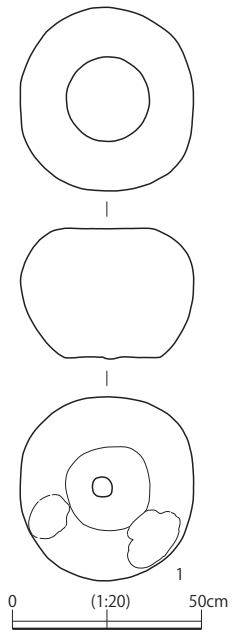


図 508 3区第1遺構面
機械掘削出土遺物

が出土した。

0241 溝（図 506、図版 119） 長さ 25.91 m、最大幅 0.47 m、深さ 0.10 mで断面U字状であり、東西方向に走る溝である。溝中央付近で若干蛇行する。遺構西端を他の溝に切られている。調査区北半部に位置する。遺物は土師器大皿（図 506 － 7）、篠窯系須恵器長頸壺（図 506 － 8）、瓦質土器羽釜（図 506 － 9）等が出土した。7は口縁部内外面に煤が付着し灯明皿と思われる。8世紀中頃～後半と見られる。8は底部に墨書がなされており、高台接合前の糸切痕が見られる。8世紀末～9世紀前葉とみられる。9は遺構の北側肩部付近から出土した（図 504：506 － 9）。2面に属する 0242 土坑を切る形で溝が掘られているため、出土遺物の中には 0242 土坑の時期に属する遺物も含まれているものとみられる。

0359 溝（図 506、図版 119） 検出できた長さ 11.20 m、最大幅 0.82 m、深さ 0.12 mで断面U字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。西端は調査区外へ延びる。調査区西側に位置する。遺物は土師器皿（図 506 － 10・11）、土師器甕（図 506 － 13）、緑釉陶器碗（図 506 － 12）等が出土した。

0107 土坑（図 507、図版 119） 長径南北 2.35 m、短径東西 0.94 m、深さ 0.08 mの楕円形を呈する。遺構ほぼ中央部を後世の東西方向溝によって切られている。調査区の南東部に位置する。遺物は遺構の南半部からの（図 507）瓦質土器羽釜（図 507 － 1）、土師器鍋（図 507 － 2）等が出土した（図 507）。

0215 土坑（図 507、図版 119） 直径 0.39 m、深さ 0.32 mで円形を呈する。遺構北側を他の土坑に切られている。調査区の中央やや南寄りに位置する。遺物は土師器碗（図 507 － 3）等が出土している。

0217 土坑（図 507、図版 119・120） 長径東西 10.84 m、短径南北 2.42 m、深さ 0.16 mで楕円形を呈する。遺構西部を他の溝に、遺構東部を後世の撹乱に切られている。調査区の中央やや南寄りに位置する。遺物は白磁碗（図 507 － 4）、緑釉陶器碗（図 507 － 5・6）、灰釉陶器碗（図 507 － 7～9）、灰釉陶器長頸壺（図 507 － 10）、須恵器甕（図 507 － 11）、須恵器短頸壺（図 507 － 12）、黒色土器碗（図 507 － 13）、土師器皿（図 507 － 14・15）、土師器碗（図 507 － 16～18）、土師器甕（図 507 － 19）土師器台付底部（図 507 － 20）、瓦質土器羽釜（図 507 － 21）等が出土した。13 は黒色土器A類である。20 は台付きの壺もしくは甕の底部である。本遺構は性格不明だが、平安期の遺物を多く包含する。

0218 土坑（図 507、図版 119） 直径 0.51 m、深さ 0.18 mで円形を呈する。遺構北側を 0217 土坑に切られている。調査区の中央やや南東寄りに位置する。遺物は楠葉型の瓦器碗（図 507 － 22）等が出土した。13 世紀前半頃のものと見られる。

0227 土坑（図 507、図版 119） 直径 0.25 m、深さ 0.15 mで円形を呈する。調査区の南東部に位置する。遺物は土師器台付碗（図 507 － 23）、瓦器碗（図 507 － 24）等が出土した。23 は台付きの底部で、三カ所に焼成後の穿孔がある。24 は大和型である。12 世紀前半のものと見られる。

0138 柱穴（図 507、図版 30） 直径 0.58 m、深さ 0.22 mで円形を呈する。柱穴底部に一辺 0.21 m、厚さ 0.05 mの根石を設置する（図 507）。柱穴南側は隣接する溝によって切られている。調査区の南東部に位置する。

0154 柱穴（図 507、図版 120）　長径 0.29 m、短径 0.25 m、深さ 0.28 mで楕円形を呈する。調査区の南東部に位置する。遺物は土師器台付皿（図 507 － 25）等が出土した。

包含層出土遺物（図版 120）　機械掘削時に表土層から出土した遺物として、五輪塔水輪（図 508 － 1）がある。砂岩製で、調査区東端中央付近の地点（図 504：508 － 1）から出土した。

２．第２遺構面（図 509・510、図版 30）

第２遺構面は、基本層序における 2-1 面に対応する遺構面である。第２遺構面の調査で確認した遺構は、平安時代から室町時代にかけてのもので、井戸４基、河川１本、溝 44 本、土坑 946 基、柱穴 54 基（うち復元できた掘立柱建物６棟、杭列２基）、落込７基、土器群１基を検出した（図 509）。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 3.292 m、北西隅 T.P. ＋ 3.116 m、南東隅 T.P. ＋ 3.280 m、南西隅 T.P. ＋ 3.140 mであった。調査区北半南半ともに集落面で、南半におびただしい数の柱穴等が検出された。主

図 509　３区　第２遺構面　平面図

な遺構の詳細は次のとおりである。

掘立柱建物１（図 510・511） 梁間１間、桁行２間の建物で、梁間 2.02 m、桁行 2.95 mである。柱間は桁行 1.31 ～ 1.73 mである。柱穴は５カ所認められ、北東隅のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 0.26 ～ 0.44 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 2.986 ～ 3.199 mであった。調査区の中央やや南に位置する。

掘立柱建物２（図 510・511） 梁間１間、桁行２間の建物で、梁間 2.37 m、桁行 2.91 mである。柱間は桁行 1.26 ～ 1.68 mである。柱穴は５カ所認められ、南東隅のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 0.40 ～ 0.52 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 2.901 ～ 3.161 mであった。調査区の中央やや南に位置する。後述する 1000 井戸を覆う井戸上屋とみられる。

掘立柱建物３（図 510・511） 梁間１間、桁行２間の建物で、梁間 1.90 m、桁行 2.20 mである。柱間は桁行 0.98 ～ 1.22 mである。柱穴は５カ所認められ、東列中央のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 0.32 ～ 0.54 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 2.828 ～ 2.922 mであった。調査区の南側に位置する。

掘立柱建物４（図 510･512、図版 124） 梁間１間、桁行１間の建物で、梁間 2.05 m、桁行 2.24 mである。柱穴は４カ所認められた。柱穴掘形は長径 0.37 ～ 0.46 mの不整円形で、柱穴底は T.P. ＋ 2.872 ～ 2.999 mであった。調査区の南東部に位置する。南西隅柱の 0872 柱穴から玉縁口縁の白磁碗（図 512 － 1）が出土した。

掘立柱建物５（図 510･512、図版 30） 梁間１間、桁行３間の建物で、梁間 2.12 m、桁行 3.99 mである。柱間は桁行 0.79 ～ 1.63 mである。柱穴は７カ所認められ、南東隅のものは検出できなかった。柱穴

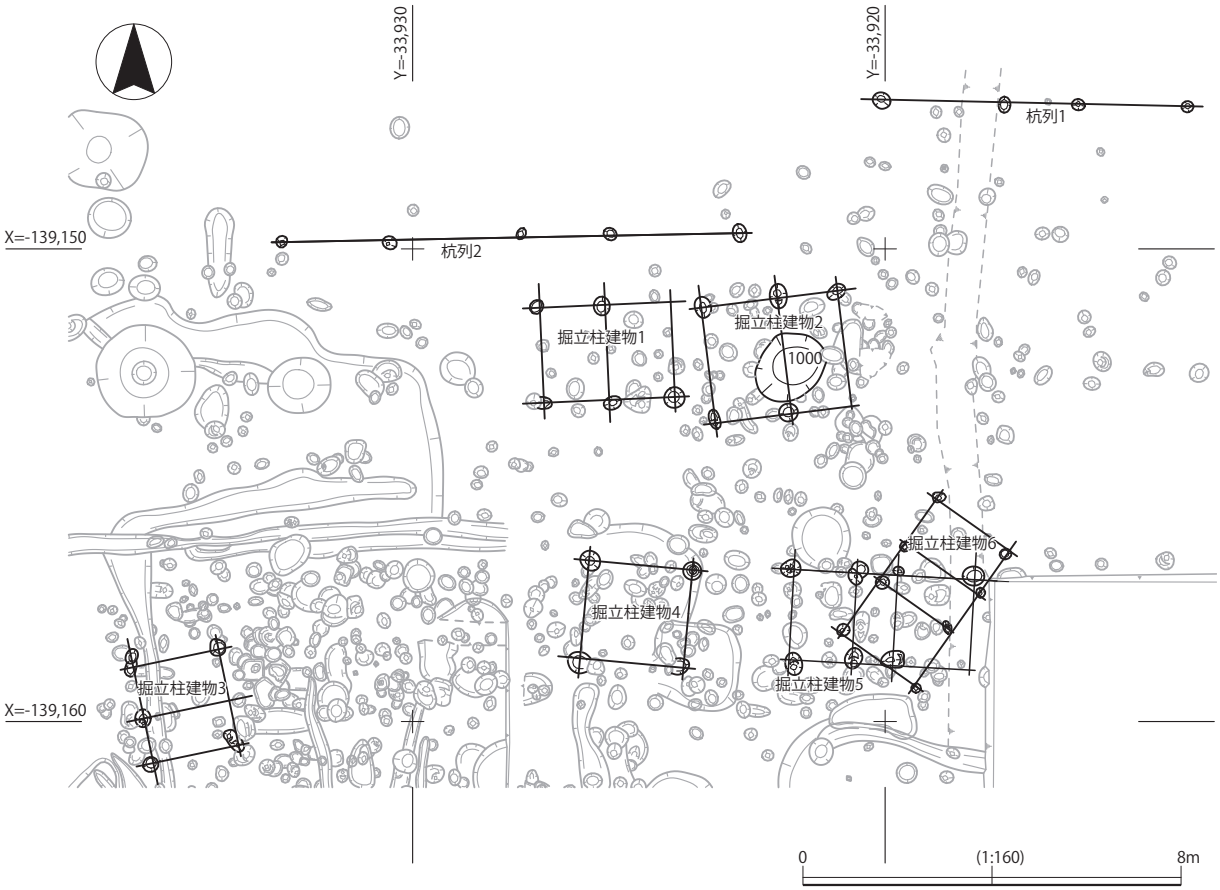


図 510　３区　第２遺構面　掘立柱建物・杭列位置図

掘形は長径 0.23 ～ 0.49 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 2.856 ～ 3.067 mであった。調査区の南東部隅に位置する。

掘立柱建物 6（図 510・513、図版 30） 梁間 1 間、桁行 3 間の建物で、梁間 1.99 m、桁行 3.46 mである。柱間は桁行 0.90 ～ 1.43 mである。柱穴は 8 カ所認められた。柱穴掘形は長径 0.21 ～ 0.29 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 2.934 ～ 3.194 mであった。調査区の南東部隅に位置する。

杭列 1（図 510・513） 長さ 6.49 mで、柱穴 4 基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は 1.54 ～ 2.63 mで、柱穴掘形は長径 0.26 ～ 0.38 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 3.146 ～ 3.198 mであった。調査区の東側に位置する。

杭列 2（図 510・513） 長さ 9.70 mで、柱穴 5 基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は 1.89 ～ 2.79 mで、柱穴掘形は長径 0.25 ～ 0.40 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 3.075 ～ 3.171 mであった。調査区の中央やや南に位置する。

0467 井戸（図 514・515、図版 31・120） 掘形の最大径 1.80 m、深さ 1.02 mで不整円形を呈する。南側のみ 2 段掘りをおこなっており、こちらから井戸材を設置したとみられる。底部に集水施設として曲物枠（図 515 － 17）を設置し、その上部は建築部材を再利用したと思われる内法一辺 0.62 ～ 0.47 mのいびつな方形板枠構造の井戸である。上部構造の南辺・西辺は加工痕のある横板材（図 515 －

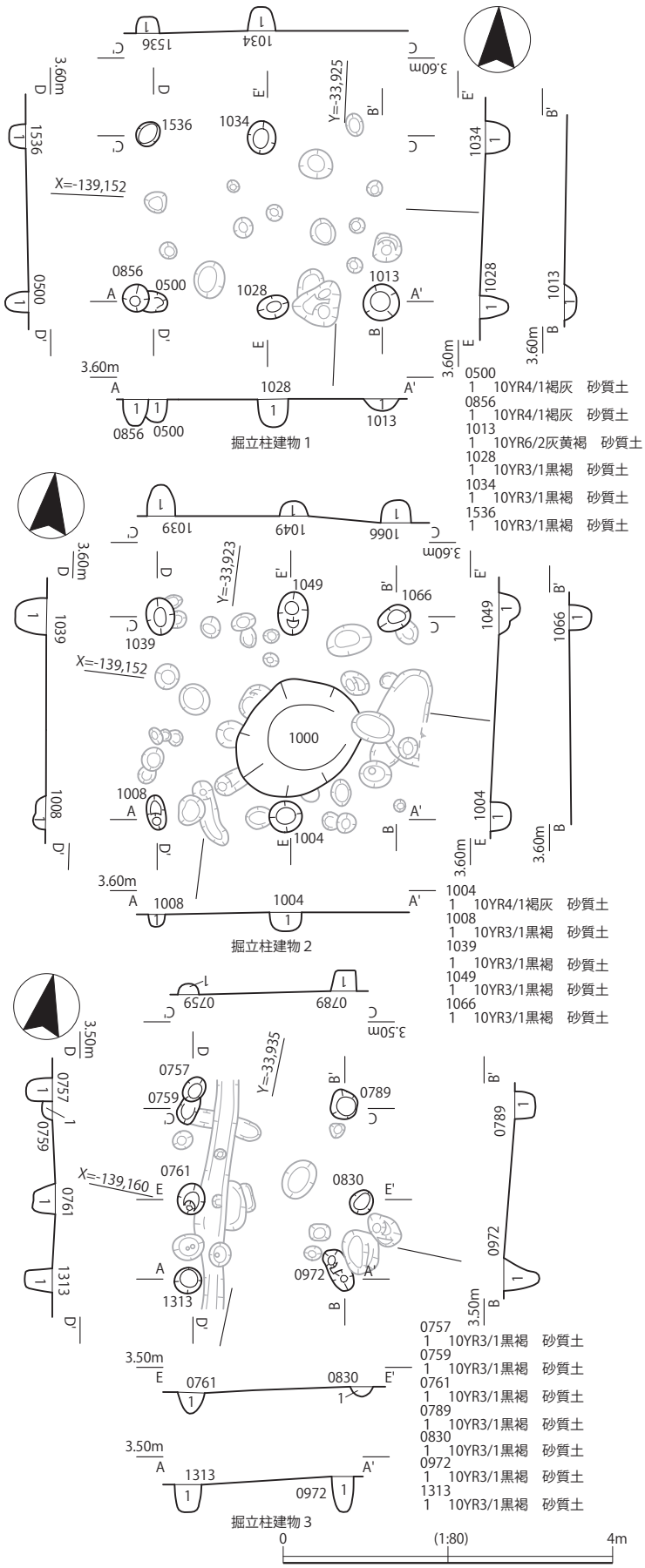


図 511　3 区　第 2 遺構面　掘立柱建物 1 ～ 3 平・断面図

15・16）を用いる。東辺はやや曲線を描く一枚の縦板材を用い、その外側に細い縦板材を支えとして挿入する。北辺は細長い縦板材を４枚程度組み合わせて枠とする。北辺は土圧で中央が内側にやや膨らんだ状況で検出した。調査区の中央西寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 515 － 1 ・ 2）、土師器大皿（図 515 － 3 ・ 4）、白磁碗（図 515 － 5）、黒色土器坏（図 515 － 6）、瓦器皿（図 515 － 7）、瓦器碗（図 515 － 8 ～ 10）、瓦質土器羽釜（図 515 － 11）、土師器甕（図 515 － 12）、須恵質土器練鉢（図 515 － 13）、平瓦（図 515 － 14）等が出土した。また、井戸枠材のうち南辺横板材（図 515 － 15）、西辺横板材（図 515 － 16）、集水施設曲物（図 515 － 17）を図化した。５は白磁Ⅱ類とみられる。６は黒色土器Ａ類で、畿内系Ⅳとみられる。８は底部外面にヘラ書き記号がある。９は大和型である。10 は大和型で、井戸枠北辺外側の埋め戻し土から２片に割れて出土した（図 514：515 － 10）。15・16 はいずれも表裏とも手斧削り痕が明瞭に観察され、各短辺には井戸構造とは無関係の段加工があり、井戸枠に再利用された建築部材とみる。17 は内側に縦方向の細かい切れ込みを入れ、材を曲げている。出土遺物から 12 世紀後半に廃絶された遺構と見られる。

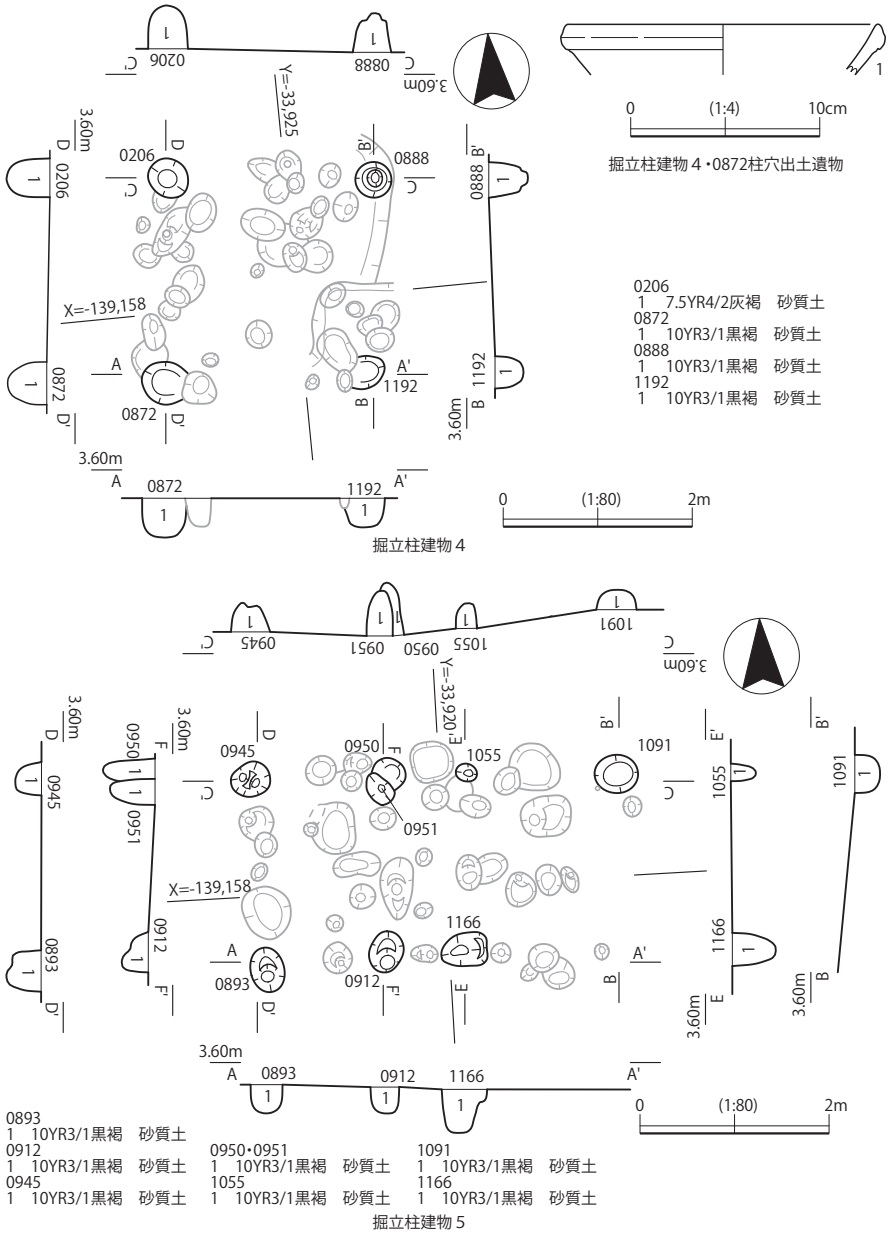


図 512　３区　第２遺構面　掘立柱建物４・５平・断面図・出土遺物

0469 井戸（図 514・515、図版 31・120・121）　掘形の最大径 1.92 m、深さ 1.15 m で不整円形を呈する。２段掘りを行い、残存２段の曲物を積み上げた構造で、井戸内法は上部で径 0.34 m、下部で径 0.24 m である。遺構南西部を 0471 溝等に切られている。調査区中央南寄り西端付近に位置する。遺物は土師器皿（図 515 － 18・19）、瓦器碗（図 515 － 20・21）、漆器碗（図 515 － 22）、等のほか、木質編物残欠（図 515 － 24）が出土した。井戸枠材のうち下段の曲物枠（図 515 － 23）を図化した。18 は井戸枠内９層出土（図 514：515 － 18）、19 は最下層の 10 層出土である（図 514：515 － 19）。20 は大和型である。21 は大和型で、井戸枠内７層で 22

の漆器碗より下部から出土した（図 514：515 － 21）。22 は内外面とも黒漆塗りで、外面はその上に赤漆で文様が施されており、７層出土である（図 514：515 － 22）。24 も７層出土である（図 514：515 － 24）。23 は木皮での接合部を除く内面に縦方向と斜方向の細かい切れ込みを入れ、材を曲げている。出土遺物から 13 世紀前半頃に廃絶されたものと見られる。

0567 井戸（図 516・517、図版 31・120・121） 掘形の最大径 2.11 m、深さ 1.57 mで円形を呈する。曲物を残存５段積み上げた構造で、井戸内法は径 0.41 mである。調査区中央南西寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 517 － 1 ・ 2）、大和型瓦器碗（図 517 － 3）、須恵器壺（図 517 － 4）、東播系須恵器練鉢（図 517 － 5）、滑石製石鍋底部（図 517 － 6）、木製曲物底部（図 517 － 8 ・ 9）等が出土

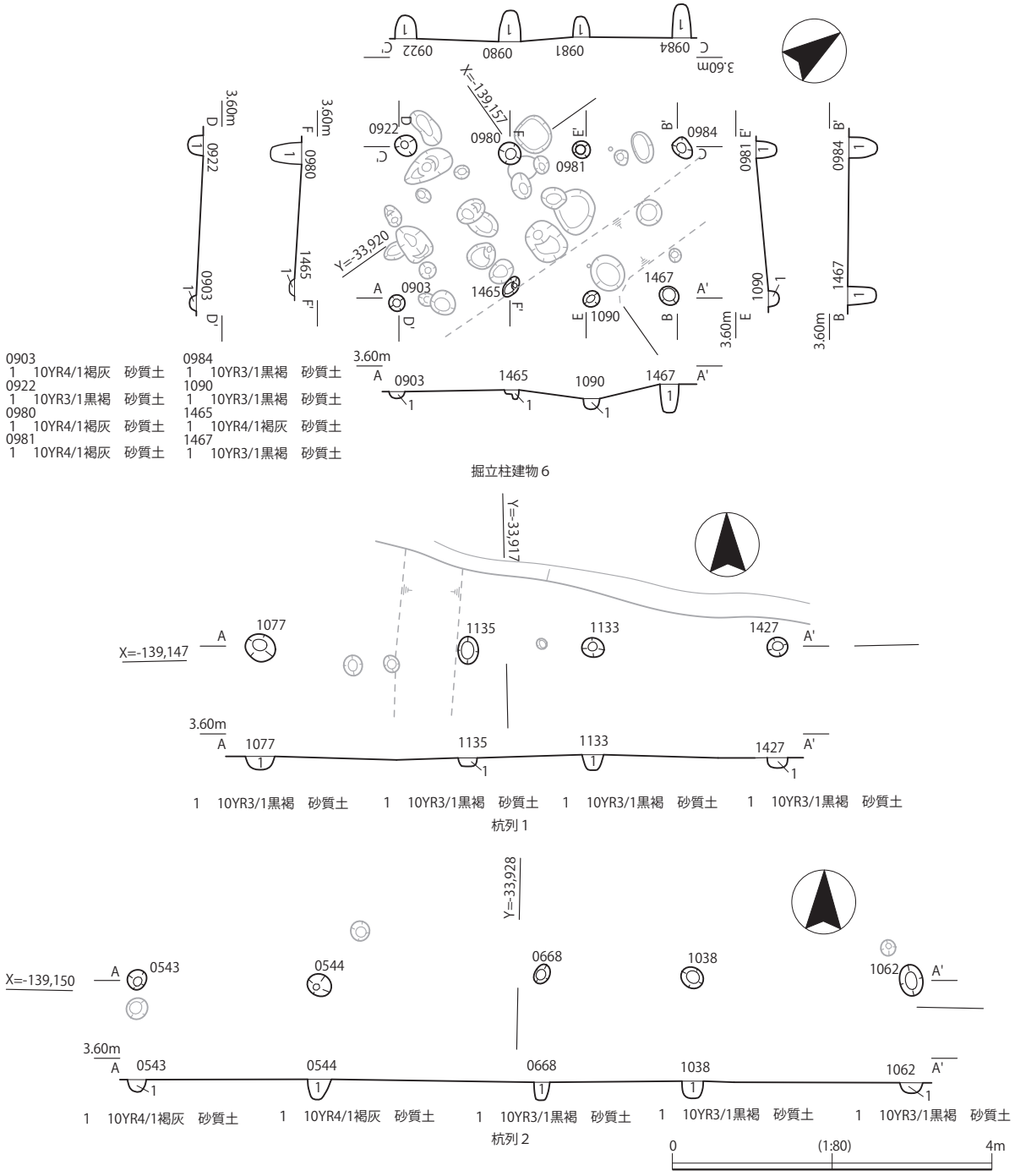
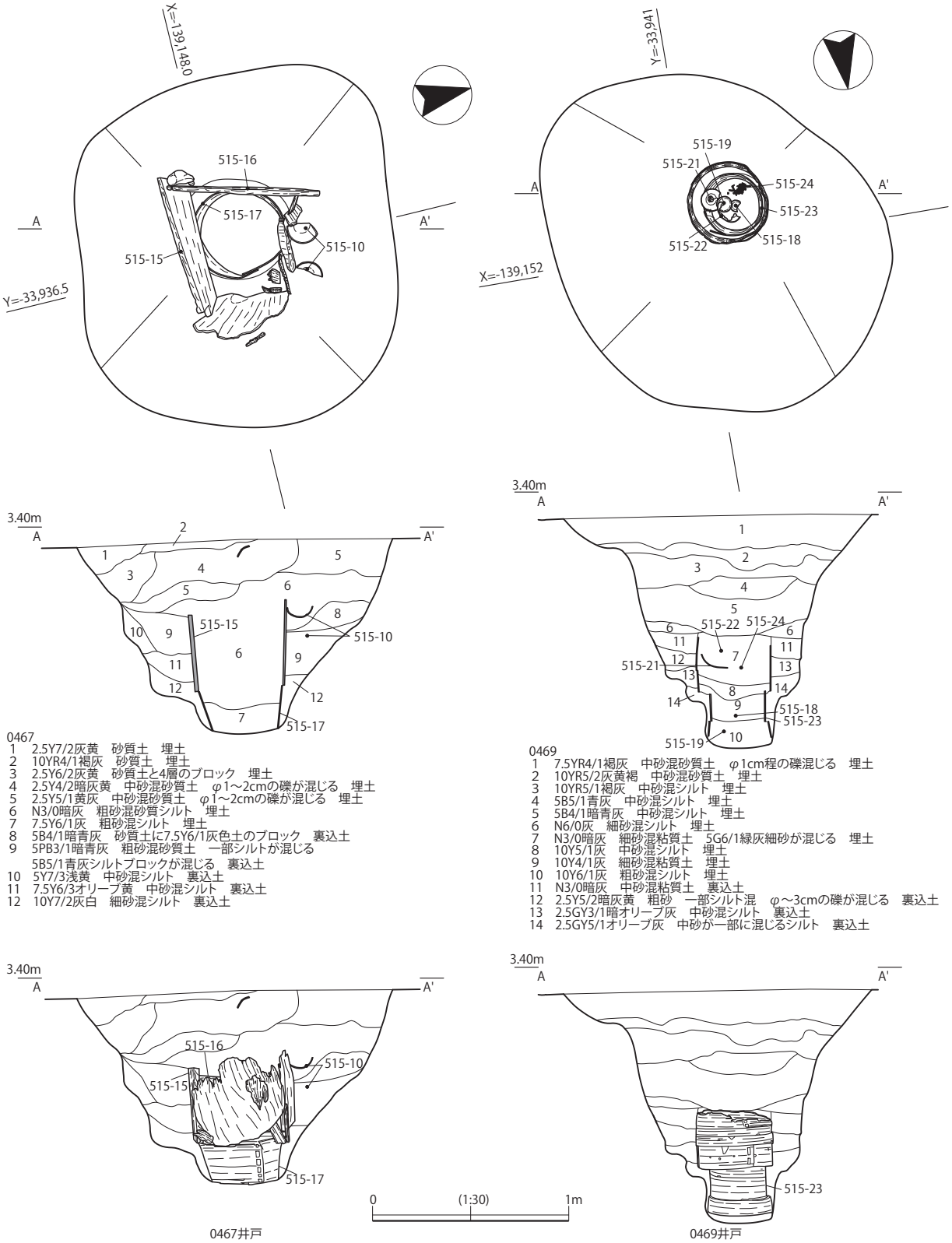


図 513　３区　第２遺構面　掘立柱建物６・杭列１・２平・断面図

した。井戸枠材のうち下から３段目の曲物（図 517 － 7）を図化した。７は木皮での接合部を除く内面に縦方向と斜方向の細かい切れ込みを入れ、材を曲げている。上部の曲物との間に支えとして挿入されていた半円形の板材が底部内側に接合したため、曲物桶の再利用品である。曲物下部には穿孔があり、底部に残存した木釘箇所と位置が一致した。８は井戸枠内の上層部出土（図 516：517 － 8）、９は井



0467
1　2.5Y7/2灰黄　砂質土　埋土
2　10YR4/1褐灰　砂質土　埋土
3　2.5Y6/2灰黄　砂質土と4層のブロック　埋土
4　2.5Y4/2暗灰黄　中砂混砂質土　φ1～2cmの礫が混じる　埋土
5　2.5Y5/1黄灰　中砂混砂質土　φ1～2cmの礫が混じる　埋土
6　N3/0暗灰　粗砂混砂質シルト　埋土
7　7.5Y6/1灰　粗砂混シルト　埋土
8　5B4/1暗青灰　砂質土に7.5Y6/1灰色土のブロック　裏込土
9　5PB3/1暗青灰　粗砂混砂質土　一部シルトが混じる
　5B5/1青灰シルトブロックが混じる　裏込土
10　5Y7/3浅黄　中砂混シルト　裏込土
11　7.5Y6/3オリーブ黄　中砂混シルト　裏込土
12　10Y7/2灰白　細砂混シルト　裏込土

0469
1　7.5YR4/1褐灰　中砂混砂質土　φ1cm程の礫混じる　埋土
2　10YR5/2灰黄褐　中砂混砂質土　埋土
3　10YR5/1褐灰　中砂混シルト　埋土
4　5B5/1青灰　中砂混シルト　埋土
5　5B4/1暗青灰　中砂混シルト　埋土
6　N6/0灰　細砂混シルト　埋土
7　N3/0暗灰　細砂混粘質土　5G6/1緑灰細砂が混じる　埋土
8　10Y5/1灰　中砂混シルト　埋土
9　10Y4/1灰　細砂混粘質土　埋土
10　10Y6/1灰　粗砂混シルト　埋土
11　N3/0暗灰　中砂混粘質土　裏込土
12　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　一部シルト混　φ～3cmの礫が混じる　裏込土
13　2.5GY3/1暗オリーブ灰　中砂混シルト　裏込土
14　2.5GY5/1オリーブ灰　中砂が一部に混じるシルト　裏込土

図 514　３区　第２遺構面　467・469 井戸平・断面図

戸枠内の下層部出土である（図 516：517 －９）。出土遺物から 13 世紀中頃の廃絶と見られる。

1000 井戸（図 516・517、図版 32・121）　掘形の最大径 1.61 m、深さ 0.81 mで不整円形を呈する。井戸は２段に掘られていて、下段は集水施設とみられる。調査時点では素掘様の井戸となっていて、井戸枠の痕跡等は検出されなかった。堆積状況をみても井戸枠が設置されていたものを再掘削した痕跡は

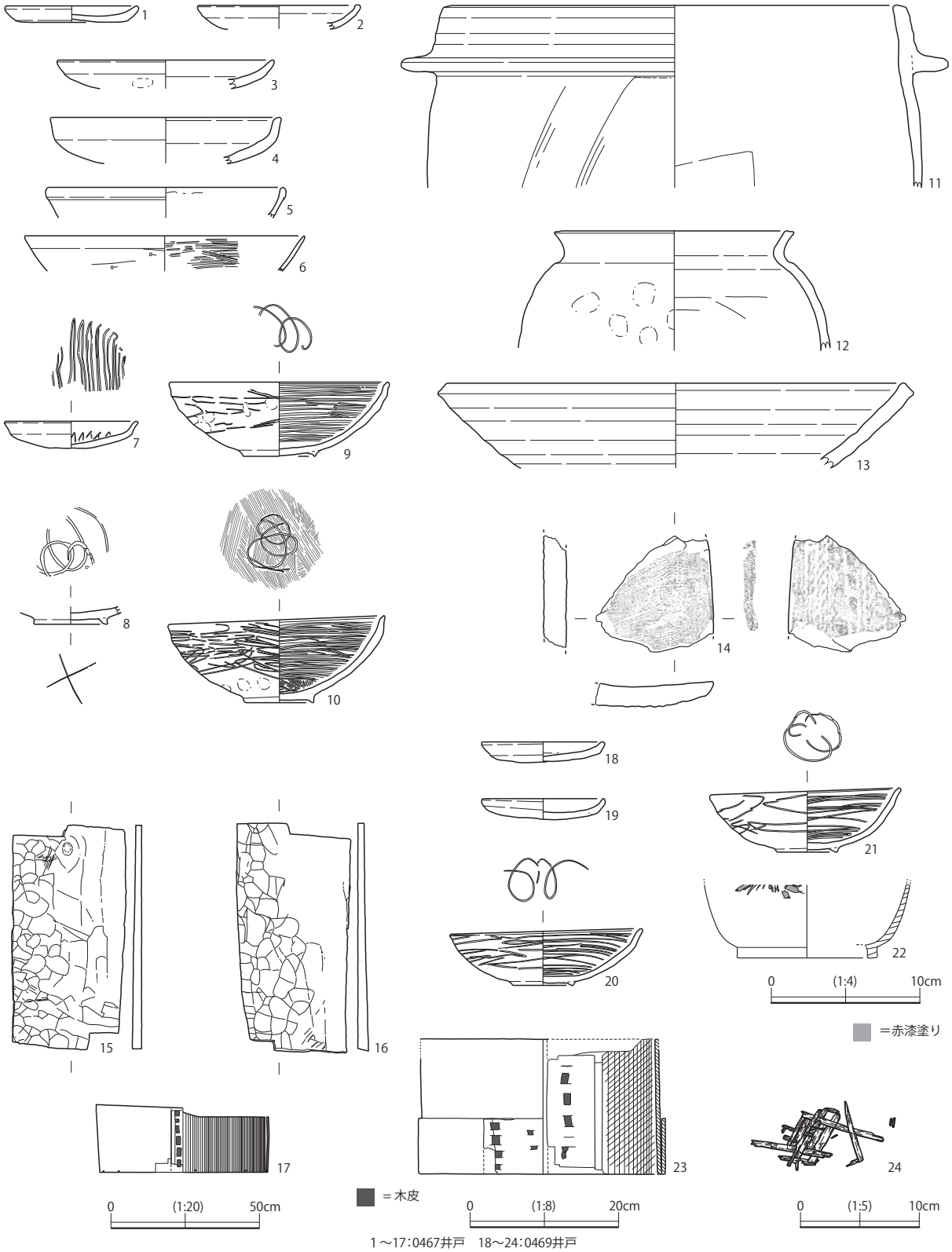


図 515　３区　第２遺構面　467・469 井戸　出土遺物

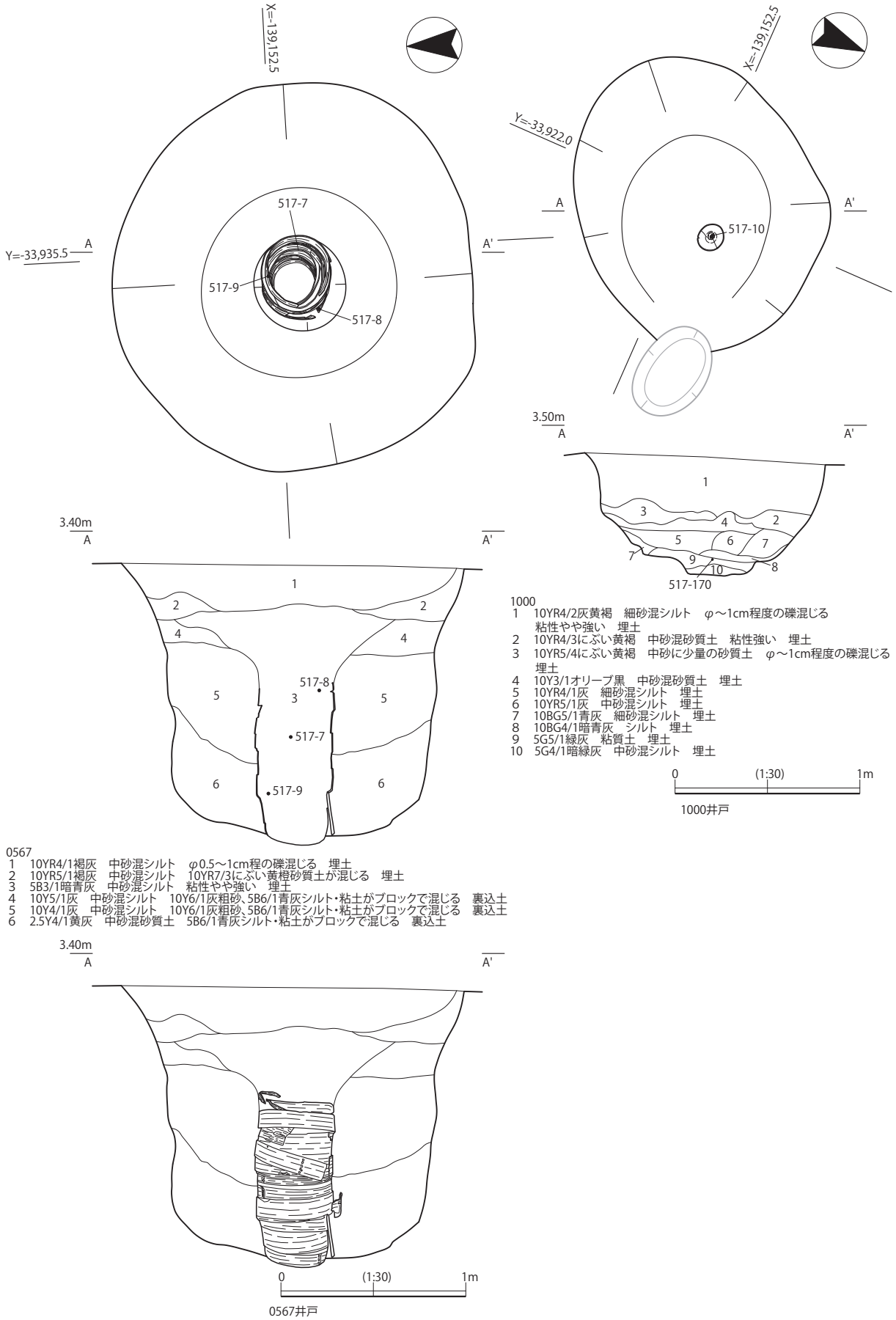


図 516　3 区　第 2 遺構面　567・1000 井戸平・断面図

見られないため、素掘井戸である可能性が高いが、井戸枠再利用のため井戸を完全に再掘削した可能性は残る。遺構東端を他の土坑に切られている。調査区の中央やや南に位置する。先述の掘立柱建物２が、この井戸を覆う井戸上屋とみられる。遺物は井戸中央底部付近から（図 516：517 － 10）完形の瓦器碗が出土した（図 517 － 10）。10 は大和型のものである。13 世紀中頃のものとみられ、井戸廃絶時に遺棄されたとみられる。

1144 井戸（図 518、図版 32・121） 検出できた最大径 0.57 m、残存深さ 0.58 mで円形を呈する。調査区側溝掘削中に検出したため、掘形の上部は検出できていない。下部に径 0.32 m～ 0.27 m、高さ 0.13 m～ 0.08 mの曲物を３段重ね、その上部に底を打ち欠き上下逆さに向けた瓦質羽釜（図 518 － 2）を

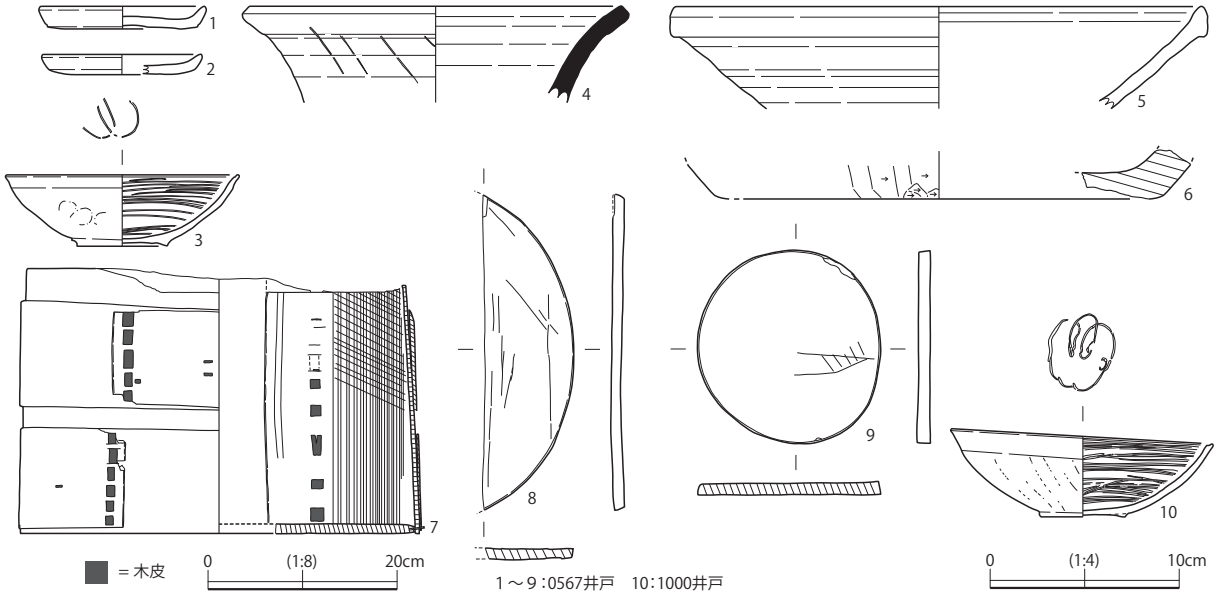


図 517　３区　第２遺構面　567・1000 井戸　出土遺物

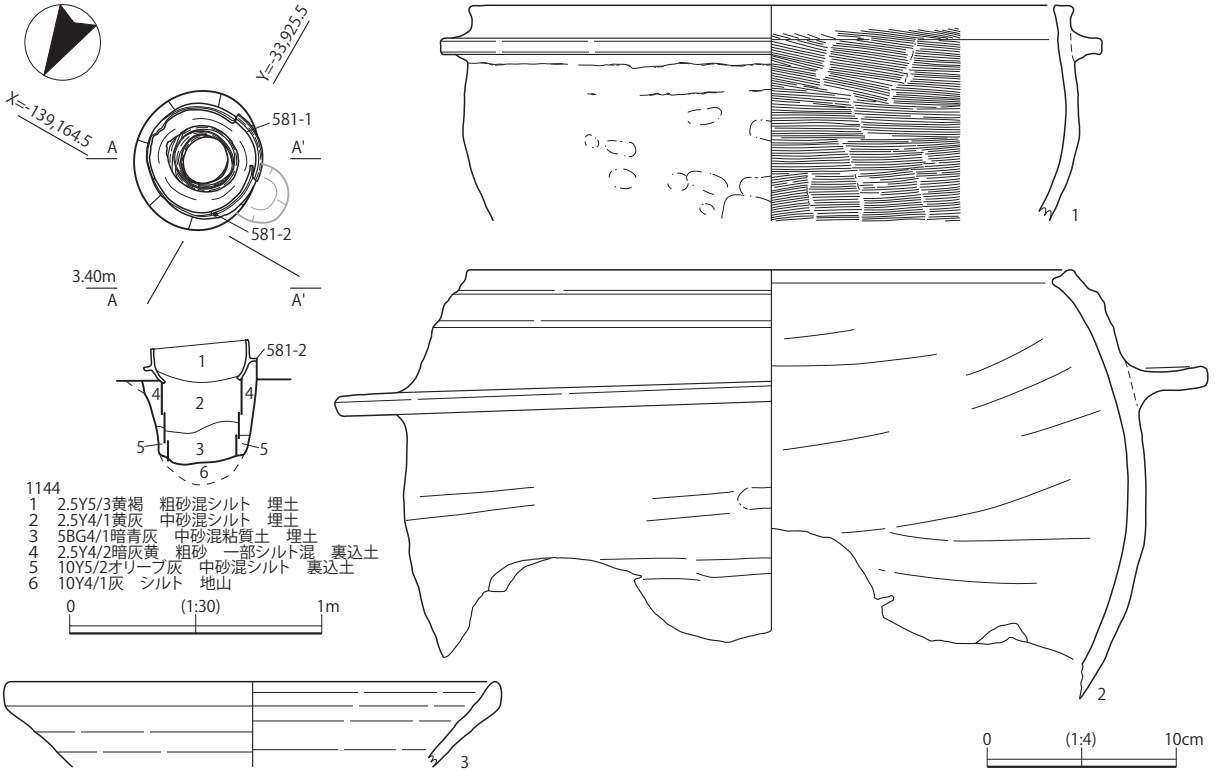
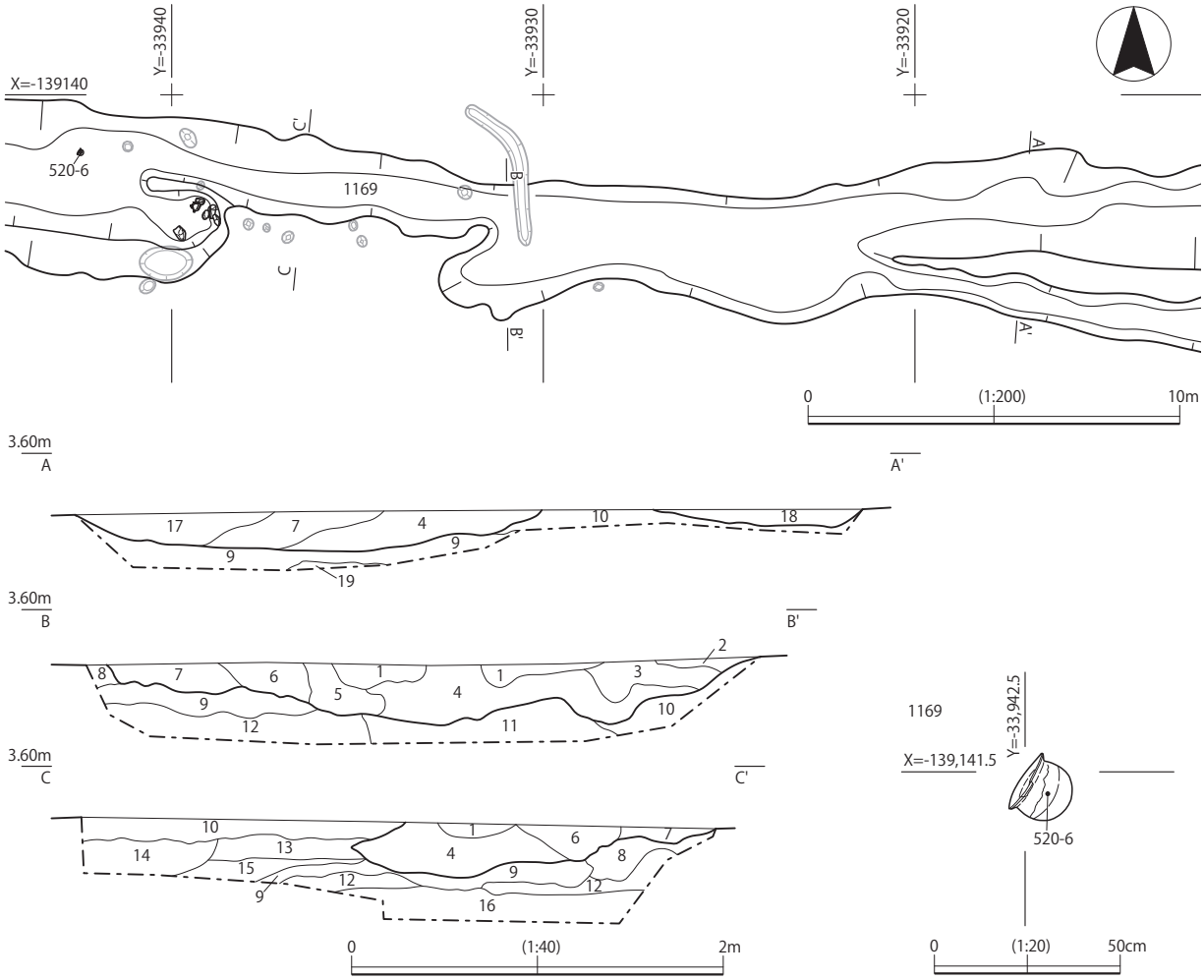


図 518　３区　第２遺構面　1144 井戸平・断面図・出土遺物

重ねた構造である。調査区南端に位置する。遺物は井戸枠として瓦質土器羽釜（図 518 － 1 ・ 2）が、井戸内から須恵質土器練鉢（図 518 － 3）等が出土した。 1 は、 2 の欠損部を覆う形で口縁部を上に向けて 2 に添えられて出土した。 2 は上下逆さに向け井戸枠として設置されていて、鍔が口縁部と比較して斜めに取り付けられている。14 世紀に構築された井戸とみられる。

1169 河川（図 519・520、図版 32・121） 検出できた長さ 35.32 m、最大幅 4.89 m、深さ 0.36 mであり、調査区のほぼ中央を東から西へ流れる河川である。調査区内では、上流側では流路が二つに分かれている。下流側には一部に河岸の張り出し部が存在し、その西側には人頭大以上の大きさの礫がいくつか検出された。この河川の南岸に存在する集落への船着き場状に機能したものとみる。北岸中央部を 1448 溝に切られている。遺物は須恵器壺口縁（図 520 － 1 ）、灰釉陶器皿（図 520 － 2 ）、緑釉陶器碗（図 520 － 3 ）、黒色土器碗（図 520 － 4・5 ）、土師器甕（図 520 － 6 ～ 8 ）、平瓦（図 520 － 9 ）、軒平瓦（図 520 － 10）等が出土した。 4 ・ 5 は黒色土器 A 類である。 6 は河川内の下流側で川床付近



1169
1　10YR4/1褐灰　極粗砂　1169堆積土
2　10YR5/1褐灰　シルト
3　10YR6/3にぶい黄橙　一部に中砂の混じるシルト
4　2.5Y7/2灰黄　中砂に少量のシルトが混じる φ～3cmの礫が多量に混じる　1169堆積土
5　2.5Y6/1黄灰　細砂混シルト　1169堆積土
6　5Y6/2灰オリーブ　シルト　ややしまる　1169堆積土
7　2.5Y7/2灰黄　粗砂混シルト　しまりがない　1169堆積土
8　5Y5/2灰オリーブ　シルト　一部でN2/0黒シルトが層状に混じる　しまりは6層よりやや強い　地山
9　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂　φ～3cmの礫が多量に混じる N2/0黒シルトが層状に混じる　地山
10　2.5Y5/2暗灰黄　シルト　しまりは8層と同程度　地山
11　2.5Y6/2灰黄　中砂にシルトが混じる　地山
12　7.5Y7/1灰白　一部粗砂混　一部5BG6/1青灰粘質土が混じる　地山
13　2.5Y5/3黄褐　シルト　ややしまる　所々2.5Y4/1黄灰シルト混　地山
14　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　φ～3cmの礫が混じる　地山
15　2.5Y6/1黄灰　シルト　一部細砂混　地山
16　2.5Y6/2灰黄　粗砂混シルト　φ～4cm程の礫が非常に多く混じる　地山
17　2.5Y6/6明黄褐　粗砂　φ～3cmの礫が多く混じる 1169堆積土
18　10YR5/1褐灰　粗砂　φ～2cmの礫が混じる　1層に似る 1169堆積土
19　10BG4/1暗青灰　シルト質土　一部粗砂混　地山

図 519　3 区　第 2 遺構面　1169 河川平・断面図

から横転した状態で出土した（図 519：520 － 6）。10 は唐草文軒平瓦である。８世紀から９世紀にかけての遺物を多く含む。

0468 溝（図 521、図版 121）　長さ 2.01 m、幅 0.42 m、深さ 0.08 mで断面Ｕ字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。調査区の南西寄りに位置する。遺物は土師器甕（図 521 － 1）等が出土した。

0471 溝（図 521、図版 121）　検出できた長さ 12.06 m、幅 2.08 m、深さ 0.22 mで断面Ｕ字状であり、南北方向に走る直線的な溝である。溝の南端は調査区外に延びている。遺構両岸を他の土坑や溝に切られている。調査区の南西端に位置する。遺物は青磁碗（図 521 － 2）等が出土した。

0800 溝（図 521、図版 121）　長さ 9.48 m、幅 0.38 m、深さ 0.06 mで断面Ｕ字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。調査区の中央南寄りに位置する。この溝より南側では地山面がやや高まって

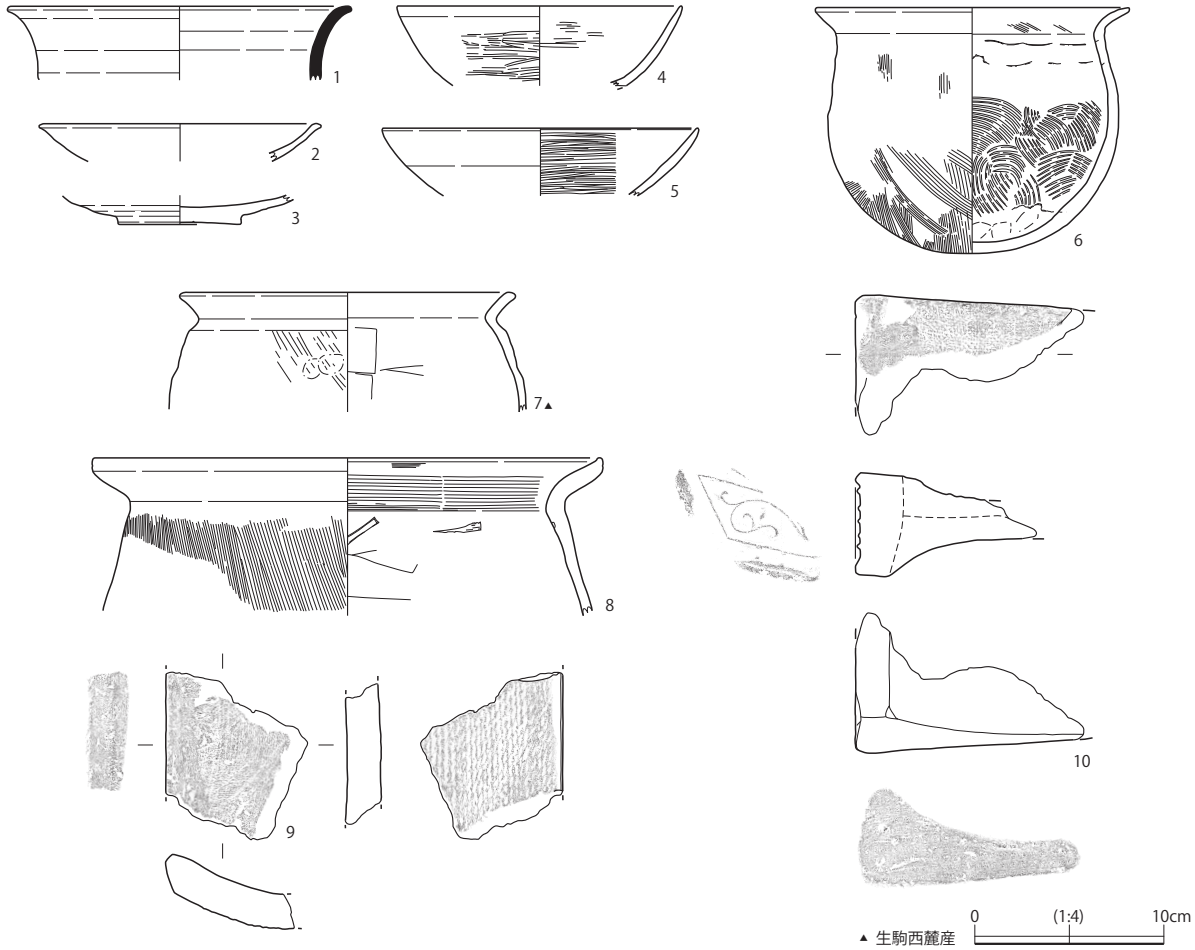
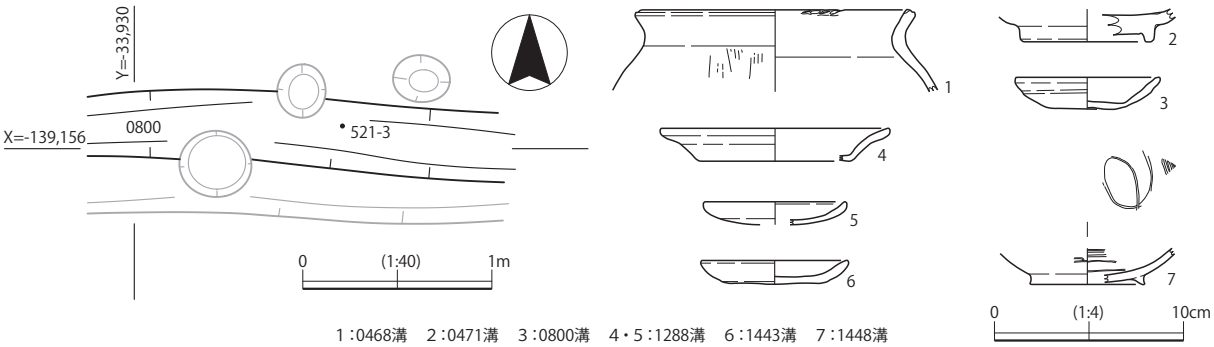


図 520　３区　第２遺構面　1169 河川　出土遺物



1：0468溝　2：0471溝　3：0800溝　4・5：1288溝　6：1443溝　7：1448溝

図 521　３区　第２遺構面　468・471・800・1288・1443・1448 溝平面図・出土遺物

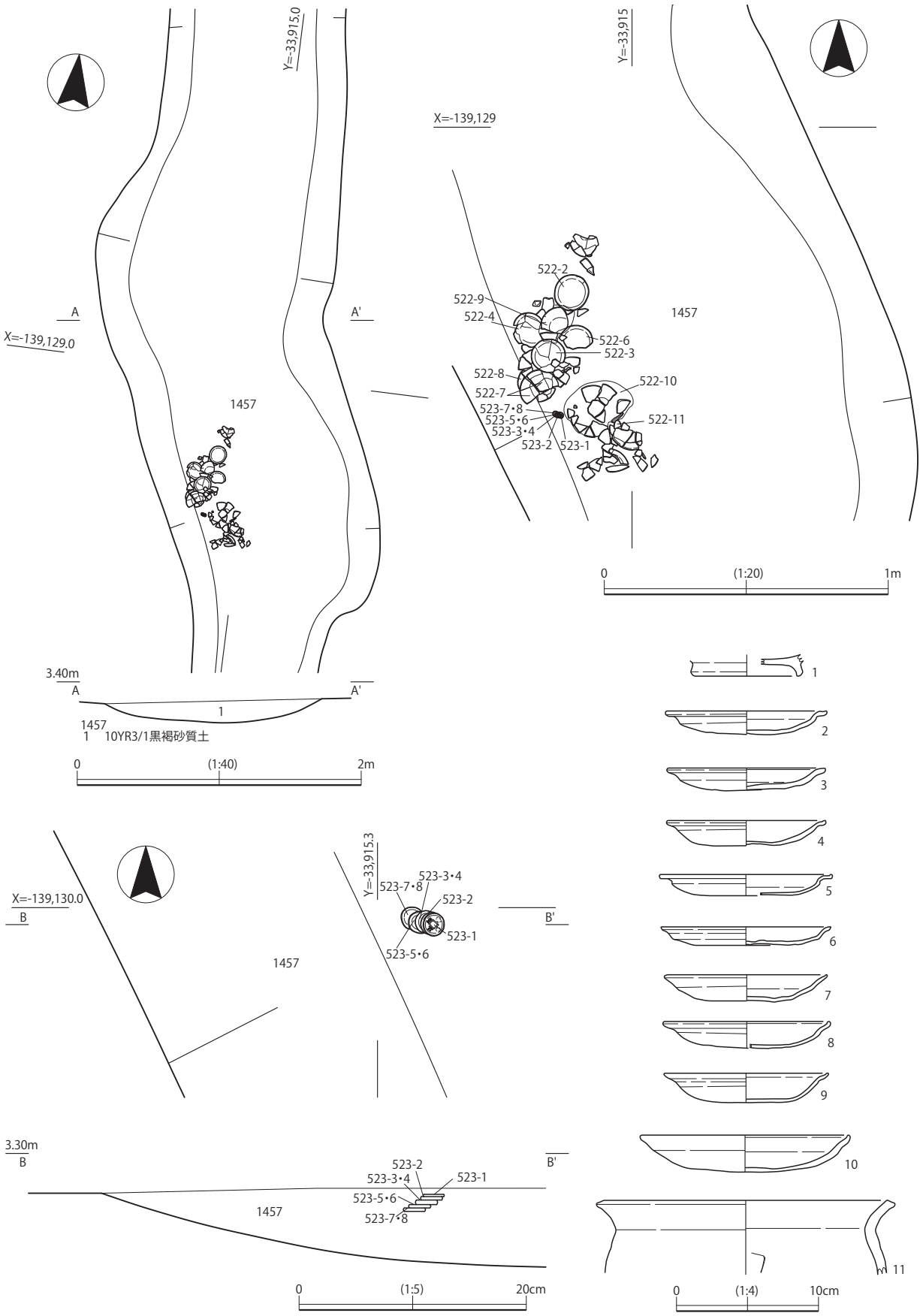


図 522　3 区　第 2 遺構面　1457 溝平・断面図・出土遺物

おり、その部分に柱穴・土坑が密集していて、集落内の区画溝の可能性がある。遺物は土師器皿（図521－3）等が出土した。3は遺構東端付近から出土した（図521：521－3）。

1288溝（図521、図版121）　残存長2.79 m、幅0.60 m、深さ0.06 mで断面U字状であり、南北方向に走る直線的な溝である。遺構南端は1053落ち込みに切られている。調査区の南寄りに位置する。遺物は土師器皿（図521－4・5）等が出土した。

1443溝（図521、図版121）　長さ3.55 m、幅0.45 m、深さ0.10 mで断面U字状であり、東西方向でややS字状に蛇行して走る溝である。溝東端は調査区外に延びていて、西端は他の土坑に切られている。調査区の南東端に位置する。遺物は土師器皿（図521－6）等が出土した。

1448溝（図521、図版121）　長さ4.33 m、幅0.43 m、深さ0.16 mで断面U字状であり、南北方向で南から西へと蛇行して走る溝である。調査区の中央付近に位置する。遺物は瓦器碗（図521－7）等が出土した。12世紀後半から13世紀初頭頃のものとみられる。

1457溝（図522・523、図版32・121・122）　検出時の長さ13.12 m、幅1.70 m、深さ0.15 mで断面U字状であり、南北方向にやや蛇行して走る溝である。溝北端は1963溝によって切られていたと思われる。調査区の北東端に位置する。溝の南北方向ほぼ中央付近で、土師器皿を主体とする土器群と重なった状態の銅銭8点を一括で検出した。図化遺物はいずれもこの土器群からのもので（図522：522－2～4・6～11、523－1～8）、灰釉陶器碗（図522－1）、土師器皿（図522－2～10）、土師器甕（図522－11）、銅銭（図523－1～8）等が出土した。土師器皿のうち2～6、8、9は「て」

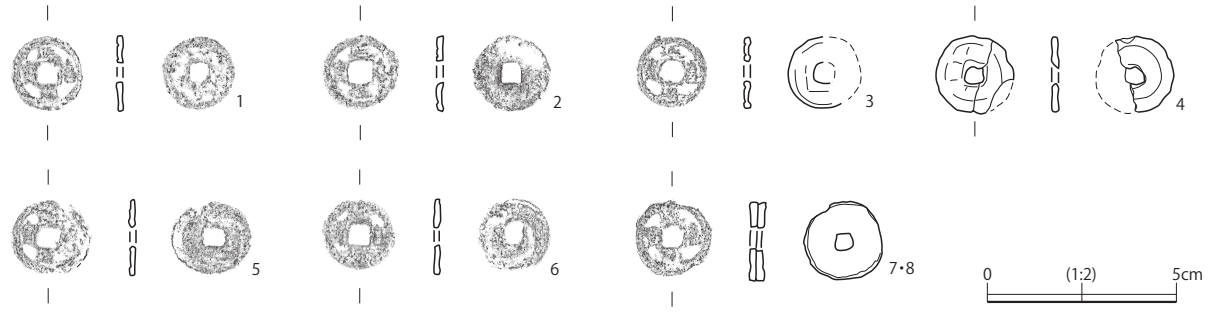


図523　3区　第2遺構面　1457溝　出土遺物（銅銭）

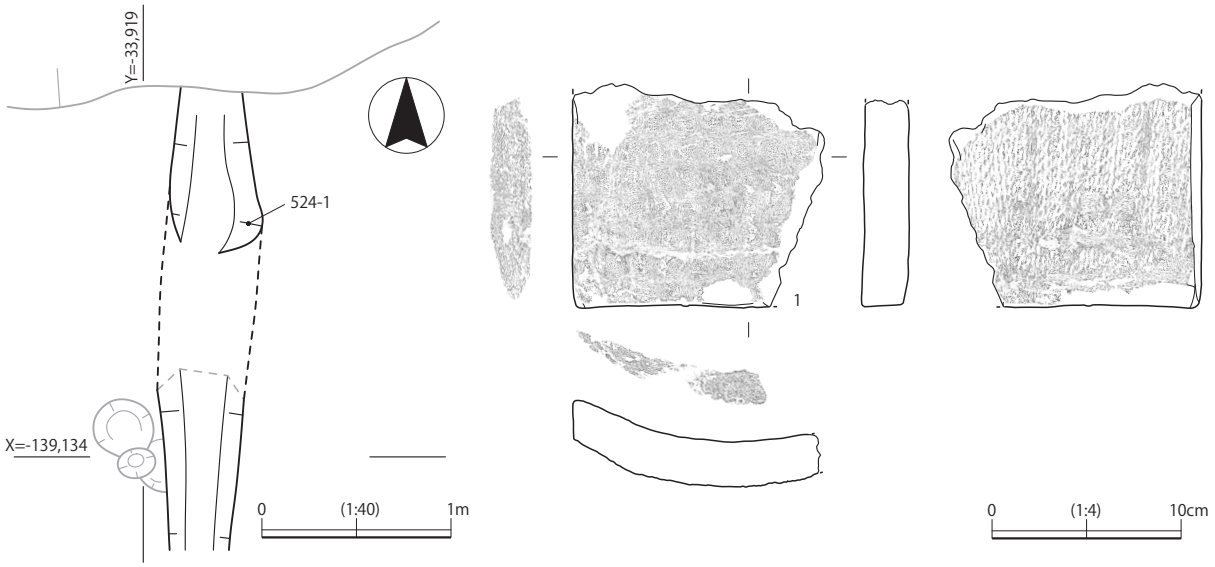
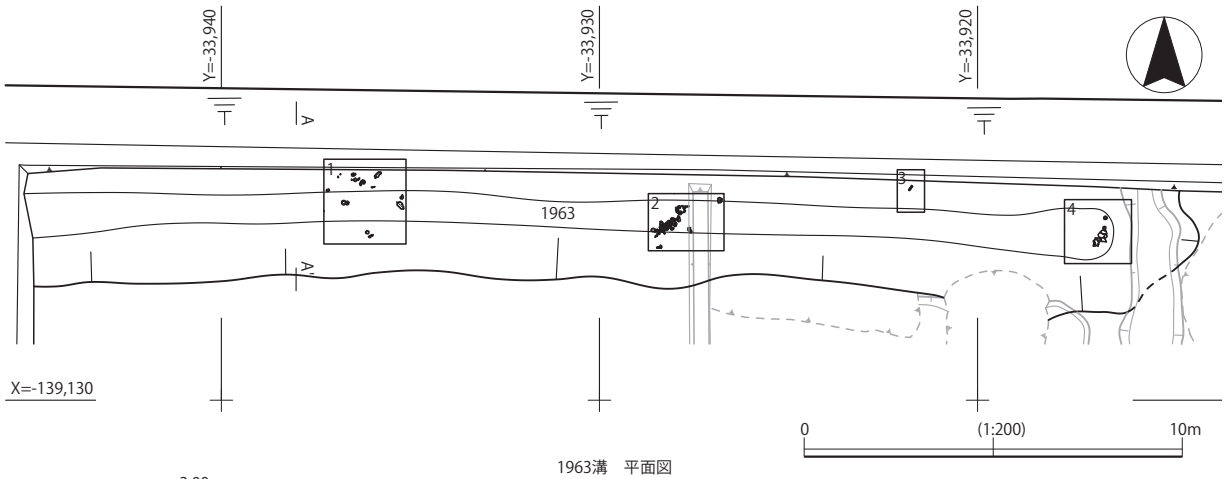
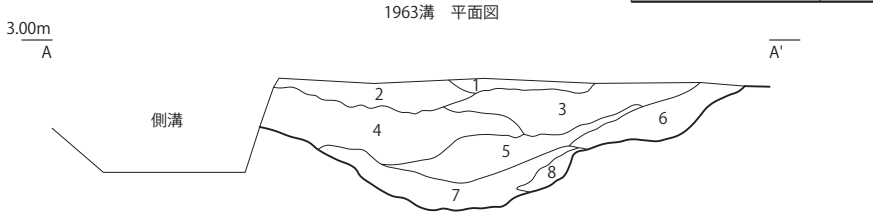


図524　3区　第2遺構面　1460溝平面図・出土遺物



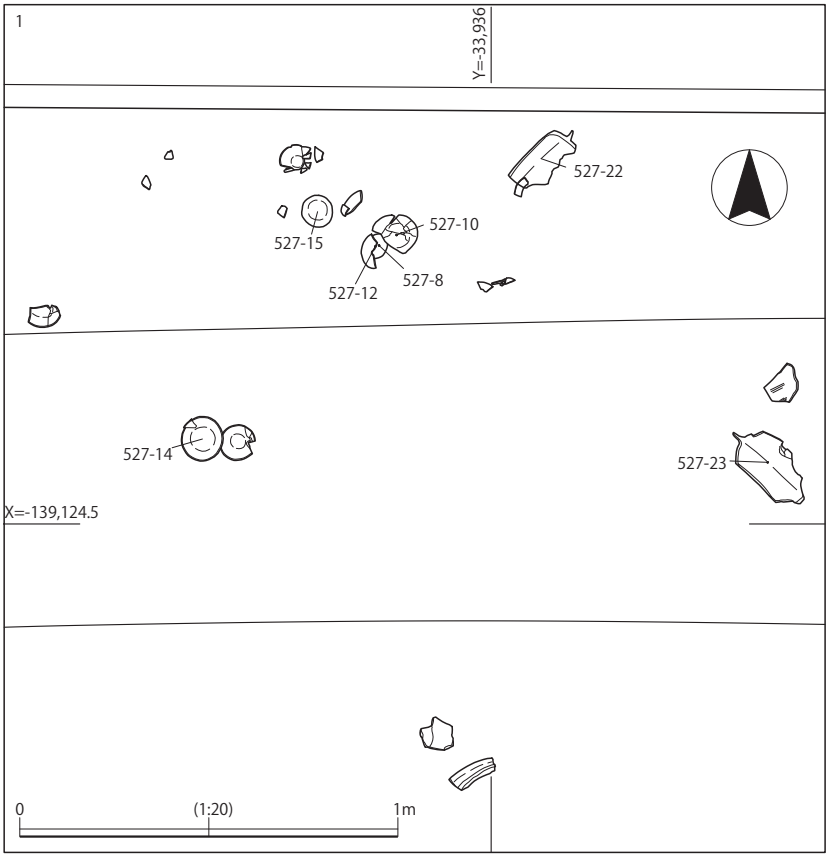
1963溝　平面図



1　10YR4/3にぶい黄褐　中砂混砂質土　1963埋土
2　10YR3/3暗褐　シルト混中砂　φ～2cmの礫が混じる　1963埋土
3　10YR3/1黒褐　中砂混砂質土　φ～2cmの礫が混じる　1963埋土
4　7.5GY5/1緑灰　シルト・粘質土の混じる中砂　1963埋土
5　10Y2/1黒　中砂混粘質土　1963埋土
6　2.5Y4/1黄灰　シルト混中砂　1963埋土
7　5Y4/1灰　粘土　植物遺体が多量に混じる　1963埋土
8　5Y5/1灰　粗砂に7層が混じる　1963埋土

0　(1:40)　2m

1963溝　断面図



1963溝　遺物出土状況図１

図 525　３区　第２遺構面　1963 溝平・断面図・出土状況図

字状口縁を持つものに属する。銅銭はいずれも銅質は悪く色調白緑色に近いもので、１～３、５～７は銭文が延喜通宝と判読でき、４・８も銅質や銭径が同様であることから、８点とも皇朝十二銭の一つで907年初鋳の延喜通宝である可能性が高い。上から１、２、４、３、６、５、８、７の順で重なって出土し、１・２・４・６は表面を上に、３・５・７・８は背面を上に向け出土した。３と４、５と６、７と８は銹着状態で出土し、このうち３・４の一部と５・６は整理時にそれを外したが、７・８は銹着の度合いが著しく外せていない。出土状況から、銭差に差した状態で土器群とともに溝に遺棄されたと思われる。この一括遺物群は溝における祭祀状況を示すとみられる。おおよそ平安京Ⅲ期に属す10世紀の一群とみられ、これらの土器と延喜通宝が共伴した点で重要である。

1460溝（図524、図版122） 検出できた長さ3.56 m、幅0.50 m、深さ0.11 mで断面U字状であり、南北方向に走る直線的な溝である。溝北端を1476土坑に、溝中央を上層の撹乱に切られている。調査区の北東寄りに位置する。遺物は平瓦（図524－１）等が出土した。１は撹乱によって切られた箇所

1963溝　遺物出土状況図２～４

図526　３区　第２遺構面　1963溝出土状況図

の北側から出土した。

1963溝（図525～257、図版32・33・122）　検出できた長さ31.13ｍ、検出幅3.39ｍ、検出できた深さ0.80ｍで断面Ｕ字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。溝西端は調査区外に延びている。溝北岸は調査区外のため検出できていない。調査区の北端に位置する。溝内で３ヶ所の土器群を検出した。図化した出土遺物は土師器皿（図527－１～15）、青磁碗（図527－16）、白磁碗（図527－17）、緑釉陶器碗（図527－18）、瓦器碗（図527－19・20）、瓦質土器羽釜（図527－21～24）、瓦質土器鉢（図527－25）、瓦質土器擂鉢（図527－26）、鉄斧（図527－27）である。このうち８・10・12・14・22・23は最も西側の土器群から（図525－１）、２～６・９・11・13・20・24は中央の土器群から（図525・526－２）、７・21は最も東側の土器群から出土した。16は龍泉窯系の青磁で

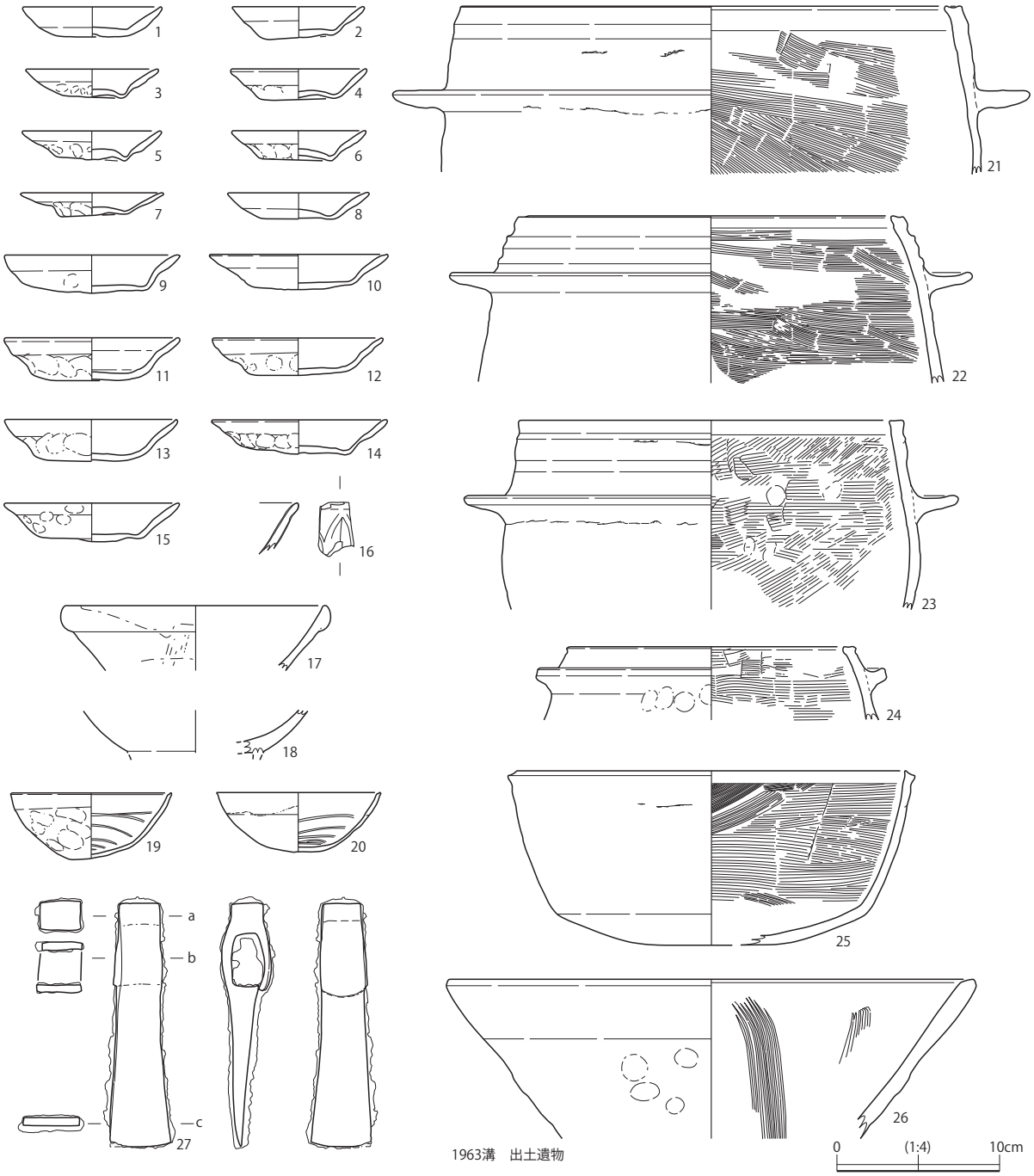


図527　３区　第２遺構面　1963溝　出土遺物

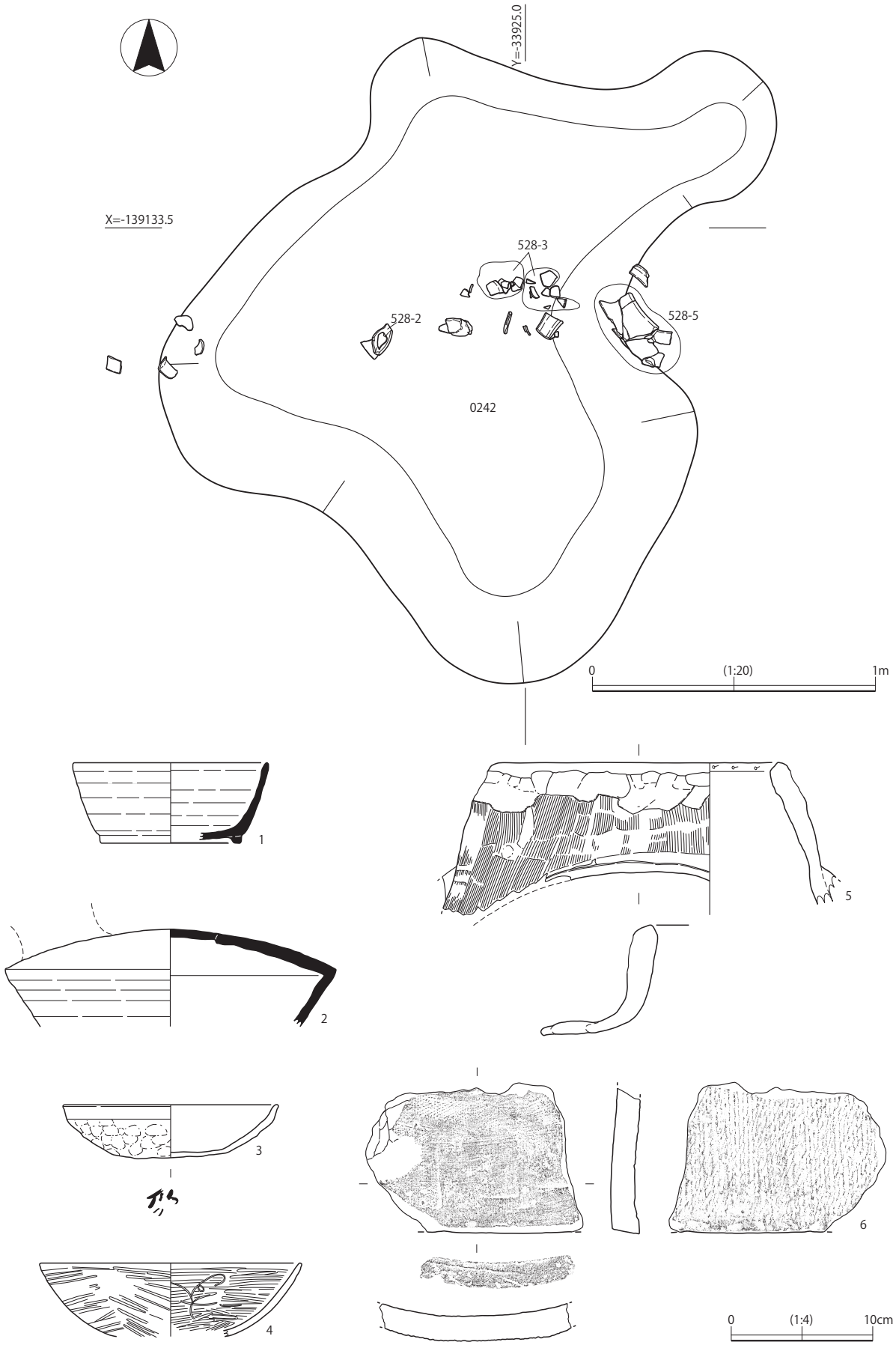


図 528　3 区　第 2 遺構面　242 土坑平面図・出土遺物

ある。19・20は大和型である。27は縦斧で、遺構東寄りから出土した（図526：527－27）。遺物は14世紀から15世紀にかけての時期にまとまりをもつ。

0242土坑（図528、図版33・122）　長軸1.80 m、短軸1.09 m、深さ0.12 mの不整形な土坑である。遺構北側の上層を第1遺構面の0241溝に切られている。調査区の北東寄りに位置する。遺構中央部分を中心に遺物がまとまって出土した（図528）。遺物は須恵器坏身（図528－1）、須恵器平瓶（図528－2）、土師器碗（図528－3）、黒色土器碗（図528－4）、土師器移動式竈（図528－5）、平瓦（図528－6）等が出土した。1は貼付高台である。3は外面底部に墨書がある。墨書は人偏をもつが旁が明瞭でなく判読できない。旁の上部はウ冠のようにも観察できる。4は黒色土器A類である。遺物は9世紀から10世紀頃にまとまりをもつ。

0263土坑（図529、図版33・123）　長軸3.49 m以上、短軸3.31 m、深さ0.19 mでややいびつな楕円形を呈する。遺構西端を0286土坑に切られている。調査区の北寄りに位置する。遺物は土師器蓋(図529－1）等が出土した。

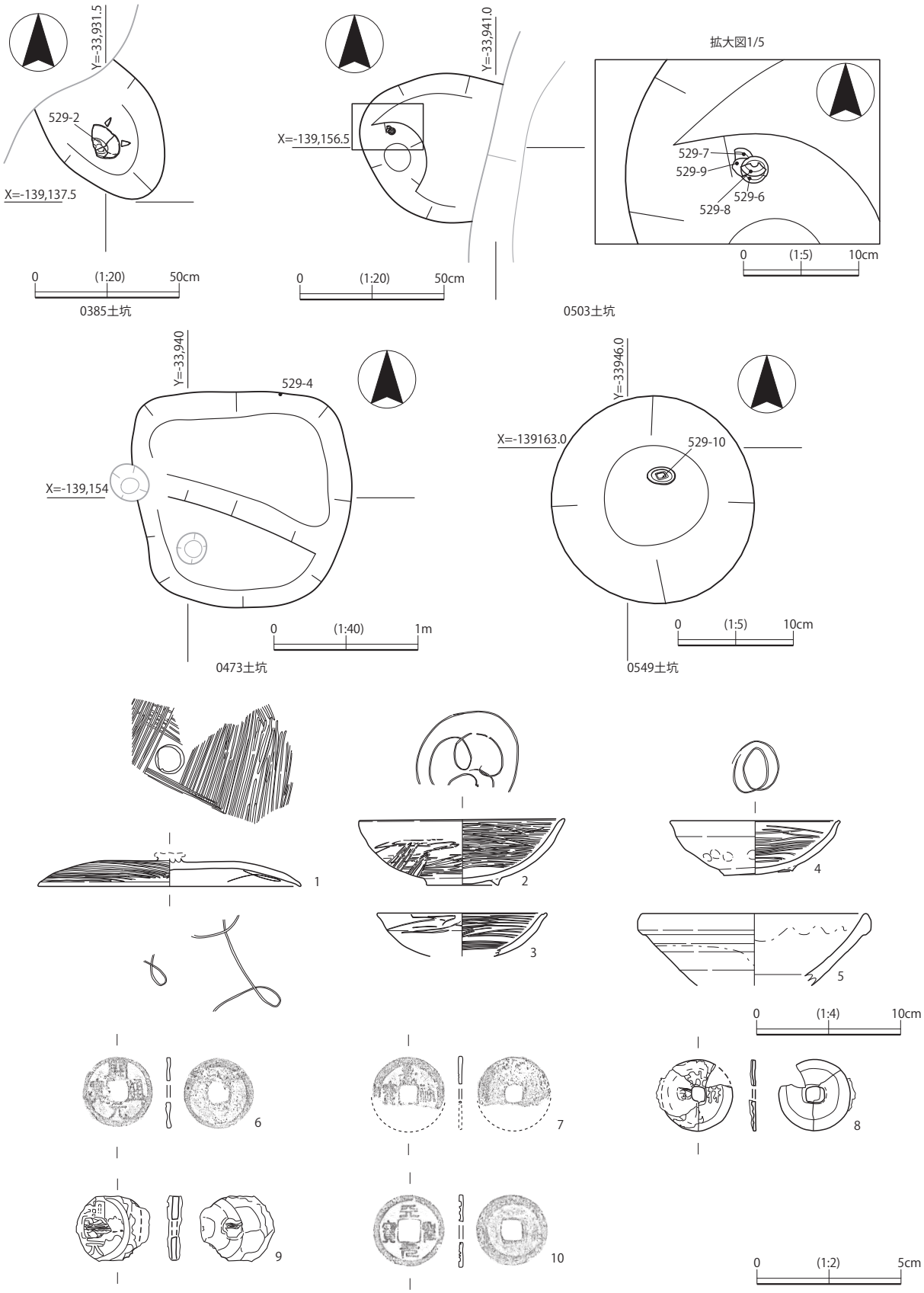
0286土坑（図530・531、図版33・123）　長軸4.83 m、短軸3.34 m、深さ0.83 mでいびつな楕円形を呈する。調査区の北寄りに位置する。遺物は土師器皿（図531－1～5）、土師器台付皿（図531－6）、白磁碗（図531－7）、緑釉陶器碗（図531－8～10）、灰釉陶器皿（図531－11）、黒色土器碗（図531－12）、瓦器皿（図531－13～16）、瓦器碗（図531－17～21）、瓦質土器竈（図531－22）、平瓦（図531－23）等が出土したほか、多くの加工木材や樹皮も検出した（図530）。遺物は断面図9層からの出土が最も多かった。3は遺構東端から出土し、粘土接合痕跡が見られる。5は遺構西側からの出土である。6は粘土接合痕跡が見られ、貼付高台で、高台の位置は中心からずれており、口縁部に煤が付着し、灯明皿とみられる。7は削り出し高台である。12は黒色土器A類である。17は小型で器壁が厚い。18は大和型で遺構内の別の位置で出土したものが接合した。19は大和型で18のうち一つの破片と近接して出土した。20は楠葉型、21は大和型である。22は遺構中央から出土したもので竈の焚口である。12世紀後半の遺構とみられる。

0385土坑（図529、図版33・123）　長軸0.48 m以上、短軸0.39 m、深さ0.26 mで楕円形を呈する。遺構北西部を0286土坑に切られている。調査区の北寄りに位置する。遺物は瓦器碗（図529－2）等が出土した。2は大和型で、遺構中央から出土した。12世紀後半のものである。

0470土坑（図529、図版123）　最大径2.05 m、深さ0.11 mで円形を呈する。調査区南西寄りに位置する。遺物は大和型の瓦器碗（図529－3）等が出土した。13世紀中頃のものとみられる。

0473土坑（図529、図版123）　長軸1.72 m、短軸1.71 m、深さ0.29 mの隅丸方形を呈する。遺構西側の一部を他の土坑に切られている。調査区南西寄りに位置する。遺物は遺構北端からの大和型瓦器碗（図529－4）等が出土した。13世紀後半のものとみられる。

0503土坑（図529、図版33・123）　直径0.52 m、深さ0.20 mで円形を呈する。遺構西端が一段低くなっている。遺構東側を0470土坑に切られている。調査区南西寄りに位置する。遺物は銅銭4枚（図529－6～9）が重なった状態で出土した。上から8、6、9、7の順で重なって出土した。6は表面を上にして出土し､開元通宝（621年初鋳）である。背面は無文である。7は背面を上にして出土し、下半が欠損し1字不明だが、残存した3字から景祐元宝（1034年初鋳）である。字体は篆書である。8は背面を上にして出土し、祥符元宝（1008年初鋳）である。銹着した土とともに銭差とみられる有機質が遺存している。9は銭種不明である。銹着した土には図の表側に6の銭文が反転複写され、背に



1：0263土坑　2：0385土坑　3：0470土坑　4：0473土坑　5：0521土坑　6～9：0503土坑　10：0549土坑

図 529　3 区　第 2 遺構面　263・385・470・473・503・521・549 土坑平面図・出土遺物

も８の型が写っている。両面に銭差とみられる有機質が遺存している。出土状況から銭差に差した状態で埋納されたと思われる。

0521 土坑（図 529、図版 123） 長軸 1.04 m、短軸 0.67 m、深さ 0.19 mの隅丸方形の遺構である。遺構南側を他の土坑に切られている。調査区南西寄りに位置する。遺物は白磁碗（図 529 － 5 ）等が出土した。５は 11 世紀中葉から 12 世紀初頭のものである。

0549 土坑（図 529、図版 33・123） 直径 0.18 m、深さ 0.05 mで円形を呈する。調査区南西端に位置する。遺物は銅銭（図 529 － 10）が出土した。10 は天聖元宝（1023 年初鋳）である。背面を上に向けて出土した。篆書体の銭文である。銅質等の特徴から模鋳銭と見られる。

0581 土坑（図 532、図版 123） 最大径 0.31 m、深さ 0.38 mで円形を呈し調査区南端付近に位置する。遺物は玉縁口縁の白磁碗（図 532 － 1 ）等である。

0586 土坑（図 532、図版 123） 最大径 0.34 m、深さ 0.19 mで円形を呈する。調査区南端付近に位置する。一部を他の土坑に切られている。遺物は土師器皿（図 532 － 2 ～ 10）等が出土した。13 ～ 14 世紀頃の遺構とみられる。

0853 土坑（図 532、図版 123） 最大径 0.37 m、深さ 0.07 mで円形を呈する。調査区南端付近に位置する。遺物は玉縁口縁の白磁碗（図 532 － 11）等が出土した。

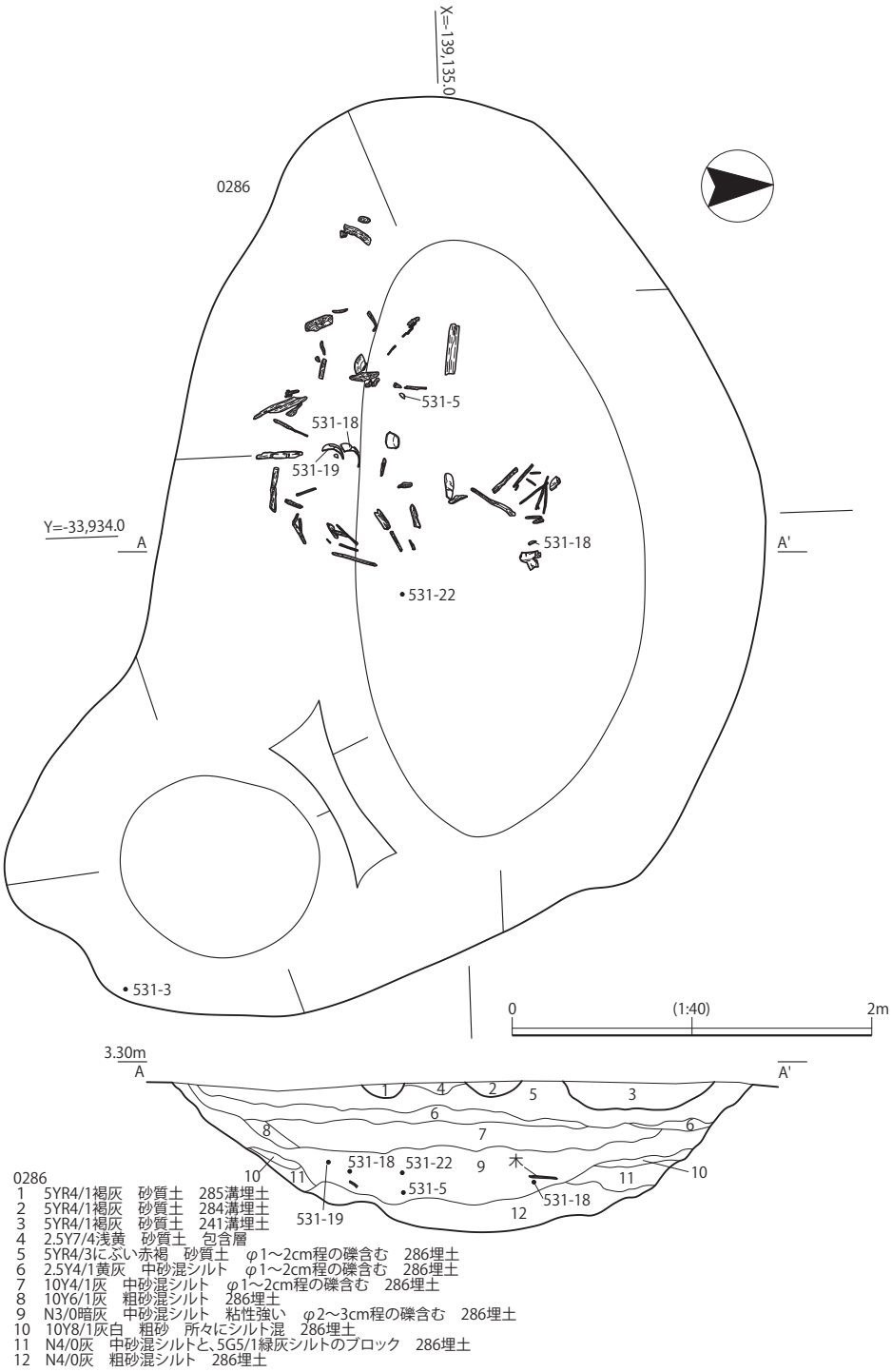


図 530　３区　第２遺構面　286 土坑平・断面図

0916 土坑（図 532、図版 123）　最大径 0.57 m、深さ 0.36 mで円形を呈する。調査区南西側に位置する。遺物は白磁碗（図 532 － 12）等が出土した。

0921 土坑（図 532、図版 123）　長径 0.66 m、短径 0.35 m、深さ 0.61 mで南北に細長い楕円形を呈する。調査区南東端に位置する。遺物は土師器皿（図 532 － 13・14）、瓦器皿（図 532 － 15・16）、瓦器碗（図 532 － 17）等が出土した。13・14 はＪｂタイプとみられる。17 は大和型である。出土遺物は 12 世紀後半から 13 世紀前半ごろにまとまりをもつ。

1143 土坑（図 532、図版 123）　長径 0.36 m、短径 0.28 m、深さ 0.35 mで楕円形を呈する。調査区やや南東寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 532 － 18）等が出土した。

1191 土坑（図 532、図版 123）　残存長径 0.50 m、短径 0.34 m、深さ 0.18 mで楕円形様である。遺構南端を他の土坑に切られている。調査区南東寄りに位置する。遺物は緑釉陶器碗（図 532 － 19）等

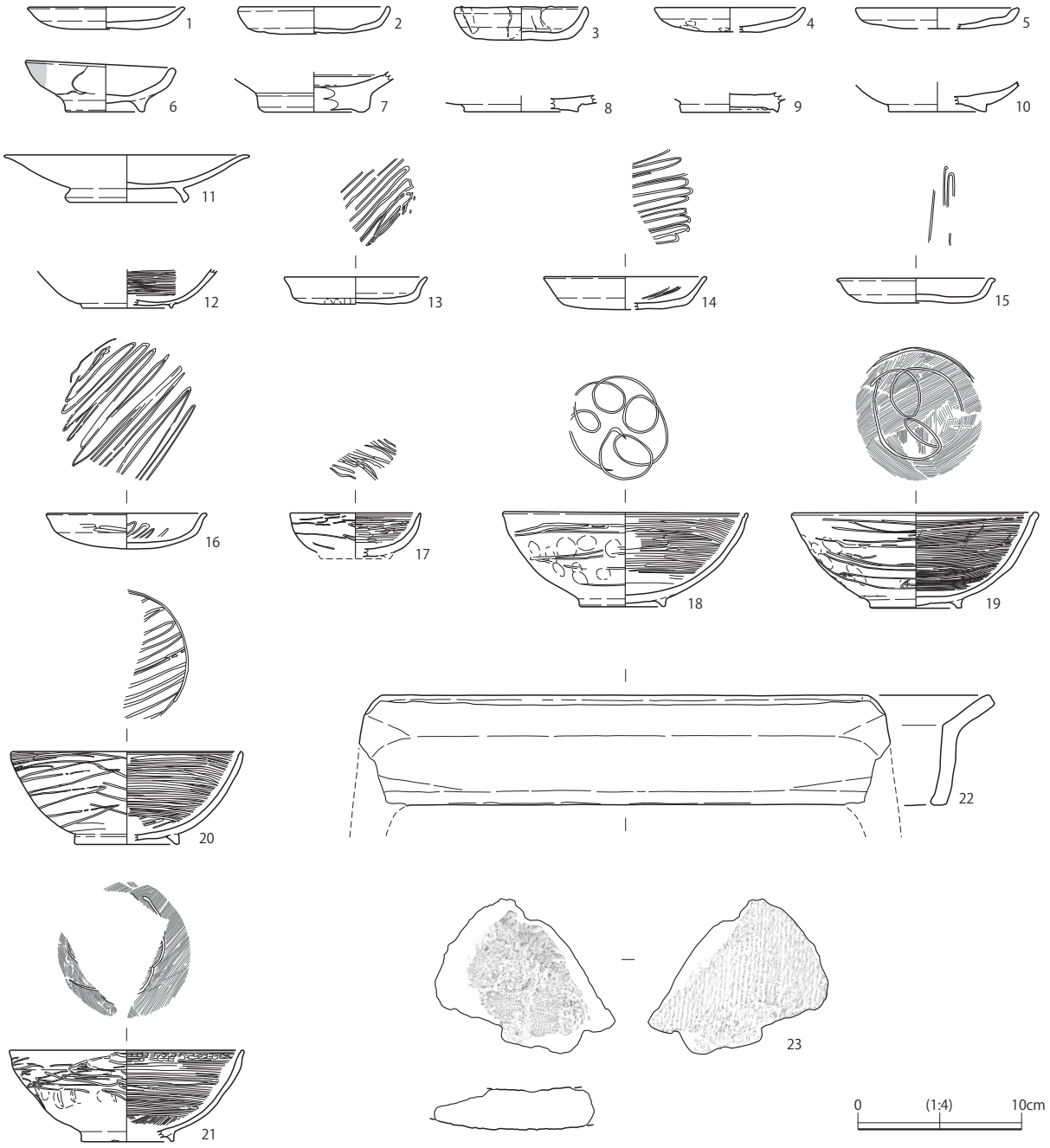


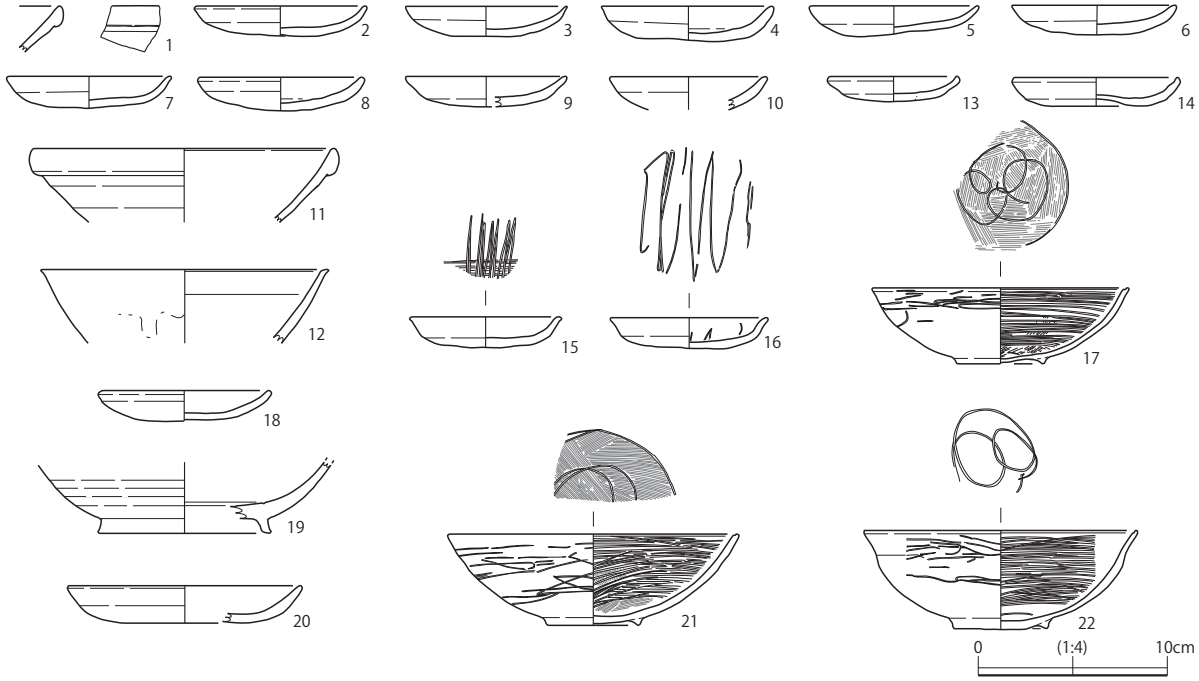
図 531　３区　第２遺構面　286 土坑　出土遺物

が出土した。

1230 土坑（図 532、図版 123）　長径 0.57 m以上、短径 0.50 m、深さ 0.44 mで楕円形を呈する。遺構東側は調査区外である。調査区南東端に位置する。遺物は土師器皿（図 532 － 20）、瓦器碗（図 532 － 21・22）等が出土した。21、22 ともに大和型である。13 世紀の遺構とみられる。

1240 土坑（図 533、図版 33・123）　残存長径 0.94 m、深さ 0.21 mで楕円形様である。遺構東側および南西端は他の土坑に切られている。調査区南寄りに位置する。遺構の中心付近と思われる位置から土師器皿（図 533 － 1 ～ 10）、土師器大皿（図 533 － 11・12）がまとまって出土した（図 533）。11・12 はＡｂタイプである。出土遺物から 12 世紀中頃の遺構とみられる。

1294 土坑（図 534、図版 124）　長径 0.51 m、短径 0.37 m、深さ 0.19 mで楕円形を呈する。調査区南寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 534 － 1 ）等が出土した。 1 はＩａタイプで 15 ～ 16 世紀の



1：0581土坑　2～10：0586土坑　11：0853土坑　12：0916土坑　13～17：0921土坑　18：1143土坑　19：1191土坑　20～22：1230土坑

図 532　３区　第２遺構面　581・586・853・916・921・1143・1191・1230 土坑　出土遺物

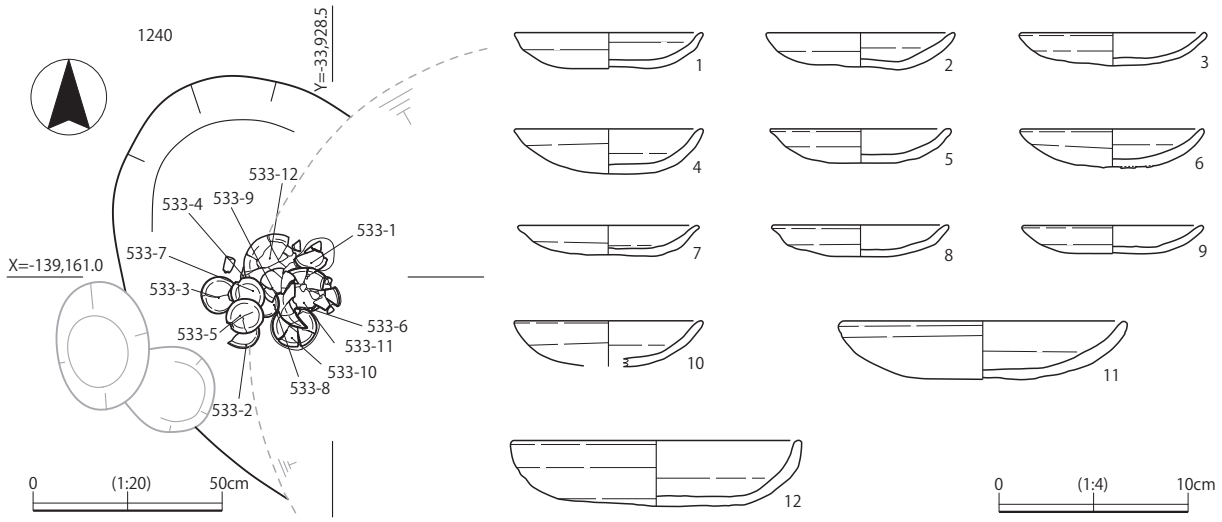


図 533　３区　第２遺構面　1240 土坑平面図・出土遺物

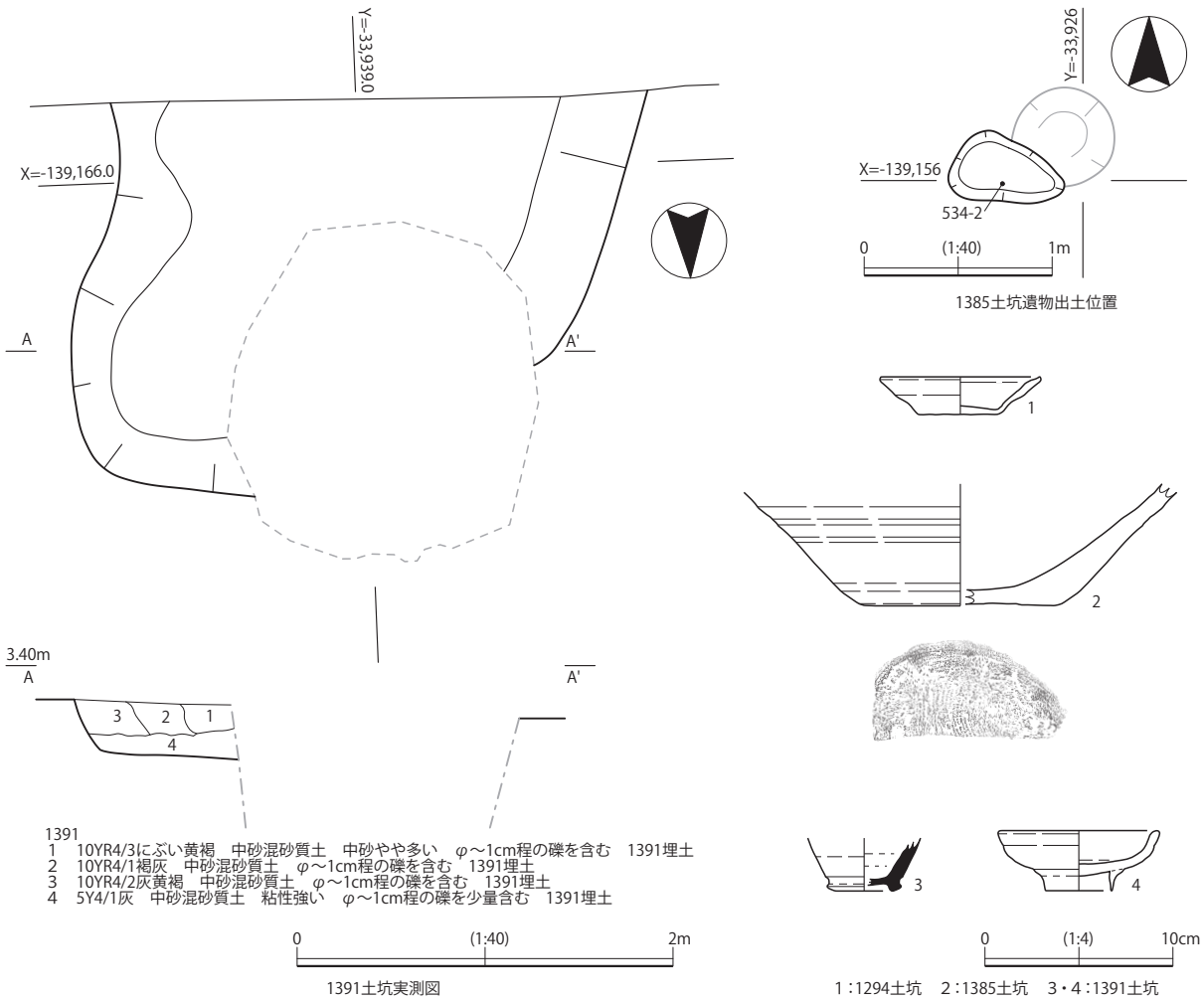


図 534　3 区　第 2 遺構面　1294・1385・1391 土坑平・断面図・出土遺物

ものとみられる。

1385 土坑（図 534、図版 124）　長径 0.60 m、短径 0.38 m、深さ 0.07 mで、いびつな楕円形を呈する。調査区南寄りに位置する。遺物は遺構中央南からの東播系須恵器練鉢（図 534 － 2）等が出土した（図 534：534 － 2）。2 は糸切底で、12 世紀中頃～ 13 世紀初頭頃のものとみられる。

1391 土坑（図 534、図版 124）　長径 2.61 m、深さ 0.59 mの不整形な遺構である。遺構南半は調査区外で、遺構北西部分は第 1 遺構面の 0372 井戸に切られている。調査区南端西寄りに位置する。遺物は須恵器壺（図 534 － 3）、土師器台付皿（図 534 － 4）等が出土した。3 は篠窯系須恵器長頸壺の底部である。4 はかなり先の細い断面形態の底部を張り付ける。平安京Ⅰ期中頃に属す 8 世紀末から 9 世紀初頭頃の遺構とみられる。

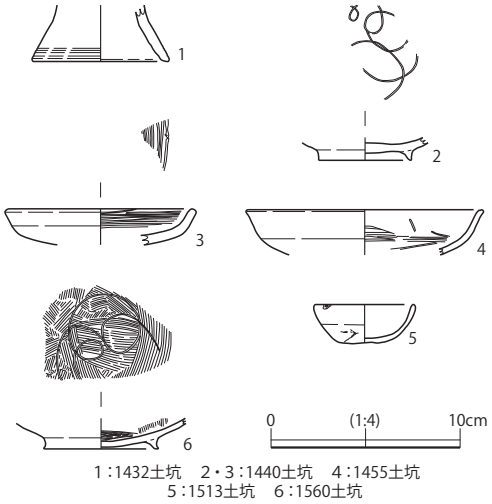


図 535　3 区　第 2 遺構面　1432・1440・1455・1513・1560 土坑　出土遺物

1432 土坑（図 535、図版 124）　最大径 0.17 m、深さ 0.41 mで円形を呈する。調査区南東端に位置する。遺物は土師器脚部片（図 535 － 1）等が出土した。1 は器種不明だが台付皿の脚部である可能性があり、

13 世紀頃のものとみられる。

1440 土坑（図 535、図版 124） 残存長軸 1.17 m、残存短軸 0.78 m、深さ 0.33 mの不整形の土坑である。0581 土坑を含め複数の遺構に肩が切られている。調査区南端付近に位置する。遺物は瓦器碗（図 535 － 2）、瓦器皿（図 535 － 3）等が出土した。2 は大和型である。12 世紀後半ごろの遺構とみられる。

1455 土坑（図 535） 径 0.38 m、深さ 0.04 mで、西側は他の溝に切られている。調査区南西に位置する。遺物は瓦器皿（図 535 － 4）等が出土した。

1476 土坑（図 536・537、図版 33・124） 長軸 6.74 m、短軸 4.72 m、深さ 0.22 mの不整形の遺構である。1 面の遺構により北側の一部を切られている。調査区北部に位置する。遺物は須恵器坏身（図 537 － 1）、須恵器甕（図 537 － 2）、須恵器壺（図 537 － 3・4）、緑釉陶器碗（図 537 － 5 ～ 8）、灰釉陶器皿（図 537 － 9）、灰釉陶器碗（図 537 － 10）、黒色土器碗（図 537 － 11）、土師器碗（図 537 － 12 ～ 17）、土師器把手付小型甕（図 537 － 18）、土師器甕（図 537 － 19 ～ 21）、面戸瓦（図 537 － 22）、土錘（図 537 － 23 ～ 27）、土師器脚部（図 537 － 28）、銅銭（図 537 － 29）等が出土した。4 は長頸壺である。5・9・10 は貼付高台で、7・8 は削出高台である。11 は黒色土器 A 類である。土錘は 23 ～ 26 は灰白色系だが、27 のみ黒褐色である。28 は三足盤の脚部と思われる。29 は皇朝十二銭の一つで 818 年初鋳の富寿神宝で、表を上にして出土した。これらの出土遺物は 8 世紀末～ 9 世紀後半にかけての時期にまとまりをもつ。このことから本遺構は 9 世紀後半の遺構とみられ、

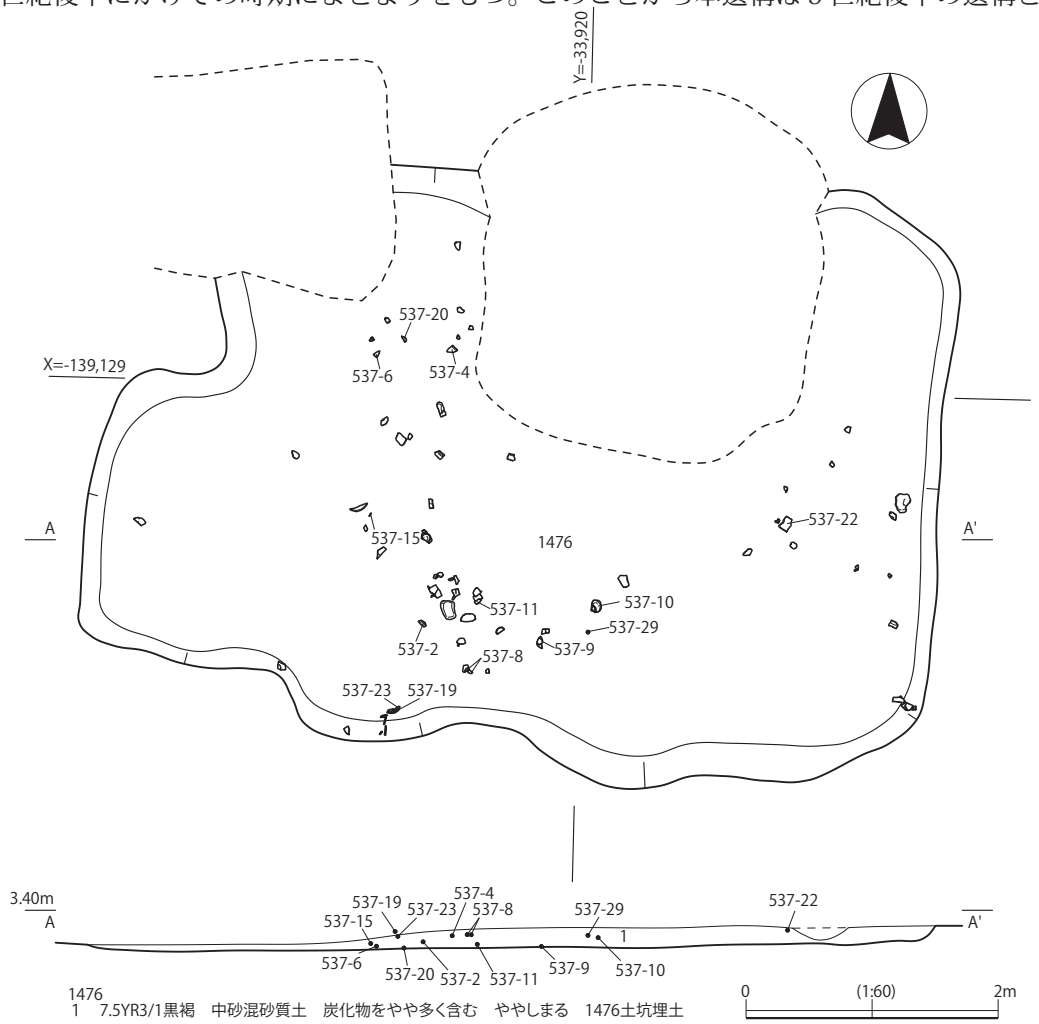


図 536　3 区　第 2 遺構面　1476 土坑平・断面図

非常に浅い遺構で住居等の可能性も考慮していたが、性格は不明である。

1513 土坑（図 535、図版 124）　最大径 0.28 m、深さ 0.20 mで円形を呈する。調査区南端に位置する。遺物は土師器小碗（図 535 － 5）等が出土した。 5は粘土の接合痕が観察できる。

1560 土坑（図 535、図版 124）　最大径 0.20 m、深さ 0.13 mで円形を呈する。調査区南寄りに位置する。遺物は瓦器碗（図 535 － 6）等が出土した。 6は大和型で、12 世紀中頃から後半のものとみられる。

1251 土器群（図 538、図版 33・124）　調査区南端で検出したもので、南北 0.51 m、東西 1.26 mの範囲に土器・瓦・拳大の礫が密集して出土した。遺構の検出に努めたが、埋納遺構等は存在せず、不要となった土器等を一ヶ所にまとめたものと見られる。遺物は青磁碗（図 538 － 1）、国産陶器擂鉢（図 538 － 2）、瓦質土器火鉢（図 538 － 3・4）、国産陶器甕（図 538 － 5）、軒丸瓦（図 538 － 6）、軒平瓦

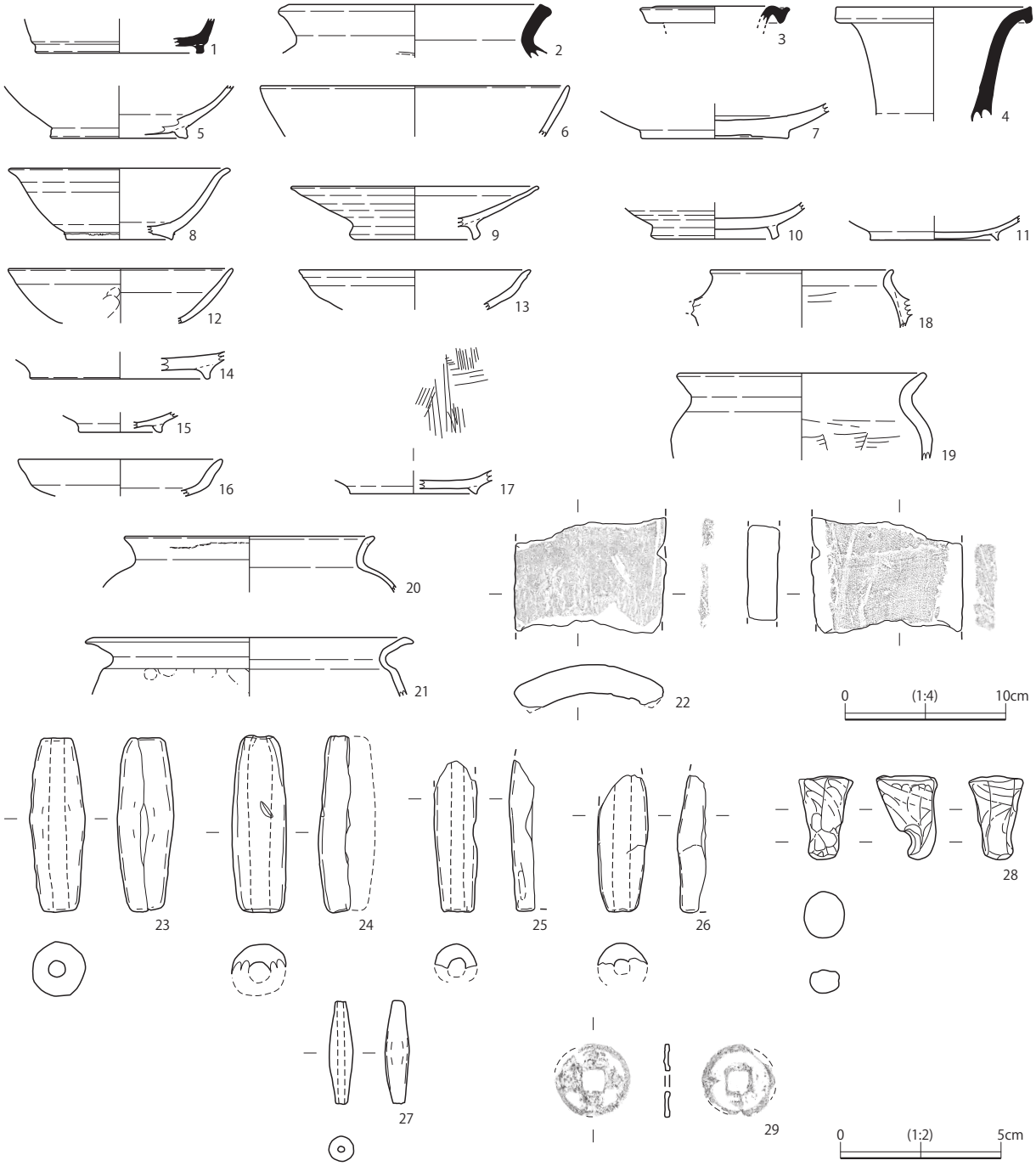


図 537　3 区　第 2 遺構面　1476 土坑　出土遺物

（図 538 － 7）等が出土した。1は外面に蓮華文をもつ。2は備前焼である。3・4はいわゆる奈良火鉢である。5は信楽焼とみられる。6は巴文軒丸瓦である。7は波状文軒平瓦である。これらの遺物はおおよそ 15 世紀頃にまとまりをもち、この土器群の時期もその頃のものとみられる。

0466 落込（図 539、図版 33・124・125） 調査区南西側の広範囲で検出したもので、9.03 × 4.67 m で深さ 0.16 mの隅丸方形状の規模を持つ。落ち込み底面からは多くの遺構を検出している。遺構面機能時の浅い窪み状の落込と見られる。落込のほぼ中央部に土器群を検出したほか（図 539）、その他の位置からも多くの遺物が出土した。出土したのは土師器皿（図 539 － 1 ～ 9）、緑釉陶器碗（図 539 － 10）、灰釉陶器碗（図 539 － 11）、白磁碗（図 539 － 12 ～ 16）、瓦器碗（図 539 － 17・18）、瓦質土器ミニチュア三足釜（図 539 － 19）、瓦質土器羽釜（図 539 － 20）、土師質土器鍋（図 539 － 21）、砥石（図 539 － 22）等である。2・3・4・7・8・9・12・17・18・20・21 は遺構上面、6は遺構底面からの出土である。1・2は内面に煤付着部があり灯明皿と思われる。10 は貼付高台である。13・14 は玉縁口縁を持つ。13 は白磁Ⅱ類、16 は白磁Ⅷ類である。17・18 は大和型である。21 はうけ口状鍋である。22 は長辺側に 4 面とも使用痕がある。和泉砂岩製の中砥用砥石である。これ

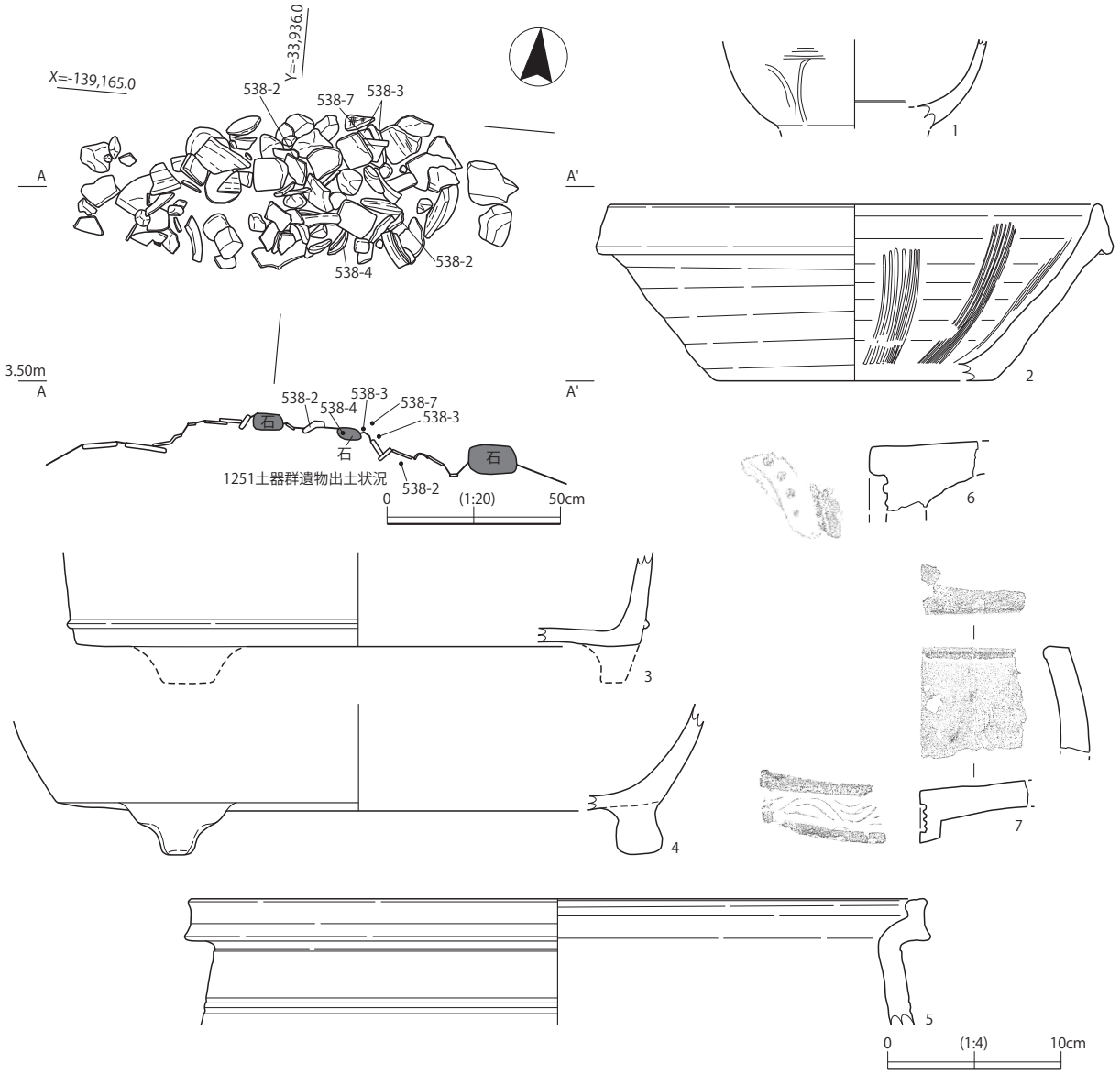


図 538　3区　第 2 遺構面　1251 土器群平・断面図・出土遺物

らの遺物は施釉陶磁器類を除けば 13 ～ 14 世紀にまとまりがあり、この落込はこの時期に埋没したとみられる。

1053 落込（図 540、図版 34・125） 調査区南のやや東寄りで検出したもので長軸 3.07 m、短軸 2.01 m、深さ 0.16 mの不整形な落込である。落込の南端付近で土師器皿を中心とした土器群を検出した（図 540）。図化できたのはいずれも土師器皿（図 540 － 1 ～ 10）である。いずれもいわゆる「て」字状口縁のもので、1・2・3・10 には内面や外面に明瞭に二次被熱部（トーン部分）が観察された。その他のものも被熱部があるものがあり、この土器群のほとんどの土師器皿は灯明皿として用いられた可能性がある。これらの遺物は 11 世紀中頃から末にかけての時期にまとまりをもち、この土器群はこの

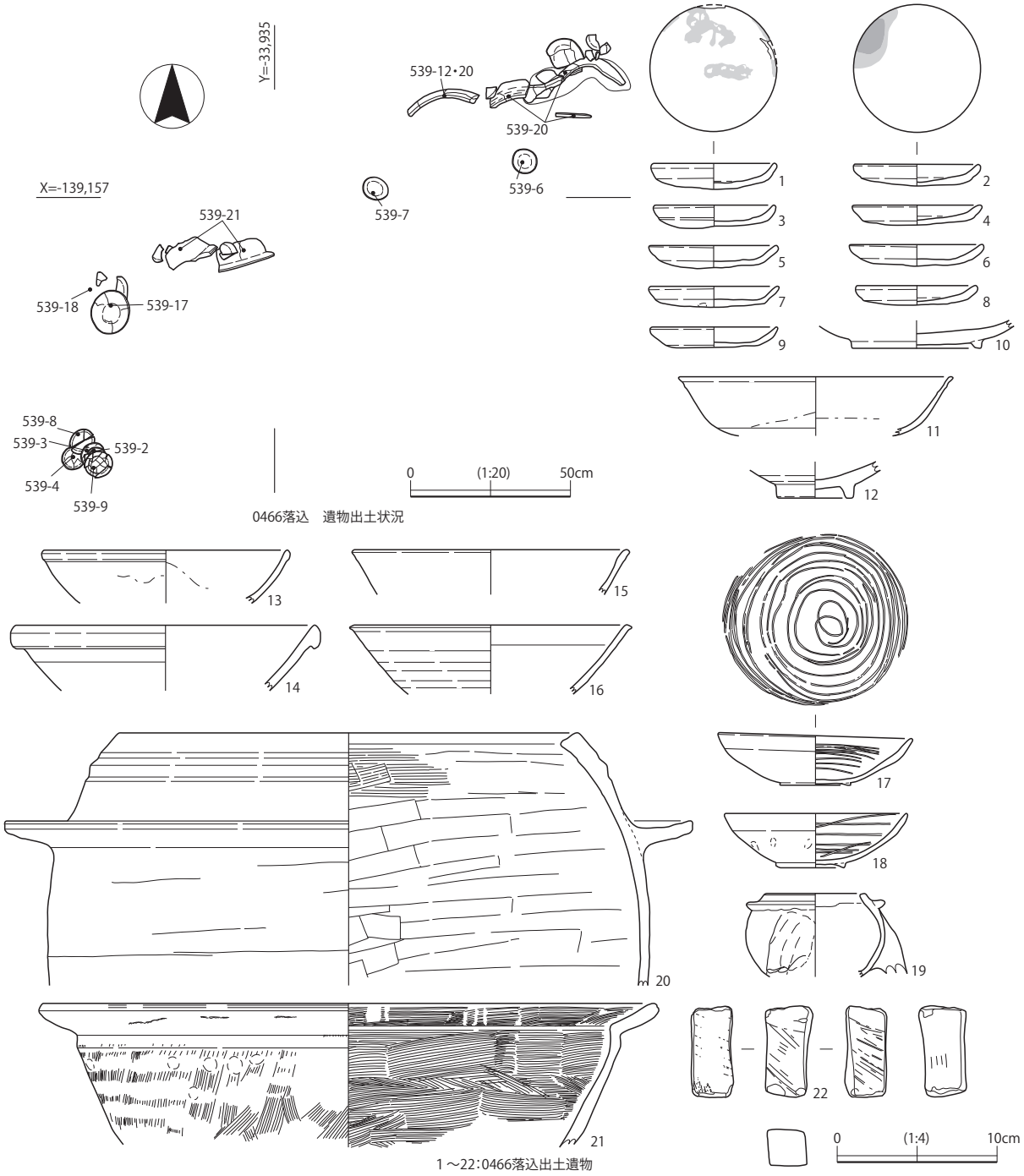


図 539　3 区　第 2 遺構面　466 落込遺物出土状況図・出土遺物

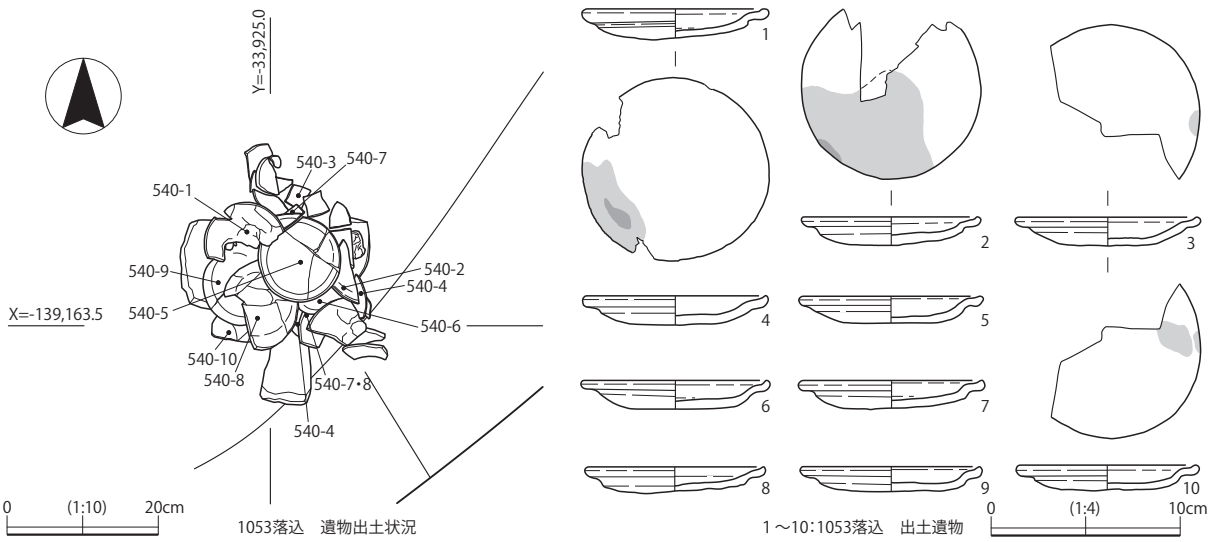


図 540　３区　第２遺構面　1053 落込平面図・出土遺物

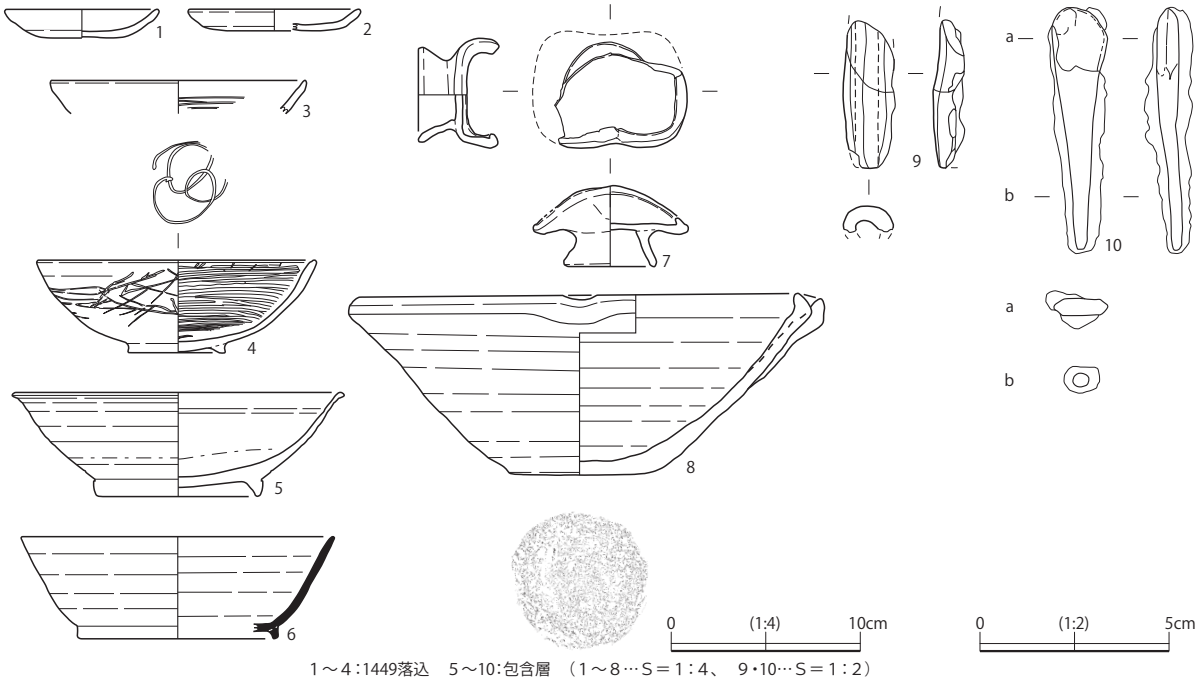


図 541　３区　第２遺構面　1449 落込・包含層　出土遺物

時期のものとみられる。

1449 落込（図 541、図版 125）　調査区南西寄りで検出したもので、残存長軸 2.40 m、短軸 1.47 m、深さ 0.19 mの落込である。遺物は土師器皿（図 541 － 1・2）、瓦器碗（図 541 － 3・4）等が出土した。４は大和型で、12 世紀中ごろのものと見られる。

包含層出土遺物（図 541、図版 125）　このほか包含層出土遺物として灰釉陶器碗（図 541 － 5）、須恵器坏身（図 541 － 6）、土師器台付耳皿（図 541 － 7）、東播系須恵器片口鉢（図 541 － 8）、土錘（図 541 － 9）、鉄鏃（図 541 － 10）等が出土した。６は９世紀のものとみられる。７は平安時代のものであろう。８は底部に糸切痕がある。12 世紀末から 13 世紀初頭のものとみられる。

第 2.5 遺構面（図 542）

この遺構面は、第２遺構面と同じ遺構面であるが、その中で調査区南半の一部において落込内等を中

心に遺構が上面と下面の２面にわたって存在するような箇所が見受けられたため、便宜上第 2.5 遺構面と仮称したものである。この面に便宜上属させた遺構は、井戸３基、土坑 57 基、柱穴 10 基（うち復元できた杭列２基）を検出した（図 542）。主な遺構の詳細は次のとおりである。

杭列３（図 543） 長さ 2.01 mで、柱穴３基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は 0.94 ～ 1.04 mで、柱穴掘形は長径 0.28 ～ 0.37 mの円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 3.000 ～ 3.075 mであった。調査区の中央南寄りに位置する。

杭列４（図 543） 長辺 5.41 m×短辺 3.23 mで、柱穴７基からなる。東西方向の杭列と南北方向の杭列が、北東角で柱穴を共有している。柱穴間隔は長辺 1.28 ～ 1.46 m、短辺 1.61 ～ 1.62 mで、柱穴掘形は長径 0.22 ～ 0.34 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 2.853 ～ 3.047 mであった。

図 542　３区　第 2.5 遺構面　平面図（南半部）

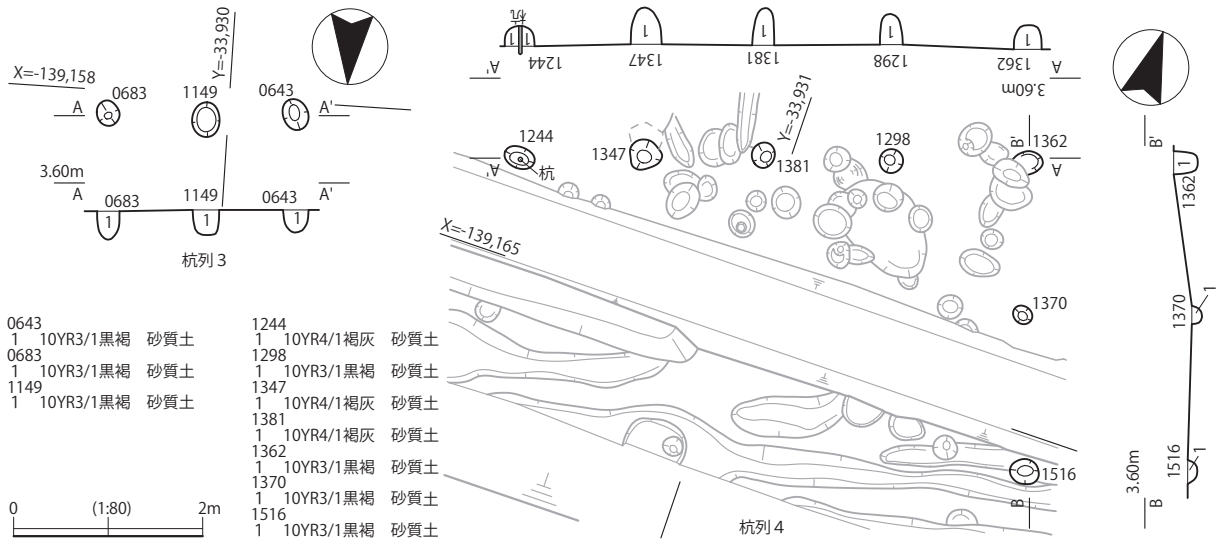
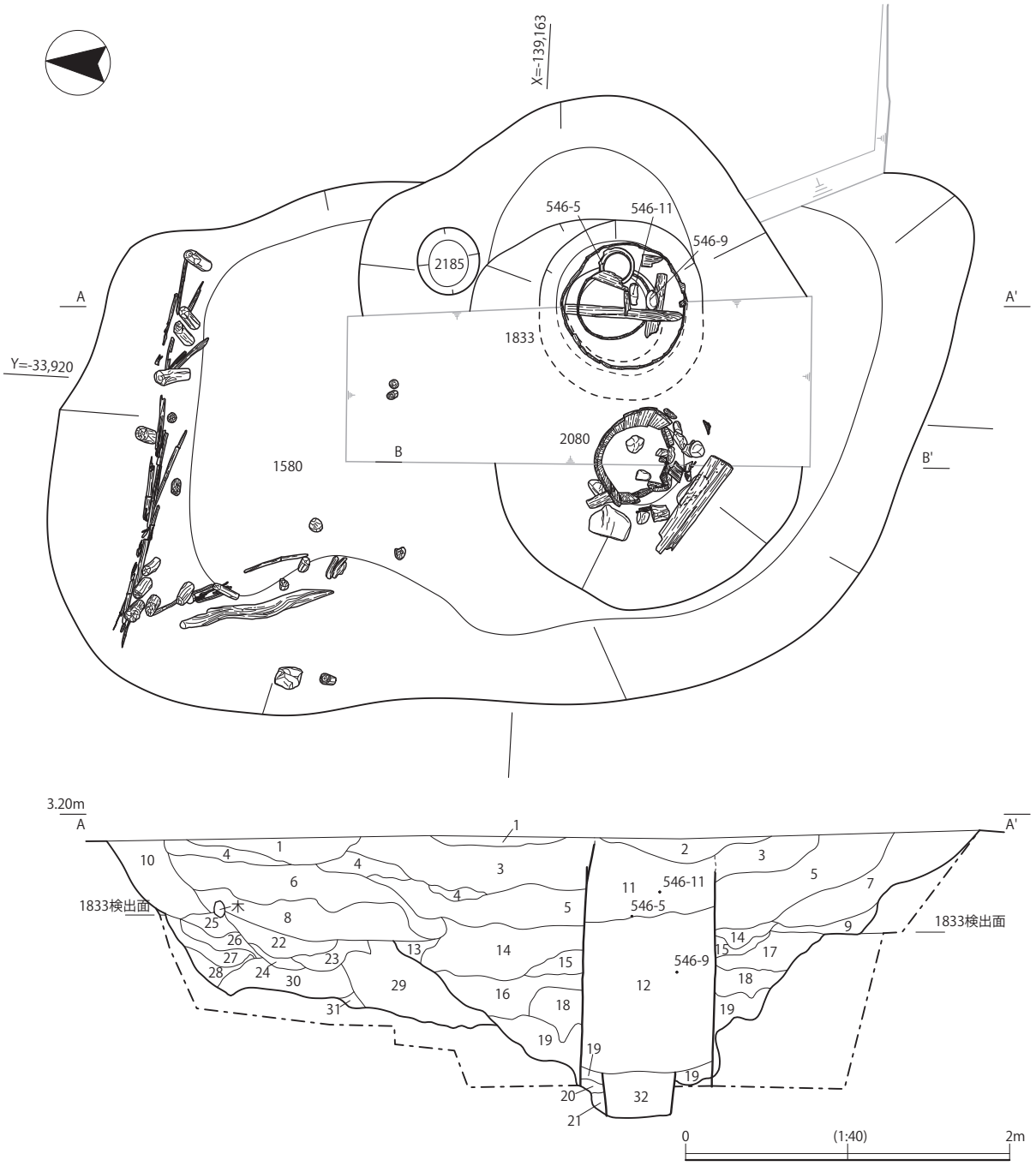


図 543　３区　第 2.5 遺構面　杭列３・４平・断面図



1580・1833
1　2.5Y4/2暗灰黄　中砂混砂質土　1833埋土
2　5Y4/1灰　中砂混シルト　1833埋土
3　10Y5/1灰　砂質土　φ～2cmの礫が多量に混じる　1833埋土
4　7.5Y4/1灰　中砂混砂質土　1833裏込土
5　5Y5/1灰　砂質土　φ～3cmの礫が混じる　1833裏込土
6　7.5Y5/1灰　中砂混シルト　φ～2cm程の礫が混じる　1833裏込土
7　5Y2/1黒　粘質土　1833裏込土
8　10Y4/1灰　細砂混シルト質土　一部に5Y3/1オリーブ黒粘質土がブロックで混じる　1833裏込土
9　7.5Y4/1灰　中砂混砂質土　粘性やや強い　10GY5/1緑灰砂質土ブロック混じる　1833裏込土
10　5Y3/2オリーブ黒　中砂混砂質土　1580埋土
11　7.5Y4/1灰　中砂混シルト　1833井筒内埋土
12　5Y3/1オリーブ黒　粘質土　一部に中砂が混じる　1833井筒内埋土
13　2.5Y7/6明黄褐オリーブ黒　中砂　5Y4/1灰砂質土がブロックで混じる　1833裏込土
14　5Y4/1灰　砂質土　粘性強い　1833裏込土
15　2.5Y6/4にぶい黄　中砂　7.5Y4/1灰粘土・粘質土がブロックで混じる　1833裏込土
16　7.5Y4/1灰　砂質土　粘性は14層よりやや強い　5Y3/1オリーブ黒粘土がブロックで混じる　1833裏込土
17　7.5GY5/1緑灰　粘質土　一部細砂混　10Y3/1オリーブ黒粘質土がブロックで混じる　1833裏込土
18　2.5Y6/2灰黄　中砂　5Y3/1オリーブ黒粘土・7.5Y4/1灰粘質土がブロックで混じる　1833裏込土
19　2.5GY4/1暗オリーブ灰　砂質土　粘性は16層より強い　5Y3/1オリーブ黒粘土がブロックで混じる　1833裏込土
20　5Y5/1灰　中砂　1833裏込土
21　7.5Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土　1833裏込土
22　5Y4/1灰　粘質土と、5Y6/3オリーブ黄中砂のブロック　1580埋土
23　5Y7/3浅黄　細砂　1580埋土
24　5Y4/1灰　中砂混シルト　1580埋土
25　7.5Y3/2オリーブ黒　細砂混粘質土　1580埋土
26　N1.5/0黒　中砂混粘質土　1580埋土
27　5GY5/1オリーブ灰　中砂混粘質土　1580埋土
28　2.5Y6/4にぶい黄　中砂　一部細砂混　1580埋土
29　7.5Y4/1灰　中砂混シルトと、7.5Y5/2灰オリーブ中砂のブロック　1580埋土
30　7.5Y4/1灰　中砂混シルト　一部シルトがブロック状になる　1580埋土
31　N7/0灰白　シルト　1580埋土
32　7.5Y4/1灰　中砂混シルト　1833井筒内埋土

図 544　3 区　第 2.5 遺構面　1580 土坑・1833 井戸平・断面図

調査区の南端に位置する。

1580 土坑・1833 井戸・2080 井戸（図 544 ～ 547、図版 34・125・126）　これら３基の遺構は調査区南東端のほぼ同一の位置で検出したもので、検出当初は 1580 土坑の掘形としてのみ認識し、調査進行中に 1833 井戸・2080 井戸の井戸枠をそれぞれ検出し、その後の精査でそれぞれの掘形を検出したものである。1833 井戸は断面観察により 1580 井戸より後に掘削されていることを確認した。一方

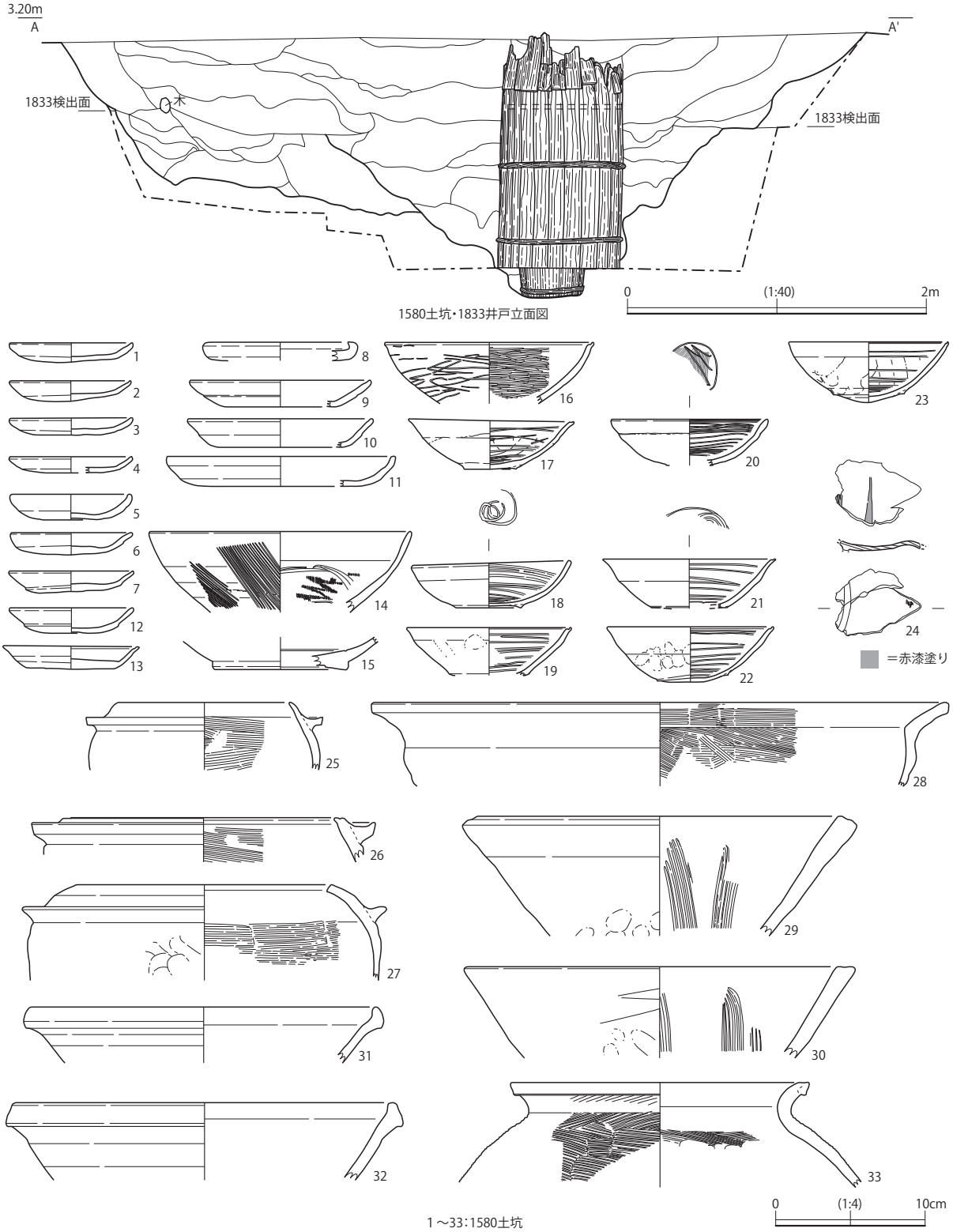


図 545　３区　第 2.5 遺構面　1580 土坑・1833 井戸断面図・出土遺物

1833 井戸を精査するためトレンチを設定して掘削中に 2080 井戸を検出したため、両者の切り合いは不明確である。ただ、2080 井戸は上部構造が既に取り払われている一方で 2080 井戸はほぼ完全に構成材が遺存していたため、1580 土坑→ 2080 井戸→ 1833 井戸の順で築造されたとみられる。

1580 土坑は長軸 5.96 m、短軸 3.17 m、深さ 1.02 mで楕円形を呈する。土坑の北側に木杭と竹や細い丸太の横木を組み合わせたしがらみ状の木組みがある。木組みは東西 2.31 m×南北 1.79 mの長方形状に復元できる。1580 土坑出土として取り上げた遺物は、土師器皿（図 545 － 1 ～ 11）、白磁皿（図 545 － 13）、青磁碗（図 545 － 14）、緑釉陶器碗（図 545 － 15）、瓦器皿（図 545 － 12）、瓦器碗（図 545 － 16 ～ 23）、漆器碗（図 545 － 24）、土師器鍋（図 545 － 28）、瓦質土器羽釜（図 545 － 25 ～ 27）、瓦質土器擂鉢（図 545 － 29・30）、東播系須恵器練鉢（図 545 － 31・32）、須恵質土器甕（図 545 － 33）等がある。ただし、上記の調査進行であった関係上、これらの土器の中には 1580 土坑使

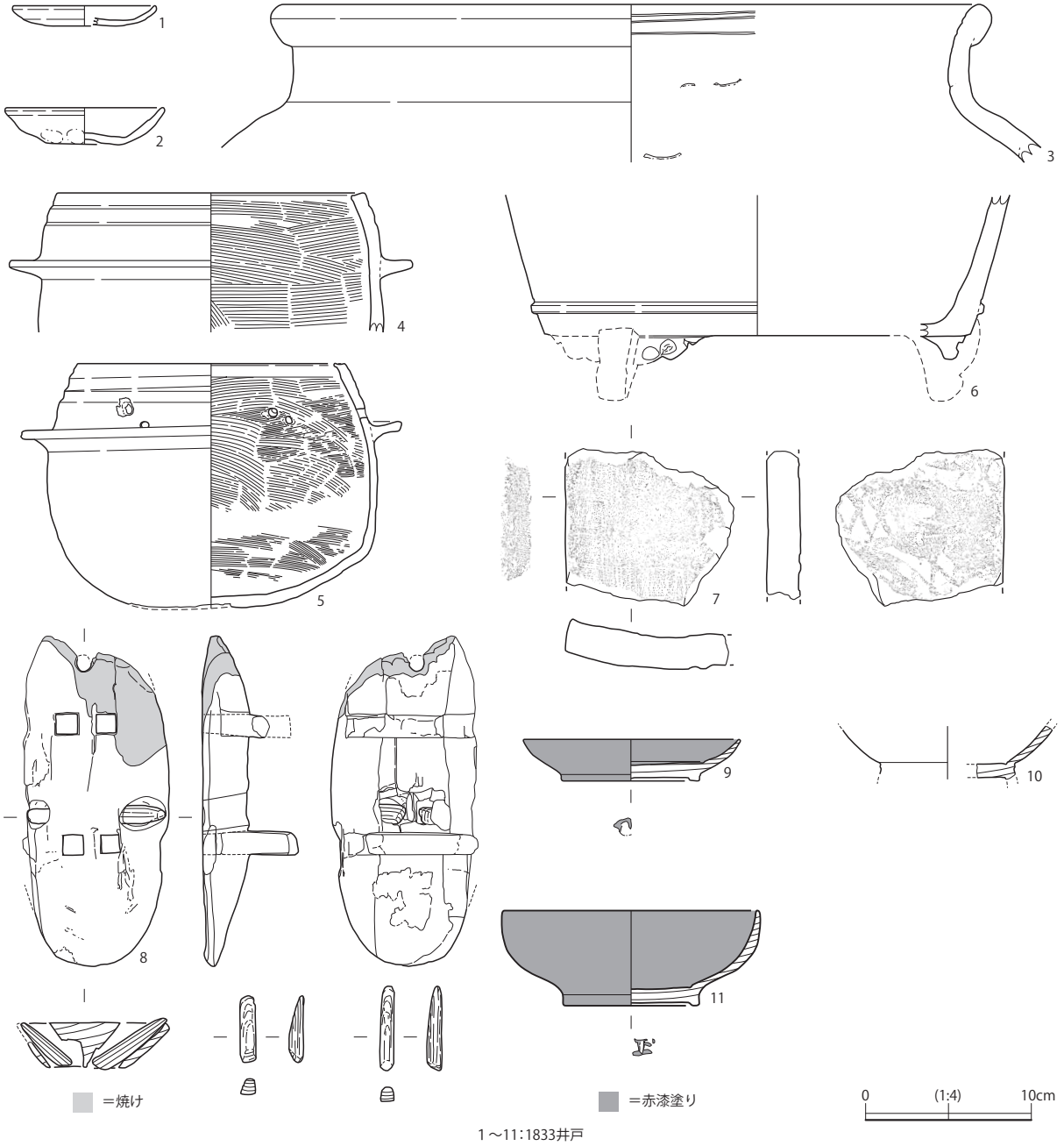


図 546　3 区　第 2.5 遺構面　1833 井戸　出土遺物

用・廃絶時の遺物の他に、1833 井戸設置時、2080 井戸設置・廃絶時のそれぞれの遺物が含まれている可能性がある。8はCタイプである。13 は口禿白磁皿である。14 は同安窯系青磁で内外面全体に施釉貫入がある。16 ～ 23 は 18 を除き全て大和型である。24 は内外面とも黒漆塗りで、両面とも赤漆により文様が施されている。25 は外面体部に煤が付着する。25・27 は三足釜の可能性がある。28 は外面全体に煤が付着する。32 は片口練鉢と見られる。33 は東播系須恵器の甕である。これらの遺物は 13 世紀中ごろから 14 世紀にかけてにまとまりを持ち、遺構の時期を示すと見られる。

1833 井戸は残存径 2.76 m、残存深 1.73 mで不整円形を呈する。1580 土坑が埋没した段階で掘削されている。井戸内には径 0.72 m、高さ 1.18 mの円形縦板組枠が遺存していて、計三カ所を竹紐で結桶状に縛られていた。その上部はさらに外側が縦板で円形に囲われており、地上部施設の基部が遺存していたものと見られる。円形縦板組枠の下部には、径 0.39 m、高さ 0.23 mの、縦板を円形に組み二カ所を竹紐で結桶状に縛った構造の集水施設が設置されていた。集水施設の板材のうち南側部分のものは掘形に張り付ける形で設置されており、集水施設の裏込め土は北側部分にのみ見られた。1833 井戸の出土遺物として取り上げた遺物はいずれも円形縦板組枠内部からの出土で、土師器皿（図 546 － 1 ・ 2）、国産陶器甕（図 546 － 3）、瓦質土器羽釜（図 546 － 4 ・ 5）、瓦質土器火鉢（図 546 － 6）、平瓦（図 546 － 7）、木製下駄（図 546 － 8）、漆器皿（図 546 － 9）、漆器碗（図 546 － 10）等があった。3は備前焼である。5は 11 層からの出土で、口縁部付近の相対する二カ所に計四孔の孔が開けられており、釣瓶として使用されていたものと見られる。14 世紀中ごろのものと見られる。6はいわゆる奈良火鉢である。8は差し込み式の歯をもち、鼻緒取り付け部のうち指で挟む部分を除く二カ所に別材が挿入されている。この別材は鼻緒の取り付け方法に関連するとみられる。爪先側が焼損している。9・11 は内外面赤漆塗りで、底部は黒漆塗りに赤漆の漆書がある。9は 12 層から、11 は 11 層からの出土である。10 は内外面とも黒漆塗りである。これらの遺物は 14 世紀中ごろから 15・16 世紀にかけてのものであり、井戸の廃絶時期は室町時代中ごろであろう。

2080 井戸は 1580 土坑底部付近で検出し、残存径 2.01 m、残存深 0.98 mで円

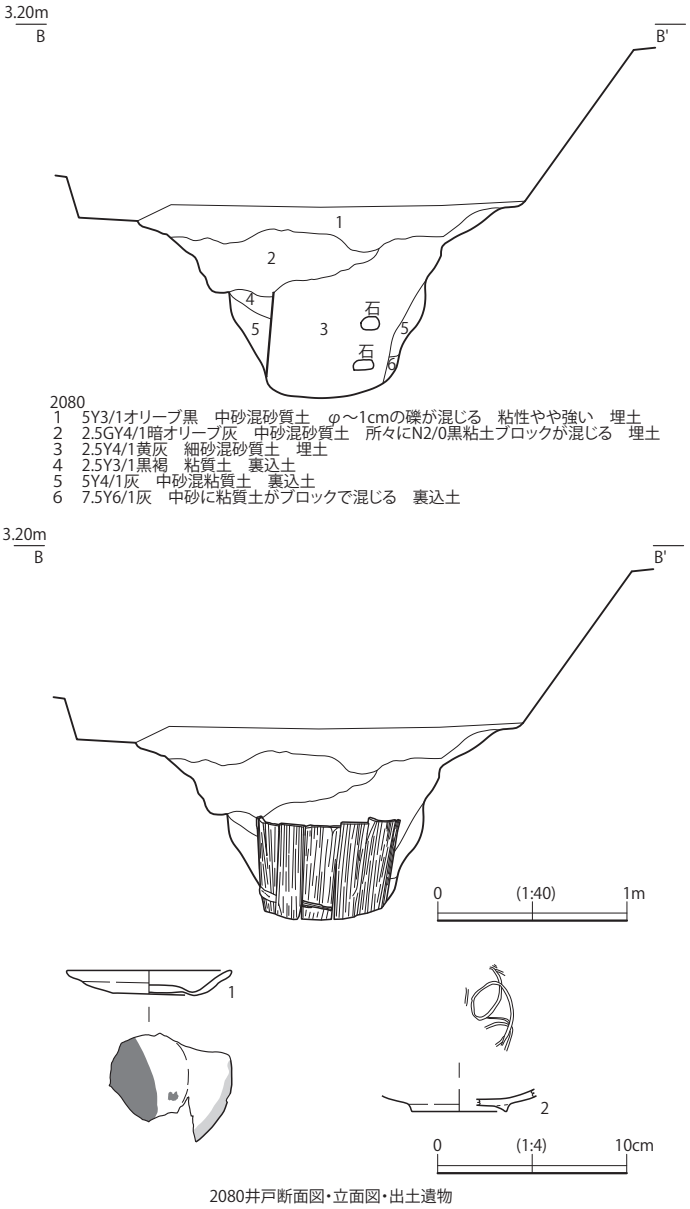
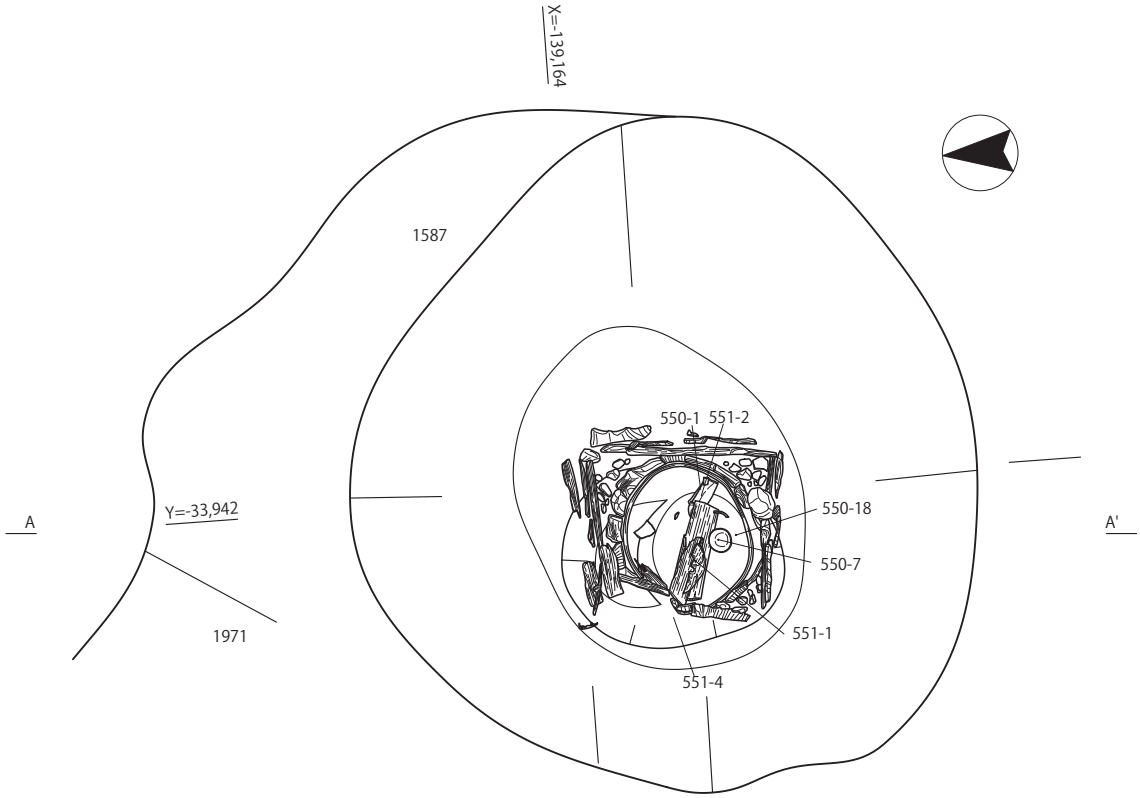
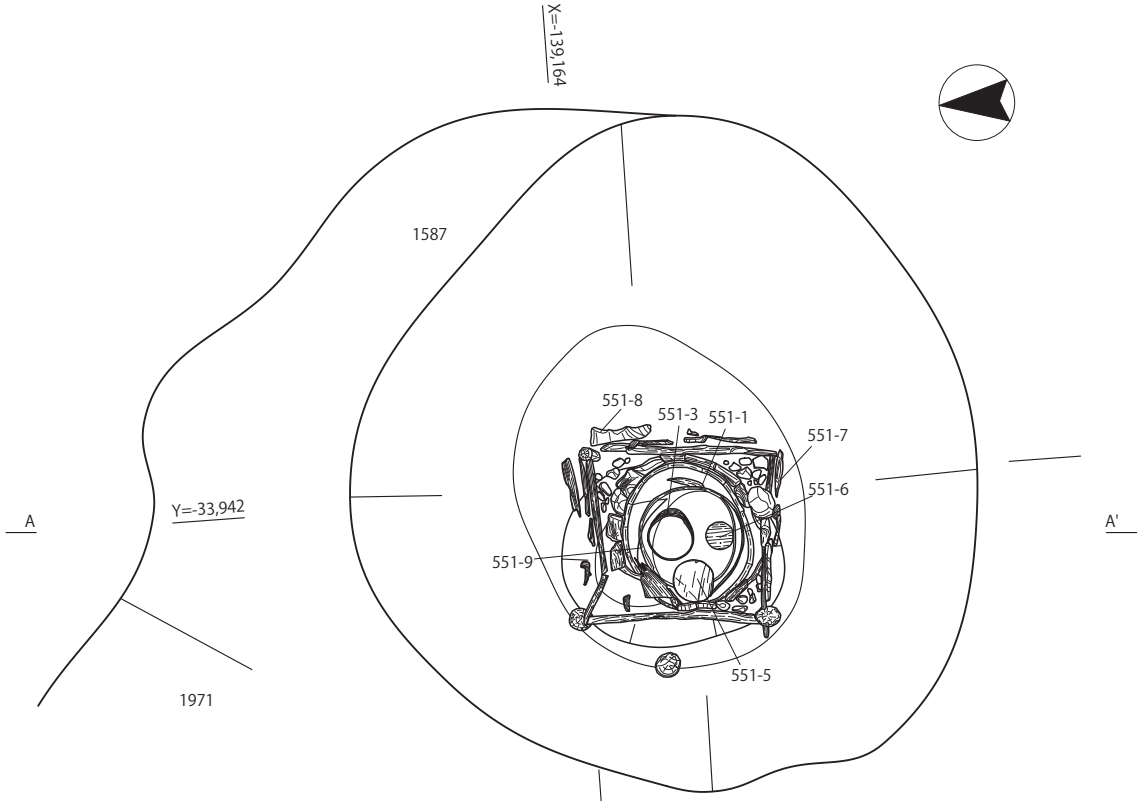


図 547　3 区　第 2.5 遺構面　2080 井戸断面図・出土遺物



1587井戸上・中層平面図



1587井戸下層平面図

0 (1:30) 1m

図 548　3 区　第 2.5 遺構面　1587 井戸平面図

形を呈する。上部構造は遺存しておらず、板材が横位で遺存したのみで構造は不明である。縦板を円形に組み、下部一カ所を竹紐で結桶状に縛った構造の集水施設が遺存していた。施設の裏込め土には拳大～人頭大の礫が、集水施設の縦板材が崩壊した部分にのみ見られた。出土遺物は土師器皿（図 547 －１）、瓦器碗（図 547 －２）等があった。１は集水施設内からの出土で、外面の底部に煤が付着し、内面全体と外面口縁部に酸化した被熱部が観察され灯明皿とみられる。２は大和型である。井戸の廃絶時期は出土遺物から 14 世紀後半から 15 世紀中ごろの間と見られる。

1587 井戸（図 548 ～ 551、図版 34・126・127） 掘形の最大径 2.68 m、検出できた深さ 1.70 mでほぼ円形を呈する。調査区南西端に位置する。上部構造は隅柱を置きそこにほぞ孔を用いて横桟木を設置し、建築部材を含む縦板を外側に置いた一辺 0.62 mの方形縦板組横桟留枠である。その下部構造として縦板を円形に組んだ円形縦板組枠が二段設置されていた。上部の円形枠は径 0.58 m、高さ 0.39 m、下部の円形枠は径 0.47 m、高さ 0.42 mで二カ所を竹紐で結桶状に縛っていた。その下部に集水施設として底部のない曲物枠が設置されていた。出土遺物のうち土器等は土師器皿（図 550 － 1 ～ 7）、土師器ミニチュア壺（図 550 － 8）、瓦器碗（図 550 － 9 ・10）、須恵質土器練鉢（図 550 － 11・12）、瓦質土器擂鉢（図 550 － 13・14）、瓦質土器火鉢（図 550 － 15・16）、瓦質土器羽釜（図 550 － 17

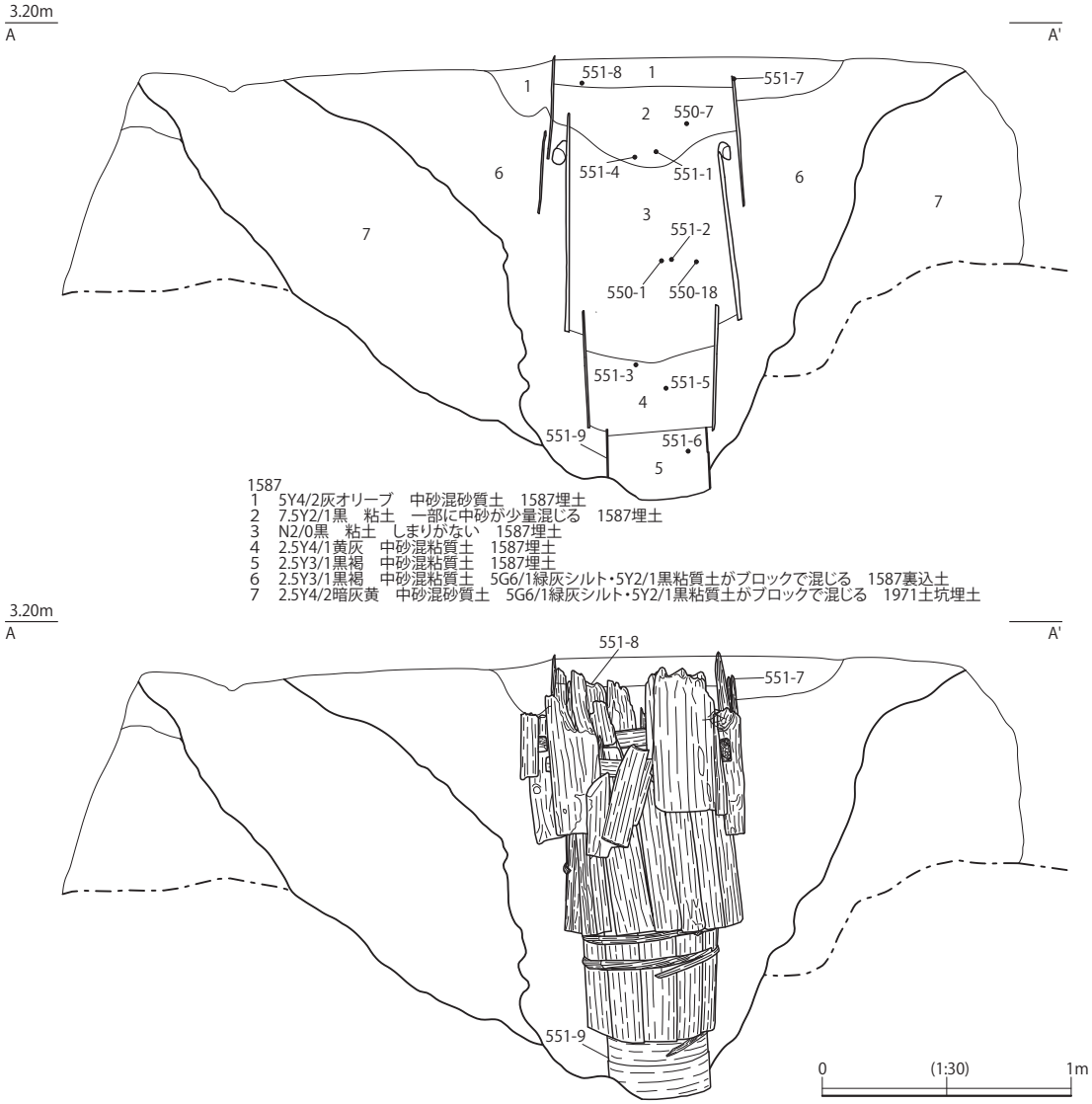


図 549　3 区　第 2.5 遺構面　1587 井戸断面図

～20)、平瓦（図550－21）等があった。１は３層から、７は２層からの出土である。６は灯明皿である。９・10は大和型である。11は東播系須恵器片口鉢である。12は東播系須恵器片口鉢とみられる。15は円形もしくは三葉文様の透かしを持つもので、内面全体にこげつき・煤がみられる。また、木器類としては、漆器碗（図551－１・２）、曲物桶（図551－３）、曲物桶底部（図551－４～６）、加工井戸枠部材（図551－７・８）、井戸枠曲物（図551－９）を図化した。１は内外面とも黒漆塗りで口縁部外面に一条の沈線がある。２は内外面黒漆塗りで、外面に赤漆による文様が描かれる。３は４層より出土した。４は２層からの出土である。５は４層から出土した。３と５は出土位置が近接して

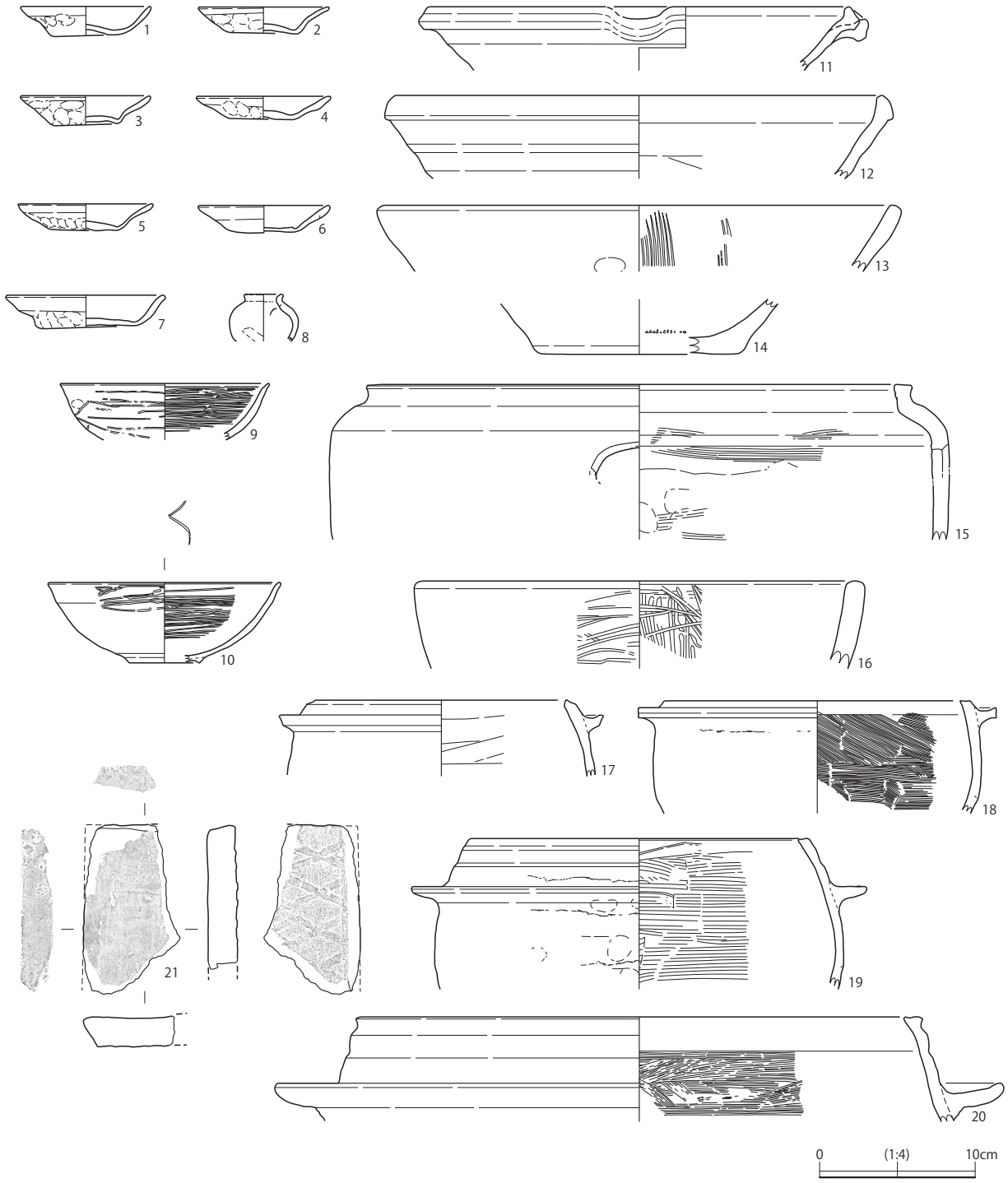


図550　３区　第2.5遺構面　1587井戸出土遺物（１）

おり、同一個体の可能性がある。６は井戸内最下層の５層から出土した。７・８は下部に井戸枠としては不要の円孔が各５カ所穿たれており、建築部材の転用と見られる。９は集水施設として使用されていた。出土遺物は 13 世紀～ 14 世紀にかけてにまとまりを持ち、最も新しいもので 15 世紀初頭と見られるものが含まれることから、そのころに廃絶されたものと見られる。築造時期は、この井戸に切られている後述する 1971 土坑から 13 世紀後半～ 14 世紀初頭の遺物が出土しており、その時期以降であろう。

1321 土坑（図 552、図版 34・127） 最大径 4.46 m、深さ 0.34 mで不整円形を呈する。土坑上面にも

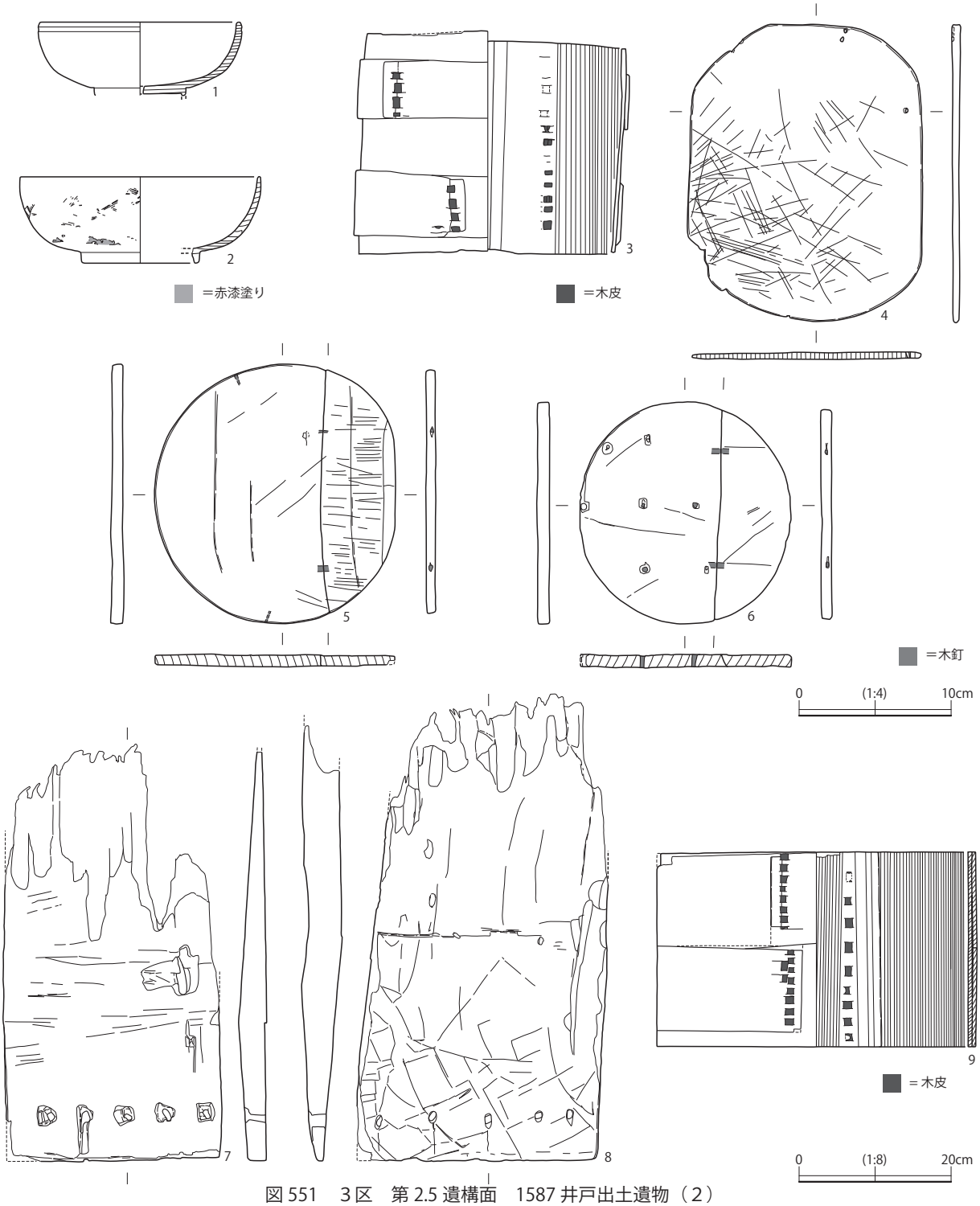
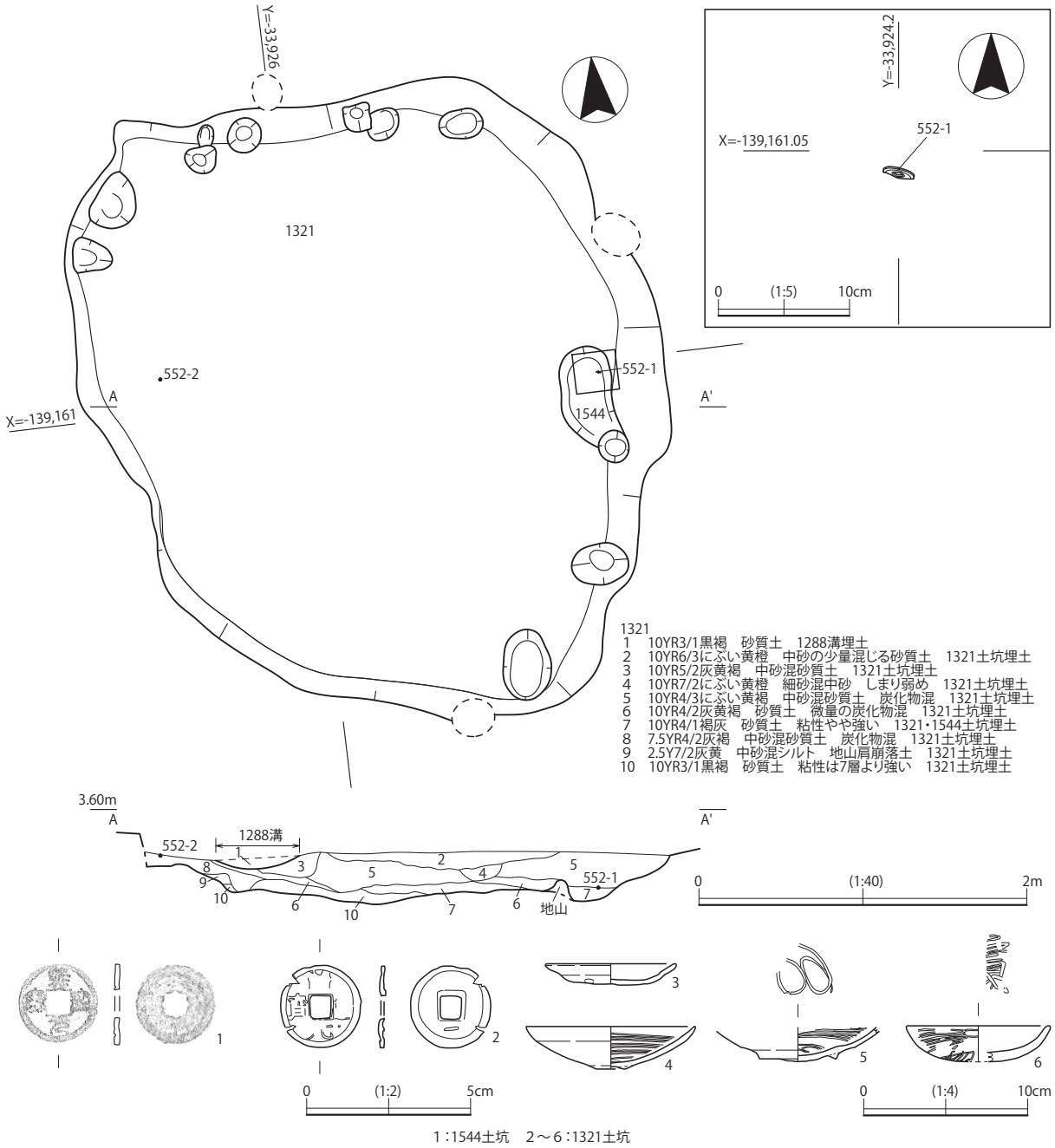


図 551　３区　第 2.5 遺構面　1587 井戸出土遺物（２）



1：1544土坑　2～6：1321土坑

図 552　3 区　第 2.5 遺構面　1321・1544 土坑平・断面図・出土遺物

下部にも複数の遺構が存在する落ち込み状の土坑である。調査区南端やや東寄りに位置する。銅銭（図 552 － 2）、土師器皿（図 552 － 3）、瓦器碗（図 552 － 4・5）、瓦器皿（図 552 － 6）等が出土した。２は銭文が一部不鮮明だが、開元通宝（唐 621 年初鋳）と見られる。背面下部に「一」と読める銭文がある。表面を上に向けて出土した。４・５は大和型である。出土遺物から 13 世紀の遺構と見られる。

1544 土坑（図 552、図版 34・127）　残存長軸 0.59 m、短軸 0.31 m、深さ 0.05 mで不整楕円形を呈する。1321 土坑の底部に存する。遺構南端は他の土坑に切られている。遺物は遺構上面より銅銭（図 552 － 1）が出土した。１は熙寧元寶（北宋 1068 年初鋳）である。銭文の字体は篆書で、背面は無文である。銭文につぶれが見られ銅質も黄銅色に近い色調を示すもので、模鋳銭と見られる。

1971 土坑（図 553、図版 127）　残存長軸 5.98 m、残存短軸 5.29 m、深さ 1.32 mの不整形の遺構である。遺構東側を 1587 井戸に切られる。遺構西側は調査区側溝で肩の一部を失っている。遺構南側は

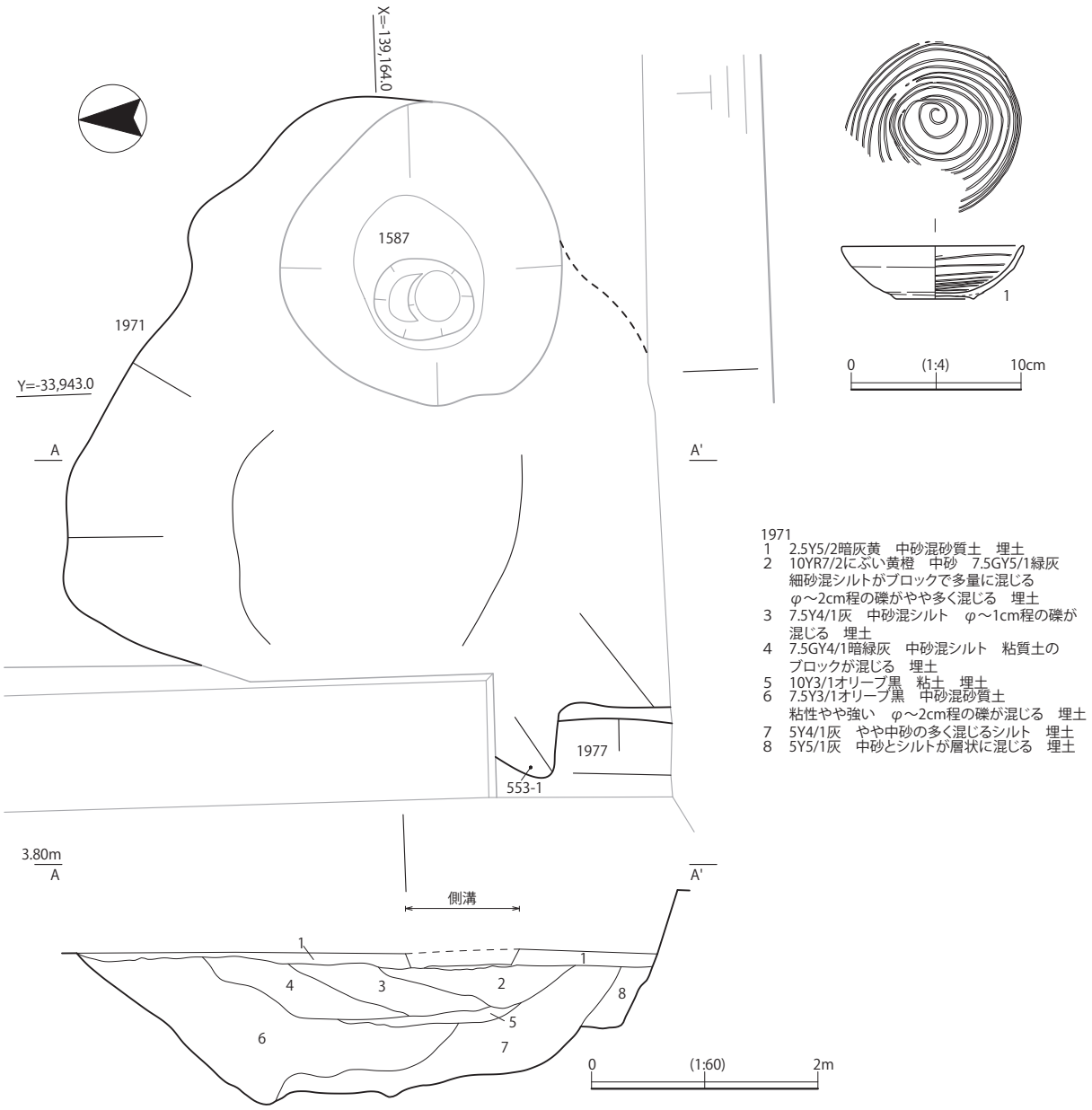


図 553　3 区　第 2.5 遺構面　1971 土坑平・断面図・出土遺物

調査区外である。出土遺物のうち遺構西端の上面付近から出土した瓦器碗（図 553 － 1 ）を図化した。1 は大和型で、13 世紀後半～ 14 世紀初頭のものと見られる。

3．第 3 遺構面（図 554、図版 34）

第 3 遺構面は、基本層序における 3-1 面に対応する遺構面である。第 3 遺構面の調査で確認した遺構は、飛鳥時代から鎌倉時代にかけてのもので、井戸 3 基、河川 1 本、溝 4 本、土坑 374 基、柱穴 11 基を検出した（図 554）。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 2.905 m、北西隅 T.P. ＋ 2.978 m、南東隅 T.P. ＋ 3.114 m、南西隅 T.P. ＋ 3.005 mであった。調査区中央に東から西へと河川が走り、それを境に南半が集落として利用されていた。北半にも遺構は存在するが、その分布は南半と比較するとやや希薄であった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

1577 河川（図 555 ～ 557、図版 35・127）　最大幅 20.09 m、検出した長さ 37.11 m、深さ 0.53 m で、調査区のほぼ中央を東から西へ向かって流れる河川（流路）である。遺構上面には別の遺構が少数

存在した。第３遺構面に属する遺構として調査したが、堆積状況や出土遺物から次の第４遺構面存続時から継続して存在し、第３遺構面存続時に完全に埋没した流路の可能性がある。遺物は須恵器坏身（図556 － 1 ～ 3）、須恵器高坏（図 556 － 4・5）、須恵器平瓶（図 556 － 6）、須恵器甕（図 556 － 7）、土師器高坏（図 556 － 8 ～ 11）、丸瓦（図 556 － 12）等が出土した。１～３は TK217 型式期のもので、３は底部外面にヘラ書き記号がある。５は７世紀のものである。

1582 井戸（図 558・559、図版 35・127） 掘形の最大径 1.82 m、深さ 1.27 mで不整円形を呈する。調査区南側やや東寄りに位置する。直径 0.36 mの曲物を高さ 0.35 mに二段に積み重ね、その上部には隅柱を持つ一辺 0.55 mの方形板枠構造が存在したとみられる。上部の方形枠は材が抜き取られており、横板構造か縦板構造かは不明である。遺物は土師器皿（図 559 － 1 ～ 4）、瓦器碗（図 559 － 5）、黒色土器碗（図 559 － 6）、国産陶器甕（図 559 － 7）、須恵質土器練鉢（図 559 － 8）、瓦質土器羽

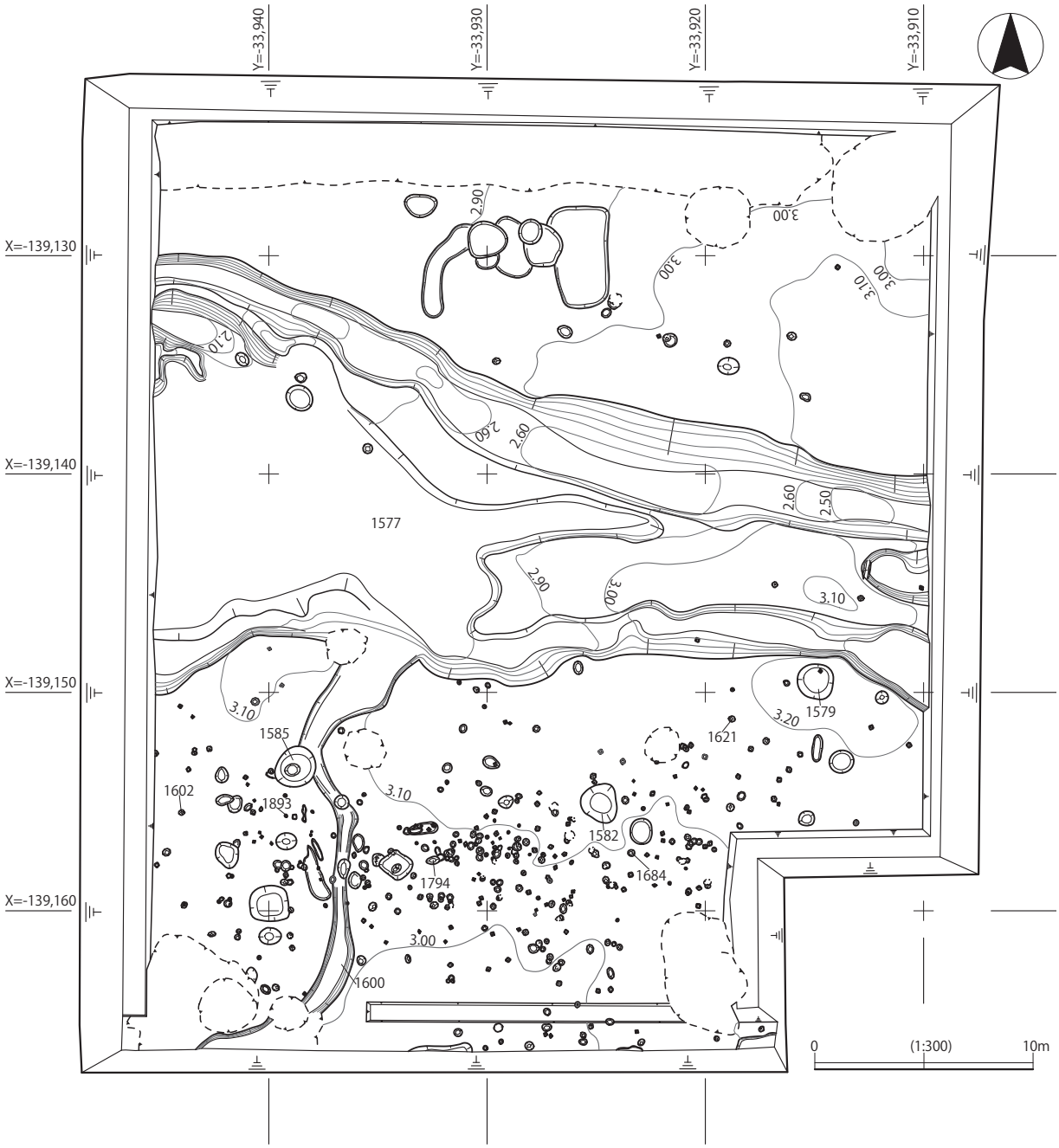


図 554　３区　第３遺構面　平面図

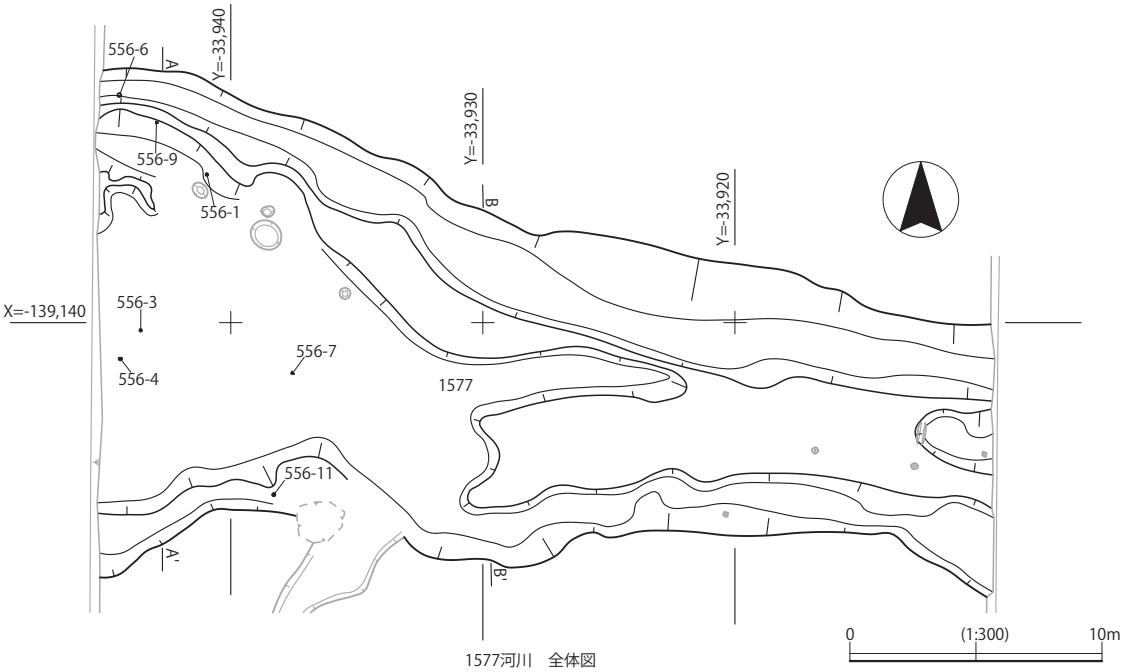


図 555　3 区　第 3 遺構面　1577 河川　平面図

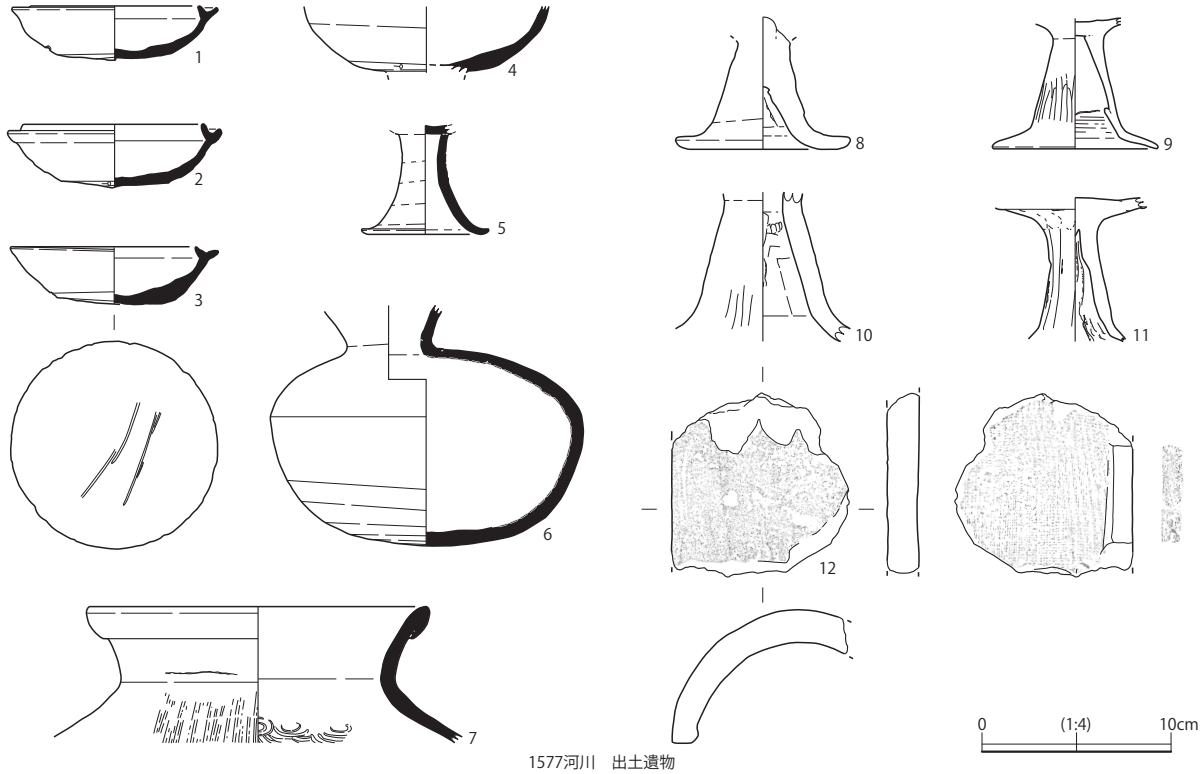
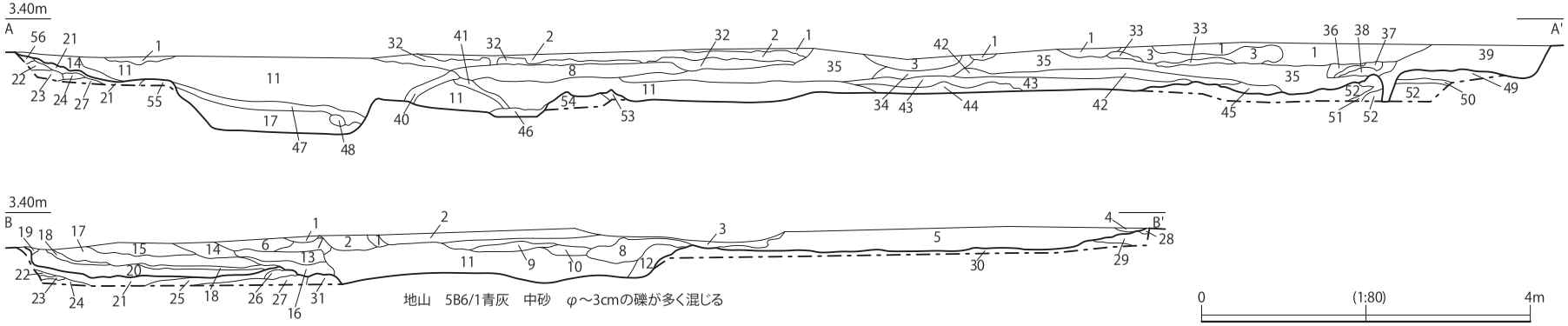


図 556　3 区　第 3 遺構面　1577 河川　出土遺物

釜（図 559 － 9 ～ 11）、木製曲物桶（図 559 － 12）、砥石（図 559 － 13）等が出土した。5 は大和型とみられる。6 は黒色土器 B 類である。9 は三足羽釜である。13 は仕上げ砥石である。出土遺物の多くは 12 ～ 13 世紀頃にその中心があり、遺構もその時期のものとみられる。

1585 井戸（図 558・559、図版 35・127）　掘形の直径 1.88 m、深さ 1.29 mで円形を呈する。調査区南側西寄りに位置する。残存していた井戸枠は曲物を 2 段に積み上げたもので、内法直径 0.45 m、高さ 0.43 mであった。曲物設置時の支えとして板材を曲物どうしの間に縦方向に挿入していた。曲物の



1577
1　5Y6/1灰　細砂混シルト　1577堆積土
2　10YR7/2にぶい黄橙　中砂　1577堆積土
3　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂　φ～3cmの礫が多量に混じる　（1169河川-９層）　1577堆積土
4　2.5Y7/2灰黄　粗砂　一部シルト混じる　1577堆積土
5　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂混シルト　1577堆積土
6　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂　φ～2cmの礫が混じる　1577堆積土
7　5Y6/1灰　にぶい黄橙　中砂　1577堆積土
8　2.5Y7/2灰黄　粗砂　一部5BG6/1青灰シルトが薄く層状に混じる　1577堆積土
9　10YR7/1灰白　中砂　1577堆積土
10　2.5Y7/1灰白　粗砂　1577堆積土
11　5Y6/1灰　粗砂　φ～4cmの礫が多量に混じる　1577堆積土
12　N7/1灰白　シルト　一部粗砂が混じる　1577堆積土
13　5Y7/1灰白　細砂　φ～1cmの礫が混じる　1577堆積土
14　2.5Y7/2灰黄　シルト　1577堆積土
15　7.5Y6/1灰　シルト　1577堆積土
16　N6/0灰　シルト　1577堆積土
17　５Y５/１灰白　粗砂　φ～3cmの礫が一部混じる　しまりがない　1577堆積土
18　5Y6/2灰オリーブ　シルト　1577堆積土
19　2.5Y6/3にぶい黄　シルト　一部中砂混　1577堆積土
20　5Y6/1灰　粗砂　φ～2cmの礫が一部混じる　1577堆積土
21　7.5Y6/2灰オリーブ　シルト
22　2.5Y7/1灰白　中砂　一部シルトが混じる
23　2.5GY5/1オリーブ灰　シルト
24　2.5Y7/2灰黄　中砂　一部シルトが混じる
25　5G5/1緑灰シルト　木材が混じる
26　25層と27層の混質土
27　7.5Y6/1灰　粗砂　φ～4cmの礫が多く混じる
28　10YR7/3にぶい黄橙　粗砂混砂質土
29　2.5Y6/1黄灰　中砂混シルト
30　5B6/1青灰　中砂混シルトややしまる
31　10BG4/1暗青灰　中砂混シルト　φ～1cmの礫が混じる
32　10BG6/1青灰　シルト　1577河川堆積土
33　2.5Y7/2灰黄　細砂混シルト　1577河川堆積土
34　10YR5/6黄褐　粗砂　1577河川堆積土
35　5Y7/1灰白　粗砂　φ～5cmの礫が多量に混じる　1577河川堆積土
36　10Y6/1灰　シルト　1577河川堆積土
37　2.5Y8/2灰白　中砂　1577河川堆積土
38　7.5Y6/1灰　シルト　1577河川堆積土
39　2.5Y7/2灰黄　粗砂　φ～4cmの礫が多量に混じる　1577河川堆積土
40　2.5Y8/2　灰白　中砂　一部32層が混じる　1577河川堆積土
41　2.5Y7/2灰黄　中砂　1577河川堆積土
42　5Y7/2灰白　細砂　一部中砂が混じる　1577河川堆積土
43　7.5Y6/1灰　粗砂　φ～3cmの礫が混じる
44　5Y7/1灰白　中砂　一部シルトが混じる　1577河川堆積土
45　7.5Y6/1灰　粗砂　一部細砂混　φ～3cmの礫が混じる　1577河川堆積土
46　7.5Y7/1灰白　粗砂　10Y5/1灰シルト（地山）がブロックで混じる　1577河川堆積土
47　5Y7/1灰白　中砂　1577河川堆積土
48　55層のブロック　1577河川堆積土
49　N7/0灰白　シルト　一部細砂混
50　5Y8/3淡黄　中砂
51　5B4/1暗青灰　中砂混シルト　φ～1cmの礫が一部混じる
52　N6/0灰　細砂
53　10Y6/1灰　シルト
54　2.5Y4/2暗灰黄　粗砂混砂質土
55　10G3/1暗緑灰　シルト　木質有機物が多く混じる　地山
56　2.5Y6/2　灰黄　シルト　一部21層が混じる

図 557　３区　第３遺構面　1577 河川　断面図

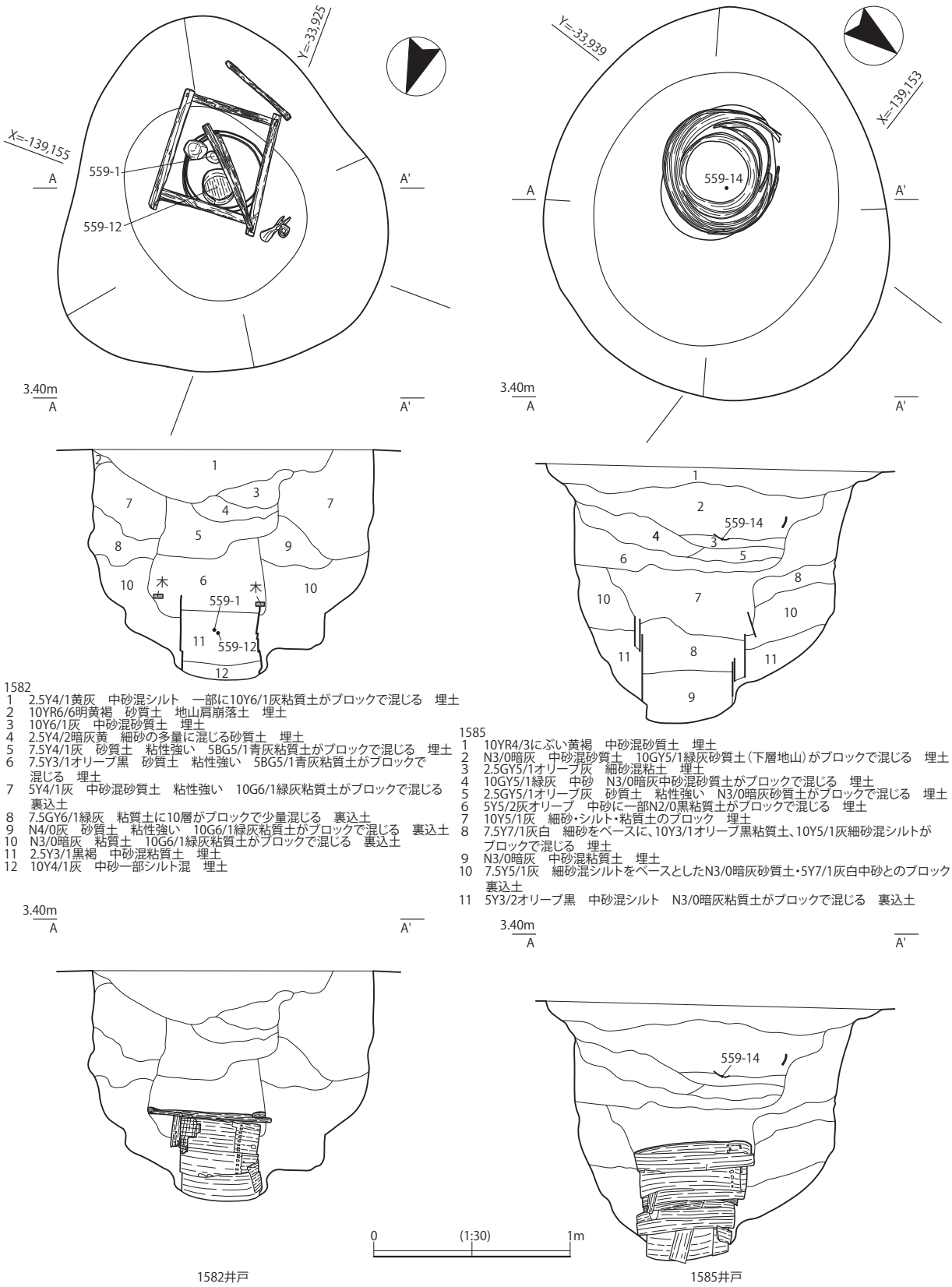


図 558　3 区　第 3 遺構面　1582・1585 井戸平・断面図

残存位置はやや低く、上部構造が存在した可能性がある。遺物は土師器皿（図 559 － 14 ～ 16）、瓦器碗（図 559 － 17 ～ 20）等が出土した。14 は 2・3 層の層界から出土したものである。その位置は遺構のほぼ中央にあたる。19 は大和型とみられ、20 は大和型である。出土遺物から 12 世紀頃の遺構

とみられる。

1600 溝（図 560、図版 128）　検出できた長さ 20.32 m、最大幅 2.96 m、深さ 0.26 mで、調査区南側西寄りに位置し、南北方向に走るＳ字状に蛇行する溝である。南端は調査区外に延びている。底部の標高は北端で 3.052 m、南端で 2.727 mであり、北から南へと流れる溝である。北端は 1577 河川と繋がっており、1577 河川から集落へと導水する溝である。図化した出土遺物は黒色土器碗である（図 560 － 1 ）。 1 は黒色土器Ａ類である。 9 世紀末ごろのものであろう。

1579 土坑（図 560、図版 128）　直径 1.64 m、深さ 0.30 mで円形を呈する。調査区南東寄りに位置する。遺物は土師器碗（図 560 － 2 ）等が出土した。

1602 土坑（図 560、図版 35・128）　直径 0.23 m、深さ 0.09 mで円形を呈する。調査区南寄りの西端に位置する。瓦器碗（図 560 － 3 ）の埋納遺構である。 3 は大和型である。12 世紀初頭から前半頃のものとみられる。

1794 土坑（図 560、図版 35・128）　長径 0.60 m、短径 0.34 m、深さ 0.29 mで楕円形を呈する。調

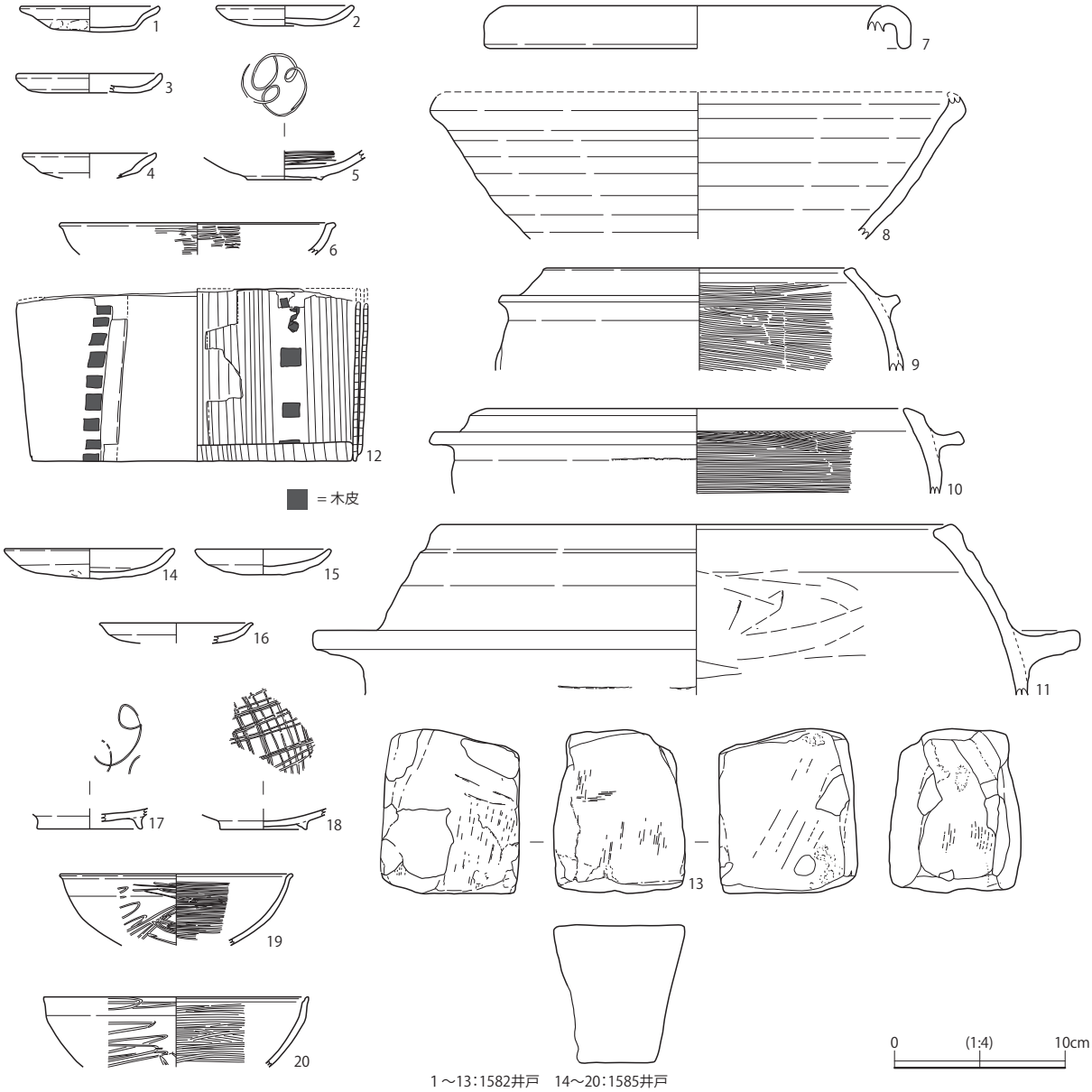


図 559　３区　第３遺構面　1582・1585 井戸　出土遺物

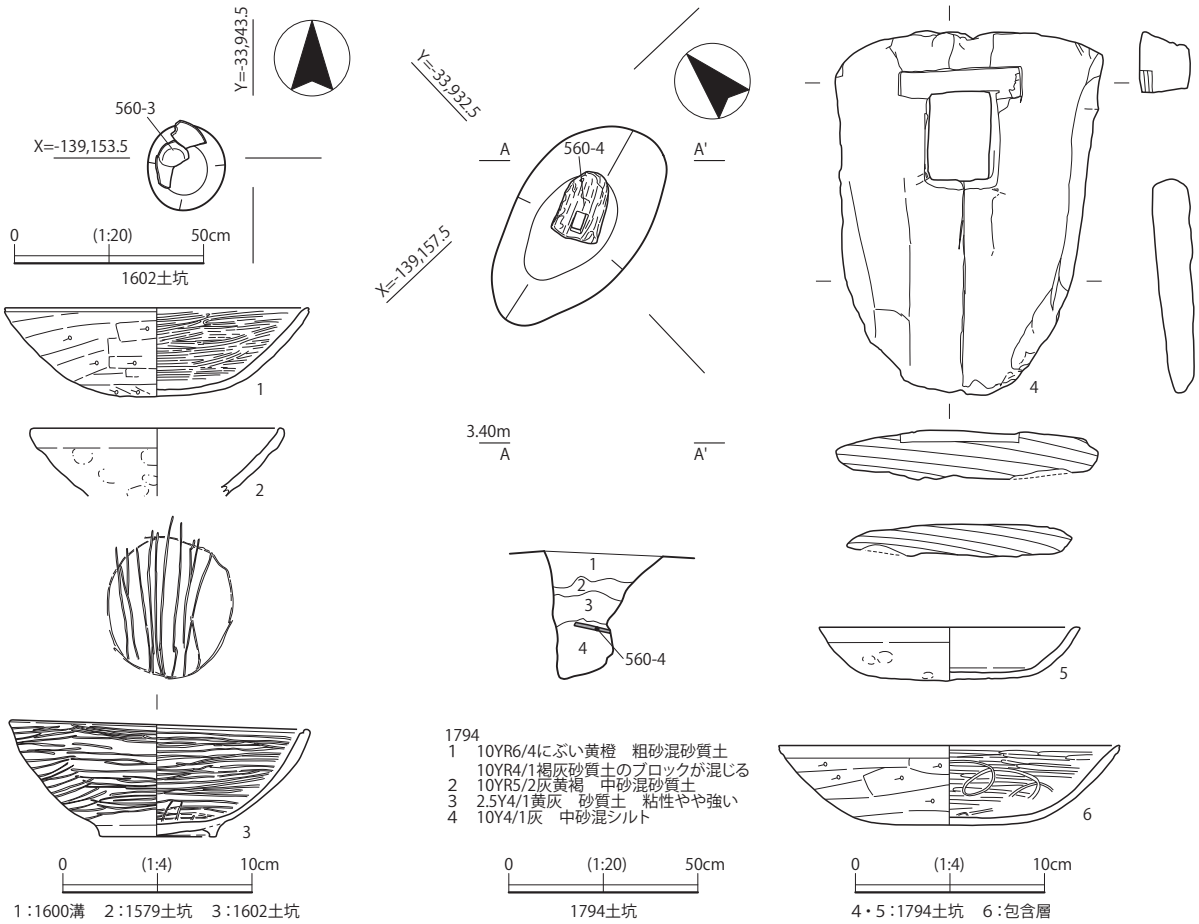


図 560　3 区　第 3 遺構面　1602・1704 土坑平・断面図・1600 溝・1579・1602・1794 土坑・包含層出土遺物

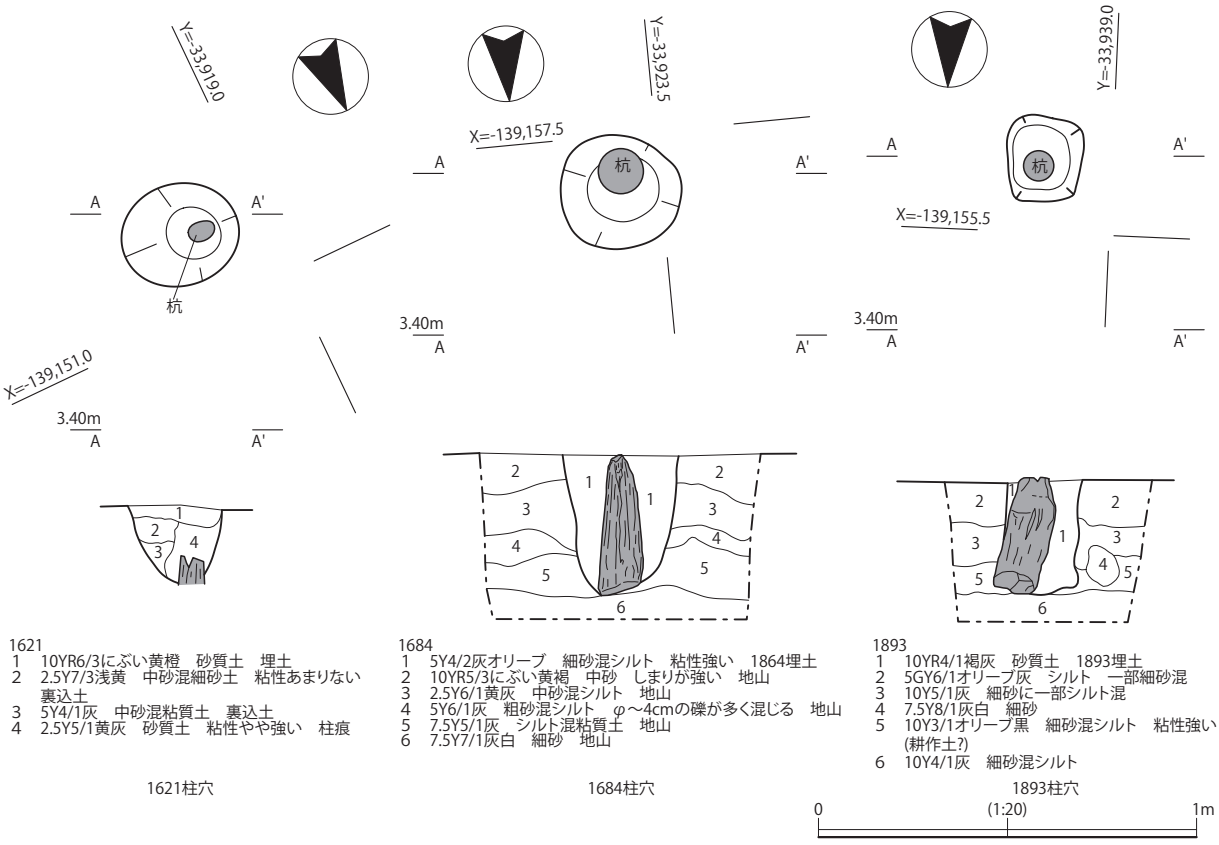


図 561　3 区　第 3 遺構面　1621・1684・1893 柱穴　平・断面図

査区南寄りに位置する。遺物は木製鍬（図 560 － 4）、土師器皿（図 560 － 5）等が出土した。 4 は柄の挿入部に部分的に別材を用いている。刃部付近には加工があり、金属刃先を取り付けるための加工と見られる。出土状況からは柱穴の礎板に利用されたものの可能性もあるが、本遺構の堆積状況からは本遺構が柱穴で 4 が礎板として用いられていたと断定することはできない。

1621 柱穴（図 561） 長径 0.31 m、深さ 0.27 mで楕円形を呈する。調査区南東寄りに位置する。柱穴内西寄りに柱が一部遺存し、断面観察で腐滅した柱痕を確認した。断面観察した柱径は約 0.12 mである。

1684 柱穴（図 561、図版 35） 最大径 0.35 m、深さ 0.35 mで円形を呈する。調査区南東寄りに位置する。柱穴内南寄りに柱が遺存する。柱径は約 0.10 mで柱底部は水平ではなく東より西の方がやや高くなっていた。

1893 柱穴（図 561、図版 35） 長軸 0.23 m、短軸 0.19 m、深さ 0.25 mで隅丸方形を呈する。調査区

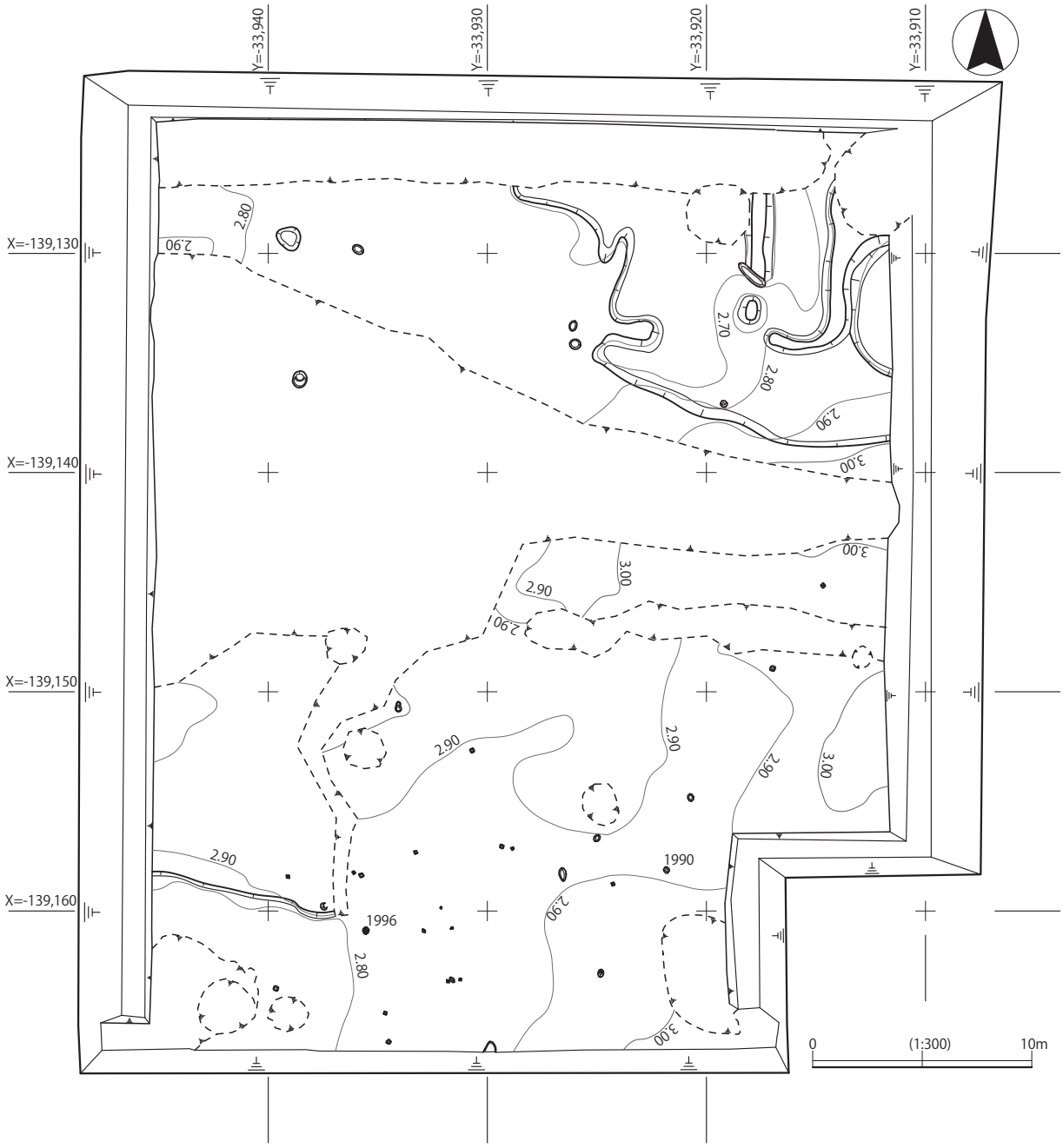


図 562　3 区　第 4 遺構面　平面図

南西寄りに位置する。柱穴内北東寄りに柱が遺存する。柱径は約 0.10 mで、検出時にはやや西向きに傾いていた。

包含層出土遺物（図 560、図版 128）

この他包含層出土遺物として黒色土器碗（図 560 － 6）等が出土した。6は黒色土器 A 類で 9 世紀中頃のものとみられる。

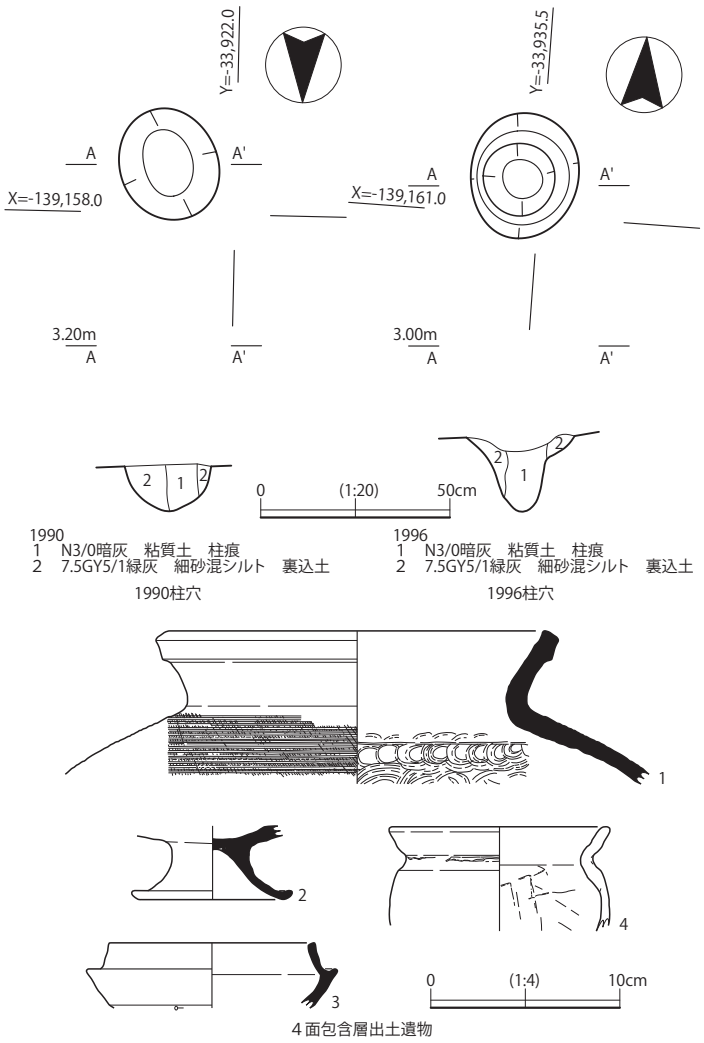


図 563　3 区　第 4 遺構面　1990・1996 柱穴平・断面図
包含層出土遺物

4．第 4 遺構面（図 562、図版 35）

第 4 遺構面は、基本層序における 3-3 面に対応するとみられる遺構面である。第 4 遺構面の調査で確認した遺構は、土坑 32 基、柱穴 2 基、水田 6 面を検出した（図 562）。各水田の面積は約 10 ㎡～ 61 ㎡である。また、第 3 遺構面で検出した 1577 河川はこの遺構面の段階から既に存在していたものと見られる。調査区北東側で水田面を検出した以外は遺構の分布が希薄で、出土遺物にも乏しく消極的であるが、他の遺構面との対応関係等から飛鳥時代以降の遺構面とみる。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 2.775 m、北西隅 T.P. ＋ 2.807 m、南東隅 T.P. ＋ 2.903 m、南西隅 T.P. ＋ 2.773 mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

1990 柱穴（図 563）　最大径 0.30 m、深さ 0.11 mで円形を呈する。調査区南東寄りに位置する。断面観察で腐滅した柱痕を確認した。観察した柱径は約 0.08 mである。

1996 柱穴（図 563）　最大径 0.33 m、深さ 0.25 mで円形を呈する。調査区南西寄りに位置する。断面観察で腐滅した柱痕を確認した。観察した柱径は約 0.11 mである。

包含層出土遺物（図 563、図版 128）　包含層出土遺物として須恵器甕（図 563 － 1）、須恵器高坏（図 563 － 2）、須恵器坏身（図 563 － 3）、土師器甕（図 563 － 4）等が出土した。古墳時代から飛鳥時代にかけてのものである。

5．第 5 遺構面（図 564、図版 35）

第 5 遺構面は、基本層序における 4-1 面に対応する遺構面である。第 5 遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期から飛鳥時代のもので、流路 1 本、溝 8 本、土坑 2 基、水田 22 面を検出した（図 564）。調査区北半に東西方向の溝（2042 流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。各水田の面積は約 8 ㎡～ 60 ㎡である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出されたが、2042 溝の南側の西部では、第 3 遺構面 1577 河川による削

平で水田畦畔は検出されなかった。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 2.529 m、北西隅 T.P. ＋ 2.742 m、南東隅 T.P. ＋ 2.620 m、南西隅 T.P. ＋ 2.419 mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2042 流路（図 564）　検出長 34.25 m、幅 2.77 m、深さ 0.24 mで東から西へとやや北向きに蛇行し流れる流路である。調査区北半に位置し水田に水を供給する機能を有していたとみられる。

2037 溝（図 565、図版 35・128）　長さ 3.82 m、幅 0.73 m、深さ 0.22 mで調査区北東部に位置する。南北方向で直線形を呈する溝である。南端で東西方向の溝（2038 溝）と接続し、全体ではＬ字形を呈する。2042 流路から水田への水供給に関連する溝とみられる。木製船材を転用した材を導水に用いている。遺物は須恵器坏身（図 565 － 1）、木製船材（図 565 － 2）等が出土した。１は古墳時代後期後半のものである。２はやや反りを持ち、図面上部には波状の加工があり、図面下部に方形孔と切れ込み加工がある。表裏とも手斧による加工痕が明瞭に観察できる。準構造船の底部材の再加工転用品と見

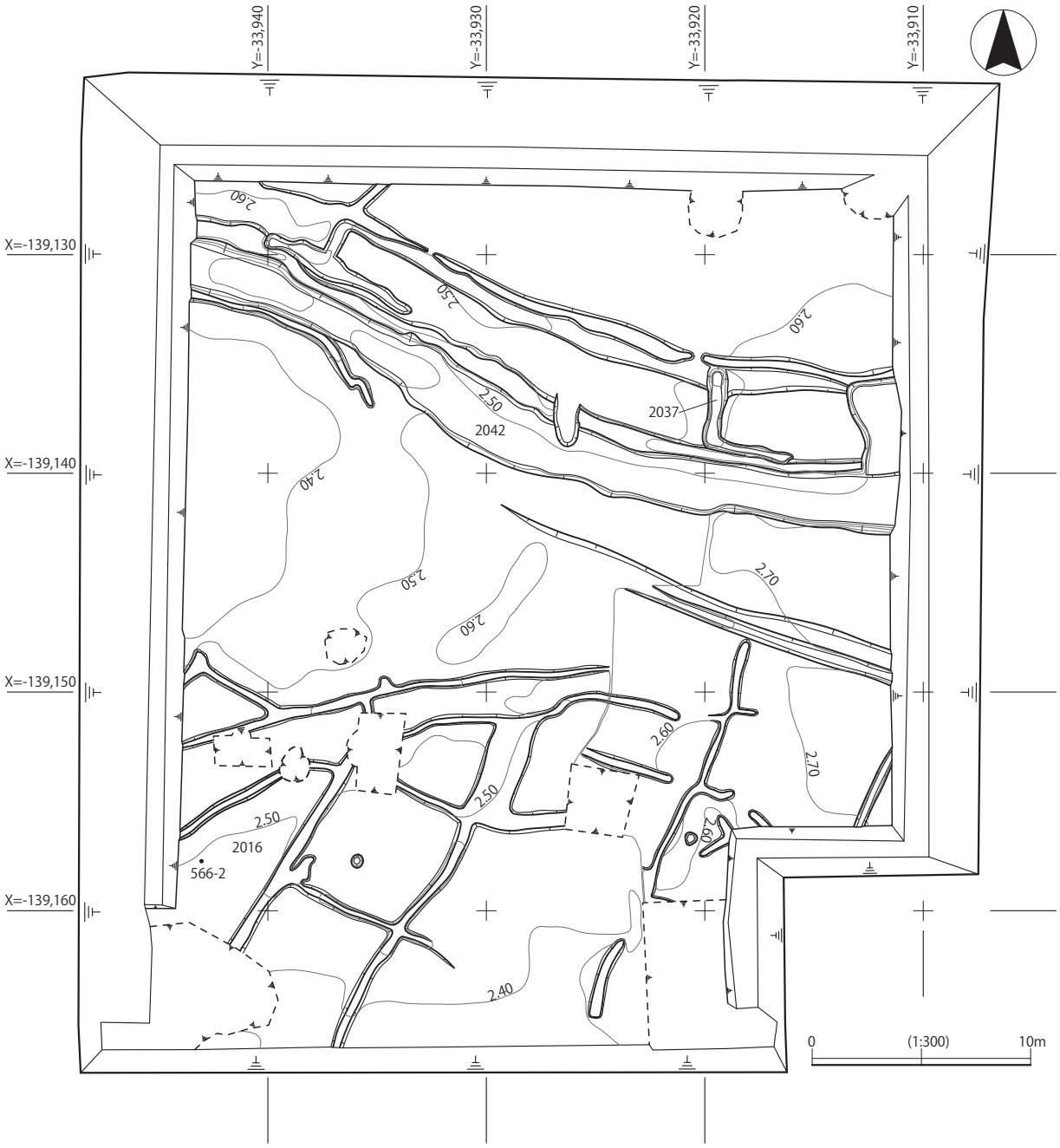


図 564　３区　第５遺構面　平面図

られる。

包含層出土遺物（図 566、図版 128）　包含層出土遺物として須恵器蓋（図 566 －1）、須恵器壺（図 566 －2）等が出土した。飛鳥時代のものである。2は 2016 水田の範囲内で出土したが、水田存続時より上層の土層で出土したもので、水田に直接属するものではなかった。

6．第 6 遺構面（図 567・568、図版 36）

第 6 遺構面は、基本層序における 4-2 面に対応する遺構面である。第 6 遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期後半以降のもので、流路 1 本、溝 3 本、しがらみ 1 箇所、流路の氾濫部 1 箇所、土坑 2 基、水田 22 面、水口 4 箇所を検出した（図 567）。調査区北半に東西方向の溝（2048 流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。各水田の面積は約 41 ㎡～ 84 ㎡である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出された。多くの水田で足跡・農具痕・根株痕等が明瞭に検出され、2055 水田と 2057 水田の一部でこれらを掘削・図化した（図 567）。このうち 2055 水田では半月状の農具痕が連続した状態で観察された。農具痕の大きさは長軸 0.20 m×短軸 0.12 mであった。また 2047 水田では古墳時代後期後半の須恵器坏身が出土した（図 568 －2）。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 2.291 m、北西隅 T.P. ＋ 2.229 m、南東隅 T.P. ＋ 2.404 m、南西隅 T.P. ＋ 2.065 mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

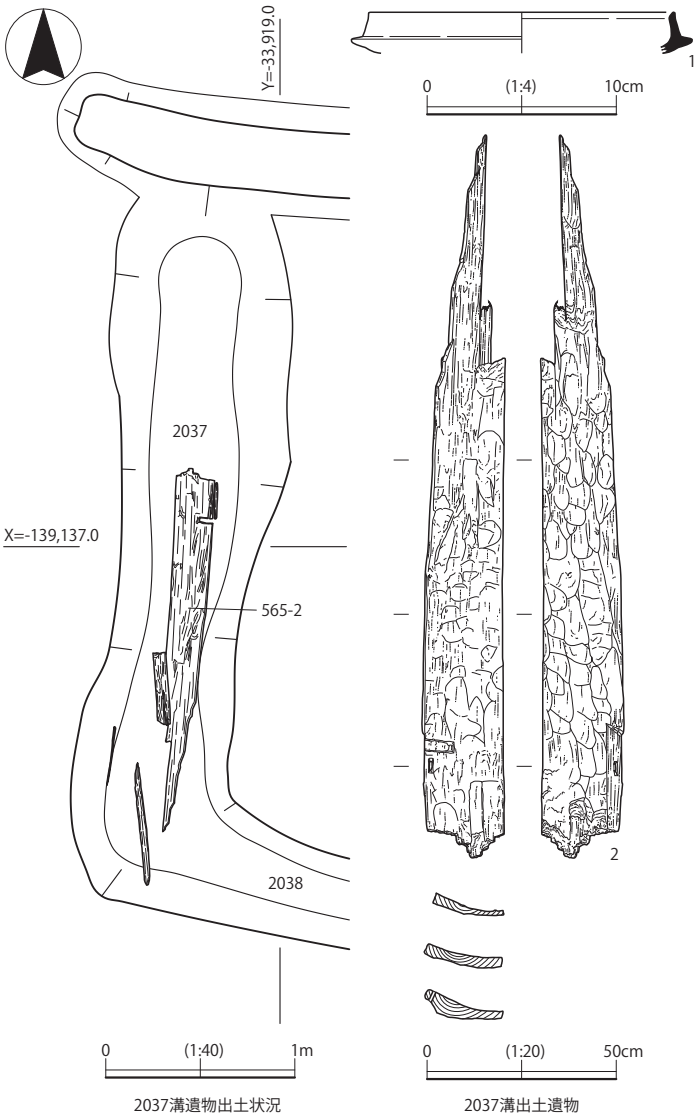


図 565　3 区　第 5 遺構面　2037 溝平面図・出土遺物

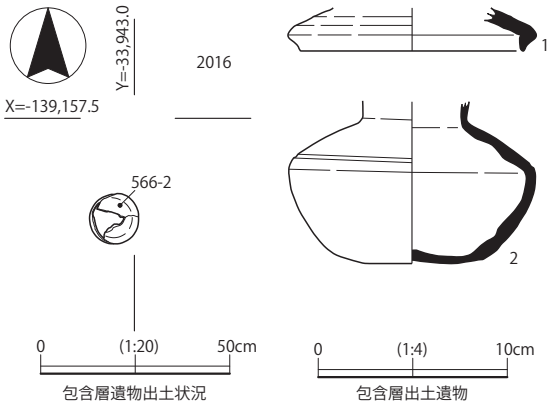


図 566　3 区　第 5 遺構面　包含層遺物出土状況図・出土遺物

2048 流路（図 568、図版 36・128）　検出できた長さ 34.68 m、幅 3.73 m、深さ 0.33 mで東から西へと、やや北向きに蛇行して流れる流路である。調査区北半に位置する。水田に水を供給する機能を有していたとみられる。遺物は須恵器坏蓋（図 568 －1）等が出土した。

2078 しがらみ（図 568、図版 36）　検出できた規模南北 7.48 m、東西 2.40 m、深さ 0.67 mの土坑状

の遺構内南半を中心に、41 本の杭が遺構肩部寄りに配置され、そこに東西方向に木材が何本か横たえられたもので、2048 流路に関連するしがらみとして機能したものとみる。

2079 氾濫部（図 568）　東西 11.63 m、南北 8.51 mの不整形な範囲で、厚さ 0.08 mほど灰黄色粗砂が堆積していて、これは 2048 流路から供給されていた。流路南側肩部には幅 4.48 mにわたって遺構肩である水田耕土と同質の土層が存在せず灰黄色粗砂のみが堆積している部分があり、この部分は 2048 流路が氾濫し灰黄色粗砂が供給されたものと判断した。

７．第７遺構面（図 569、図版 36）

第７遺構面は、基本層序における 4-3 面に対応する遺構面である。第７遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期後半以降のもので、流路１本、溝１本、水田 17 面、水口 19 箇所を検出した（図 569）。調査区北半に東西方向の溝（2100 流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。

図 567　３区　第６遺構面　平面図

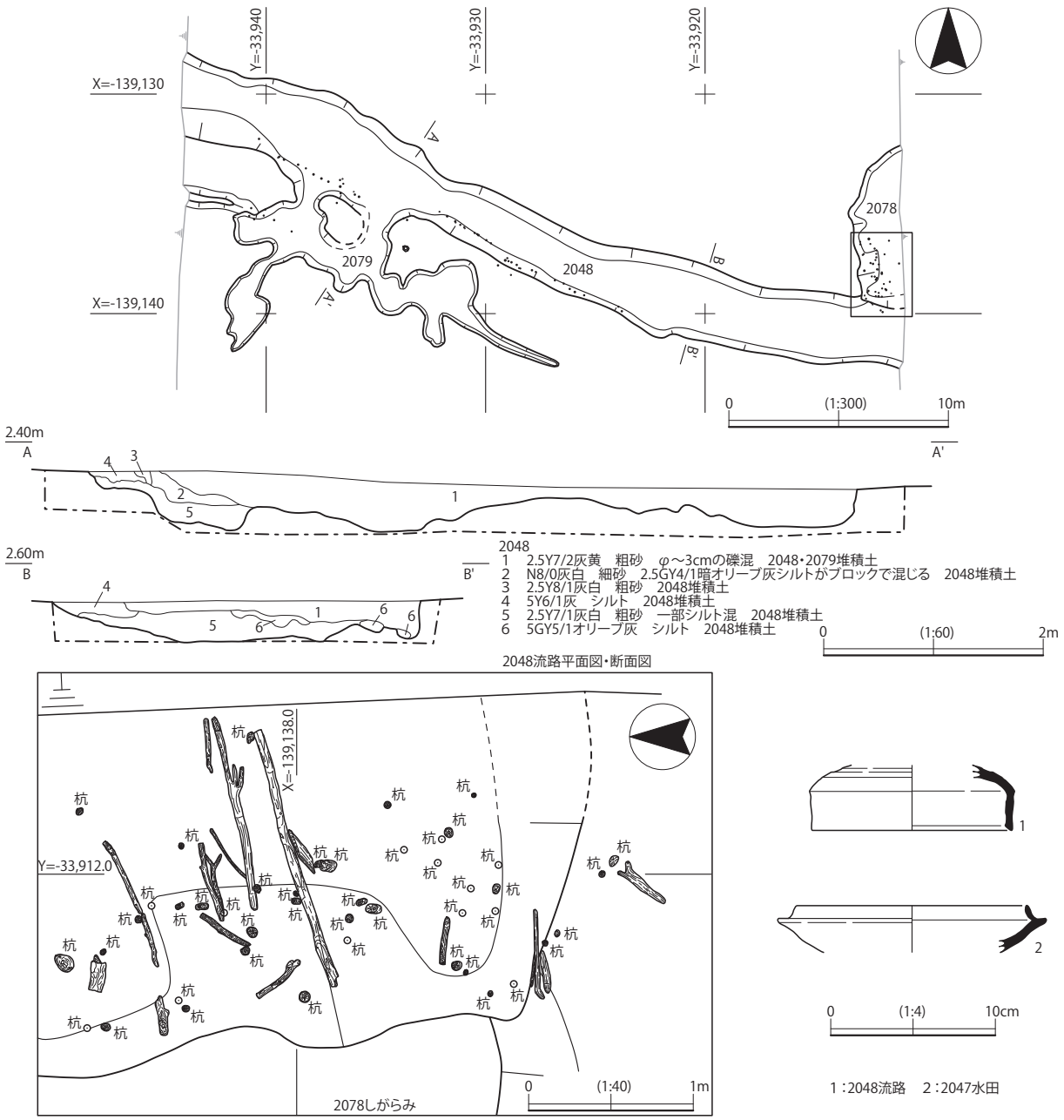


図 568　3 区　第 6 遺構面　2048 流路・2078 しがらみ平・断面図・2047 水田・2048 流路出土遺物

各水田の面積は約 31 ㎡～ 136 ㎡である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出された。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 1.745 m、北西隅 T.P. ＋ 1.742 m、南東隅 T.P. ＋ 1.850 m、南西隅 T.P. ＋ 1.683 mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2100 流路（図 570、図版 128）　検出できた長さ 31.90 m、幅 4.46 m、深さ 0.52 mで東から西へと、やや北向きに蛇行して流れる流路である。水田に水を供給する機能を有していたとみられる。調査区北半に位置する。両岸に堤防状の盛土を有し、盛土の外側内側ともに杭列を検出した。この杭列は土留めの機能を有していたとみられる。遺物は須恵器坏身（図 570 － 1）、土師器鉢（図 570 － 2）、土師器把手（図 570 － 3・4）等が出土した。1 は 6 世紀後半のものである。3 は器壁の傾きから鍋の把手と見られる。4 は鍋もしくは甑の把手である。

水田面出土遺物（図 570、図版 36・128）　水田面出土遺物としては用途不明木製品（図 570 － 5）、土師器甕（図 570 － 6 ・ 7）、土製脚部（図 570 － 8）等があった。5 は 2082 水田の水口近辺から出土したもので、上部に孔をあけていて、下端部にも加工があり図示した形状でほぼ完形である。6 は 2094 水田から出土した。7 は 2100 流路北側堤防の脇から出土した。8 は土製品の脚部片で、底面に意図的な凹みがある。

8．第 8 遺構面（図 571、図版 36）

第 8 遺構面は、基本層序における 5-1 面に対応する遺構面である。第 8 遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期中頃～後半のもので、流路 1 本、流路の堤防修築部 1 箇所、水田 25 面、水口 11 箇所を検出した（図 571）。調査区北半に東西方向の溝（2136 流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。各水田の面積は約 11 ㎡～ 80 ㎡である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪

図 569　3 区　第 7 遺構面　平面図

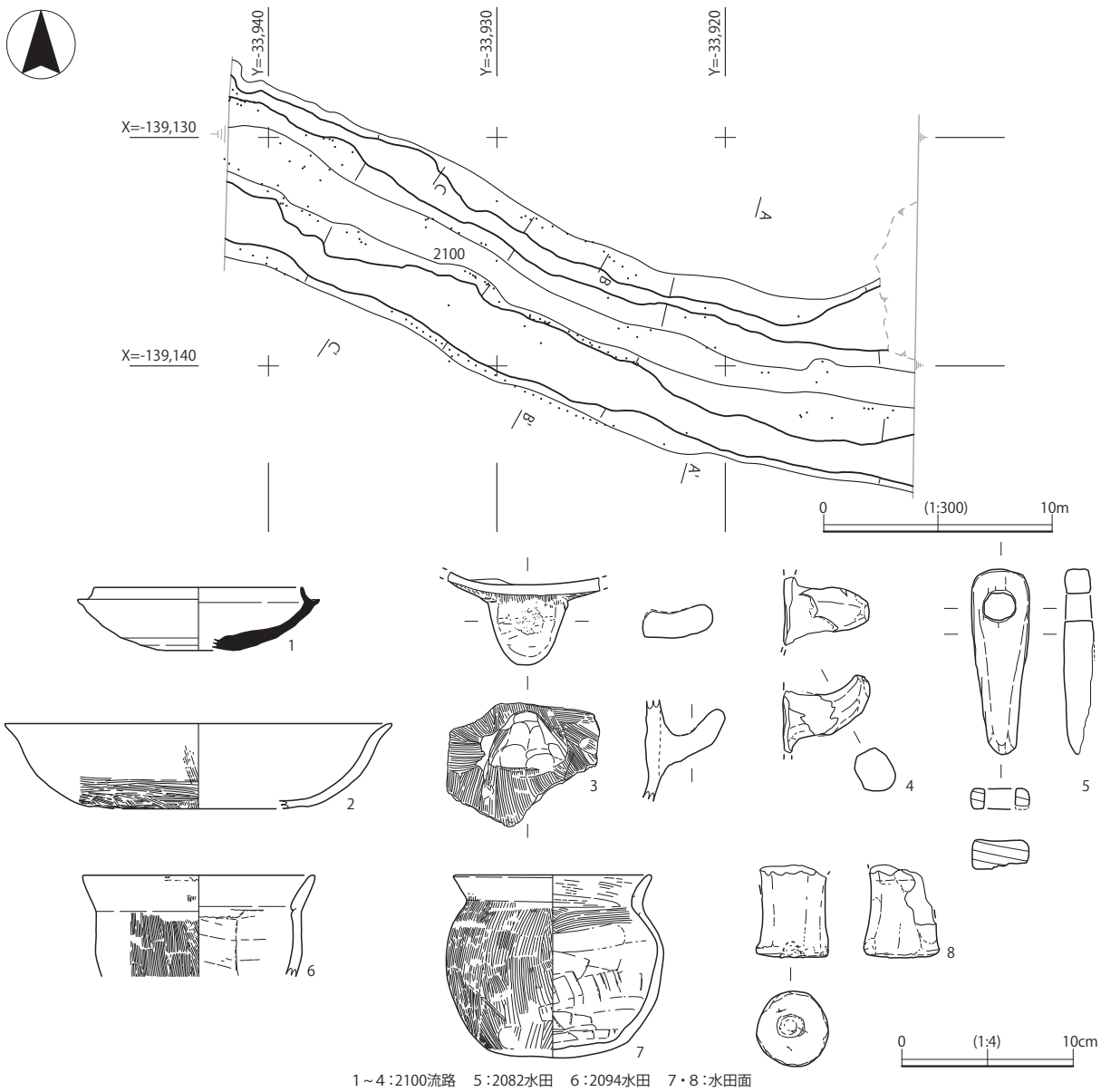


図 570　3 区　第 7 遺構面　2100 流路平面図・第 7 遺構面出土遺物

水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出された。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 1.729 m、北西隅 T.P. ＋ 1.688 m、南東隅 T.P. ＋ 1.614 m、南西隅 T.P. ＋ 1.423 mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2136 流路（図 572・図版 128）　検出できた長さ 31.97 m、幅 4.27 m、深さ 0.81 mで東から西へと、やや北向きに蛇行して流れる流路である。調査区北半に位置する。水田に水を供給する機能を有していたとみられる。両岸に堤防状の盛土を有し、盛土の外側内側ともに杭列を検出した（図 572 上に点で表現）。この杭列は土留めの機能を有していたとみられる。遺物は流路内から須恵器坏蓋（図 572 － 1 ）、土師器壺（図 572 － 2 ）等が、流路南側堤防内から須恵器坏蓋（図 572 － 3 ）、土師器甕（図 572 － 4 ）、土師器鉢（図 572 － 5 ）、鞴羽口（図 572 － 6 ）等が出土した。 3 は南側堤防内やや西寄りからほぼ完形で出土し、堤防構築時の祭祀等何らかの理由で意図的に堤防内に埋めたものと見られる。 6 は先端部に溶着した滓がみられる。

2156 堤防修築部（図 572・575、図版 36・128）　長軸 9.00 m、短軸 2.68 mの範囲で、堤防上面から

最大で深さ 1.19 m堤防が決壊し、その後第７遺構面への移行と同時期に、決壊時もたらされた粗砂層の流路肩部側を補強する形で修築されていた。この決壊は第８遺構面の廃絶と直接かかわる洪水による可能性が高い。修築時には流路肩部に灰色粘土を積み重ね（図 575 － 33 ～ 35 層）、木杭と木材で補強し、その外側に周辺水田の復旧で出たであろう土を盛り（図 575 － 26 ～ 29、31、32、36、37 層）、堤防を復旧させていた。

2137 水田（図 573、図版 37）　東西 11.51 m、南北 6.93 m、面積約 79.8 ㎡の長方形を呈する水田で、足跡痕跡が明瞭に観察された。このうち足跡の痕跡が特に明瞭に観察できた一部分を図化した（図 573）。その中では連続する足跡が４組観察され、そのうち図に最も薄いトーンで示した１組は南西から北東へと６つの足跡が連続するものであった。更に特に明瞭であった４箇所の足跡を掘削調査した。これらはいずれも指の跡まで明瞭に観察された。そのうち、６つの足跡が連続するうちの連続する２ヶ

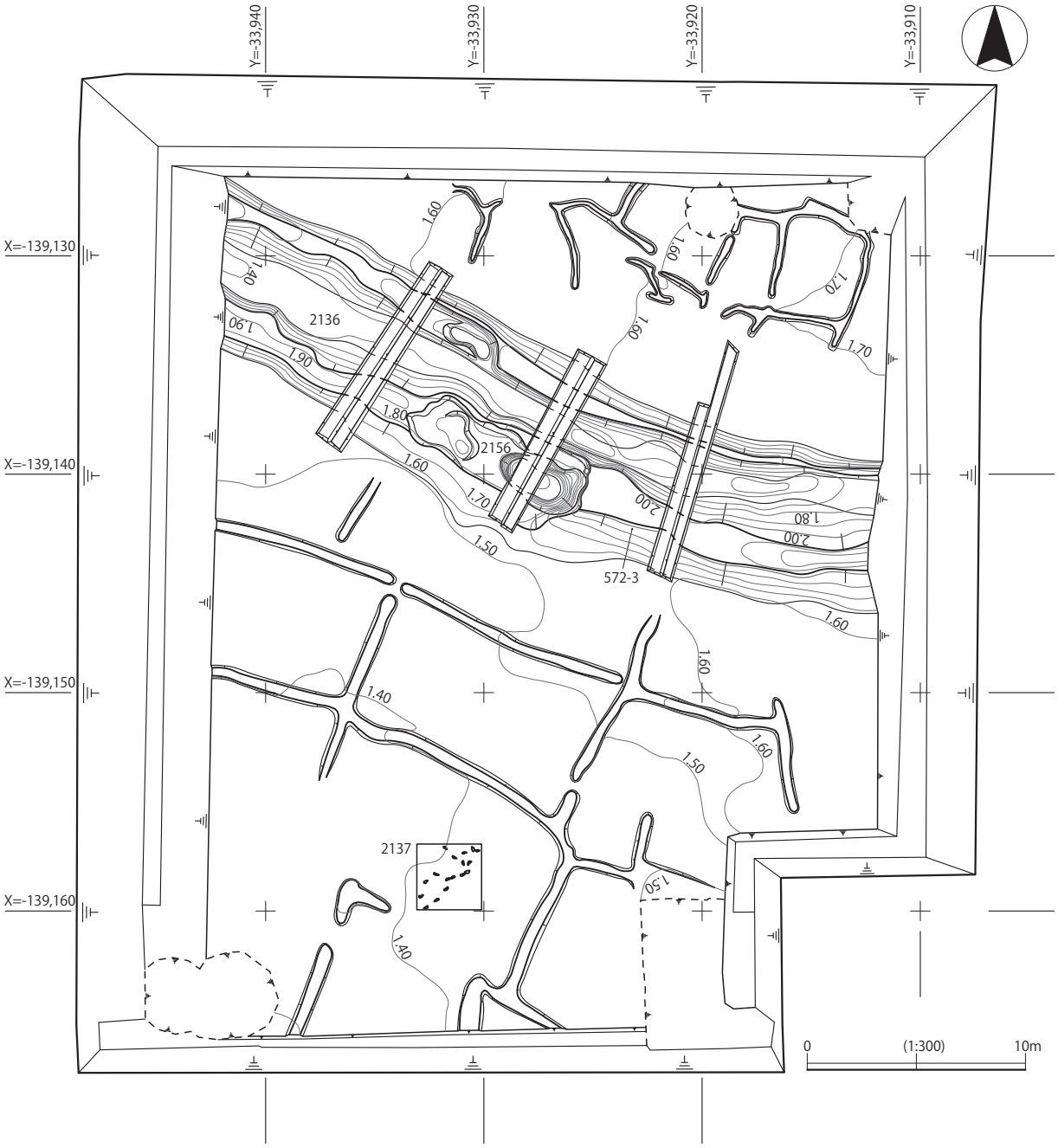


図 571　３区　第８遺構面　平面図

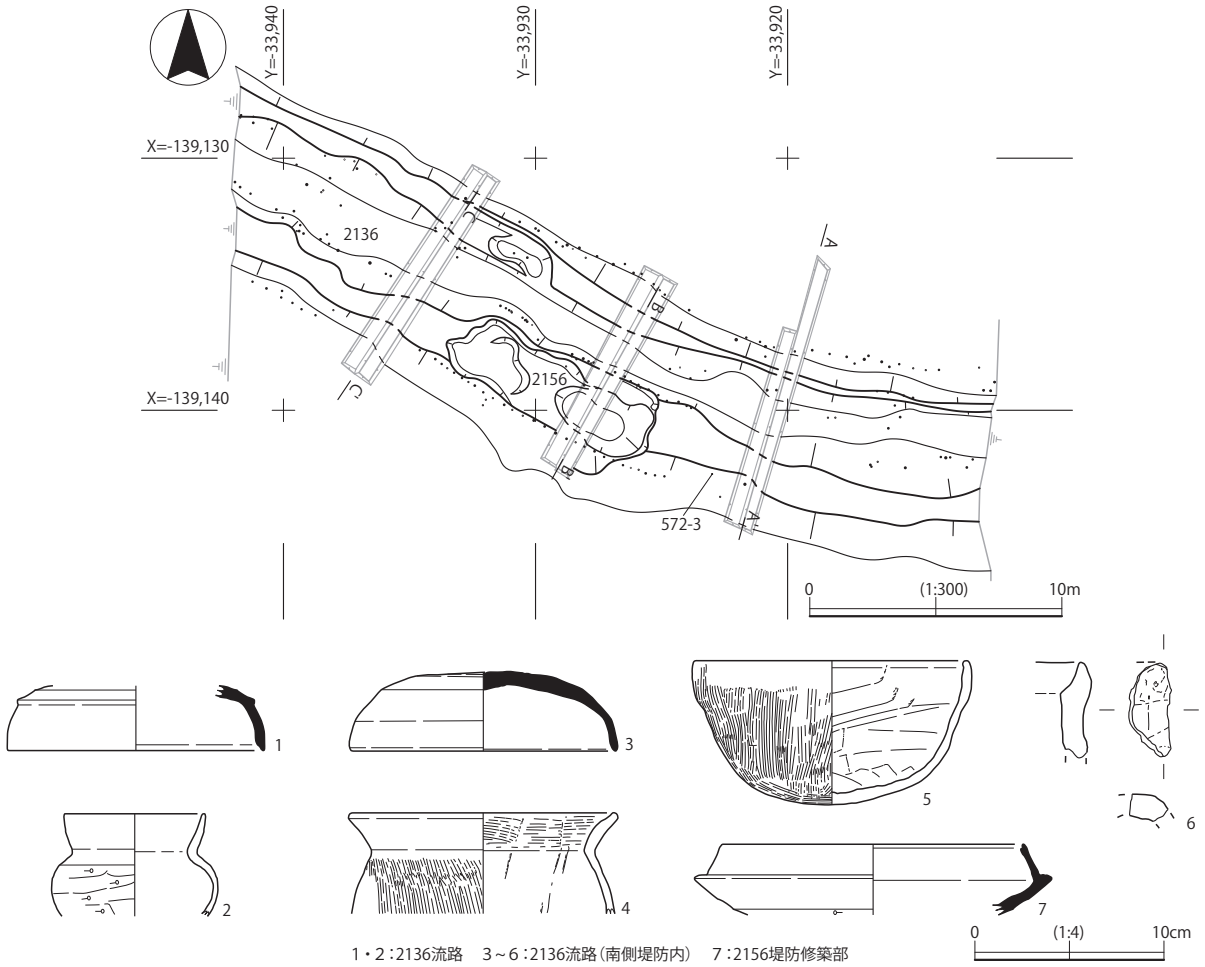


図 572　3 区　第 8 遺構面　2136 流路平面図・出土遺物

所を調査したものは、足跡の大きさは右足で 23.3cm あり、歩幅は 52.4cm であった。

9．第 9 遺構面（図 574、図版 37）

第 9 遺構面は、基本層序における 5-2b 面に対応する遺構面である。第 9 遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期以前のもので、流路 1 本、流路の堤防修築部 2 箇所、溝 1 本、水田 14 面、水口 5 箇所を検出した（図 574）。調査区北半に東西方向の溝（2163 流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。各水田の面積は約 74 ㎡～146 ㎡である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出された。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋

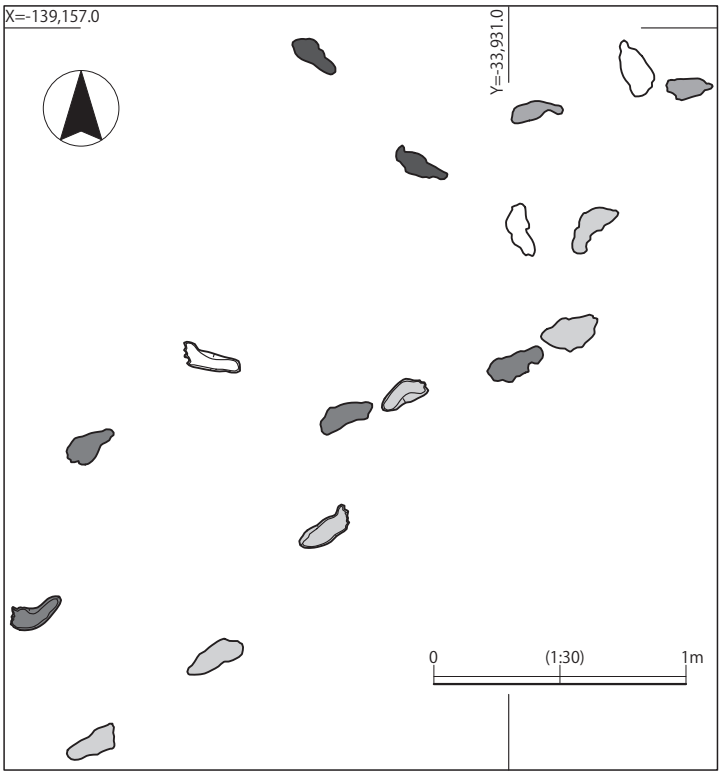


図 573　3 区　第 8 遺構面　2137 水田足跡平面図

1.568 m、北西隅 T.P. ＋ 1.563 m、南東隅 T.P. ＋ 1.155 m、南西隅 T.P. ＋ 1.142 mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2163 流路（図 575・579・580、図版 37・129） 検出できた長さ 34.68 m、幅 3.73 m、深さ 0.72 m で東から西へと、やや北向きに蛇行して流れる流路である。調査区北半に位置する。水田に水を供給する機能を有していたとみられる。両岸に堤防状の盛土を有し、盛土の外側内側ともに杭列を検出した（図 575 上に点で表現）。遺物は土器類では須恵器坏蓋（図 579 － 1 ～ 6）、須恵器𤮈（図 579 － 7）、土師器鉢（図 579 － 8 ～ 13）、土師器甕（図 579 － 14 ～ 16）等が出土した。4 は天井部外面にヘラ書き記号がある。6 は天井部内面に当て具痕がある。12 は把手がつく可能性があるが、残存部に痕跡がなく断定できない。出土遺物は古墳時代後期にまとまりをもつ。木製品としては扉材（図 580 － 1）、槽（図 580 － 2）、鋤未製品（図 580 － 5）等が出土した。1 は堤防の補強材として使用されていた

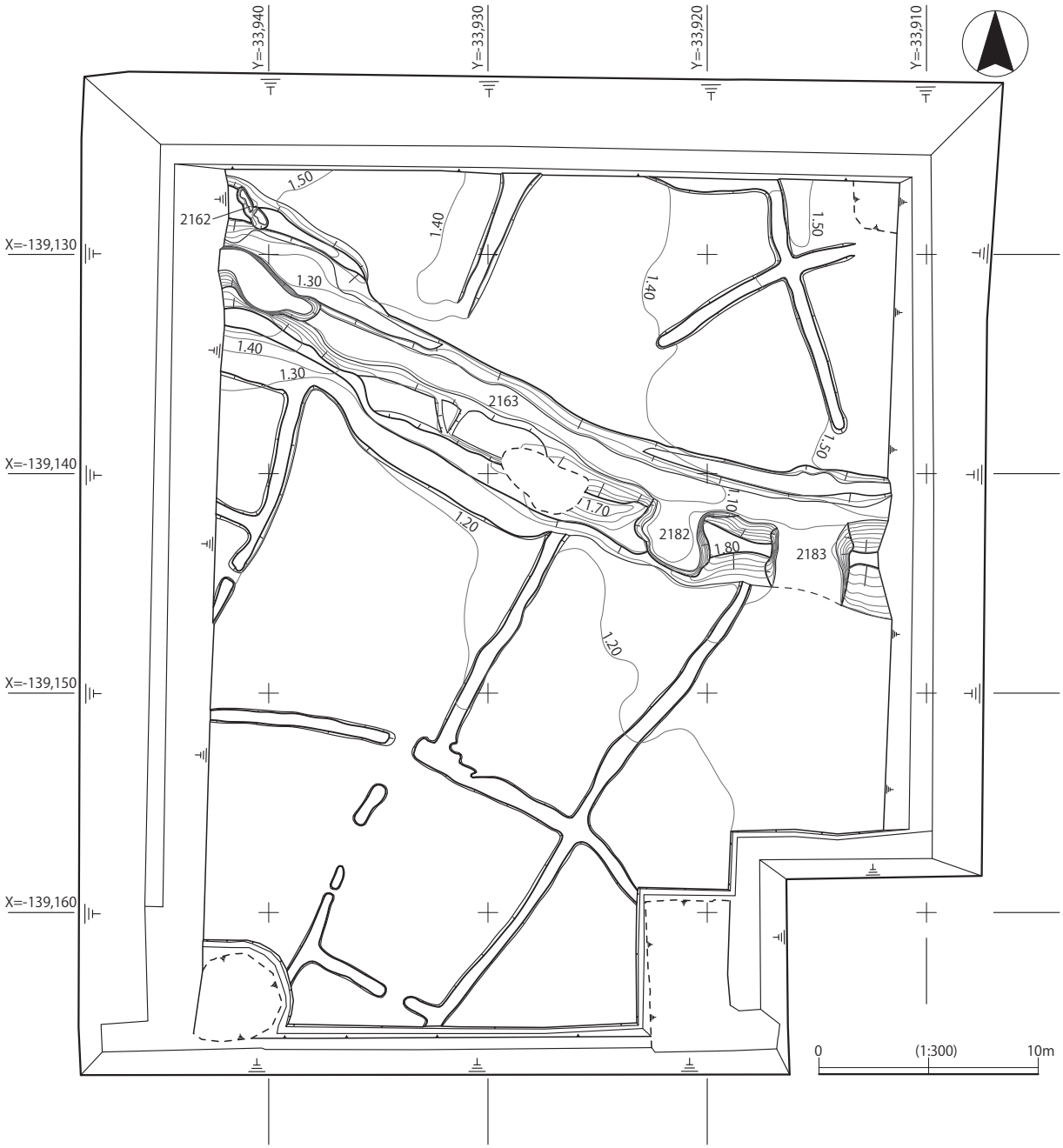
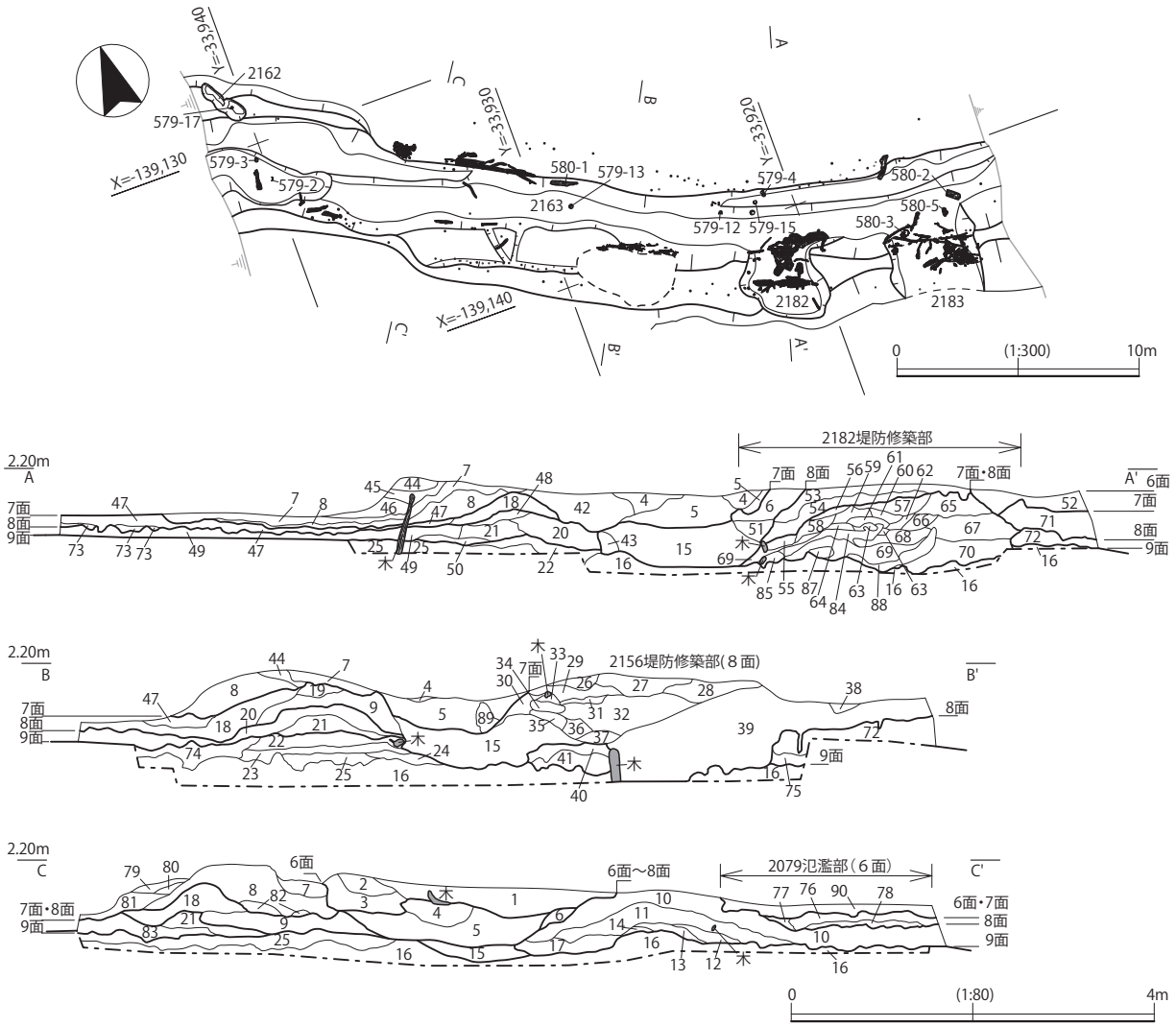


図 574　3 区　第 9 遺構面　平面図

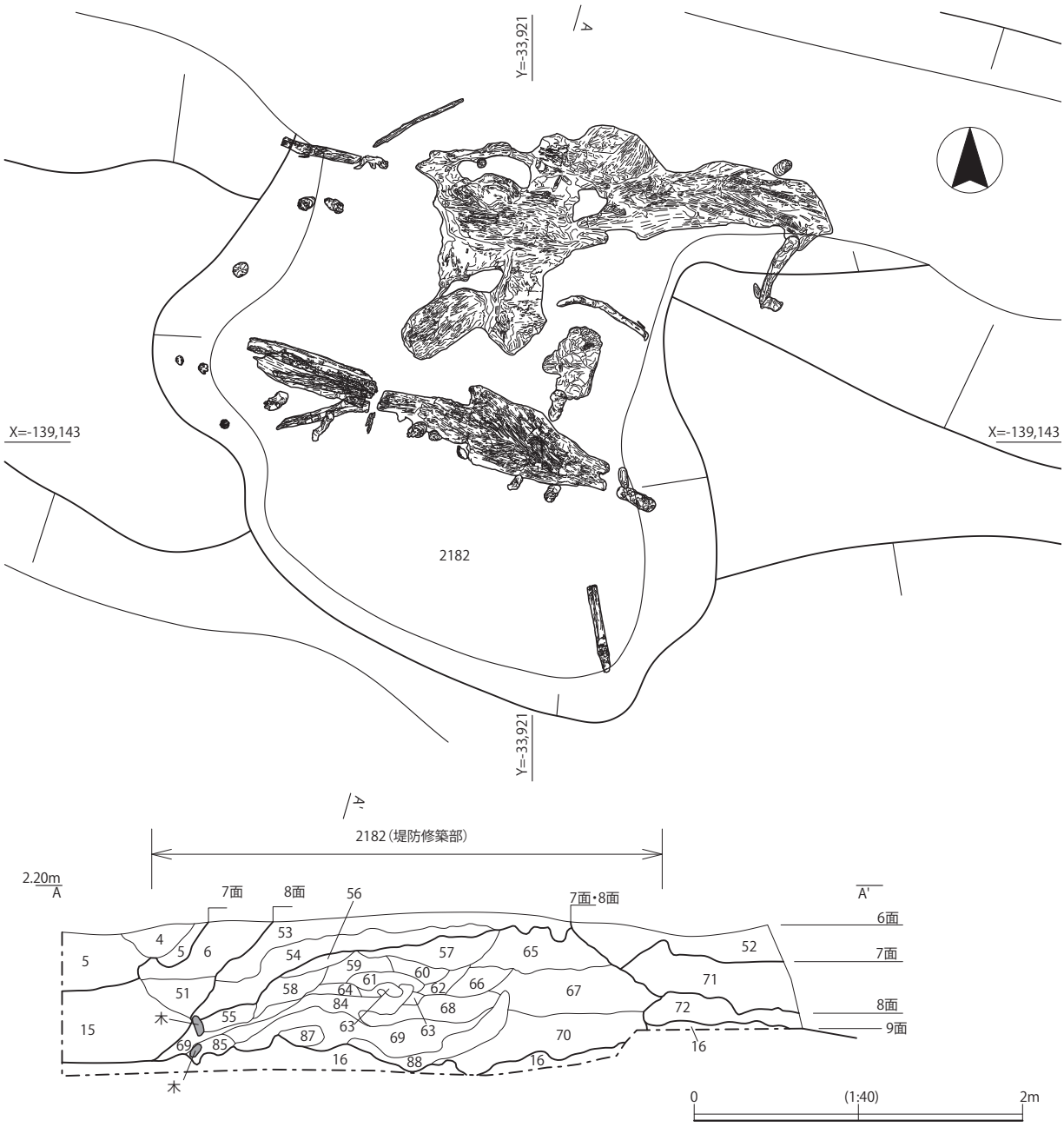


2163

1　2.5Y7/2灰黄　粗砂　φ～3cmの礫混　2048堆積土
2　N8/0灰白　細砂　2.5GY4/1暗オリーブ灰シルトがブロックで混じる　2048堆積土
3　2.5Y7/1灰白　粗砂　一部シルト混　2048堆積土
4　2.5GY5/1オリーブ灰　シルト　2100堆積土
5　5Y7/2灰白　粗砂　2100堆積土
6　N6/0灰　シルト　2136堆積土
7　5GY5/1オリーブ灰　シルト　一部中砂混　2048肩盛土
8　5Y6/2灰オリーブ　粗砂　シルトが若干混じるややしまる　2048肩盛土
9　7.5Y4/1灰　粗砂混シルト　2100肩盛土
10　10Y3/1オリーブ黒　シルト　粘性やや強い　2136肩盛土　8面水田耕土
11　N3/0暗灰　シルトに10Y8/1灰白シルトがブロックで混じる　2136肩盛土
12　7.5Y7/1灰白　粗砂　2136肩盛土
13　7.5Y7/1灰白　細砂と14層が層状に堆積する　2136肩盛土
14　10Y4/1灰　シルト　2136肩盛土
15　5Y7/1灰白　粗砂　2136堆積土
16　2.5GY2/1黒　粘土　9面水田耕土
17　5Y8/1灰白　粗砂　一部5Y6/1灰シルトが層状に混じる　2163堆積土
18　10Y4/1灰　中砂混シルト　2100肩盛土
19　7.5Y6/1灰　シルト　2100肩盛土
20　10Y4/1灰　細砂混シルト　2136肩盛土
21　5Y5/1灰　シルト　2136肩盛土
22　7.5Y7/1灰白　細砂　2163肩盛土
23　10Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土　2163肩盛土
24　5Y4/2灰オリーブ　砂質土　2163肩盛土
25　10Y3/1オリーブ黒　粘土　9面水田耕土
26　5Y5/2灰オリーブ　細砂に10Y4/1灰粘土がブロックで混じる　2100肩盛土
27　5Y5/2灰オリーブ　細砂に10Y4/1灰粘土が大きめのブロックで混じる　2100肩盛土
28　5Y5/2灰オリーブ　細砂　5Y4/1灰シルトがブロックで混じる　2100肩盛土
29　7.5Y4/1灰　粘土　2100肩盛土
30　10Y4/1灰　シルト　木質を多量に含む　2100肩杭列横木の押さえ土
31　5Y4/2灰オリーブ　中砂　10Y4/1灰粘質土がブロックで混じる　2100肩盛土
32　5Y5/2灰オリーブ　粗砂に5Y4/1灰粘土がブロックで混じる　2100肩盛土
33　10Y4/1灰　粘土　2100肩盛土
34　10Y4/1灰　粘土　2100肩盛土
35　10Y4/1灰　粘土　2100肩盛土
36　32層と37層がブロックで混じる　2100肩盛土
37　N4/0灰　シルト　2100肩盛土
38　5Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土
39　5Y5/1灰オリーブ　極粗砂　2156堆積土
40　N3/0暗灰　粘質シルト　2163堆積土
41　10Y5/1灰　粗砂　2163堆積土
42　2.5Y5/3黄褐　粗砂　2100堆積土
43　5Y6/1灰　シルト　2136堆積土
44　5Y7/1灰白　シルト　2048肩盛土
45　7.5Y3/1オリーブ黒　シルト　2048肩盛土
46　5Y5/1灰オリーブ　細砂混シルト　2048肩盛土
47　N4/0灰　粘土　7面水田耕土
48　2.5GY6/1オリーブ灰　細砂混シルト　φ～1cmの礫混　2136肩盛土
49　10Y5/1灰　中砂混シルト　8面水田耕土
50　10Y4/1灰　シルト　2136肩盛土
51　5Y5/1灰　シルト　2136堆積土
52　7.5Y6/2灰オリーブ　シルト　一部中砂混　6面水田耕土
53　5Y4/1灰　粘質土　一部細砂混　2136肩盛土
54　7.5Y5/1灰　シルト　一部7.5Y8/1灰白シルトが混じる　2136肩盛土
55　2.5Y8/2灰白　細砂　5Y6/1灰シルトが層状に混じる　2182盛土
56　10Y4/1灰　中砂混シルト　2182盛土
57　10Y5/1灰　中砂混シルトに5Y7/2灰白中砂が混じる　2182盛土
58　10Y5/1灰　中砂混シルト　混じる中砂は56層よりやや多い　2182盛土
59　5Y5/1灰　中砂混シルト　シルトと中砂が58層程混ざりきっていない　2182盛土
60　5Y5/1灰　中砂混シルト　59層よりシルトがやや多い　2182盛土
61　5Y5/2灰オリーブ　中砂混シルト　質は58層に似る　2182盛土
62　5Y4/1灰　中砂混シルト　シルトが60層より多い　2182盛土
63　5Y6/2灰オリーブ　中砂混シルト　2182盛土
64　5Y6/2灰オリーブ　中砂混シルト　63層より中砂が多い　2182盛土
65　2.5GY4/1暗オリーブ灰　中砂混砂質土　2182盛土
66　5Y4/2灰オリーブ　中砂混シルト　2182盛土
67　5Y4/1灰　粘質土に5Y7/2灰白中砂がブロックで混じる　2182盛土
68　5Y3/1オリーブ黒　粘質土　2182盛土
69　N7/0灰白　細砂に植物遺体が層状に多量に混じる　2182盛土
70　2.5Y7/2灰黄　粗砂　2182堆積土
71　2.5Y4/2暗灰黄　シルト　一部中砂混　7面水田耕土
72　5Y3/1オリーブ黒　シルト　ややしまる　8面水田耕土
73　2.5Y7/2灰黄　中砂
74　2.5Y3/1黒褐　粘質土に2.5Y7/2灰黄細砂がブロックで混じる　2163肩盛土
75　2.5Y4/1黄灰　細砂混シルト
76　2.5Y4/1黄灰　中砂混粘質土　7面水田耕土
77　2.5Y6/2灰黄　細砂混シルト
78　2.5Y7/1灰白　中砂
79　2.5Y6/1黄灰　シルト　2048肩盛土
80　79層と8層の混質土　2048肩盛土
81　5Y3/2オリーブ黒　粘質土　2048肩盛土
82　5Y4/2灰オリーブ　粗砂　2048肩盛土
83　5Y4/1灰　中砂に粘質土が所々混じる　2136肩盛土
84　10YR3/1黒褐　植物遺体層　2182盛土
85　2.5Y6/2灰黄　細砂　一部中砂混　2182盛土
86　2.5Y7/2灰黄　中砂　一部シルト混
87　5Y4/1灰　粘土　2182盛土
88　10YR3/1黒褐　植物遺体層　2182盛土
89　7.5Y5/1灰　シルト　2100堆積土
90　2.5Y7/2灰黄　粗砂　2079堆積土

※　33～35、層界に薄く細砂が入る
※　56～64、質の似た盛土の大きなまとまりとなる。

図 575　３区　第９遺構面　2163 流路平・断面図



2182（2163より抜粋）
4　2.5GY5/1オリーブ灰　シルト　2100堆積土
5　5Y7/2灰白　粗砂　2100堆積土
6　N6/0灰　シルト　2136堆積土
15　5Y7/1灰白　粗砂　2136堆積土
16　2.5GY2/1黒　粘土　9面水田耕土
51　5Y5/1灰　シルト　2136堆積土
52　7.5Y6/2灰オリーブ　シルト　一部中砂混　6面水田耕土
53　5Y4/1灰　粘質土　一部細砂混　2136肩盛土
54　7.5Y5/1灰　シルト　一部7.5Y8/1灰白シルトが混じる　2136肩盛土
55　2.5Y8/2灰白　細砂　5Y6/1灰シルトが層状に混じる　2182盛土
56　10Y4/1灰　中砂混シルト　2182盛土
57　10Y5/1灰　中砂混シルトに5Y7/2灰白中砂が混じる　2182盛土
58　10Y5/1灰　中砂混シルト　混じる中砂は56層よりやや多い　2182盛土
59　5Y5/1灰　中砂混シルト　シルトと中砂が58層程混ざりきっていない　2182盛土
60　5Y5/1灰　中砂混シルト　59層よりシルトがやや多い　2182盛土
61　5Y5/2灰オリーブ　中砂混シルト　質は58層に似る　2182盛土
62　5Y4/1灰　中砂混シルト　シルトが60層より多い　2182盛土
63　5Y6/2灰オリーブ　中砂混シルト　2182盛土
64　5Y6/2灰オリーブ　中砂混シルト　63層より中砂が多い　2182盛土
65　2.5GY4/1暗オリーブ灰　中砂混砂質土　2182盛土
66　5Y4/2灰オリーブ　中砂混シルト　2182盛土
67　5Y4/1灰　粘質土に5Y7/2灰白中砂がブロックで混じる　2182盛土
68　5Y3/1オリーブ黒　粘質土　2182盛土
69　N7/0灰白　細砂に植物遺体が層状に多量に混じる　2182盛土
70　2.5Y7/2灰黄　粗砂　2182堆積土
71　2.5Y4/2暗灰黄　シルト　一部中砂混　7面水田耕土
72　5Y3/1オリーブ黒　シルト　ややしまる　8面水田耕土
84　10YR3/1黒褐　植物遺体層　2182盛土
85　2.5Y6/2灰黄　細砂　一部中砂混　2182盛土
87　5Y4/1灰　粘土　2182盛土
88　10YR3/1黒褐　植物遺体層　2182盛土
※　56～64、質の似た盛土の大きなまとまりとなる。

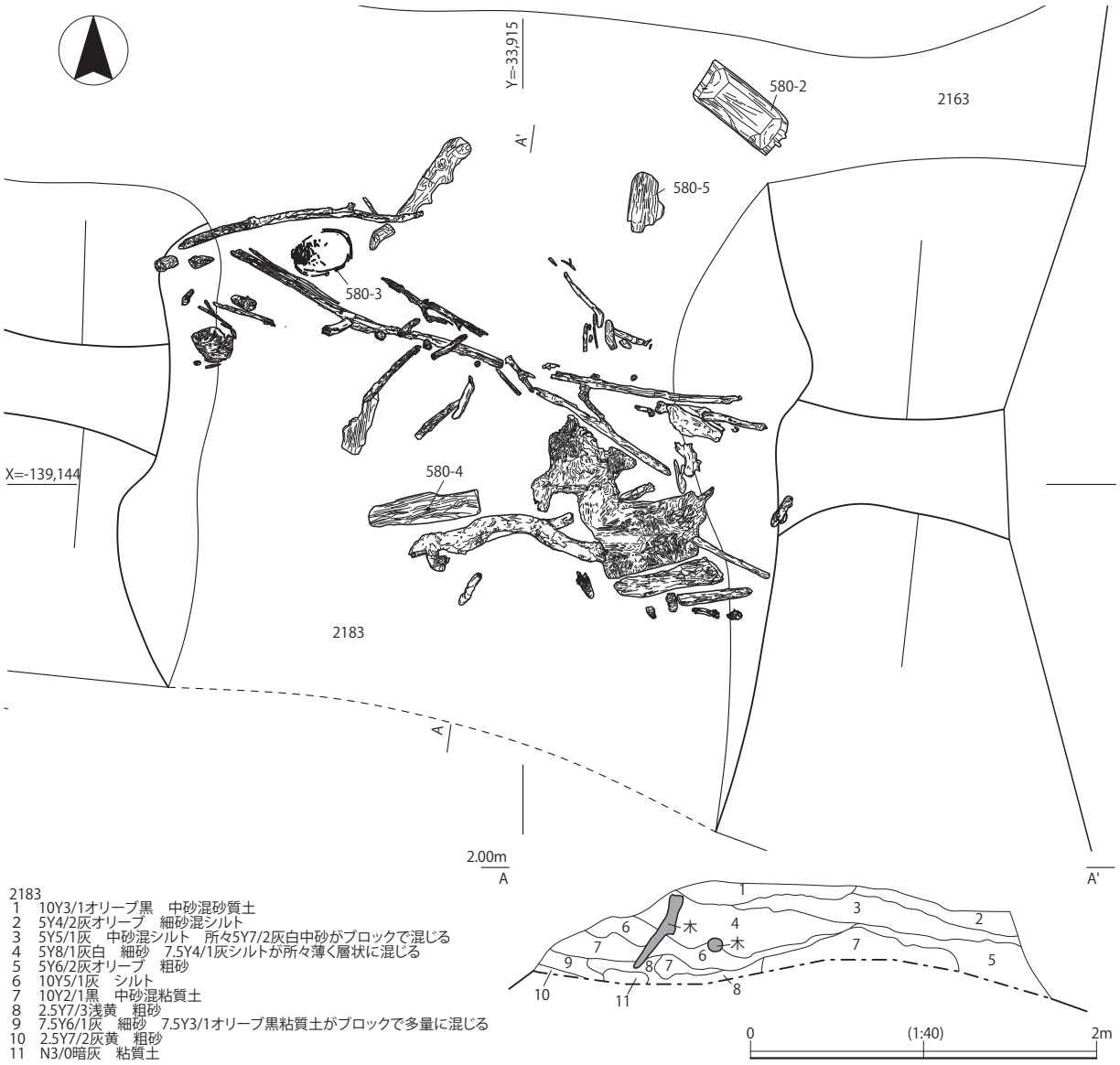
図576　3区　第9遺構面　2182堤防修築部平・断面図

もので、閂を通す部分がすり減っている。扉材として使用できなくなったため転用したとみられる。2は流路の東端底部付近からほぼ完形で出土した。

5面から9面にかけて検出した一連の流路はすべて基本的に同じ位置で検出していて、断面観察でもその連続性が確認でき、すべて同一の流路の各時期における状況を示すものと言える。他の面でも触れ

たようにその構築方法は中央部分の流路に対して周辺の水田耕土と同質の土を両側に盛り、その両側に杭を置き横板を設置して土留めとし堤防を構築していた。後述する堤防修築部では修築に敷葉工法が採用されていた。修築箇所以外でも敷葉を検出しており、この工法は堤防全体で用いられていたと思われる。流路が土砂で埋没していくと堤防を更に高くする行為を積み重ね、このように流路が連続することとなったものと見られる。

2182 堤防修築部（図 576・578、図版 37・38）　幅 3.77 m の範囲で、2163 流路の堤防が深さ 0.62 m 決壊し、その後に修築されたものである。修築には樹皮もしくはアシ等の草本等を用いた敷葉工法が使用されており、用いられた敷葉を部分的に検出した。その工法は①洪水等でもたらされた粗砂（図 576 － 70 層）が残る堤防決壊部に杭を２列に設置、②杭の内側に土留め用の木材を設置、③２列の杭の間に敷葉を行う（図 576 － 87・88 層）、④砂と植物をその上に盛る（図 576 － 69・85 層）、⑤２列の杭の間に再度敷葉を行う（図 576 － 84・68 層）、⑥２列の杭の外側に土を盛る（図 576 － 67 層）、⑦２列の杭の外側の土盛に付け加える形で流路側へと土を盛っていく（図 576 － 55・58 ～ 64・66 層）、⑧２列の杭の外側で土を上にさらに盛る（図 576 － 65 層）、⑨２列の杭の外側の土盛に付け加える形で流路



2183
1　10Y3/1オリーブ黒　中砂混砂質土
2　5Y4/2灰オリーブ　細砂混シルト
3　5Y5/1灰　中砂混シルト　所々5Y7/2灰白中砂がブロックで混じる
4　5Y8/1灰白　細砂　7.5Y4/1灰シルトが所々薄く層状に混じる
5　5Y6/2灰オリーブ　粗砂
6　10Y5/1灰　シルト
7　10Y2/1黒　中砂混粘質土
8　2.5Y7/3浅黄　粗砂
9　7.5Y6/1灰　細砂　7.5Y3/1オリーブ黒粘質土がブロックで多量に混じる
10　2.5Y7/2灰黄　粗砂
11　N3/0暗灰　粘質土

図 577　３区　第９遺構面　2183 堤防修築部平・断面図

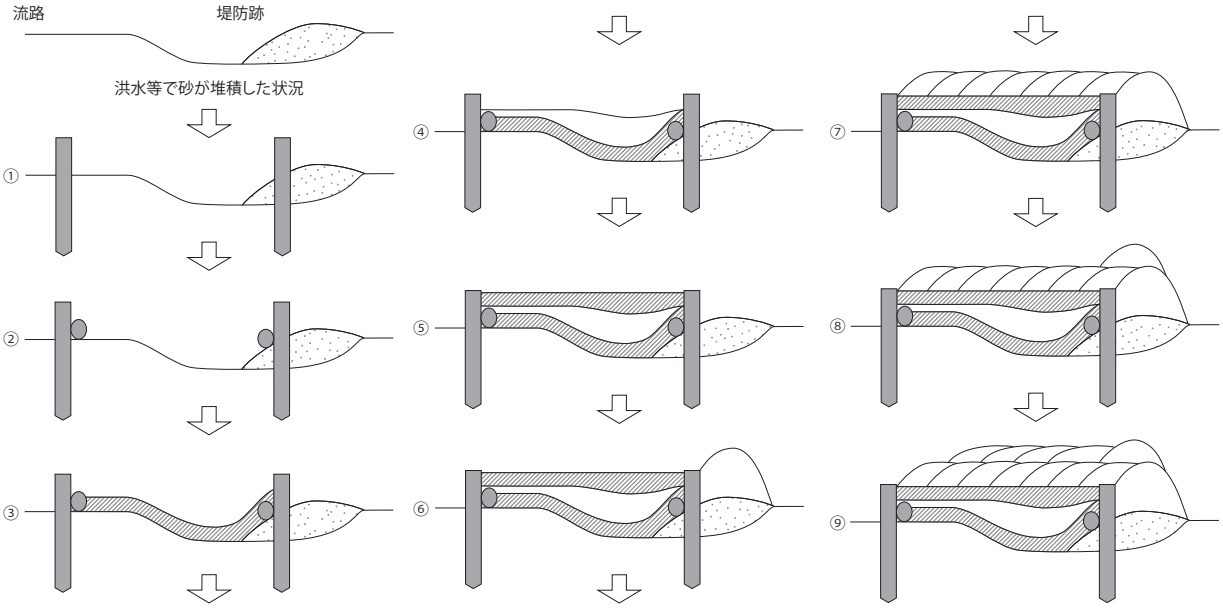
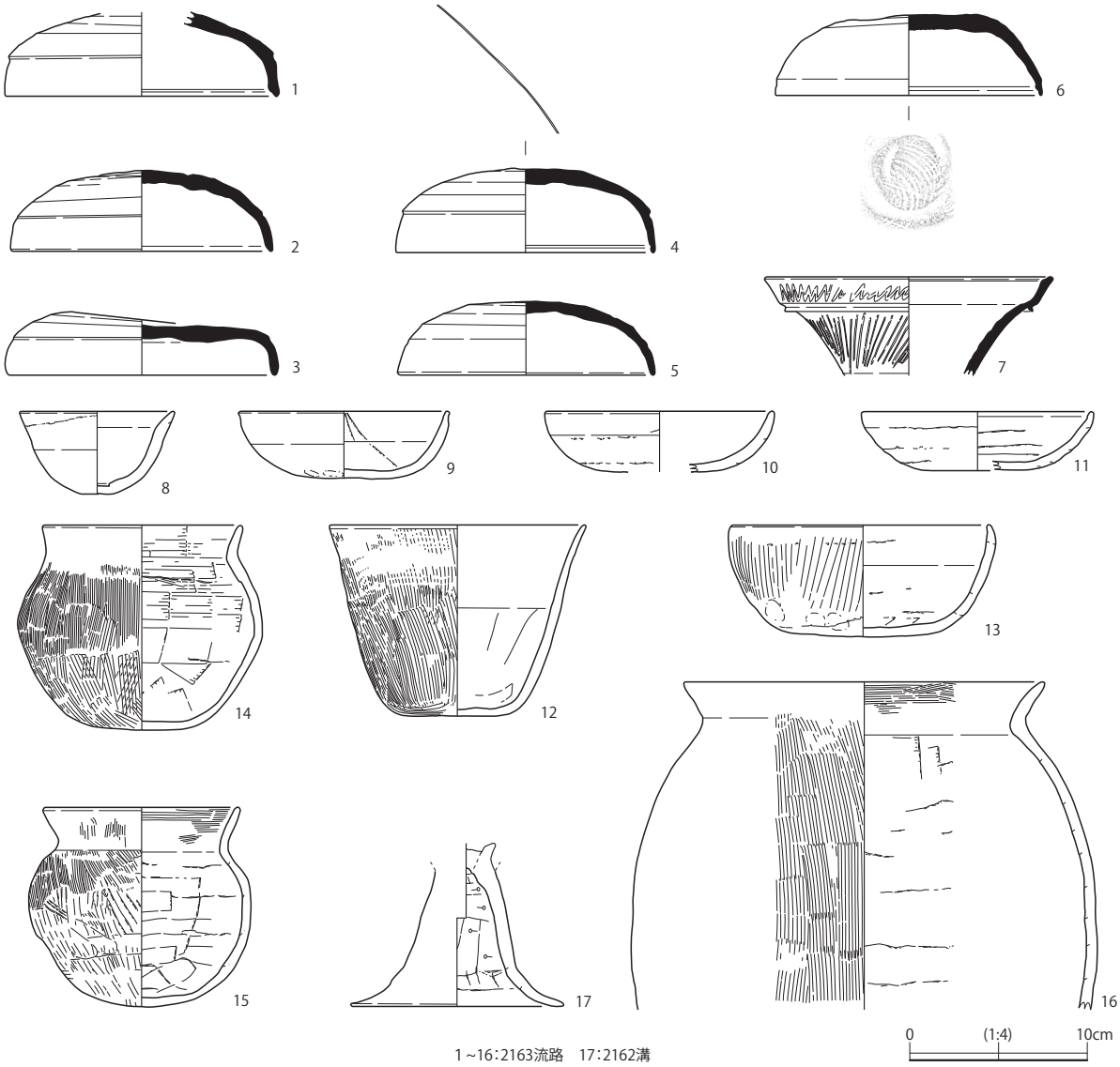


図 578　3 区　第 9 遺構面　2182 堤防修築部模式図



1～16：2163流路　17：2162溝

図 579　3 区　第 9 遺構面　2163 流路・2162 溝出土遺物

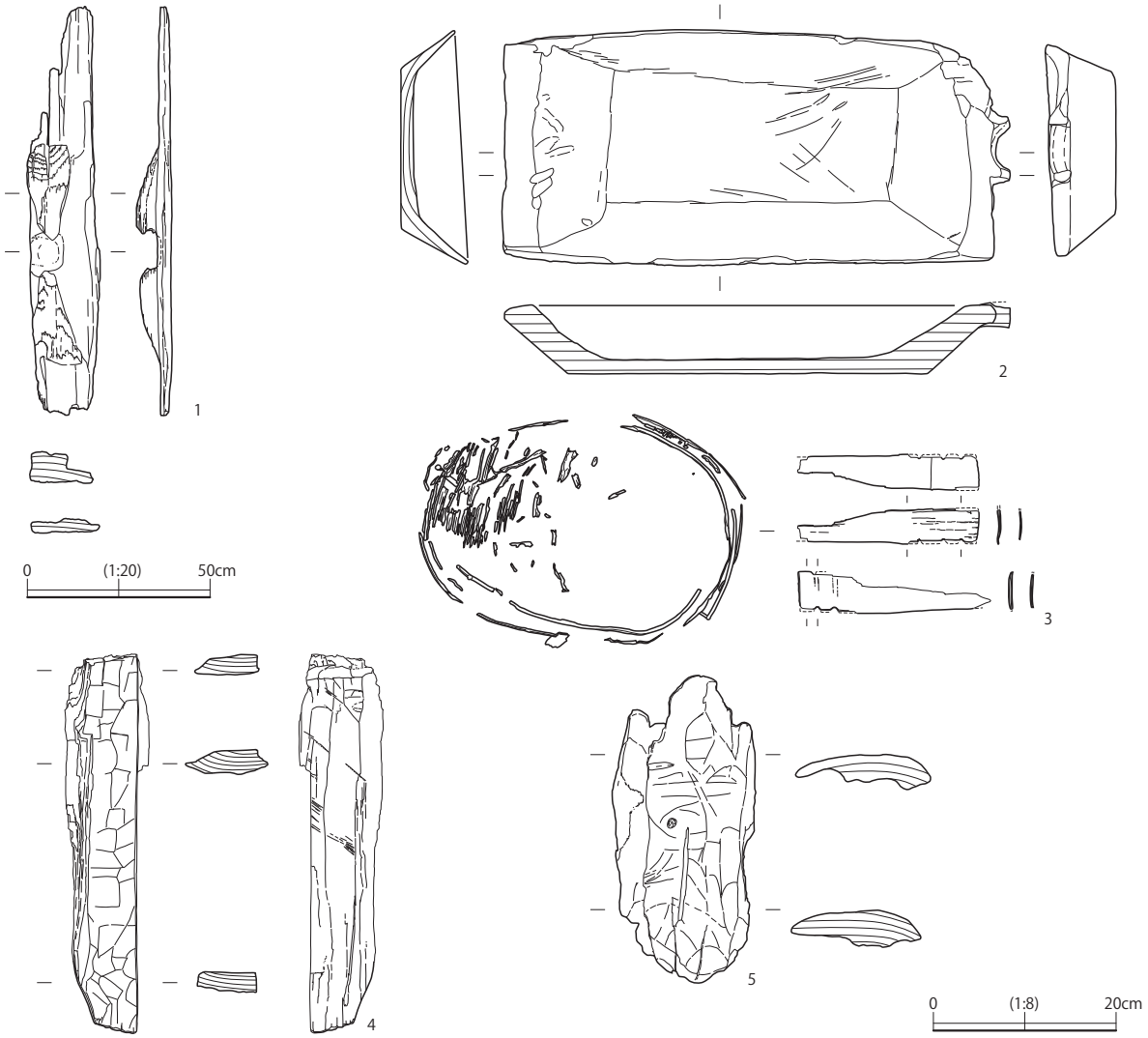


図 580　3 区　第 9 遺構面　2163 流路・2183 堤防修築部　出土遺物

側へと土を盛っていく（図 576 － 56・57 層）、という工程をとっていた（図 578）。

2183 堤防修築部（図 577・580、図版 129）　幅 3.80 mの範囲で、2163 流路の堤防が深さ 0.71 m決壊し、その後に修築されたものである。修築には 2182 堤防修築部同様樹皮もしくはアシ等の草本等を用いた敷葉工法が使用されており、用いられた敷葉を部分的に検出した。修築に用いられた土の内部から木製曲物（図 580 － 3）、加工木材（図 580 － 4）等が出土した。3 は遺存状態が悪く取り上げ時に細片となったが、検出時には長径約 35cm、短径約 25cm の楕円形を呈していた曲物である。曲物材の幅は 3.8cm で、枠の接合部にあたる端部には紐等を引掛けるための加工が片側は 2 ヶ所、もう片側は 3 ヶ所つけられていた。また端部のうち一方には紐状のものが巻かれていた痕

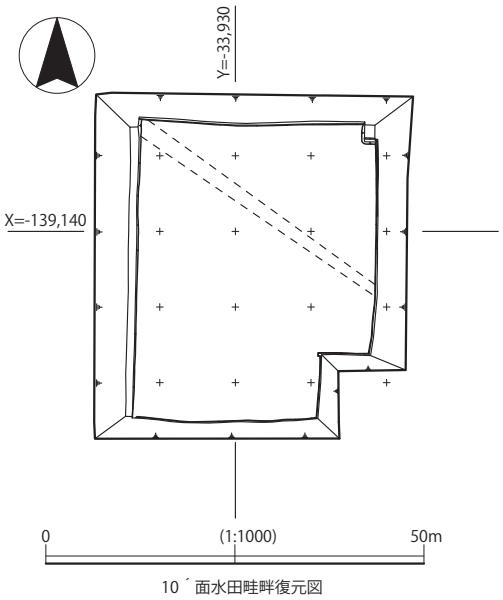


図 581　3 区　第 10′ 遺構面　畦畔平面図

跡があった。曲物底部の遺存はなかった。

2162 溝（図 575・579、図版 129）　長さ 2.16 m、幅 0.70 m、深さ 0.21 mの溝である。調査区北西端付近に位置する。2163 流路の北側堤防状に位置し、流路からの導水溝である可能性がある。土師器高坏（図 579 － 17）等が出土した。

10. 第 10 ´ 遺構面（図 581）

調査中には面としては確認することができず、第 10 遺構面到達後に断面調査においてその存在を確認した。基本層序における 6-1 面に対応し、弥生時代中期の水田面である（図 581）。弥生時代の遺構面であるため、古墳時代の遺構面である第 9 遺構面と明確に区別するため、名称を第 10 ´ 遺構面とした。

遺構は、中期に属する大畦畔を 1 基確認した。この畦畔は、調査区の中央北寄りを南東から北西方向へと向かっている畦畔で、南東側での幅 1.30 m、高さ 0.34 m、北西側での幅 2.28 m、高さ 0.54 mで、

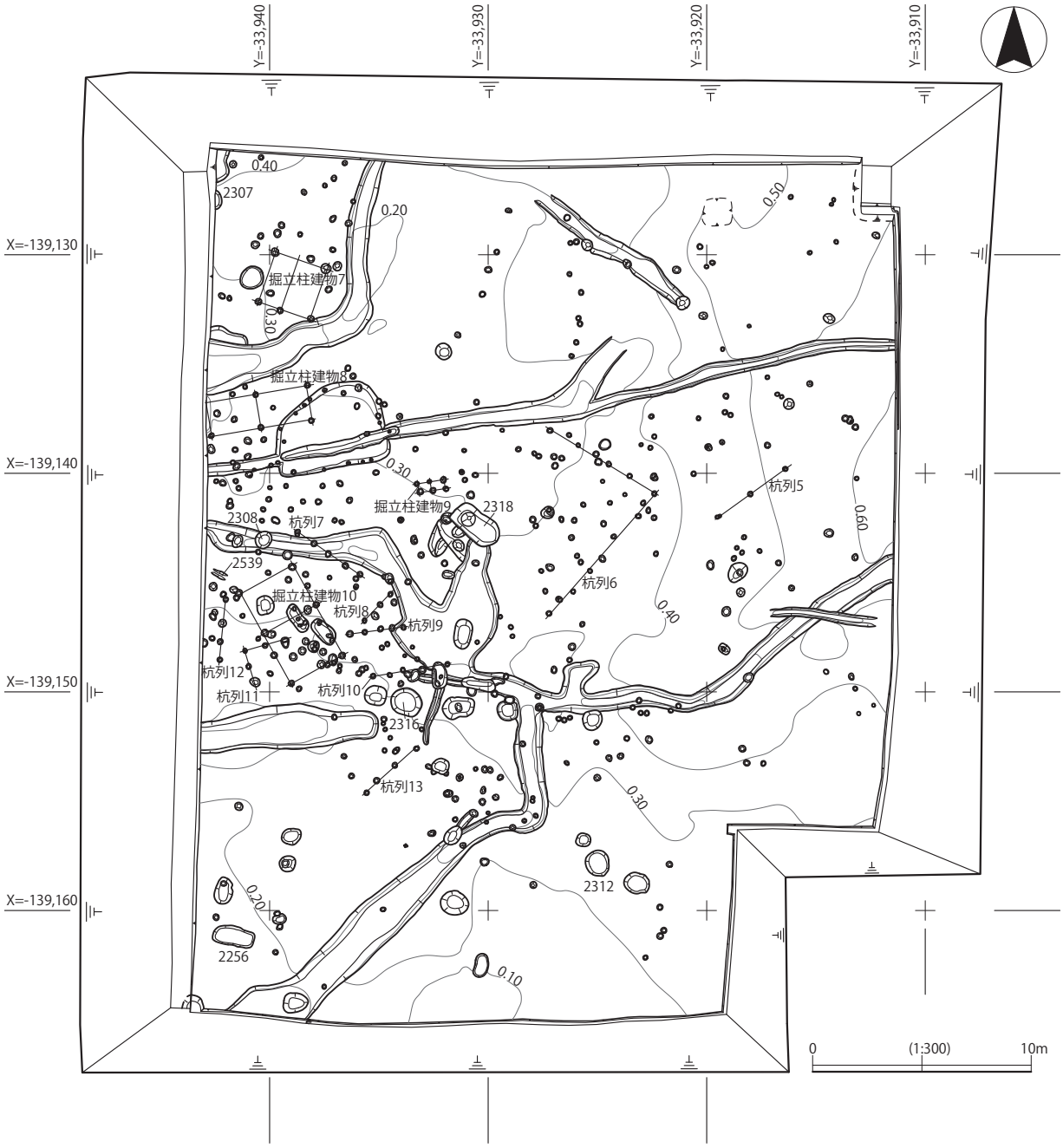


図 582　3 区　第 10 遺構面　平面図

推定できた長さは 40.2 mである。この畦畔を規範として、他の調査区に見られたような区画の水田が展開していたものとみられるが、本調査区においては検出することが出来なかった。

11. 第 10 遺構面（図 582、図版 38）

第 10 遺構面は、基本層序における 6-4b 面に対応する遺構面で、弥生時代中期の遺構面である。第 10 遺構面の調査で確認した遺構は、流路 3 本、溝 11 本、土坑 377 基、柱穴 67 基（うち復元できた掘立柱建物 4 棟、杭列 9 基）である（図 582）。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. ＋ 0.505 m、北西隅 T.P. ＋ 0.436 m、南東隅 T.P. ＋ 0.270 m、南西隅 T.P. ＋ 0.149 mであった。調査区の全面で集落面を確認したが、遺物の出土は遺構検出数に比して少量であった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

掘立柱建物 7（図 583）　梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、梁間 2.43 m、桁行 2.51 mである。柱間は桁行 1.05 ～ 1.48 mである。柱穴は 5 カ所認められ、北側中央のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 0.28 ～ 0.4 mの円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.116 ～ 0.211 mであった。調査区の北西に位置する。

掘立柱建物 8（図 583）　梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、梁間 1.60 m、桁行 4.65 mである。柱間は桁

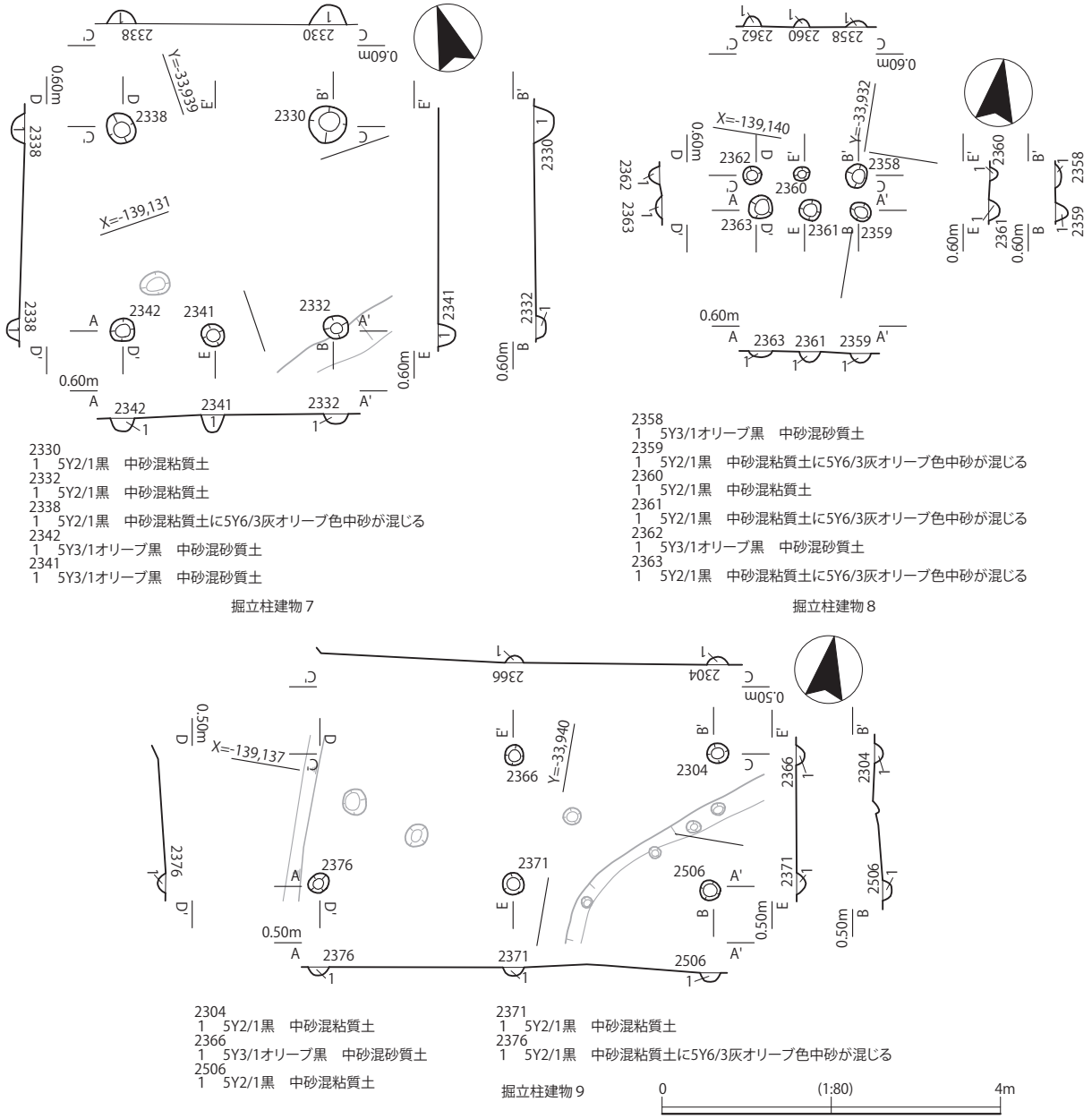


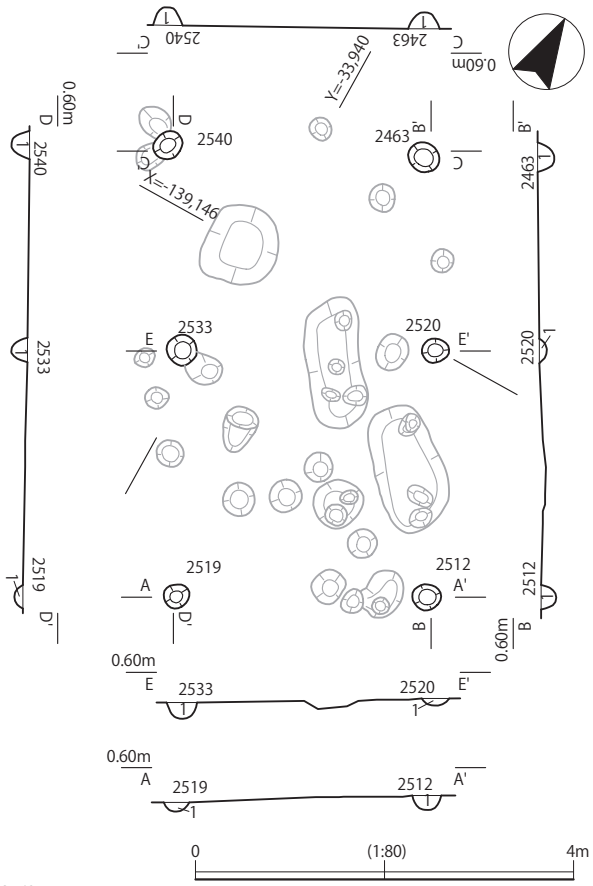
図 583　3 区　第 10 遺構面　掘立柱建物 7 ～ 9 平・断面図

行 2.30 ～ 2.38 mである。柱穴は 5 カ所認められ、北西隅のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 0.27 ～ 0.19 mの円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.045 ～ 0.148 mであった。調査区の北寄り西端に位置する。

掘立柱建物 9（図 583） 梁間 1 間、桁行 2 間の構造物で、梁間 0.43 m、桁行 1.27 mである。柱間は桁行 0.60 ～ 0.67 mである。柱穴は 6 カ所認められた。柱穴掘形は長径 0.24 ～ 0.26 mの円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.131 ～ 0.223 mであった。調査区の中央西寄りに位置する。建物と呼ぶには規模が小さく、何らかの構造物と見られる。

掘立柱建物 10（図 584） 梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、梁間 2.73 m、桁行 4.81 mである。柱間は桁行 2.02 ～ 2.65 mである。柱穴は 6 カ所認められた。柱穴掘形は長径 0.27 ～ 0.33 mの円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.104 ～ 0.259 mであった。調査区の西端に位置する。

杭列 5（図 585） 長さ 3.83 mで、柱穴 3 基からなる南西－北東方向の杭列である。柱穴間隔は 1.83 ～ 2.00 mで、柱穴掘形は長径 0.23 ～ 0.29 mの円形もしくは不整形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.318 ～ 0.414 mであった。調査区の東寄りに位置する。



2463
1　5Y2/1黒　中砂混粘質土に5Y6/3灰オリーブ色中砂が混じる
2520
1　5Y2/1黒　中砂混粘質土に5Y6/3灰オリーブ色中砂が混じる
2512
1　5Y2/1黒　中砂混粘質土
2519
1　5Y2/1黒　中砂混粘質土に5Y6/3灰オリーブ色中砂が混じる
2533
1　5Y2/1黒　中砂混粘質土
2540
1　5Y2/1黒　中砂混粘質土に5Y6/3灰オリーブ色中砂が混じる
掘立柱建物10

図 584　3 区　第 10 遺構面　掘立柱建物 10 平・断面図

杭列 6（図 585） 長辺 7.27 m×短辺 5.61 mで、柱穴 11 基からなる。南西－北東方向の杭列と北西－南東方向の杭列が、東角で柱穴を共有している。柱穴間隔は 0.81 ～ 1.68 mで、柱穴掘形は長径 0.24 ～ 0.30 mの円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.131 ～ 0.276 mであった。柱穴のうち 2305 柱穴一基のみ腐滅した柱痕が観察され、その直径は 0.07 mであった。調査区の中央付近に位置する。

杭列 7（図 585） 長さ 3.48 mで、柱穴 5 基からなる北西－南東方向の杭列である。柱穴間隔は 0.77 ～ 0.97 mで、柱穴掘形は長径 0.20 ～ 0.34 mの円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.195 ～ 0.268 mであった。調査区の中央西寄りに位置する。

杭列 8（図 586） 長さ 1.68 mで、柱穴 3 基からなる南西－北東方向の杭列である。柱穴間隔は 0.69 ～ 0.99 mで、柱穴掘形は長径 0.24 ～ 0.26 mの円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.148 ～ 0.264 mであった。調査区の中央西寄りに位置する。

杭列 9（図 586） 長さ 2.48 mで、柱穴 5 基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は 0.52 ～ 0.74 mで、柱穴掘形は長径 0.23 ～ 0.31 mの円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.161 ～ 0.241 mであった。調査区の中央西寄りに位置する。

杭列 10（図 586）　長さ 3.46 mで、柱穴 5 基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は 0.64 ～ 1.18 mで、柱穴掘形は長径 0.23 ～ 0.31 mの円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.158 ～ 0.218 mであった。調査区の中央西寄りに位置する。杭列 9 と杭列 10 は近接した位置でほぼ平行につくられており、何らかの通路等の構造物の存在を示す可能性があるとみられる。

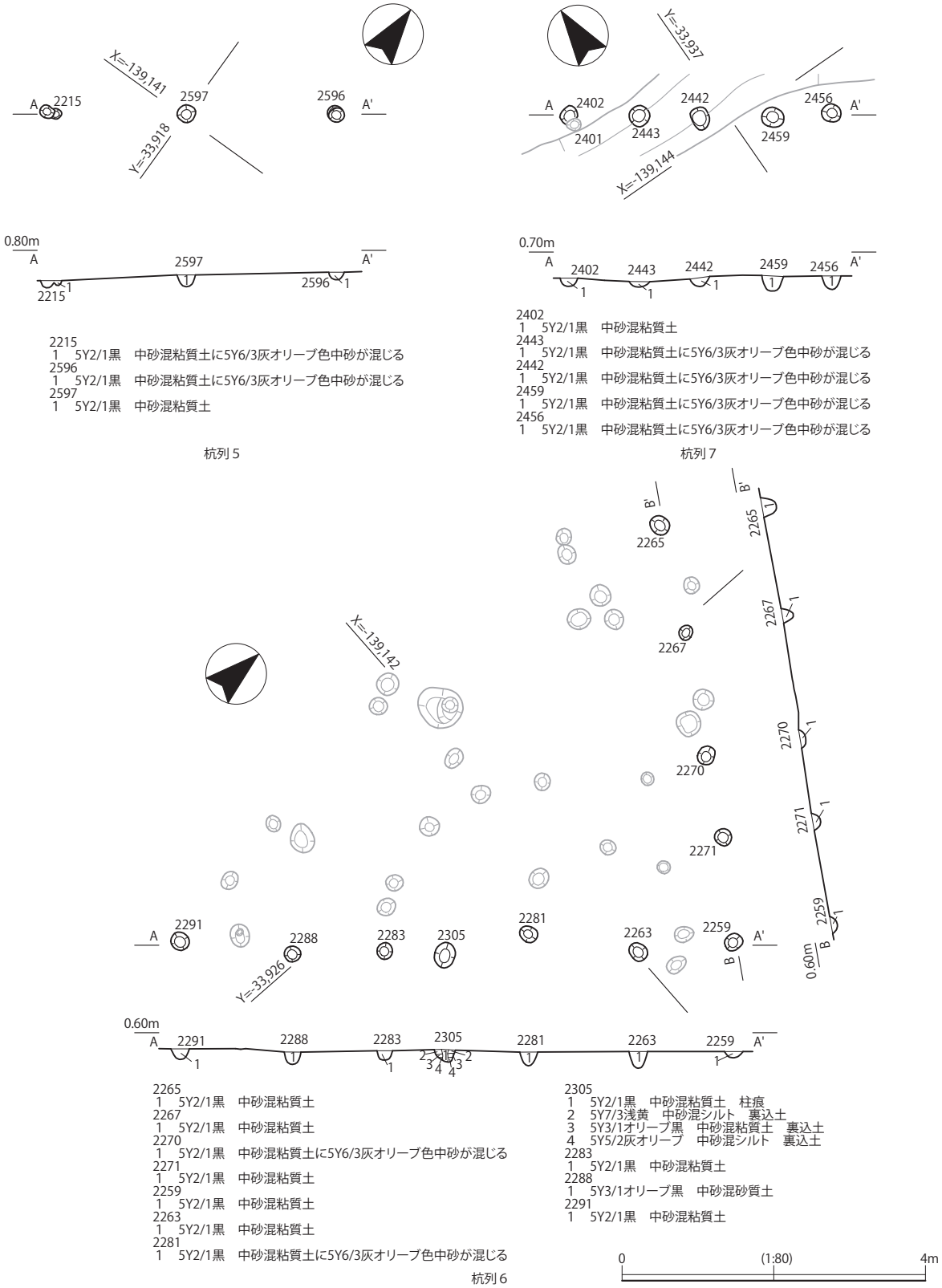


図 585　3 区　第 10 遺構面　杭列 5 ～ 7 平・断面図

杭列 11（図 586）　長辺 1.90 m×短辺 1.52 mで、柱穴 5 基からなる。東西方向の杭列と南北方向の杭列が、北西角で柱穴を共有している。柱穴間隔は 0.74 ～ 0.96 mで、柱穴掘形は長径 0.21 ～ 0.49 mの円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.104 ～ 0.165 mであった。調査区の中央西端に位置する。

杭列 12（図 586）　長さ 2.80 mで、柱穴 4 基からなる南北方向の杭列である。柱穴間隔は 0.83 ～ 1.08 mで、柱穴掘形は長径 0.24 ～ 0.36 mの円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.047 ～ 0.182 mであった。調査区

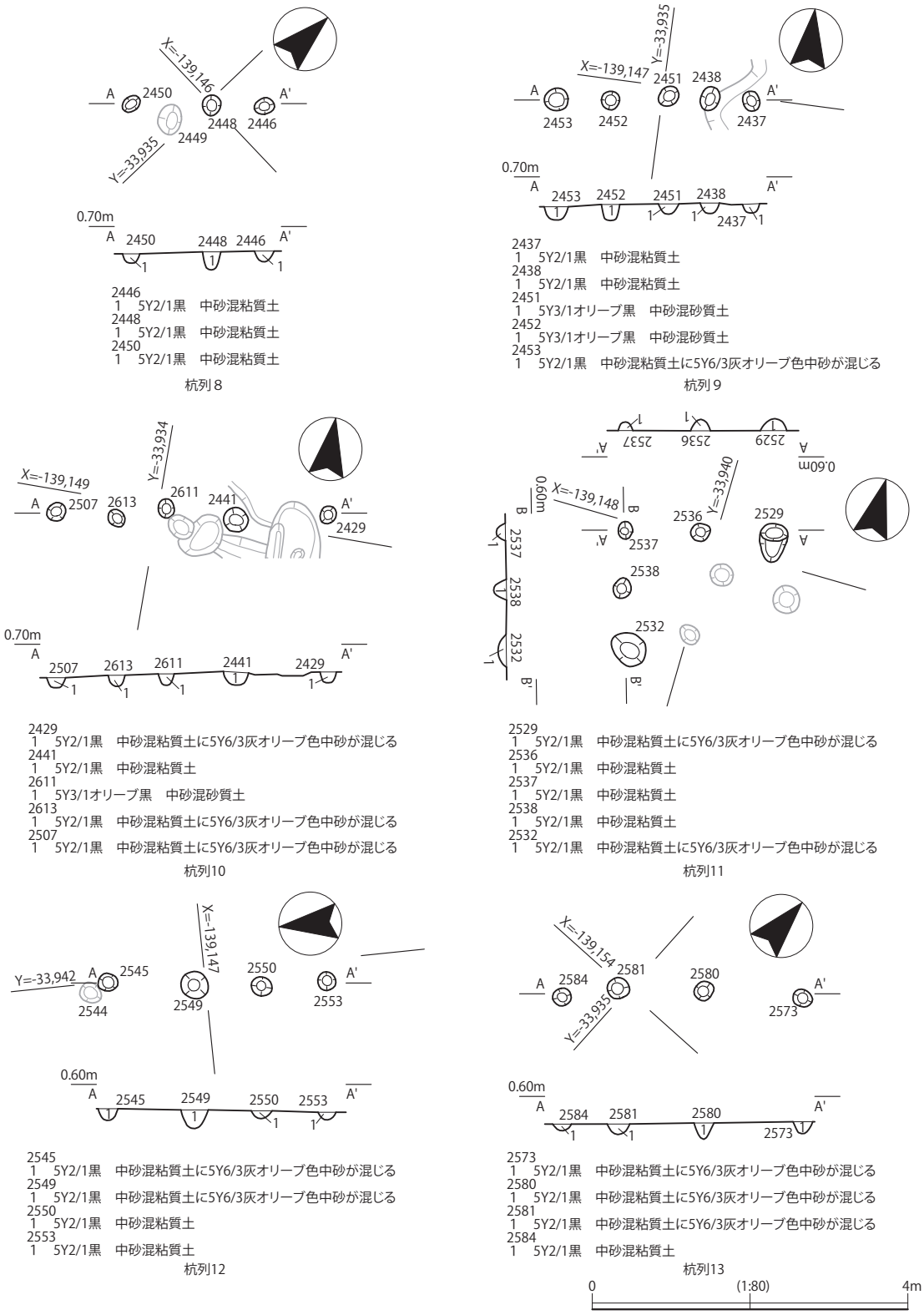
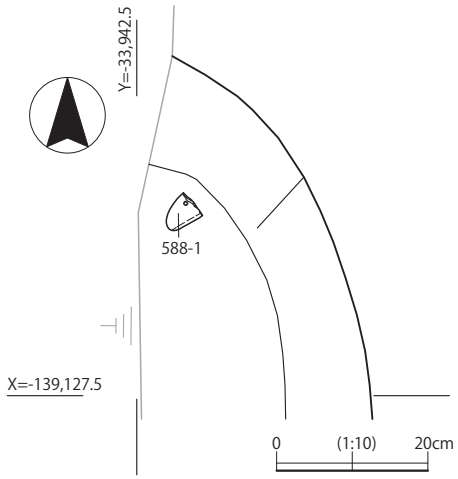
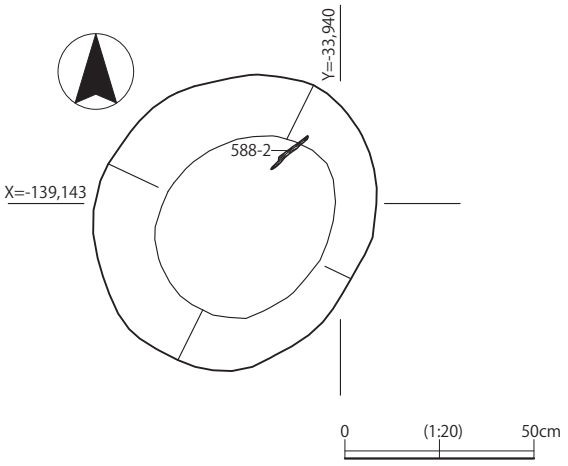


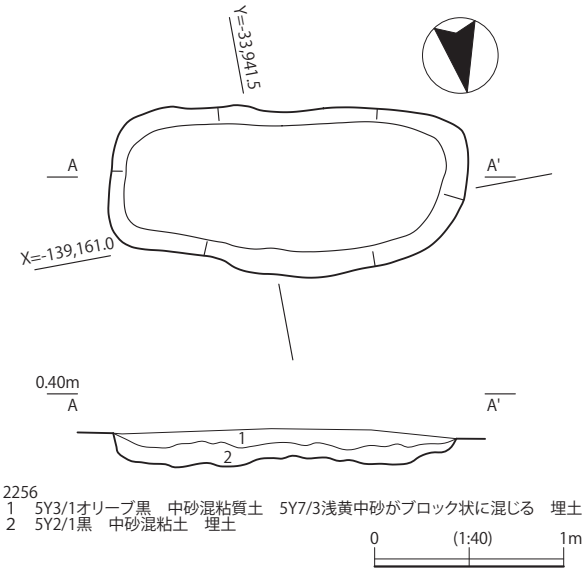
図 586　３区　第 10 遺構面　杭列８～ 13 平・断面図



2307土坑

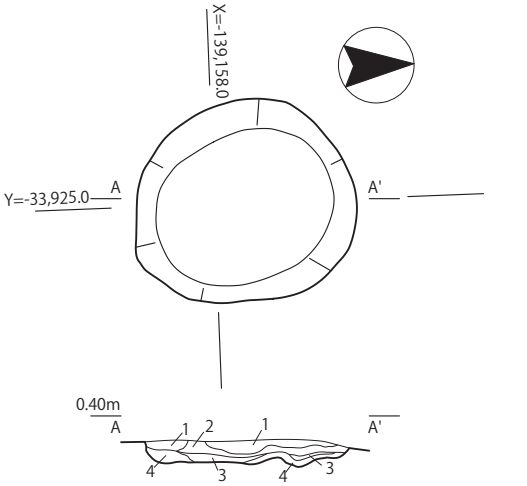


2308土坑



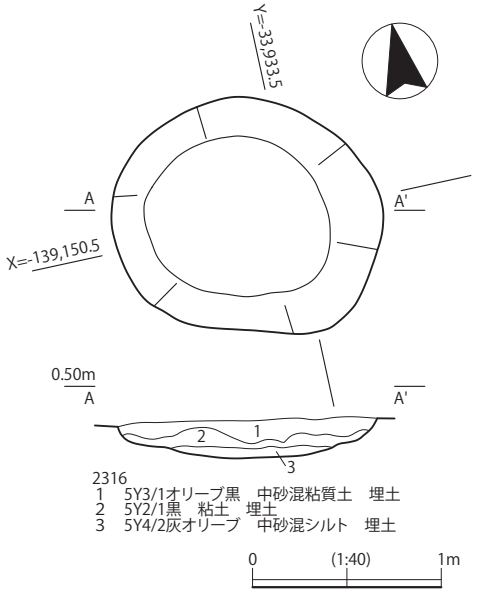
2256
1　5Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土　5Y7/3浅黄中砂がブロック状に混じる　埋土
2　5Y2/1黒　中砂混粘土　埋土

2256土坑



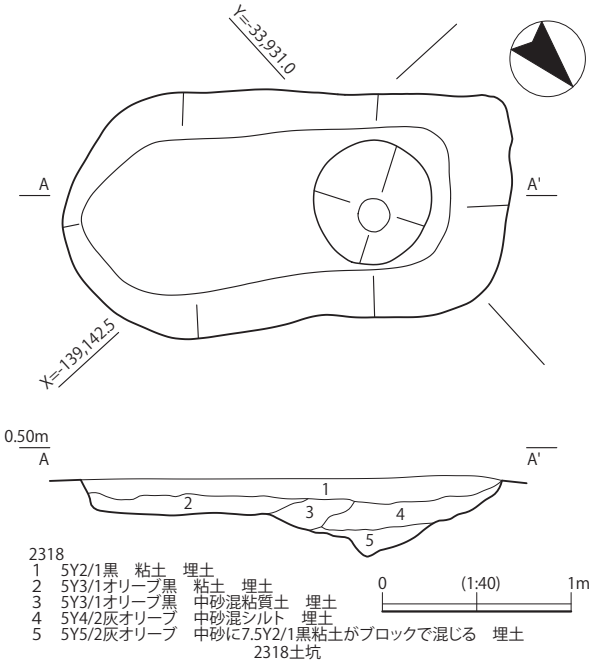
2312
1　N2/0黒　中砂混粘質土　埋土
2　5Y2/1黒　粘土　埋土
3　5Y3/2オリーブ黒　粘土　埋土
4　5Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土　埋土

2312土坑



2316
1　5Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土　埋土
2　5Y2/1黒　粘土　埋土
3　5Y4/2灰オリーブ　中砂混シルト　埋土

2316土坑



2318
1　5Y2/1黒　粘土　埋土
2　5Y3/1オリーブ黒　粘土　埋土
3　5Y3/1オリーブ黒　中砂混粘質土　埋土
4　5Y4/2灰オリーブ　中砂混シルト　埋土
5　5Y5/2灰オリーブ　中砂に7.5Y2/1黒粘土がブロックで混じる　埋土

2318土坑

図 587　3 区　第 10 遺構面　2256・2307・2308・2312・2316・2318 土坑平・断面図

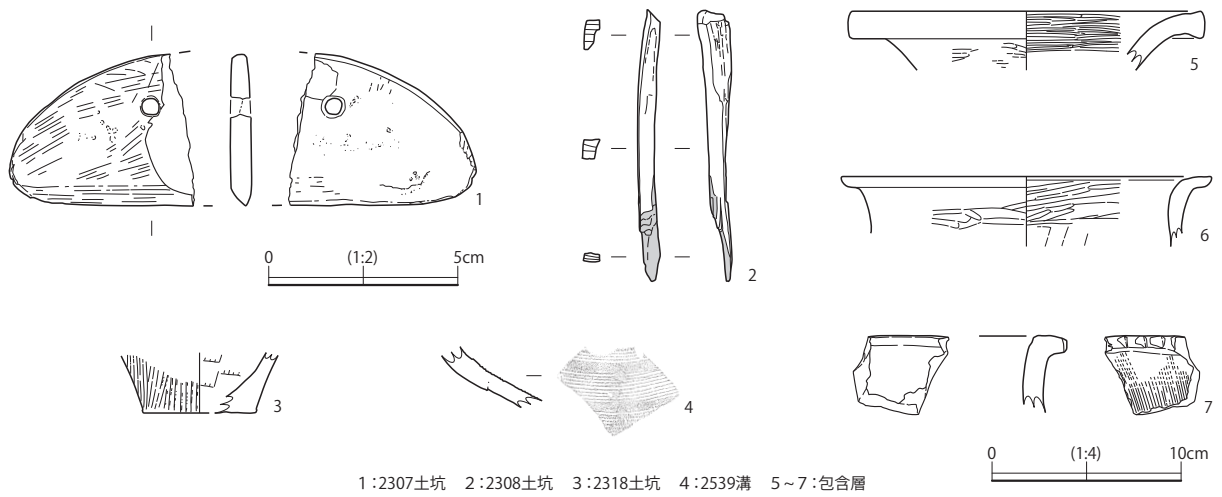


図 588　3 区　第 10 遺構面　出土遺物

の中央西端に位置する。

杭列 13（図 586）　長さ 3.06 mで、柱穴 4 基からなる南西－北東方向の杭列である。柱穴間隔は 0.76 ～ 1.28 mで、柱穴掘形は長径 0.24 ～ 0.27 mの円形で、柱穴底は T.P. ＋ 0.071 ～ 0.177 mであった。調査区の南西寄りに位置する。

2539 溝（図 582・588、図版 129）　長さ 0.74 m、幅 0.32 m、深さ 0.07 mで断面Ｕ字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。調査区の中央西端に位置する。遺物は弥生土器壺（図 588 － 4）等が出土した。4 は壺頸部片で、櫛描文が施されている。

2256 土坑（図 587）　長軸 1.89 m、短軸 0.88 m、深さ 0.15 mで隅丸方形を呈する。調査区の南西隅に位置する。

2307 土坑（図 587・588、図版 38・129）　長軸 0.87 m、検出できた短軸 0.30 m、深さ 0.12 mで円形の遺構の約半分を検出した。調査区の北西隅に位置する。遺物は石庖丁（図 588 － 1）等が出土した。1 は緑泥片岩製である。

2308 土坑（図 587・588、図版 38・129）　最大径 0.81 m、深さ 0.16 mで円形を呈する。調査区の中央西端に位置する。遺物は火付棒（図 588 － 2）等が出土した。2 は長さ 14.3cm で下端が焼け焦げている。火鑽杵（火鑽棒）等として用いられ、先端の焼損により遺棄されたとみられる。

2312 土坑（図 587）　最大径 1.20 m、深さ 0.15 mで円形を呈する。調査区の南寄りに位置する。

2316 土坑（図 587）　最大径 1.43 m、深さ 0.21 mで円形を呈する。調査区のやや南西寄りに位置する。

2318 土坑（図 587・588、図版 129）　長軸 2.40 m、短軸 1.18 m、深さ 0.41 mで隅丸方形を呈する。調査区のほぼ中央に位置する。遺物は弥生土器甕（図 588 － 3）等が出土した。3 はいわゆる生駒西麓産の胎土である。

以上の 2256・2312・2316・2318 土坑を含め同様の形態や規模を持つ土坑は土壙墓や井戸、大型建物の柱穴の可能性も考慮に入れ調査を行ったがそのような痕跡は検出されず性格等は不明である。

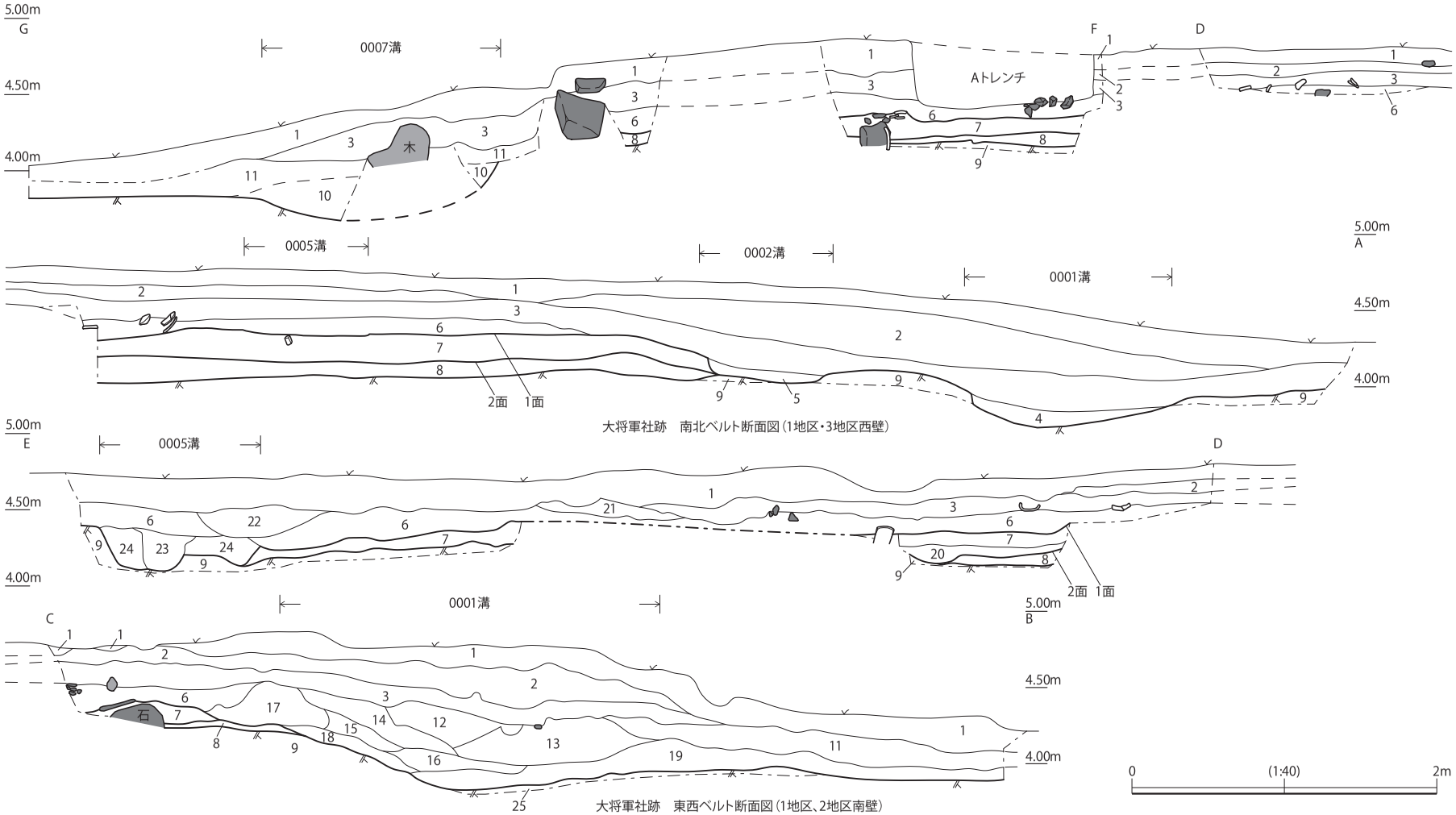
包含層出土遺物（図 588、図版 129）　このほか包含層出土遺物として、弥生土器広口壺（図 588 － 5）、弥生土器甕（図 588 － 6・7）等が出土した。5・6 は内外面ともミガキ調整が施され、いわゆる生駒西麓産の胎土である。7 は口縁部に刻み目を持つ。　（村上 始・實盛良彦）

第４節　大将軍社跡の調査成果（11 －６区、13 －６・７区）

１．大将軍社跡の概要と調査経過

大将軍社は、方位の吉凶を司る八将神の一神である大将軍神を祀る神社で、社伝によれば砂村鎮座の神社であったが明治 44 年 12 月８日に延喜式神名帳に記載のある式内社の津桙神社に付近の馬守神社と共に合祀され、忍陵神社と改名された。『四條畷市史』第４巻では、明治 35 年生まれの古老の話として、大将軍社では「七月三日の夏祭ともなると、一日を休み、夜は百灯明と言って、村人は境内に集まり、素焼の瓦器に灯明を立て、奉納していた」と記述されている（山口 1990、原文は 1983 年７月『広報

図 589　大将軍社跡（11 －６区・13 －７区）平面図



1　10YR2/1黒　砂質土　表土
2　2.5Y7/8黄　砂礫土　しまりがやや弱い　盛土（現代）
3　10YR3/2黒褐　砂質土　しまりがやや弱い　φ3cm程の円礫が多く混じる　旧表土（近世～現代）
4　2.5Y4/1黄灰　粗砂混砂質土　0001溝埋土
5　2.5Y4/2暗灰黄　砂質土　0002溝埋土
6　10YR3/3暗褐　砂質土　φ3cm程の円礫が多く混じる　包含層（近世）
7　10YR5/4にぶい黄褐　中砂混砂質土　φ3cm程の円礫が混じる　包含層・1面地山土
8　2.5Y5/2暗灰黄　中砂混砂質土　中砂がやや多い　地山整地層
9　2.5Y6/3にぶい黄　中砂混砂質土　中砂がやや多い　地山層
10　2.5Y3/1黒褐　砂質土　粘性が強い　0006溝埋土
11　2.5Y5/2暗灰黄　砂質土　床土
12　7.5YR6/1褐灰　砂質土　粘性弱い　0001溝上層埋土（現代）
13　2.5Y6/3にぶい黄　砂質土　0001溝上層埋土（現代）
14　7.5YR4/2灰褐　砂質土　0001溝中層埋土（近世？）
15　7.5YR4/1褐灰　砂質土　0001溝中層埋土（近世？）
16　7.5YR3/1黒褐　砂質土　0001溝中層埋土（近世？）
17　10YR5/2灰黄褐　砂質土　粘性が弱く、ややしまる　0001溝上層肩土（近世）
18　2.5Y4/2暗灰黄　砂質土　0001溝下層埋土
19　10YR4/1褐灰　砂質土　包含層・0001溝下層埋土
20　7.5YR4/2灰褐　砂質土　包含層（中世）
21　7.5YR3/2黒褐　砂質土　包含層（近世）
22　10YR5/4にぶい黄褐　砂質土　包含層（近世）
23　10YR4/2灰黄褐　砂質土　0005溝埋土
24　10YR5/2灰黄褐　砂質土　一部9層が混質する　0005溝埋土
25　10YR6/2灰黄褐　砂質土　地山層

図 590　大将軍社跡（11－6区）断面図

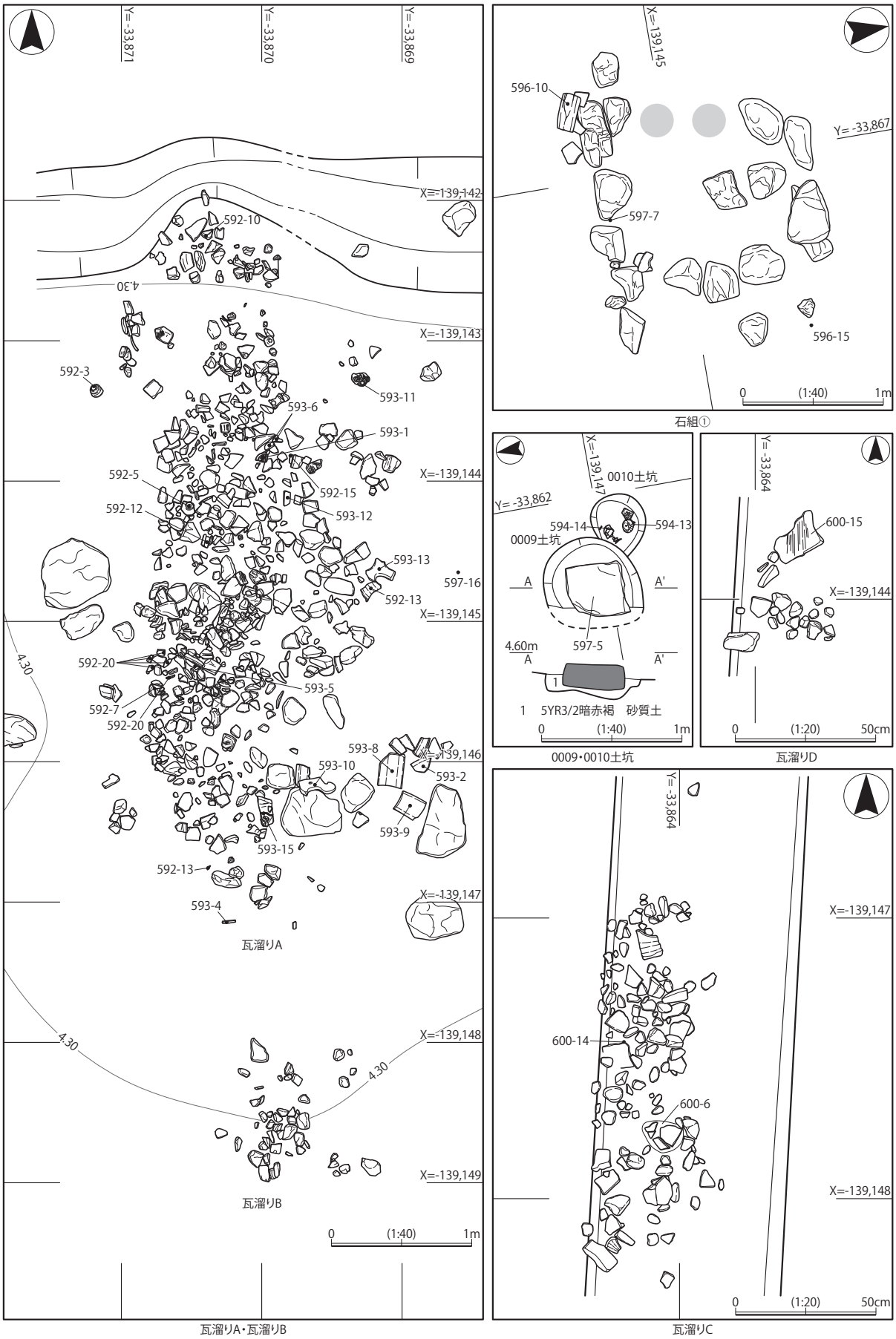


図 591　大将軍社跡（11 － 6 区・13 － 6 ・ 7 区）遺物出土状況図

四條畷』に掲載)。これまでこの神社が創建された年代は不明であった。神社跡は廃絶後も土地の高まりとして残存していて忍陵神社が土地を管理し、東側には里道が存在していた。大型店舗建設事業予定地内に含まれたのに伴い、大阪府の埋蔵文化財取扱い要項に基づき調査を行った。

大将軍社跡の調査は 2011 年度と 2013 年度にまたがって行い、神社本体部分の調査は 2011 年度が 11 －６区、2013 年度が 13 －７区とした。また、神社の一部分に汚水管が埋設される部分は 13 －６区として埋設底まで調査した。2011 年度にまず神社中心部の高まりに４本のトレンチを設定し（Ａ～Ｄトレンチ)、そこで銅鏡等重要遺物の出土や、社殿基礎遺構を検出したため範囲を高まり部全面に拡張し表面遺構を調査した。断面観察用に２本のベルト（Ａ－Ｄ－Ｆ－Ｇ断面：南北方向、Ｂ－Ｃ－Ｄ－Ｅ断面：東西方向）を十字に残し、このベルトで区画した北東側を１地区、北西側を２地区、南東側を３地区、南西側を４地区とした。この区画の境界は南北方向が Y=33,870 ライン、東西方向が X=139,145 ラインにほぼ一致する。その後 2013 年度に未調査部であった断面観察用ベルト部分等と汚水管埋設部の調査を行った。遺構番号は調査年度に関わらず通し番号とした。

２．神社本体部分の調査（図 589・590、図版 39・40・130・131）

神社本体部分の層序は、基本的に１層目に表土があり、２層目に包含層の暗褐色土層が、３層目ににぶい黄褐色土層があり上面が神社遺構検出面（１面）である。４層目は暗灰黄色土層で地山整地層とみられ上面が神社創建時遺構面（２面）である。その下層はにぶい黄色土層で神社遺構の地山にあたる。１層目の表土層内では現代に部分的に盛土を行い、高まり部を北と東に拡張していた。盛土下層の旧表土から昭和 48 年製造の 10 円硬貨が出土しており、盛土施工はこれより後の時期とみられる。神社本体部分の調査で検出した遺構は全て１面に属し、石組１基、瓦溜り２基、溝５基、柱穴３基、土坑５基であった（図 589 ～ 597)。以下、主な遺構の詳細を述べる。

石組①（図版 39）　現状で 17 個の礫から成り、東西長南辺 1.5 m、北辺 1.3 m、南北幅 1.7 mのいびつな方形を呈し、東辺側に東西長 0.4 m、南北幅 1.0 mの張出し部がある。西辺側では２つの礫が抜き取られていた（トーン部)。石組に用いられる礫の上面は T.P.+4.398 ～ 4.565 mであった。近世以降の神社本殿基礎遺構で、東側の張出しは賽銭箱等か向拝状の構造が存在したとみられ、東側が社殿正面の可能性が高い。石組南辺礫脇で寛永通宝（図 597 － 7)、石組南西脇で丸瓦（図 596 － 10）が出土した。

この石組以外にも図示したように１面には多くの礫が検出され、これらは全て上面平坦になるよう設置されている点や、その大きさ等からいずれも建物の基礎等として機能したとみられる。その中には接地面が２面にあたるものもあり、２面段階から礎石を持つ建物が存在していた事が想定される。

瓦溜りＡ（図版 39・40）　南北 5.2 m、東西 2.2 mの範囲で大量の瓦・土器・礫等がまとまって検出されたものである。Ｄトレンチ掘削時に、トレンチ西端の旧表土層除去面で小円礫が集中する範囲を検出し、これは瓦溜りＡの範囲と完全に一致していた。石組①の西 1.5 mで、社殿後方に位置する。近世のものとみられる。出土遺物は多く、図 592 に土器類、図 593 に瓦類を一部図示した。

瓦溜りＢ　南北 1.0 m、東西 1.2 mの範囲で瓦・土器・礫等がまとまって検出されたものである。

0001・0007 溝（図版 40）　2011 年度に別個の溝として確認し、2013 年度に切合いの可能性があった部分（南西屈曲部）を調査し一連の溝と確認した。検出長 35.1 m、最大幅 2.2 m、深さ 0.3 mで平面逆コ字状を呈し、北東端は 13 －２区 7005 溝に、南西端は同区 7002 溝に接続する。溝底部は T.P. ＋ 3.7 m付近でほぼ一定である。南辺北側と西辺東側は段掘り状になっており近世段階のこの溝の名残とみられ、近代に現状の規模に拡張され昭和後期に埋没したとみられる。出土遺物は図 594 － 1 ～ 7 、図

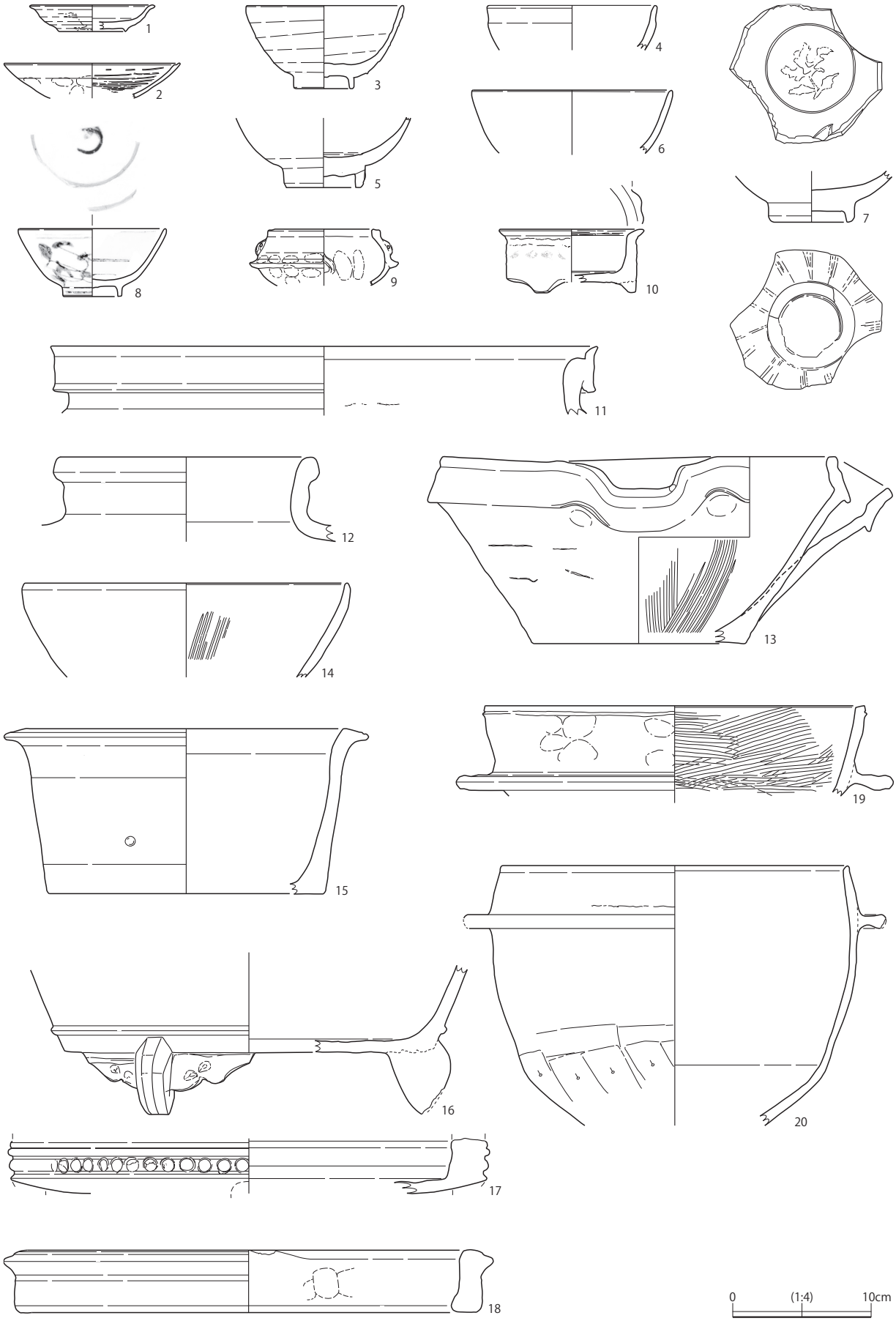


図 592　大将軍社跡（11 － 6 区・13 － 7 区）瓦溜り A 出土遺物（1）

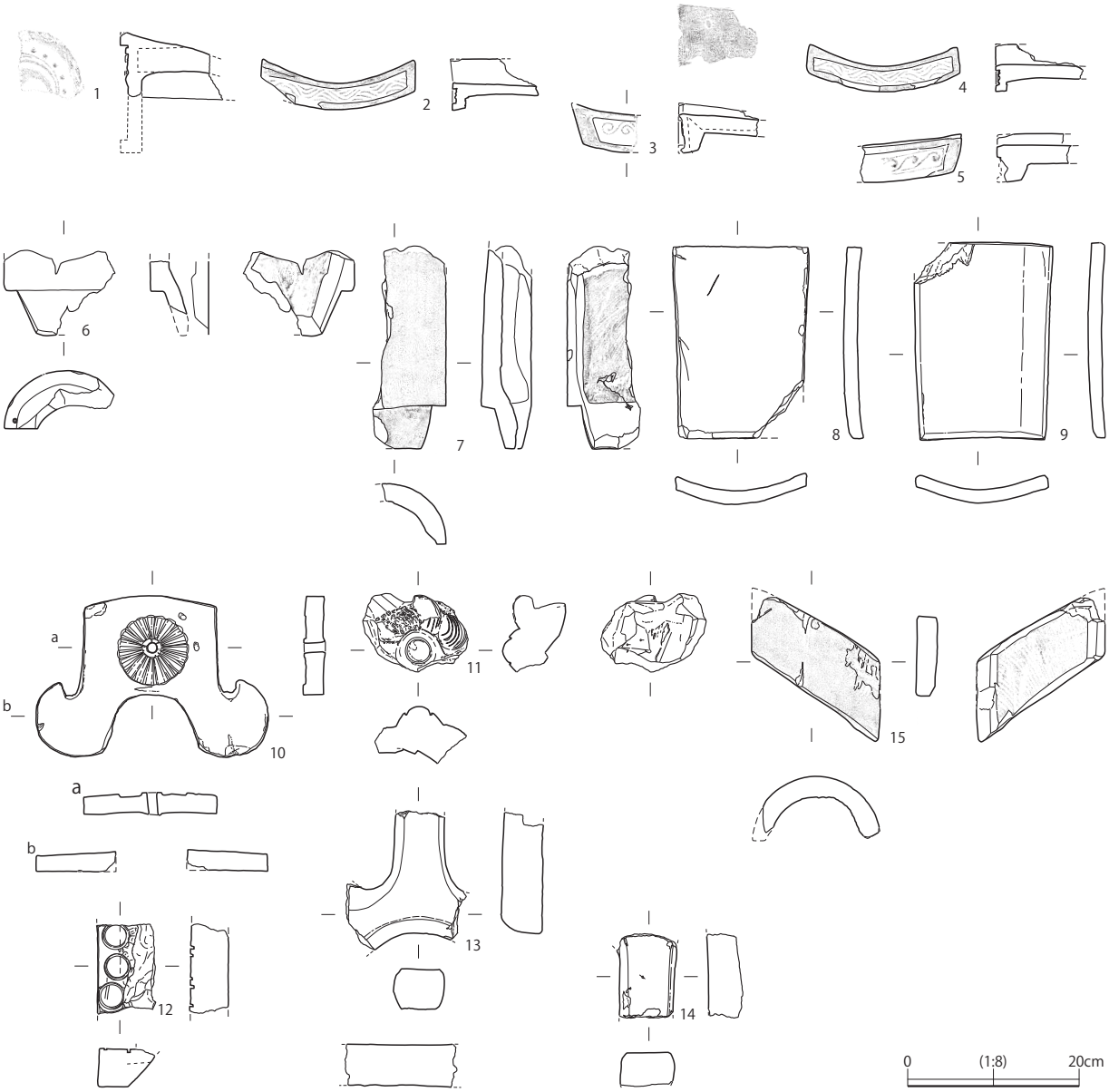


図 593　大将軍社跡（11 － 6 区・13 － 7 区）瓦溜り A 出土遺物（2）

597 － 4。

0002 溝　検出長 10.6 m、最大幅 1.7 m、深さ 0.4 mで近世の溝とみられ、近世段階の 0001・0007 溝と一連の可能性がある。13 － 2 区 7005 溝との接続は不明である。出土遺物は図 594 － 8 である。

0005 溝　長さ 18.3 m、最大幅 1.6 m、深さ 0.25 mで平面コ字状に巡る。近世の溝で、出土遺物は図 594 － 9 ～ 11 である。この溝より内側が神社中心部とみられ最も高まる部分で、T.P. ＋ 4.387 mあった。

0008・0012・0014 柱穴　いずれも直径 0.2 m程で、径 0.1 m程の柱痕が残存していた。調査区北側の 1 地区で検出した。13 － 2 区 7186 柱穴と合わせ、近世～近代の一連の杭列であるとみられる。

0009 土坑（図版 40）　2013 年度の調査で検出した。直径 0.7 m、深さ 0.15 mである。遺物は礎石（図 597 － 5）が出土した。礎石を据え付けるために掘られた遺構である。近世の遺構とみられる。

0010 土坑（図版 40）　2013 年度の調査で検出した遺構である。直径 0.4 m、深さ 0.15 mあり、遺構内の上面付近で土師質土器皿等がまとまって出土した。遺物は図 594 － 12 ～ 14 である。近世の遺構である。

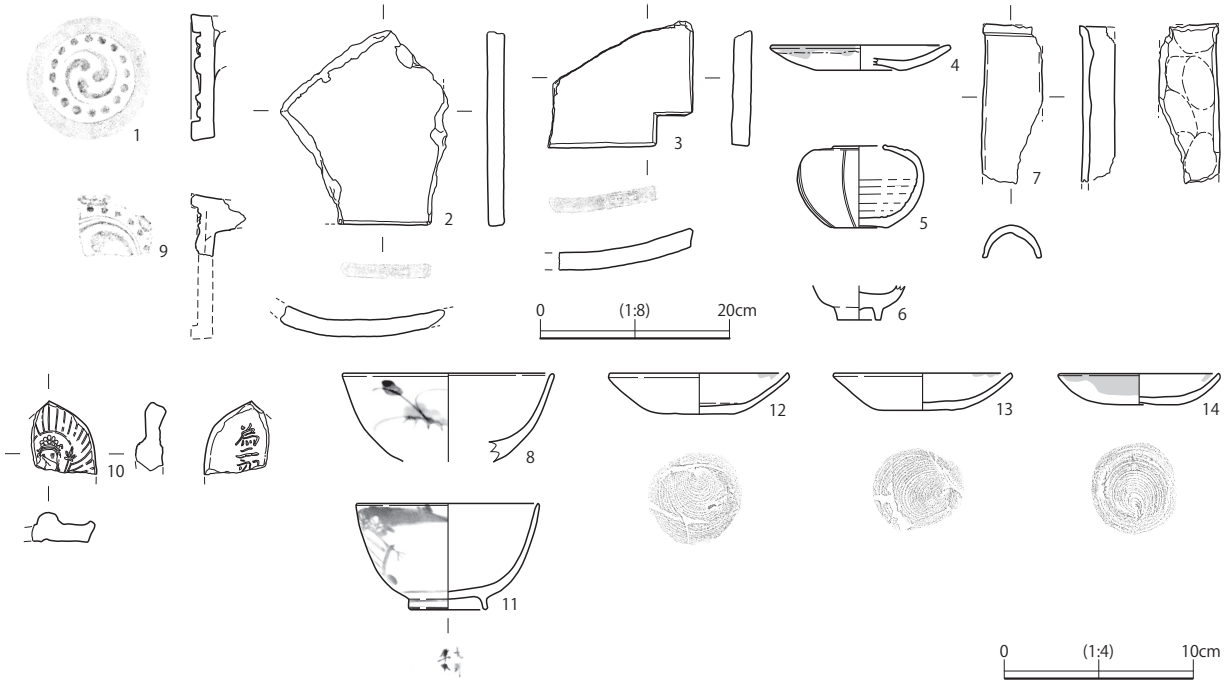


図 594　大将軍社跡（11 － 6 区・13 － 7 区）0001・0002・0005 溝・0010 土坑　出土遺物

３．神社本体部分出土遺物（図版 130・131）

瓦溜りＡ出土遺物　図 592 は瓦溜りＡ出土の土器類で、１は瀬戸系陶器皿で 16 世紀末、２は大和型瓦器碗で 13 世紀中頃、３は外面が刷毛目の陶器で、見込部蛇ノ目釉剥ぎで 17 ～ 18 世紀、４は瀬戸系陶器の天目釉碗で 16 世紀末、５・６は青磁無文碗で 16 世紀前半、７は青磁鎬蓮弁文碗で見込に植物文があり 15 世紀後半～ 16 世紀前半、８は肥前磁器染付碗で 18 世紀後半、９・10 は瓦質土器香炉で９は 16 世紀中頃、10 は 16 世紀後半、11 は信楽焼甕で 15 世紀後半、12 は国産陶器壺で 16 世紀後半、13 は備前焼片口擂鉢で 15 世紀中頃、14 は瓦質擂鉢で 15 世紀、15・16 は瓦質火鉢で 15 は江戸期、16 は 15 世紀の奈良火鉢、17 は瓦質風炉で 15 世紀、18 は瓦質製品で釜敷様の用途か火鉢内での五徳様の用途、19・20 は瓦質羽釜で 19 は 16 世紀前半、20 は 16 世紀とみられる。

図 593 は瓦溜りＡ出土の瓦類である。１は巴文軒丸瓦、２・４は波状文軒平瓦、３・５は唐草文軒平瓦、６・７は丸瓦、８・９は平瓦、10 は鬼板瓦、11・12 は鬼瓦、13・14 は道具瓦、15 は面戸瓦。６は頭部と玉縁部の境の段小口に竹管文。７・15 は外面に布目痕、内面に斜方向のコビキ痕、16 世紀後半以前である。１・３・５～７・11 ～ 15 は中世後期、２・４・８～ 10 は江戸期とみられる。

0001・0007 溝出土遺物　0001 溝出土として取り上げた遺物は図 594 － 1 ～ 7 である。1 は巴文軒丸瓦。２・３は桟瓦、いずれも小口部に「巣瓦仲」銘刻印。１～３は江戸期以降。４は陶器皿、内面全体と外面口縁部に施釉。口縁部に煤が付着し灯明皿、近世～近代。5 は白磁無頸小壺で 17 世紀末～ 18 世紀初頭、６は肥前磁器染付盃で 19 世紀。７は半円筒形土製品。0007 溝出土として取り上げた遺物は図 597 － ４で、花崗岩製の礎石で近世のものとみられる。

0002 溝出土遺物　出土遺物は図 594 － 8 である。肥前磁器染付碗で、18 世紀前半～中頃である。

0005 溝出土遺物　出土遺物は図 594 － 9 ～ 11 である。９は巴文軒丸瓦で中世後期である。10 は土製仏像で、表面は長谷寺式十一面観音像があらわされ、裏面は「為二親…」銘があり、室町期以降のものである。11 は肥前磁器染付碗で底部に「大明年製」銘があり、18 世紀前半～中頃である。

0009 土坑出土遺物　出土遺物は図 597 － 5 である。5 は花崗岩製の台石である。4 カ所に矢穴がある。

図 595　大将軍社跡（11 － 6 区・13 － 7 区）包含層　出土遺物（1）

0010 土坑出土遺物　出土遺物は図 594 － 12 ～ 14 で土師質土器皿。底部糸切、煤付着し灯明皿。近世。

包含層出土遺物（図版 39・130・131）　上記の遺構以外からも、3 層あるいは 6 層の包含層から数多くの遺物が出土した。図化した遺物は土器・土製品として土師質土器皿（図 595 － 1 ～ 6）、陶器灯明具（図 595 － 7）、磁器神酒徳利（図 595 － 8）、磁器染付油壺（図 595 － 9）、須恵器壺（図 595 － 10）、瓦器碗（図 595 － 11）、瓦質火鉢（図 595 － 12・13）、土錘（図 595 － 14）、土製仏像（図 595 － 15・16）、円盤状土製品（図 595 － 17）。1・2 は底部糸切り、1 ～ 4 は口縁部に煤が付着し灯明皿、1 ～ 6 は江戸期。7 は 19 世紀中頃、8 は外面緑色釉で 18 世紀末から 19 世紀前半、9 は 18 世紀後半、10 は平安期、11 は 12 ～ 13 世紀、13 は 15 世紀。15 は表面が右手に錫杖、左手に蓮華を持つ長谷寺式十一面観音像があらわされ、仏像右側に「河劦」（河州と同義）、左側に「圭山」銘がある。裏面には「五百九十六　為一切衆生　上馬□…　□□　施」銘があり、室町時代以降のもの。16 は像下部のみの残存だが 15 と同様の文様とみられ、裏面にも銘文がある。17 は江戸期のもので、最初からこの形で焼成され後の加工はない。

瓦類は巴文軒丸瓦（図 596 － 1）、菊花文軒丸瓦（図 596 － 2・3）、唐草文軒平瓦（図 596 － 4 ～ 6）、丸瓦（図 596 － 7 ～ 10）、平瓦（図 596 － 11・12）、道具瓦（図 596 － 13）、鬼板瓦（図 596 － 14）、鬼瓦（図 596 － 15・16）。7 は頭部と玉縁部の境の段小口に竹管文、内面に斜方向のコビキ痕、16 世紀後半以前。8 ～ 10 は内面に布目痕。1・4・6・7・9・15・16 は中世後期、2・3・8・10・14 は江戸期。

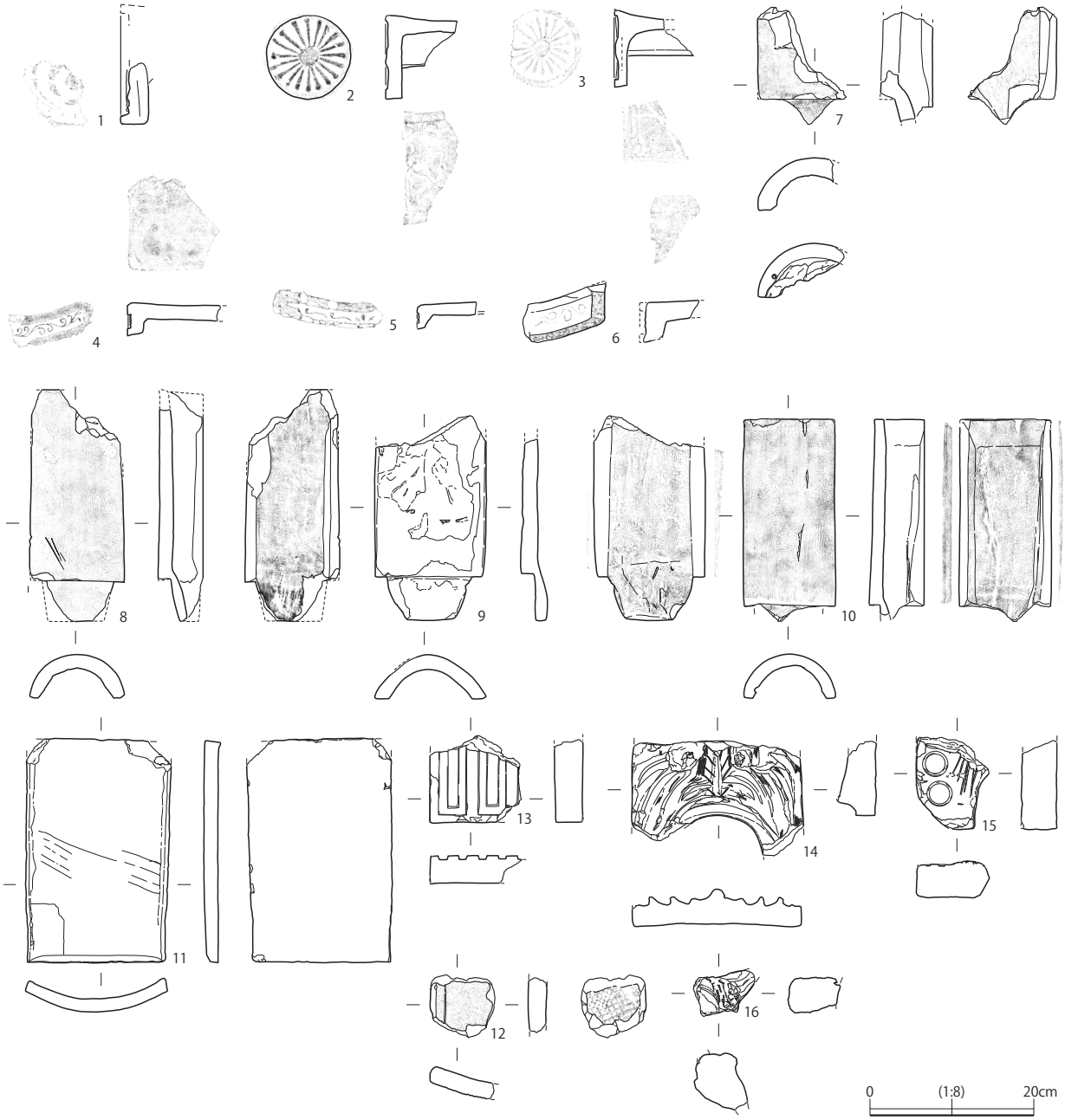


図 596　大将軍社跡（11 － 6 区・13 － 7 区）包含層　出土遺物（2）

石造物は石仏（図 597 － 1）、五輪塔火輪（図 597 － 2）、五輪塔空・風輪（図 597 － 3）。2 は江戸期。

金属製品としては銅銭（図 597 － 6 ～ 15）、銅鏡（図 597 － 16）。銅銭のうち 6 ～ 9 は 1 次調査で、10 ～ 15 は 2 次調査で出土した。7 は石組①南辺礫脇出土。9 は銹着した状態で 6 層から出土。6 は文久永宝（1863 年初鋳）。銭文は板倉勝静筆の「草文」、裏面波文十一波。表裏とも研磨がかなり荒く、凸部に研磨痕が残存。7 ～ 15 は寛永通宝。7・9・10 は 1659 年までに鋳造された古寛永で、7 はいわゆる鳥越銭、9 のうち銹着が外れた 1 枚と 10 はいわゆる芝銭。8・11 ～ 15 は 1668 年以降に鋳造された新寛永で、8 はいわゆる不旧手京都七條銭、11・13・14 は寛文期の「文銭」、12 はいわゆる宝永期四ツ宝銭、15 は元文期とされるもの。大将軍社跡（11 － 1 － 6 区、13 － 1 － 7 区）で出土した銅銭はこれらを含め合計 31 点あり、上記の文久永宝 1 点を除きすべて寛永通宝であった。出土銅銭は神社本殿跡とみられる石組①より東側で集中して検出され、賽銭等として用いられた可能性がある。

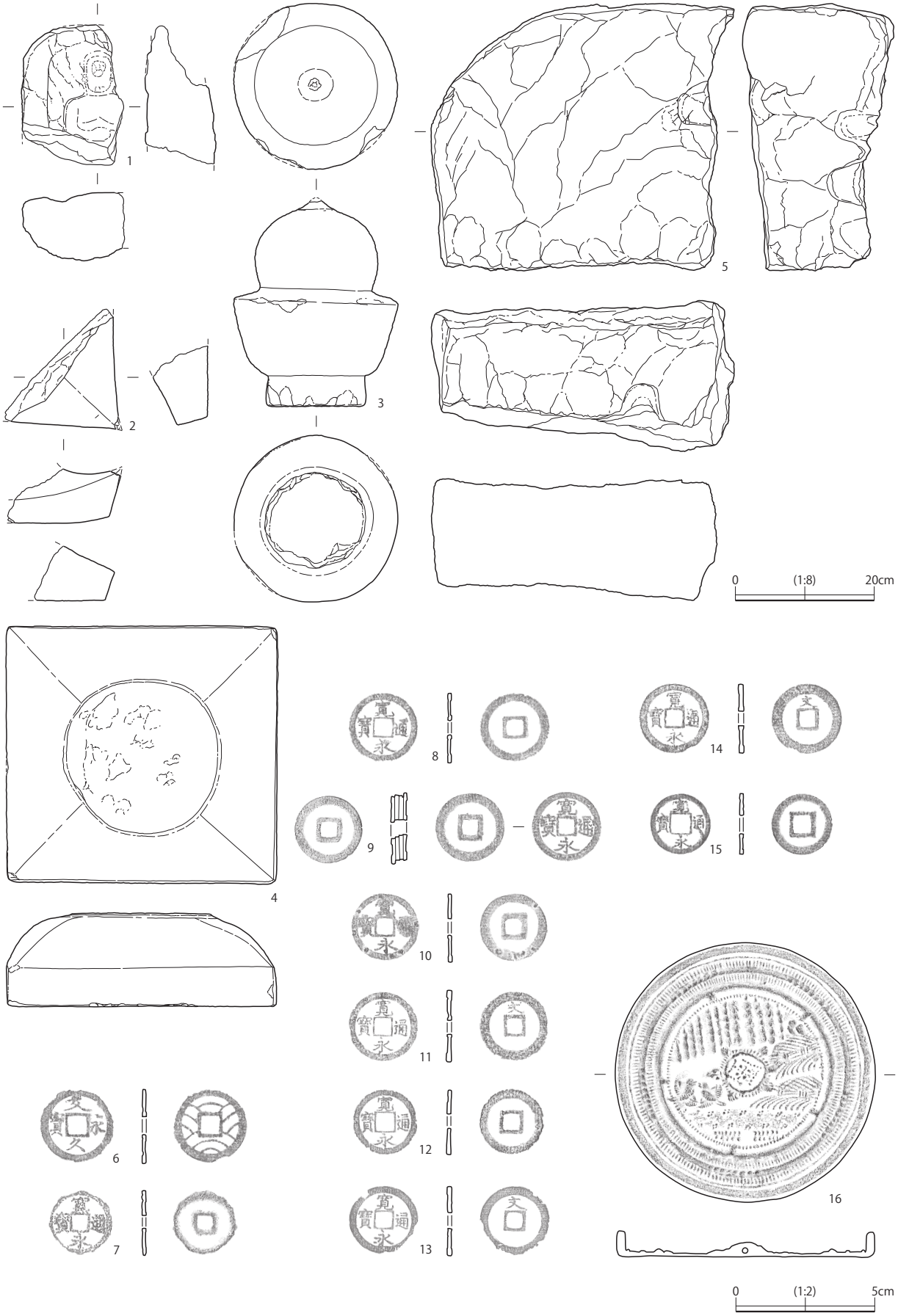


図 597　大将軍社跡（11 － 6 区・13 － 7 区）出土石製品・金属製品

16 は柴垣柳樹双鳥鏡である。直径 9.3cm、鈕高 0.55cm、縁高 0.95cm、鏡体の厚さ 0.1cm である。いわゆる擬漢式鏡で、14 世紀後半の製作が考えられる。Dトレンチ掘削時に石組①の西辺から西に 1.2 mの位置で鏡面を上に向けて出土した。出土標高は T.P. ＋ 4.494 mであった。

４．汚水管埋設部分の調査（図 598・599、図版 40・131）

汚水管埋設部分の調査は、調査開始面が神社本体の 1 面で、汚水管埋設底である T.P. ＋ 3.2 mまで掘削調査を行った。検出した遺構は２面（遺構面調査区中央 T.P. ＋ 4.112 m）で瓦溜り２基、３面（同 T.P. ＋ 4.064 m）で落込み 1 基、溝 1 基、土坑 1 基、4 面（同 T.P. ＋ 3.938 m）で溝 1 基、5 面（同 T.P. ＋ 3.872 m）で落込み 1 基、6 面（同 T.P. ＋ 3.750 m）で土坑 1 基、水田 1 基、7 面（同 T.P. ＋ 3.512 m）で河川 1 本があった。以下、主な遺構の詳細を述べる。

２面瓦溜りＣ（図 591、図版 40）　南北 1.4 m、東西 0.5 m以上の範囲で瓦・土器・礫等を検出されたものである。図示した出土遺物は図 600 － 6 ・14 である。

２面瓦溜りＤ（図 591、図版 40）　南北 0.5 m、東西 0.4 m以上の範囲で瓦・土器・礫等を検出。図示遺物は図 600 － 15。

３面 0015 落込　検出した規模は南北 2.8 m、東西 0.7 m、深さ 0.1 mで、落込底面で 0016 溝・0017 土坑を検出した。図示した出土遺物は図 600 － 1 ・２である。

４面 0019 溝　検出長 0.7 m、最大幅 0.4 m、深さ 0.1 mで東西方向の溝である。

５面 0018 落込　調査区南半で検出した深さ 0.2 mの落込で、13 － 2 区 7220 田面に続く水田の可能性がある。当初 4 面の遺構として捉え、途中で 5 面に変更した。図示遺物は図 600 － 8 ～ 11。

６面 0021 水田　調査区南端で検出し、この遺構と 0020 土坑とに挟まれた部分が水田畦畔とみられ、13 － 2 区 7220 田面に続く水田の可能性がある。畦畔上面からの深さは 0.2 mで、底面で足跡を２基検出した。図示した出土遺物は図 600 － 3 ～ 5 である。

７面 0022 河川　検出長 0.7 m、最大幅 2.7 m、深さ 0.3 mで東西方向の流路である。この流路はこの面より下層でさらに幅が広くなり広幅の流路となるとみられることを断面で確認した。

５．汚水管埋設部分出土遺物（図 600、図版 131）

２面瓦溜りＣ出土遺物　出土遺物は図 600 － 6 ・14 で、 6 は瓦質土器擂鉢で 16 世紀、14 は鬼瓦で神社本体Ｄ－Ｅ断面ベルト部から 6 ・７層に属して出土したものと接合し中世後期である。

２面瓦溜りＤ出土遺物　出土遺物は図 600 － 15 である。15 は雁振瓦で内面に斜方向のコビキ痕があり、16 世紀後半以前のものである。

２面包含層出土遺物　出土遺物は図 600 － 7 である。 7 は須恵質土器壺底部である。

３面 0015 落込出土遺物　出土遺物は図 600 － 1 ・２で、土師質土器皿であり、２は平安期。

５面 0018 落込出土遺物　出土遺物は図 600 － 8 ～ 11 で、 8 ・ 9 は東播系須恵器片口鉢で 12 世紀末～ 13 世紀初頭、10 は備前焼片口擂鉢で 15 世紀後半、11 は土師質土器羽釜で平安期であろう。

６面 0021 水田出土遺物　出土遺物は図 600 － 3 ～ 5 である。 3 は土師質土器皿、 4 は瓦器小碗、 5 は大和型瓦器碗で 13 世紀後半のものである。

６面包含層出土遺物　出土遺物は図 600 － 12・13 である。12 は青磁碗、13 は須恵質土器壺である。

６．小結

この調査の結果から、大将軍社の創建時期は、２面で検出した瓦溜りＣ・Ｄ出土遺物からみると室町時代後期（16 世紀中頃～後半）とみられる。２面が創建段階の遺構面で、３面は創建以前の遺構面であり、

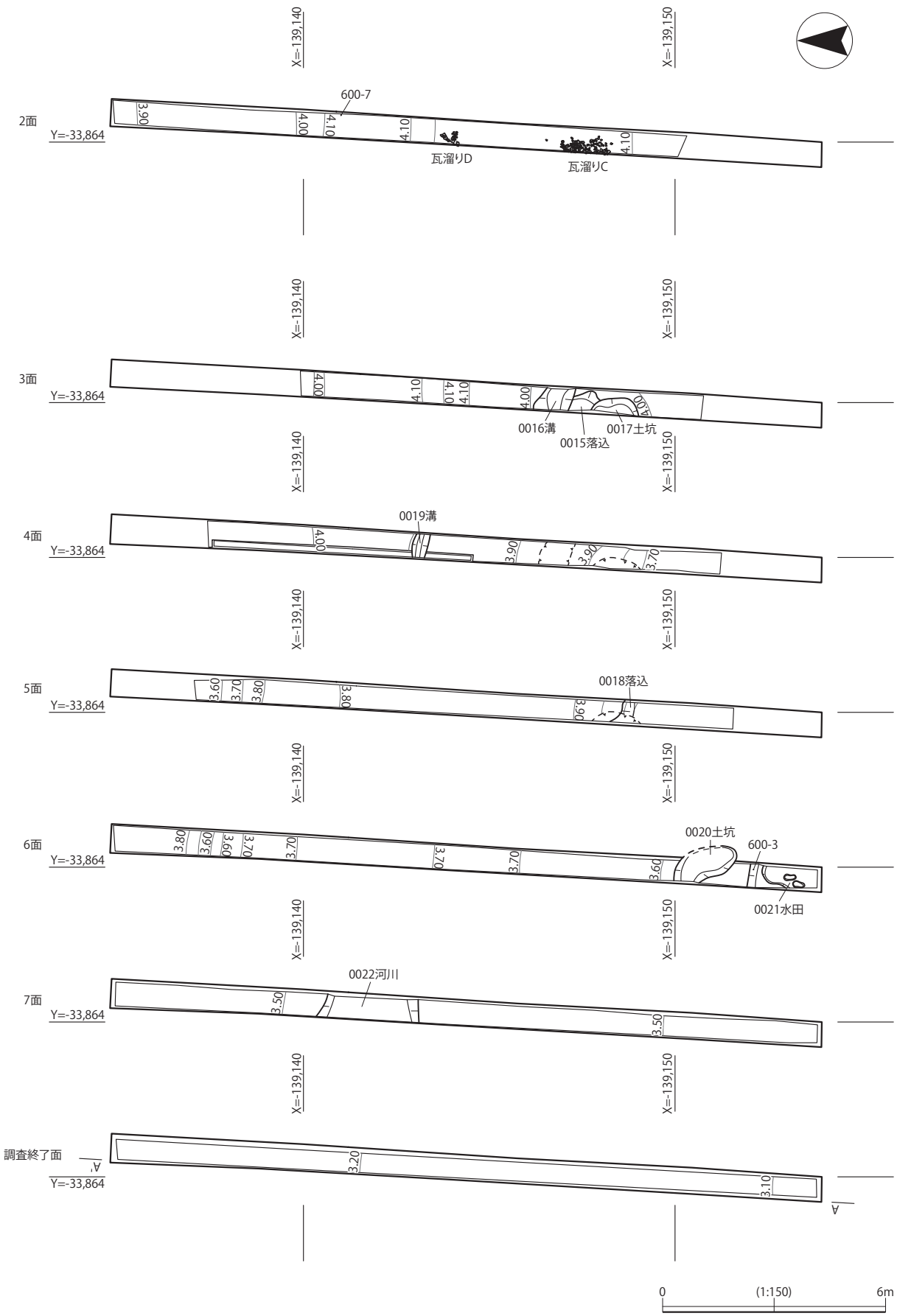
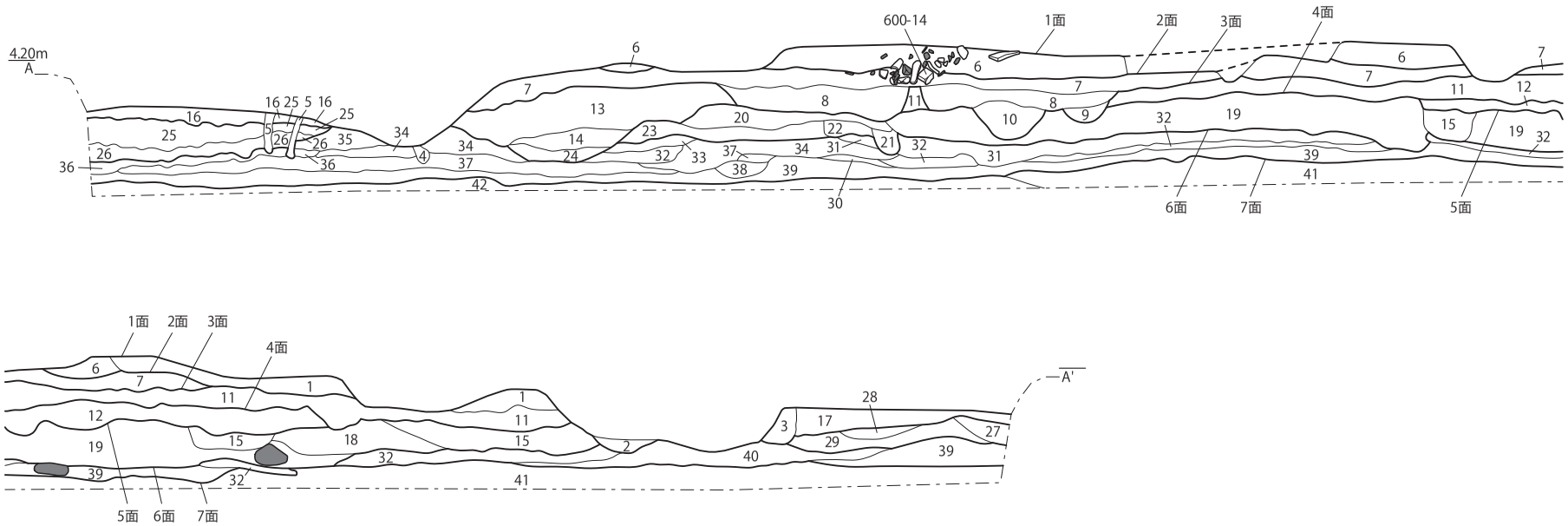


図 598　13 － 6 区（泥水管埋設部）平面図



1　10YR5/3にぶい黄褐　砂質土　1面地山
2　10YR4/1褐灰　砂質土　0001溝埋土
3　2.5Y7/2灰黄　礫混シルト
4　10YR3/1黒褐　砂質土　根カクラン(0007溝埋土がカクランされたもの)
5　10YR8/1灰白　シルト(4層混)　根カクラン
6　10YR4/3にぶい黄褐　砂質土　1面地山(1次調査7層に対応)
7　2.5Y5/3黄褐　砂質土　2面地山(1次調査8層に対応)
8　10YR5/2灰黄褐　砂質土　中砂混　0015落込・0017土坑埋土
9　2.5Y6/2灰黄　シルト質土　遺構埋土
10　10YR6/2灰黄褐　砂質土　0016溝埋土
11　10YR6/2灰黄褐　中砂混シルト　3面地山(１次調査９層に対応)
12　2.5Y6/2灰黄　中砂混シルト　4面地山
13　10YR5/2灰黄褐　砂質土　0018落込埋土
14　10YR6/2灰黄褐　砂質土　0018落込埋土
15　2.5Y6/2灰黄　中砂混シルト　φ～4cmの礫を多く含む
16　2.5Y7/2灰黄　砂質土　近世水田耕土　近代床土
17　10YR7/2にぶい黄橙　シルト　φ～2cmの礫が混じる、上層の表土混　中近世水田耕土
18　2.5Y6/2灰黄　礫混シルト　φ～4cmの礫を多量に含む　5面地山
19　10YR5/3にぶい黄褐　礫混粗砂
20　10YR6/3にぶい黄橙　砂質土
21　10YR4/2灰黄褐　中砂混シルト
22　2.5Y5/2暗灰黄　礫混シルト　φ～4cmの礫を多く含む
23　10YR5/2灰黄褐　中砂混シルト
24　2.5Y4/1黄灰　粘質シルト　0020土坑埋土
25　10YR6/2灰黄褐　砂質土　0021水田耕土
26　10YR5/1褐灰　砂質土　0021水田耕土
27　7.5YR4/1褐灰　砂礫土　φ～3cmの礫を多量に含む
28　10YR5/2灰黄褐　細砂
29　2.5Y6/2灰黄　シルト
30　2.5Y7/2灰黄　細砂
31　10YR6/2灰黄褐　シルト　6面地山
32　7.5YR4/3褐　中砂混シルト　(鉄分が沈着した層)
33　2.5Y6/1黄灰　礫混シルト
34　2.5Y7/1灰白　シルト
35　10YR7/3にぶい黄橙　砂質土
36　10YR7/2にぶい黄橙　細砂混シルト
37　2.5Y8/1灰白　シルト
38　5Y6/2灰オリーブ　細砂混シルト
39　2.5Y6/1黄灰　シルト
40　10YR6/2灰黄褐　細砂混シルト
41　2.5Y7/1灰白　中砂(一部シルト)　7面地山
42　5Y6/1灰　中砂　一部シルト混　7面地山

0　(1:50)　2m

図 599　13 － 6 区（泥水管埋設部）断面図

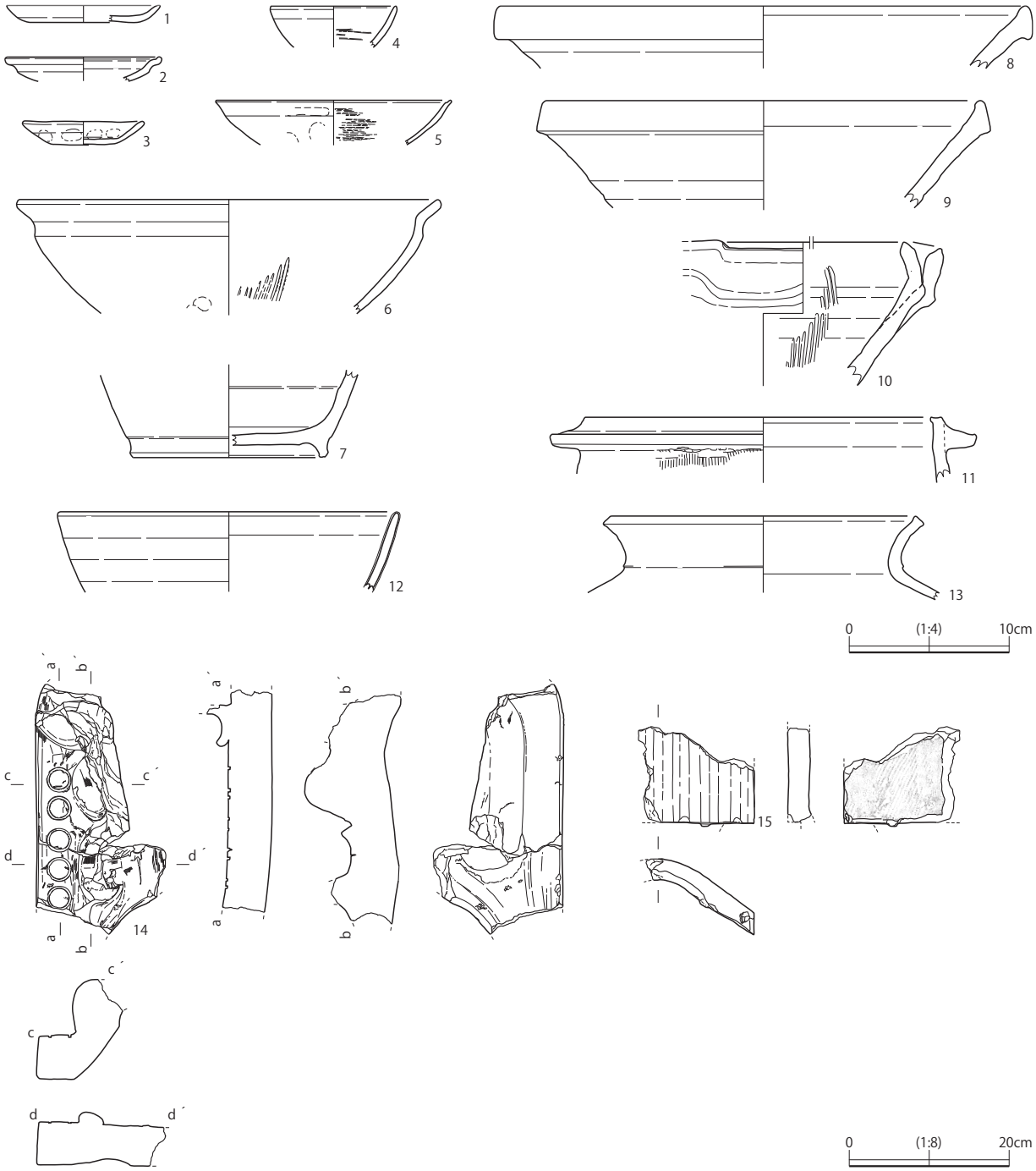


図 600　13 － 6 区（泥水管埋設部）出土遺物

創建時には大型の鬼瓦（図 593 － 11・12、596 － 15・16、600 － 14）や巴文軒丸瓦（図 593 － 1 、594 － 9、596 － 1）、唐草文軒平瓦（図 593 － 3 ・ 5、596 － 4 ・ 6）、いわゆるコビキ A を持つものを含む丸瓦（図 593 － 6 ・ 7、596 － 7 ～ 9）、面土瓦（図 593 － 15）、雁振瓦（図 600 － 15）等による瓦葺きの屋根を持つ礎石建物の社殿が造営されたとみられる。近世に石組①を基礎とし、鬼板瓦（図 593 － 10、596 － 14）、菊花文軒丸瓦（図 596 － 2 ・ 3）、波状文軒平瓦（図 593 － 2 ・ 4）、小ぶりな平瓦（図 593 － 8 ・ 9）等による瓦葺きの屋根を持つ、それ以前より小さな社殿に建て替えられ、その際に整地を行い 1 面が形成されたとみられる。瓦溜り A はその整地時に不要な瓦を集めたものとみられ、その後も神社存続中に不要となったものや奉納された土器類等が集積されて形成されたものであろう。

（村上 始・實盛良彦）

第５節　13－２区の調査成果

13－６・７区として調査を行った大将軍社の東側に設定した調査地である。表土・現代作土の機械掘削を行ったところ、大将軍社参道が検出されたため、参道については４ｂ層とした砂層上面まで人力掘削を行った。

調査前の状況は、現代の畦道が参道に取り付いており、大将軍社本殿との間が若干高まっていた程度で、畦道に接して台石が露出した状態であった。神社本殿の礎石上面と標高がほぼ同じであったため、神社関連の施設があることを想定し掘削を進めたところ、参道が検出された。

発掘調査は、参道に 403 トレンチを設置して、参道基底面の確認と参道盛土及び参道機能時に形成された土壌の把握を行い、参道と参道直下に形成された地層を大別４層に分けて調査を行った。

第１面（図 602）

表土を除去して検出した遺構面で、機械掘削終了面である。大将軍社が忍陵神社に合祀された明治 44 年以降から昭和前期に位置付けられる。

表土中からは、少量の遺物を出土したが、参道を構成する地層（盛土・土壌）と比較して出土量は少ない。なお、この段階から灯明皿の破片が出土しており、灯明皿は釉薬がかかるものと、素焼きのものに分かれた。当初、豆皿・お手塩皿の類が含まれていると考えたが、完形ないしそれに近い形状の小皿は、すべて灯明皿として使用されたものである。なお、釉薬がかかっているものは京焼の柿釉灯明皿で、低温度で焼成されるため、土師質のものが大半であった。

表土・トレンチ出土遺物（図 601、図版 41・132・133・136・137）

表土及びトレンチから出土した遺物は、図 601 －１～ 14 に示した。１～３は土師器灯明皿、４は柿釉陶器灯明皿である。５は瓦質土器火鉢である。６～９は 401 トレンチから出土した。６は土師器皿である。へそ皿で、４層に帰属する。７・８は肥前焼系磁器碗である。９は肥前焼系磁器皿である。内面見込み及び高台に二重圏線、高台直上に圏線１本がそれぞれ施される。内面に草花文、外面に連続唐草文の文様を表わし、見込みにはコンニャク印判の一部が残る。10 は土人形である。女人を表現

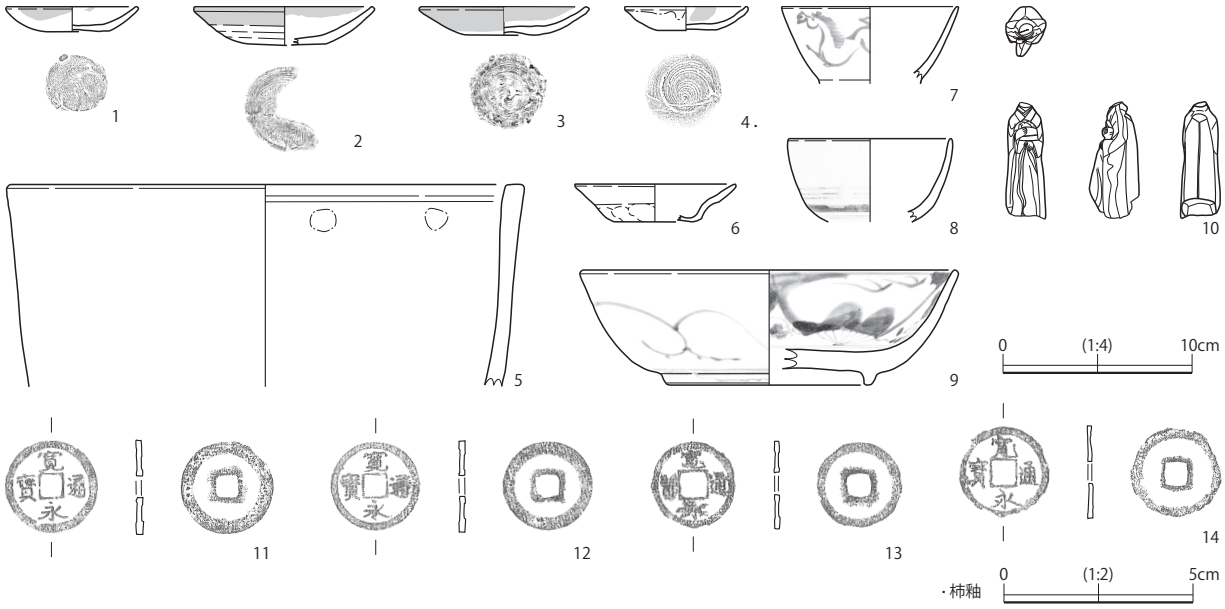


図 601　13－２区　表土・401 トレンチ他出土遺物

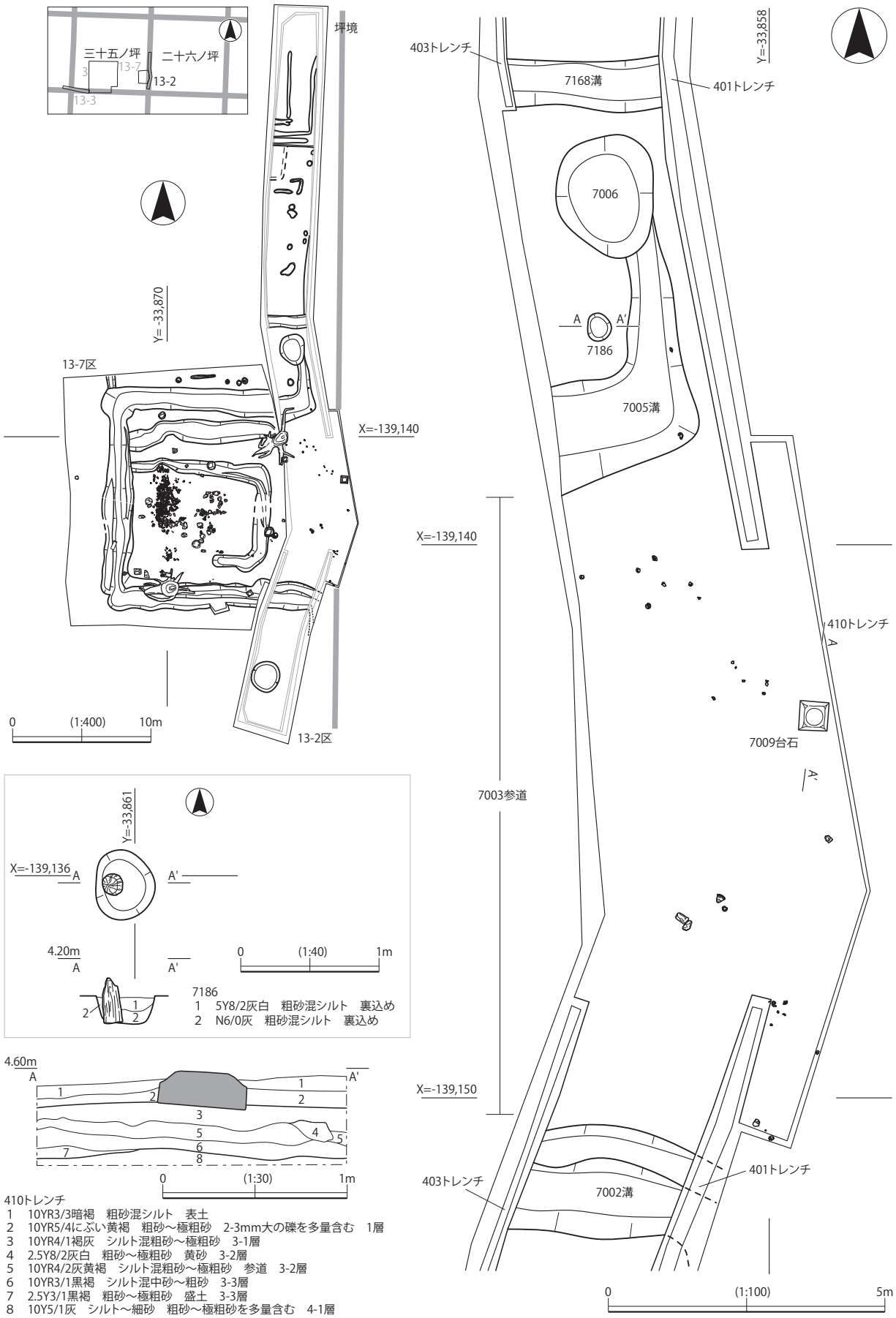


図 602　13 － 2 区　第 1 面平面・410 トレンチ断面

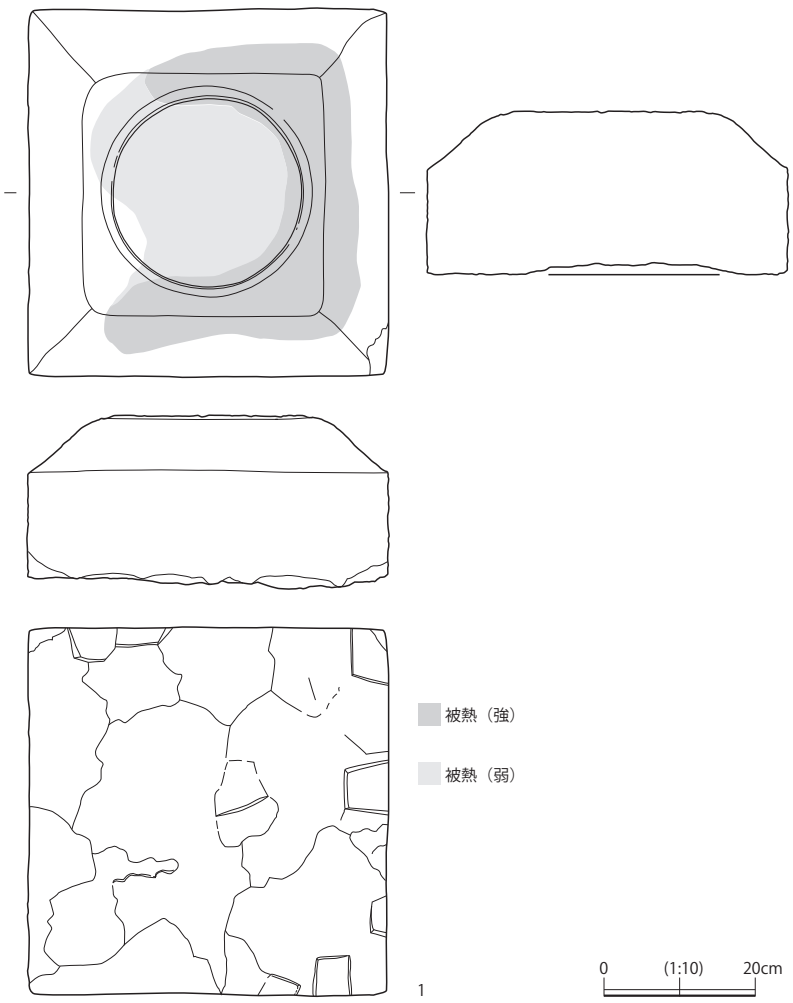


図 603　13 － 2 区　7009 台石出土遺物

しており、頭部は欠損する。右手には軸受けと考えられる穴がある。11 ～ 14 は寛永通宝である。11・12 は古寛永、13・14 は新寛永に分類される。

7003 参道（図602・604、図版41）

大将軍社の東側で、層厚３～５cmの表土を除去して検出された。幅 11.2 m、南北に広がる水田面との比高は 0.5 mである。

参道を構成する地層は、３層に大別され、１～３層として掘削した。１層は、細砂混シルトを主体としており、表土形成段階の土壌化の影響が顕著である。そのため、一部には、近・現代の遺物が混じる。

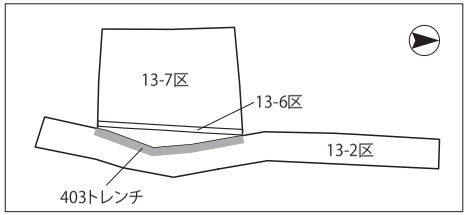
２層は、粗砂～極粗砂と細砂混シルトを主体と、参道中央を中心に堆積する。３層は、シルト混粗砂～極粗砂を主体としており、３－１～３－３層に細分して掘削した。２～３層は各地層の境界部が不明瞭であったが、盛土である粗砂～極粗砂の単位や台石や出土遺物の基底面の標高または出土状況を参照しながら分層発掘を行っており、参道斜面は任意分層発掘に近い状態で各遺構面を検出した。

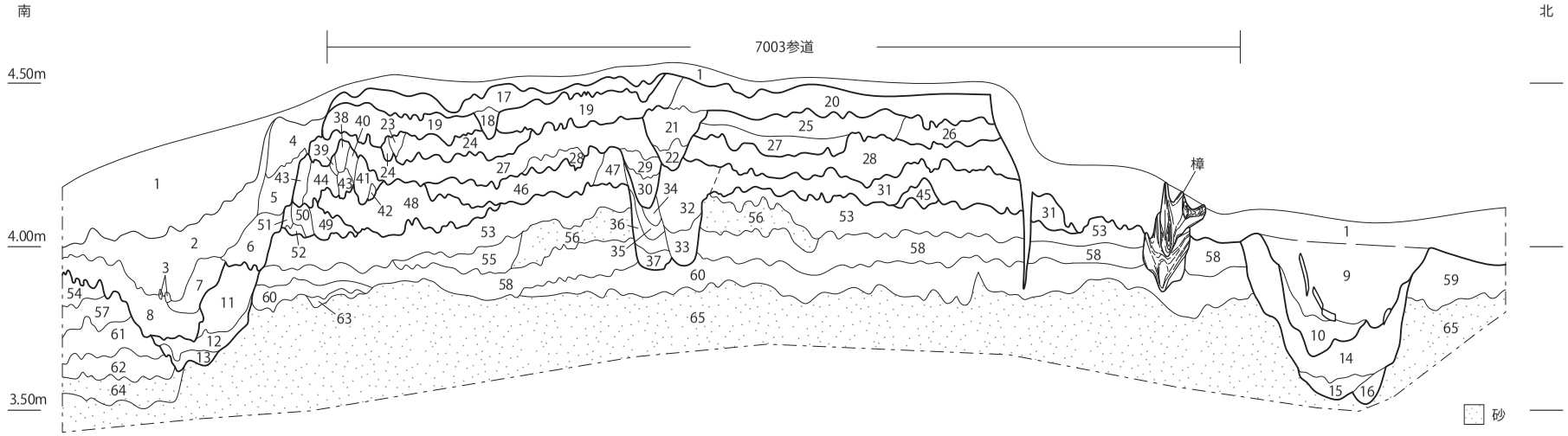
参道は、４層とした作土層の直上に、盛土を行うことによって構築される。参道には側溝が伴っており、側溝掘削時の排土で側溝に近い部分に、土手状に盛土を行った後、内側に向かって水平に盛土が行われる。なお、7009 台石は、設置当初、上部と側面が露出した状態であったと考えられる。

7009 台石（図 602・603、図版 41・132）

7003 参道北側で検出された。坪境と参道が直交する場所に当たる。基底面は第２面直上で、参道廃絶時まで台石として用いられたと考えられる。図 603 － 1 の台石は、平面形が正方形を呈し、上部に円形の台座が作り出される。法量は、一辺 48cm、厚さ 21cm である。被熱痕があり、円形の台座部分を中心に黒変する。

第２面では、7009 台石の西側で、参道の側石となる可能性がある石が検出された。神社本殿の礎石と目地が通っており、機能時の参道幅を示す可能性がある。粗砂～極粗砂とした整地層が参道に用いられた範囲の北側の場所で検出されている。参道に平行するように設置されており、側石として機能した可能性を想定しているが、7009 台石の西側及び北西側参道斜面で 10 ～ 20cm 大の石が複数出土していることや、第３－１・２面で検出された礫集中部の分布と重なることから意図的に廃棄した可能性も





403トレンチ

1 10YR3/2黒褐　極細砂～細砂混シルト　現代作土
2 2.5Y5/2暗灰黄　シルト混極細砂～細砂　近代作土
3 2.5Y5/1黄灰　極細砂混シルト(4層)偽礫　7002溝埋土
4 2.5Y6/2灰黄　極細砂～細砂混シルト　参道を形成する3層に似る　7002溝埋土
5 7.5YR7/2明褐灰　細砂混シルト　7002溝埋土
6 2.5Y6/3にぶい黄　極細砂～細砂混シルト　粗砂を少量含む　7002溝埋土
7 2.5Y6/2灰黄　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　7002溝埋土
8 2.5Y5/1黄灰　細砂混シルト　近代か　7002溝埋土
9 10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　7005溝埋土
10 2.5Y6/3にぶい黄　極粗砂～粗砂混シルト　偽礫　7005溝埋土
11 2.5Y7/3浅黄　細砂混シルト　7002溝埋土(近世段階)
12 2.5Y7/4浅黄　粗砂～極粗砂　細砂混シルト偽礫を少量含む　7002溝埋土(近世段階)
13 7.5Y6/1灰　シルト混細砂～中砂　7002溝埋土(近世段階)
14 5Y6/3オリーブ黄　シルト混細砂～中砂　7005溝埋土(近世段階)
15 7.5Y6/1灰　シルト混極細砂　湿性堆積物　7005溝埋土(近世段階)
16 2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂　3-5cm大の礫を微量含む　7005溝(近世段階か)
17 10YR6/1褐灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　粗砂の含有量が下位より多い　7003参道1層
18 10YR6/2灰黄褐　細砂混シルト　粗砂を微量含む　1層下面遺構
19 10YR6/4にぶい黄橙　細砂～中砂　粗砂を少量含む　2層
20 2.5Y6/2灰黄　細砂混シルト　粗砂を微量含む　2層
21 2.5Y6/3にぶい黄　細砂混シルト　粗砂を微量含む　7230土坑埋土
22 2.5Y4/1黄灰　極細砂～細砂　炭化物を多量含む　7230土坑埋土
23 10YR7/3にぶい黄橙　シルト質極細砂　参道盛土
24 10YR6/3にぶい黄橙　細砂混シルト　1cm大の礫を少量含む　参道盛土　3-1層
25 2.5Y7/3浅黄　細砂混シルト　2-3mm大の礫を多量含む　3-1層
26 10YR6/4にぶい黄橙　細砂混シルト　粗砂を少量含む　3-1層
27 2.5Y6/2灰黄　シルト混極細砂～細砂　粗砂を微量含む　3-2層
28 10YR8/4浅黄橙　シルト混粗砂～極粗砂　3-2層
29 2.5Y6/2灰黄　シルト混極細砂～細砂　粗砂を微量含む　土坑埋土(平面未検出)
30 2.5Y3/1黒褐　極細砂混シルト　炭化物を微量含む　土坑埋土(平面未検出)
31 2.5Y6/3にぶい黄　シルト混細砂～中砂　粗砂～極粗砂を少量含む　3-3層
32 2.5Y7/2灰黄　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　7230土坑埋土
33 2.5Y3/1黒褐　極細砂混シルト　炭化物を微量含む　7230土坑埋土
34 2.5Y6/2灰黄　細砂混シルト　炭化物を微量含む　7231土坑埋土
35 2.5Y3/1黒褐　極細砂混シルト　炭化物を微量含む　7231土坑埋土
36 2.5Y7/2灰黄　細砂混シルト偽礫　7231土坑埋土
37 2.5Y3/1黒褐　極細砂混シルト　炭化物を微量含む　7231土坑埋土
38 2.5Y6/3にぶい黄　細砂混シルト(4層)偽礫　粗砂を微量含む　偽礫
39 2.5Y7/3浅黄　細砂混シルト　偽礫
40 2.5Y8/2灰白　細砂混シルト　偽礫
41 2.5Y6/3にぶい黄　細砂混シルト　粗砂を微量含む　細砂混シルト(4層)偽礫　を含む　偽礫
42 2.5Y8/2灰白　細砂混シルト(4層)偽礫　偽礫
43 2.5Y6/3にぶい黄　細砂混シルト　偽礫
44 2.5Y7/2灰黄　細砂混シルト(4層)偽礫　偽礫
45 2.5GY8/1灰白　シルト混極細砂～細砂(4層)偽礫　参道盛土
46 2.5Y6/3にぶい黄　極細砂～細砂混シルト　粗砂～極粗砂を微量含む　3-3層
47 2.5Y7/2灰黄　シルト混極細砂　粗砂を微量含む　参道盛土
48 2.5Y7/3浅黄　極細砂～細砂混シルト　細砂混シルト偽礫(4層)を含む　参道盛土
49 2.5Y7/2灰黄　細砂混シルト　粗砂を微量含む　細砂混シルト偽礫(4層)を含む　参道盛土
50 2.5Y7/3浅黄　細砂混シルト(4層)偽礫　粗砂を微量含む　参道盛土
51 2.5Y7/2灰黄　細砂混シルト(4層)偽礫　参道盛土
52 2.5Y7/4浅黄　細砂混シルト(4層)偽礫　参道盛土
53 2.5Y7/3浅黄　細砂混シルト　4-1層
54 5Y7/2灰白　極細砂混シルト　粗砂～極粗砂を微量含む　4-1層
55 2.5Y7/2灰黄　細砂混シルト　粗砂を微量含む　4-1層細分
56 2.5Y8/4淡黄　粗砂～極粗砂　1-2cm大の礫を少量含む　水成層　4-1b層
57 5Y7/2灰白　シルト混極細砂～細砂　粗砂を少量含む　4-2層
58 5Y7/2灰白　シルト混極細砂～細砂　1-2cm大の礫を少量含む　4-2層
59 5Y7/2灰白　シルト混極細砂～細砂　1-2cm大の礫を少量含む　4-2層
60 5Y6/2灰オリーブ　細砂混シルト　粗砂～極粗砂を少量含む　4-3層
61 5Y6/2灰オリーブ　細砂混シルト　4-3層
62 5Y6/2灰オリーブ　極細砂～細砂混シルト　偽礫状　4-3層
63 5Y6/3オリーブ黄　粗砂混シルト　やや黒味を帯びる　4-4層
64 5Y6/2灰オリーブ　シルト混細砂～中砂　4-4b層
65 2.5Y7/3浅黄　粗砂～極粗砂　上部弱い土壌化　上方細粒化　4-4b層

1m (1:20) 0
4m (1:80)

図604　13－2区　403トレンチ断面

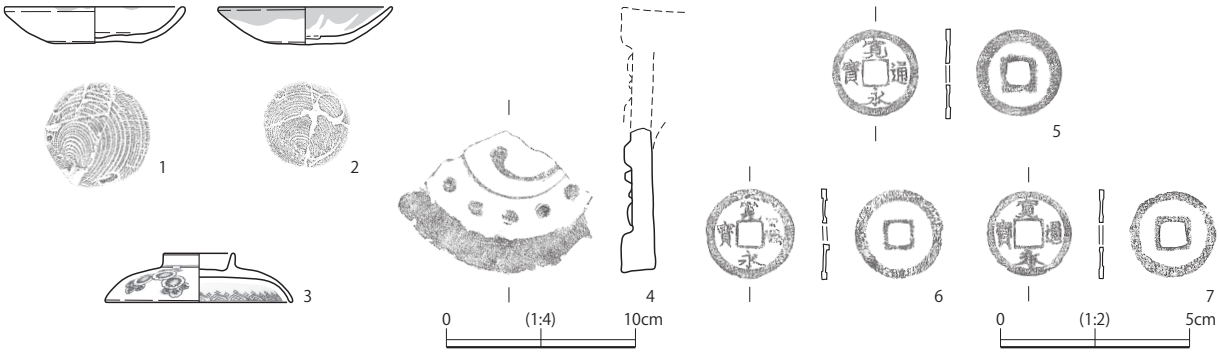


図 605　13 － 2 区　7003 参道第 1 面出土遺物

あると考えられる。7002・7005 溝は、近代（1 層形成段階）には坪境で屈曲しており、参道に道（畦畔）が取り付いていたものと考えられる。大将軍社参道の「入り口」になっていたと考えられ、7009 台石は、鳥居の台石であった可能性が高い。

7186 柱穴（図 602）

7003 参道北側で検出された。柱根が遺存する。現代作土を除去して検出しており、遺構面の帰属は不明である。ただし、柱穴の裏込め土は、近代以降に形成された土壌に由来するブロック土が入る。

7002 溝（図 602・608、図版 132）

参道南側で検出された。神社本殿・参道を区画する溝である。近代に掘り直しが行われているが、7005 溝と異なり、7002 溝では同じ位置で掘り直しが行われている。401 トレンチでは近代の埋土が溝幅以上に南に広がっている状況が確認されたことから、7005 溝と同様、7002 溝は 401 トレンチを設定した場所で、屈曲する可能性が高いと考えられる。

7002 溝からは図 608 － 9 の堺焼擂鉢が、近代の埋土から出土した。他に、細片で図示していないが、土師質の火鉢口縁部が近世の埋土から出土した。

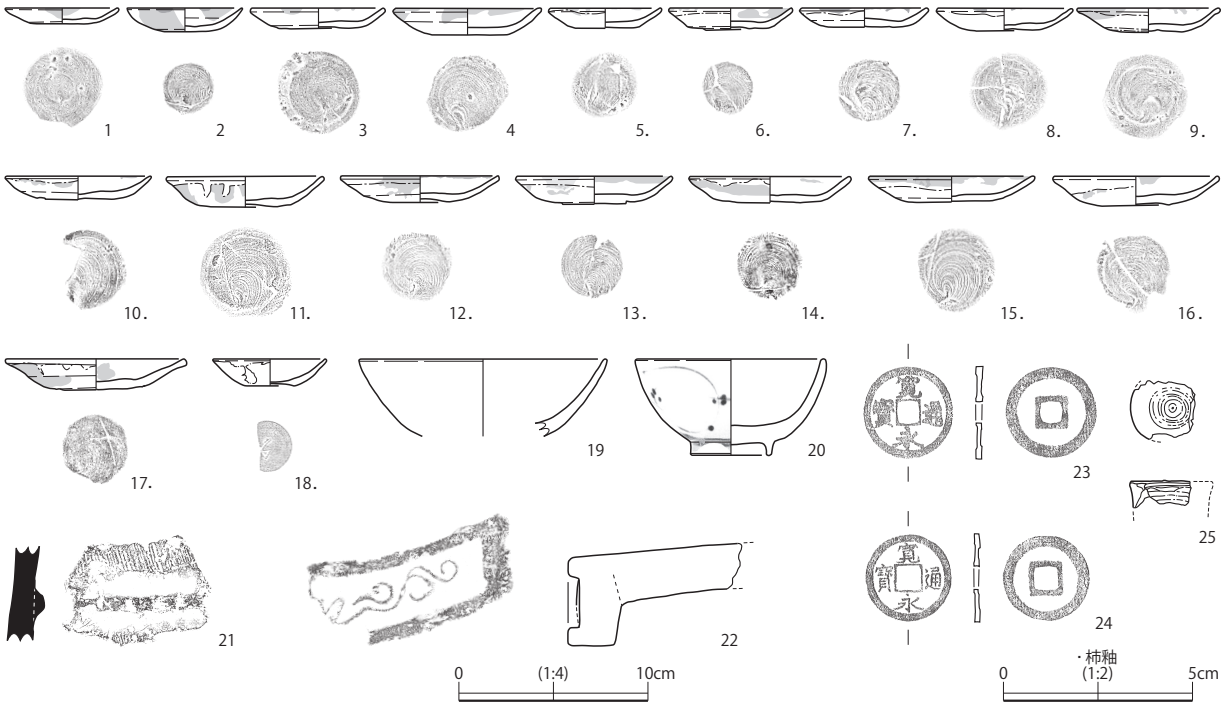


図 606　13 － 2 区　7003 参道 1 層出土遺物

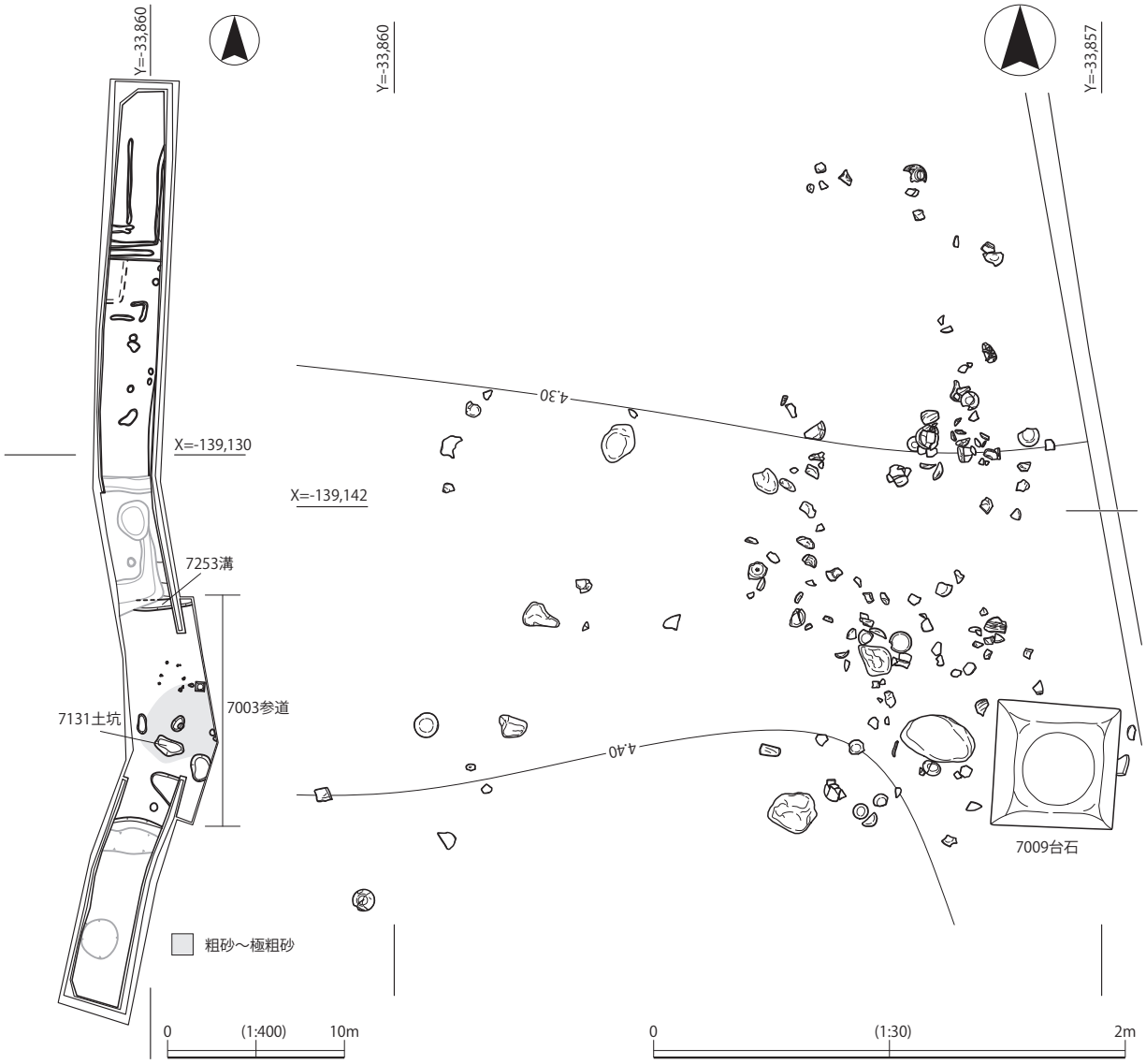


図 607　13 － 2 区　第 2 面平面

7005 溝・7006 土坑（図 602・608、図版 134・137）

7003 参道の北側で検出された。7005 溝は、神社及び参道を外周する溝で、北方向に曲がって 7006 土坑に接続する。規模は、幅 2.2 m、深さ 0.5 mである。7005 溝埋土は、作土に由来する粗砂混シルトを主体としており、瓦・陶器皿・肥前焼系磁器が出土した。

7005 溝から出土した遺物は、図 608 － 1 ～ 6 ・10 ～ 12 である。 1 は土師器灯明皿である。 2 ～ 6 は柿釉陶器灯明皿である。10 は巴文軒丸瓦である。巴文尾部が一部残存する。11 は銅緑釉の華瓶である。口縁部から外面は施釉されており、高台は無釉。12 は白磁紅皿である。貝殻状の型押しで外面は成形される。11・12 は、19 世紀前半。

7006 土坑は、平面形は不整な円形、長軸 2.2 m、短軸 1.7 m、深さ 0.4 mである。出土遺物は、図 608 － 13 ～ 15 で、7005 溝と比較して少量である。13 は白磁小碗、15 はひだ皿、14 は肥前焼系染付碗である。金魚・桜・流水・「常○（月に言か）」の文様がある。19 世紀前半。

7003 参道第 1 面出土遺物（図 605、図版 132・135・137）

1 層直上から出土した遺物は、図 605 － 1 ～ 7 を図化した。 1 ・ 2 は土師器灯明皿である。 3 は肥

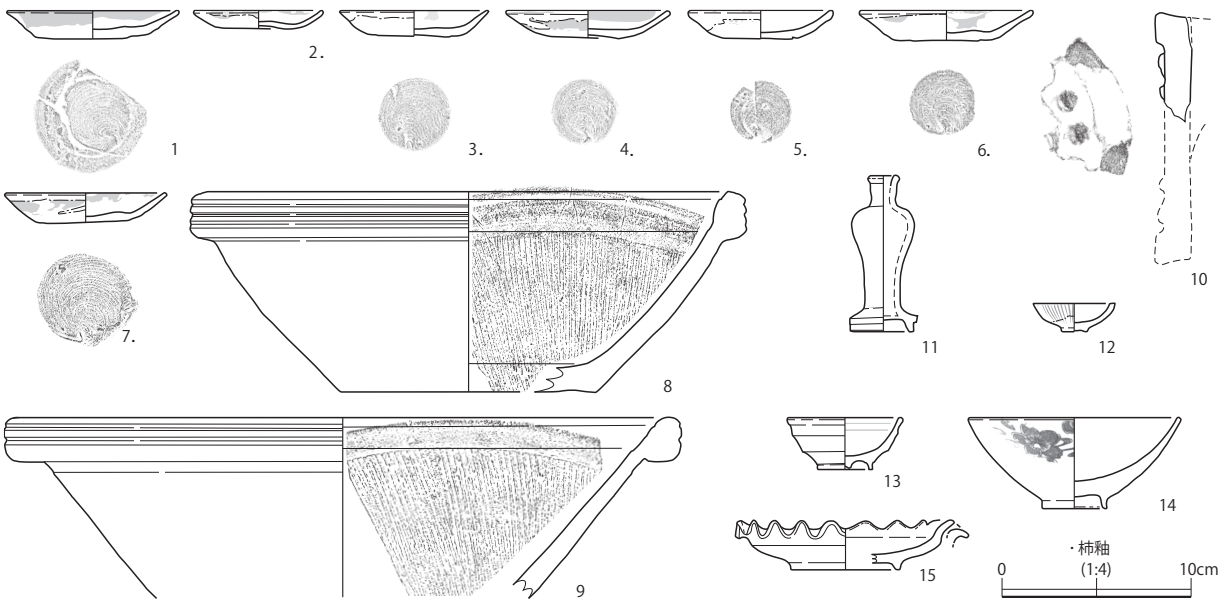


図 608　13 － 2 区　7005 溝他出土遺物

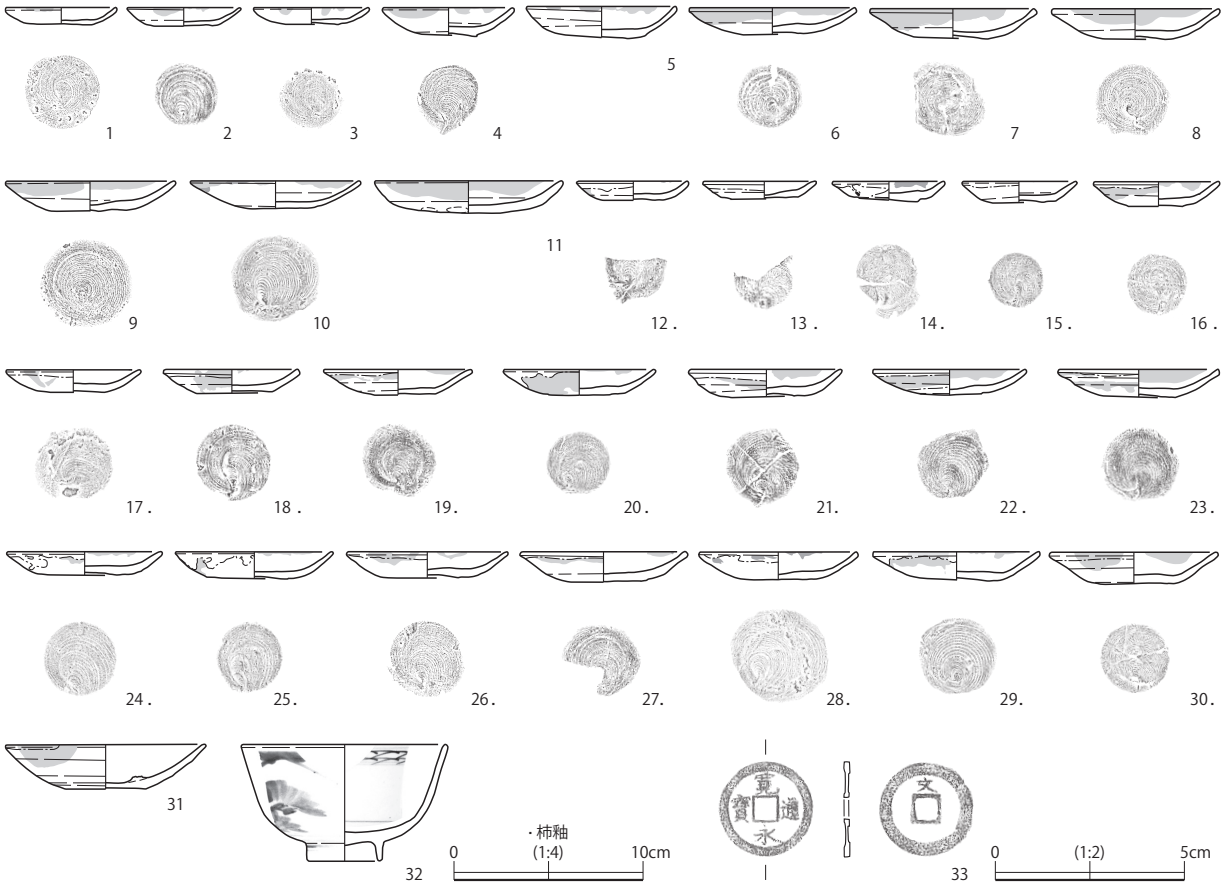


図 609　13 － 2 区　7003 参道第 2 面出土遺物

前焼系磁器の蓋である。外面は菊・菱形文、内面は瓔珞文の文様がある。 4 は巴文軒丸瓦である。巴頭部は小さいもので、尾部は細く伸びる。 5 ～ 7 は寛永通宝である。新寛永で、無背。

7003 参道 1 層出土遺物（図 606、図版 132 ～ 137）

1 層から出土した遺物を図 606 － 1 ～ 25 で図化した。 1 ～ 4 は土師器灯明皿である。 5 ～ 18 は柿

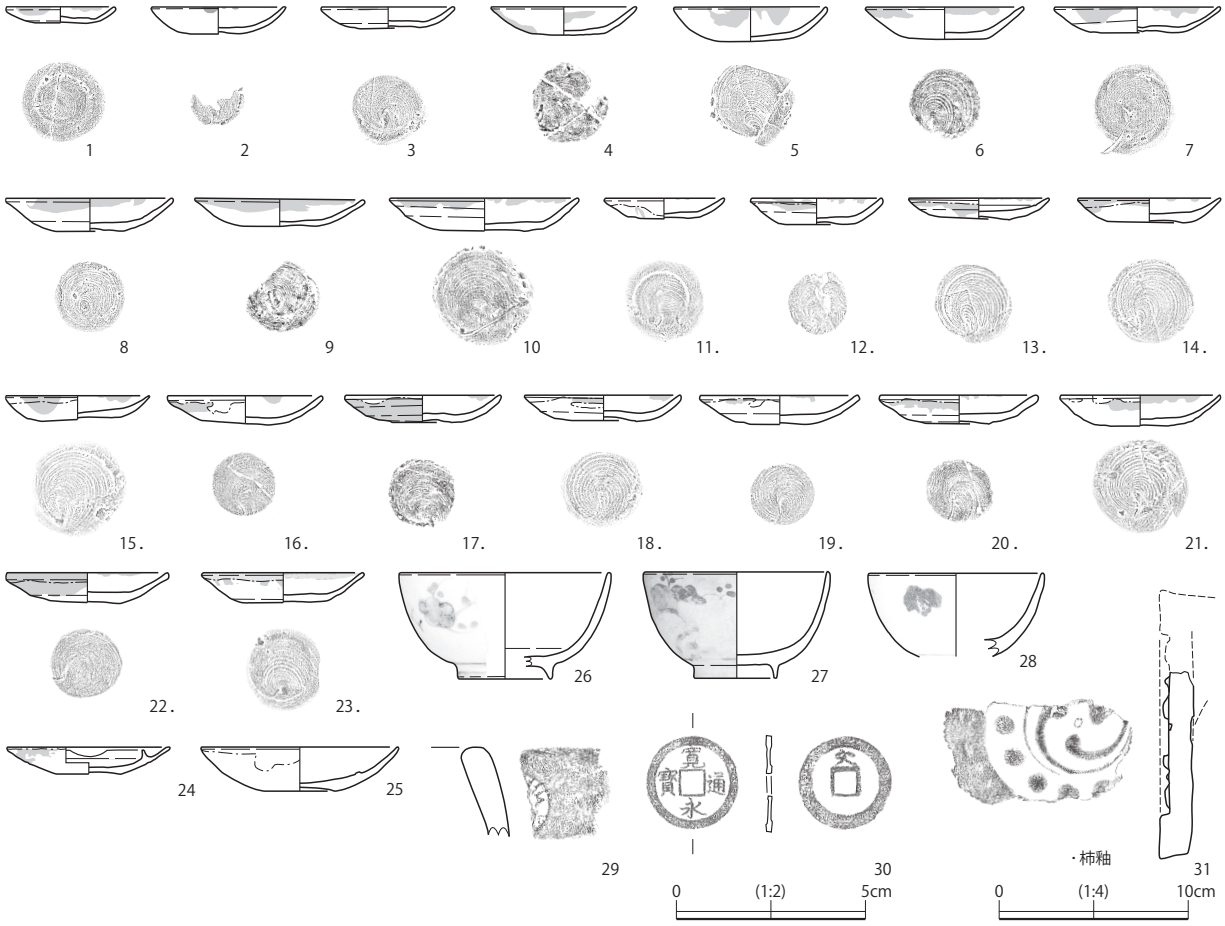


図 610　13 － 2 区　7003 参道 2 層出土遺物

釉灯明皿である。19 は肥前焼系磁器碗である。20 は肥前焼系磁器染付碗で、表土及び 1 層から出土した破片が接合した。外面に草花文が描かれ、高台及び高台直上に圏線がめぐる。21 は円筒埴輪の破片である。須恵質で、外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向にナデ調整される。22 は唐草文軒平瓦である。凹面は磨滅しており、調整は不明で、砂が付着する。凸面は剥離が顕著であるが、板ナデの痕跡が残る。顎は横方向のナデで仕上げられる。23・24 は寛永通宝である。23 が古寛永、24 が新寛永である。25 は不明鉄製品である。表面は円形を呈し、側面は端面で広がっている。飾金具として使用されたと考えられる。出土遺物から、 1 層は、明治時代以降、忍陵神社に合祀される明治 44 年までの時期に形成されたと考えられる。

第 2 面（図 607）

参道を構成する地層の内、粗砂～極粗砂を主体とした範囲を 2 層として掘削した。参道中央、大将軍社正面にその範囲は限られる。台石の基底面に当たり、台石は全体の形状が露出した状態である。

7131 土坑（図 607・608、図版 134）

7003 参道南側で検出された。平面形は不整形、規模は長軸 1.6 m、短軸 0.9 m、深さ 0.2 mである。埋土は粗砂混シルトで、炭化物を多量含む。第 3 － 2 面 7197 ～ 7200 土坑の直上に当たり、これらの土坑の埋土上層を一括して第 1 面で把握した可能性がある。7131 土坑から、図 608 － 7 の柿釉陶器灯明皿と 8 の堺焼擂鉢が出土した。

7165 ～ 7167 土坑（図 611）

7003 参道南側で検出された。埋土は粗砂混シルトで、炭化物を少量含む。第 3 － 3 面 7230・7231

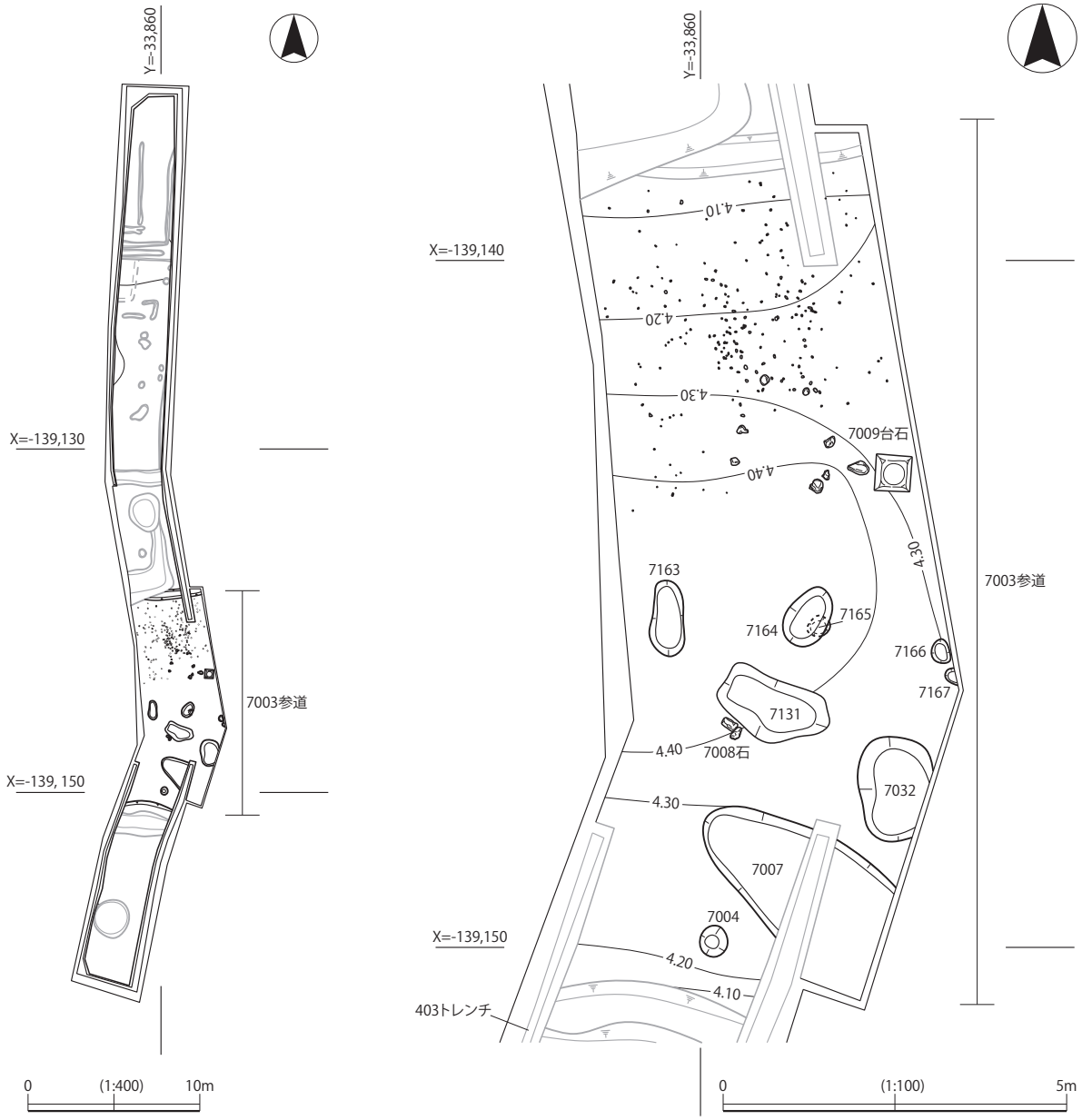


図 611　13 － 2 区　第 3 － 1 面平面

土坑と比較して、炭化物は少量であったが、機能的には同じであった可能性が高いと考える。

7003 参道第 2 面出土遺物（図 609、図版 133・135 ～ 137）

第 2 面、 2 層直上から出土遺物を、図 609 － 1 ～ 33 を図化した。 1 ～ 11 は土師器灯明皿である。12 ～ 31 は柿釉陶器灯明皿である。31 は内側に桟があるもので、灯明皿の受け皿としても使用されたものと考えられる。32 は肥前焼系磁器の草花文の染付碗である。高台及び高台直上に二重圏線がそれぞれ施される。内面は見込みに 1 本、口縁部に 2 本圏線を入れ、口縁部の圏線間に線引きの文様が入る。33 は寛永通宝である。新寛永で、裏面には「文」の文字がある。

7003 参道 2 層出土遺物（図 610、図版 132・133・135 ～ 137）

1 ～ 10 は土師器灯明皿である。11 ～ 23 は柿釉陶器灯明皿である。24・25 は瀬戸・美濃焼系磁器灯明皿である。24 は内側に切り込みがある桟があり、口縁部に煤が付着する。貫入あり。25 は内面に胎土目が 2 箇所残る。内面及び外面口縁部まで施釉され、以下は無釉である。貫入あり。26 は肥前焼

系磁器で、草花文の染付碗である。高台に二重圏線、高台直上に圏線１条がそれぞれ施される。27 は肥前焼系磁器で、草花文の碗である。28 は肥前焼系磁器で、コンニャク印判の碗である。29 は土師質土器の火鉢である。30 は寛永通宝である。新寛永で、裏面には「文」の文字がある。31 は巴文軒丸瓦である。巴文は頭部が小さく、尾部の先端は他の巴文に接する。外縁は幅広で、外縁と巴文の間に、巴頭部と同じ大きさの珠文が配される。また、瓦当面中央には３mm の穴が確認できた。出土遺物から、２層は、江戸時代後期末～明治時代前半の時期に形成されたと考えている。

第３－１面（図 611、図版 42）

２層とした粗砂～極粗砂を主体とした参道盛土を除去して検出された。7009 台石は基底面が２層直上と判断されたことからこの段階には機能していなかったと考えられる。7003 参道北側斜面では３～５cm 大の礫が分布している状況が検出された。

7008 側石（図 611、図版 41）

7131 土坑の南側で検出された。２点出土しており、据え付けに伴う掘形は検出されなかった。粗砂～極粗砂を参道に用いた範囲の南側で、地層の境界部付近で検出されており、参道の側石であったと考えられる。２点の側石は、上面及び底面の標高がそれぞれ異なっていることや、参道盛土を挟んで直接組み合わさっていた形跡が認められないことから、異なる時期に機能した可能性がある。また、参道で単独で検出されたこと、東西に 7008 側石と連続するものが認められないことや被熱が認められることから、燈籠などの台石であった可能性もある。

7003 参道３－１層出土遺物（図 612、図版 132・133・135・137）

３層から出土した遺物は、図 612 －１～ 22 を図化した。１～ 13 は土師器灯明皿である。14 ～ 18 は、柿釉陶器灯明皿である。18 は、内面に桟があり、受け皿としても使用されたと考える。19 は瀬戸・美濃焼系磁器で、灯明皿である。内面及び口縁部まで施釉され、以下無釉である。煤が全体に付着する。胎土目が２箇所遺存する。20 は巴文軒丸瓦である。巴文の尾部と珠文が残る。21 は石造物の細片である。外区が作り出され、文様と考えられる線状の陽刻が認められる。裏面は破損しており、原形は不明

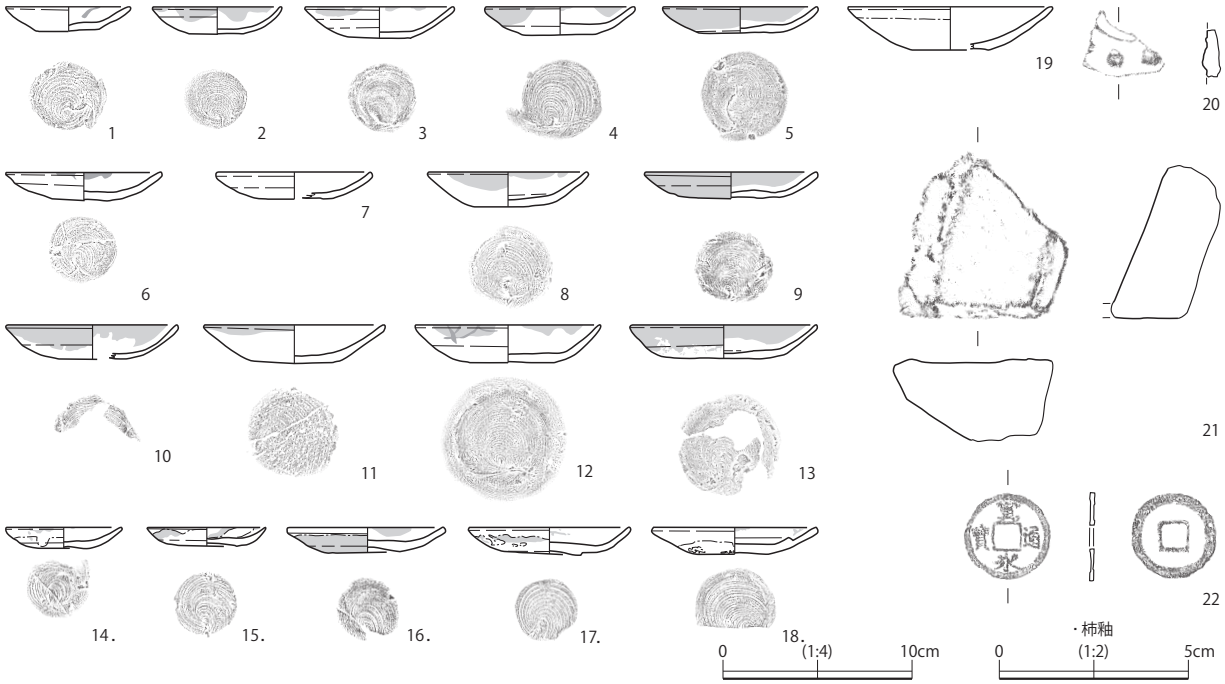


図 612　13 －２区　7003 参道３－１層出土遺物

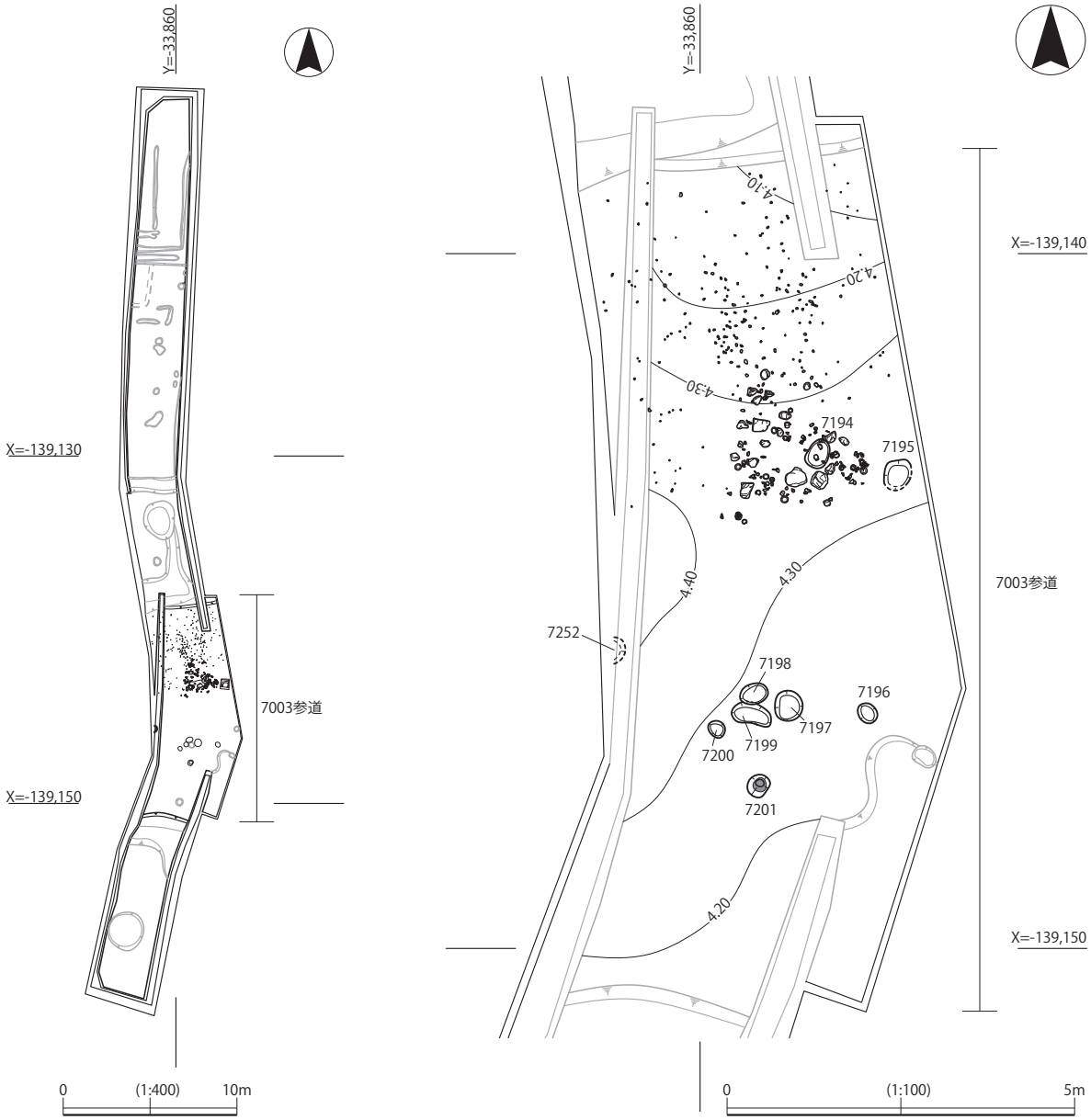


図 613　13 － 2 区　第 3 － 2 面平面

である。22 は寛永通宝である。新寛永で、無背である。出土遺物と上下の地層の所見から、3 － 1 層は、江戸時代後期に形成されたと考えられる。

第 3 － 2 面（図 613、図版 42）

第 3 － 2 面では、7009 台石直下で、台石を抜き取った痕跡と考えられる 7195 抜き取り穴が検出された。また、7003 参道参道の北側斜面で、 3 ～ 5 cm 大の礫が多数出土した。礫は敷き詰めたものというより、ばら撒かれて全体に広がるような状態であった。第 3 － 1 面と同様、炭化物が埋土に含まれることが特徴的な土坑が 7003 参道の南側を中心に検出されている。これら炭化物を埋土に含む土坑の中に、7201 火床が含まれる。

7195 土坑（図 613・614）

7009 台石直下で 2 層とした参道盛土内の粗砂～極粗砂を埋土とした土坑が検出された。部分的な範囲で検出したため、盛土の一単位である可能性もあるが、土坑の形状から台石の抜き取り穴の可能性が高いと考えられた。平面形は正方形、規模は、一辺 0.4 m、深さ 0.1 mである。

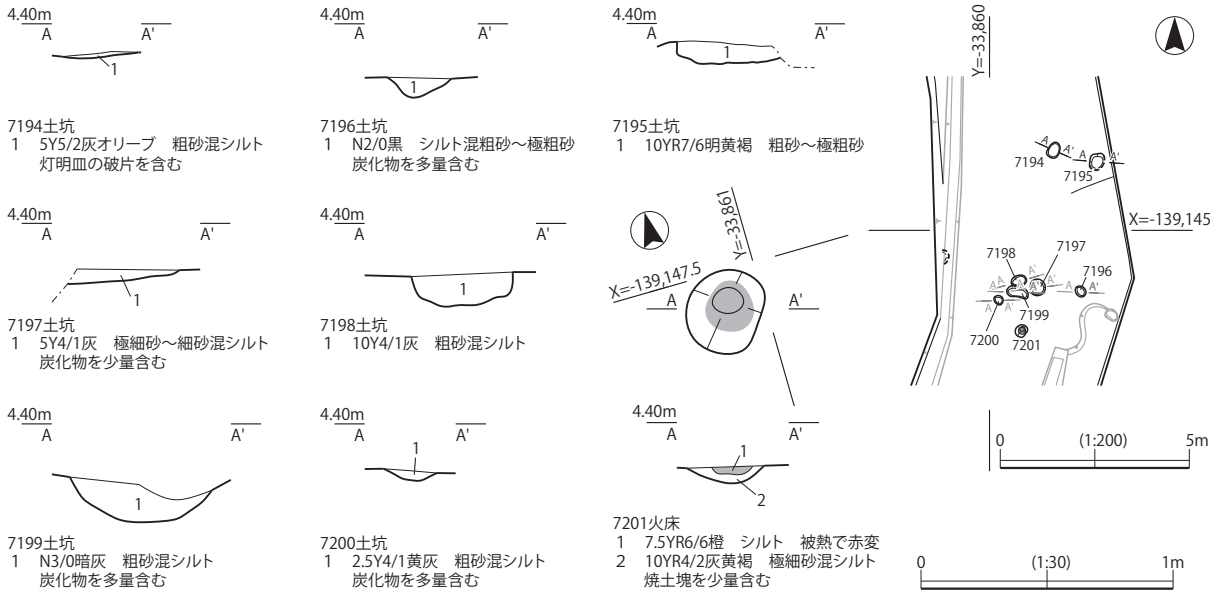


図 614　13 － 2 区　7194 土坑他平・断面

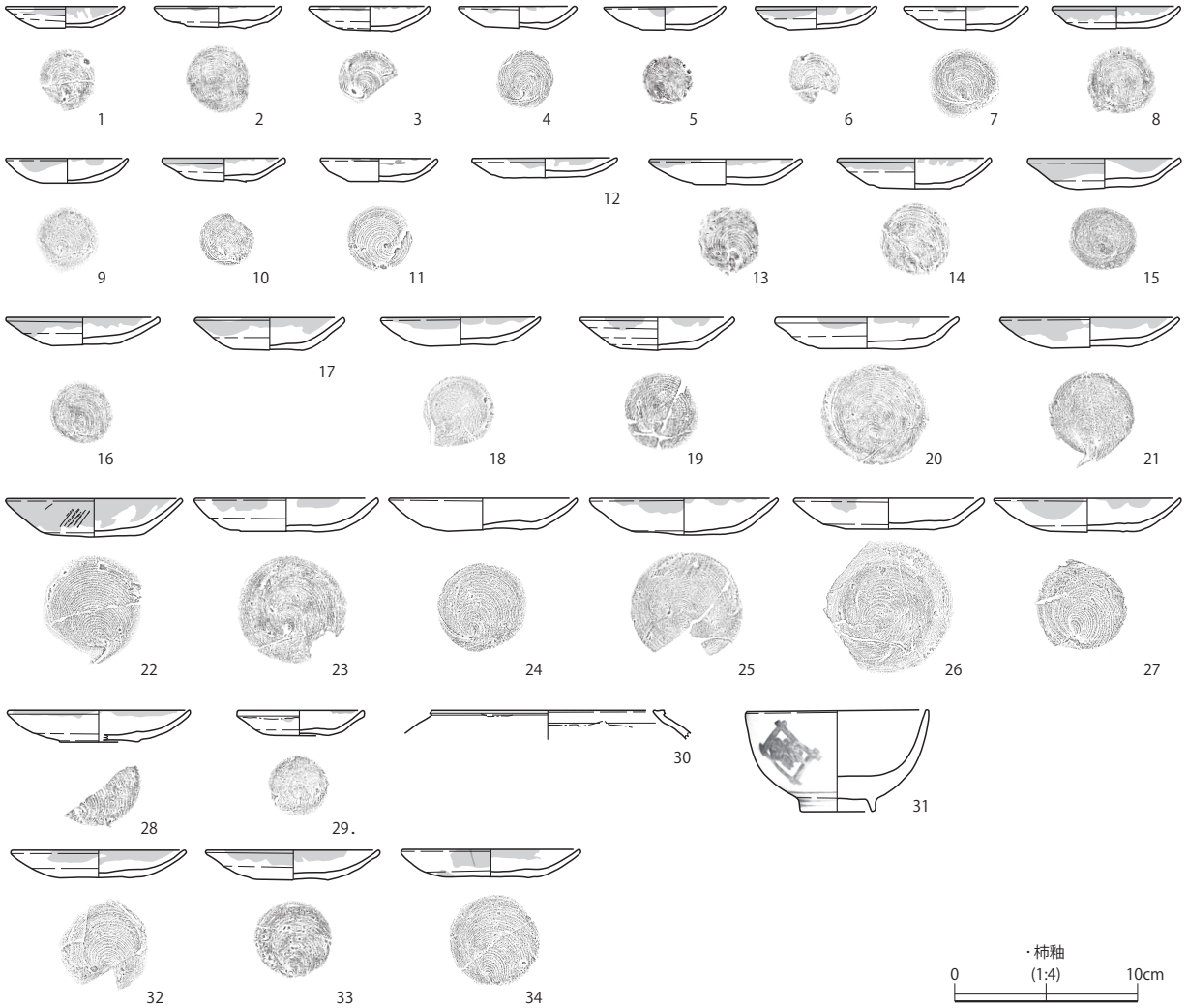


図 615　13 － 2 区　7003 参道 3 － 2 層他出土遺物

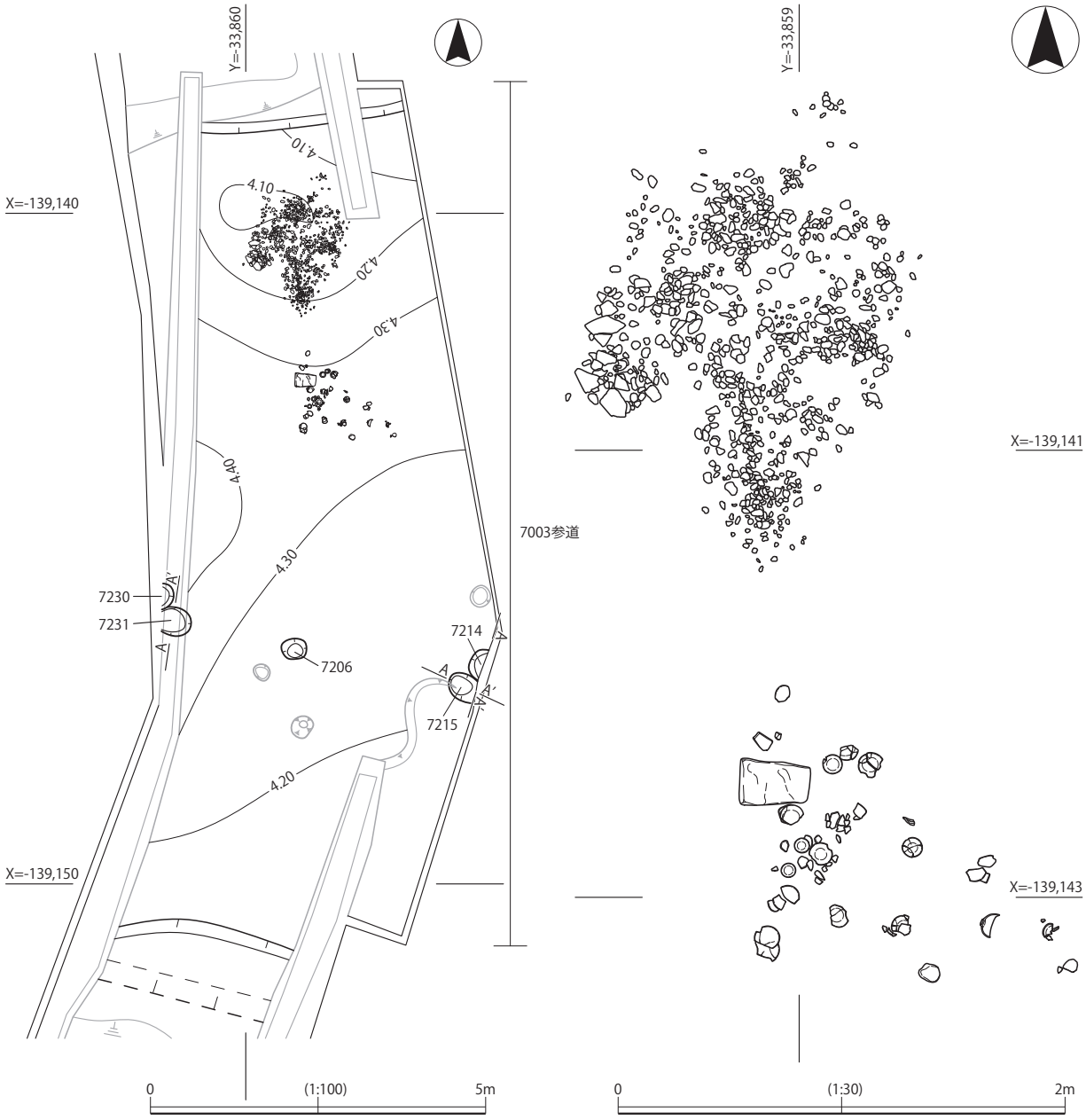


図 616　13 － 2 区　第 3 － 3 面平面

7194 土坑（図 613 ～ 615、図版 134）

7195 土坑の西側で検出された。灯明皿の破片を含む粗砂混シルトを埋土としており、同様の土坑は 7003 参道南側に集中しており、北側で検出されたのは 7194 土坑のみである。平面形は楕円形に近い形状を呈し、規模は長軸 0.4 m、短軸 0.3 m、深さ 0.02 mである。7194 土坑から図 615 － 32 ～ 34 の土師器灯明皿が出土した。

7201 火床（図 613・614、図版 42）

7197 土坑の南側で検出された。平面形は不整な円形を呈し、規模は、直径 0.3 m、深さ 0.06 mである。土坑の上部中央に、火床が構築される。被熱を受けて赤変したシルトが円形に検出された。火床は、直径 0.04 m、深さ 0.04m である。赤変したシルトは、下位で偽礫状を呈し、均一に被熱していない状態が観察され、元々被熱した土が用られたことが想定される。なお、上部構造については不明で、燃焼部に関係するような、炭化物等は検出されなかった。遺物は無く、時期の詳細は不明。

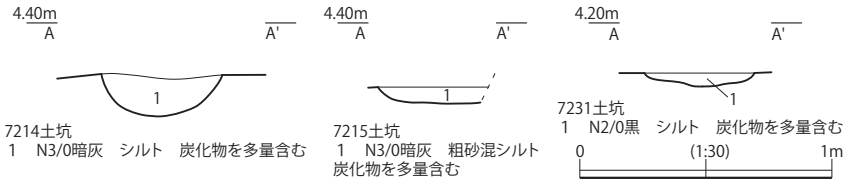


図 617　13 － 2 区　7214・7215・7231 土坑断面

7003 参道 3 － 2 層出土遺物（図615、図版132・135・136）

3 － 2 層から出土した遺物の内、図 615 － 1 ～ 31 を図化した。1 ～ 28 が土師器灯明皿、29 が柿釉陶器灯明皿である。30 は瀬戸・美濃系陶器の壺か。31 は肥前焼系磁器のコンニャク印判の碗である。高台に二重圏線、高台直上に圏線 1 条がそれぞれ施される。出土遺物と上下の地層の所見から、3 － 2 層は、江戸時代後期に形成されたと考えられる。

第 3 － 3 面（図 616、図版 42・43）

3 － 2 層としたシルト混粗砂～極細砂を除去して検出した遺構面である。第 3 － 3 面では土坑と灯明皿を中心とした遺物や礫の集中部が検出された。土器等が集中する範囲では、土師器灯明皿・肥前焼系磁器碗・台座が出土した。出土範囲は、第 4 － 1 面で検出した 7207 溝と、7222 畦畔が途切れる部分に当たり、参道構築後に凹みがあった部分に集中的に投棄された可能性が考えられる。礫集中部の範囲についても同様のことが指摘でき、7207 溝が存在した位置と同じ場所に礫は集中する。礫は 3 － 2 面で検出した礫と同じ大きさのもので、2 ～ 3 cm 大を中心としている。

7206・7214・7215・7230・7231 土坑（図 616・617、図版 42）

7003 参道の南側を中心に土坑が検出された。埋土に炭化物を多量に含んでおり、第 1 面から参道南側で検出された土坑と、埋土の特徴は似る。埋土に混じる炭化物は、各土坑によって量に違いがあり、7230・7231 土坑は大量に炭化物を含む。

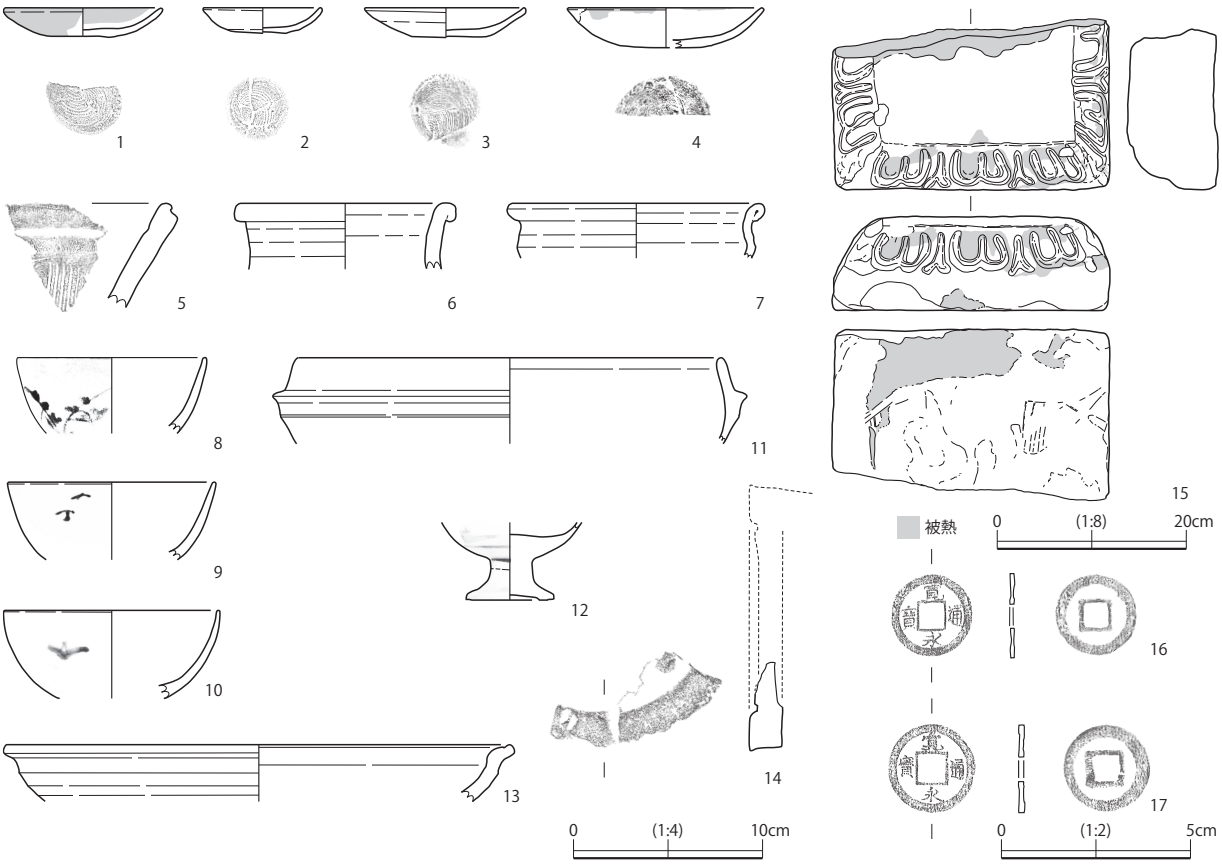


図 618　13 － 2 区　7003 参道 3 － 3 層出土遺物

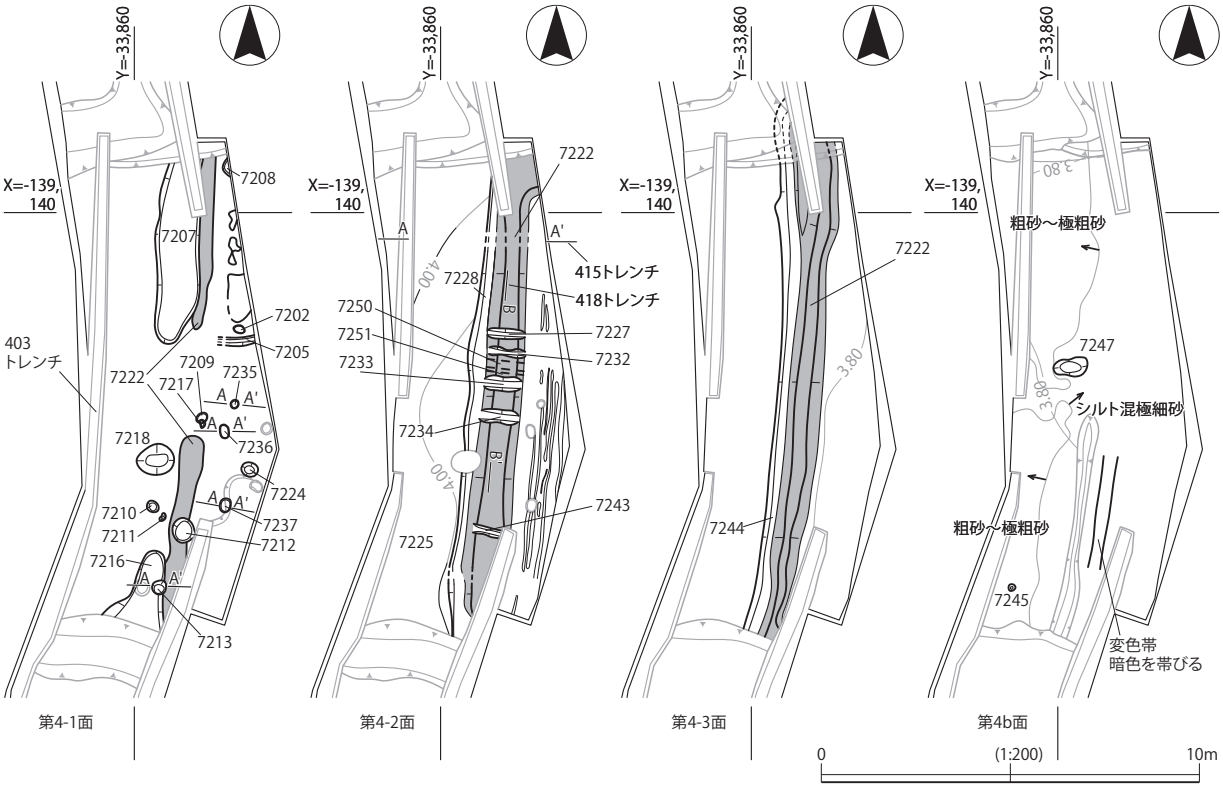


図 619　13 － 2 区　第 4 － 1 ～ 4 － 4 面平面

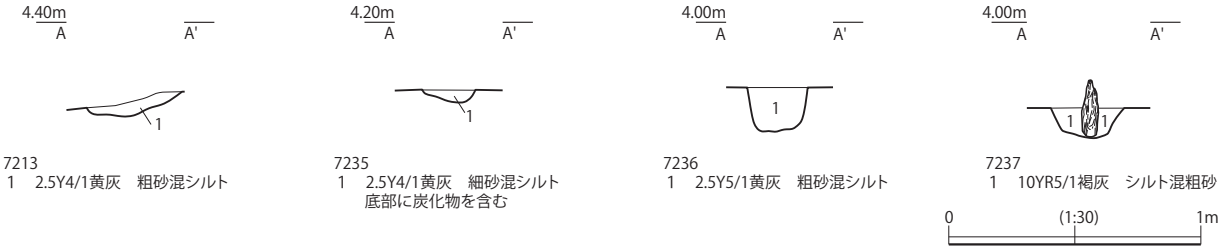


図 620　13 － 2 区　7213 土坑他断面

7003 参道 3 － 3 層出土遺物（図 618、図版 132・133・135 ～ 137）

3 － 3 層から出土した遺物の内、図 618 － 1 ～ 17 を図化した。1 ～ 4 は土師器灯明皿である。5 は丹波焼系の擂鉢である。6 は備前焼壺の口縁部である。7 は京・信楽焼系の鉢である。8 ～ 10 は肥前焼系染付碗である。11 は土師質土器焙烙、12 は肥前焼系仏餉器、13 は瀬戸・美濃焼系皿である。14 は巴文軒丸瓦である。珠文と外縁が遺存する。15 は反花を表す宝篋印塔などの台座である。半分に破損した状態で出土しており、被熱して黒変する。黒変した部分は割面にも及ぶことから、破損した状態で被熱したことが想定される。側面は台形状を呈し、上部に蓮弁が表現される。16・17 は寛永通宝である。新寛永で、裏面は無背。出土遺物から、3 － 3 層は、室町時代後期～江戸時代後期に形成されたと考えている。ただし、16 世紀後半から 17 世紀の遺物は、総じて希薄な状況である。

第 4 － 1 面（図 619・620、図版 43）

3 － 3 層を除去した遺構面で、畦畔が検出された。畦畔以外は、参道に帰属する遺構で、3 － 3 層下面ないし 3 － 3 層形成時に掘削された遺構と考えられる。出土遺物は瓦質火鉢、瓦器・土師器の破片があり、4 － 1 層は 15 世紀から 16 世紀前半にかけて形成されたと考えている。

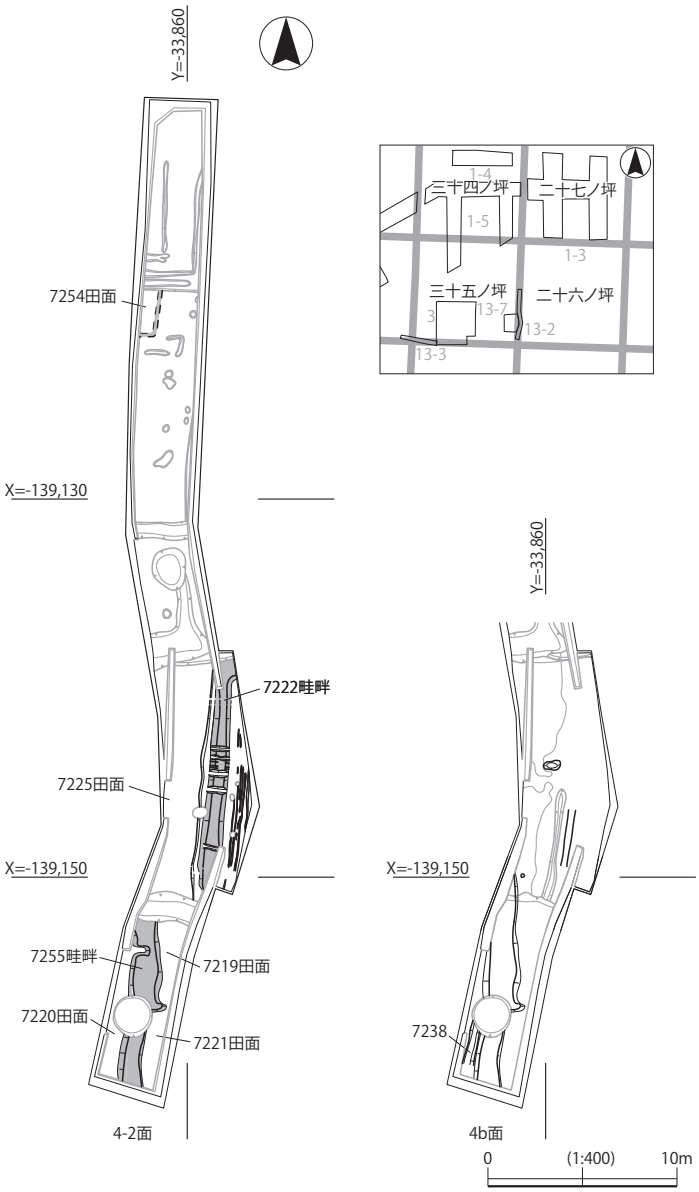


図621　13－2区　第4－2・4b面平面

第４－２面（図619・621～623、図版43・133・136）

４－１・４－１ｂ層とした細砂混シルトを除去して検出した遺構面で、第４－１面と同様、水田が検出された。４－１ｂ層は7222畦畔の西側中央の一部で堆積が確認されており、隣接する調査地である13－6区の断面から、氾濫堆積物と判断される。礫質の砂層で、その供給源は調査地北西に求められる。

7222畦畔の直上では、7227・7232・7233・7243・7250・7251水口が計６箇所検出された。１箇所ずつ機能したと考えられるが、４－１層に対比される畦畔盛土除去面で、検証することはできなかった。４－２層から図622－２の瓦質火鉢が出土しており、４－２層は４－１層とほぼ同時期の、15世紀から16世紀前半に形成されたと考えられる。

また、7222畦畔の東側では、耕作痕が検出されており、作土としては堆積構造が偽礫状を呈し、土質は粗いものの、水田として土地利用されたことが判明した。耕作痕は犂の痕跡と考えられる。

7222畦畔の南側で検出された7255畦畔は7222畦畔と平行するものではなく、東側の肩部が緩やかに低くなっており、耕作時の加工としては鋭角ではない。近世以降の作土によって削平されたことや、7003参道に伴う7002溝に撹乱されたことで、不明な点も多いが、東西の畦畔がX=-139,150近辺にあった可能性があると考えている。なお、7228溝から図622－４の土師器灯明皿が出土した。

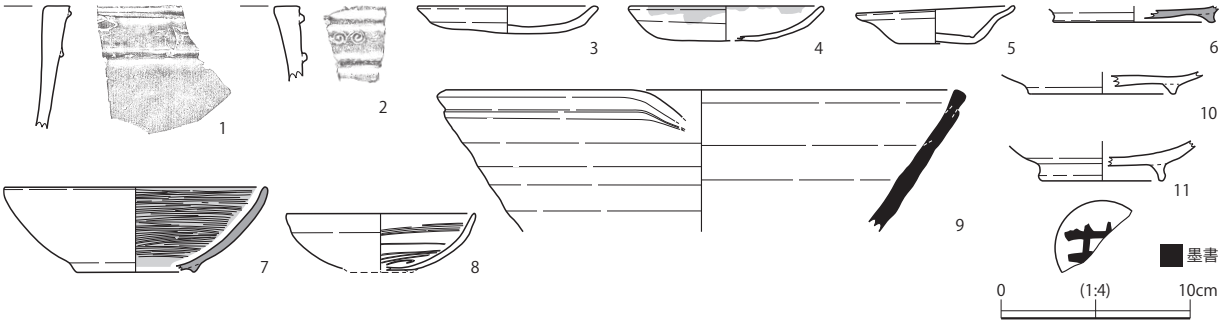
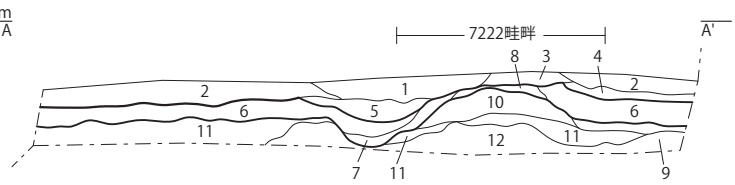
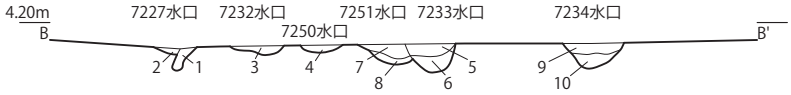


図622　13－2区　４層他出土遺物



415トレンチ
1　7.5YR4/1褐灰　極細砂混シルト　7407溝(近世)埋土
2　2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂混シルト　4-1層
3　10YR5/3にぶい黄褐　極細砂混シルト　7222畦畔
4　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　4-1層の細分
5　2.5Y4/1黄灰　細砂混シルト　7228溝(新)埋土
6　2.5Y5/1黄灰　細砂混シルト　4-2層
7　5Y5/1灰　粗砂混シルト　7228溝(旧)埋土
8　7.5YR4/2灰褐　極細砂～細砂混シルト　7222畦畔
9　5Y5/1灰　細砂混シルト　4-3層
10　2.5Y5/2暗灰黄　極細砂～細砂混シルト　4-4b層
11　10YR6/2灰黄褐　粗砂～極粗砂　2-3cm大の礫を少量含む　4-4b層
12　5B5/1青灰　細砂～極細砂　4-4b層



418トレンチ
1　7.5YR3/1黒褐　細砂混シルト　木根(現代)
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　5-20mm大の礫を少量含む　7227水口埋土
3　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　7232水口埋土
4　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　7250水口埋土
5　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　7233水口埋土
6　10YR5/2灰黄褐　極細砂～細砂混シルト　7233水口埋土
7　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　7251水口埋土
8　10YR6/2灰黄褐　極細砂～細砂混シルト　7251水口埋土
9　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　7234水口埋土
10　2.5Y4/1黄灰　極細砂混シルト　7234水口埋土

図 623　13 － 2 区　415・418 トレンチ断面

第４－３面・第４－４面（図 619・622、図版 43・136）

第４－３面は、４－２層を除去して検出した遺構面である。第４－３面では、第４－２面と同様、水田が検出された。４－３層は、403 トレンチ掘削時に出土した図 622 －８の瓦器椀が帰属すると考えられ、鎌倉時代から室町時代前期に形成されたと考えられる。

第４－４面は、４－３層を除去して検出した遺構面である。４－３層を除去した段階で、調査地の大半は４ｂ層が露出しており、7245 ピット周辺の一部に４－４層とした古土壌が遺存した。第４－４面では、４－３層に帰属する 7222 畦畔の痕跡が検出された。４－４層からは、黒色土器Ａ類椀が出土した。

7238 溝（図 621・622、図版 136）

調査地南側、第４－２面の 7220 水田直下で検出された。埋土は粗砂混シルトで、４－３層とした水田作土と土質は似る。7238 溝から図 622 －３の土師器小皿、９の東幡系こね鉢が出土した。鎌倉時代前期。

第４ｂ面（図 619・621）

４－４層を除去して検出した遺構面である。第４ｂ面では、土坑・ピットが検出された。

４層他出土遺物（図 622、図版 133・136）

４層から出土した遺物は、1・2・5・6・7・10・11 である。１は瓦質火鉢で、４－１層から出土した。室町時代前期に位置付けられる。２は瓦質火鉢で、４－２層から出土した。１と同時期のものと考えられる。５は土師器小皿で、４－４層から出土した。上層の混入品と考えられる。10 は椀で、４－４層から出土した。全体が磨滅する。黒色土器か。６・11 は第４ｂ面の精査時に出土したもので、４－４層に帰属する。6 は黒色土器Ａ類椀である。7 は黒色土器Ａ類椀で 403 トレンチ掘削時に出土しており、４－４層に帰属する。11 は灰釉陶器埦である。底面に「井」の字に似た墨書が確認できた。平安時代後期。

（後川恵太郎）

図 624　3・13－3区　第２ｂ面平面

第６節　13－３区の調査成果

３区南西側に設定した調査地である。２層上面まで機械掘削を行って、２ｂ層上面まで人力掘削を行った。２ｂ層以下についてはT.P.+1.5 mまで機械掘削を行って、断面記録と一部平面の記録を行って調査を終了した。

第２面（図 624）

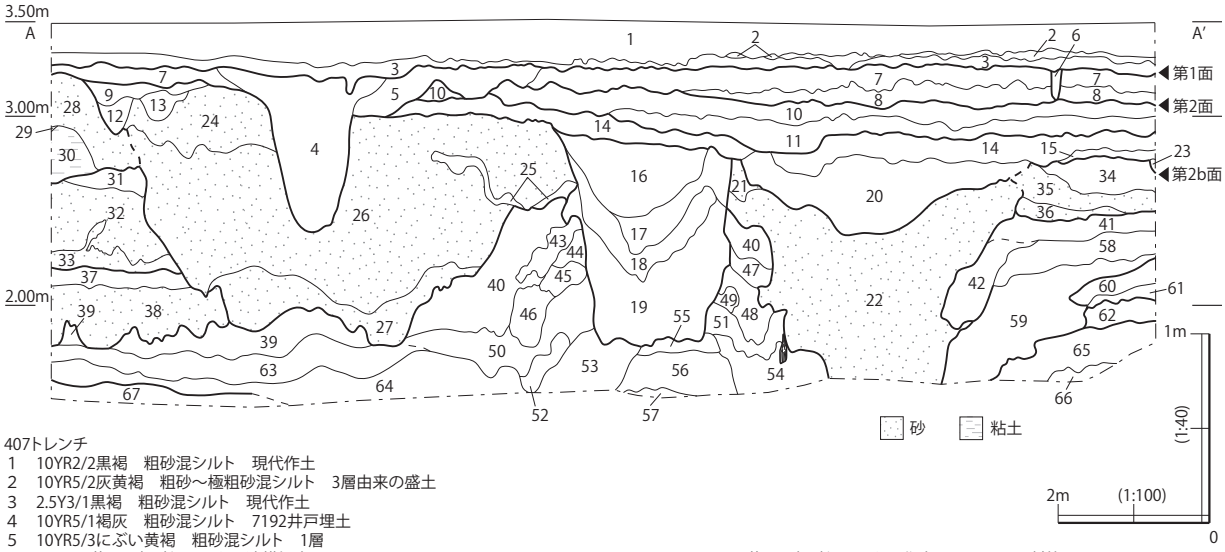
近代から現代の作土及び１層を機械掘削で除去して検出した遺構面である。第２－１面では、東西の耕作関連の溝が検出された。図 624 に図示した 7110 溝は、坪境に掘削された溝で 18 世紀以降に掘削されたものである。近接して、同時期の 7192 井戸が検出された。２－１層から瓦質土器羽釜が出土しており、室町時代後期以降の遺構面と考えられる。

第２ｂ面（図 624）

２層を除去して検出した遺構面で、２ｂ層とした砂層上面に当たる。第２ｂ面では、鎌倉時代から室町時代前期の集落と坪境の溝が検出された。

7078・7132 溝（図 624・626・627、図版 44・138・139）

7078 溝は、坪境に掘削された溝である。規模は、幅 0.7 m、深さ 0.3 mである。7132 溝と切り合い関係があり、7078 溝が新しい。流向は東方向で、東端で屈曲し、南方向に流れたと考えられる。南流する部分は 7132 溝と重なる位置にあり、7132 溝廃絶後に 7078 溝が掘削されたと考えられる。埋土は底面直上が湿性堆積物のシルト質粘土、中層から上層が極細砂～細砂混シルトの偽礫である。なお、西側には、同時期に機能した東西の坪境の 7020 溝がある。



407トレンチ
1　10YR2/2黒褐　粗砂混シルト　現代作土
2　10YR5/2灰黄褐　粗砂～極粗砂混シルト　3層由来の盛土
3　2.5Y3/1黒褐　粗砂混シルト　現代作土
4　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　7192井戸埋土
5　10YR5/3にぶい黄褐　粗砂混シルト　1層
6　2.5Y5/1黄灰　粗砂混シルト　遺構埋土
7　10YR5/3にぶい黄褐　粗砂混シルト　1-1層
8　10YR4/1褐灰　極粗砂～粗砂混シルト　1-1層の細分
9　10YR5/2灰黄褐　細砂～中砂混シルト　2層
10　7.5YR5/1褐灰　細砂混シルト　2層
11　7.5YR4/1褐灰　細砂混シルト　2層
12　2.5Y6/2灰黄　粗砂混シルト　2-3mm大の礫を少量含む　遺構埋土
13　2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂混シルト　遺構埋土
14　7.5YR5/2灰褐　極細砂～細砂混シルト　2層
15　10YR5/2灰黄褐　粗砂混シルト　2層の細分
16　10YR3/2黒褐　シルト混粗砂～極粗砂　遺構埋土
17　10YR7/4にぶい黄橙　粗砂～極粗砂　遺構埋土
18　10YR6/3にぶい黄橙　細砂混シルト　遺構埋土
19　10YR4/1褐灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土
20　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　遺構埋土
21　5Y7/1灰白　極細砂～細砂　遺構埋土
22　2.5Y8/2灰白　粗砂～極粗砂　上位で細粒化　遺構埋土
23　2.5Y5/2暗灰黄　極細砂～細砂混シルト　粗砂～極粗砂を微量含む　遺構埋土
24　10YR6/3にぶい黄橙　粗砂～極粗砂　遺構埋土
25　2.5Y6/1黄灰　極細砂～細砂　遺構埋土
26　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　遺構埋土
27　10Y7/1灰白　極細砂～細砂　遺構埋土
28　10YR6/3にぶい黄橙　粗砂～極粗砂　1-2cm大の礫を少量含む　上位で粗粒化　2b層
29　2.5Y6/2灰黄　細砂混シルトと粗砂～極粗砂の互層　2b層
30　2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂混シルト　2b層
31　10YR6/1褐灰　粗砂混シルト　作土　2-1区4層に対比
32　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　自然堆積層　2-1区4b層に対比
33　5Y4/1灰　極細砂～細砂　自然堆積層　2-1区4b層に対比
34　2.5Y6/3にぶい黄　極細砂～細砂　2-1区4層に対比
35　2.5Y7/3浅黄　極細砂～細砂　自然堆積層　2-1区4b層に対比
36　5Y5/1灰　極細砂～細砂　自然堆積層　2-1区4b層に対比
37　2.5Y4/1黄灰　粗砂混シルト　作土　2-1区4層に対比
38　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　2-1区4b層に対比
39　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂　作土　2-1区4層に対比
40　10YR3/2黒褐　粗砂混シルト　盛土か
41　5Y5/1灰　中砂～粗砂混シルト　作土　2-1区4層に対比
42　2.5Y6/2灰黄　シルト質極細砂　崩落土
43　5Y5/1灰　極細砂～細砂　盛土か
44　2.5Y4/1黄灰　粗砂混シルト　盛土か
45　5Y6/1灰　細砂　盛土か
46　2.5Y7/1灰白　細砂　盛土か
47　2.5Y3/2黒褐　粗砂混シルト　盛土か
48　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂　細砂混シルト偽礫を少量含む　盛土か
49　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　盛土か
50　2.5Y7/2灰黄　細砂混シルト　粗砂～極粗砂を多量含む　盛土か
51　10YR5/2灰黄褐　細砂混シルト　盛土か
52　2.5Y6/2灰黄　極細砂質シルト　盛土か
53　10YR4/2灰黄褐　細砂混シルト　盛土か
54　10YR6/1褐灰　シルト混極細砂　偽礫　盛土か
55　10YR6/2灰黄褐　極細砂～細砂混シルト　盛土か
56　2.5Y6/1黄灰　細砂混シルト　盛土か
57　2.5Y7/1灰白　シルト　盛土か
58　5Y5/1灰　極細砂混シルト　作土か　2-1区4層に対比
59　2.5Y7/1灰白　粗砂～極粗砂　流路埋土
60　2.5Y5/1黄灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　作土か　2-1区4層に対比
61　2.5Y6/1黄灰　極細砂～細砂混シルト　弱い土壌化　2-1区4層に対比
62　2.5Y5/2暗灰黄　細砂混シルト　粗砂～極粗砂　作土　2-1区4層に対比
63　2.5Y5/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　作土　2-1区4層に対比
64　2.5Y7/1灰白　極細砂　西側で粗粒化　2-1区4b層に対比
65　2.5Y4/1黄灰　粗砂混シルト　作土　2-1区4層に対比
66　2.5Y6/1黄灰　シルト混極細砂～細砂　作土か　2-1区4層に対比
67　2.5Y5/1黄灰　細砂～中砂混シルト　作土　2-1区4層に対比

図625　13－3区　407トレンチ断面

7078溝から出土した遺物は、図627－1～7・9～13を図化した。1～6は土師器皿である。7は東播系こね鉢である。9～13は瓦器椀である。9の外面はナデと粗いヘラミガキ、内面は螺旋状の暗文が施される。10の外面はナデ調整、内面に螺旋状の暗文が施される。11は見込みに連結輪状の暗文が施される。12の外面はナデ・指押さえ後、分割性のあるヘラミガキが施される。内面は密なヘラミガキ調整、見込みはハケの後連結輪状の暗文が施される。13の外面は、分割性はあるものの粗いヘラミガキが施される。内面は密なヘラミガキ、見込みは連結輪状の暗文が施される。出土した瓦器椀はⅡ－2～Ⅲ－2型式に比定できるもので、共伴する東播系こね鉢も同時期のものである。

7132溝の規模は幅1.8 m、深さ0.3 mである。流向は南方向である。溝の中位まで粗砂混シルトのブロック土で埋没しており、上位には水成層の砂層が一部認められる。7132溝から、図627－8・14が出土した。8は東播系こね鉢である。14は瓦器椀で外面は粗いヘラミガキ、内面は密なヘラミガキ、見込みは連結輪状文の暗文が施される。また、7132溝の東側では、7047溝が接続する。7132溝に排水していたと考えられる。7047・7132溝は、周辺に展開していたであろう水田の灌漑用水路であると同時に、3区や今回の調査地で検出された集落を区画したと考えられる。

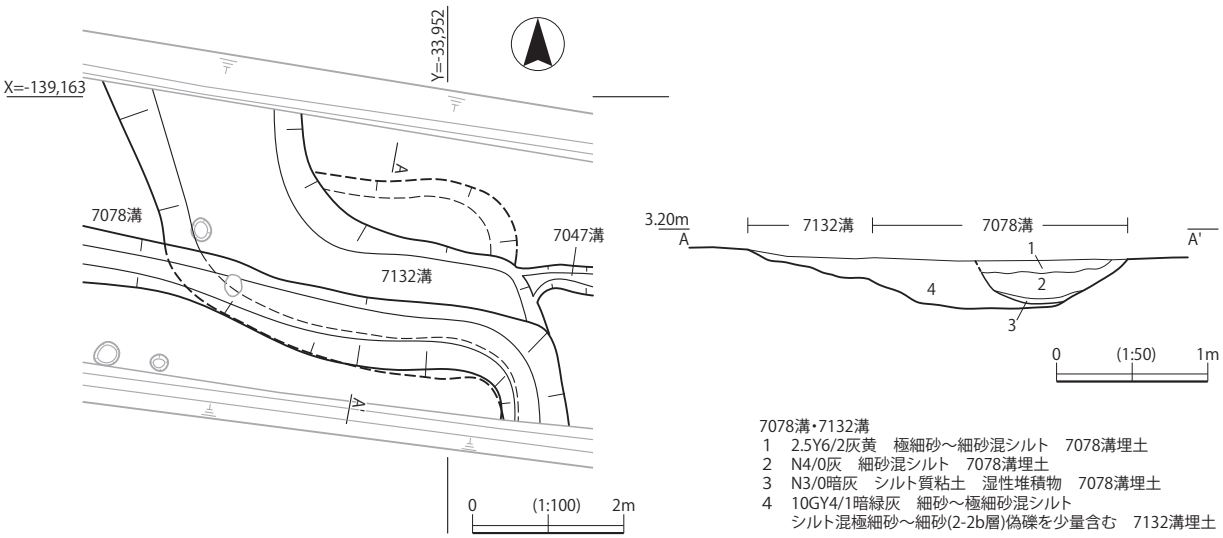


図 626　13 － 3 区　7078・7132 溝平・断面

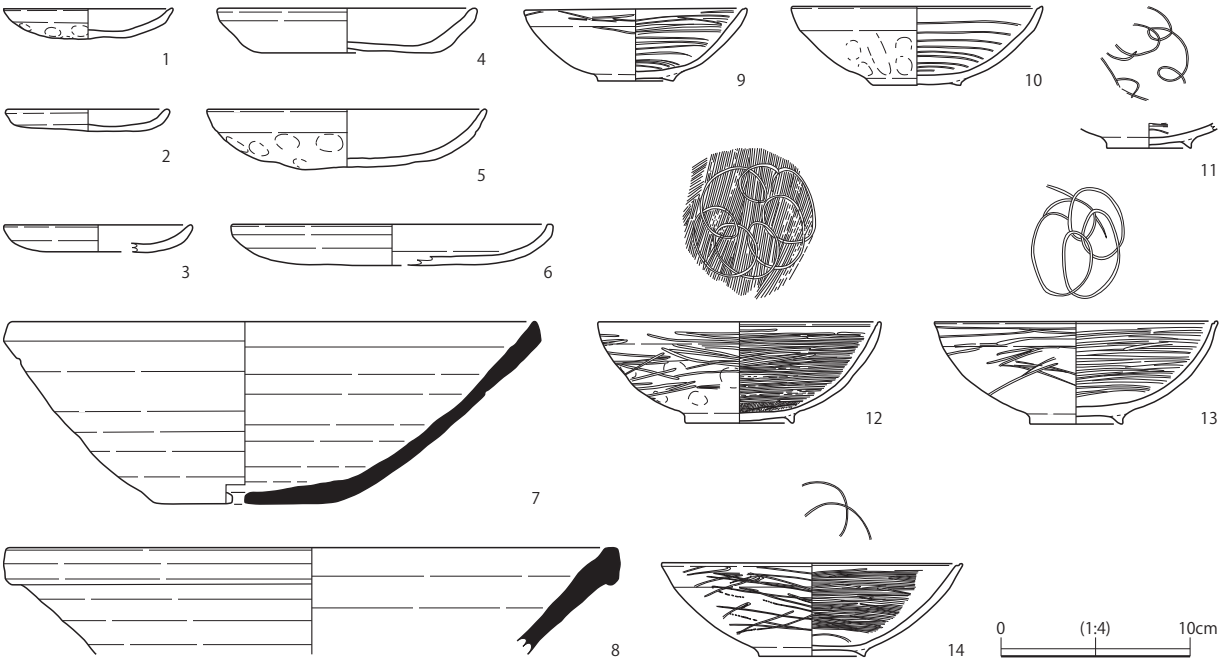


図 627　13 － 3 区　7078・7132 溝出土遺物

7033 溝（図 624・629、図版 44）

調査地の東端で検出された。肩部に沿って、護岸的な施設と考えらえられる杭列が検出されたことや、３区を含めた位置関係から、溝として報告を行う。規模は、幅 0.7 m以上、深さ 0.4 m以上である。埋土は、細砂混シルトのブロック土である。杭列は肩部に沿って検出された。芯持ち材の先端を尖らせた杭を用いており、矢板状に加工したものが 1 点含まれる。

7135 土坑（図 624・628、図版 139）

7132 溝の西側で検出された。平面形は不整形、規模は、長軸 3.0 m、短軸 1.6 m、深さ 0.35 mである。埋土は粗砂混シルトである。7135 土坑から出土した遺物は図 628 － 1 ～ 10 を図化した。 1 ～ 5 は土師器皿である。 6 ～ 9 は瓦器椀である。 6 の外面はナデ調整、見込みには連結輪状の暗文が施される。 7 の外面はナデ調整、見込みには連結輪状の暗文が施される。 8 の外面はナデ及び粗いヘラミガキ、見込みはハケ調整の後、連結輪状の暗文が施される。 9 の外面はナデ・指押さえの後粗いヘラミガキが施

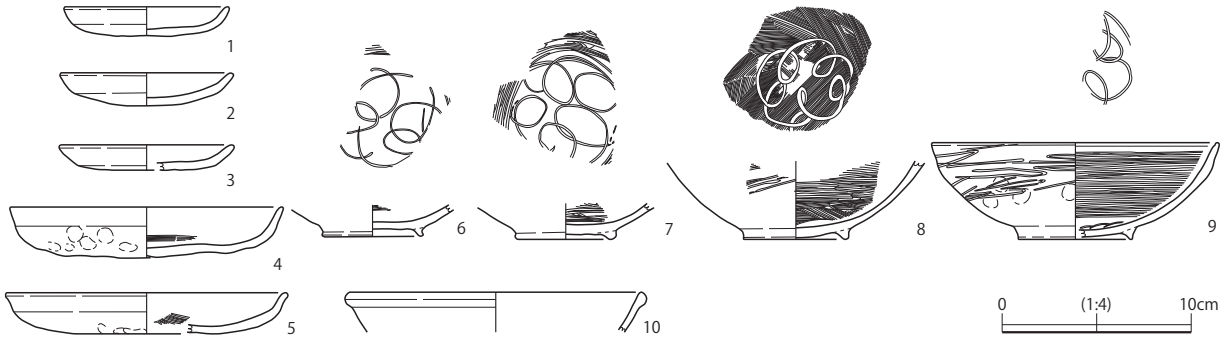


図 628　13 － 3 区　7135 土坑出土遺物

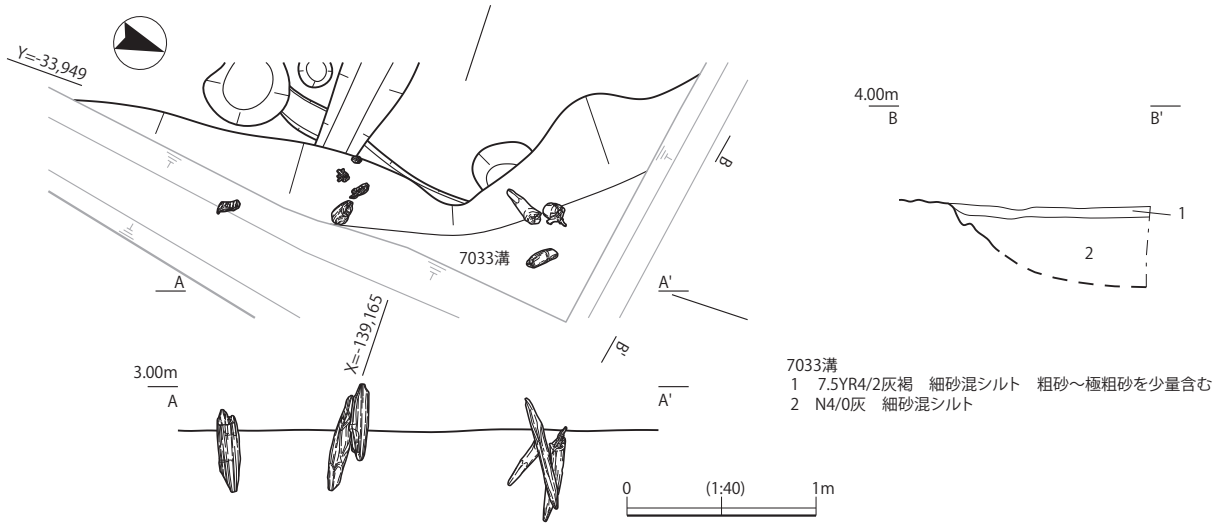


図 629　13 － 3 区　7033 溝平・立・断面

される。内面は密なヘラミガキ、見込みには連結輪状の暗文が施される。10 は白磁碗である。瓦器椀はⅡ－２型式に比定できるもので、共伴する白磁碗も時期的には矛盾しないものと考えられる。

7143 土坑（図 624・630、図版 44）

調査地の西端で検出された。平面形は不整形で、規模は南北 2.2 m以上、東西 6.5 m以上、深さ 0.4 mである。埋土は、粗砂～極粗砂である。土坑の内側で、肩部に沿って杭列が検出された。土坑の全容が不明であるため、杭列の機能は不明な点もあるが、西側部分は土坑肩部から離れて、平面的に円弧を描くように検出されており、護岸施設であるだけではなく、シガラミのような水利施設の可能性がある。垂直に打設される杭が大半であったが、これらに直交して水平に打ち込まれた杭もあった。出土遺物は、土師器・砥石等が出土したが、時期を特定する遺物はなかった。

また、7143 土坑に接続する 7130 溝が北西部で検出された。規模は、幅 0.2m、深さ 0.03m である。7143 土坑に排水を行っていたと考える。

7060・7189・7139・7191・7193 柱穴、7100 土坑（図 624・631・632、図版 44・138）

柱穴及び土坑は、多数検出されたが、以下に特徴的なものについて取り上げる。7060 柱穴は、柱の抜き取り穴に 20cm 大の石が落とし込まれていた。7189 柱穴は根石の上に柱根が立った状態で検出された。7139 柱穴は柱根の一部が底部に遺存しており、7060 柱穴と同様、抜き取り穴に石が落とし込まれていた。7139 柱穴から図 632 － 10 は瓦器椀が出土した。外面はナデ及び指押さえの後、疎らなヘラミガキ、内面は密なヘラミガキが施される。見込みの暗文は一部が遺存するのみである。Ⅱ－１～２型式。

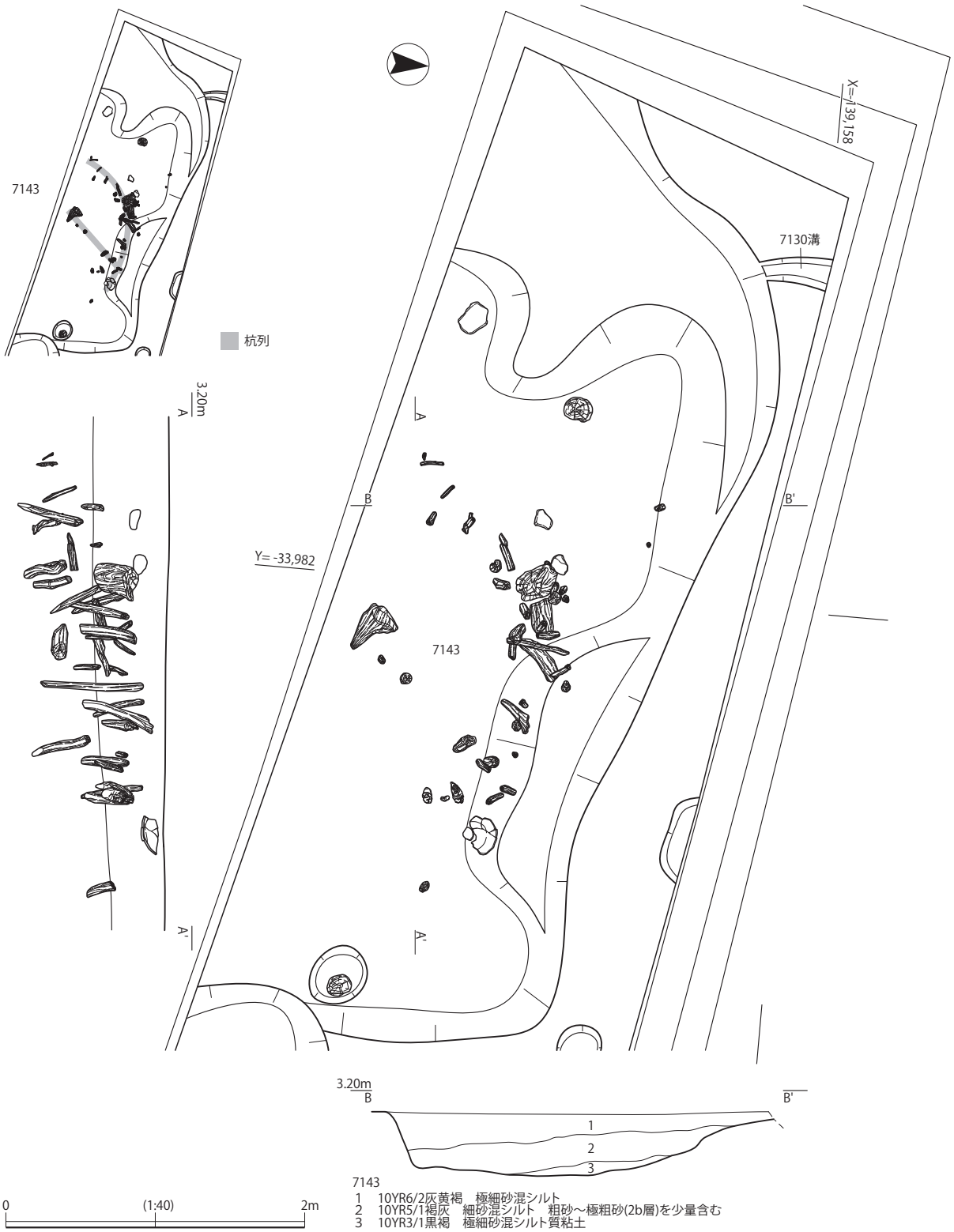


図 630　13 － 3 区　7143 土坑平・立・断面

7191 柱穴は柱は抜き取られていたが、根石と根巻きの木材が出土した。7193 柱穴は上部は失われていたが、根石が検出された。

7100 土坑は、焼土塊が埋土中に含まれた土坑で、図 632 － 1 ～ 4 が出土した。 1・2 は土師器小皿、3 は瓦器椀で見込みの暗文は螺旋状文である。 4 は瓦器椀で、外面は分割性のあるヘラミガキが施される。見込みの暗文は連結輪状文である。Ⅱ－ 2 ～ 3 型式。

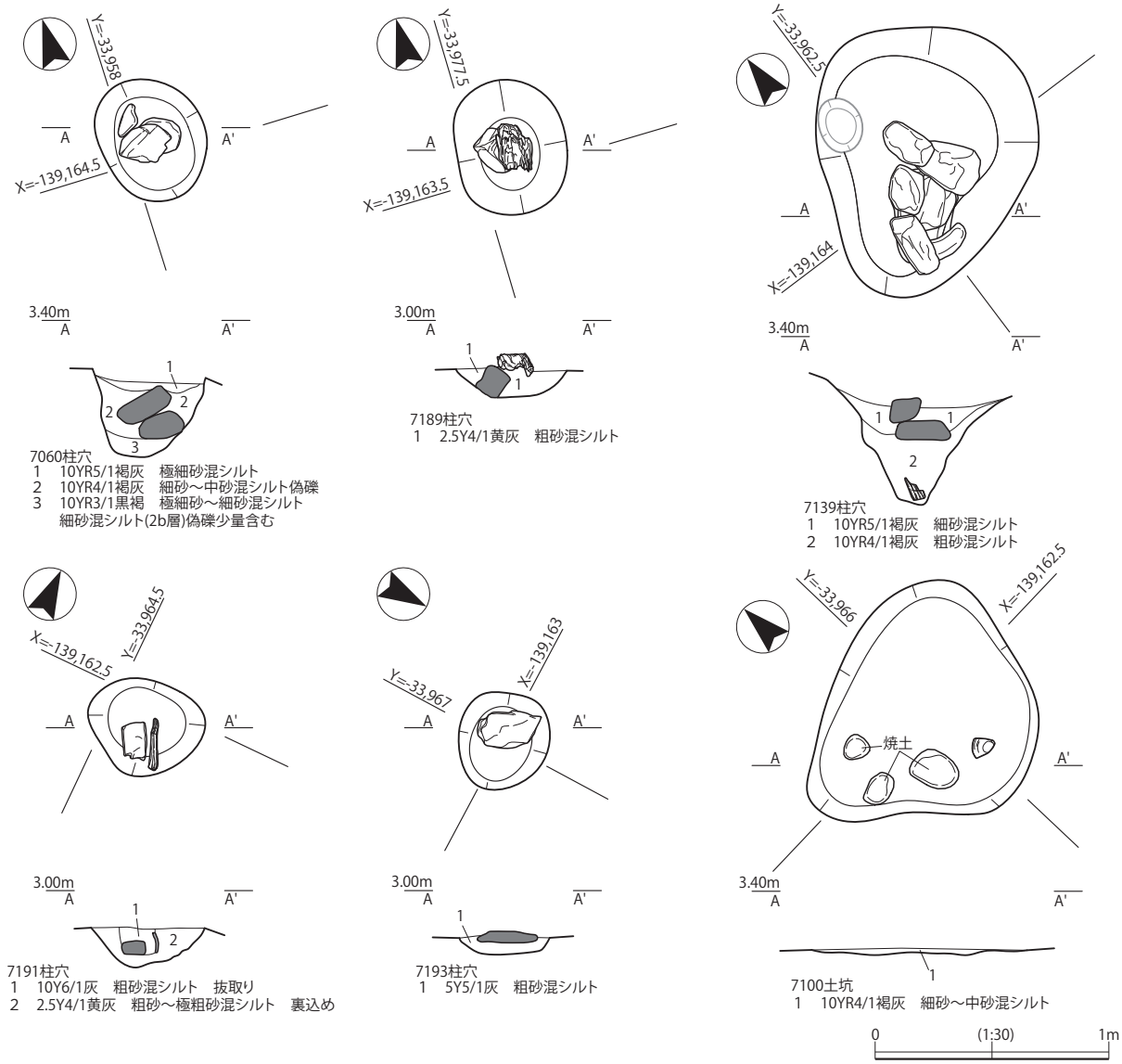


図 631　13 － 3 区　7060 土坑他平・断面

その他の遺構・地層出土遺物（図 632、図版 138・139）

上記に掲げた遺構以外から出土した遺物を図 632 － 5 ～ 9 ・11 ～ 22 に図化した。 5 ～ 7 は 7120 土坑から出土した。5 は瓦器小皿で、内面にジグザク状にヘラミガキされる。6・7 は土師器皿である。8・21・22 は 7110 溝から出土した遺物である。 8 は瓦器椀である。外面はナデ及び指押さえが施される。21 は砥石で、砥面は 4 面である。敲打痕と考えられる凹みが砥面の一部で確認できる。22 は鉄製品で、留め金具と考えられる。直径 2.2cm、厚み 4 mm。11 は土師器小皿で、7185 溝から出土した。16 は瓦質土器甕底部で 7046 溝から出土した。外面は平滑に仕上げられる。内面はナデ調整される。底部の外周に沿ってヘラケズリで、それより内側は工具を用いたナデ調整が施される。17 ～ 19 は 7151 土坑から出土した土器である。17 は瓦質土器羽釜である。18 は瓦質土器すり鉢である。外面はナデ調整と指押さえによって仕上げられる。内面はハケ調整の後、摺目が付けられる。19 は瓦質土器火鉢の脚部である。 9 は瓦器椀で、7138 土坑から出土した。外面はナデ調整後、疎らにヘラミガキが施される。内面は密なヘラミガキで、見込みは遺存していないため暗文は不明である。20 は滑石製石鍋で、7046 溝から出土した。内外面はケズリによって仕上げられ、煤の付着が顕著である。12 は黒色土器 A 類椀

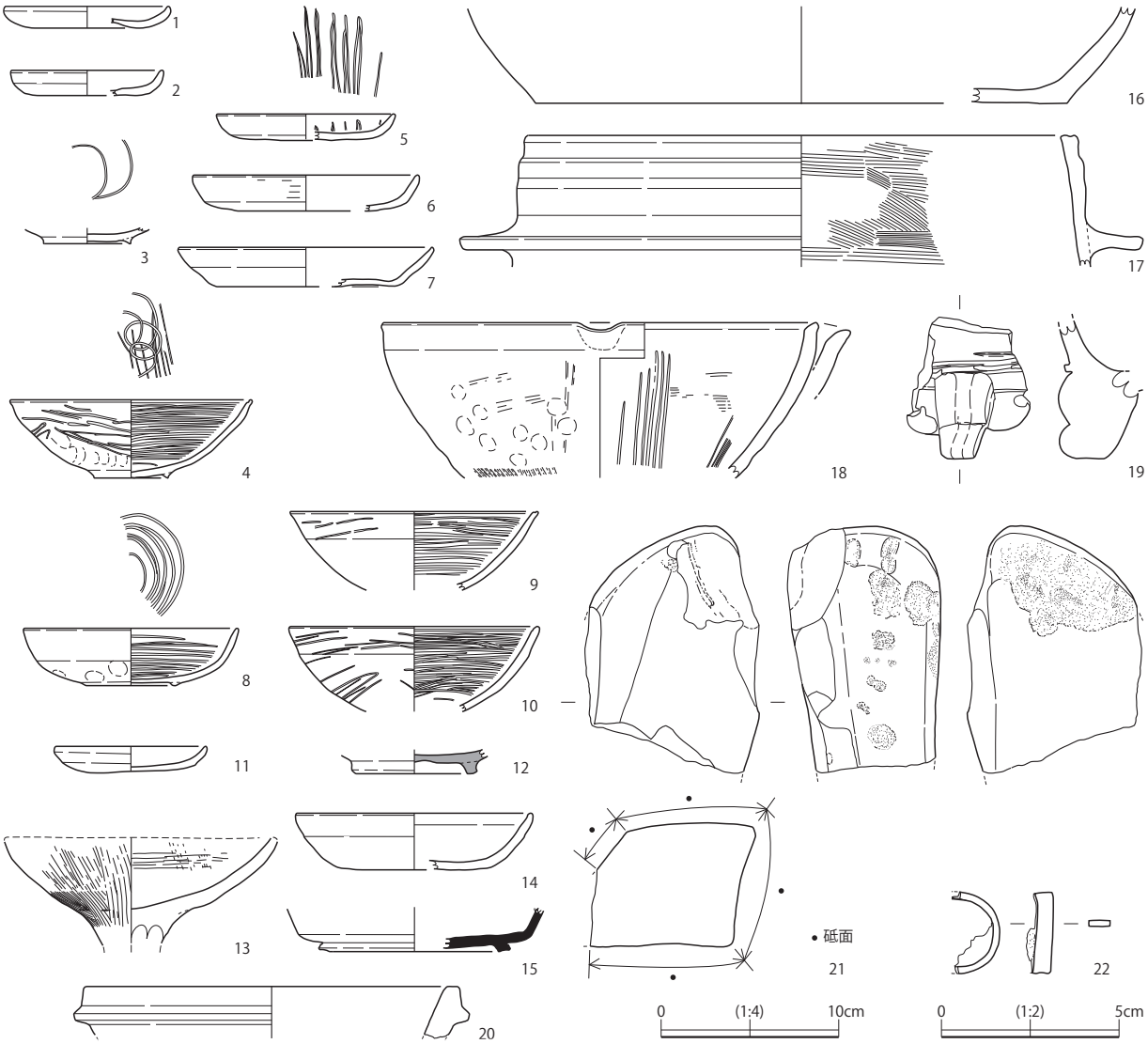


図 632　13 － 3 区　7100 土坑他出土遺物

である。406 トレンチ内、２ｂ層の直上から出土している。２ｂ層は 13 － 2 区の４ｂ層に対比できる地層で、13 － 2 区 4 － 4 層から出土した平安時代の遺物と時期が合致する。14・15 は２ｂ層掘削時に出土した。14 は土師器坏である。口縁端部が丸められる。平安時代前期か。15 は須恵器坏である。内外面は回転ナデ調整される。奈良時代前期か。

２ｂ層以下の調査（図 625、図版 44）

２ｂ層以下で T.P.+1.5 ｍの間に、作土層が２層認められた。図 625 の 31 に当たる地層では、上面と下面を精査した。上面では畦畔は確認されず、下面では図 632 － 13 の土師器高坏が出土した。口縁端面は磨滅・剥離しているが、丸くおさめられていたものと考えられる。古墳時代中期後葉以降の資料と考えられる。

水成層の砂層を挟んで、図 625 の 37 に相当する地層の上面（第４面）でも精査を行った。水田畦畔が２条検出された。遺物が出土しておらず、詳細は不明であるが、２－１区の調査成果から、古墳時代中期から後期に位置付けられる遺構面と考えられる。（後川恵太郎）

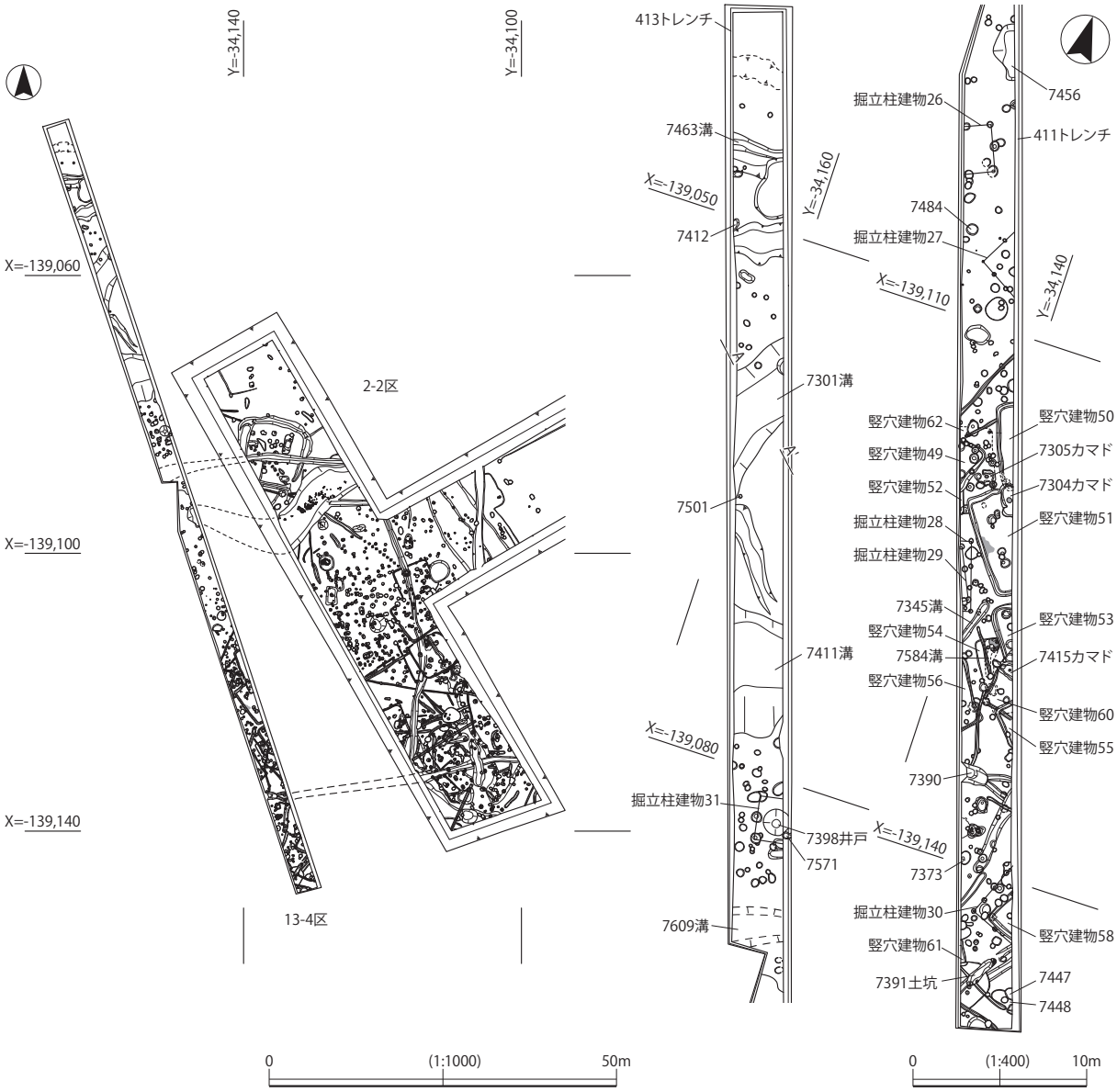


図 633　13 － 4 区　第 5 － 2 b 面平面

第 7 節　13 － 4 区の調査成果

2 － 2 区の西側に南北に長い調査地を設定して、発掘調査を行った。第 5 － 2 b 面まで機械掘削を行い、第 5 － 2 b 面の調査終了後、5 － 2 b 層の途中まで機械掘削を行って調査を終了した。

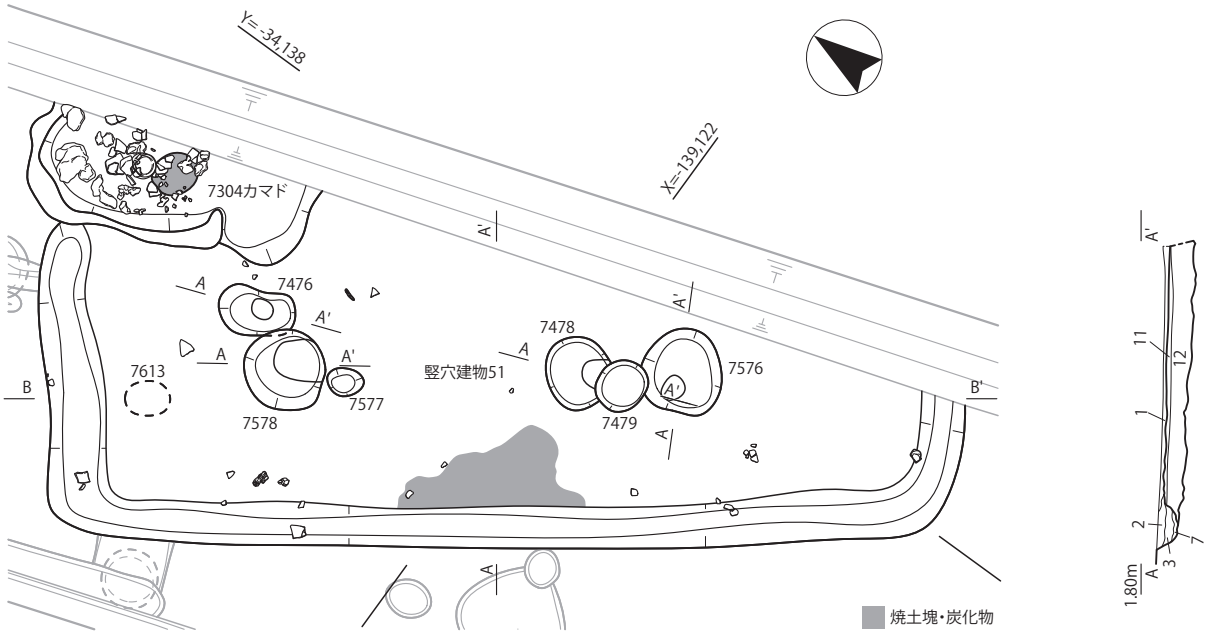
13 － 4 区では 2 － 2 区第 5 － 2 b 面で検出された古墳時代集落の続きが検出された。北側では、集落縁辺に掘削されたと考えられる溝が複数検出された。

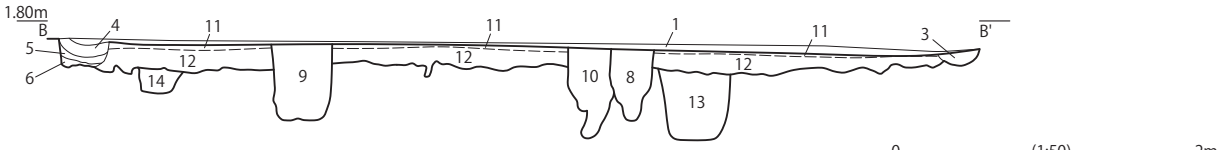
なお、第 5 － 2 b 層中では、2 － 2 区第 6 － 1 面 8059 微高地に連続すると考えられる、7601 微高地が検出された。

竪穴建物 51（図 633 ～ 636、図版 45・88・141・143）

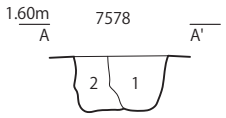
竪穴建物 53 の北側で検出された。規模は南西辺 6.1 m である。床面はシルト混極細砂～細砂で、上部が土壌化しており、炭化物や焼土塊の混入が認められた。

主柱穴は 7578・7479 柱穴が確認されており、それ以外に 2 基ずつ、7578・7479 柱穴の周囲で柱

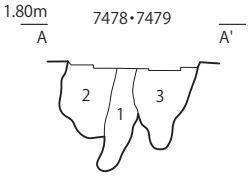




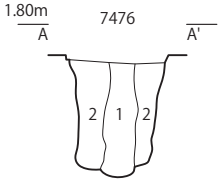
竪穴建物51
1　2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂混シルト偽礫　シルト混極細砂～細砂（5-2b層）偽礫を多量含む
2　7.5YR5/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　シルト混極細砂～細砂（5-2b層）偽礫を少量含む　壁溝埋土
3　10YR5/1褐灰　細砂混シルト偽礫　シルト混極細砂～細砂（5-2b層）偽礫を少量含む　壁溝埋土
4　2.5Y5/2暗灰黄　細砂混シルト偽礫　シルト混極細砂～細砂（5-2b層）偽礫を少量含む　壁溝埋土
5　7.5YR5/2灰褐　細砂～中砂混シルト　シルト混極細砂～細砂（5-2b層）偽礫を少量含む　壁溝埋土
6　7.5YR5/1褐灰　極細砂混シルト（5-1層）偽礫　シルト混極細砂～細砂（5-2b層）偽礫を多量含む　加工時形成層　壁溝埋土
7　2.5Y6/1黄灰　極細砂～細砂質シルト偽礫　加工時形成層　壁溝埋土
8　2.5Y6/1黄灰　極細砂～細砂混シルト　シルト質粘土(5-1層)偽礫を多量含む　7479柱穴埋土
9　2.5Y6/1黄灰　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫　極細砂混シルト(5-1層)偽礫を微量含む　7578柱穴埋土
10　2.5Y6/1黄灰　細砂混シルト　シルト質粘土(5-1層)偽礫を多量含む　7478柱穴埋土
11　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　西端中央上位に炭化物、焼土塊を含む　古段階の竪穴建物床面の可能性あり
12　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂～細砂（5-2b層）偽礫　極細砂混シルト（5-1層）偽礫を少量含む　床面・可能時形成層
13　2.5Y5/1黄灰　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫　極細砂混シルト(5-1層)偽礫を微量含む　7576柱穴埋土
14　10YR4/1褐灰　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫　7613ピット埋土



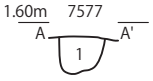
7578
1　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫
極細砂混シルト(5-1層)偽礫を少量含む　抜き取り
2　2.5Y6/1黄灰　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫
極細砂混シルト(5-1層)偽礫を微量含む　裏込め



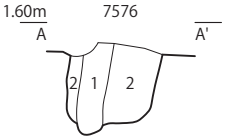
7478・7479
1　2.5Y6/1黄灰　極細砂～細砂混シルト
シルト質粘土(5-1層)偽礫を多量含む　裏込め
2　10YR5/1褐灰　極細砂～細砂混シルト
シルト質粘土(5-1層)偽礫を多量含む　抜き取り
3　2.5Y6/1黄灰　細砂混シルト　シルト質粘土(5-1層)
偽礫を多量含む　裏込め



7476
1　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂～細砂
シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を含む　抜き取り
2　2.5Y5/1黄灰　シルト混極細砂～細砂
シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を含む　裏込め



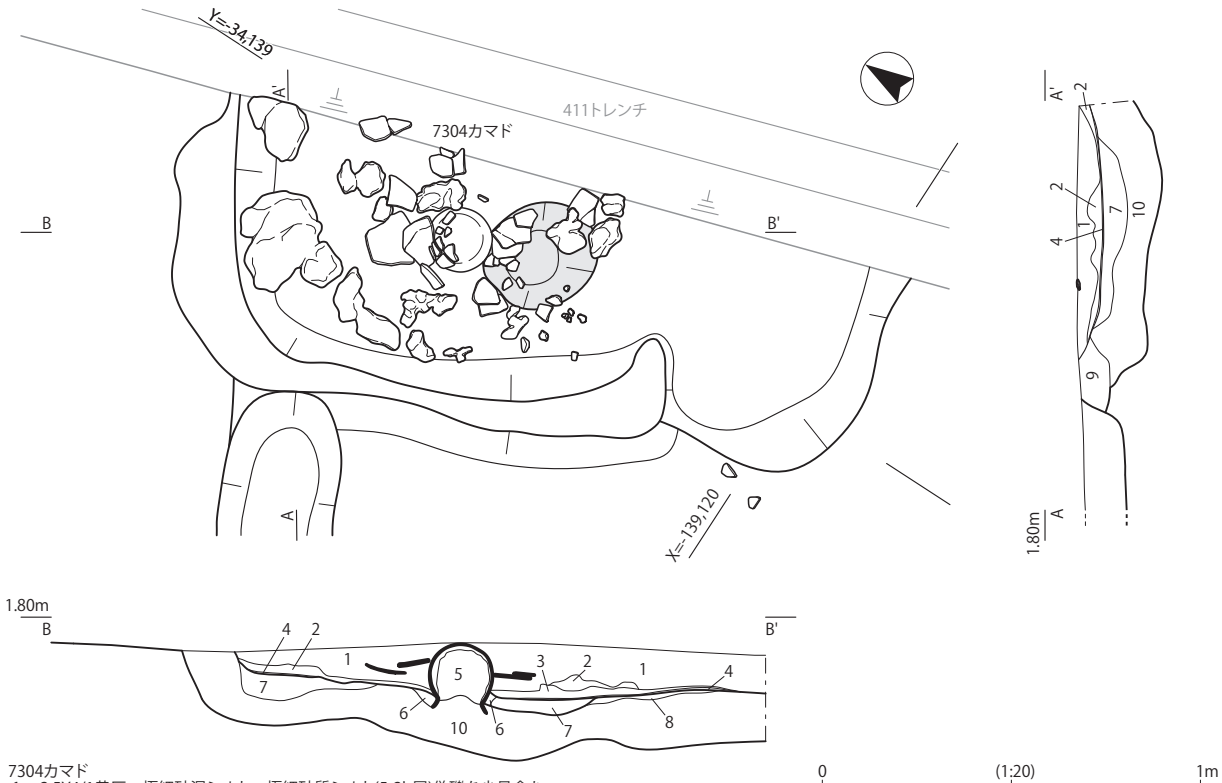
7577
1　7.5YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト



7576
1　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫
極細砂混シルト(5-1層)偽礫を少量含む　抜き取り
2　2.5Y5/1黄灰　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫
極細砂混シルト(5-1層)偽礫を微量含む　裏込め

0　(1:40)　1m

図 634　13 － 4 区　竪穴建物 51 平・断面



7304カマド
1　2.5Y4/1黄灰　極細砂混シルト　極細砂質シルト(5-2b層)偽礫を少量含む
2　10YR4/2灰黄褐　焼土塊　炭層薄い
3　7.5YR4/2灰褐　シルト　焼土塊を多量含む　炭化物を少量含む
4　5Y4/1灰　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
5　10YR4/3にぶい黄褐　極細砂質シルト　被熱を受けてやや赤変
6　2.5Y4/1黄灰　極細砂混シルト　下位にカマド機能時形成層の炭層あり
7　7.5YR5/2灰褐　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫　極細砂混シルト(5-1層)偽礫を少量含む　カマド加工時形成層
8　10YR5/2灰黄褐　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫　極細砂混シルト(5-1層)偽礫を少量含む　カマド加工時形成層
9　7.5YR5/2灰褐　極細砂混シルト偽礫　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を微量含む　カマド本体
10　2.5Y5/2暗灰黄　極細砂～細砂混シルト　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を微量含む　カマド本体　床面・加工時形成層

図 635　13 － 4 区　竪穴建物 51　7304 カマド平・断面

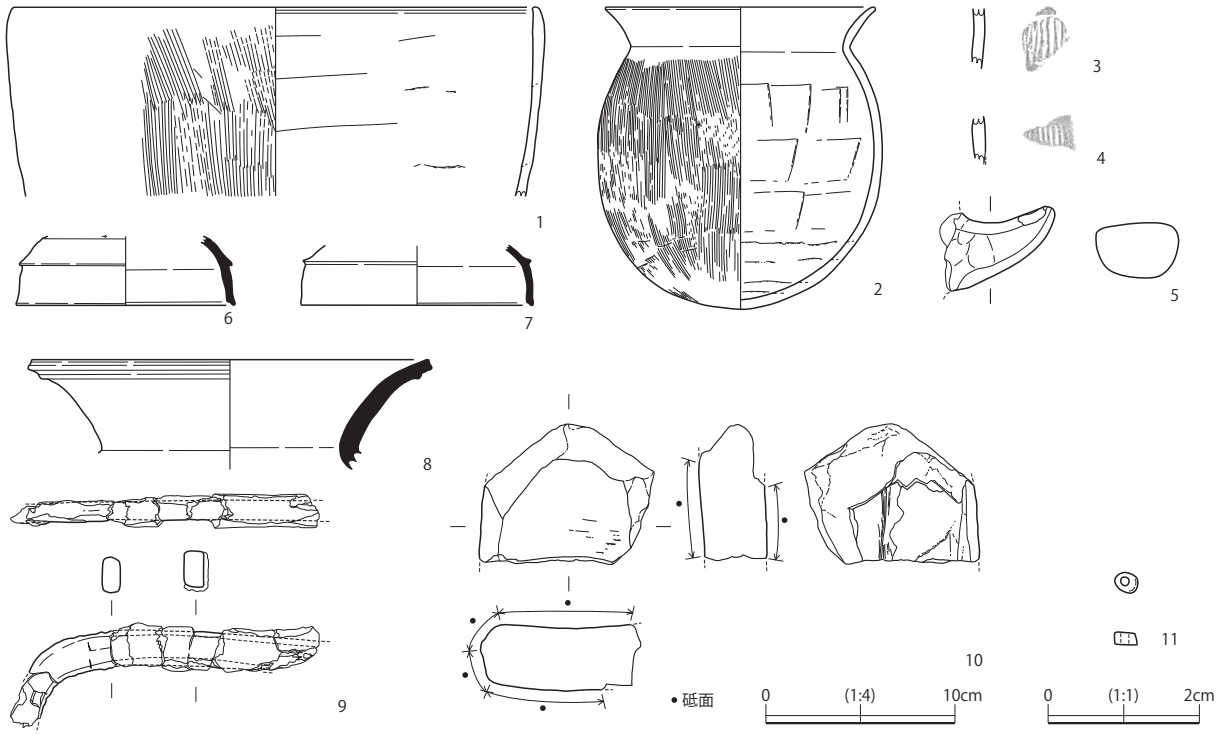


図 636　13 － 4 区　竪穴建物 51　出土遺物

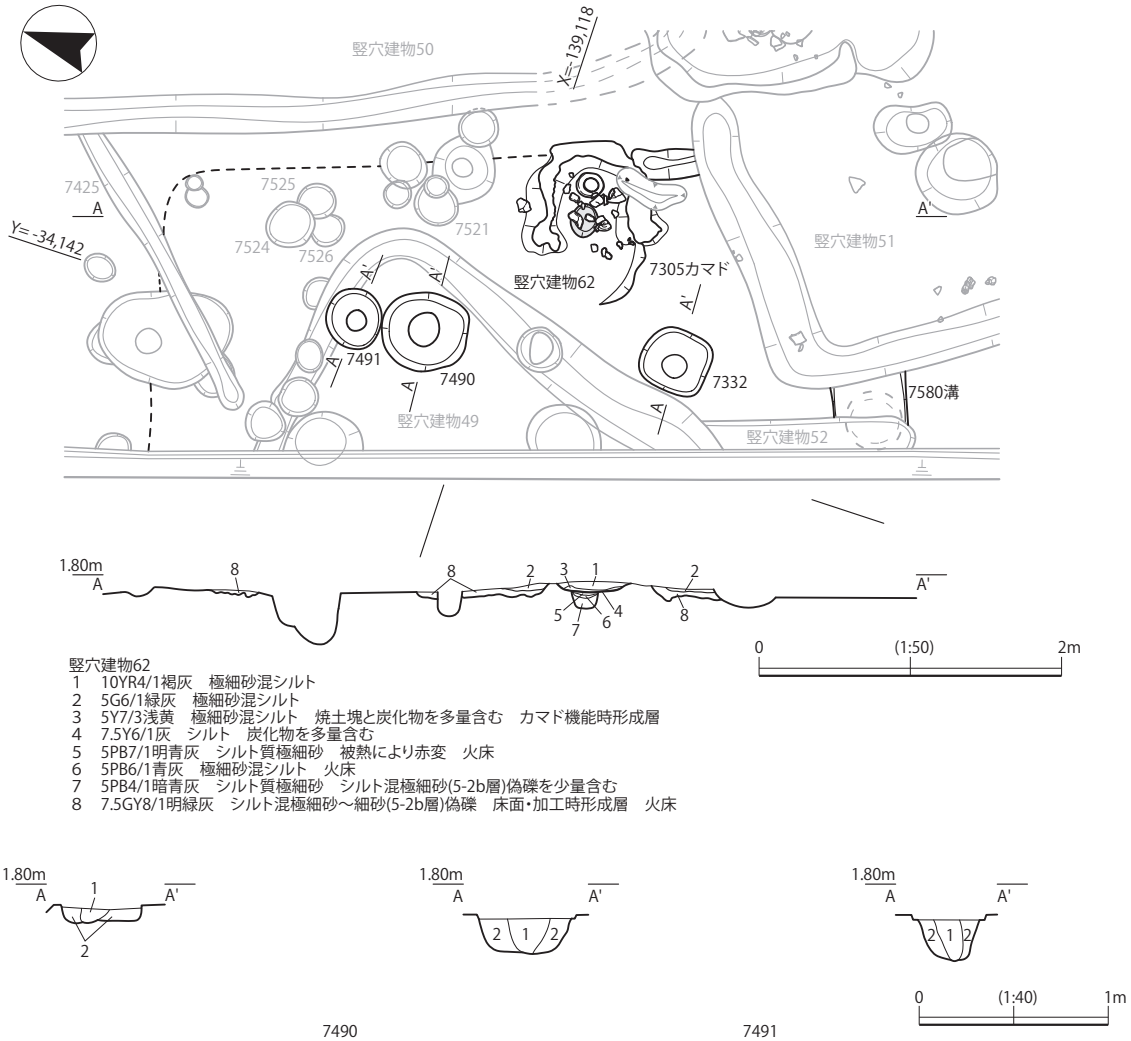


図 637　13 － 4 区　竪穴建物 62 平・断面

穴が検出されている。建て替えを２回以上想定しており、床面上部の炭化物や焼土塊は、建て替え前の竪穴建物の痕跡の可能性がある。

7304 カマドは、竪穴建物の北西側で検出された。規模は、長さ 1.35 m、幅 0.8 m以上である。カマド中央から支脚として用いられた土師器甕が出土した。土師器甕は、倒立させて使用されており、口縁部が荷重により地中に沈み込んだ状態が確認された。

カマド内は、カマド機能時に形成された、炭化物を多量に含むシルト層（以下、炭層）が堆積する。この炭層は、支脚の土師器甕に近い部分で２層に分かれ、口縁部と頸部付近にそれぞれすり付く状況が確認された。また、支脚周辺からは、カマド本体の崩落土や土師器甑の破片が出土している。

竪穴建物 51 から出土した遺物の内、図 636 － 1 ～ 11 を図示した。１・２はカマドから出土した土器である。１は土師器甑の口縁部である。外面はハケ調整、内面は板ナデ調整される。２は土師器甕で、支脚として用いられたものである。体部外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向に板ナデ調整される。３・４は韓式系土器の体部片である。鉢ないし甕か。外面に平行タタキが施される。５は把手である。ナデ調整によって仕上げられる。６・７は須恵器坏蓋である。８は須恵器甕である。口縁端部には凹みがあ

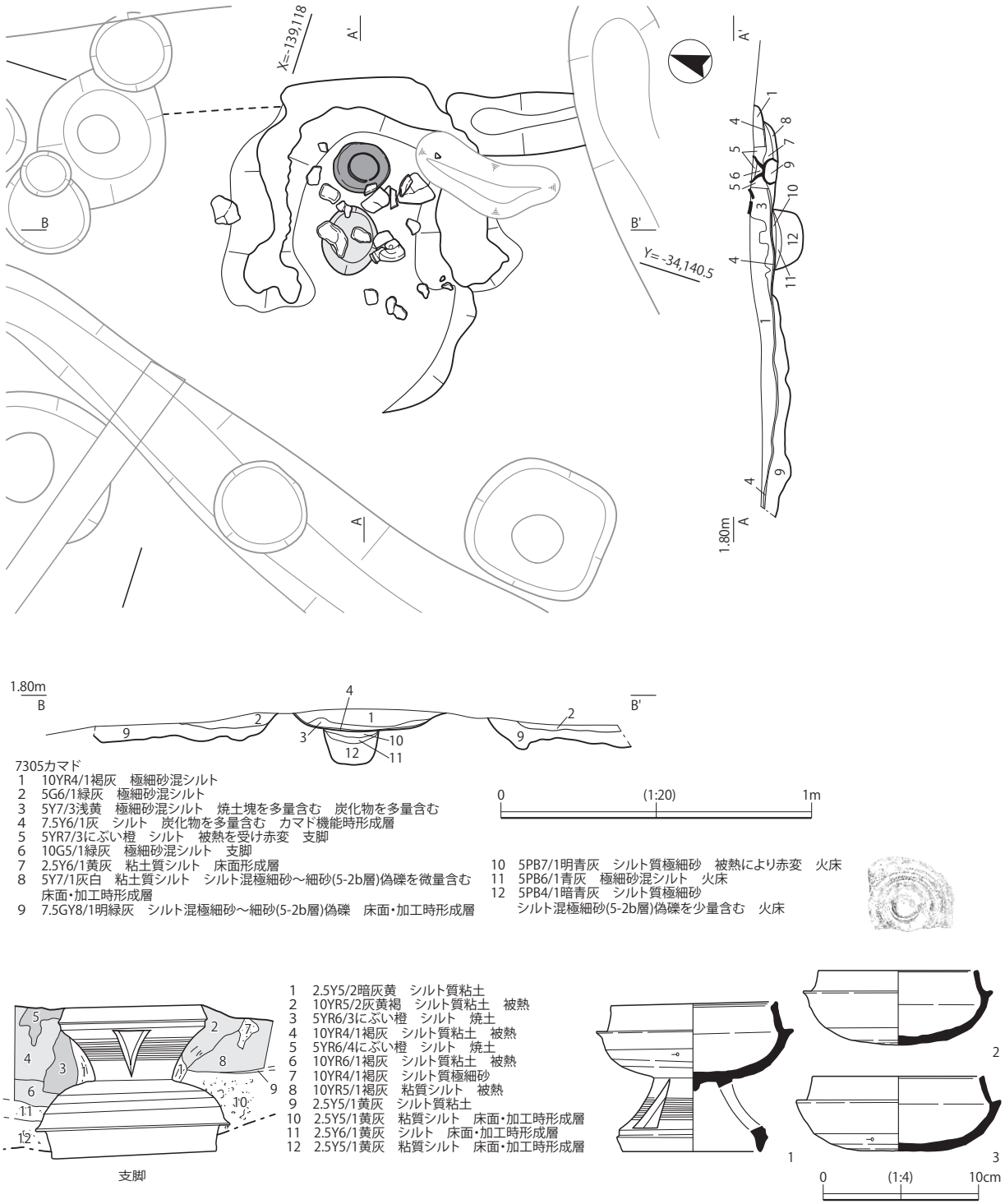
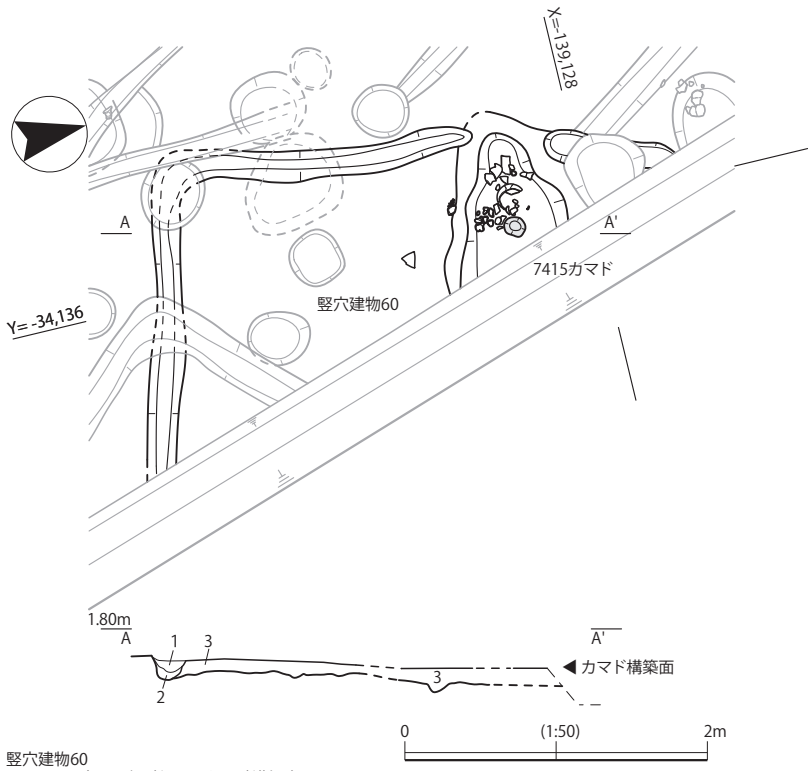


図 638　13 － 4 区　7305 カマド平・断・立面　出土遺物

る面をもち、外面には突帯がめぐる。TK23 型式。9 は不明鉄製品で、馬具（轡）として用いられたものか。竪穴建物の床面直上から出土した。細片となった状態であったが、図示したように復元ができた。断面形は長方形、両端は折損する。一方の端部がやや湾曲する。10 は砥石である。砥面は 4 面あり、裏面には筋状に凹む使用痕が認められる。鉄製品加工用の仕上砥の可能性を考えている。11 はガラス小玉である。青色。他に滑石製臼玉 11 点が出土し、内 4 点は 7304 カマドから出土した。

竪穴建物 62（図 633・637・638、図版 141）

竪穴建物 50 の西側で検出された。竪穴建物の基底面まで土壌化の影響により失われていたが、

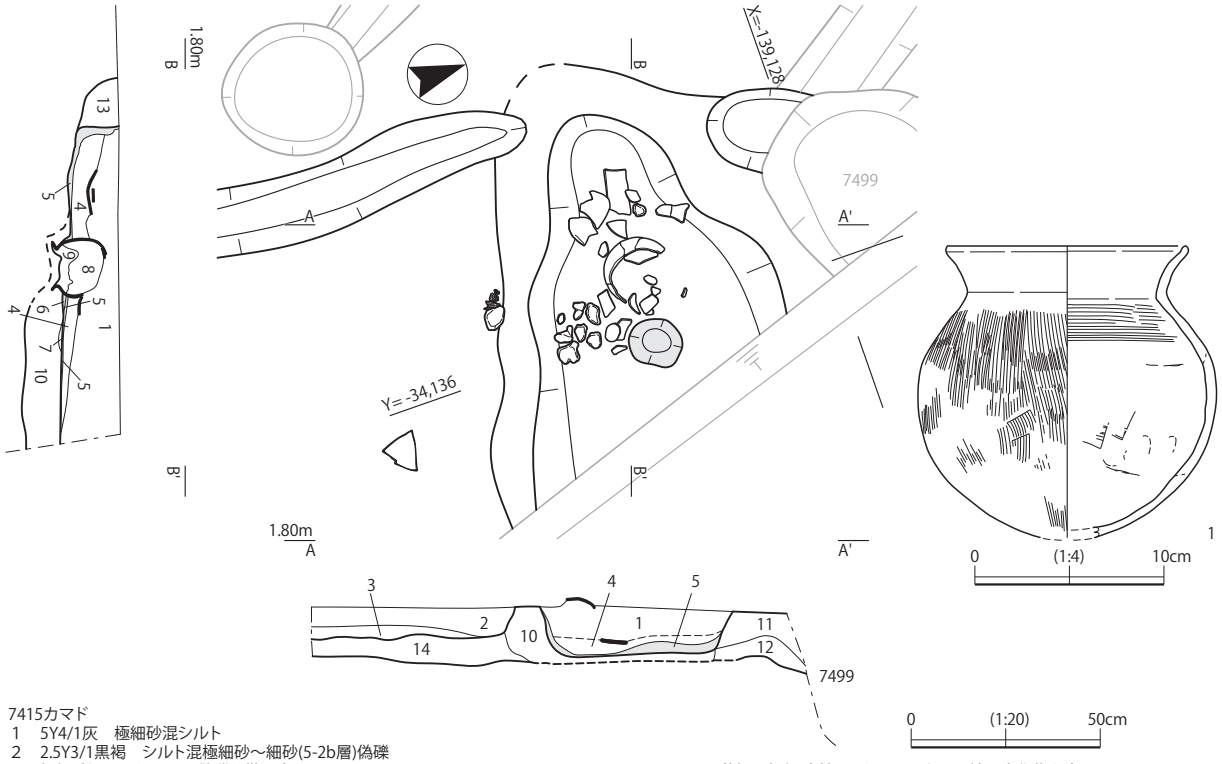


竪穴建物60
1　5B6/1青灰　細砂混シルト　壁溝埋土
2　5B5/1青灰　極細砂～細砂混シルト　加工時形成層となるシルト混極細砂を下位に含む　壁溝埋土
3　5PB6/1青灰　極細砂～細砂混シルト（5-1層）　極細砂～細砂（5-2b層）を少量含む　床面・加工時形成層

図 639　13 － 4 区　竪穴建物 60 平・断面

7305 カマドと床面・壁溝の一部が検出された。7305 カマドは、竪穴建物の東辺中央部に設置されたと考えられる。カマドの規模は、長さ 0.7 m、幅 0.96 mである。カマド中央で支脚として用いられた須恵器高坏が検出された。脚部に粘土が巻かれて用いられている。カマド直上が２層とした作土によって削平を受けているため、支脚上部構造は不明である。

支脚に巻かれた粘土は、坏部と脚部の接合部にシルト質粘土を貼り付けた後、外側に向かって粘土を巻き付けていったと考えられる。脚部に巻き付けた粘土は、カマド機能面で高さが異



7415カマド
1　5Y4/1灰　極細砂混シルト
2　2.5Y3/1黒褐　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫
　極細砂混シルト(5-1層)偽礫を微量含む
3　2.5Y4/1黄灰　極細砂混シルト　弱く土壌化
4　2.5Y5/1黄灰　細砂混シルト　焼土塊を多量含む　炭化物を多量含む
5　2.5Y4/1黄灰　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
6　10YR3/1黒褐　シルト　炭化物を多量含む　焼土塊を微量含む
　カマド機能時形成層
7　5B7/1明青灰　極細砂混シルト　シルト質粘土偽礫を少量含む　火床
8　10YR5/2灰黄褐　極細砂～細砂混シルト　被熱によりやや赤変
9　10YR4/2灰黄褐　極細砂質シルト　下層との層境に炭化物を含む
10　5Y5/1灰　極細砂～細砂混シルト　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を少量含む
　カマド本体・床面形成層
11　5Y4/1灰　極細砂～細砂(5-2b層)偽礫　カマド本体
12　5B7/1明青灰　極細砂混シルト　シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を少量含む
　カマド本体
13　10YR4/1褐灰　極細砂質シルト　赤変　カマド本体
14　5B5/1青灰　極細砂混シルト偽礫　5-1層由来か　床面・加工時形成層

図 640　13 － 4 区　7415 カマド平・断面　出土遺物

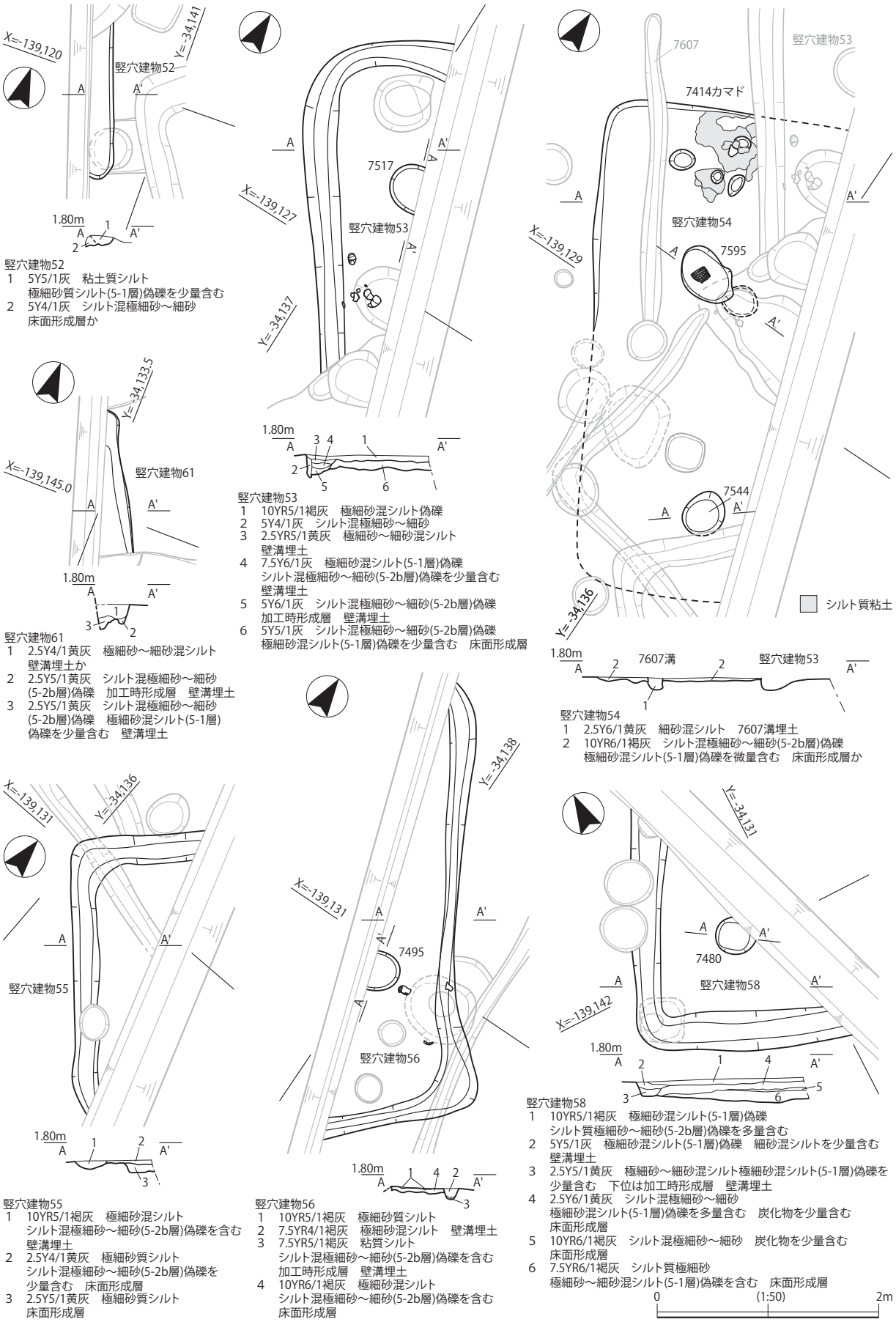


図 641　13－4区　竪穴建物 52 他平面

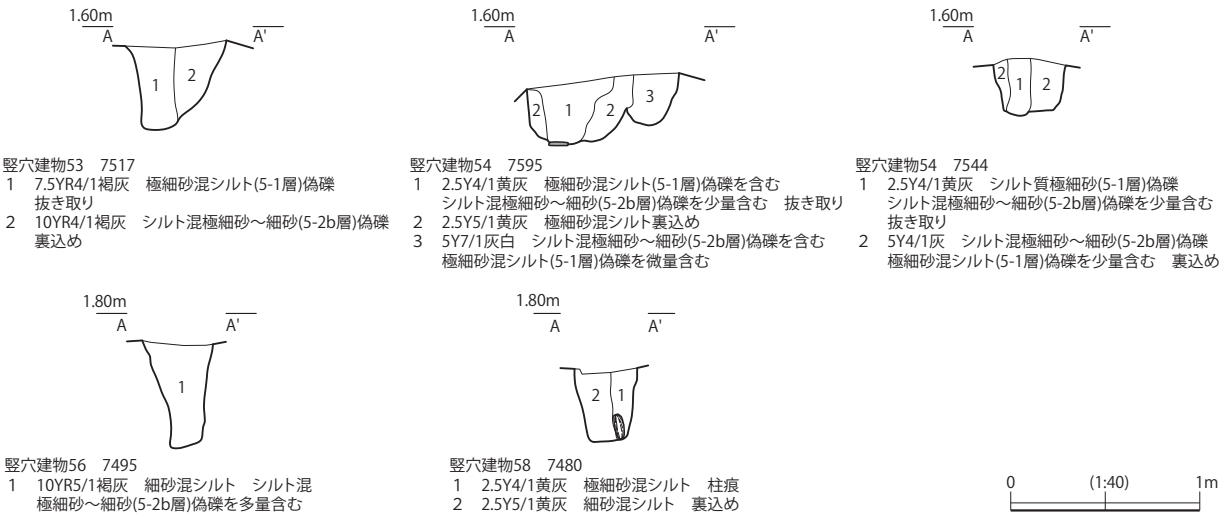


図 642　13 － 4 区　竪穴建物 53　7517 柱穴他断面

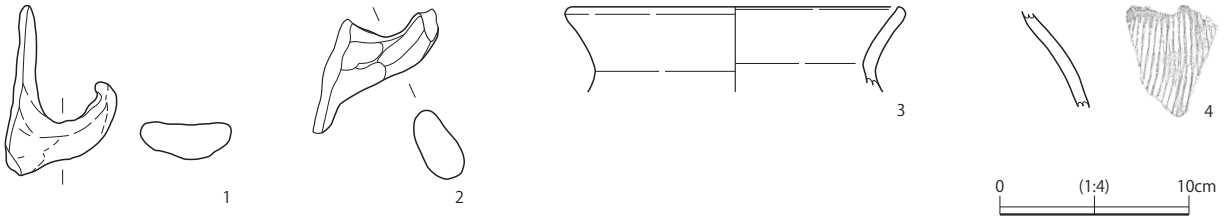


図 643　13 － 4 区　竪穴建物 54・56・58 出土遺物

なっており、支脚を据える前に粘土を巻いたのではなく、カマド内に設置されてから粘土が巻かれたものと考えられる。カマド内には、カマド機能時形成層の炭化物を主体とした地層（以下、炭層）が堆積し、炭層直上にカマド本体の崩落土と土器片が検出された。支脚の手前では、火床が検出された。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.17 m、深さ 0.1 mである。火床は、椀形に掘りくぼめた部分をシルト質極細砂で成形し、上部に極細砂混シルトとシルト質極細砂を突き固めて構築される。カマド南側では、壁溝の一部が検出された。竪穴建物の基底面の大半が失われていることから、壁溝の加工時形成層の一部が認識されたものと考えられる。また、壁溝となる可能性のある 7580 溝も検出されている。竪穴建物 62 から出土した土器は、図 638 － 1 ～ 3 を図示した。すべて 7305 カマドから出土した。 1 は須恵器高坏で、カマドで支脚として用いられたものである。脚部にはカキメが施され、三角形の透孔が 3 方に開けられる。 2 ・ 3 は須恵器坏身である。出土した須恵器は、TK23 ～ 47 型式に比定できる。

竪穴建物 60（図 633・639・640、図版 46・141）

竪穴建物 55 の北西側で検出された。竪穴建物 55 に切られており竪穴建物 55 が新しい。当初、平面形を誤認して調査しており、床面まで掘り下げた段階で、新たに壁溝を検出しなおして、竪穴建物の平面形を確認した。規模は、西辺 3.5 m以上、南辺 2.1 m以上である。床面は極細砂～細砂混シルトのブロック土である。

北西側で 7415 カマドが検出された。規模は本体部分の検出長 1.2 m以上、幅 0.9 m以上である。カマド中央では支脚として用いられた土師器甕が検出された。カマド内では、カマドの機能時形成層の炭化物を多量に含むシルト層（以下、炭層）が堆積しており、この炭層は支脚の土師器甕に近いところで２層に分かれて、土師器甕の口縁部と頸部にすり付く状態が検出された。なお、この土師器甕内には真土のようなシルトが充填されている状況が確認されている。支脚の手前では炭層の除去面で火床が検出

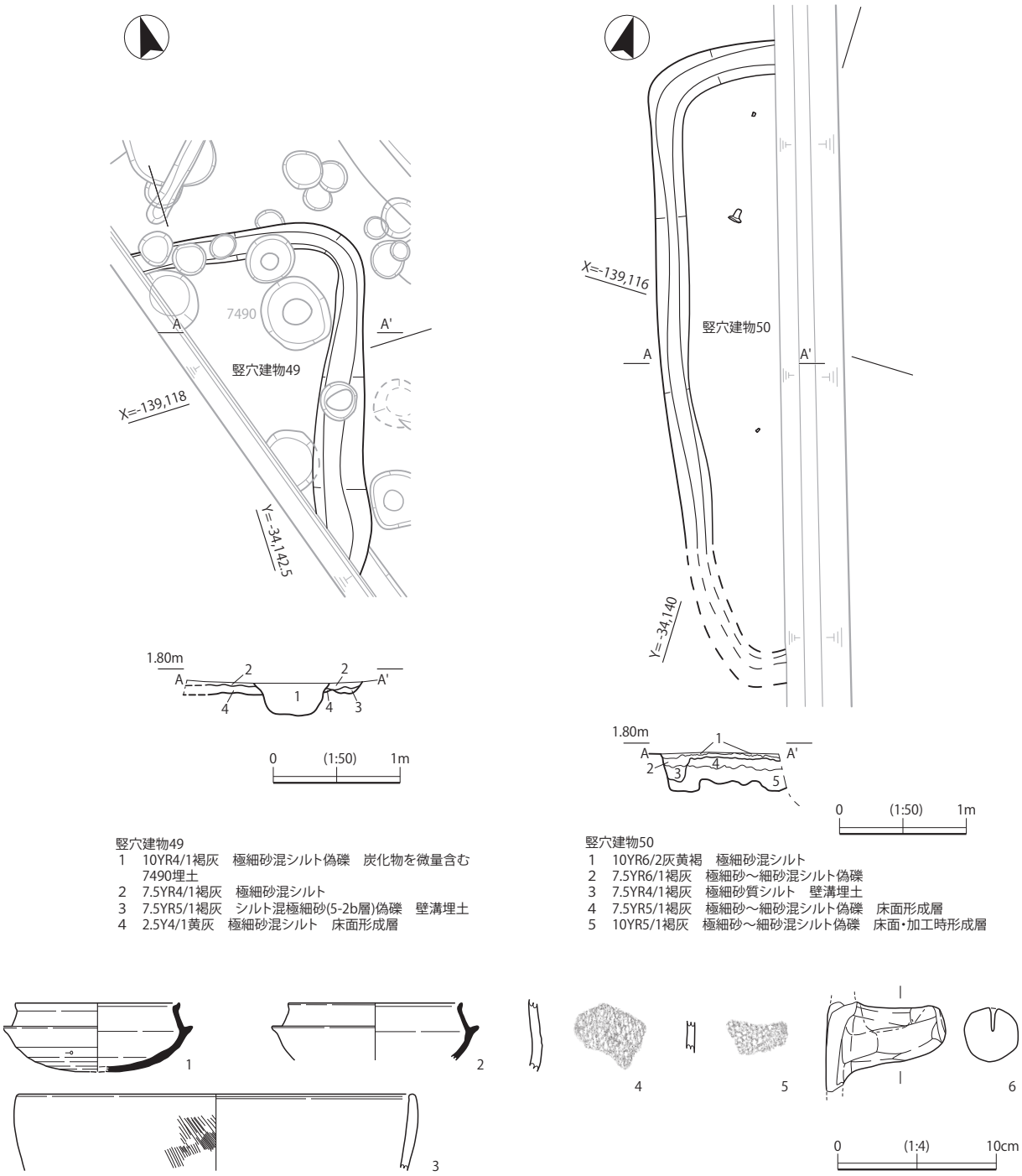


図 644　13 － 4 区　竪穴建物 49・50 平・断面　出土遺物

された。平面形は円形に近く、直径 0.15 m、深さ 0.01 mである。極細砂混シルトで火床は構築されており、ベースとなる床面の地層と境界部は不明瞭であった。

図 640 － 1 は、7415 カマドで支脚として用いられた土師器甕である。外面は縦方向のハケ、内面は板ナデ調整でナデの痕跡が残る。頸部は横方向の板ナデが施される。出土遺物と竪穴建物 60 周辺で形成された古土壌から出土した土器を考慮すると、竪穴建物 60 の時期は古墳時代中期中葉か。

竪穴建物 52（図 633・641）

竪穴建物 49 の南側で検出された。南北に直線的に延びる平面形から竪穴建物の可能性があると判断した。大半は調査地外にあるため、全容は不明である。

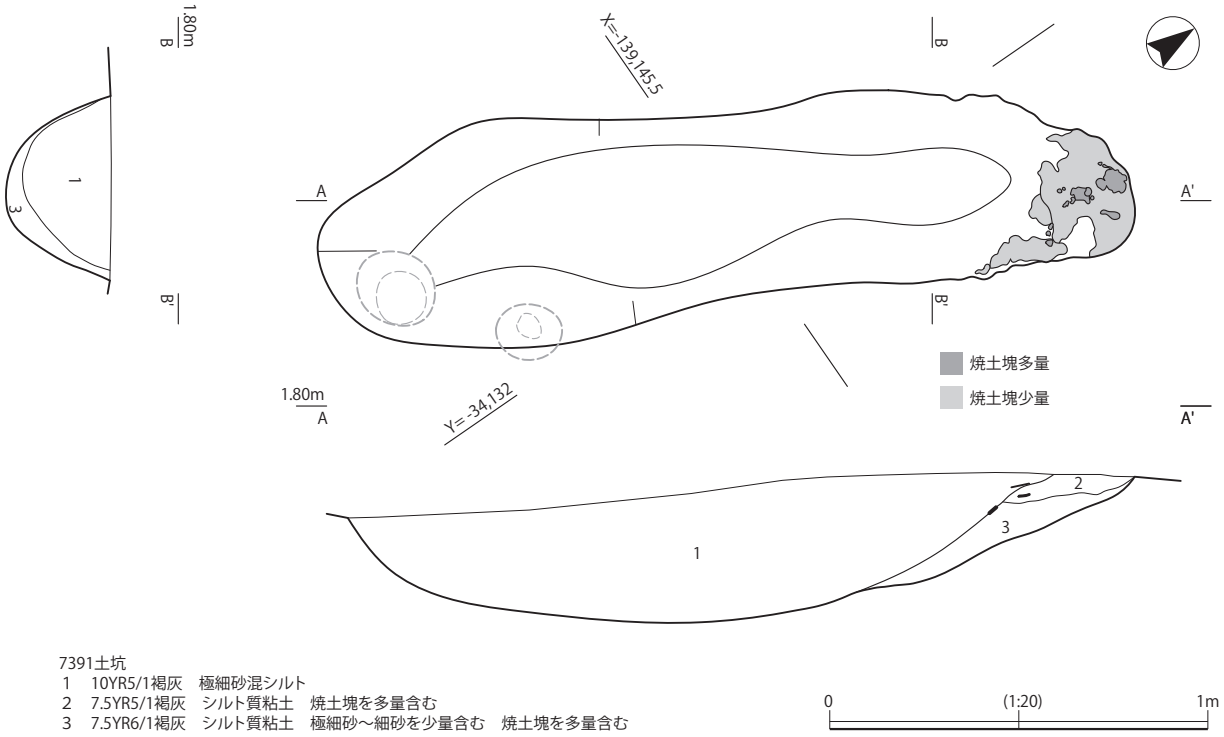


図 645　13 － 4 区　7391 土坑平・断面

規模は、北東辺 1.4 m以上である。壁溝は断面で確認したのみで、平面的な検出はできなかった。遺物は出土しておらず、時期の詳細は不明である。

竪穴建物 61（図 633・641）

竪穴建物 58 の西側で検出された。東側の加工が直線的に見えたことから竪穴建物とした。一部が検出されたのみで、全容は不明。出土遺物は皆無である。

竪穴建物 53（図 633・641・642、図版 88）

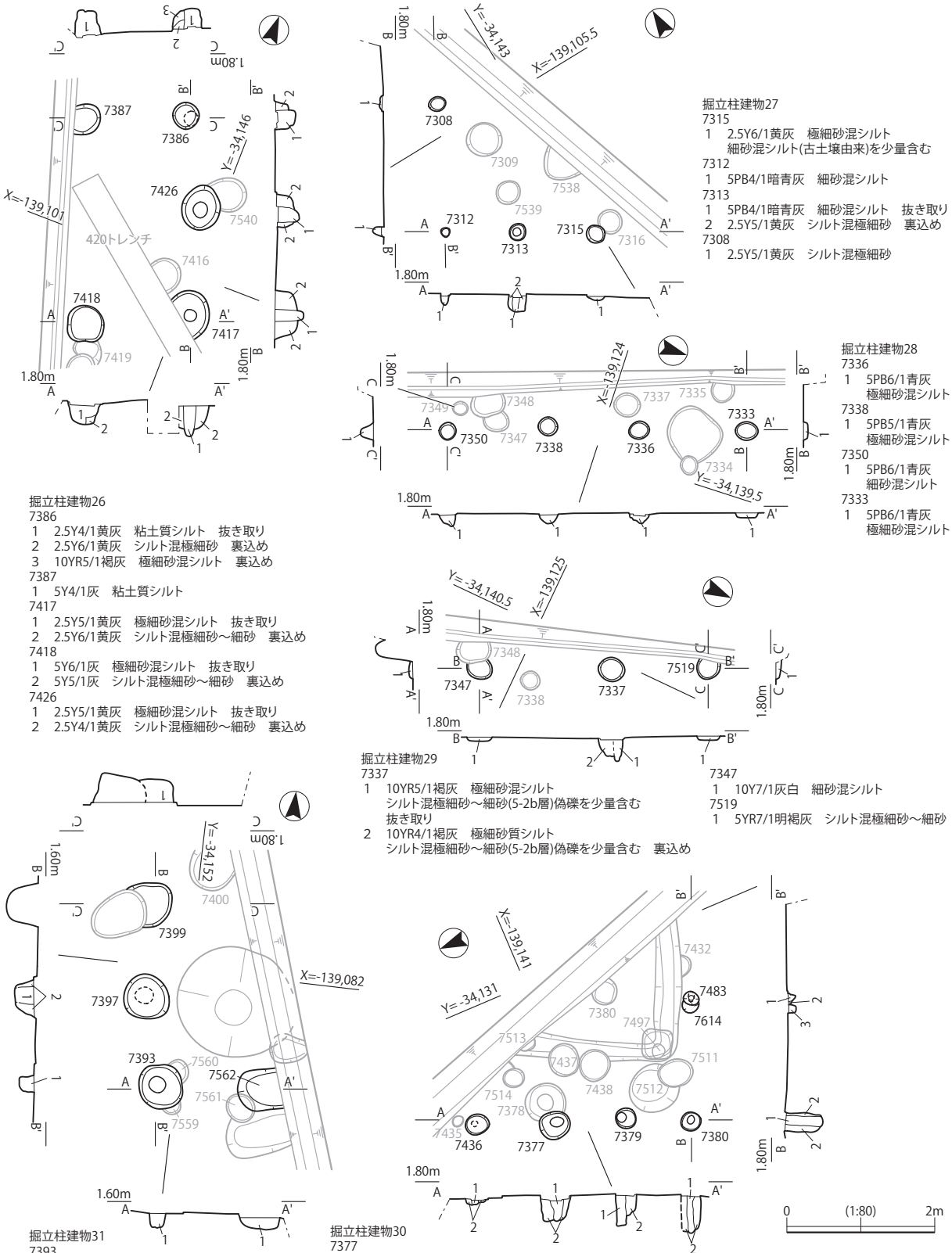
竪穴建物 54 の北東で検出された。竪穴建物 60 に南側を切られる。調査地内に竪穴建物の北西側の一部が検出されたのみで全容は不明である。規模は北西辺 1.2 m以上、南西辺 2.8 m以上である。床面は、ベースとなる 5 － 2 b 層起源のシルト混極細砂～細砂のブロック土で、直上には極細砂混シルトのブロック土が堆積する。床面の直上からは叩石として用いられた可能性がある石製品と、壁溝肩部から土師器細片が出土した。ほかに、滑石製臼玉 4 点が出土した。なお、411 トレンチ断面では、カマドは確認できなかった。

竪穴建物 54（図 633・641・642・643、図版 88）

竪穴建物 60 の北側で検出された。竪穴建物 60 に切られる。竪穴建物 54 検出時から 7584 溝が確認されており、床面の一部が遺存していた範囲を竪穴建物 54 として認識した。壁溝やカマドは検出されなかった。竪穴建物 54 から出土した土器は、図 643 － 4 の韓式系土器鍋を図示した。外面は平行タタキが施される。他に、滑石製臼玉 3 点が出土した。

竪穴建物 55（図 633・641、図版 46）

竪穴建物 60 の南東側で検出された。大半は調査地外にあり、全容は不明である。規模は、南西辺で 2.5 m以上、北西辺で 1.1 m以上である。床面形成層は 2 層に分かれており、底面の高さが一部異なることから、建て替えがあった可能性ある。滑石製臼玉が 3 点出土した。



掘立柱建物26
7386
1　2.5Y4/1黄灰　粘土質シルト　抜き取り
2　2.5Y6/1黄灰　シルト混極細砂　裏込め
3　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　裏込め
7387
1　5Y4/1灰　粘土質シルト
7417
1　2.5Y5/1黄灰　極細砂混シルト　抜き取り
2　2.5Y6/1黄灰　シルト混極細砂～細砂　裏込め
7418
1　5Y6/1灰　極細砂混シルト　抜き取り
2　5Y5/1灰　シルト混極細砂～細砂　裏込め
7426
1　2.5Y5/1黄灰　極細砂混シルト　抜き取り
2　2.5Y4/1黄灰　シルト混極細砂～細砂　裏込め

掘立柱建物27
7315
1　2.5Y6/1黄灰　極細砂混シルト
細砂混シルト(古土壌由来)を少量含む
7312
1　5PB4/1暗青灰　細砂混シルト
7313
1　5PB4/1暗青灰　細砂混シルト　抜き取り
2　2.5Y5/1黄灰　シルト混極細砂　裏込め
7308
1　2.5Y5/1黄灰　シルト混極細砂

掘立柱建物28
7336
1　5PB6/1青灰
極細砂混シルト
7338
1　5PB5/1青灰
極細砂混シルト
7350
1　5PB6/1青灰
細砂混シルト
7333
1　5PB6/1青灰
極細砂混シルト

掘立柱建物29
7337
1　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト
シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を少量含む
抜き取り
2　10YR4/1褐灰　極細砂質シルト
シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を少量含む　裏込め
7347
1　10Y7/1灰白　細砂混シルト
7519
1　5YR7/1明褐灰　シルト混極細砂～細砂

掘立柱建物31
7393
1　2.5Y5/1黄灰　極細砂混シルト
7397
1　2.5Y6/1黄灰　極細砂混シルト　抜き取り
2　2.5Y5/1黄灰　シルト混極細砂　裏込め
7399
1　2.5Y5/1黄灰　極細砂混シルト
7562
1　2.5Y6/1黄灰　極細砂混シルト

掘立柱建物30
7377
1　5PB4/1暗青灰　シルト混極細砂　抜き取り
2　5PB3/1暗青灰　シルト混極細砂～細砂
シルト混極細砂～細砂(5-2b層)偽礫を少量含む
裏込め
7379
1　5PB4/1暗青灰　シルト混極細砂～細砂　抜き取り
2　5PB6/1青灰　シルト混極細砂～細砂　裏込め
7380
1　5PB4/1暗青灰　シルト混極細砂～細砂　抜き取り
2　5PB6/1青灰　シルト混極細砂～細砂　裏込め
7436
1　5PB7/1明青灰　シルト混極細砂～細砂　抜き取り
2　5PB5/1青灰　シルト混極細砂　裏込め
7483・7614
1　5PB4/1暗青灰　シルト混極細砂～細砂　抜き取り
7483埋土
2　5PB5/1青灰　シルト混極細砂～細砂　裏込め
7483埋土
3　5B5/1青灰　シルト混極細砂　粗砂を微量含む
7614埋土

図646　13－4区　掘立柱建物26～31平・断面

竪穴建物 56（図 633・641 ～ 643、図版 143）

竪穴建物 60 の西側で検出された。規模は、北東辺 3.9 m以上、南東辺 1.5 m以上である。床面は極細砂混シルトのブロック土で形成されており、極細砂質シルトが部分的に堆積する。

出土遺物は、床面直上及び壁溝内から土師器が出土した。図 643 － 1 ・ 2 は土師器把手である。

竪穴建物 58（図 633・641 ～ 643、図版 45・88・143）

13 － 4 区南側、竪穴建物 61 の北東側で検出された。規模は、北西辺 2.1 m以上、南西辺 1.8 m以上である。床面はシルト混極細砂～細砂のブロック土で形成される。

竪穴建物 58 から出土した土器は、図 643 － 3 の土師器甕を図示した。口縁端部は端面と、端面からわずかに下が横ナデされるため、端部が斜め上方につまみあげられたような形状に仕上げられる。他に、滑石製臼玉が 3 点出土した。

竪穴建物 49（図 633・644、図版 46・88・143）

竪穴建物 51 の北西で検出された。調査地に北東部分の一部がかかったのみで、全容は不明である。規模は、南東辺 2.7 m以上、北東辺 2.0 m以上である。床面は極細砂混シルトのブロック土によって形成される。竪穴建物の埋土は、極細砂混シルトのブロック土で、最終的に埋め戻されたと考えられる。

竪穴建物 49 から出土した遺物は、図 644 － 1 ～ 3 に図示した。1・2 は須恵器坏身である。TK47 型式。3 は甑である。外面は斜め方向のハケ調整、内面は磨滅する。他に、滑石製臼玉が 1 点出土している。

竪穴建物 50（図 633・644、図版 88・143）

竪穴建物 51 の北側で検出された。竪穴建物 51 と切り合い関係があり、竪穴建物 51 の方が新しい。竪穴建物西側の一部を検出しており、全容は不明である。規模は、南西辺で 5.0 mに復元される。

床面は、細砂～細砂混シルトのブロック土で、地層の境界部は不明瞭ながら 2 層に分かれる。床面が 2 層に分かれることや、他の竪穴建物と比較して掘り込みが深いことから、建て替えが行われた可能性がある。

床面直上からは、土師器高坏などの破片が出土した。なお、411 トレンチ断面においても炭化物や焼土塊は確認されず、カマドの位置を確認することはできなかった。

竪穴建物 50 からの出土遺物は、図 644 － 4 ～ 6 を図示した。 4・5 は韓式系土器鉢の体部片である。4 の外面は縄蓆文タタキ、 5 の外面は格子目タタキが施される。 6 は土師器把手である。上面に切り込みがある。ほかに、滑石製臼玉が 3 点出土した。出土遺物と竪穴建物 51 との切り合い関係から、竪穴建物 50 の時期は、古墳時代中期前葉～中葉に位置付けられる。

掘立柱建物 26（図 633・646、図版 46）

7456 土坑の南側で検出された。建物構造は 2 間× 1 間以上で、西側は調査地外にあるため、全容は不明である。土師器・須恵器の細片が出土した。須恵器甕は外面平行タタキ、内面は当具痕が磨り消されている。

掘立柱建物 27（図 633・646、図版 46）

掘立柱建物 26 の南東側で検出された。建物構造は 2 間以上× 1 間以上で、東側は調査地外にあるため不明である。土師器細片が出土した。時期は不詳。

掘立柱建物 28（図 633・646）

竪穴建物 51 の南西側で検出された。建物構造は 3 間× 1 間以上である。土師器細片が出土した。時期は不詳。

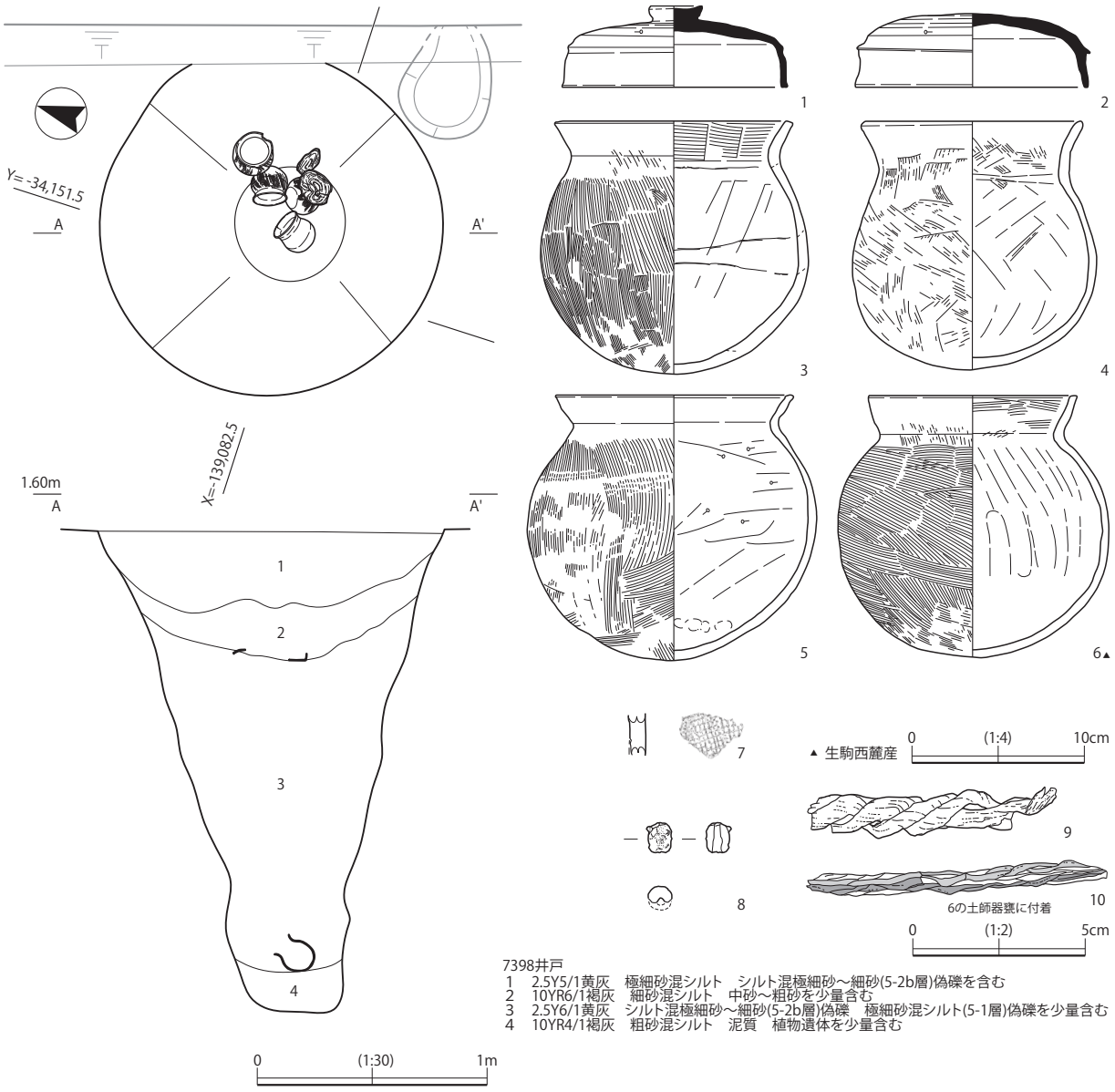


図 647　13 － 4 区　7398 井戸平・断面　出土遺物

掘立柱建物 29（図 633・646）

掘立柱建物 28 とほぼ同じ位置で検出された。建物構造は 2 間以上× 1 間以上と考えており、掘立柱建物の大半は調査地外にあるため、詳細は不明である。遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明。

掘立柱建物 30（図 633・646）

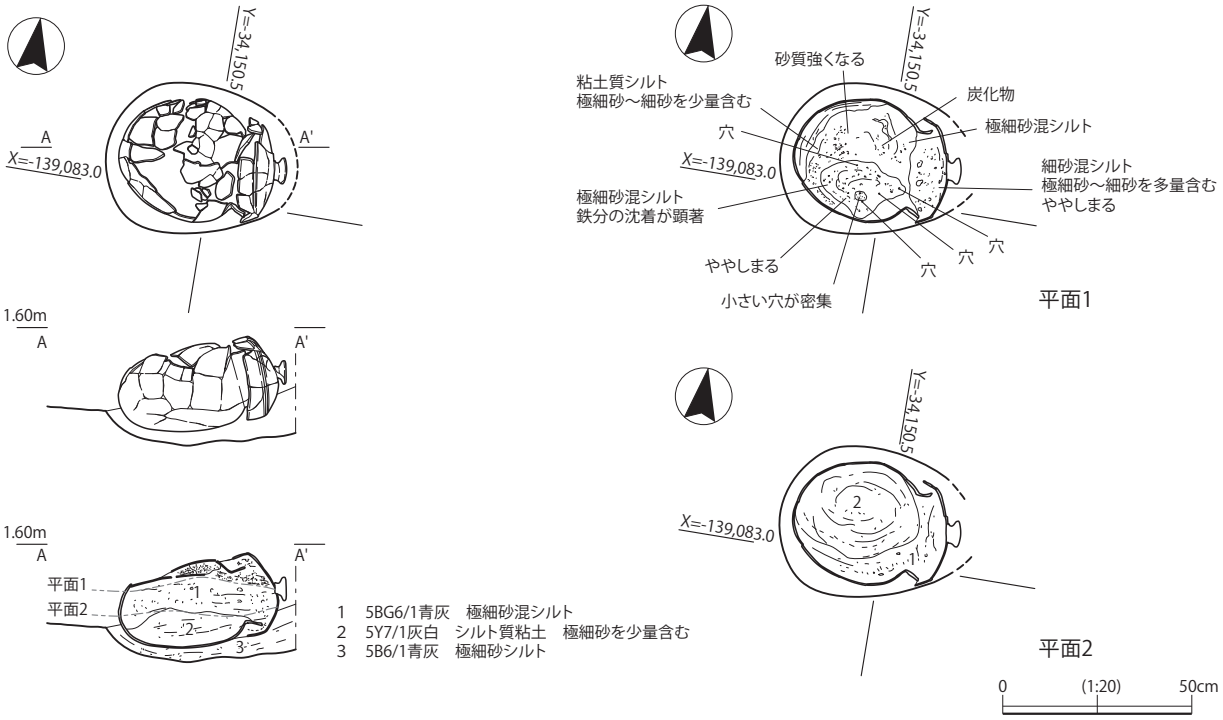
竪穴建物 58 とほぼ同じ位置で検出された。建物構造は、 2 間以上× 3 間以上である。土師器細片が出土した。時期は不詳。

掘立柱建物 31（図 633・646）

7411 溝の南側で検出された。建物構造は、 2 間以上× 1 間以上である。土師器・須恵器細片が出土した。須恵器は甕が出土しており、外面平行タタキ、内面の当具痕は磨り消されている。

7398 井戸（図 633・647、図版 47・142）

7411 溝の南側で検出された。側溝を設定した場所に当たる。平面形は円形、規模は直径 1.5 m、深さ 2.1 mである。埋土は、最下層が植物遺体を多く含んだ、湿性堆積物の極細砂混シルトで、その上位



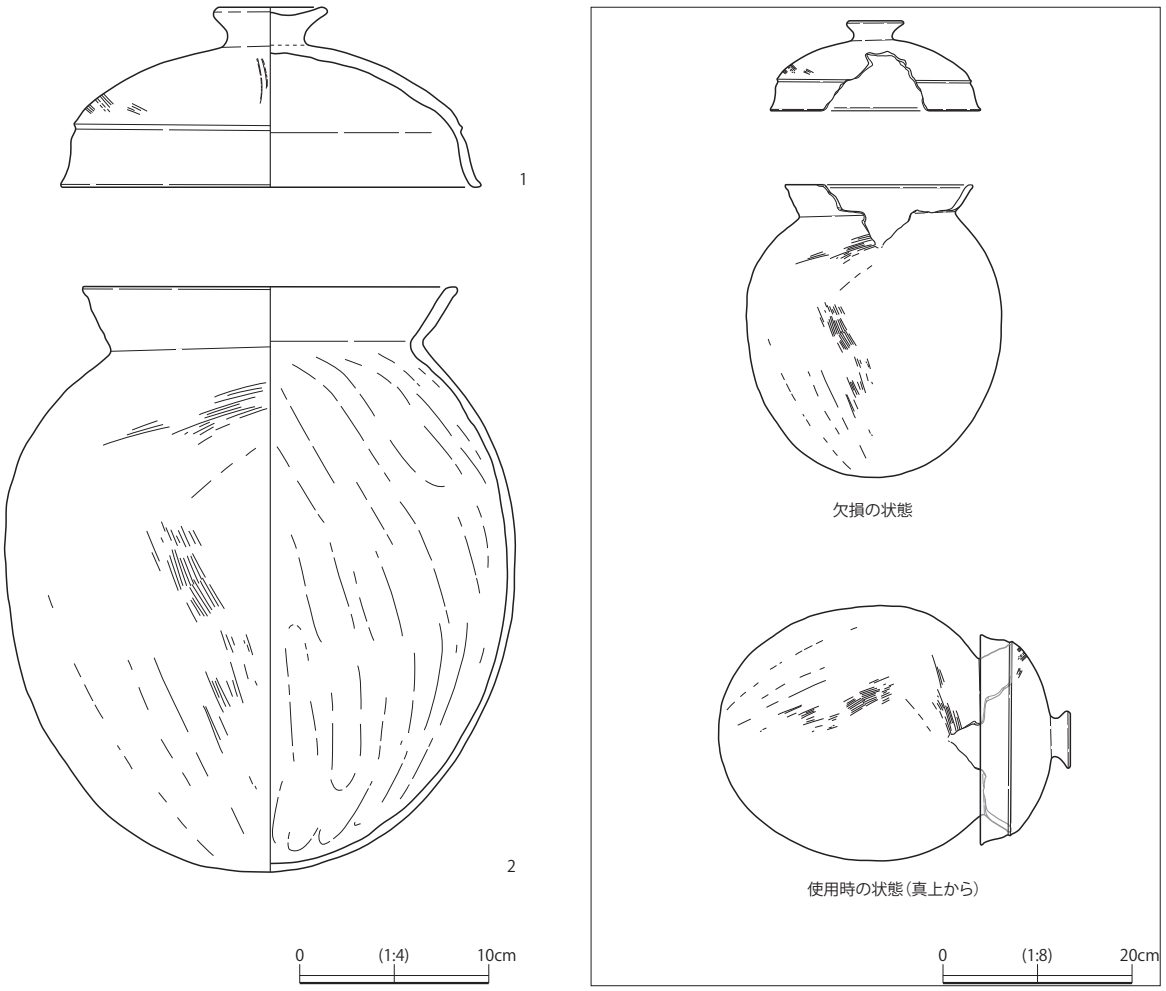


図 648　13 － 4 区　7571 土坑平・断・立面　出土遺物

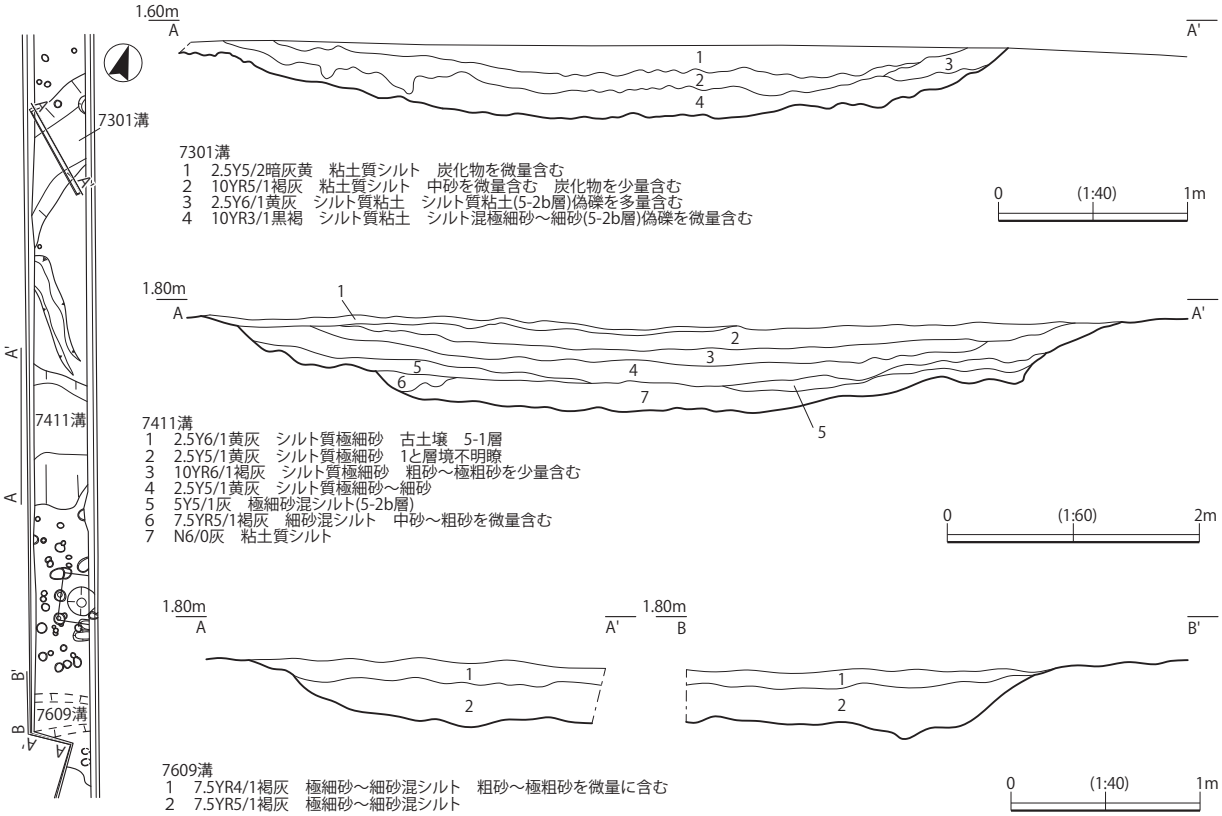


図 649　13 －４区　7301・7609・7411 溝断面

には、ベースとなる５－２ｂ層由来のブロック土が堆積する。上層には、周辺或いは井戸内で形成された土壌と考えられる細砂混シルトの堆積が認められる。この細砂混シルトから、須恵器坏蓋が出土した。また、井戸底面に近いところからは、完形あるいは完形に近い、小型の土師器甕４点、滑石製臼玉６点、瓢箪、猪歯牙が出土した。土師器甕の１点は、頸部に紐が巻かれた状態で出土しており、釣瓶として用いられたものと考えられる。また、この紐とは別個体の図 647 －９も埋土中から出土した。猪歯牙は、若獣のもので、土師器甕の周辺から出土した。瓢箪は、完形のものはなく、体部や底部片がそれぞれ出土した。２－２区 1891 井戸の瓢箪のように種子は伴わず、釣瓶として使用されたものか。

7398 井戸から出土した遺物の内、図 647 －１～ 10 を図示した。１・２は須恵器坏蓋である。井戸の中位から出土した。１は天井部に扁平なツマミが付く。２は口縁端部に面があり、外面の稜はシャープに仕上げられる。TK216 型式。３～６は土師器甕で、井戸底から出土した。３の体部外面は縦方向のハケ調整、内面は板ナデ調整である。４の器形は、頸部の屈曲が不明瞭で、体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。外面は斜め方向のハケ調整、内面は板ナデ調整される。５の外面は縦・斜め方向のハケ調整、内面はケズリ調整が施される。６の外面は斜め方向のハケ調整で、肩部は横方向に近いハケ調整で仕上げられる。内面は指ナデ調整される。７は韓式系土器の体部片で、外面に格子目タタキが残る。８は土玉で、井戸埋土を洗浄したものの中から出土した。半分に割れており、孔が確認できたことから、土玉と判断したが、周辺で確認された植物根の周囲にできた高師小僧の可能性がある。突起部が２箇所確認できたが、表面が剥離した可能性があり、突起部は加工によるものか不明である。９は瓢箪周辺の埋土を洗浄した際に出土した紐である。植物の繊維３本を交互に編み込んで紐として利用された。10は、６の土師器甕の頸部に巻かれた状態で出土した紐である。植物の繊維２本を左撚りにしたもの１単位として、３単位を左撚りに編み込んで釣瓶の紐としていた。

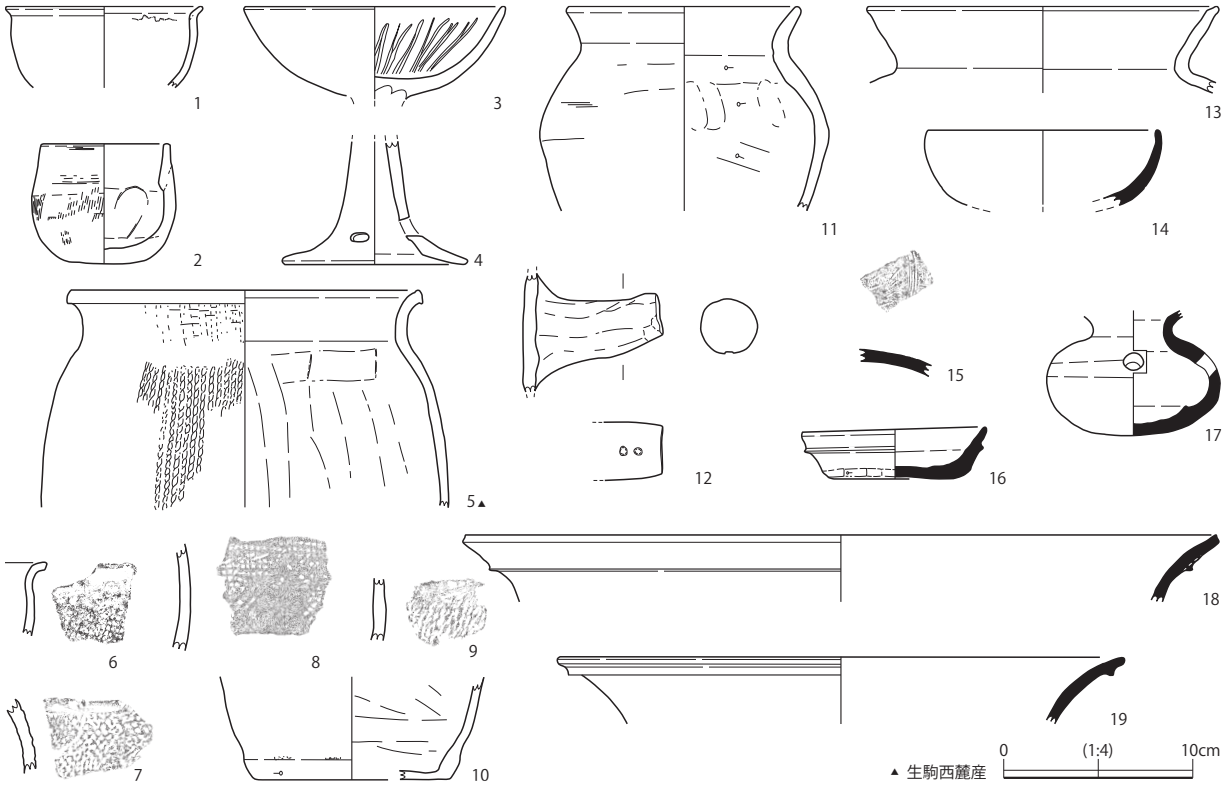


図 650　13 － 4 区　7301 溝出土遺物

7571 土坑（図 633・648、図版 47）

7398 井戸の南東で検出された。側溝を設定した位置に当たり、7398 井戸との切り合いは明確におさえられなかった。平面形は楕円形を呈す。規模は、長軸 0.5 m、短軸 0.4 m、深さ 0.25 m以上である。土師器甕が蓋をされた状態で出土した。蓋は、須恵器の坏蓋を模したものである。蓋・甕ともに口縁部を欠損しており、蓋は欠損部を下に向け、甕は欠損部を上に向け、横倒しになった状態で出土した。土器棺の可能性を検討しつつ、甕内の埋土を掘り下げたところ、小穴と硬化した部分が検出された。小穴は、植物根が腐食して、空洞になっていたもので、甕体部の下側まで確認できた。内部の土を土壌洗浄したところ、二枚貝の微細な破片と、滑石製臼玉の断片が出土した。図 648 － 1 は須恵器を模した土師器の蓋である。外面は横ナデ調整され、一部ハケメが残る。内面は横ナデ調整される。2 は土師器甕で、外面がハケ調整、内面はナデ調整される。土師器蓋は、TK23 型式の須恵器に近いもので、7571 土坑は古墳時代中期後葉に位置付けられると考える。

7301 溝（図 633・649・650、図版 88・140・143）

7398 井戸の北側で検出された。規模は、幅 4.4 m、深さ 0.4 mである。埋土は、下層が湿性堆積物のシルト質粘土、中層から上層が周辺或いは溝内で形成された土壌と考えられる粘土質シルトで、中層に炭化物が含まれている点が上層と異なる。完形に近い個体が出土したのは中層からで、上層及び下層からは土器の細片が出土した。7301 溝から出土した遺物の内、図 650 － 1 ～ 19 を図示した。1・2 は土師器鉢である。内外面は磨滅。2 の外面はハケ調整、内面はナデ調整される。3・4 は土師器高坏である。3 の外面は磨滅、内面は放射状暗文が施される。4 の内外面は磨滅、透孔が 3 方向に穿たれる。5 ～ 10 は韓式系土器である。5 は甕である。外面は縄蓆文タタキで、口縁部まで施されるが、横ナデ調整によって痕跡が残るに留まる。6 は鉢か。外面には格子目タタキが残る。7・9 は鉢ないし鍋の体

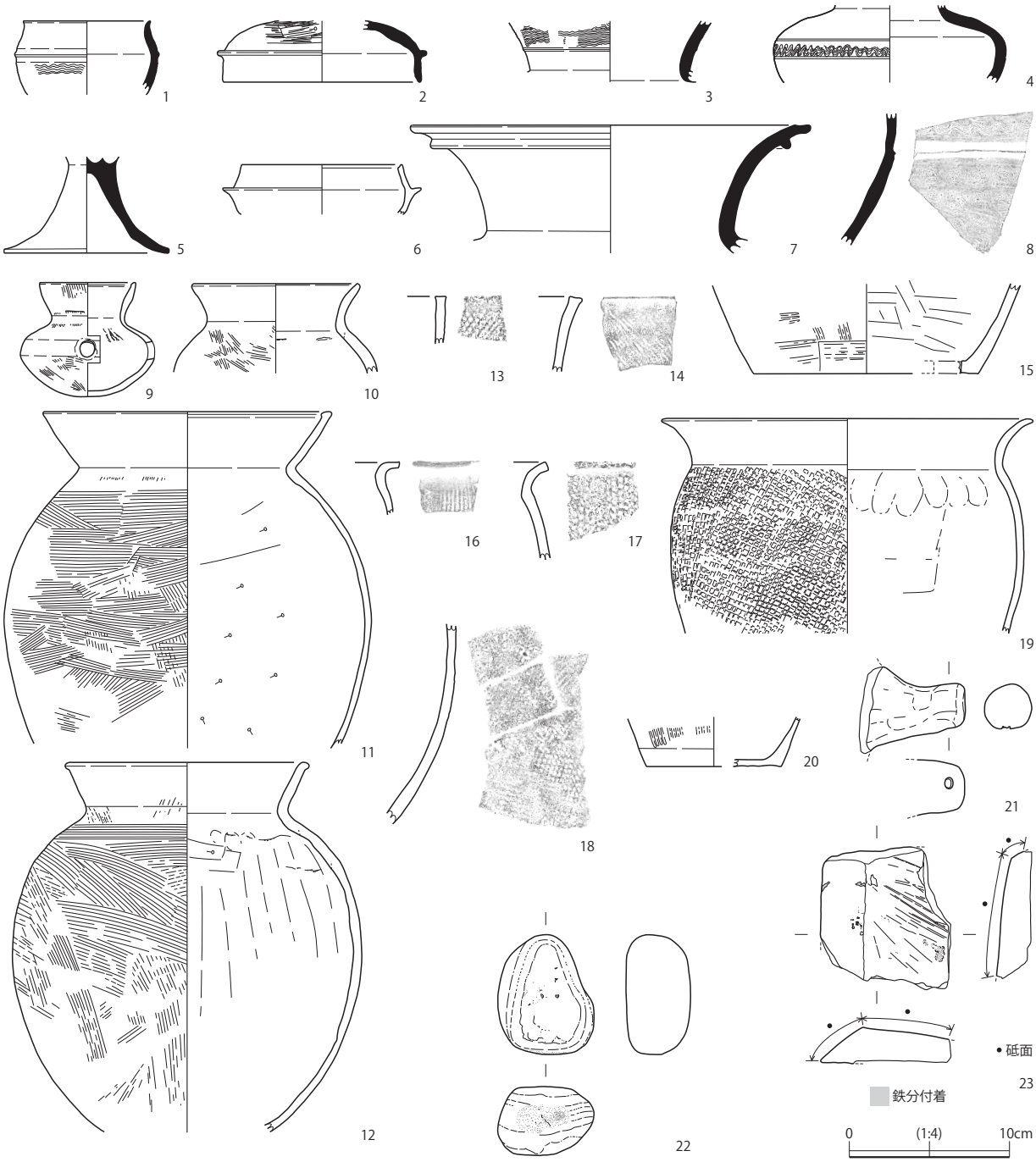


図 651　13 － 4 区　7411 溝出土遺物

部片である。7 の外面には格子目タタキ、9 の外面には縄蓆文タタキが施される。8 は鍋の体部片で、外面は格子目タタキが施される。10 は平底鉢で、外面は磨滅しているが、格子目タタキが部分的に残る。下端はケズリ調整される。11・13 は土師器甕である。13 は内傾斜する口縁端部で、横ナデ調整で仕上げられる。12 は把手で、下部に穴が 2 箇所確認できる。14 は土師器を模した須恵器坏身である。椀形を呈す。15 は須恵器蓋で、列点文 2 単位と櫛描直線文が天井部に施される。16 は須恵器坏である。口縁端部直下に鈍い突帯がめぐる。外面下端は静止ヘラケズリないし低速の回転ヘラケズリ調整が施される。17 は須恵器甑である。内外面は回転ナデ調整によって仕上げられる。18・19 は大型の甕口縁部である。外面の突帯はいずれもシャープに仕上げられる。他に、滑石製臼玉が 12 点出土した。須恵器は TK73 ～ 216 型式に比定でき、7301 溝は古墳時代中期初頭～前葉に機能したと考えられる。

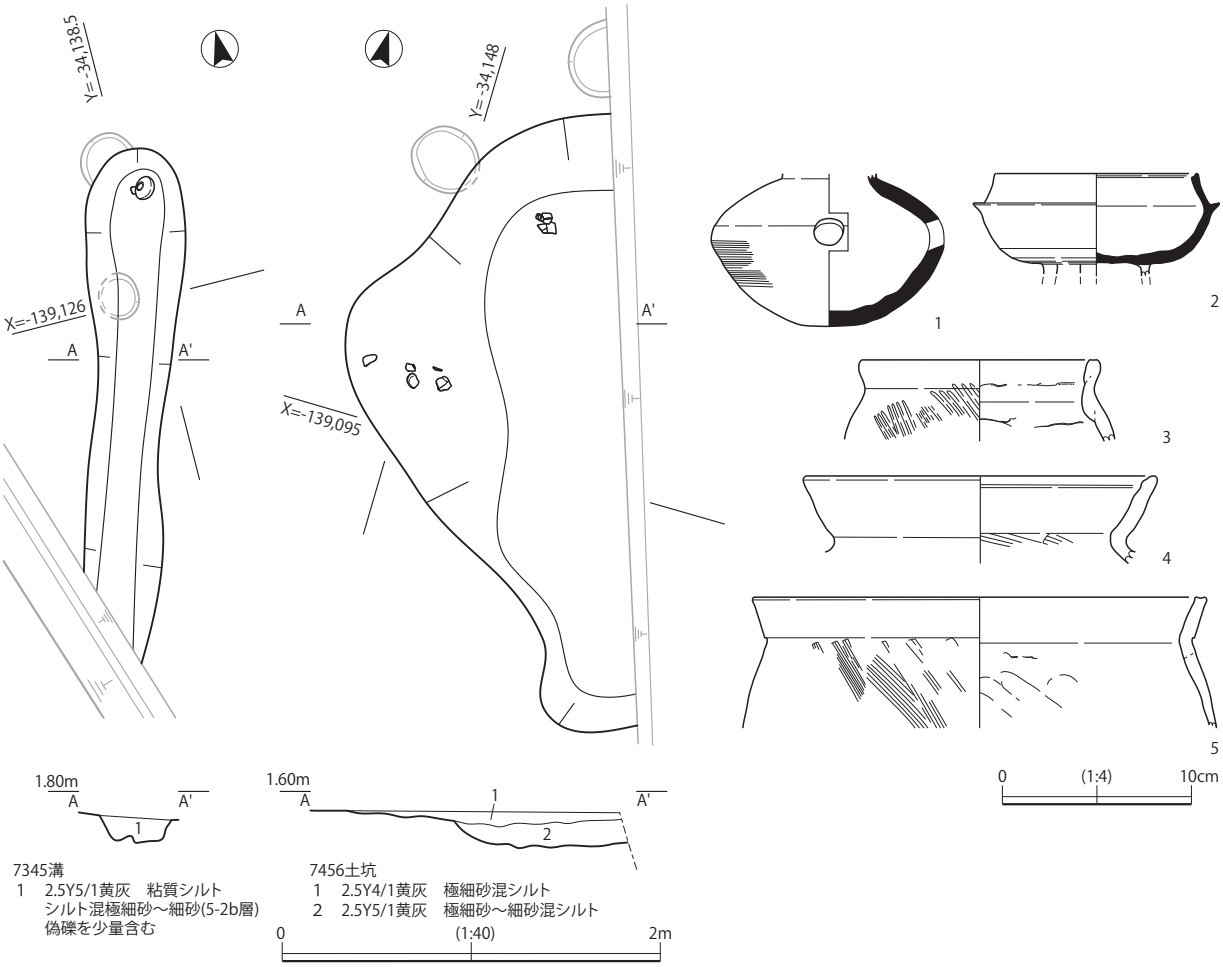


図 652　13 － 4 区　7345 溝・7456 土坑平・断面　出土遺物

7411 溝（図 633・649・651、図版 88・140・144）

7398 井戸の北側で検出された。調査地の幅が狭いため、一部を確認したに留まっているが、やや北に偏する東西の溝と考えられる。幅 7.3 m、深さ 0.7 mである。埋土は、下層が湿性の粘土質シルト、上層が暗色を帯びたシルト質極細砂である。また、上層と下層の間には、周辺の５－２ｂ層が崩落土或いは風化した極細砂混シルトが入る。底面直上には、溝の加工時形成層は認められず、２－２区 1191 溝や 7411 溝の北側で検出した 7301 溝と同じく、地形的に低い部分、谷地形ないし谷地形を一部加工した溝であった可能性がある。

２層を除去した段階に、7411 溝埋土の上面で、南北方向に延びる畦畔状の高まりが検出されており、7411 溝廃絶後に水田として用いられた際の擬似畦畔の可能性がある。7411 溝から出土した遺物の内、図 651 － 1 ～ 23 を図示した。２・４・６・14・20 が 7411 溝の上部の水田として調査を行った地層から出土した土器で、それ以外はすべて 7411 溝の下層から出土した遺物である。１は須恵器把手付椀である。２は須恵器坏蓋である。３・４は須恵器壺である。５は北河内特有の須恵器無蓋高坏の杯部である。６は須恵器を模した土師器の坏身である。７は須恵器甕の口縁部である。８は須恵器壺の体部片である。９は須恵器を模した土師器甑である。外面はハケ調整、内面は回転ナデ調整で、口縁端部はわずかに肥厚し、丸みを帯びた内傾斜する面をもつ。10 ～ 12 は土師器甕である。11 の外面は横・斜め方向のハケ調整、内面は単位幅が不明瞭なヘラケズリが施される。12 の外面は斜め方向のハケ調整、肩部に横方向のハケが施される。内面はヘラケズリの後ナデ調整される。13 ～ 20 は韓式系土器である。

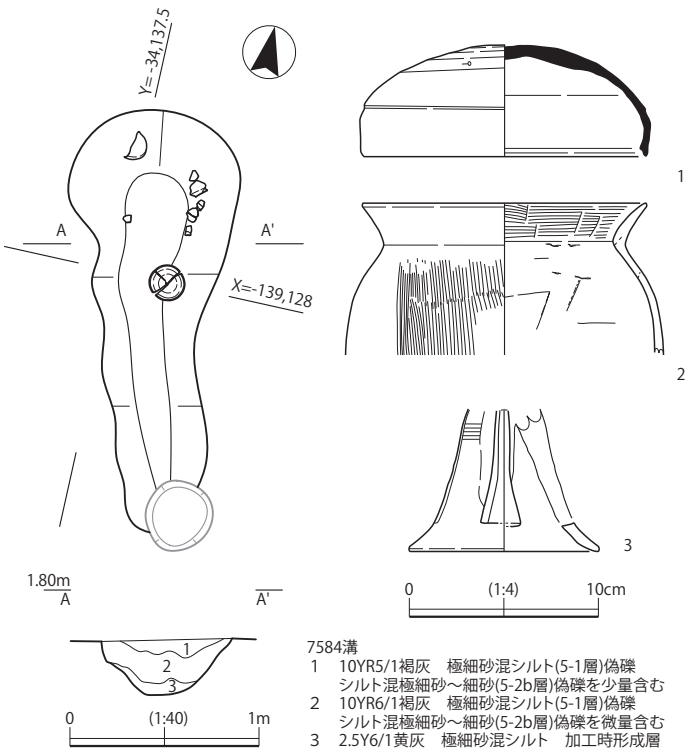


図 653　13 － 4 区　7584 溝平・断面　出土遺物

13 ～ 15 は甑である。16・20 は鉢である。外面に平行タタキが施される。20 の外面下端は磨滅しているが、ケズリ調整されたと考えられる。17・18 は鍋ないし甕で外面には格子目タタキが残る。19 は甕である。外面は格子目タタキ、内面は板ナデ調整される。21 は把手で、下面に土器乾燥時の支持棒の穴が開く。22 は磨石で、下面に平滑な面がある。23 は砥石で、線状の凹みが認められる。鉄製品のための砥石か。7411 溝では上記以外に滑石製臼玉 2 点が出土した。

7391 土坑（図 633・645、図版 46）

竪穴建物 58 の南側で検出された。長軸 2.15 m、短軸 0.6 mで、深さ 0.35 mである。焼土塊や遺物を含むシルト質粘土の埋土は北東側に集中し、この埋土を切って極細砂混シルトが堆積する。出土遺物は土師器細片が出土した。時期不詳。

7345 溝・7456 土坑（図 633・652、図版 46）

7345 溝は竪穴建物 53 の西側で検出された。規模は、幅 0.5 m、深さ 0.1 mである。埋土は粘質シルトを主体とし、５－２ｂ層に由来するブロック土である。図 652 － 1 の須恵器甕が出土した。

7456 土坑は掘立柱建物 26 の北側で検出された。湧水が激しく、平面の検出が困難であったため、周辺をかなり削り込んだ状態で遺構検出した。平面形は不整形で、規模は東西 1.4 m以上、南北 3.2 m、深さ 0.2 mである。

埋土が類似することから、２－２区 1191 溝に連続する可能性がある。1191 溝が平面的に大きく屈曲することになり、不自然な連続性に一見みえるが、５－２ｂ層上面の凹地を加工して 1191 溝が機能したことを考慮すると、「凹地」を形成する流路（図 401、1890 流路）が蛇行することからその可能性があると考えられる。

7456 土坑から出土した遺物の内、図 652 － 2 ～ 5 を図示した。２は 411 トレンチから出土した土器で、位置関係から 7456 土坑出土遺物と判断した。２は須恵器高坏である。TK208 ～ 23 型式。３は韓式系土器甕である。口縁部は厚みがあり、端部に丸味を帯びた面をもつ。外面は平行タタキ、内面はナデ調整で、粘土接合痕が明瞭に残る。４・５は土師器甕である。

7584 溝（図 653、図版 47・141）

竪穴建物 54 直上で検出されており、竪穴建物 54 より新しい。規模は幅 0.91 m、深さ 0.30 mである。埋土の中層から須恵器坏蓋、土師器甕・高坏が出土した。

図 653 － 1 は須恵器坏蓋で、MT15 型式に比定できる。２は土師器甕である。３は土師器高坏で、長方形の透孔や脚部外面上位のカキメは須恵器の製作技法で作成されたものである。細片を図示。他に、滑石製臼玉３点が出土した。

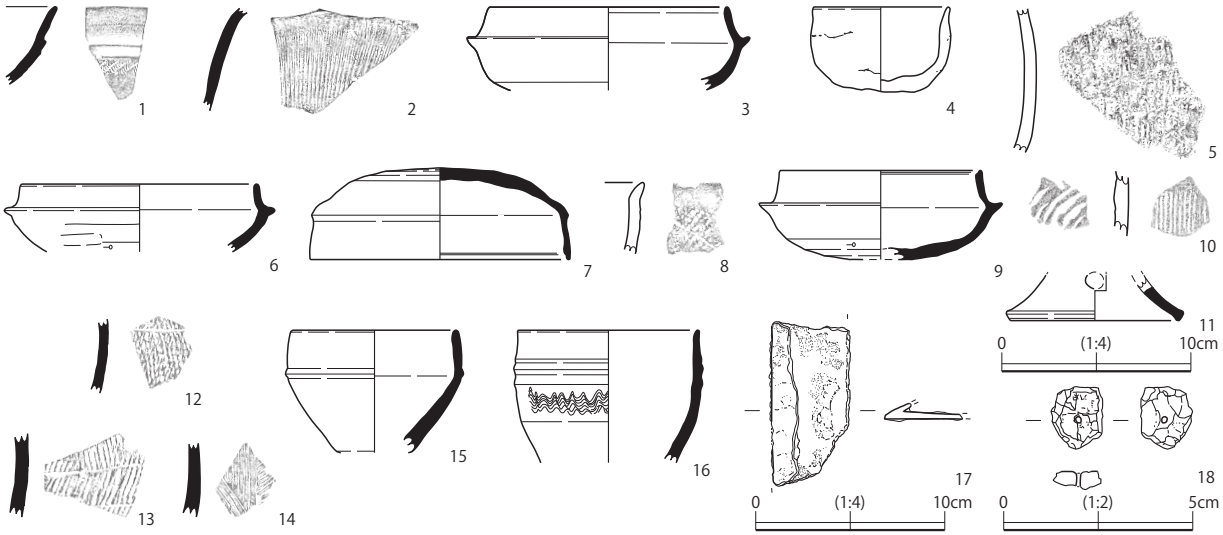


図 654　13 － 4 区　7373 柱穴他出土遺物

その他の遺構出土遺物（図 654、図版 88・141）

図 654 － 1 は須恵器有蓋高坏の口縁部で、7373 柱穴から出土した。2 ～ 4 は、7390 土坑から出土した。7390 土坑からはこれ以外に滑石製臼玉 16 点が出土した。5 は韓式系土器鍋の体部片で、7412 ピットから出土した。6 は須恵器坏身で、7447 ピットから出土した。7 は須恵器坏蓋で、7448 土坑から出土した。8 は韓式系土器鉢の口縁部で、7463 溝から出土した。9 は須恵器坏身で、7484 柱穴から出土した。10・11 は竪穴建物 60 を検出する過程で出土した。10 は須恵器を模した土師器甕体部である。11 は須恵器高坏脚部である。12 ～ 14 は須恵器で、2 層から出土した。12 は器種不明。甕か。外面は縄蓆文タタキと沈線が施される。13 は甕体部片である。14 は高坏形器台の坏部か。外面はヘラ描き沈線で鋸歯文が表現される。15 は須恵器把手付椀で、側溝掘削時に出土した。口縁部と体部の境界に丸味を帯びた突帯がめぐる。底部は欠損する。16 は須恵器把手付椀で、把手は遺存しなかった。7501 ピットから出土した。17 は鉄製鍬先で、411 トレンチから出土した。2 層より下位を掘り下げた際に出土したもので、時期は不明である。18 は滑石製有孔円板である。7609 溝から出土した。7609 溝から出土遺物はこの 1 点のみであった。全体に破損しており、表面には加工時のものと考えられる段とケズリ痕が認められた。素材剥片か。

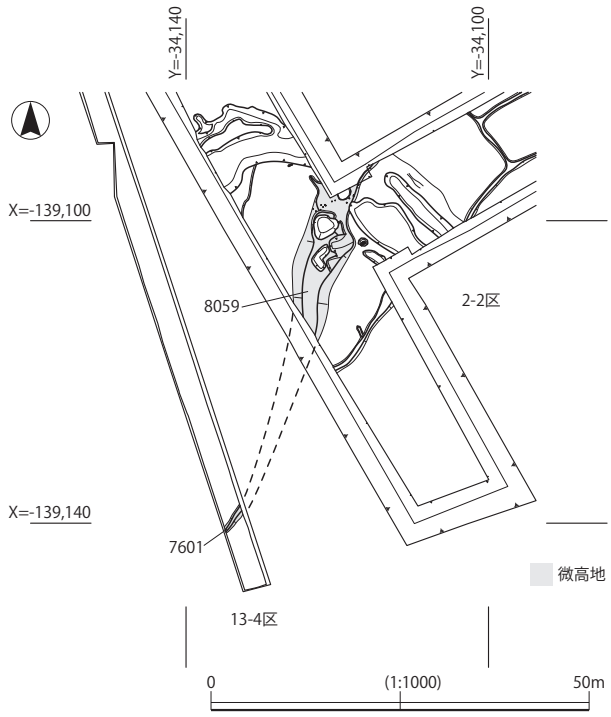


図 655　13 － 4 区　第 6 － 1 面平面

第 6 － 1 面（図 655）

2 － 2 区第 6 － 1 面で検出された 8059 微高地の延長部、7601 微高地が検出された。微高地の上部の検出に留まっており、本来の規模は不明。なお、調査地北側で部分的に 6 層の断面観察を行ったが、土壌化が弱く、作土として用いられたか不明である。（後川恵太郎）

第８節　13－5・８区の調査成果

13－5・８区（以下、５区・８区と呼称）は、今回の調査範囲の西端に位置し、13－４区の北西端からは 60 ～ 120 m離れている（図２）。この部分は堆積環境が 11－１調査地とは若干異なっていたため、別に層序を設定して調査を進めた。そして、11－１調査地の西端にあたる２－２区の断面（66 トレンチ）と層序対比することにより、両者の関係を検討した（表２）。

５区と８区は約 20 mしか離れておらず、並行して調査をおこなうことができたため、両方の断面を同時に検討し、統一した層序番号をつけた。なお、これらの調査区の北側と北東側には、第二京阪道路建設に先立って調査された 03－６・06－３調査地および 03－５・06－２調査地、西側には寝屋川北部地下河川の讃良立坑築造に先立って調査された 09－１調査地が存在する。層序や各層準の時期に関しては、これらの調査地との関係も勘案しながら検討をおこなった。

第１項　層序（図 656 ～ 658、図版 48）

今回の調査区では、地層を大きく 12 層に分層した。

５区・８区とも 2.5 ～３mの盛土が施されており、その下に近・現代の作土層が残存していた。第１層はその下に堆積していた地層で、３層に細分された。第１－１層は中砂～細礫混シルトで、擾乱を受けていた。一方、第１－２・３層はともにシルト～粘土で、第１－３層のほうが細粒であった。両者とも淘汰がよく、構造は不明瞭であった。なお、８区では第１－１ｂ面において 7901 土坑が確認された。これは、東西方向にのびる長さ約５m、幅約１m、深さ 0.3 mの土坑が５基並ぶものである。

第２層は、シルトないし極細砂混シルトである。構造が不明瞭な部分も多いが、シルトがブロック状を呈する部分もあり、作土層と推定される。なお、８区と５区東壁断面南半では、この地層の下部に地震によって形成されたと思われる変形構造（羽毛状・火炎状の流線パターンなど）が認められた。

第３－１層は８区および５区の一部において、２層に細分された。その上部は、細砂～極細砂混シルトであり、腐植と思われる黄灰色の物質を含んでいた。下部は５区が中砂～粗砂混シルト、８区が細砂～極細砂混シルトで、腐植と思われる物質を含んでいた。

また、第３－２層は細砂～中砂混シルトであった。5・8区とも、これらの層準において、地震によって形成されたと思われる変形構造が顕著に観察された。特に８区では、第３－１層下部から第３－２層上部にかけての範囲において変形が著しかった。なお、09－１調査地の「第４－１層」は、写真で確認したところ２層に細別可能であり、それらは第３－１層と第３－２層に対比される。

第３－３層は、５区が細砂～中砂混シルト～粘土であった。坪境の南側においては、その下位にシルト偽礫を含むシルト質細砂～極細砂が認められ、さらにその下には有機物薄層を挟在するシルトが堆積していた（第３－３ｂ層）。一方、８区は中砂混シルトで、全体として構造が不明瞭であったが、下部に有機物薄層を挟在する部分が認められた。この層準は 09－１調査地の「第４－２層」に対比される。この調査地では全体を「水成層」としているが、８区と同様、作土層の下位に母材の堆積物が残存していたと思われる。なお、この層準の下部から下位の第４－１層にかけて変形構造（羽毛状・火炎状の流線パターンなど）が認められた。しかし、上部では変形構造は不明瞭であり、上面はほぼ水平であった。泥質堆積物は上部ほど水分を多く含んでおり、厚密を受けていないため流動性に富む。そして、より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質を持っている。このため、地震によって生じる変形ゾーンは、上から順に液相流動変形ユニット、含水塑性変形ユニット、脆性変形ユニットに細分

図 656　13 － 5 区　東壁断面①

421・427・431トレンチ
1　10BG4/1暗青灰　中砂～極粗砂混シルト～粘土　シルト～粘土偽礫含む　現代の攪乱
2　5BG4/1暗青灰　シルト～粘土　淘汰良い　構造不明瞭　第1-3層
3　5BG5/1青灰　極細砂混シルト　構造が不明瞭な部分多い　変形構造がみられる部分あり　第2層
4　10G4/1暗緑灰　中砂～粗砂混シルト　シルトが偽礫状を呈する部分あり　下部に腐植を含む部分あり　第3-1層
5　10G5/1緑灰　細砂～中砂混シルト　シルトが偽礫状を呈する部分あり　第3-2層
6　10G5/1緑灰　シルト　中砂～粗砂がわずかに混じる　構造不明瞭　第3-2面の坪境溝埋土
7　5BG5/1青灰　中砂～粗砂混シルト～粘土　シルト～粘土が偽礫状を呈する　第3-2面の坪境溝埋土、加工時形成層か
8　5BG5/1青灰　細砂～中砂混シルト～粘土　構造不明瞭　第3-3層
9　10G5/1緑灰　シルト～粘土　構造不明瞭　下部に細砂がわずかに混じる　第3-3面7702溝埋土
10　10BG5/1青灰　シルト～粘土偽礫　7.5Y6/2灰オリーブ粗砂～細礫と互層をなす　第3-3面7702溝埋土、加工時形成層か
11　5Y7/3浅黄　シルト質細砂～極細砂　シルト偽礫含む　変形構造顕著　第3-3層の細分
12　7.5Y6/2灰オリーブ　粗砂～細礫　10BG5/1青灰シルト～粘土偽礫が混じる　シルト～粘土偽礫は上部～中部に集中　第4-1-2b面7720溝埋土
13　10BG5/1青灰　シルト　極細砂が若干混じる　有機物薄層を挟在　変形構造あり　第3-3b層
14　7.5Y5/1灰　中砂～細礫混シルト　シルトが偽礫状を呈する　第4-1層
15　7.5Y5/1灰　中砂～細礫混シルト　シルトが偽礫状を呈する　14よりも泥質強い　第4-1面畦畔盛土
16　10BG5/1青灰　極細砂～シルト偽礫　粗砂～細礫が混じる　第4-1-2層
17　5Y6/3オリーブ黄　粗砂～極粗砂　10BG6/1青灰極細砂～シルト偽礫が混じる　下面に足跡あり　第4-1-2b面7720溝埋土
18　7.5GY4/1暗緑灰　極細砂～シルト偽礫　中砂～細礫が混じる　第4-1-2b面7721溝埋土
19　7.5Y5/1灰　中砂～極粗砂質極細砂～シルト　極細砂～シルトが偽礫状を呈する　第4-2層
20　N7/0灰白　細砂～中砂　N5/0灰極細砂～シルト、5Y6/3オリーブ黄極粗砂～細礫とともに葉理を形成　第4-1-3面7741溝埋土
21　10BG5/1青灰　極細砂～シルト偽礫と中砂～極粗砂が混じる　下部に23、31起源のシルト偽礫が集中する部分があり、その上面に足跡がみられる　第4-1-3面7741溝埋土
22　N4/0暗灰　シルト偽礫　10BG7/1暗青灰シルト偽礫、中砂～極粗砂が混じる　変形構造顕著　第4-1-3面7741溝埋土
23　5B3/1暗青灰　シルト　有機物粒含む(暗色帯)　上部ほど暗色が強い　下部に31起源のシルト偽礫を含む部分あり　第5層
24　5B3/1暗青灰　中砂混シルト　5B6/1青灰シルト偽礫含む　有機物粒含む(暗色帯)　第5層
25　10G4/1暗緑灰　シルト　5B6/1青灰シルト偽礫含む　有機物粒含む(暗色帯)　第5層
26　5Y6/2灰オリーブ　中砂～粗砂　第3-3層の細分、11と同一層準か
27　2.5Y6/3にぶい黄　極粗砂～細礫　淘汰は比較的良い　第4-1-3面7741溝埋土
28　5B3/1暗青灰　シルト　有機物含む　下部を中心に5G7/1明緑灰極細砂偽礫を含む　第5b面7728溝埋土
29　N3/0暗灰　シルト　有機物薄層を挟在　下部を中心に5G7/1明緑灰極細砂偽礫を含む　第5b面7728溝埋土
30　5B6/1青灰　極細砂～細砂偽礫　N3/0暗灰シルト偽礫、5B6/1青灰シルト偽礫が混じる　第5b面7728溝埋土、加工時形成層
31　10BG6/1青灰　極細砂～シルト　下部に有機物薄層、極細砂薄層を挟在　上方細粒化　第5b-1層
32　5BG6/1青灰　細砂～極細砂　平行葉理あり　下部～中部は上方粗粒化、中部～上部は上方細粒化　第5b-1層
33　5Y4/1灰　シルト質極細砂　下部は細砂～極細砂　平行葉理あり　第5b-1層
34　5Y4/1灰　シルト質極細砂　細砂薄層がみられる部分あり　植物遺体(ヒシ種実含む)を多く含む　生物擾乱を受けていると思われる部分あり　第5b-2層
35　5Y7/1灰白　細砂　5Y4/1灰極細砂と互層をなす　植物遺体(ヒシ種実含む)を含む　第5b-2層
36　2.5Y5/1黄灰　シルト　変形構造あり　植物遺体(ヒシ種実含む)を多く含む　2.5Y3/1黒褐シルト偽礫含む(このシルトは38の上に本来地層として存在した可能性あり)　第5b-3層
37　10YR2/1黒　中砂～粗砂質極細砂～シルト　極細砂～シルトが偽礫状を呈する　土壌化　第6層
38　5Y7/2灰白　粗砂～細礫　プラナー型斜交層理がみられる部分あり　下部は5Y6/1灰、5Y7/1灰白極細砂～細砂が葉理を形成　第6b層
39　2.5Y4/1黄灰　極細砂質シルト　植物遺体含む　変形構造あり(40の偽礫が流線状に配列)　第7層
40　2.5Y3/1黒褐　シルト　有機物(ヨシ遺体含む)　暗色化　第8層
41　2.5Y2/1黒　シルト　有機物粒含む(暗色帯)　10BG6/1青灰シルト偽礫を含む部分あり　第9層
42　5Y5/1灰　シルト　シルトが偽礫状を呈する部分あり　植物(ヨシ)による攪乱を受けていると思われる　第9層
43　5Y6/1灰　シルト　多量のヨシの遺体を横位に挟在
44　5B4/1暗青灰　細砂混シルト　シルトが偽礫状を呈する部分あり　腐植を含んでやや褐色を帯びた部分あり　第3-1層の細分
45　5BG5/1青灰　中砂～粗砂混極細砂～シルト　細砂～シルトが偽礫状を呈する　第4-1b面7712溝埋土
46　5B5/1青灰　極細砂～シルト偽礫　5B6/1青灰極細砂が混じる　第4-1b面7712溝埋土、加工時形成層
47　5B6/1青灰　極細砂　5B5/1青灰極細砂～シルト偽礫が若干混じる　第4-1b面7712溝埋土、加工時形成層
48　5Y5/1灰　極細砂～シルト偽礫　中砂～細礫が混じる　第1-1b面7701溝埋土
49　5Y5/2灰オリーブ　中砂～細礫　極細砂～シルト偽礫が若干混じる　第1-1b面7701溝埋土
50　5GY6/1オリーブ灰　シルト偽礫　帯状に配列　第9層、第9層はこの層準を境に細分できる可能性あり
51　2.5Y2/1黒　シルト　多量のヨシの遺体を横位に挟在　暗色帯　第11層
52　2.5Y5/1黄灰　シルト　多量のヨシの遺体を横位に挟在　第12層
53　2.5Y6/3にぶい黄　極粗砂～細礫　シルト偽礫含む　10と同じ層準　第3-3面7702溝埋土、加工時形成層

図657　13－5区　東壁断面②

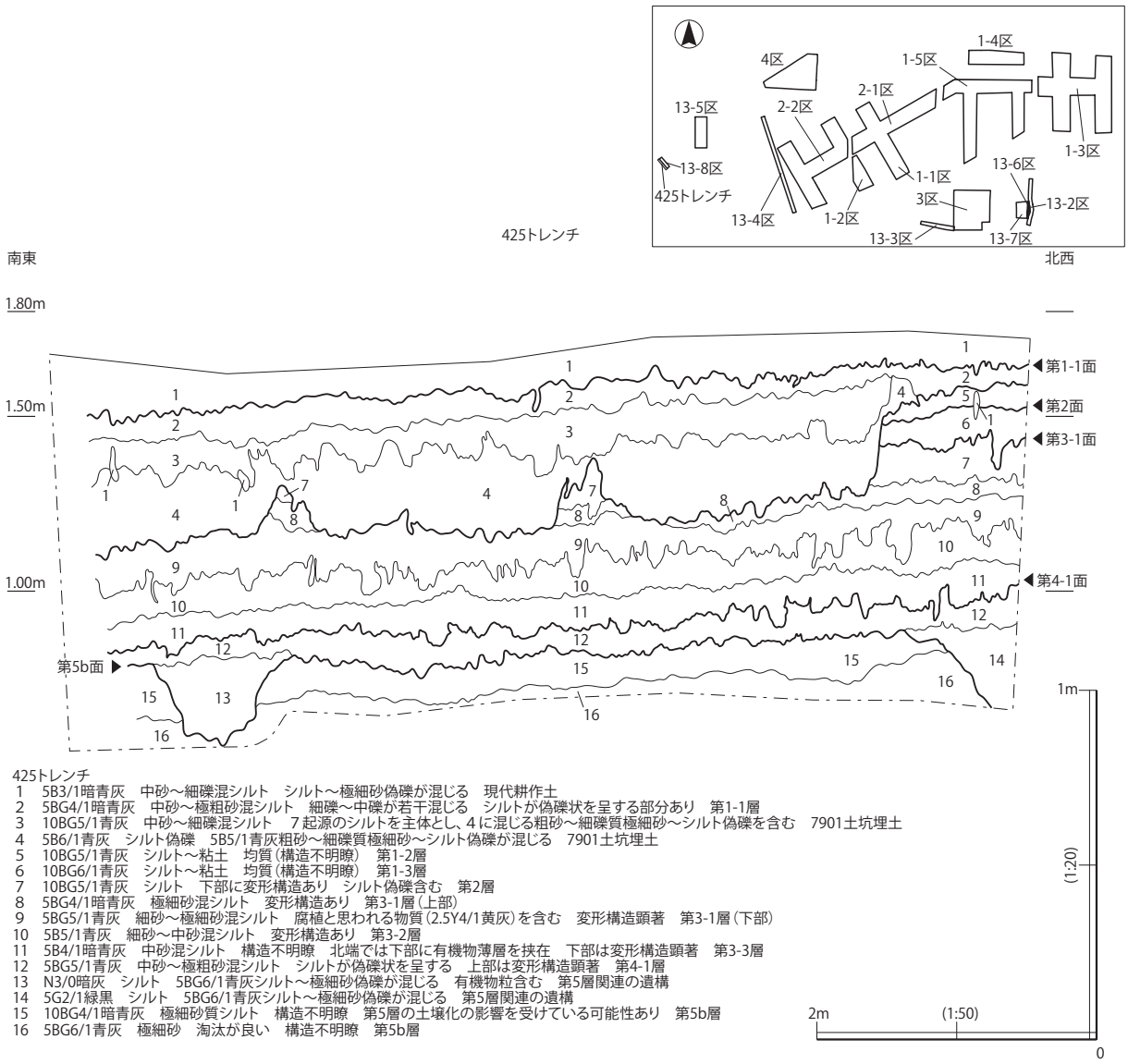
される。これにあてはめると、この層準の上部は液相流動変形ユニット、下部から第４－１層にかけての範囲は含水塑性変形ユニットとなり、この層準の上面段階に地震が発生した可能性が高い。

第４層は大きく第４－１層と第４－２層の二つに細分された。このうち第４－１層は、５区北端の坪境部分よりも北では、第４－１－１～４－１－３層に細分された。

第４－１層は、５区の坪境以南においては中砂～細礫混シルト、８区においては中砂～極粗砂混シルトであった。その上面は、第３－３ｂ層が残存している部分では比較的残りがよく、坪境畦畔・溝が検出されたが、地震による変形構造の影響もあり、それ以外の遺構は検出されなかった。また、５区南部と８区では、その下面（第４－１ｂ面）に帰属する遺構を検出した。

５区の坪境以北における第４－１層（第４－１－１層）は、中砂～細礫混シルトであった。この下には粗砂～細礫と極細砂～シルト偽礫が混じった地層があり、第４－１－２層とした。また、その下位には葉理のみられる細砂～細礫が堆積しており、さらにその下には極細砂～シルト偽礫と中砂～極粗砂が混じる地層が認められた。前者は、03－６調査地の「第８－２ｂ層」に対比される。後述するように、これは坪境の溝（7741 溝）の中に堆積した砂礫である。一方、後者は溝の加工時形成層および機能時堆積層と考えられる。溝の北側の肩は調査範囲外に存在し、さらに北には 03－６調査地の「第９層」に対応する地層があると想定される。調査ではこれを第４－１－３層と呼び、7741 溝をこの上面に帰属すると理解した。

第４－２層は、中砂～極粗砂質極細砂～シルトである。５区中央部でのみ確認され、その他の部分では第４－１層段階の耕作の影響で遺存していなかった。



425トレンチ
1　5B3/1暗青灰　中砂～細礫混シルト　シルト～極細砂偽礫が混じる　現代耕作土
2　5BG4/1暗青灰　中砂～極粗砂混シルト　細礫～中礫が若干混じる　シルトが偽礫状を呈する部分あり　第1-1層
3　10BG5/1青灰　中砂～細礫混シルト　7起源のシルトを主体とし、4に混じる粗砂～細礫質極細砂～シルト偽礫を含む　7901土坑埋土
4　5B6/1青灰　シルト偽礫　5B5/1青灰粗砂～細礫質極細砂～シルト偽礫が混じる　7901土坑埋土
5　10BG5/1青灰　シルト～粘土　均質（構造不明瞭）　第1-2層
6　10BG6/1青灰　シルト～粘土　均質（構造不明瞭）　第1-3層
7　10BG5/1青灰　シルト　下部に変形構造あり　シルト偽礫含む　第2層
8　5BG4/1暗青灰　極細砂混シルト　変形構造あり　第3-1層（上部）
9　5BG5/1青灰　細砂～極細砂混シルト　腐植と思われる物質（2.5Y4/1黄灰）を含む　変形構造顕著　第3-1層（下部）
10　5B5/1青灰　細砂～中砂混シルト　変形構造あり　第3-2層
11　5B4/1暗青灰　中砂混シルト　構造不明瞭　北端では下部に有機物薄層を挟在　下部は変形構造顕著　第3-3層
12　5BG5/1青灰　中砂～極粗砂混シルト　シルトが偽礫状を呈する　上部は変形構造顕著　第4-1層
13　N3/0暗灰　シルト　5BG6/1青灰シルト～極細砂偽礫が混じる　有機物粒含む　第5層関連の遺構
14　5G2/1緑黒　シルト　5BG6/1青灰シルト～極細砂偽礫が混じる　第5層関連の遺構
15　10BG4/1暗青灰　極細砂質シルト　構造不明瞭　第5層の土壌化の影響を受けている可能性あり　第5b層
16　5BG6/1青灰　極細砂　淘汰が良い　構造不明瞭　第5b層

図658　13－8区　南西壁断面

第５層は有機物粒を多く含むシルトで、暗色帯（古土壌）である。青灰色シルトの偽礫を含んでおり、擾乱されていると思われる。なお、この層準は５区東半部分以外ではほとんど遺存していなかった。この層準の下面（第５ｂ面）では古墳時代の遺構を検出した。

第５層の下には砂・泥からなる堆積物が認められた。これは11－１調査地において「第５－２ｂ層」と呼称された層準に対応する。今回は、この調査地との対応関係を考慮して第５ｂ層と呼称したが、これは層相の異なる複数の堆積物が累重したものであり、堆積過程を明確にするためには、堆積ユニットごとに名称をつける必要がある。ここでは、この層準を第５ｂ－１層上部・下部、第５ｂ－２層、第５ｂ－３層に細分して説明したい。第５ｂ－１層上部は淘汰のよい極細砂～シルトで、全体として上方細粒化しており、下部に極細砂と有機物薄層が互層をなす部分が認められた。第５ｂ－１層下部は平行葉理のみられる細砂～極細砂で、下位から中位までは上方粗粒化し、中位から上位にかけては上方細粒化していた。なお、この層準は南東側に向かって層厚が厚くなり、粒径も細砂～中砂へと変化していたほか、斜交層理の認められる箇所があった。第５ｂ－２層の上部はシルト質極細砂で、細砂の薄層を挟在する部分が認められた一方、生物擾乱を受けたと思われる部分も認められた。また、ヒシの種実が多数

含まれており、水深の比較的深い場所で堆積した可能性が高い。第５ｂ－２層の下部は細砂と極細砂の互層であり、ヒシの種実が多数含まれていた。第５ｂ－２層は、上部と下部を合わせて上方粗粒化した堆積物ととらえられ、上部の段階は堆積速度が遅かったと思われる。第５ｂ－３層はヒシの種実を多数含むシルトである。この層準の下部から第６ｂ層上部にかけての範囲には、地震による変形構造が顕著であり、羽毛状・火炎状の流線パターンが明瞭に観察された。しかし、第５ｂ－３層の上部は小さな偽礫が若干含まれる程度であり、上面も変形していなかった。上部は液相流動変形ユニット、下部から第６ｂ層上部は含水塑性変形ユニットにあたる。したがって、第５ｂ－３層の上面段階に地震が発生したと推定される。

第５ｂ－２～３層にはヒシの種実が多く認められ、その堆積時期には水位が上昇して、水深の比較的深い沼沢地が広がったと推測される。また、第５ｂ－１層下部は南東側に厚く堆積し、粒径も南東に向かって粗くなっていた。さらに、部分的に認められた斜交層理の傾きは南東→北西であり、第５ｂ－１層下部を構成する堆積物は南東方向から供給されたと思われる。

第５ｂ層の下には古土壌（暗色帯）があり、第６層とした。これは下の砂層（第６ｂ層）を母材のひとつとして形成されたもので、第６ｂ層が堆積した５区北部にのみ存在していた。なお、この層準が認められなかった５区南部では、上位の第５ｂ－３層中にこの層準起源と考えられる偽礫は含まれておらず、この部分にはもともと第６層は形成されなかった可能性が高い。また、第６ｂ層は、下部が細砂と極細砂の互層で、上部はプラナー型斜交層理のみられる粗砂～極粗砂であった。

第６ｂ層に覆われた地層を第７層とした。第７層は極細砂質シルトであり、第６ｂ層が存在していた部分では、上面に人の足跡が多数認められた。また、中位から第８層にかけての範囲では、地震による変形構造（羽毛状・火炎状の流線パターンなど）が顕著に認められた。これは含水塑性変形ユニットに相当し、第７層上部が液相流動変形ユニットにあたる。このことから、この変形構造は第７層上面段階に発生した地震によって形成されたと推定される。なお、第６ｂ層が堆積していない部分では、第７層の上を第５ｂ－３層が覆っていた。この部分では、第５ｂ－３層上面段階の地震による変形構造と第７層上面段階の地震による変形構造が重なっており、第７層上面も含めて顕著に変形していた。

第７層の下には黒褐色シルトが堆積しており、第８層と呼称した。この層準にはヨシの遺体が多く含まれる。ただし、地震による変形が著しく、本来の構造を把握することは困難であった。

第９層は有機物粒を多く含む黒色シルト（暗色帯）である。その層準の中位にはオリーブ灰色シルトがレンズ状に挟まれる部分がある。この状況は、03－５調査地の「第４層」最上部と酷似する。

また、その下にはヨシの遺体を横位に挟在するシルトの第 10 層、大量のヨシの遺体を横位に挟在する腐植質シルト（暗色帯）の第 11 層、ヨシの遺体を多く含む黄灰色シルトの第 12 層が確認された。今回の調査では、これよりも下位は確認していないが、03－６調査地における 385 井戸周囲の地層観察所見によれば、第 12 層が T.P.－1.4 mまで続き、その下には砂層が存在すると思われる。

第２項　遺構・遺物

今回は、中世と推定される第２層（第２層上面）から本格的に調査を開始した。そして、５区は弥生時代前期と考えられる第８層を掘削し、第９面（第９層上面）を検出して調査を終了した。また、８区は工事の影響がおよぶ T.P.0.5 mまで人力掘削し、第５ｂ面（第５層下面）で終了した。

第２面～第３－３面（図 659）

第２面に関しては、５区・８区とも顕著な遺構は検出されなかった。第３－２面（第３－２層上面）

に関しても、平面精査時には遺構は認識できなかったが、５区東壁断面を検討したところ、第３－３面で検出した 7702 溝がこの面に踏襲されていたことが明らかになった（図 660）。作土である第３－２層からは、５区、８区とも遺物はほとんど出土しなかった。図化し得たものとしては、８区の第３－２層から出土した瓦器椀の破片（図 662 －２）がある。高台の形状から、13 世紀後半のものと思われる。

５区の第３－３面（第３－３層上面）に帰属する遺構としては、7702 溝を検出した。この溝は幅 2.0 ～ 2.6 m、深さ 0.2 mで、東西方向にのびていた。表層地割や絵図、小字図にもとづく条里型地割復原図（中尾・山根編　2009：図 662）を参考にすると、この溝の位置は八条四里十四ノ坪・十五ノ坪間の坪境にあたる。したがって、この溝は坪境の水路と推定される。このほか、５区の中央付近においては、第３－３層から礫が１点出土した（図 659）。これは第３－３層を構成する砕屑物の粒径とは全く異なっているため、同じ営力で運搬されてきたとは考えられず、人為的に持ち込まれたものと思われる。一方、８区においては、第３－３面の遺構は検出されなかった。

第３－３層の出土遺物には、図 662 －１・３がある。前者は８区の第３－３層から出土した瓦器椀の破片で、12 世紀後半～ 13 世紀前半のものである。また、後者は前述した第３－３層から出土した礫である。中央部に凹みがあり、石製品の破片と考えられる。石材は閃緑岩である。

第４－１－１面～第４－１－３面（５区北部、図 659）

５区の坪境周辺においては、第３－３層の下に部分的に第３－３ｂ層が存在しており、第４－１－１面（第４－１層上面）の遺存状況は比較的良好であった。この面から検出されたのが、7703 溝と 7704 畦畔である。前者は第３－３面 7702 溝と重なっており、その前身となる坪境水路と考えられる。この溝の幅は 1.0 ～ 1.5 mと推定され、深さは 0.2 ～ 0.3 mである。また、後者は前者の南側に沿って造成されていた。7702 溝の影響で北側の遺存状況が悪いものの、幅 0.6 ～ 1.5 mと推定され、高さは 0.2 mである。この畦畔の肩部は第３－３ｂ層に覆われており、明瞭に検出できた。

坪境部分から北は第４－１層が細分された。このうち、第４－１－２層を除去した面（第４－１－２ｂ面）では溝を検出した（7720・7721 溝、図版 48）。坪境部分は、東西方向にのびる幅 4.5 mの範囲が溝状に下がっており、大きくみればひとつの溝といえるが、その中は二つの溝に分かれていた（7720・7721 溝）。このうち、7721 溝のほうが深く、7720 溝はそこから分岐しているように思われた。7720 溝の規模は幅 1.2 ～ 1.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mである。一方、7721 溝の規模は、一段下がった部分で幅を計測すると、幅 0.7 ～ 2.5 m、深さ 0.2 mである。なお、５区北端で 7721 溝に合流する南北方向の溝状の落ちも検出したが、ごく一部が検出されたにすぎないため、詳細は不明である。

7720・7721 溝の下には、上から順に細砂～細礫、シルト偽礫と中砂～極粗砂が混じる地層が認められた。前者は 03 －６調査地の「第８－２ｂ層」に対比される。同調査地においては「落ち込み」と呼称される放棄流路のうち、坪境にあたる部分付近にのみ存在し、５区においても坪境部分だけに堆積した可能性が高い。また、後者は溝の機能時堆積層・加工時形成層と推定される。これらのことから、この部分には東西方向にのびる溝（7741 溝、図版 48）が存在し、それが 03 －６調査地の「落ち込み」に連結していたと推測した。今回の調査ではこの溝の南側の肩は検出されたが、北側の肩は調査範囲外に存在する。この溝の北には 03 －６調査地の「第９層」に対比される地層が存在すると予想され、これを第４－１－３層とすれば、7741 溝は第４－１－３面（第４－１－３層上面）に帰属するといえる。

この坪境からは、遺物が比較的まとまって出土した（図 662）。５は 7720 溝から出土した土師器皿である。（伊野　1995）の分類では Bb タイプに属し、11 世紀後半のものと思われる。６は 7721 溝

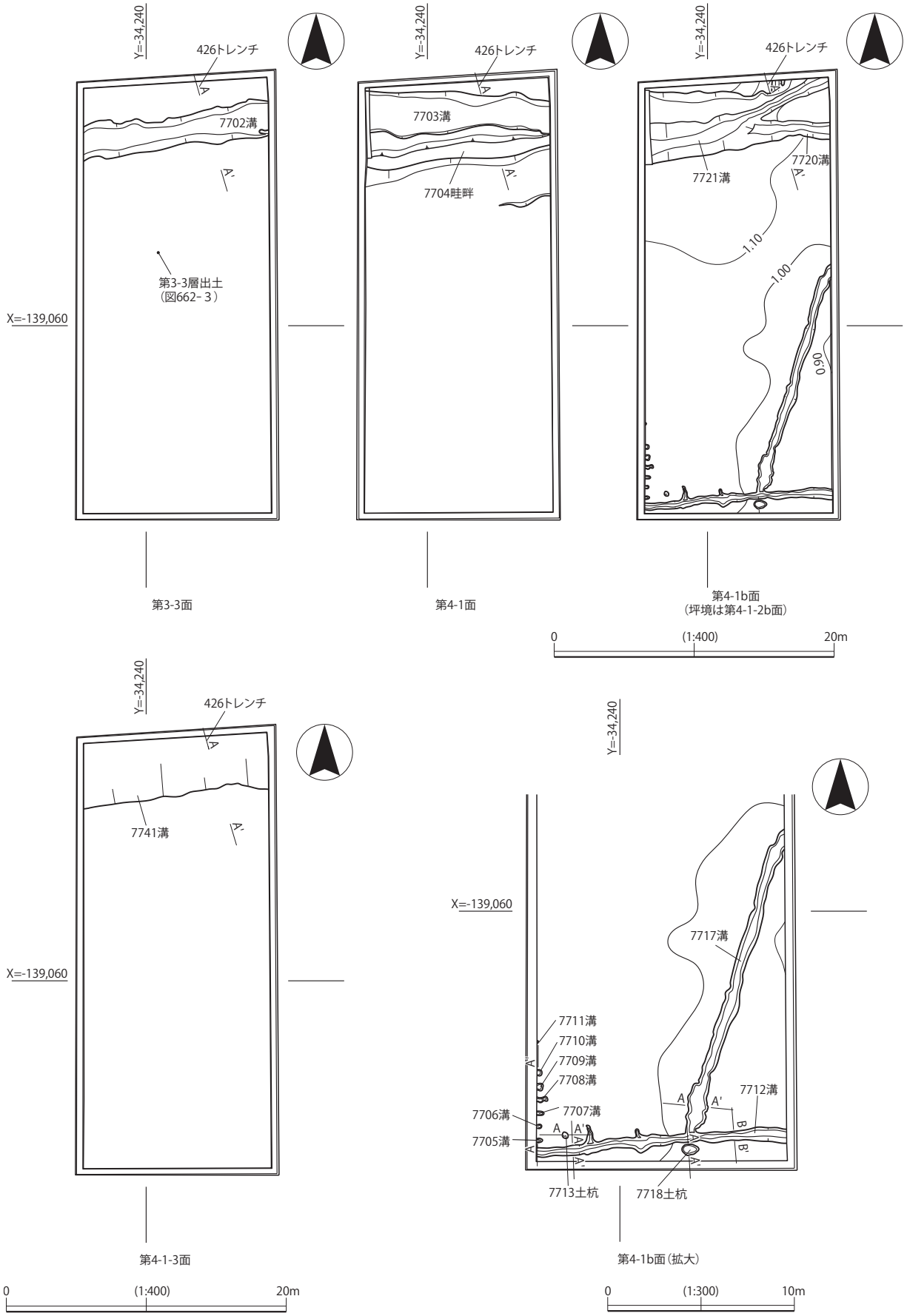
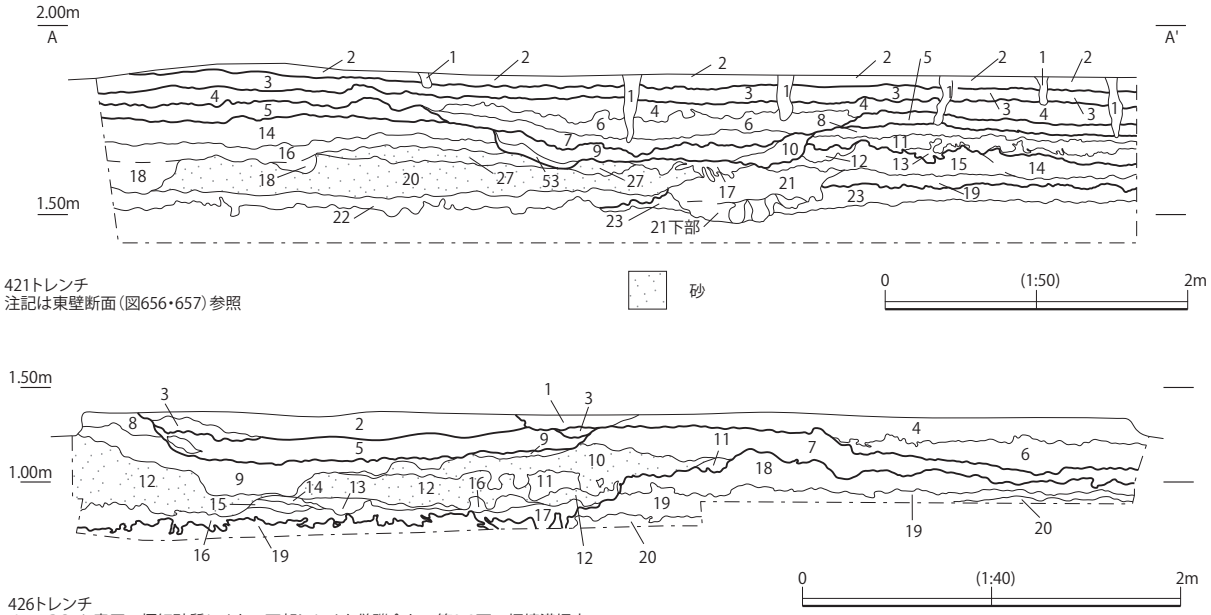


図 659　13 － 5 区　第３－３面～第４－１ｂ面平面



426トレンチ
1　5BG5/1青灰　極細砂質シルト　下部にシルト偽礫含む　第3-2面の坪境溝埋土
2　5BG5/1青灰　極細砂混シルト　淘汰は比較的良い　第3-3面7702溝埋土
3　10BG4/1暗青灰　シルト偽礫　細砂～極細砂、粗砂～細礫が混じる　第3-3面7702溝埋土　加工時形成層
4　10BG4/1暗青灰　中砂～極粗砂混極細砂質シルト　下部に極細砂偽礫含む　変形構造あり　第3-3層
5　5BG5/1青灰　シルト　北端部に８が崩落した偽礫を挟在　第3-3b層
6　10BG5/1青灰　シルト　有機物薄層、極細砂薄層を挟在　第3-3b層
7　5BG5/1青灰　中砂～極粗砂混極細砂～シルト　極細砂～シルトが偽礫状を呈する　第4-1層
8　7.5Y5/1灰　中砂～細礫混シルト　シルトが偽礫状を呈する　第4-1-1層
9　5BG5/1青灰　極細砂～シルト偽礫　細砂～極細砂、粗砂～細礫が混じる　第4-1-2層
10　5Y7/1灰白　中砂～細礫　葉理あり　細砂～極細砂薄層を挟在　第4-1-2b層（上部）
11　5B5/1青灰　極細砂偽礫　細砂～粗砂が混じる　第4-1-2b層（中部）
12　5Y7/1灰白　粗砂～細礫　シルト～細砂が葉理を形成　上部は10BG5/1灰シルト質極細砂　第4-1-2b層（下部）
13　2.5Y6/4にぶい黄　中砂～粗砂　5B4/1暗青灰シルト偽礫薄層と互層をなす　第4-1-3面7741溝埋土
14　2.5Y6/4にぶい黄　中砂　下部はN6/0灰極細砂　葉理あり　第4-1-3面7741溝埋土
15　2.5Y6/4にぶい黄　中砂～粗砂　5B4/1暗青灰シルト偽礫薄層と互層をなす　下部はN5/0灰極細砂　淡水産の貝化石含む　第4-1-3面7741溝埋土
16　5Y3/1オリーブ黒　細砂～中砂混シルト　19起源のシルト偽礫が混じる　変形構造顕著　淡水産の貝化石含む　第4-1-3面7741溝埋土
17　5Y6/3オリーブ黄　粗砂～極粗砂　19起源のシルト偽礫が混じる　下面に牛の足跡あり　第4-1-3面7741溝埋土
18　5BG5/1青灰　中砂～粗砂混シルト　シルトが偽礫状を呈する部分あり　第4-2層
19　N3/0暗灰　シルト　淘汰良い　有機物粒含む（暗色帯）　第5層
20　10BG5/1青灰　シルト　淘汰良い　第5b層

図 660　13 － 5 区　坪境部分断面

の最下部から出土した土師器皿で、ほぼ完形に復元できた。Aa タイプに属し、11 世紀後半～ 12 世紀初頭のものと思われる。7 ～ 16 は 7741 溝の埋土下層から出土したものである。7 は山茶椀の破片の可能性があり、高台の形状から 11 世紀後半～ 12 世紀前半に属すると推定される。8・9 は土師器皿である。形態的には Aa タイプであり、口縁端部外面は一段ナデである。11 世紀後半～ 12 世紀初頭に属する可能性が高い。10 も Aa タイプに属する土師器皿で、口縁端部外面は二段ナデである。11 世紀末～ 12 世紀初頭のものと思われる。11 は 5 区東側側溝掘削中に出土したもので、出土時の観察所見から 7741 溝の下層に含まれていたと考えられる。Bb タイプに属する土師器皿で、11 世紀後半に属する。12 は B タイプに近い形状の土師器皿であるが、口縁端部はつまみ上げられていない。11 世紀後半のものと思われる。13・14 は黒色土器 B 類椀の口縁部片、15 は高台部分の破片であり、11 世紀前半～中頃のものである。16 は平瓦の破片であり、凹面に布目痕、凸面に縄目タタキが認められる。側面には二次的に研磨された面が 2 面認められ、破片となってから研磨具に転用されたと推定される。

以上の遺物からみて、7741 溝の時期は、11 世紀後半～ 12 世紀初頭と推定される。ただし、黒色土器 B 類椀の存在から、掘削時期が 11 世紀中頃まで遡る可能性もある。また、7721 溝最下部出土の 6 も同時期であり、7741 溝埋没後すぐに 7721 溝が掘削された可能性が高い。

なお、03 － 6 調査地の報告書（奥村編　2008）では、層序の記述（9 ページ）において「第 9 層」（5 区の第 4 － 1 － 3 層）出土土器の下限を「11 世紀後半」としているが、「第 9 層」出土遺物の記述（15 ～ 16 ページ）には 12 世紀中～後葉の瓦器椀が含まれている。台帳で確認したところ、これは「第 8 － 2 層・第 9 層」出土として登録されており、第 4 － 1 － 2 層に含まれていた可能性がある。

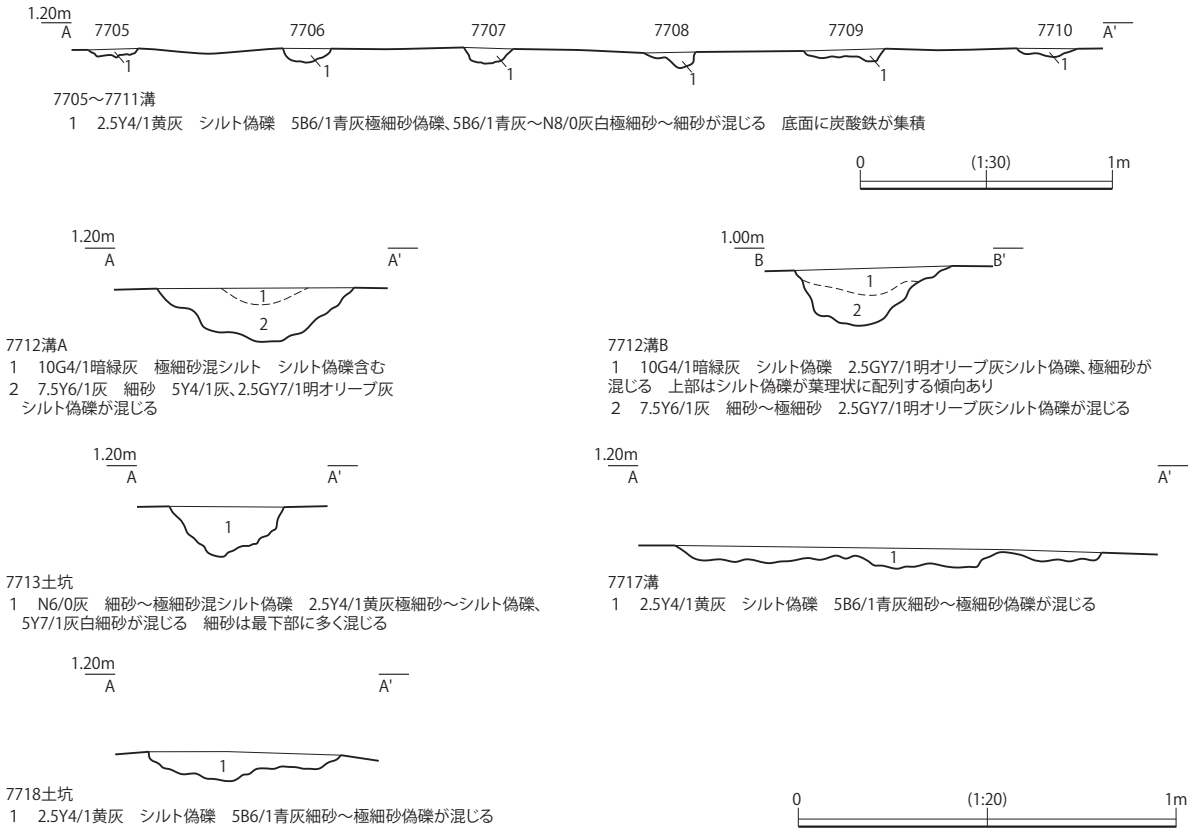


図 661　13－5区　第4－1b面遺構断面

第4－1面（5区南部・8区）

5区南部では、第3－3b層が残存していない部分が多く、第3－3層段階の耕作の影響で第4－1面の遺存状況は悪かった。また、8区においても、北西部で第3－3層最下部に有機物薄層が認められただけであり、状況としては5区南部と同様であった。そのうえ、第3－3層から第4－1層にかけての範囲は地震による変形構造が著しかった。このため、第4－1面に帰属する遺構は検出されなかった。

第4－1b面（5区南部・8区、図 659・661、図版 49）

5区のうち、坪境よりも南側においては、第4－1層は細分されなかった。また、第4－1層段階の耕作によって第4－2層が削られた部分では、第4－1層を除去した段階で第5b層が露出し、第4－1b面（第4－1層下面）から第4－2b面（第4－2層下面）に帰属する遺構が同時に検出された。なお、この場合、第5b面に帰属する遺構も検出されるはずであるが、5区南部にはその面の遺構は存在しなかった。

第4－1b面の遺構には、7705～7711 溝、7712・7717 溝、7713・7718 土坑がある。

7705～7711 溝は調査区西端にわずかにかかっていたものである。西壁断面では 7710 と 7711 の間にも溝と思われる浅い落ちが確認でき、0.5 m程度の間隔で平行にのびる溝群であったと推定される。遺存した深さが 0.05 m前後と浅く、不明な点が多いものの、畠の耕作痕の可能性が考えられる。

7712 溝は調査区南端を東西方向にのびるもので、幅 0.5～0.8 m、深さ 0.1～0.2 mである。埋土は2層に分かれ、このうちの下層は加工時形成層と考えられる。なお、この溝の西半には、北から合流する溝状の落ちが2つ検出された。7717 溝は北北東から南南東にのびて 7712 溝に合流するもので、幅 0.8～1.1 m、深さ 0.05～0.1 mである。埋土は第4－1層起源のシルトの偽礫と第5b層起源の細砂～極細砂の偽礫が混じるもので、地震による変形構造が顕著に認められた。なお、この溝を完掘し

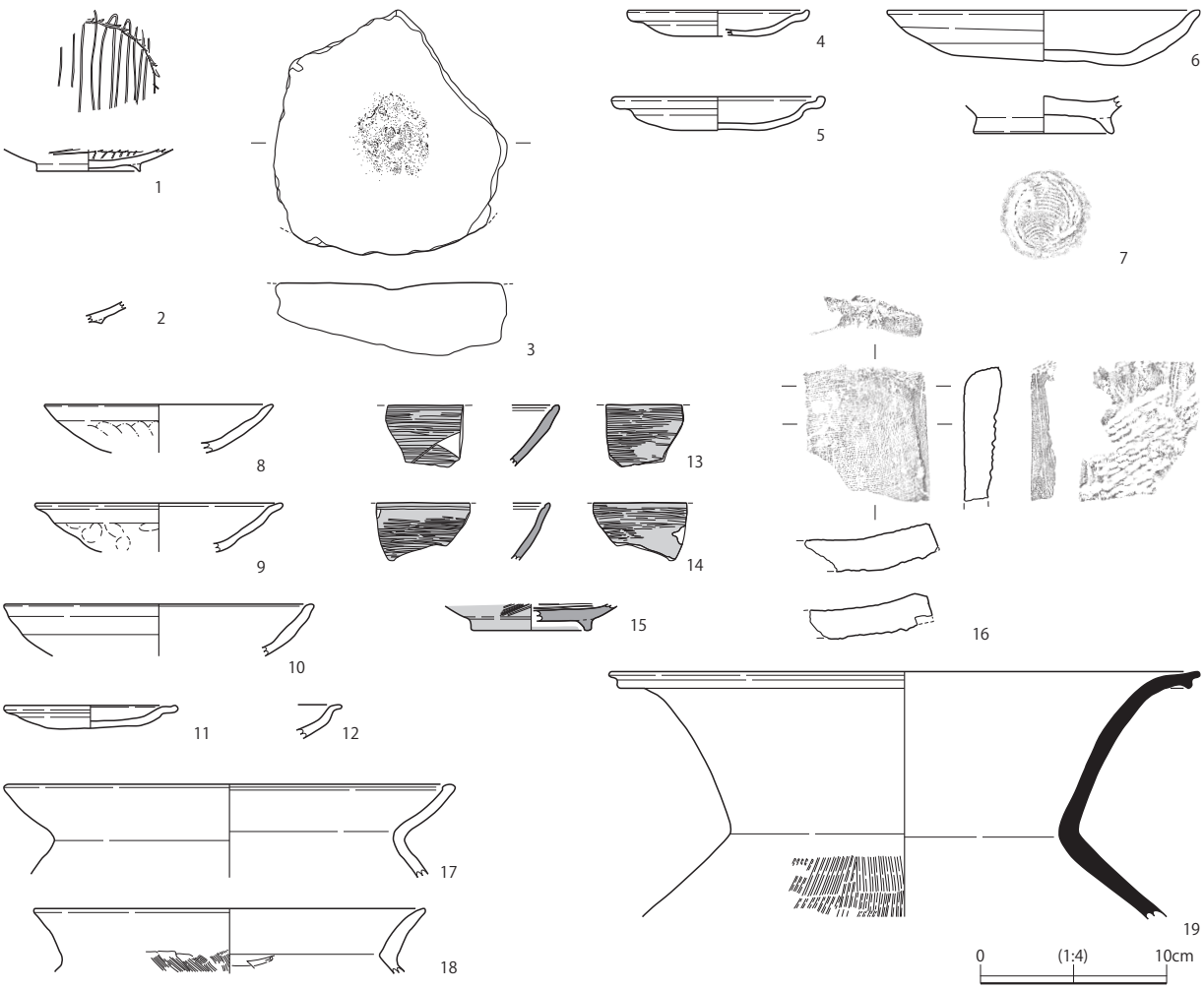


図 662　13－5・13－8区　第3－3層他出土遺物

たところ、底面において 7719 柱穴（図版 49）を検出した。これは、後述する掘立柱建物 32 の柱穴である。

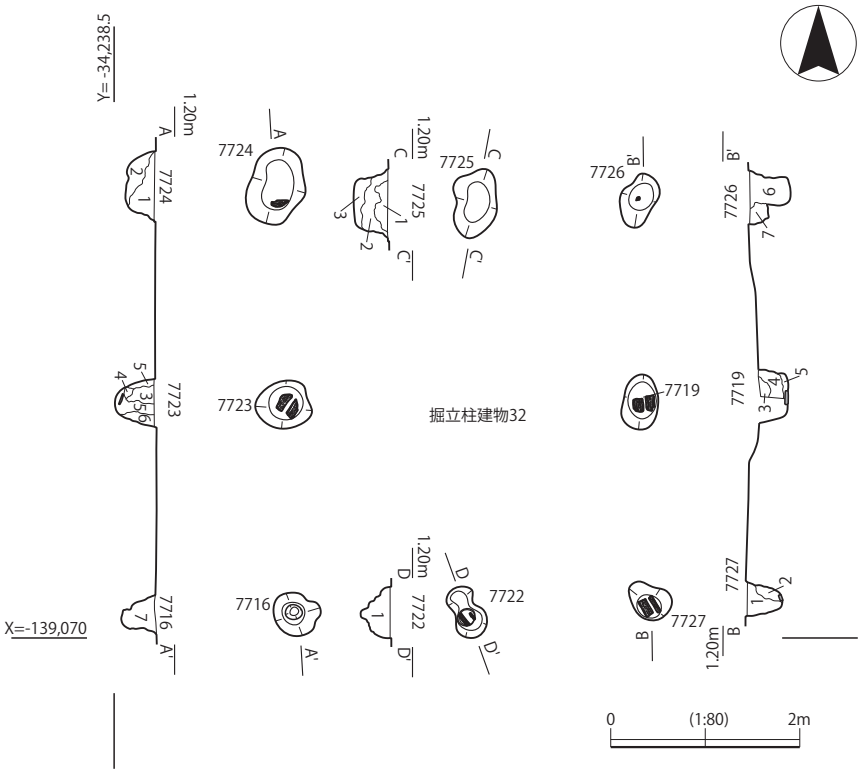
7713 土坑は 7712 溝の北側で検出された。直径 0.3 m、深さ 0.1 mであり、埋土は第 4 － 1 層・第 4 － 2 層・第 5 層起源の偽礫が第 5 b － 1 層起源の細砂と混じっていた。7718 土坑は 7717 溝と 7712 溝の合流地点の南側で検出された。長径 0.9 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 mであり、埋土は第 4 － 1 層起源のシルトの偽礫と第 5 b － 1 層起源の細砂～極細砂の偽礫が混じるものであった。

一方、8 区においては 7905 溝を検出した（図 665）。8 区には第 4 － 2 層と第 5 層は残存していなかったため、第 4 － 1 層を除去して検出した遺構は、第 4 － 1 b 面・第 4 － 2 b 面・第 5 b 面のいずれかに帰属すると思われる。この溝に関しては、埋土に第 4 － 1 層起源の偽礫が含まれていたため、第 4 － 1 b 面に帰属する遺構と判断した。この溝の規模は長さ 1.8 m、幅 0.7 ～ 0.8 m、深さ 0.1 mで、東西方向にのびていた。なお、8 区南東部における第 4 － 1 b 面は東へ向かって緩やかに下がっていた。この形状は第 4 － 1 層段階の耕作によって形成されたものである。

5 区南部と 8 区の第 4 － 1 層からの出土遺物は少なく、図化できたものは図 662 － 4 だけである。5 区南半部から出土した土師器皿であり、Bc タイプに属し、12 世紀初頭のものと思われる。

第 4 － 2 b 面

5 区南部では、第 4 － 1 層を除去した段階で第 5 b 層が露出した部分も多かったが、東側には第 4 －



掘立柱建物32A
1　5BG6/1青灰　シルト偽礫　N5/0灰シルト偽礫、5Y7/1灰白極細砂～細砂が混じる
2　5Y7/1灰白　極細砂　5BG6/1青灰シルト偽礫、N5/0灰シルト偽礫が混じる
3　5Y7/1灰白　細砂～極細砂　5BG6/1青灰シルト偽礫が混じる　N5/0灰シルト偽礫が若干混じる
4　5BG6/1青灰　シルト偽礫　5Y7/1灰白細砂～極細砂が混じる　N5/0灰シルト偽礫が若干混じる
5　5BG6/1青灰　シルト偽礫　N5/0灰シルト偽礫、5Y7/1灰白極細砂～細砂が混じる
6　5Y7/1灰白　細砂～極細砂　5BG6/1青灰シルト偽礫が混じる　N5/0灰シルト偽礫がわずかに混じる
　柱抜き取り前の堆積物か？
7　N5/0灰　シルト偽礫　5BG6/1青灰シルト偽礫、5Y7/1灰白細砂～極細砂が混じる

掘立柱建物32B
1　N4/0灰　シルト偽礫　5B6/1青灰シルト偽礫、5Y7/1灰白細砂～極細砂が混じる
2　5Y7/1灰白　細砂～極細砂　5B6/1青灰シルト偽礫、N5/0灰シルト偽礫が混じる
3　5Y7/1灰白　細砂～極細砂　5BG6/1青灰シルト偽礫が混じる　N4/0灰シルト偽礫がわずかに混じる
4　5BG6/1青灰　シルト偽礫　N4/0灰シルト偽礫が混じる　5Y7/1灰白細砂～極細砂が若干混じる
　シルト偽礫は層界に沿うように配列する傾向あり
5　5Y7/1灰白　細砂～極細砂　シルト偽礫が若干混じる
6　N4/0灰　シルト偽礫　5BG6/1青灰シルト偽礫、5Y7/1灰白細砂～極細砂が混じる　砂は上部に多く混じる
7　5Y7/1灰白　細砂～極細砂　N4/0灰シルト偽礫、5BG6/1青灰シルト偽礫が混じる　シルト偽礫は
　5mm以下のものが多い

掘立柱建物32C
1　5BG6/1青灰　シルト偽礫　N4/0灰シルト偽礫、5Y7/1灰白細砂～極細砂が混じる
2　5BG6/1青灰　シルト偽礫　N4/0灰シルト偽礫が混じる　5Y7/1灰白細砂～極細砂が若干混じる
3　5Y7/1灰白　細砂～極細砂　5BG6/1青灰シルト偽礫が混じる　N4/0灰シルト偽礫が若干混じる

掘立柱建物32D
1　N5/0灰　シルト偽礫　5BG6/1青灰シルト偽礫、5Y7/1灰白細砂～極細砂偽礫が混じる

図 663　13 － 5 区　掘立柱建物 32 平・断面

２層が残存していた。第４－２層を除去すると柱穴が検出され、掘立柱建物 32 が認識できた（図 664）。

掘立柱建物 32（図 663）は、桁行 4.4 ～ 4.6 m、梁間 3.8 ～ 3.9 mの規模を有する２間×２間の建物で、主軸はＮ１°Ｗである。埋土の状況からみて、柱はすべて抜き取られたようである。また、柱穴のうち 7716・7725 柱穴以外の６基には、礎板が残存していた。柱穴からは土器片が数点出土しただけであり、時期は不明であるが、正方位に則っているため、隣接する 03 － 6 調査区で検出された８世紀後半～９世紀の建物群と同時期のものである可能性が高い。

第５ｂ面（図版 49）

５区北半部では第５層が比較的広い範囲に残存しており、第５ｂ面に帰属する遺構が検出された。検出された遺構は溝 10 条、土坑７基である（図 664）。

まず、溝から説明する。7728 溝は幅 0.8 ～ 2.5 m、深さ 0.3 ～ 0.4 mで、南東－北西方向にのびていた。この溝の埋土は３層に細分される。そのうち、最下部は加工時形成層と考えられるもので、この上に有機物薄層を挟在するシルトが堆積したのち、有機物を含んで暗色を呈するシルトによって完全に埋積された。なお、この溝には土器片が集中する部分が認められた（図 664）。これらは加工時形成層の直上付近に分布していた。土器片は同一個体のものと思われるが、遺存状況が悪く、ほとんど接合しなかった。図 662 － 18 はその口縁部を図化したものであり、古墳時代中期の土師器甕と思われる。

また、この溝の周囲からはほぼ同じ方向にのびる溝を８条検出した。これらは、深さが 0.05 m前後の浅い溝である。7728 溝を挟んで南西側のもの（7729・7730・7731・7732・7733 溝）はほぼ平行して分布していた。また、北東側のもの（7737・7739・7740 溝）は散漫に分布し、7737 溝の北

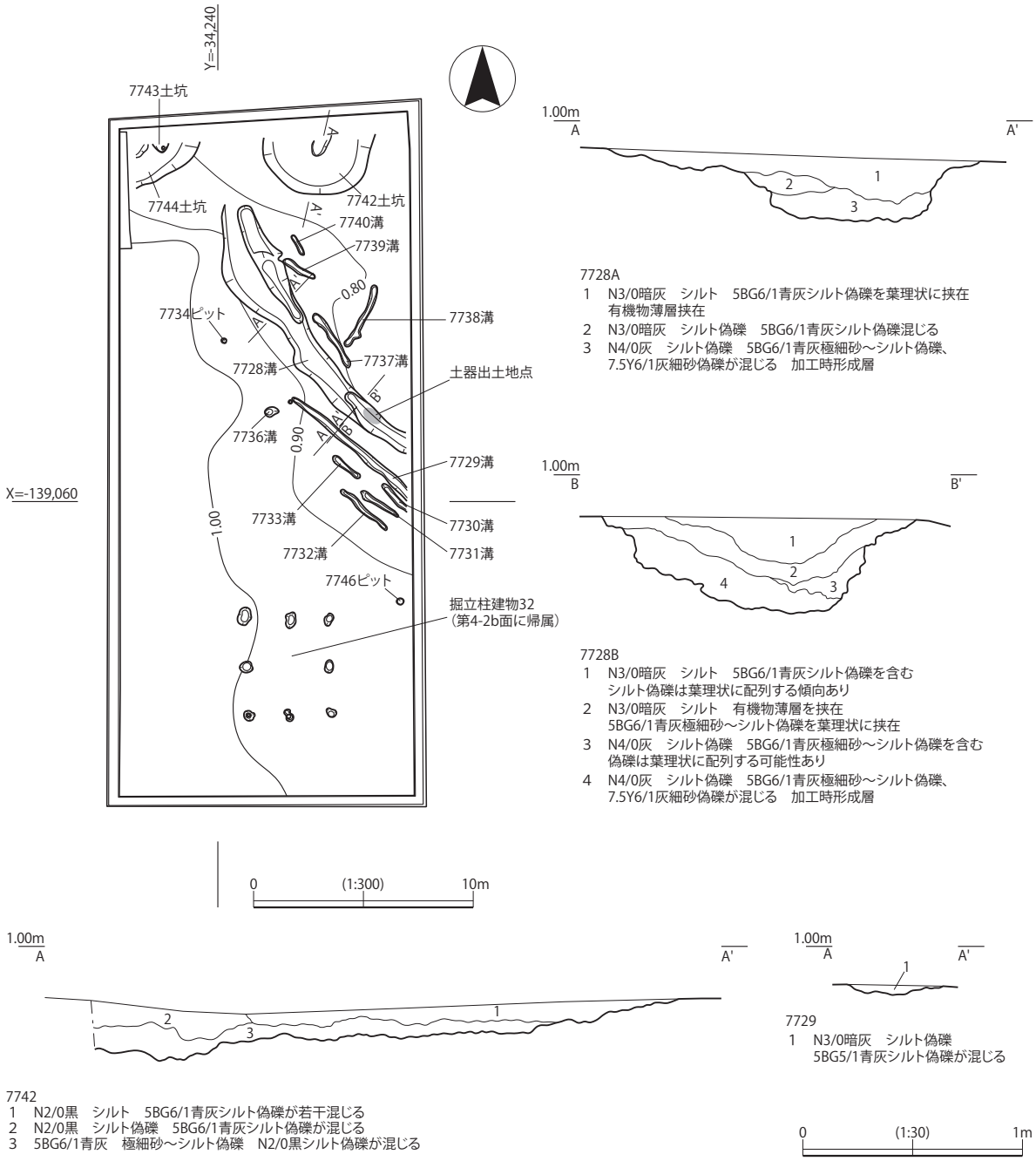


図 664　13 － 5 区　第 4 － 2 b 面・第 5 b 面平面・遺構断面

東には南南西－北北東方向にのびる 7738 溝（深さ 0.08 m）も検出された。

5 区北端においては、7742 ～ 7744 土坑を検出した。7742 土坑は北半が調査範囲外にのびるが、検出された範囲では長径約 5 mである。深さは 0.2 m程度の部分が多いものの、中央付近は一段低くなり、深さが約 0.4 mとなっていた。7744 土坑は 5 区北西隅で検出されたもので、大半が調査範囲外にあたっていた。検出された範囲では長さ 3.5 m以上、深さ 0.3 mである。ただし、中心に近い位置は一段低くなっており、その部分の深さは 0.4 mであった。西側側溝掘削中に図 662 － 19 が出土したが、これはこの部分に含まれていたと考えられる。須恵器甕であり、古墳時代中期に属する。なお、7743 土坑は 7744 土坑の底面が 0.2 mほど下がる部分にあたり、この土坑と一連の遺構と思われる。

そのほか、5 区から検出された遺構としては、7734 ピット・7736 溝・7746 ピットがある。これ

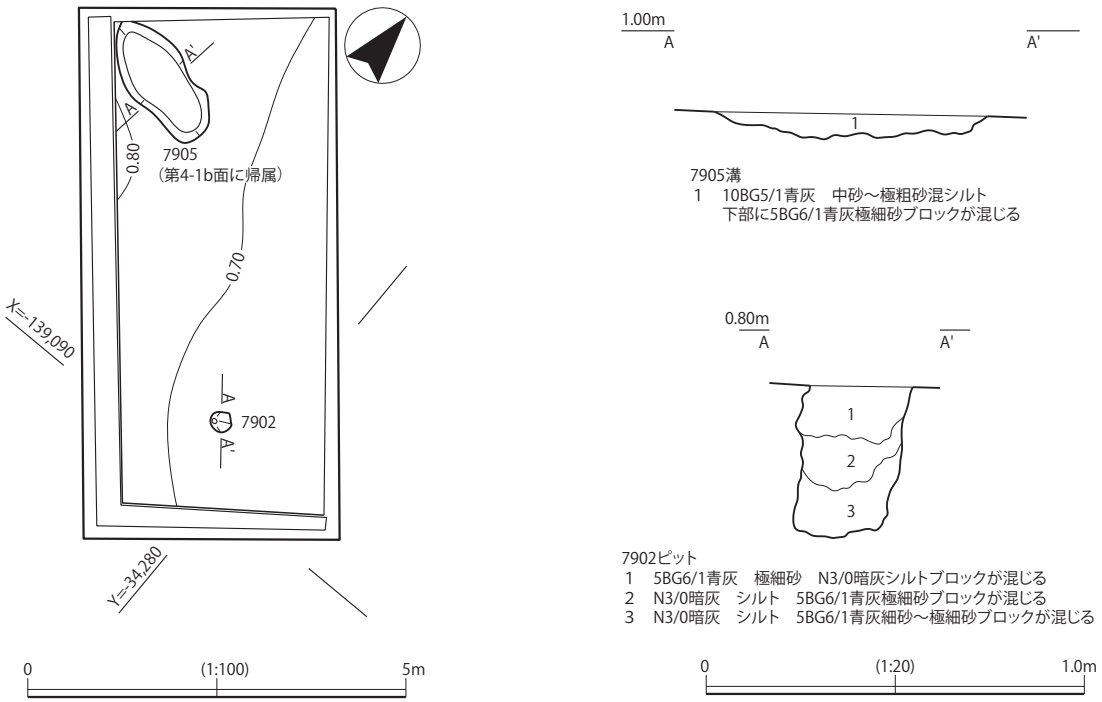


図 665　13 － 8 区　第 4 － 1 b 面・第 5 b 面平面・遺構断面

らの深さは 0.05 ～ 0.1 m程度である。さらに、7736 溝に関しては埋土が第 5 層そのものであり、下部に偽礫を顕著に含まないことから、人為的な遺構ではない可能性がある。

8 区で検出された第 5 b 面に帰属する遺構は、7902 ピットのみである（図 665）。また、南西壁断面（425 トレンチ断面）においては遺構が 2 つ認められた（図 658）が、いずれも側溝内で収束し、平面では検出されなかった。7902 ピットは、直径 0.3 m、深さ 0.6 mである。その埋土は 3 層に細分され、それらすべてに第 5 層と第 5 b 層起源の偽礫が含まれていた。なお、この遺構はやや斜めに掘り込まれていたため、底面から上の約 0.2 m分は断面ラインから外れてしまった。

5 区においては、第 5 層中から遺物が若干出土した。図 662 － 17 はそのうちのひとつで、布留形甕の口縁部片である。古墳時代前期後半～中期前葉に属する。

第 5 b 層

ここでは、第 5 b － 1 ～ 5 b － 3 層の状況を下層から順に説明する。

第 5 b － 3 層はシルトで、ヒシの種実を多く含んでいた。この堆積物は水深の深い状況下で堆積したと考えられ、この時期に調査区周辺では水位が上昇した可能性が高い。なお、この層準からは弥生時代中期に属する可能性のある土器片が 1 点出土した。

第 5 b － 2 層にもヒシの種実が多く含まれており、水位の高い状態が継続したと推定される。ただし、この層準は上方粗粒化した氾濫堆積物であり、河川の影響を受けていたと思われる。後述するように、第 5 b － 1 層下部の段階では、 5 区の東側に存在する流路から供給された堆積物によって地形形成がなされており、この流路は既に第 5 b － 2 層段階には存在していた可能性がある。

また、第 5 b 面の等高線（図 664）からは、5 区の南西部が高く、そこから北東方向へ緩やかに下がっていたことが読み取れる。第 5 層段階の遺構形成や第 4 － 1 層段階の耕作による影響も考慮する必要があるが、その起伏は第 5 b － 1 層下部の層相変化と対応しており、本来の形状を反映していると思われる。第 5 b － 1 層下部の粒径の側方変化や古流向を考慮すると、 5 区の東側に存在する流路から供給さ

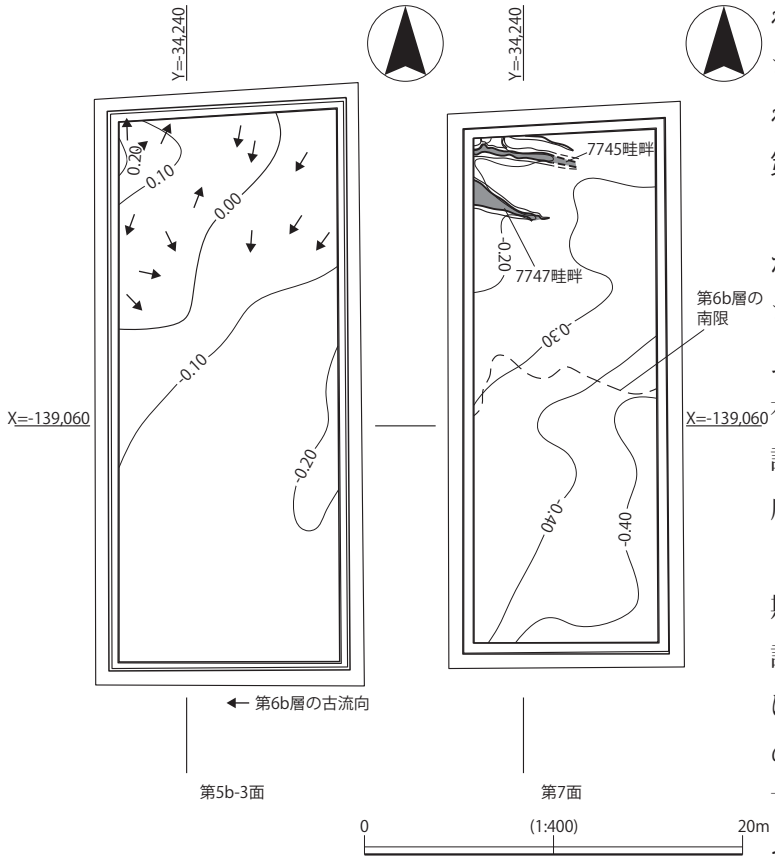


図 666　13－5区　第5ｂ－3面・第7面平面

れた氾濫堆積物によって高まりが形成され、その一部が5区南西部で検出されたと推測される。

第6層・第6ｂ層

この層準は5区北半で確認されたが、今回の調査では遺構・遺物は検出されなかった。ただし、この層準は讃良郡条里遺跡西部の地形形成や遺構分布を理解するうえで重要であるため、調査では隣接する 03 － 6 調査地の層序も合わせて検討をおこなった。

03 － 6 調査地では弥生時代中～後期の層準として、「第 13 ～ 15 層」が設定されている。このうち、「第 13 層」は上部に形成された古土壌とその下位の砂、「第 14 層」は上部のシルトと下部の砂から構成される。報告書ではその分布状況が詳しく記述されていないため、調査データを確認したところ、同調査地 1 区から 3 区にかけて蛇行して北東から南西にのびる流路が存在したこと、そしてその周囲でのみ「第 13 層」と「第 14 層」が認められ、それ以外の場所では「第 13 層」しか存在しなかったことが判明した。また、03 － 6 調査地西部にはこれらの砂が分布せず、5区南半部と類似した状況の箇所があったことも明らかになった。層相の類似性から、「第 13 層」上部の古土壌が5区の第6層、「第 13 層」下部が第6ｂ層、「第１５層」が第7層に対比される。なお報告書では、弥生時代中期後半の土器が出土した「第 15 面」の溝が「第 14 面」にも踏襲されたとされているが、「第 14 面」では「第 15 面」の溝は完全に埋没しており、溝の両脇の高まりも「第 14 面」には存在しなかったことが判明した。

第5ｂ－3面（第5ｂ－3層上面）の等高線（図 666）をみると、5区北西部が高くなり、そこから南東に向かって下がっている。これは、第6ｂ層の堆積によって形成された微起伏を反映している。第6ｂ層ではプラナー型斜交層理が明瞭にみられたため、その古流向をクリノコンパスで計測し、座標北を基準にした角度に換算したうえで、この等高線図に矢印で示した。これによれば、この砂は5区北西隅付近から放射状に供給された部分と、5区北東隅から南南西方向に供給された部分によって構成されていた。前者は第7面で検出された2本の畦畔の間を流れる水によって供給されたと推定され、流れの中心部分では砂の上面がやや盛り上がっていた。このような形状や堆積構造からみて、これらは5区の北側にあたる 03 － 6 調査地の流路から供給されたクレバススプレー堆積物と考えられる。

第7面（図 666、図版 49）

この面は、第6ｂ層の砂を除去することで検出した。この砂は5区北半にしか存在しなかったが、その部分で畦畔を2条検出した。また、その周囲からは人の足跡が多数検出された。

検出された畦畔は、北側のものを 7745 畦畔、南側のものを 7747 畦畔とした。両者はほぼ平行して西北西－東南東方向にのびており、両者の間隔は 1.5 ～ 2.5 mである。7745 畦畔の北には畦畔が取りつくようにみえる部分もあったが、検出された範囲が狭く、7745 畦畔に比べてかなり低いため、畦畔とは断定できなかった。第７面における畦畔配置の詳細は不明であるが、第７層上面を覆う砂（第６ｂ層）を運搬した主要な水流がこれらの畦畔間を流れたことからすれば、２本の畦畔が平行して配置されたのは、水田域内の水回りと関連していた可能性がある。なお前述したように、03 － 6 調査地では、この面に対比される第 15 面において、両脇に畦畔を伴い、北東から南西に流れる溝が検出されている。５区はその延長に位置しており、03 － 6 調査地と５区の間が水田域となっていたと考えられる。第７層の出土遺物は、閃緑岩の礫１点のみである。その大きさは 14.6 × 9.7 × 7.2cm、重量は 131.9 g である。表面には平滑な面が存在するが、研磨されたかどうかは不明である。この礫は第７層を構成するシルトや極細砂と同じ営力では運搬されないため、人為的に持ち込まれたと推定される。

第８面・第９面

第８面・第９面からは遺構は検出されなかった。また、第８層からは遺物も出土しなかった。

第３項　まとめ

13 － 5・８区では、遺構・遺物とも比較的少なかったものの、周辺調査区との層序対比をおこない、各層準の時期をある程度推定できたほか、既往の調査地における層序の問題点も明らかにでき、その訂正のための手がかりが得られた。最後に、周辺調査地との層序関係をまとめておきたい（表２）。

まず、第１層から第３－３層に関しては、09 － 1 調査地および 03 － 6 ・06 － 3 調査地との関係が時期推定の手がかりとなる。第１－１層は、18 世紀後半の磁器が出土した 09 － 1 調査地の第２－１層に対比される。また、第１－２層は 09 － 1 調査地「第２－２層」、03 － 6 調査地「第２・３層」に対比され、前者からは 17 世紀前半の瀬戸美濃天目茶碗、後者からは 16 世紀後半の土器が出土した。さらに、第２層に対比される 03 － 6 調査地「第５層」からは、15 世紀後半の瓦質火鉢が出土した。ただし、これらの遺物は少量のため、地層の時期よりも古い可能性も否定できない。

今回の調査では、８区の第３－２層からは 13 世紀後半、５区の第３－３層からは 12 世紀後半～ 13 世紀前半の瓦器椀の破片が出土した。しかし、第３－３層に対応する 09 － 1 調査地「第４－２層」からは 13 世紀後半の瓦器椀の破片が出土しており、今回の出土土器は地層の時期を示さない。

第４－１層に関しては、５区において坪境の溝から土器がまとまって出土したことから、時期推定の手がかりが得られた。これによれば、第４－１－３層上面 7741 溝が 11 世紀後半～ 12 世紀初頭と推定される。また、第４－１－２ｂ面 7721 溝の最下部出土土器からみて、第４－１－２ｂ層によって 7741 溝が埋没し、7721 溝が掘削された時期も 11 世紀後半～ 12 世紀初頭の中におさまると思われる。ただし、第４－１－２層の継続期間や第４－１－１層の時期については不明な点が多い。

第４－２層は、03 － 6 調査地第 10 － 1 層、09 － 1 調査地第５－２層に対比される。今回は遺物がほとんど出土しなかったが、これらの調査地から出土した遺物によって８世紀～ 11 世紀前半と推定される。また、第５層の時期は、５区および 03 － 6 ・09 － 1 調査地の出土遺物から古墳時代前～後期と思われる。

次に、第６ｂ層～第５ｂ－１層の状況をみていきたい。その時期は、03 － 5 ・03 － 6 調査地などの成果から、弥生時代後期から庄内式期と推定される。その堆積過程を整理すると、まず 06 － 3 調査区に存在した流路から供給された第６ｂ層が５区北部に高まりを形成した。高まりの上には土壌（第６層）

表２　13－５・13－８区と周辺調査地との層序対比

<table>
<tr><th>11-1-2-2区
（66tr.）</th><th>03-6・06-3
調査地</th><th colspan="2">13-1-5・8区</th><th>09-1調査地</th><th>03-5-10区</th><th>03-5-2区</th><th>03-5-8区</th><th>03-5-4区</th><th>03-5-5～7区</th><th>時　期</th></tr>
<tr><td>現代作土</td><td>現代作土</td><td colspan="2">現代作土</td><td>1</td><td colspan="5">現代作土</td><td>近・現代</td></tr>
<tr><td>1-1</td><td>1</td><td colspan="2">1-1</td><td>2-1</td><td colspan="5" rowspan="22">1</td><td>—</td><td>〈18世紀後半〉（c）</td></tr>
<tr><td>—</td><td>〔砂〕</td><td colspan="2">—</td><td>—</td><td>〔砂〕</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">—</td><td rowspan="2">2・3・4</td><td colspan="2">1-2</td><td>2-2</td><td rowspan="2">1-1・〔砂〕</td><td>〈16世紀後半～17世紀前半〉
（a・c）</td></tr>
<tr><td colspan="2">1-3</td><td>2-3</td><td></td></tr>
<tr><td>1-3</td><td>5</td><td colspan="2">2</td><td>3</td><td rowspan="3">1-2</td><td>〈15世紀後半〉（a）</td></tr>
<tr><td>1-3の細分</td><td>6</td><td colspan="2">3-1</td><td rowspan="2">4-1</td><td></td></tr>
<tr><td>—</td><td>7</td><td colspan="2">3-2</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="4">2-1</td><td rowspan="2">—</td><td colspan="2">3-3</td><td rowspan="2">4-2</td><td>溝33はこの
層準の下面？</td><td>〈13世紀後半〉（c）</td></tr>
<tr><td colspan="2">3-3b</td><td>—</td><td></td></tr>
<tr><td>8-1</td><td>4-1-1</td><td rowspan="4">4-1</td><td rowspan="4">5-1</td><td rowspan="2">1-3</td><td></td></tr>
<tr><td>8-2</td><td>4-1-2</td><td>〈12世紀中～後葉？〉（a）</td></tr>
<tr><td>—</td><td>8-2b</td><td>4-1-2b</td><td>—</td><td>11世紀後半～12世紀初頭
（b）</td></tr>
<tr><td>3-1</td><td>9</td><td>（4-1-3）</td><td>1-5</td><td>11世紀後半～12世紀初頭
（a・b）</td></tr>
<tr><td>—</td><td>10-1</td><td colspan="2">4-2</td><td>5-2</td><td>—</td><td rowspan="2">８世紀～11世紀前半
（a・c）</td></tr>
<tr><td>—</td><td>（10-2）</td><td colspan="2">—</td><td>—</td><td>—</td></tr>
<tr><td>4-1？</td><td>（11-1）</td><td colspan="2">—</td><td>—</td><td>—</td><td>６世紀～７世紀前葉（a）</td></tr>
<tr><td>5-1</td><td>（11-2）</td><td colspan="2">5</td><td>6</td><td colspan="5">2a</td><td>４世紀～６世紀（a・b・c）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">5-2b</td><td rowspan="4">12</td><td colspan="2">5b-1上部〔泥〕</td><td rowspan="19">未調査</td><td>2bの一部</td><td>2b</td><td>2b・2b-1</td><td>2bの一部</td><td>2b</td><td rowspan="4">弥生時代後期（～庄内？）
（a）</td></tr>
<tr><td colspan="2">—</td><td>—</td><td>3-1a</td><td>—</td><td>—</td><td>（27層）1）</td></tr>
<tr><td colspan="2">5b-1下部〔砂〕</td><td rowspan="2">2b・3-1b</td><td rowspan="2">3-1b〔砂〕</td><td rowspan="2">2b-2</td><td rowspan="2">2b・3-1b</td><td rowspan="2">3-2b〔砂〕</td></tr>
<tr><td colspan="2">5b-2・3</td></tr>
<tr><td rowspan="2">5-2b？</td><td>13上部</td><td colspan="2">6</td><td>—</td><td>—</td><td>3-2a</td><td>3-2a</td><td>（31層）1）</td><td rowspan="2">〈弥生時代後期前半？〉
（a）</td></tr>
<tr><td>13下部・（14）</td><td colspan="2">6b</td><td>3-1b最下部？</td><td>3-1b〔泥〕</td><td>3-2b〔泥〕</td><td>3-2b〔砂〕</td><td>3-2b〔泥・砂〕</td></tr>
<tr><td>6-1・2</td><td>15</td><td colspan="2">7</td><td>3-2a</td><td>3-2a</td><td>3-3a</td><td>3-3a</td><td rowspan="2">3-3a・b 2）</td><td>弥生時代中期中葉～後葉
（a）</td></tr>
<tr><td>6-4b</td><td>15b</td><td colspan="2">—</td><td>3-2b〔砂・泥〕</td><td>3-2b〔砂〕</td><td>—</td><td>—</td><td></td></tr>
<tr><td>7-1・7-2</td><td rowspan="4">未調査</td><td colspan="2" rowspan="3">8</td><td>3-3a</td><td>3-3a</td><td rowspan="3">—</td><td rowspan="3">3-4a</td><td rowspan="3">—</td><td rowspan="3">〈弥生時代前期～中期前葉〉</td></tr>
<tr><td>—</td><td>（3-3b）</td><td>3-3b</td></tr>
<tr><td>8-1</td><td>3-4a</td><td>（3-4a）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">10</td><td colspan="2">9</td><td colspan="5" rowspan="4">4</td><td>〈縄文時代晩期〉</td></tr>
<tr><td colspan="2">10</td><td rowspan="3">〈縄文時代後期～晩期〉</td></tr>
<tr><td colspan="2">11</td></tr>
<tr><td colspan="2">12</td></tr>
</table>

※時期の推定は主に、13-1-5区・03-6調査地・09-1調査地の遺物にもとづく。a・b・cは時期推定の根拠となる土器が出土した調査地（a：03-6調査地、b：13-1-5区、c：09-1調査地）。

※時期の欄で〈　〉をつけたものは、遺物量が微量などの理由により不確定要素を含むもの。

※層準のうち、（ ）を付したものは、部分的に遺存していたもの。

1）この層名は、（森本編　2009）の図10-1（X＝-138,820ライン）の注記番号。　　2）「3-３b」とされた層準は細分され、擾乱された層準を３つ程度含む。

が形成されたが、第６ｂ層が堆積しなかった部分は第７層が露出した状態になっていた。なお、11－１－４区断面（図 10・11）の「第５－２ｂ層」に含まれている「20 ～ 24 層」（砂）の上には、土壌が形成されたことが写真で確認できる。この土壌は５区の第６層に、「20 ～ 24 層」は第６ｂ層に対比される。

第６層の上には第５ｂ－３層のシルトが堆積した。この層準にはヒシの種実が多く含まれており、水位が上昇して沼沢地となったと推定される。第５ｂ－２層にもヒシの種実が多く含まれており、水深の深い状態が続いたと考えられるが、この堆積物は氾濫堆積物であり、この段階で５区の東側に流路が出現した可能性がある。第５ｂ－１層下部になると堆積物の粒径が粗くなり、ヒシの種実は含まれなくなる。これは、流路の影響が強くなったことを示している。この堆積物は、粒径の側方変化や古流向からみて、５区の東側に存在した流路から供給されたと考えられる。

第７～９層に関しては、それと酷似する状況が 03 －５調査地東部（03 －５－４～８区）で確認されていることが注目される。この部分では、「第３－３a 層」上面（「第２－３面」）において弥生時代中期後葉の水田が検出された。この層準の層相は第７層、さらにその下の「第３－４a 層」は第８層、「第４層」は第９層に酷似している。また、03 －５－４・８区では「第３－３a 層」を覆う堆積物の上に「第３－２a 層」と呼ばれる土壌が形成されたが、これは５区の第６層に対比される。さらに 03 －５－８区では、軟Ｘ線写真を用いた堆積相解析（７地点）の結果、「第３－２ｂ層下部」が含水塑性変形ユニットとなっており、これより上位に地震発生層準が存在することや、「第３－３a 層最上部」が液相流動変形ユニット、「第３－３a 層下部」以下が含水塑性変形ユニットにあたり、「第３－３a 層」上面段階にも地震が発生したことが推定されている。これらは５区の第５ｂ－３層上面段階と第７層上面段階に発生した地震に対比できる。

一方、今回調査された 11 －１－４区の「第６－５ｂ面」は、遺構の検出状況からみて、隣接する 03 －５－ 10 区の「第２－２ｂ面（第３－２a 層下面）」に対応すると思われる。したがって、同区の「第２－２面（第３－２a 層上面）」が 11 －１－４区の「第６－１面」に対応する。「第６－１層」は５区の第７層に対応するので、５区の第７層と 03 －５調査地南西部（03 －５－２・10 区）の「第３－２a 層」が対比されることになる。また、03 －５－２・10 区における「第３－３a・４a 層」は、５区の第８層にあたる堆積物がシルト層を挟在することによって細分された、と理解できる。同様に、11 －１調査地の「第７層」と「第８層」も５区の第８層が細分されたものと思われる。しかし、そのように考えると、前述した 03 －５調査地東部との層序対比とは矛盾する。さらに、11 －１調査地の「第６－１面」に対応する 03 －４調査地の「第８a －１面」と 03 －５調査地の「第２－２面」をつなぐと、両者が接する部分で後者側が 0.5 ｍも高くなり、矛盾が生じる。こうした矛盾は、03 －５調査地の中で層序対比に誤りがあることを示している。つまり、その南西部における「第３－２ｂ層」は 11 －１－４区の「第６－５ｂ層」に対比できるが、東部で「第３－２ｂ層」とされたものは 11 －１－４区の「第５－２ｂ層（20 ～ 24 層）」であり、異なる時期の砂礫層を同一の地層と誤認しているのである。そう考えれば、５区の層序と整合的に理解でき、03 －４調査地との高さの違いも解決できる。

03 －５調査地東部における「第３－２ｂ層」は、X=- １38,820 ライン（森本編　2009：図 666 －１）においては東側に厚く堆積し、その上位には土壌が形成された（森本編　2009：図 666 －１の「31 層」）。この層準は５区の第６層に対比される。その上には西側と東側に厚く砂が堆積し、中央付近はやや低くなった。このうち、西側の砂は「第１面」の「流路１」形成以前に存在した流路に関連する堆積物であ

り、周囲に氾濫堆積物を厚く堆積させて河岸を形成していた。「微高地２」とされたものは、主にこの流路の右岸に形成された自然堤防にあたる。このような流路の特徴は 11 －１－２－２区の「第５－２ｂ層」中で認められる流路と共通しており、位置関係からみて、両者は連続する流路であった可能性が高い。さらに、５区の東側に想定される流路も、この流路の分流路と考えられる。一方、この断面の東側でみられる砂は、東へいくにつれてさらに厚くなるが、その部分では「31 層」が残存していないため、その上下の層準を区別することが難しい。この堆積物の古流向は南東→北西であり、西側の堆積物とは供給源が異なっている。また、少なくとも３つの堆積単位に細分され、第６ｂ層と第５ｂ－２層～第５ｂ－１層下部に対比される堆積物が重なっていると考えられる。

X=- 1 38,820 ラインにおいて西側と東側に厚く砂が堆積して低くなった部分は、泥によって埋積された。その泥層の下部には、有機物を含んで暗色を呈する地層（同「27 層」）が存在する。これは、堆積速度が遅くなって植物遺体が多く取り込まれた地層と思われる。その上位の泥を第５ｂ－１層上部に対比させると、「27 層」は第５ｂ－１層下部と上部の境界にあたっており、両者の間に堆積速度の遅くなった時期があることになる。03 －５－２区の「第３－１ａ層」は、上下の層序関係からみてこの層準に対比され、場所によっては明瞭な土壌が形成されていたことがわかる。

また、第９層は 03 －５調査地の「第４層」、03 －４調査地の「第８ｂ層」に対比される。この両調査地の境界付近の層序対比をおこなうと、滋賀里Ⅳ式土器が出土した「第８ｂ－３層」は 03 －５調査地東端までは存在するものの、西側では「第３－３ａ層」に削られて残存しないため、５区の第９層と類似する層準は 03 －４調査区の「第８ｂ－４～５層」にあたる可能性がある。ここでは、第９層の時期を縄文時代晩期（後葉以前）としておく。さらに、第 10・11 層も同様の観点から層序対比すると、第 10 層が 03 －４調査区の「第８ｂ－５層下部」、第 11 層が「第８ｂ－６層（第８ｂ－７～９層が収斂して一体化）」、第 12 層が「第８ｂ－１０層」に対比される。第 12 層の下にある砂層の最上部は 03 －４調査地の「第９a’ 層」に対応し、03 －４調査地の年代測定結果から、縄文時代中期後葉に堆積したと推定される。

（井上智博）

引用文献

伊野近富 1995「土師器皿」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』，真陽社，pp.225 －２44.

奥村茂輝編 2008『讃良郡条里遺跡』Ⅶ，（財）大阪府文化財センター調査報告書第 182 集，166p.

中尾智行・山根　航編 2009『讃良郡条里遺跡』Ⅷ，（財）大阪府文化財センター調査報告書第 187 集，504p.

森本　徹編 2009『讃良郡条里遺跡』Ⅸ，（財）大阪府文化財センター調査報告書第 188 集，488p.

第５章　自然科学分析

第１節　讃良郡条里遺跡出土ガラス小玉の分析

讃良郡条里遺跡から出土したガラス小玉３点については、国立文化財機構奈良文化財研究所の降幡順子氏に依頼し、顕微鏡観察、透過Ｘ線画像解析、蛍光Ｘ線分析装置（EDAX 製 EAGLEIII）を用いた非破壊での成分分析を実施しており、以下の分析結果を賜った。

１）顕微鏡観察から、黄緑色小玉（図444－29）は気泡の量が非常に多く、孔と並行方向に伸びる気泡が確認でき、橙色小玉（図444－28）は両端面に通じる気泡列が、淡青色小玉（図444－30）では孔に平行して並ぶ気泡列が観察できたことから、これら3点のガラス小玉は引き伸ばし法により製作されたと考えられる。また、透過Ｘ線画像から、橙色小玉の内部には周囲よりもやや密度の高い粒子状の部分が散在していることが観察できる。

２）蛍光Ｘ線分析結果から、二酸化ケイ素（SiO_2）、酸化ナトリウム（Na_2O_3）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化鉄（Fe_2O_3）、酸化チタン（TiO_2）、酸化銅（CuO）、酸化鉛（PbO）、錫（Sn）、ジルコニウム（Zr）などを検出した。これらの結果から、酸化鉛含有量が顕著に認められないことからアルカリケイ酸塩ガラスであると考えることができる。また酸化ナトリウム、酸化アルミニウムの含有量が多く認められることから高アルミナソーダ石灰ガラスに分類することができる。

高アルミナソーダ石灰ガラスは弥生時代後期からも出土する。これらは古墳時代の高アルミナソーダ石灰ガラスとは基礎ガラスの化学組成が若干異なるという研究報告がされており、それによると弥生時代の高アルミナソーダ石灰ガラスは、酸化アルミニウムが４～６％程度、酸化チタンは0.4％以下であるのに対し、古墳時代の高アルミナソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウムの含有量は８％を超え、酸化チタン含有量も0.4％以上となるものが大半であるという。今回結果は古墳時代の高アルミナソーダ石灰ガラスとより類似しているといえる。

着色剤は、黄緑色半透明のガラス小玉に散在している黄色粒子は人口黄色顔料である錫酸鉛（PbSnO3）であり、これと銅により複合的に黄緑色が得られる。５～６世紀の高アルミナソーダ石灰ガラスの着色に用いられた錫酸鉛の原料は東南アジア産であることが鉛同位体比で示されており、流通はこの時期に多い傾向を示す。橙色不透明のガラス小玉は銅による着色で、コロイド技術が用いられていると考えられている。橙色ガラスの表面の一部および孔内面を覆っている黒色層からは銅と硫黄を顕著に検出した。橙色小玉表面の銅の含有量が高いため風化の影響が大きいことが考えられ、さらに一部の表面は腐食生成物に覆われていることが考えられる。淡青色透明ガラス小玉は１％程度の酸化銅による着色である。これらは古墳時代の高アルミナソーダ石灰ガラスに認められるものである。

このような特徴を示すガラス小玉は、古墳時代前期後葉に出現するといわれている。さらに古墳時代中期以降は色調が多彩なガラス玉が流通することが報告されていることから、今回照査したガラス小玉は古墳時代中期以降に一般的に流通していたガラス小玉と矛盾しない。

（降幡順子・後川恵太郎）

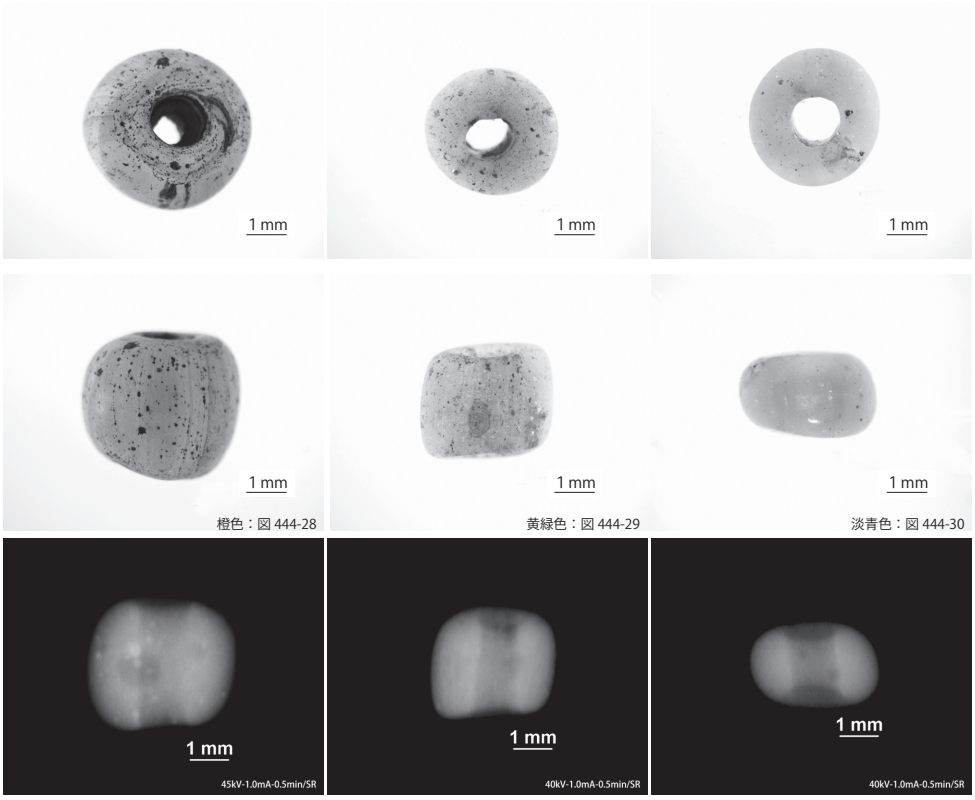


写真１　ガラス小玉の顕微鏡写真およびＸ線透過画像

表３　非破壊分析結果（wt%）（錫とジルコウムは定性分析）

		Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	CuO	PbO	Sn	Zr
444-28	橙色	12.7	1.2	10.0	54.5	2.1	3.3	0.51	0.07	3.5	9.0	2.9	○	△
444-29	黄緑色	14.2	0.85	8.4	65.7	2.3	3.6	0.43	0.07	2.1	1.1	1.2	○	○
444-30	淡青色	13.0	0.71	6.8	70.8	2.7	2.7	0.45	0.20	1.4	1.1	0.2	—	◎

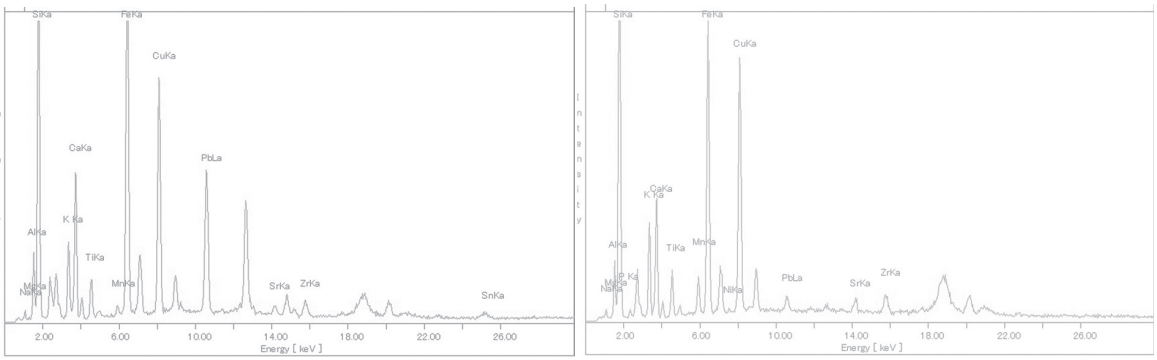


図 667　非破壊分析結果（左：黄緑色ガラス小玉、右：淡青色ガラス小玉）

第２節　讃良郡条里遺跡出土鍛冶関連遺物の分析

讃良郡条里遺跡から出土した鍛冶関連遺物については、交野市教育委員会真鍋成史氏、日鉄住金テクノロジー（株）八幡事業所 TAC センター大澤正己氏・鈴木瑞穂氏に依頼し、肉眼観察、マクロ組織の観察、顕微鏡組織の観察、化学組成分析を実施しており、以下の分析結果を賜った。

１．分析結果

図 82 － 5：資料番号 SAR － 1：取鍋か、１－５区４－２層出土

（１）肉眼観察：坩堝の小破片（15g）の可能性があるため分析に供された。内外面は黒灰色に変色するが、熱影響は弱く、金属（またはその銹化物）などの溶着は見られない。胎土は灰褐色で、砂粒（無色鉱物主体）や有機質の混和物が確認される。

（２）マクロ組織：写真２－１に坩堝断面を示す。内外面とも熱影響がほとんどなく、観察面では、表層にガラス質滓は確認されなかった。

（３）顕微鏡組織：写真２－２・３に示す。胎土部分の拡大である。素地は粘土鉱物で、やや角張った形状の砂粒を混和している。

上述のように断面表層部の熱影響は非常に弱く、溶着金属等の情報も得られなかった。

図 169 － 5：資料番号 SAR － 2：椀形鍛冶滓、１－５区 4967 溝出土

（１）肉眼観察：小形でやや薄手の椀形鍛冶滓（49g）である。側面 1 面は直線状の破面である。上面外周には砂粒を多量に含むガラス質が付着する。また内側は緑灰色の緻密な滓部で弱い着磁性がある。表面は風化が著しい。下面は全面灰白色～淡褐色の鍛冶炉床土が付着する。炉床土中には砂粒が多量に混和されている。上面は木炭痕のない滑面であり、銑鉄塊の脱炭処理が行われた可能性が考えられる。

（２）マクロ組織：写真２－４に示す。上側（明灰色部）は鍛冶滓、下側（暗灰色部）は鍛冶炉床土およびその溶融物（ガラス質滓）である。

（３）顕微鏡組織：写真２－５・６に示す。５は滓部の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。鍛錬鍛冶滓に最もよくみられる鉱物組成である。一方、６はガラス質滓部分の拡大である。

（４）化学組成分析：表４に示す。全鉄分（Total Fe）45.22% に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.05%、酸化第 1 鉄（FeO）44.57%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）15.05% の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は 36.00% で、このうち塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 3.92% とやや高めであった。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.23%、バナジウム（V）が 0.01% と低値であった。酸化マンガン（MnO）も 0.10% と低値である。また五酸化燐（P_2O_5）は 0.70% とやや高めで、銅（Cu）は 0.01% であった。

図 168 － 1：SAR － 3：椀形鍛冶滓、１－５区 4967 溝出土

（１）肉眼観察：やや小形の椀形鍛冶滓（78g）の側面部破片である。側面 5 面は破面である。上面表層には白色の小礫を含むガラス質滓が付着する。また上面表層には中小の気孔が密に分布する。滓の色調は明灰色で弱い着磁性を持つ。下面には茶褐色の鍛冶炉床土が付着する。炉床土中には砂粒が混和されている。鍛錬鍛冶滓に分類される。

（２）マクロ組織：写真２－７に示す。左上の明灰色部は鍛冶滓、右下の暗灰色部は鍛冶炉床土および

その溶融物（ガラス質滓）である。

（３）顕微鏡組織:写真２－８・９に示す。１－９は鍛冶滓部分の拡大である。発達した淡灰柱状結晶ファヤライトが晶出する。一方、１－10はガラス質滓の拡大である。部分的に白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。

資料番号 SAR－４：鍛造剥片[注1]様遺物

SAR－４－１：4967 溝出土

（１）肉眼観察：色調は黒灰色で、部分的に淡褐色の土砂が付着する。また表裏面とも波状の凹凸がみられる。

（２）マクロ組織：写真２－11に示す。厚手で表裏面には細かい凹凸がみられる。

（３）顕微鏡組織:写真２－12に示す。素地のガラス質滓中に灰褐色多角形結晶マグネタイト（Magnetite: Fe_3O_4）が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖であり、微細な鍛冶滓破片と判断される。

SAR－４－２：4967 溝出土

（１）肉眼観察：色調は表裏面とも暗灰色で、白色の砂粒が点在する。

（２）マクロ組織：写真２－14に示す。ほぼ全面が暗黒色の土砂である。

（３）顕微鏡組織：写真２－15に示す。素地は粘土鉱物で、内部に微細な砂粒が混在する。鍛造鉄器などの表層に付着した土砂が剥離したものの可能性が考えられる。

資料番号 SAR－５：金属製品

SAR－５－１：１－５区 4967 溝出土

（１）肉眼観察:細い線状の微細な鉄器破片である。全体は緩やかなＳ字状で、両端は破面と推定される。表面は全体が茶褐色の銹化物で覆われる。

（２）マクロ組織：写真２－17に示す。縦方向の断面を観察した。内部には金属鉄（明白色部）が良好に残存する。

（３）顕微鏡組織：写真２－18に示す。金属鉄部は３％ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite：α鉄）単相の組織が確認された。0.5㎜程の非常に細い製品であるのに金属鉄の残りが良好であることや、鉄中の非金属介在物が少ないことから、古墳時代中期の遺物ではなく、比較的新しい時期の混入品の可能性もある。

SAR－５－２：１－５区 4967 溝出土

（１）肉眼観察：棒状の微細な鉄器破片である。両端は破面と推定される。表面は全体が茶褐色の銹化物で覆われており、全体が銹化していると考えられる

（２）マクロ組織：写真３－20に示す。縦方向の断面を観察した。全体が銹化しており、金属鉄部は残存しない。

（３）顕微鏡組織：写真３－21に示す。銹化鉄部の拡大である。部分的に層状のパーライト（Peralite）組織の痕跡が残存する。炭素含有率の推定等は困難な状態であるが、この部分の金属組織の痕跡からは0.2%前後の軟鉄と推測される。

図 202－３：資料番号 SAR－６：椀形鍛冶滓、１－５区 4837 井戸出土

（１）肉眼観察：椀形鍛冶滓の破片（52g）である。側面４面は破面で、中小の気孔が点在するが緻密である。上面には微細な砂粒を含むガラス質滓が点々と付着する。滓部は緑灰色で、弱い着磁性がある。下面は全面灰白色の鍛冶炉床土が付着する。炉床土中には砂粒が混和されている。破面

を観察すると結晶が肥大化したためキラキラと光る。高温操業であったことが考えられる。上面に木炭痕を有することなどから、鍛錬鍛冶滓として分析に供された資料である。

（２）マクロ組織：写真３－22に示す。明灰色部は鍛冶滓である。また上側の暗灰色粒は被熱した無色鉱物であり、羽口などの炉材粘土に混和された砂粒と推定される。下面の暗灰色部は鍛冶炉床土およびその溶融物（ガラス質滓）である。

（３）顕微鏡組織:写真３－23･24に示す。ともに滓部の拡大である。全体に発達した淡灰柱状結晶ファヤライトが晶出する。さらに部分的に微細な淡灰色マグネタイトが晶出する。

また滓中には写真３－23の中央に示すような、薄い膜状の鉄酸化物が複数確認される。鍛造剥片が鍛冶炉中に飛散して、熱影響を受けて分解しかけた状態のものと推測される。鍛造剥片を包含することからも鍛錬鍛冶滓と判断できる。

（４）化学組成分析:表４に示す。全鉄分(Total Fe)は37.30%と低めであった。このうち金属鉄(Metallic Fe）は0.12%、酸化第１鉄（FeO）が44.48%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）3.73%の割合である。造滓成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O)は48.99%と高値傾向が顕著で、塩基性成分(CaO＋MgO）も6.37%とやや高めである。、粘土汁の使用の可能性が考えられようか。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.25%、バナジウム（V）が0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）も0.21%と低めである。銅（Cu）は0.02%とやや高め傾向を示す。

図256－11：資料番号SAR－7：鍛冶滓、２－２区４－１層出土

（１）肉眼観察：ごく小形で偏平な鍛冶滓破片（13g）である。側面４面は破面と推測される。気孔が多数散在する面もみられるが、大きさに対して重量感のある滓である。滓の色調は暗灰色で、やや着磁性が強い、上面には部分的に白色のガラス質滓が付着する。ガラス質滓中には被熱した砂粒が含まれる。

（２）マクロ組織：写真３－25に示す。観察面では明灰色の鍛冶滓の割合が高い。上下面表層に若干炉材粘土またはその溶融物（ガラス質滓）が確認される。

（３）顕微鏡組織：写真３－26・27に示す。２－26は上面表層部の拡大である。下側の暗色粒は熱影響を受けた無色鉱物で、羽口などの炉材粘土に混和された砂粒と推定される。微小明白色の金属鉄粒も確認された。また、２－27は中央部の拡大で、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓に最も一般的な鉱物組成といえる。

図442－27：資料番号SAR－８：高坏（脚部内容物）、４区４－２層出土

（１）肉眼観察：不定形な塊状の土砂と推測される。色調は淡褐色で、内部には微細な砂粒が含まれる。また部分的に茶褐色の銹化物が確認される。熱影響などがほとんどないことから、やや湿地状の環境で、高坏の廃棄後に脚部内で鉄分を含む土砂が固まった可能性が考えられる。

（２）マクロ組織：写真３－28に示す。青灰色部は土壌中に沈殿した鉄分（水酸化鉄)、暗黒色部は土砂である。

（３）顕微鏡組織：写真３－29・30に示す。表層部の拡大である。熱影響を受けた痕跡はなく、肉眼観察の項で述べたように廃棄後脚部内に固着した可能性が高い。

２．まとめ

讃良郡条里遺跡から出土した、古墳時代中期の鍛冶関連遺物を調査した結果、以下の点が明らかとなった。

〈1〉今回調査を実施した鉄滓4点（SAR－2、3、6、7）は鍛冶滓に分類される。このうち化学分析を実施した2点（SAR－2、6）は、ともに鍛冶滓としては鉄酸化物の割合が低め（ToTal Fe：45.22%、37.30%）であった。金属顕微鏡を用いた断面観察結果をみても、椀形鍛冶滓（SAR－2）以外は、ほぼファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）組成であり、ウスタイト（Wustite：FeO）やマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）結晶の割合は低い。

以上の滓の特徴から、銑（鋳鉄塊）の脱炭処理後の鉄塊中に含まれる酸化鉄主体の滓を熱間で鍛打加工して絞り出すような作業や、鉄素材（金属鉄）が大きく目減りするような、複数回の折り返し鍛錬を伴う作業は、ほとんど行われていなかったと推察される。既に一定の形状に鍛打成形された鉄素材を用いて、鍛造鉄器製作が行われた可能性が高いと考えられる。

一方で鍛冶滓（SAR－2、6）の塩基性成分（CaO、MgO）は、やや高め傾向を示す。これが製鉄原料に起因するものであれば、始発原料は塊状鉄鉱石と推察される。その場合、これらの鉄滓は上述したような鍛造鉄器製作に伴うものでなく、鉄塊系遺物に固着した製錬滓の分離除去で生じた（精錬鍛冶滓）可能性も考慮する必要がある。特に、SAR－2のように上面に滑らかな凹面を有する鉄滓は精錬鍛冶滓の可能性が高いといえよう。ただし、近隣の交野市の森遺跡では銑鉄塊が鍛冶関連遺物と一緒に出土するなど(注2)、類例はあるものの、不純物（製錬滓）の除去作業前の鉄塊が、この時期に鍛冶原料として流通していたか否かは研究史的にも大きな課題で、慎重な検討を要する。ライム（CaO）やマグネシア（MgO）などの塩基性成分は鍛冶作業時の木炭灰などから付加される可能性もある(注3)。

讃良郡条里遺跡では鉄塊系遺物が確認されていないことからも、鉄素材を熱間で鍛打加工して、鉄器を製作する作業が主に行われた可能性が高いと考えられる。

〈2〉鍛造剥片様遺物（SAR－4）は1点（4－1）が微細な鍛錬鍛冶滓、もう1点（4－2）は剥片様の土砂であった。ただし椀形鍛冶滓（SAR－6）中には、熱影響を受けて分解しかけた状態の鍛造剥片様の鉄酸化物が複数確認されている。

〈3〉金属製品（SAR－5）のうち、1点（5－1）は大きさと厚みを考えると古墳時代中期の遺物としては金属の残存状況が良好である。しかし、銹化の状況や出土時の状態から考えて、混入の可能性は低いものと考えられる。もう1点（5－2）は全体が銹化しているが、部分的に亜共析組織の痕跡が確認できた。炭素含有率の推定等は困難な状態で、この金属組織痕跡から0.2%前後の軟鉄と推測される。

〈4〉取鍋（SAR－1）は全体に熱影響が弱く、溶着金属の付着等もみられなかった。 高坏（SAR－8）でも同様の取鍋 もしくは坩堝の可能性を考えたが、その痕跡は確認できなかった。この地区では鋳造作業は行われていなかったようだ。

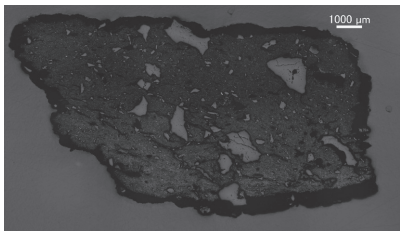
（大澤正己・鈴木瑞穂・真鍋成史・後川恵太郎）

（注）

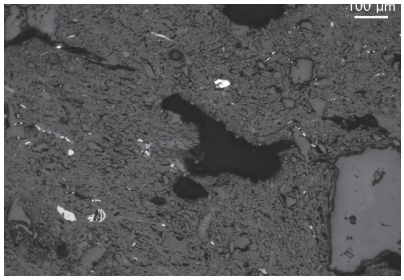
（1）鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ウスタイト（Wustite：FeO）の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ウスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe－O系平衡状態図から説明される。

（2）大澤正己「交野市森遺跡とその周辺遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『森遺跡Ⅲ』（交野市埋蔵文化財調査報告1990－Ⅰ）1991

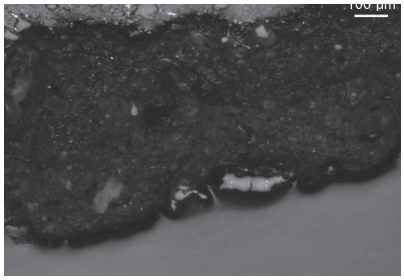
（3）松本建速・堀川循正・羽場睦美「前近代製錬滓中におけるCa，Mg，Pの由来－還元・造滓における木炭灰の働き－」『鉄の歴史－その技術と文化－フォーラム第5回公開研究発表会講演論文集』2003



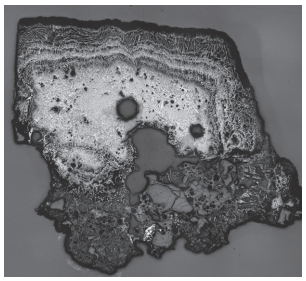
1　SAR-1 マクロ組織



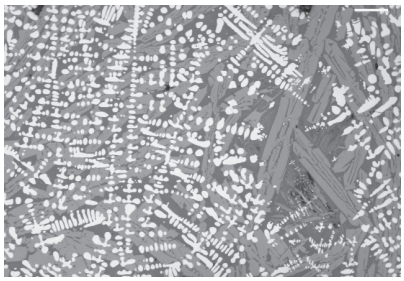
2　SAR-1 素地：粘土鉱物、無色・有色鉱物混在



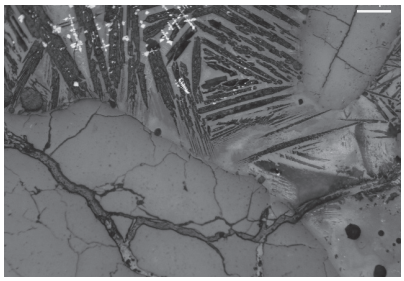
3　SAR-1 素地：粘土鉱物、無色・有色鉱物混在



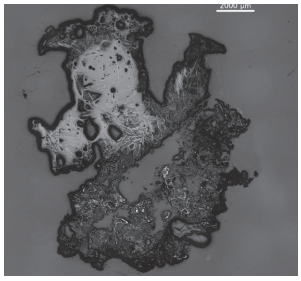
4　SAR-2 マクロ組織



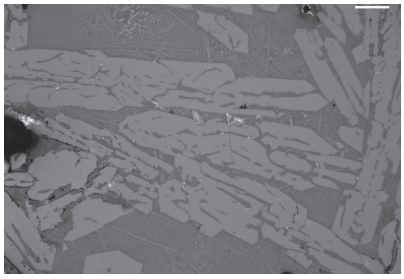
5　SAR-2 滓部：ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ鉱物混在



6　SAR-2 ｶﾞﾗｽ質滓（炉壁粘土溶融物）石英・長石類混在

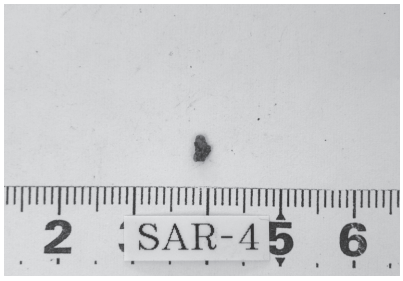


7　SAR-3 ﾏｸﾛ組織

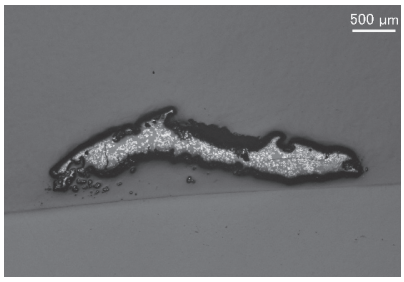


8　SAR-3 滓部：ﾌｧﾔﾗｲﾄ

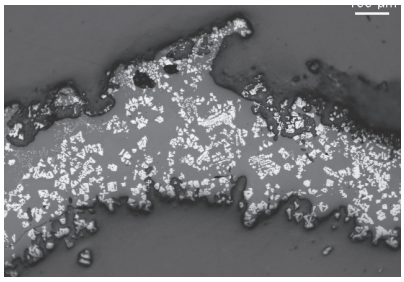
9　SAR-3 滓部：ｳｽﾀｲﾄ、ｶﾞﾗｽ質滓（炉壁粘土溶融物）



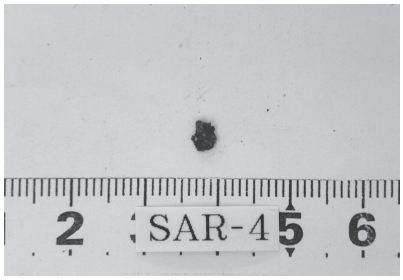
10　SAR-4-1 鍛造剥片様遺物



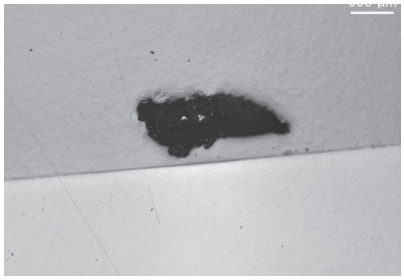
11　SAR-4-1 滓部：ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ、素地：ｶﾞﾗｽ質滓、鍛冶滓破片



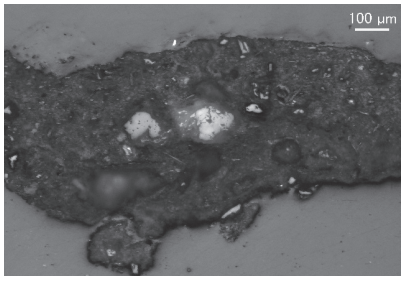
12　SAR-4-1 滓部：ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ素地：ｶﾞﾗｽ質滓、鍛冶滓破片



13　SAR-4-2 鍛造剥片様遺物

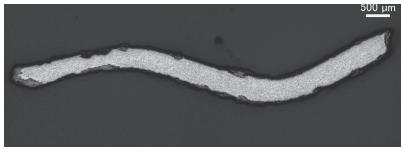


14　SAR-4-2 土砂



15　SAR-4-2 土砂

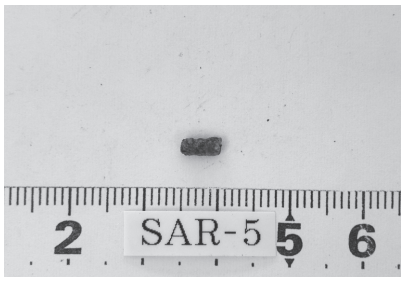
16　SAR-5-1 鉄片



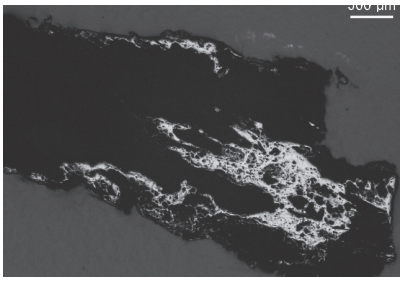
17　SAR-5-1 ﾅｲﾀﾙ etch ﾌｪﾗｲﾄ単相

18　SAR-5-1 ﾅｲﾀﾙ etch ﾌｪﾗｲﾄ単相

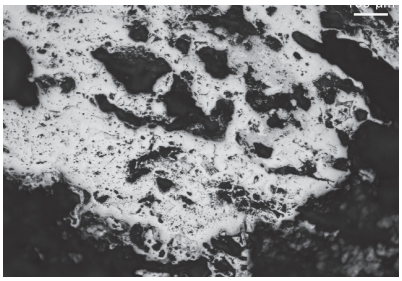
写真２　讃良郡条里遺跡鍛冶関連遺物顕微鏡組織（１）



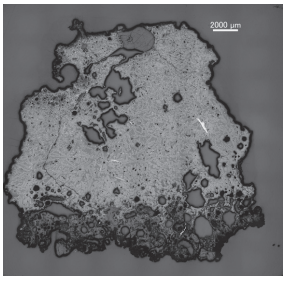
19　SAR-5-2 鉄片



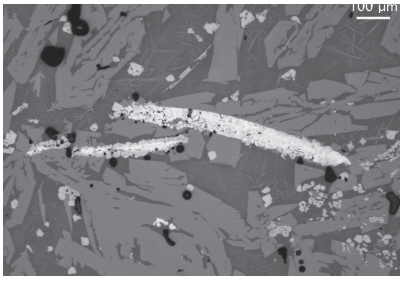
20　SAR-5-2 銹化鉄、亜共析組織痕跡



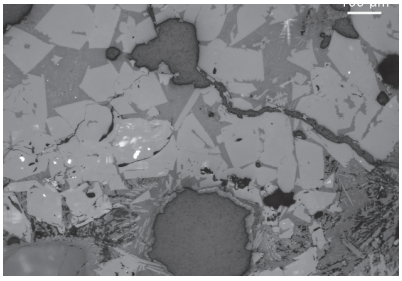
21　SAR-5-2 銹化鉄、亜共析組織痕跡



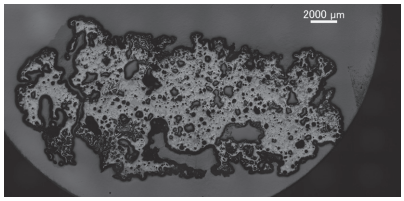
22　SAR-6 ﾏｸﾛ組織、下側鍛冶炉床土



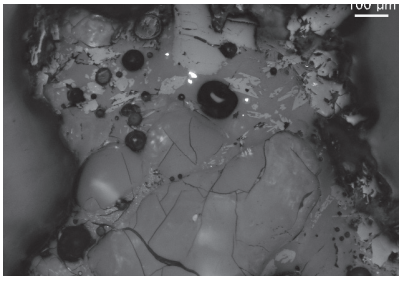
23　SAR-6 滓部拡大 : ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ



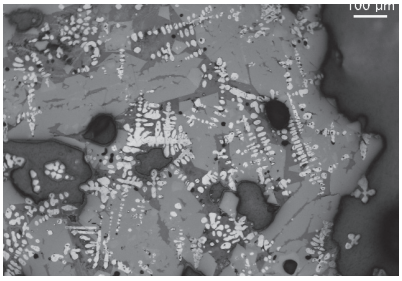
24　SAR-6 滓部拡大 : ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ



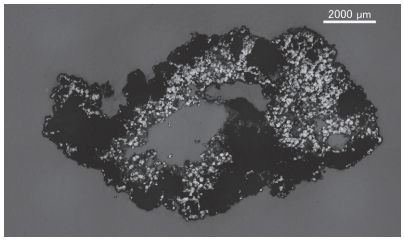
25　SAR-7 ﾏｸﾛ組織



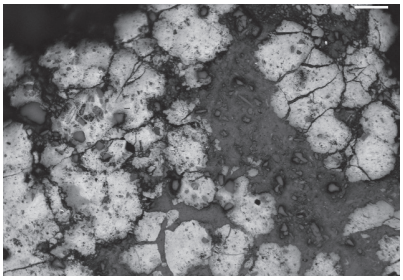
26　SAR-7 ｶﾞﾗｽ質滓、微小明白色粒 : 金属鉄



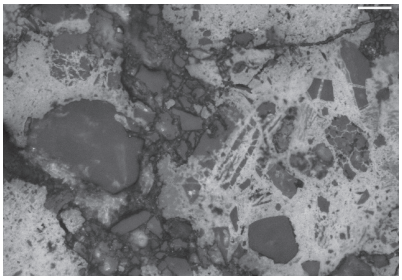
27　SAR-7 滓部 : ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ



28　SAR-8 ﾏｸﾛ組織



29　SAR-8 青灰色部 : 水酸化鉄、暗色部 : 土砂



30　SAR-8 青灰色部 : 水酸化鉄、暗色部 : 土砂

写真３　讃良郡条里遺跡鍛冶関連遺物顕微鏡組織（２）

表４　供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第１鉄 (FeO)	酸化第２鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化ｱﾙﾐﾆｳﾑ (Al_2O_3)	酸化ｶﾙｼｳﾑ (CaO)	酸化ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ (MgO)	酸化ｶﾘｳﾑ (K_2O)	酸化ﾅﾄﾘｳﾑ (Na_2O)	酸化ﾏﾝｶﾞﾝ (MnO)	二酸化ﾁﾀﾝ (TiO_2)	酸化ｸﾛﾑ (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ (V)	銅 (Cu)	二酸化ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ (Zr)	砒素 (As)	Σ＊ 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
SAR-2	讃良郡条里遺跡	1区4967溝	椀形鍛冶滓	古墳中期	45.22	0.05	44.57	15.05	22.97	7.19	3.23	0.69	1.30	0.62	0.10	0.23	0.04	0.016	0.70	0.22	0.01	0.01	＜0.01	＜0.01	36.00	0.796	0.005	
SAR-6		1区4837井戸	椀形鍛冶滓	古墳中期	37.30	0.12	44.48	3.73	33.06	7.22	4.80	1.57	1.54	0.80	0.21	0.25	0.06	0.029	0.44	0.16	0.01	0.02	＜0.01	＜0.01	48.99	1.313	0.007	

第６章　総括

第１節　遺構の変遷と出土遺物

今回の発掘調査では、縄文時代晩期から近代に至る、多種多様な遺構･遺物が各遺構面で確認された。以下では、各遺構面で検出された遺構の変遷を周辺の調査成果と合わせながら、総括する。なお、地層名・遺構面の名称は、２－１・２－２区の調査成果に準じた地層名を使用する。

江戸時代後期～明治時代（第１－１面、図 668）

遺構：

大将軍社の遺構、水田･畑が検出された。２－１区１－１層及び近代作土が形成された段階に当たる。大将軍社の参道では、土師器・陶器の灯明皿が鳥居の台石周辺から大量に出土した。近在する村の古老からの聞き取りによれば、大将軍社は明治 44 年に忍陵神社に合祀されるまで、毎年７月３日に灯明皿を用いた神事があり、周辺の人々の信仰を集める神社であったという。

大将軍社の周囲では、条里型地割を踏襲した水田が検出された。４区と２－１区北側では畑が検出されている。１－３・１－４・１－５区では、この段階の基幹水路として機能した溝が検出されており、建築部材（桁柱か）を転用、あるいは、別の場所にあった木樋を再利用した木樋が確認された。また、１－１･２－１区では､条里坪境の南側で四條畷市と寝屋川市の市境が､この時期に形成された地割（溝･田面の段）に起因することが判明した。なお、１－１・２－１区第１－３面では、この段差の南側で、近世以前の溝が検出されており、さらに古い段階に地割の起源が求められる可能性がある。

遺物：

大将軍社参道の台石周辺から灯明皿が多数出土した。灯明皿は、釉薬（柿釉）が施された陶器と土師

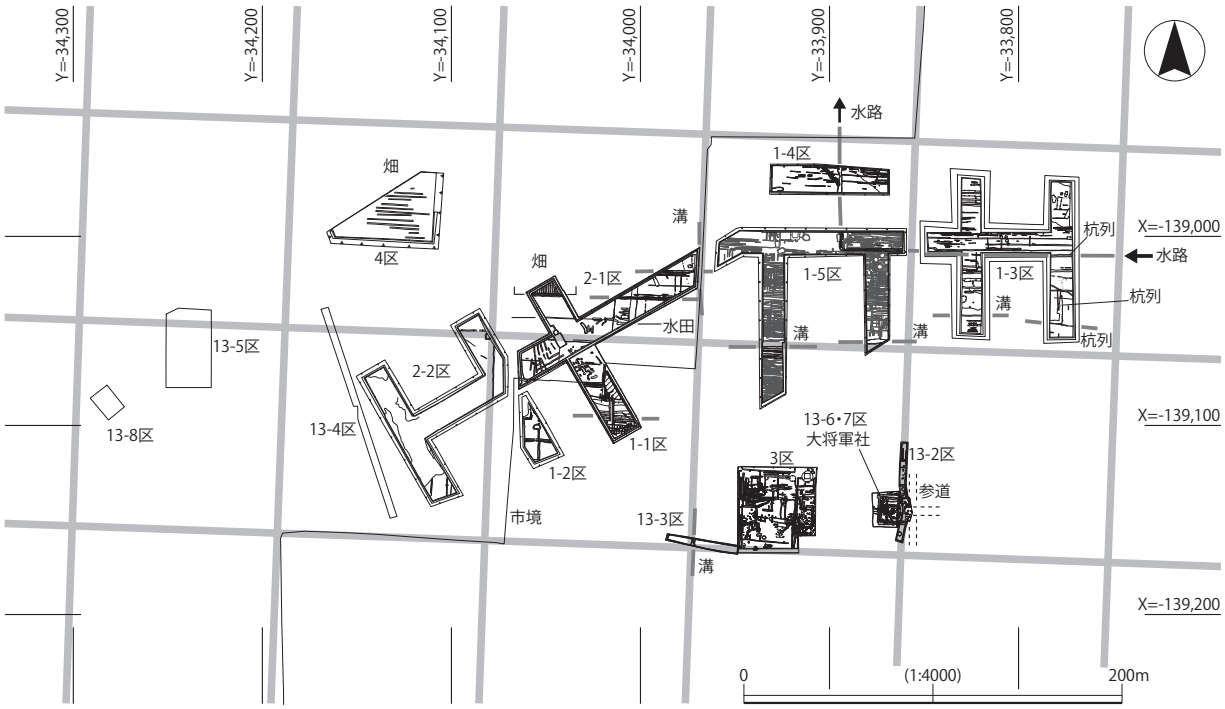


図 668　江戸時代後期～明治時代（第１－１面）

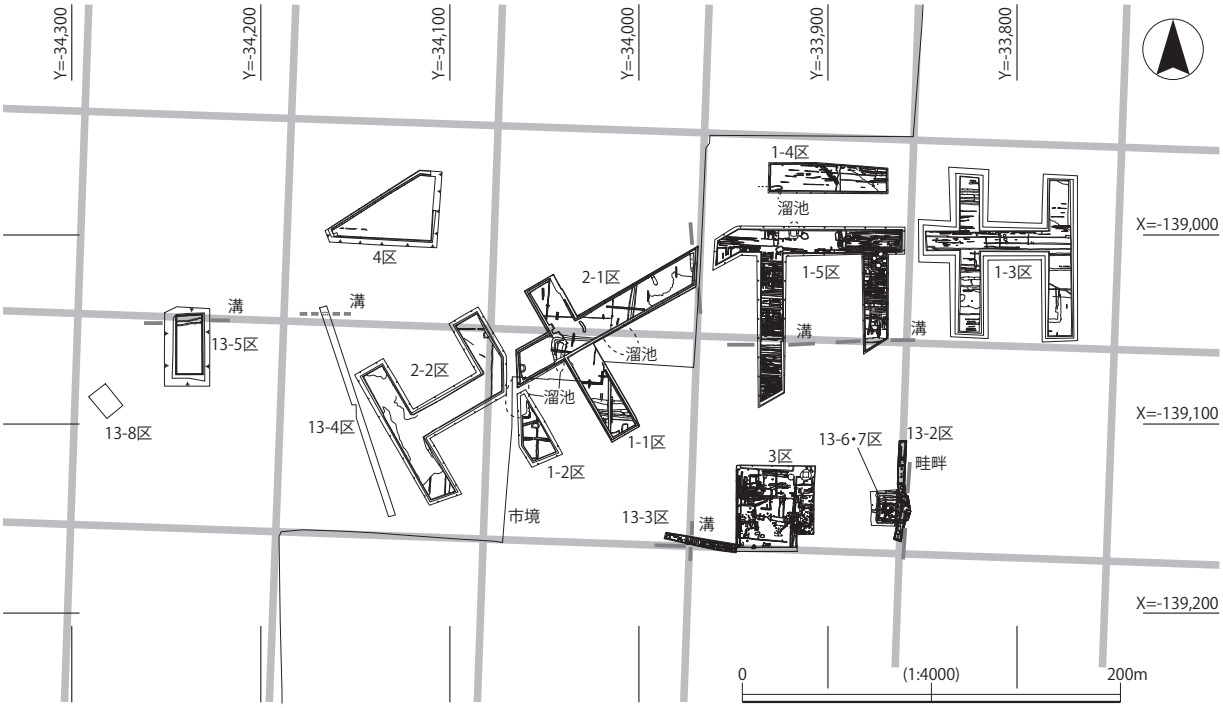


図 669　室町時代後期～江戸時代中期（第１－３面）

器（無釉）に分かれる。完形ないし完形に近いものにおける出土傾向は、江戸時代後期末から明治時代にかけて形成された１・２層では、陶器が７割以上を占める。それに対し、室町時代後期～江戸時代後期にかけて形成された３層は、土師器が９割近くとなり、その比率は逆転している。

室町時代後期～江戸時代中期（第１－３面、図 669）

遺構：

大将軍社の遺構、水田が検出された。大将軍社は、16 世紀中頃～後半の創建で、当初は基壇をめぐる溝も小規模なものであった。大将軍社の参道では、灯明皿を用いた神社行事がこの時期から始まっている。

大将軍社の周囲には、条里型地割を踏襲した水田が検出されており、２－１区では溜池と、溜池に接続する溝が検出された。溜池は、鎌倉時代以前には用いられなかった水利施設で、この時期に灌漑システムが大きく変化したことを示している。

遺物：

大将軍社から柴垣柳樹双鳥鏡や同時期の土器・瓦が多数出土した。

鎌倉時代～室町時代前期（第２面、図 670）

遺構：

集落･水田が検出された。３区では、三十五ノ坪と三十六ノ坪の坪境に接して集落が検出されており、曲物を使用した井戸や掘立柱建物が検出された。集落の存続時期は平安時代後期から室町時代前期で、大将軍社は集落の廃絶以降に創建されたものと考えられる。13 －２区では、大将軍社参道の直下から当該期の水田が検出された。

遺物：

３・13 －３区では、瓦器椀や陶磁器、銭貨など当該期の遺物が多数出土した。１・２・４区は水田域であったため、瓦器の細片などが少量出土した。

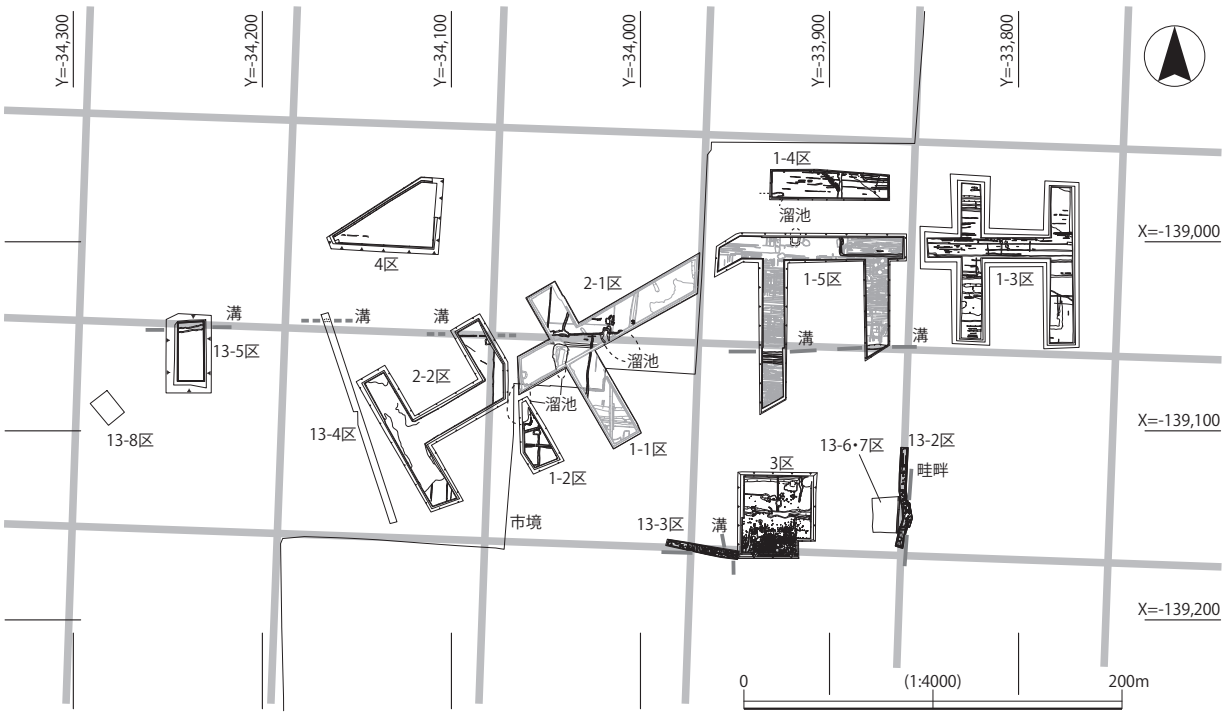


図 670　鎌倉時代～室町時代前期（第２面）

平安時代後期（第３面、図 671）

遺構：

１・２区では、平安時代後期の、条里型地割の水田が良好な状態で検出された。水田は長地型地割で、１－５・２－１区では坪境畦畔が良好な状態で検出された。３区では、皇朝十二銭が出土した平安時代中期の溝が検出されており、中世の集落はその段階まで遡ると考えられる。

１－５・２－１区では、当該期の作土の間に水成層の砂層が入り、上下で異なる位置で畦畔が検出された。条里型地割の水田は、層位的な上下関係と４区から出土した須恵器・黒色土器により、平安時代前期（９世紀）まで遡るのは確実と考えられる。

１－５・２－１・４区では、当該期の作土から奈良時代後期の土器が出土しており、条里型地割の水田の上限を示す資料となる可能性がある。４区では、奈良時代から平安時代前期の集落の一部も断片的ながら確認されており、当該期に機能したと考えられる井戸が２基検出されている。なお、１－５区では、海獣葡萄鏡が当該期の地層直上から出土しており、律令体制下の讃良郡条里遺跡の動態において注目される資料である。

遺物：

平安時代中期～後期の出土遺物としては、３区で延喜通宝８点が土師器皿などと共に出土した。２－１区坪境畦畔内からは、当該期と考えられる土師器皿が出土した。

奈良時代の土器は、１－４・１－５・２－１・４区の地層から出土している。全体的に個体数が少ないことや、出土した地層が削平を受けていたことから、いずれの調査地においても奈良時代に形成された地層と断定するには至らなかった。

また、１－５区では飛鳥時代の須恵器が出土した。内１点の平瓶は、平安時代以降の砂層中から出土した資料である。飛鳥時代の遺構・遺物は希薄な状況にある。飛鳥時代以降の水田経営については今回の調査では明らかにできなかった。

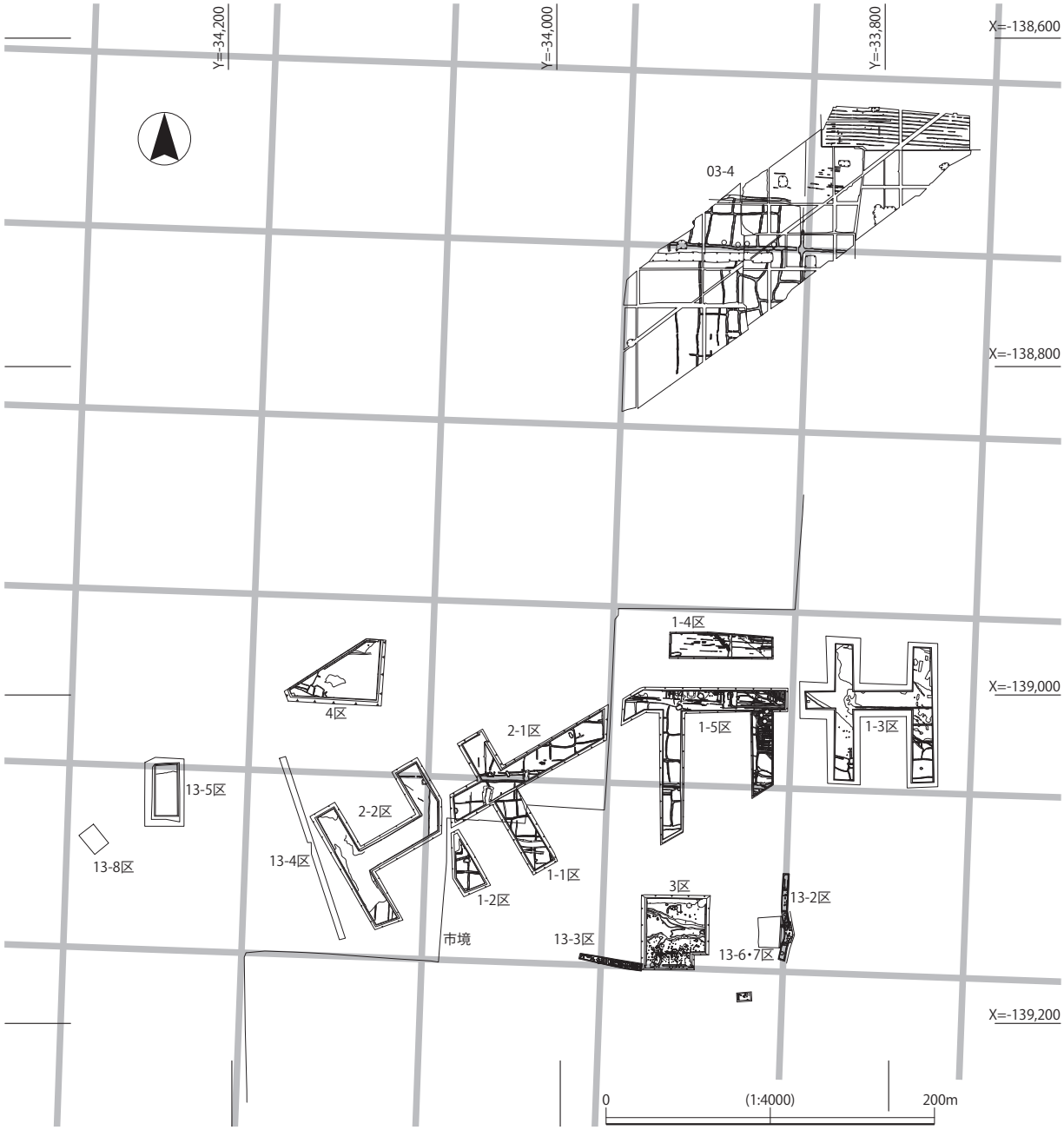


図 671　平安時代後期（第３面）

弥生時代後期～古墳時代後期（第５ｂ面、図 672）

遺構：

１－３・１－５区東側では弥生時代後期から古墳時代中期初頭の集落、１－５・２－１区では古墳時代中期初頭から古墳時代中期後葉の集落、２－２・13－４区では古墳時代中期初頭から古墳時代後期後葉の集落、４区では古墳時代中期後葉から後期中葉の集落が検出された。集落周辺の低地は各時期の水田として土地利用されている。２－２・13－４区の集落は、調査地の南側に隣接する蔀屋北遺跡の集落に連続するものである。また、２－２区では、周溝が検出されており、古墳ないし祭祀遺構が集落内に近接して構築されていた。

２－１・２－２区では、古墳時代中期初頭から古墳時代後期にかけての水田が検出されており、その変遷は以下のとおりである。１）弥生時代後期の氾濫堆積物によって形成された地形の起伏が平坦化し

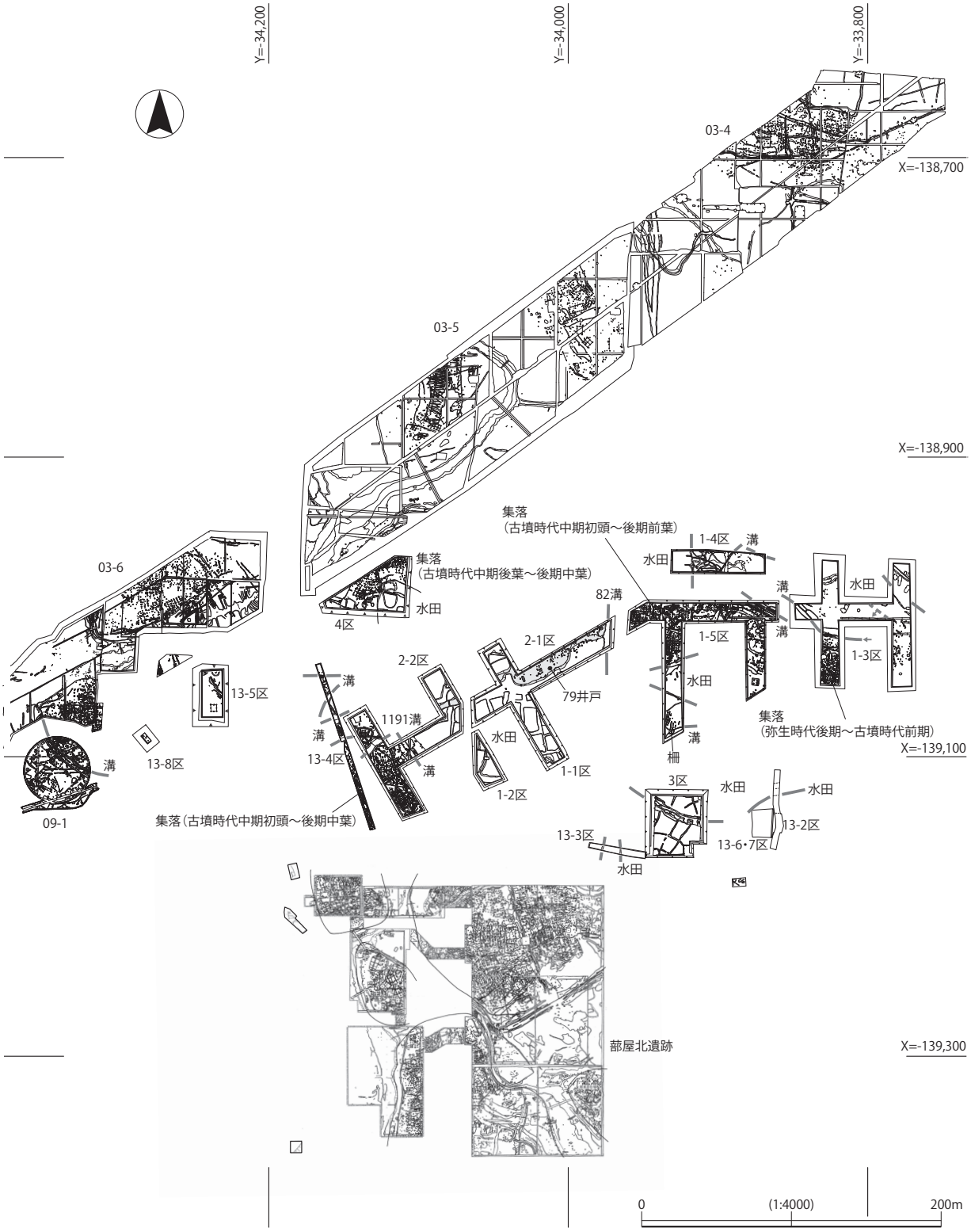


図 672　弥生時代後期～古墳時代後期（第５ｂ面）

て、古墳時代中期初頭以前の大区画水田が展開する。２）古墳時代中期から後期の氾濫堆積物である砂層の堆積によって地形に起伏ができ、小区画の水田が展開する。

３区でも古墳時代中期～後期以降、飛鳥時代にかけて機能したとみられる水田が複数面検出され、水田への導水機能を持つとみられる流路の堤防構築に敷葉工法が用いられていた。

古墳時代集落内・外で検出された溝については、２－１区 82 溝、２－２区 1191 溝、13 － 4 区

7301 溝は、弥生時代後期に形成された地形の低所に加工が施されたもので、微高地と水田域（低地）を画する溝（２－２区 1300 溝、４区 467 溝）が灌漑用であるのに対し、集落を区画する機能があり、その性格が異なる。１－５区では、集落内の複数の竪穴建物を区画した小規模な溝が検出されており、各地点で溝機能が異なることが想定できた。

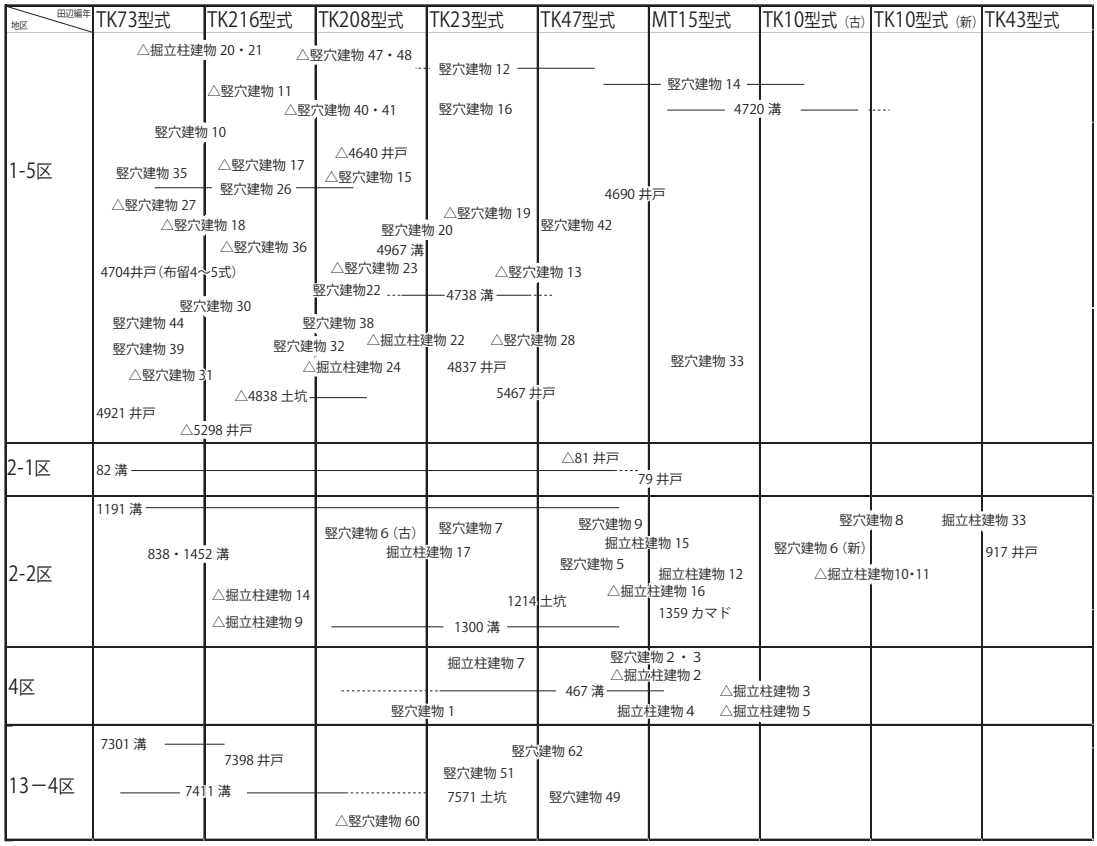
遺物：

古墳時代中期～後期

１－５・２－１区の集落では TK73 ～ TK10 型式新段階、２－２・13－４区の集落では TK73 ～ TK43 型式、４区の集落では TK208 ～ TK209 型式の遺物が出土した。特筆すべき遺物として、１－３区では、初期須恵器などとともに櫛描直線文を施した高坏形器台が出土した。１－５区では、竪穴建物 39 から ON231 ～ TK73 型式の須恵器坏蓋、竪穴建物 35 から須恵器二重𨻶・透孔（円窓？）がある土師器壺、4967 溝から鉱滓・鞴羽口など鍛冶関連遺物、4921 井戸から陶質土器の可能性がある高坏、5467 井戸から東日本系の土師器壺、4837 井戸から井戸枠に転用された扉板と鍛冶関連遺物が出土した。ほかに、東海系の宇田型甕の破片が出土している。

２－１区では、82 溝から ON231 ～ TK208 型式の須恵器・韓式系土器・網代・多数の木製品が出土した。２－２区では、838 溝・1388 溝（周溝）から TK73 型式の須恵器、1191 溝から ON231 ～ MT15 型式の須恵器や U 字形板状土製品、917 井戸から井戸枠に用いられた準構造船底板が出土した。４区では、子持勾玉・臼玉等の大量の滑石製石製品及び未製品、ガラス小玉が出土した。また、２－２からも滑石製子持勾玉が出土した。13－４区では、竪穴建物 51 からガラス小玉、7571 土坑から須恵器を模した土師器蓋が合わされた土師器甕が出土した。

表５　古墳時代遺構変遷



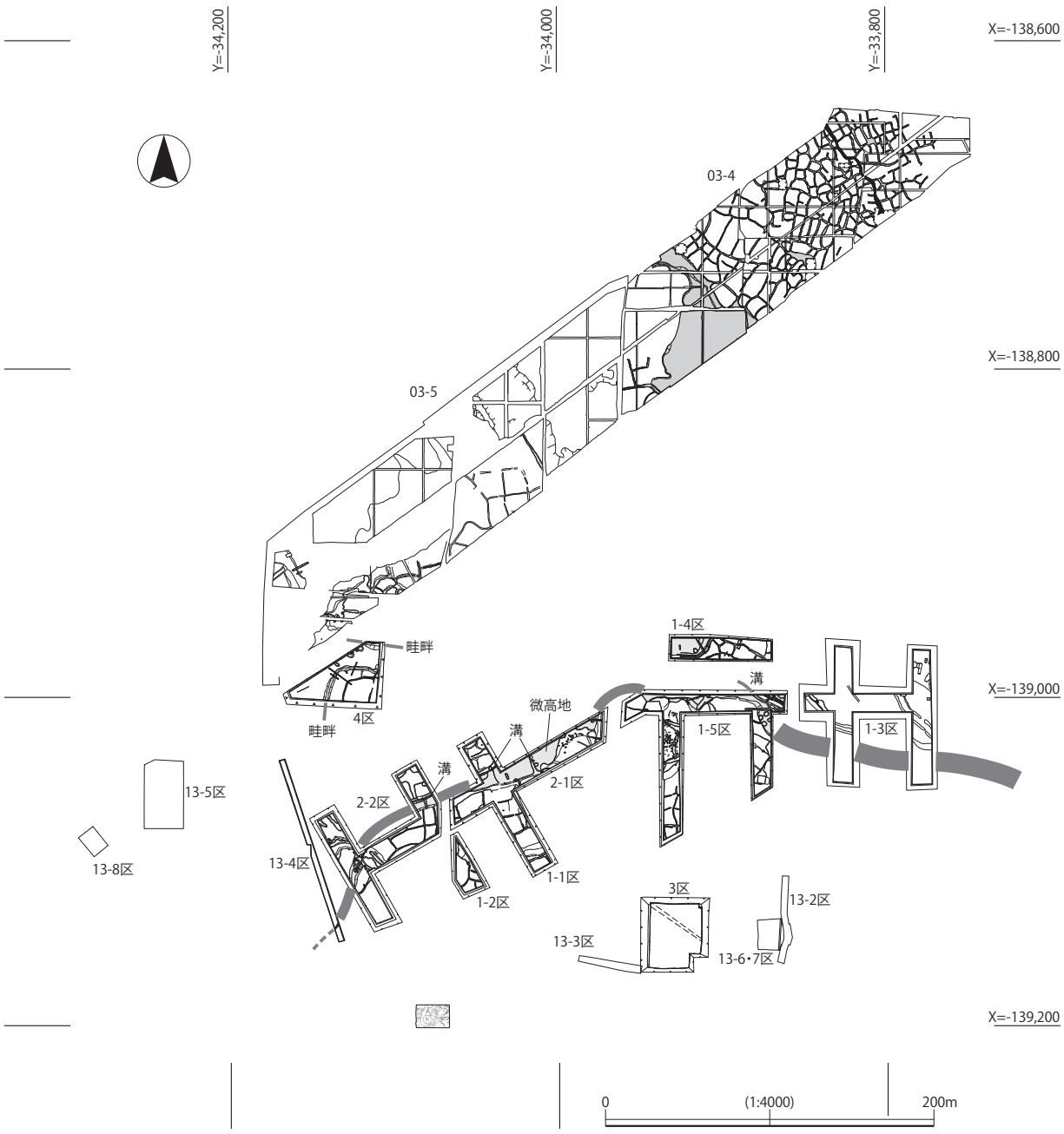


図 673　弥生時代中期後葉（第６面）

古墳時代前期

１－３区・１－５区では、井戸や土坑等から古墳時代前期の土器が出土した。庄内式併行期の土器は確認されず、この時期には集落が営まれていなかった可能性がある。古墳時代前期の土器は、布留１式及び布留３～４式に位置付けられる。山陰から瀬戸内地域、東海地域から搬入された土器が布留３～４式に伴っている。

弥生時代後期

１－３・１－５区では、弥生時代後期初頭～後期前葉と後期後葉の土器が出土した。１－３区では土坑・流路、１－５区では土坑・斜面地に形成された古土壌（５－２－２層）からそれぞれ出土している。また、２－２区では流路内から弥生時代後期後葉の土器が出土した。１－３区から出土した土器には、瀬戸内地域の影響を受けた高坏や台付長頸壺（生駒西麓産）がある。

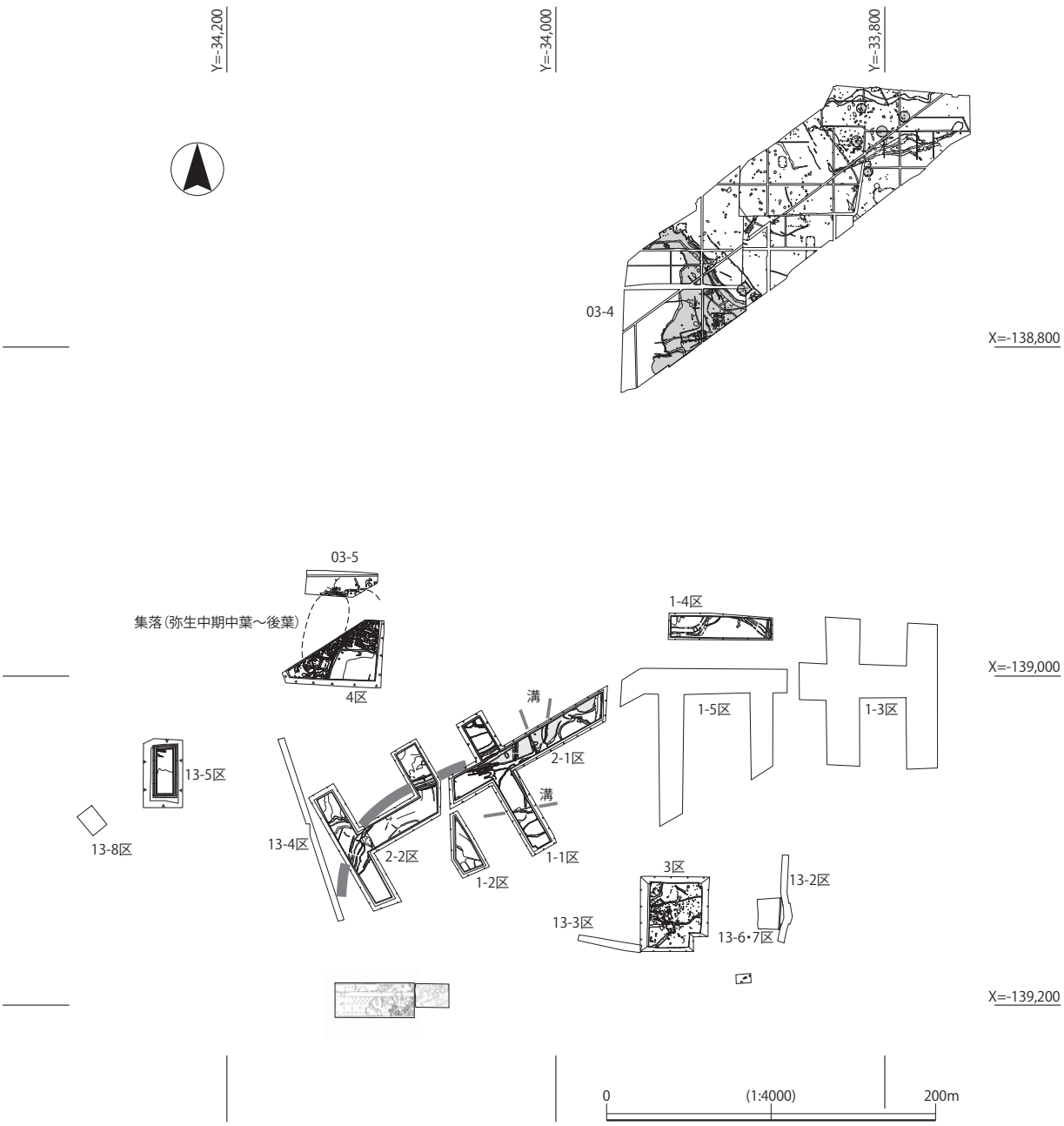


図 674　弥生時代中期中葉～後葉（第６ｂ面）

弥生時代中期後葉（第６面、図 673）

遺構：

弥生時代後期以降に形成された氾濫堆積物の砂層と湿性堆積物の泥層を除去して検出された水田が調査地全体で検出された。微高地周辺の低地では、平坦化が進んでいたため、区画が 200 ㎡に達する広いものが含まれる。４区では、同段階に形成された地層を除去した遺構面で、弥生時代中期後葉に位置付けられる土坑が検出されたことを時期比定の根拠としている。

遺物：

２－２・４区で瀬戸内西部～中部地域の影響を受けた、凹線文が施された高坏が土坑及び作土から出土した。調査地全域で、当該期に盛行する集落は認められず、大半が水田として土地利用されたため、総じて土器は少ない。

弥生時代中期中葉～後葉（第６ｂ面、図 674）

遺構：

弥生時代中期中葉から後葉にかけて形成された古土壌と作土を除去した遺構面で、集落が３・４区で検出された。４区の集落では、灌漑及び区画として用いられた溝が多数検出されており、微高地上では柱根が遺存する柱穴も多数確認された。第二京阪道路・蔀屋北遺跡においても、同時期の集落が検出されており、古墳時代と同様に、立地条件の良好な場所を選んで、小規模な集落が展開したようである。

遺物：

４区の集落では、大量の弥生土器が出土した。弥生時代中期中葉、Ⅲ様式前半に位置付けられる資料である。甕は、Ⅱ様式と同様、ハケ調整のものも含まれるが、ヘラミガキ調整が多用されるようになる。頸部の屈曲は「く」の字形で、逆「L」字形のものは微量である。２－２・４区の弥生土器の中には、タタキが認められる土器が出土した。近江地域の搬入品、或いは、その影響下で成立した土器も出土しており、受口状口縁をもつ壺のほか、頸部及び胴部に横方向の粗いハケ調整が施される甕が出土している。木製品では、護岸施設に転用された鍬の未成品が出土しており、小規模な木工が集落内で行われたと考えられる。

また、石製品では、サヌカイト製石鏃のほか、粘板岩製の石庖丁を転用した石剣（尖頭器）が出土しており、類例の少ない資料である。

弥生時代中期前葉（第７面、図 675）

遺構：

弥生時代中期中葉以前に形成された氾濫堆積物の砂層と湿性堆積物の泥層を除去した遺構面で水田が検出された。２－１・13－５区では、小区画の水田が確認されたほか、４区では同段階の灌漑用水路として用いられたと考えられる溝が検出されている。それ以外の調査地では、未調査地を除いて、大畦畔が検出されており、調査地周辺にも、水田域が広がっていたことが想定される。

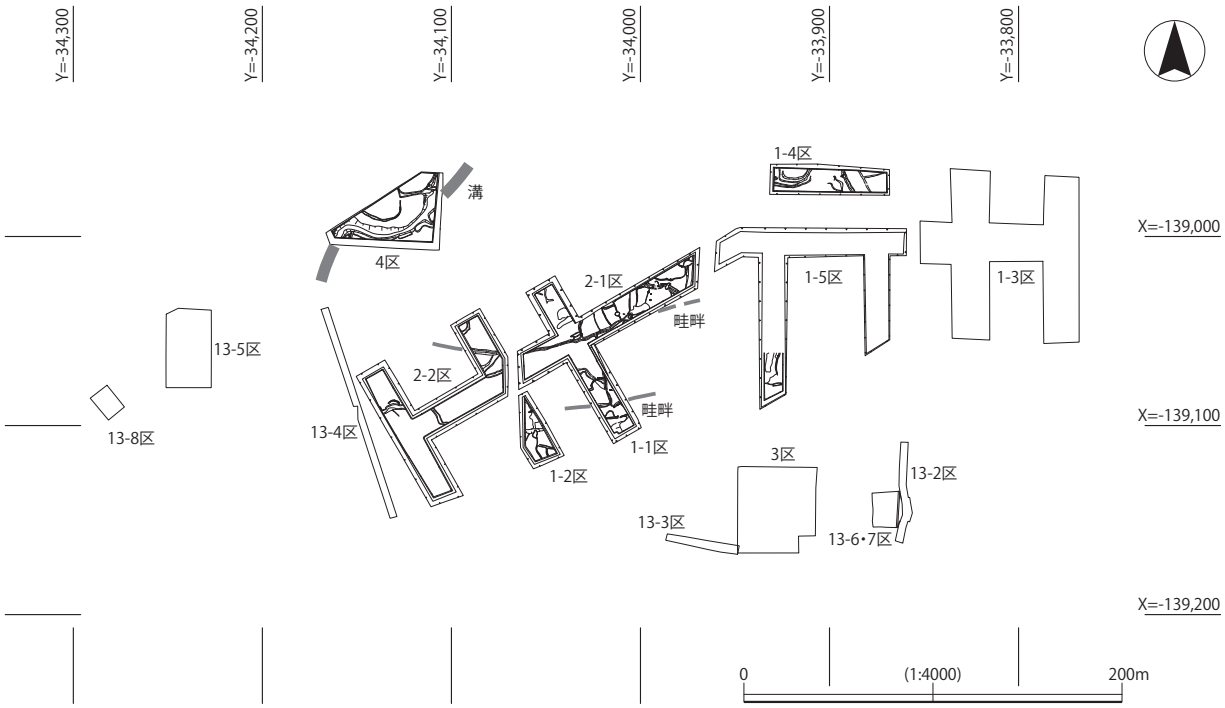


図 675　弥生時代中期前葉（第７面）

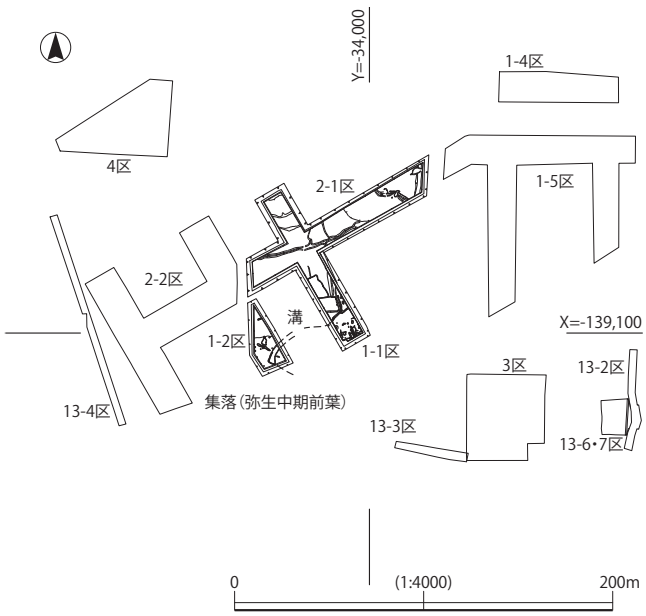


図 676　弥生時代中期前葉（第７ｂ面）

遺物：

１－１・１－４・２－１区で当該期の弥生土器が出土した。調査地全体は、水田として土地利用されるため、細片となった土器が出土した。

弥生時代中期前葉（第７ｂ面、図 676）

遺構：

１－１・１－２区で集落が検出された。井戸・土坑等が検出されており、用排水に用いられたと考えられる小規模な溝も確認されている。弥生時代中期中葉のものと比較すると、小規模なもので、切り合い関係を持つ遺構も少数である。集落の廃絶時には水田化しているが、弥生時代中期前葉の水田を維持管理した段階があったと考えられる。

遺物：

出土土器は、Ｉ様式の特徴を払底したⅡ様式後半弥生時代中期前葉の資料が出土した。集落周辺では、出土量が多い傾向にある。甕は粗いハケが施され、大きく外反する口頸部をもった、淀川水系に分布する甕が出土している。壺の口縁端面は刻目が施されるか、無文である。壺・鉢類に施される櫛描文様は、直線文・波状文を主としており、直線文が総じて多い傾向にある。石製品では石庖丁やサヌカイト製の掻器が出土した。

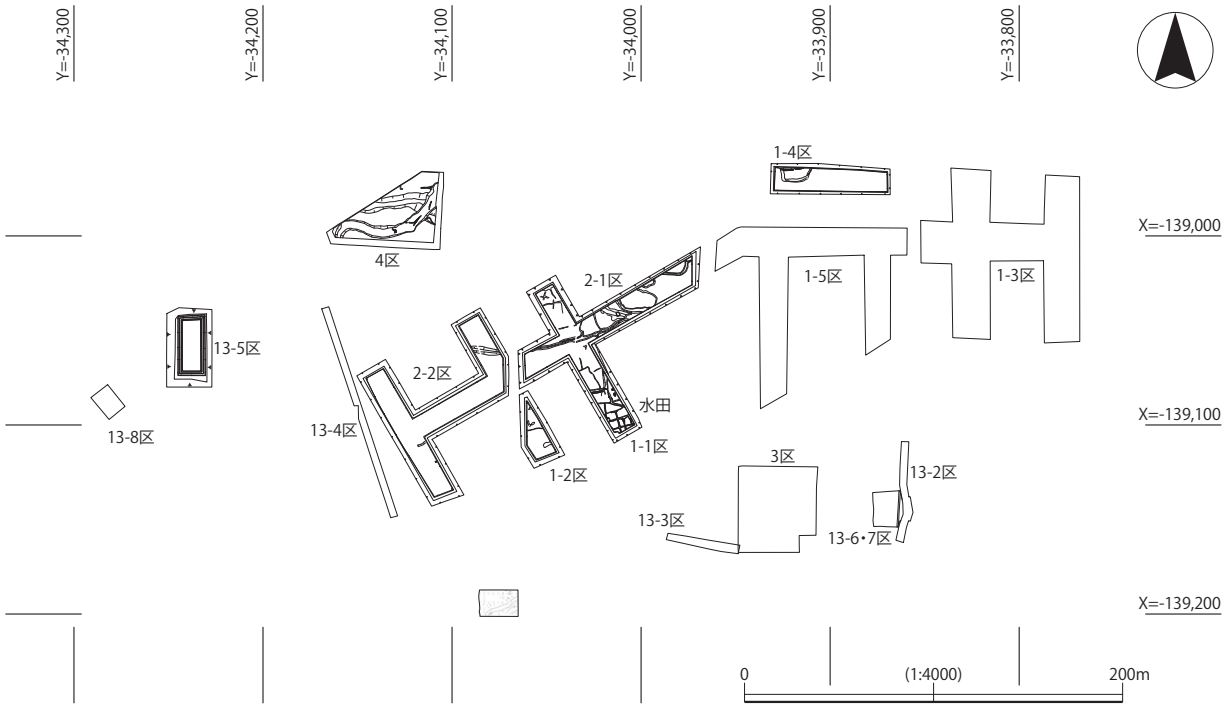


図 677　弥生時代前期後葉（第８面）

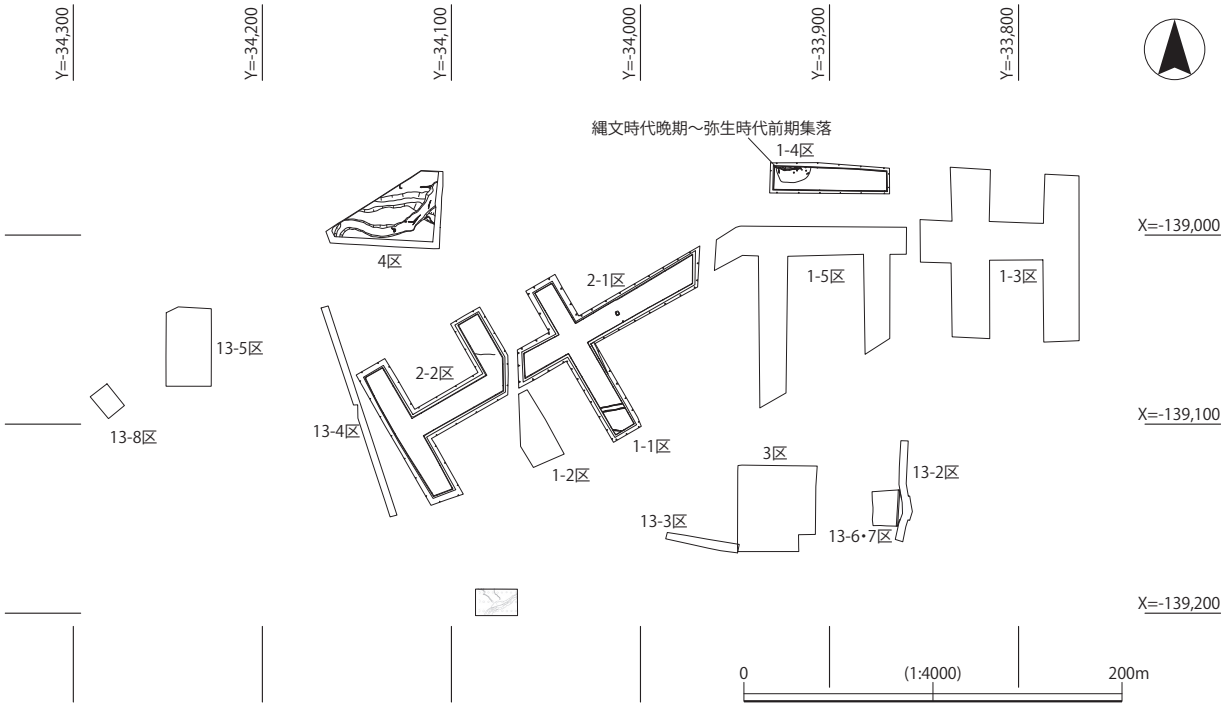


図 678　縄文時代晩期以前（第 10 面）

弥生時代前期後葉（第８面、図 677）

遺構：

１－１・２－１区で水田が検出された。１－１区の小区画水田は弥生時代中期前葉の集落が立地した砂層を除去して検出された。また、当該期の大畦畔が２－１・２－２区で東西に検出されており、調査地周辺の大規模な水田開発がこの段階に行われた可能性が高いと考えられる。また、２－２区では、当該期の弥生土器壺を納めた土坑が検出された。

遺物：（弥生時代前期中葉）～後葉

１－３・２－１・２－２・４区では、沈線文が４条以上施された弥生土器が出土した。多くは破片であったが、２－２区では胴部に突帯文と多条沈線文が施された壺が土坑から出土した。播磨・山陰東部地域からの搬入品の可能性がある。

１－４区では、第８－１面で検出された 4068 溝から、図 70 － 12 の壺が出土した。削り出しの段と沈線文３条が施される。共伴した甕は沈線文が５条施される。壺は前期中葉から後葉、甕は前期後葉に位置付けられる資料である。８－１層から出土した突帯文土器は、長原式新段階に位置付けられる資料で、３条の沈線文が施された弥生土器壺と同じ地層から出土している。一方、７－２層は４条以上のヘラ描き沈線文が施された壺体部片が出土しており、突帯文土器は長原式と水走式に位置付けられる資料が出土している。斜面地に形成された古土壌から出土した資料で個体数が少数であるため、以下は仮説の領域を出ないものであるが、4068 溝を画期として、１）８－１層が縄文時代晩期に形成された可能性、２）長原式と水走式が層位的に分けられる可能性を示すと考えられる。

また、１－２区９層から、ヘラミガキ調整後に沈線文４条が施され、その下に貝殻腹縁で三角文が施された弥生土器壺が出土した。沈線文４条は新しい要素であるが、前期の中でも古い時期の特徴を示し、９層とした地層が弥生時代前期中葉以前に形成されたことを示す土器と考えられる。また、２－２区では５－１層掘削時に浮線文土器の口縁部が出土した。氷Ⅰ式に位置付けられる資料である。

縄文時代晩期以前（第 10 面、図 678）

遺構：

１－４区では、微高地の縁辺に当たる場所で、土坑やピットが複数検出された。古土壌を除去した遺構面で検出されており、弥生時代前期後葉の遺構も含まれる可能性がある。長原式新段階の突帯文土器が出土しており、集落の本体が１－４区北側に存在する可能性がある。

遺物：

第８面の調査成果で述べたとおり、１－４区では縄文時代晩期の突帯文土器が出土した。これ以外に氾濫・流路内堆積物から出土した資料で、１－５区・４区から宮滝式から滋賀里Ⅰ式に位置付けられる深鉢の破片が出土した。10 層形成が縄文時代後期末～晩期前葉以前となる可能性を示唆する土器と考えられる。また、４区では、北白川下層式の縄文土器が出土した。周辺では、第二京阪道路の調査や讃良川遺跡で当該期の縄文土器が出土しており、山麓部に所在した集落の土器が混入したと考えられる。

（後川恵太郎・實盛良彦）

出土遺物の分類・編年については、下記の文献を参照した。

大川清・鈴木公雄・工楽善通編　1996 『日本土器事典』
（財）大阪府文化財センター　2007 『私部南遺跡Ⅰ』
寺澤薫・森井貞雄　1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ』
（財）大阪府文化財センター　2006 『古式土師器の年代学』
平安学園考古学クラブ　1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』
田辺昭三　1981 『須恵器大成』
大阪府近つ飛鳥博物館　2006 『年代のものさし－陶邑の須恵器－』
古代の土器研究会編　1992 『古代の土器１都城の土器集成』
古代の土器研究会編　1993 『古代の土器２都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会編　1994 『古代の土器３都城の土器集成Ⅲ』
角田文衛編　1997 『平安京提要』
中世土器研究会編　1995 『概説中世の土器・陶磁器』
九州近世陶磁学会編　2000 『九州陶磁の編年九州近世陶磁学会 10 周年記念』
上原真人　1993 『木器集成図録近畿原始編』

参考文献

大阪府教育委員会　2010 『蔀屋北遺跡Ⅰ』
大阪府教育委員会　2012 『蔀屋北遺跡Ⅱ』
大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター　1991 『河内平野の動態Ⅱ』
大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター　1993 『河内平野の動態Ⅵ』
大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター　1996 『河内平野の動態Ⅲ』
大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター　1998 『河内平野の動態Ⅳ』
大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター　1999 『河内平野の動態Ⅶ』
（財）大阪府文化財センター　2008 『讃良郡条里遺跡Ⅵ』
（財）大阪府文化財センター　2008 『讃良郡条里遺跡Ⅶ』
（財）大阪府文化財センター　2009 『讃良郡条里遺跡Ⅷ』
（財）大阪府文化財センター　2009 『讃良郡条里遺跡Ⅸ』
（財）大阪府文化財センター　2011 『讃良郡条里遺跡Ⅹ』
長友朋子　2004 「近畿における編年研究の経緯と現状」『第 53 回埋蔵文化財研究集会弥生土器中期土器の併行関係発表要旨集』
濱田延充　1993 「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年『弥生文化博物館研究報告２』大阪府立弥生文化博物館
濱田延充　2001 「畿内第４様式の実像 - 西ノ辻 N 地点出土土器の再検討 -」『ヒストリア』大阪歴史学会
山口博　1990 『四條畷市史』第４巻

第２節　小型海獣葡萄鏡および柴垣柳樹双鳥鏡について

１．はじめに

讃良郡条里遺跡の今回の調査で出土した特異な遺物の一つとして、２点の銅鏡があげられる。そのうち１点は小型海獣葡萄鏡で、通常の海獣葡萄鏡にある外区部分を欠いており、特徴的な製作方法が想定される鏡である。しかし、今回の讃良郡条里遺跡での出土は中世包含層からの出土であり、出土地点では下層に製作・使用時期の遺構面も存在せず、この鏡の出土意義を考える要素に乏しい。また、もう１点は柴垣柳樹双鳥鏡で、出土地点から大将軍社との関連で評価することが出来るが、類例に乏しい鏡である。そこで、ここではこれらの鏡について他の出土例等を概観しながら検討し、今回出土した意義について考えることとしたい。

２．既往研究概要

海獣葡萄鏡自体の研究史は古く、中国大陸では宋代から研究されていた。日本では明治時代に八木奘三郎が「海獣葡萄鏡」の名を用い、漢式の鏡とした（八木 1902）。高橋健自はこれを出土例等から改め、唐式鏡として分類した（高橋 1911）。それ以来数多の研究が取り組まれてきたが、讃良郡条里遺跡出土のものと同様の外区を欠く小型海獣葡萄鏡については、それほど取り上げられた回数は多くない。これらの鏡はその報告があらわれる最初期から既に海獣葡萄鏡の内区のみを一つの鏡として鋳造したものであろうことが指摘されていて（横山 1988）、片山昭悟によって研究対象として取り上げられている（片山 1994）。そして、2001 年には杉山洋と大谷徹がそれぞれこの外区を欠く小型海獣葡萄鏡を主体的に取り上げて研究を行った（杉山 2001、大谷 2001）。杉山は後にこれを改稿したものを公表している（杉山 2003）。これらの研究によりこの種の鏡の基本的な点が明らかとなってきている。

柴垣柳樹双鳥鏡は、和鏡の中でも室町期に盛行した「擬漢式鏡」の一種として分類される鏡で、類例の少ない鏡である。類例のうち長野県霊泉寺経塚出土鏡は出土が古く、同時に出土した経筒に紀年銘があったため広瀬都巽等に早くから取り上げられた（広瀬編 1938 等）。広瀬は戦前の和鏡研究の中心人物であり、その論考は現在でも基本文献となっている（広瀬 1974 等）。その後この鏡は中野政樹により擬漢式鏡の例として概説に取り上げられた（中野 1969）。擬漢式鏡についてはその後久保智康が分類と年代観を述べ（久保 1997、1999）、青木豊はその分類と変遷を詳細に考察している（青木 1997）。近年では青木を中心にして全国の出土和鏡が集成されている（青木ほか編 2007）。

図 679　讃良郡条里遺跡出土小型海獣葡萄鏡実測図とその原鏡模式図

図 680　讃良郡条里遺跡出土
柴垣柳樹双鳥鏡実測図

3．讃良郡条里遺跡出土の鏡

小型海獣葡萄鏡（図 679 － 1）　讃良郡条里遺跡で出土した小型海獣葡萄鏡は、直径 3.9cm、鈕高 0.5cm、縁厚 0.4cm、鏡体の厚さ 0.1cm、反り 0.1cm である。鏡背面中央に伏獣形の鈕があり、そこに鈕孔が設けられている。鈕の周囲には四つの獣像があり、それぞれ像姿は異なっている。その外側には小さな珠点が七つあり、葡萄紋と考えられる。葡萄紋は鏡縁部に取りつく形になっている。獣像・葡萄紋ともにかなり不鮮明である。原鏡となった鏡（図 679 － 2）の外区部分がない内区部分のみの鏡であり、通常の海獣葡萄鏡の内区と外区の界圏部が鏡縁部となっている。鏡縁部に鋳造時の湯道の切断痕跡が残っており、鏡縁部・鏡面ともに未研磨である。類例の出土から、7 世紀後半から 8 世紀前半頃の製作と考えられる。

柴垣柳樹双鳥鏡（図 680）　讃良郡条里遺跡で出土した柴垣柳樹双鳥鏡は、直径 9.3cm、鈕高 0.55cm、縁高 0.95cm、鏡体の厚さ 0.1cm である。鏡背面中央に亀形鈕が頭を向かって左に向けて配される。亀形鈕の甲羅中央には菊花菱紋を充填する。内区は向かって上部に柳の枝が垂れている様子を表し、右部に柴垣紋様を配する。左部に双鳥紋を充填し、その表現や類例から双鳥は雀である可能性が高い。下部には直線的な土坡が表現される。土坡の下には類例では流水が表現されるが、本鏡では 2 列の珠点状の表現に簡略化されている。内外区の境には 5 窠の窠紋形界圏を有するが、その表現は入り組みがなく外周円形である。また界圏に沿った内側には圏線とそれに重なる小形珠紋帯を有する。外区は内側から櫛歯紋帯、隆帯上の断続連珠紋帯、櫛歯紋帯の順で、最外周には突線がめぐっている。縁は直角中縁である。

青木豊の「擬漢式鏡」分類（青木 1997）のⅡ類に[1)]、久保智康分類（久保 1997）のⅡ類に分類される。後述する類例と比べ流水の表現が簡略化されており、14 世紀後半の製作が考えられる。

4．それぞれの類例

小型海獣葡萄鏡　外区を欠く小型海獣葡萄鏡の類例は、これまでに幾度か集成が行われている（横山 1988、大谷 2001、杉山 2001、2003 等）。その研究に導かれながら探索すると、12 点の類例が管見に及んだ（表）。個々の類例の詳細を述べることは紙幅の関係もあり省略するが、表をもとにその傾向をみると、12 点のうち 8 点が奈良県内での出土で突出している。その内容も、7 世紀から 8 世紀にかけて都が置かれていた藤原京域・平城京域での出土が多い。それ以外では埼玉県、石川県、愛知県、兵庫県で 1 点ずつ出土していて、大阪府下では初の出土である。

表 6　外区を欠く小型海獣葡萄鏡集成表

番号	地域	所在地	出土遺跡	面径(cm)	出土遺構	遺構時期	文献
1	埼玉県	さいたま市大谷口	明花向遺跡	3.68	包含層	縄文～弥生を主とした包含層	①
2	石川県	羽咋市寺家	寺家遺跡	3.94	祭祀地区SX02	寺家Ⅴ期(10世紀初頭)	②
3	愛知県	西尾市西幡豆町後田	後田遺跡	3.50	不明	不明	③
4	奈良県	奈良市三条栄町	平城京(第314次)左京四条三坊十坪	3.91	SD26(東堀河)	奈良時代(8世紀)	④
5	奈良県	奈良市三条本町	平城京(第208次)左京四条四坊十三坪	3.98	包含層	奈良時代(8世紀)	⑤
6	奈良県	奈良市菅原町	平城京(第273-2次)右京二条三坊三坪	3.76	包含層	奈良時代(8世紀)	⑥
7	奈良県	奈良市西大寺北町	西隆寺跡	3.80	SE740井戸最上層	西隆寺建立前(8世紀前半～中頃)	⑦
8	奈良県	橿原市四条町	四条大田中遺跡	3.80	焼土土坑	7世紀末～8世紀初頭	⑧
9	奈良県	橿原市四条町	四条大田中遺跡	4.00	焼土土坑	7世紀末～8世紀初頭	⑧
10	奈良県	橿原市四分町	藤原宮(第80次)西方官衙南地区	3.79	先行条坊五条大路SF6360路面上	飛鳥Ⅳ期(7世紀後半)	⑨
11	奈良県	明日香村阪田	坂田寺跡	3.90	SD171(東面南北回廊東側雨落溝)	平城Ⅲ期(8世紀後半)	⑩
12	兵庫県	神戸市東灘区深江北町	深江北町遺跡	3.90	掘立柱建物2北西外部(包含層)	7世紀末～9世紀初頭	⑪
13	大阪府	四條畷市砂	讃良郡条里遺跡	3.90	包含層	中世	本書

柴垣柳樹双鳥鏡　この鏡は、各種の和鏡図録等を縦覧しても掲載の極めて少ない鏡である。筆者の管見に及んだ類例は、同種鏡としては２点あった。１点は東京国立博物館所蔵の長野県上田市平井字唐沢口（旧西内村域）の霊泉寺経塚出土鏡である（小山編 1923、広瀬編 1938、蔵田 1964）。明治 30 年頃に同地の白山社境内地より出土したものという。この鏡は、直径 8.8cm、縁高 0.7cm である。讃良郡条里遺跡出土鏡と紋様構成はほぼ同様であるが、鈕が花蕊座鈕である点が異なる。石組みの石室内から小刀、笄（こうがい）、小柄（こづか）等とともに経甕に入れられた金属製経筒２、和鏡５、銅銭 13 が出土したうちの１点で、同時に出土した経筒には「天文五年」（1536 年）銘がある。経筒銘より古い 14 世紀前半から中頃の製作と見られている（青木ほか編 2007）。

２点目は島根県松江市の下黒田遺跡出土鏡である（昌子編 1988）。この鏡は、直径 9.8cm、縁高 0.9cm である。こちらも讃良郡条里遺跡出土鏡と紋様構成はほぼ同様であるが、亀形鈕の向きは反対で頭を右に向けている。また双鳥紋の充填部はやや上の位置である。土坑から横位での上半分を欠いた備前焼壺に入れられた状態で、土師器皿 16 以上、北宋銭・明銭計 29 枚、籾殻、人毛とともに出土した。この土坑は出土遺物から遺跡の東側に広がる黒田館跡に関連する 15 世紀後半の地鎮等に伴う遺構と報告されている（昌子編 1988）。鏡の製作年代は 14 世紀前半とみられている（青木ほか編 2007）。

このほか、紋様構成のよく似た鏡として静岡県下田市の白濱神社境内遺跡古宮山地区出土鏡があげられる（大場 1943、長野・日野 1962、深澤ほか編 2011）。この鏡は柳樹双雀鏡で、鈕は捩菊座鈕とされ、内区には讃良郡条里遺跡出土鏡とは異なり柴垣の表現がない。ただし外区紋様には柴垣様のものを用いている。面径約 6.8cm、縁高約 0.5cm とやや小さい。江戸時代の文化九（1812）年に神社の現本殿地奥付近から発掘された記録が残る鏡である[2)]。同時に出土したとされている和鏡３面と「嘉禄元年」（1225 年）銘の御正躰が神社に所蔵されているが、柳樹双雀鏡のみ失われ現存しない。同時に出土した鏡はいずれも 13 世紀のものとされ、本鏡も同時期のものとされている（深澤ほか編 2011）。

５．讃良郡条里遺跡出土鏡の位置付け

外区を欠く小型海獣葡萄鏡の類例を概観すると、奈良県内、それも藤原京・平城京域での出土が多いことが注目される。この点からは、これまでに指摘されるように畿内中央での製作によるものとみてよいだろう（大谷 2001、杉山 2001、2003）。寺家遺跡等の海上交通の要衝での国家的祭祀遺跡から出土している点も、中央からの流通であることを裏付けると言える。

讃良郡条里遺跡出土鏡は湯道の切断痕跡があり、初めからこの面径の鏡として製作されたことが明らかである。杉山洋が想定するような枝構造の連鋳式鋳型による鋳造かどうかは判断できないが（杉山 2001）、大谷徹が想定するように「祭祀に用いるための儀鏡」として（大谷 2001）、原鏡となる外区の存在した海獣葡萄鏡（図 679 －２）から意図的に外区を省き面径を縮小した鏡が製作されたものと考えられる。鏡面等が研磨されず、鋳放しの状態で出土するものが多いこともこの点を裏付ける。

今回の讃良郡条里遺跡では中世包含層からの出土であったが、微高地上であり中世の削平も考えられる位置であった。今回の調査地の北側で行われた発掘調査では奈良時代にこの地域で早くから条里制が施行されていたことがわかっている（中尾ほか編 2009）。この鏡が中央からの流通と考えられることを考慮すれば、この条里制施行に関係する有力者が、この地域に持ち込み祭祀に使用した鏡である可能性も考えてよいだろう。また、この種の鏡は都城内で溝から出土し、沿岸の祭祀遺跡で用いられるなど水との関連が注意され（片山 1994、大谷 2001、杉山 2003）、鏡と水は従来からその関連が深いこと

が指摘されている（中野 1969 等）。讃良郡条里遺跡も古代河内湖の沿岸付近にあたる遺跡であり、今回出土した鏡は藤原・平城京期の祭祀のあり方と広がりを考える上で重要な資料といえるだろう。

柴垣柳樹双鳥鏡については、これまで２点の類例が出土している事がわかった。その紋様表現を比較すると、讃良郡条里遺跡鏡は紋様の一部に簡略化が見られ、14 世紀後半の製作と見られる。青木豊は窠紋形界圏の入り組みがなくなり外周円形となるのは 14 世紀中頃としており（青木 1997）、久保智康は「花形の界圏」すなわち青木が「窠文形」とする界圏の出現自体を 14 世紀後半まで降らせている（久保 1997、1999）。『全国出土和鏡集成』では本鏡式は 14 世紀前半からの製作が考えられているが、青木や久保の指摘を考慮すれば、あるいは本鏡式の製作時期自体が若干降る可能性も考慮に入れるべきであろう。出土例は全て「製作時期」から一世紀以上経過しているとみられる点も注意すべきである。

室町期の擬漢式鏡については、これまでに京都市内の八条院町付近で製作が行われていたことが一連の発掘調査により明らかになっている[3)]（網 1996）。擬漢式鏡の製作については一稿を草したことがあるが（實盛 2011）、讃良郡条里遺跡出土鏡が八条院町付近での製作かどうかは現時点では不明である。しかし、八条院町出土の鋳型には柳葉状の紋様があるものも含まれているようであり、仮に八条院町付近での製作であるとすれば、京の製品の流通を考える上で本鏡は重要な資料となると言えるだろう。

柴垣柳樹双鳥鏡が出土したのは、明治 44 年に忍陵神社に合祀された砂村鎮座の大将軍社（山口編 1972、山口 1990）の境内地である。この大将軍社は、方位の吉凶を司る八将神の一神である大将軍神を祀る神社で、これまで創建年代が不明であった。今回の調査で、室町後期（16 世紀中頃～後半）まで遡ることが明らかとなったが、本鏡もそれを裏付ける遺物の一つと言える。出土位置は神社敷地中心の社殿跡付近であり、御正躰等として用いられたものか神社への奉納鏡の可能性が考えられるだろう。

本節の作成に当たっては、下記の諸氏・諸機関にお世話になった。記して謝意を表したい。

鐘方正樹、楠惠美子、杉山　洋、深澤芳樹、降幡順子、国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良市教育委員会。

（實盛良彦）

註

1）ただし、青木はこのⅡ類について、その紋様が櫛歯紋帯以外は漢鏡との関連が希薄であることから「本来擬漢式鏡と呼称すべき鏡ではないものと考えられる」としている（青木 1997）。

2）国学者で著名な平田篤胤が文化九（1812）年に著した『白濱神社略縁起』に記録されている。

3）八条院町付近での既往の調査およびその報告については、上村 2002 や山本 2010 に一覧表が掲載されている。

参考文献

青木　豊 1997「所謂擬漢式鏡に関する考察」『國學院大學考古学資料館紀要』第 13 輯、國學院大學考古学資料館。

青木　豊ほか編 2007『全国出土和鏡集成』平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書。

網　伸也 1996「和鏡鋳型の復元的考察」『研究紀要』第３号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所。

上村和直 2002「京都八条院町をめぐる諸問題」『研究紀要』第８号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所。

大谷　徹 2001「浦和市明花向遺跡出土の小型海獣葡萄鏡」『埼玉考古』第 36 号、埼玉考古学会。

大場磐雄 1943『伊古奈比咩命神社』伊古奈比咩命神社社務所。

片山昭悟 1994『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様』。

久保智康 1997『京都国立博物館蔵和鏡』京都国立博物館。

久保智康編 1999『中世・近世の鏡』日本の美術第 394 号、至文堂。

蔵田　蔵 1964「経塚論　六、東京国立博物館保管、中部地方出土の経塚遺物（下）」『MUSEUM』第 159 号、美術出版社。

小山眞夫編 1923『小縣郡史』余編、小縣時報局。

實盛良彦 2011「三重県神島八代神社所蔵二神二獣鏡について－室町期銅鏡製作の可能性を探る－」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』

ＸＸＶ、考古学研究室紀要第３号、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室。
昌子寛光編 1988『下黒田遺跡発掘調査報告書』松江市建設部建設課・松江市教育委員会。
杉山　洋 2001「小型海獣葡萄鏡について」『日本文化史研究』第 33 号、日本文化史学会。
杉山　洋 2003『唐式鏡の研究』鶴山堂出版部。
高橋健自 1911『鏡と剣と玉』冨山房。
長島健・日野一郎 1962「金工と石造品」『伊豆下田』地方史研究所。
中尾智行ほか編 2009『讃良郡条里遺跡』Ⅷ、財団法人大阪府文化財センター。
中野政樹 1969『和鏡』日本の美術第 42 号、至文堂。
広瀬都巽編 1938『扶桑紀年銘鏡図説』大阪市立美術館学報第一、大阪市役所。
広瀬都巽 1974『和鏡の研究』角川書店。
深澤太郎ほか編 2011「静岡県下田市白濱神社所蔵考古資料調査報告」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第３号第１分冊、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター。
八木奘三郎 1902「鏡鑑説」『考古便覧』嵩山房。
山口　博編 1972『四條畷市史』第一巻、四條畷市役所。
山口　博 1990『四條畷市史』第４巻、四條畷市役所。
山本雅和 2010『平安京左京八条三坊九町跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所。
横山貴広 1988「海獣葡萄鏡小論」『寺家遺跡発掘調査報告』Ⅱ、石川県立埋蔵文化財センター。

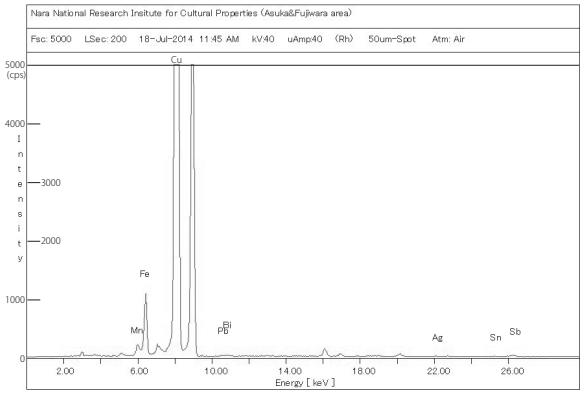
表文献

①大谷徹 2001「浦和市明花向遺跡出土の小型海獣葡萄鏡」『埼玉考古』第 36 号、埼玉考古学会。
②小嶋芳孝編 1988『寺家遺跡発掘調査報告』Ⅱ、石川県埋蔵文化財センター。
③宮内庁書陵部 1992『出土品展示目録　古鏡』学生社。
宮内庁書陵部陵墓課 2005『宮内庁書陵部所蔵　古鏡集成』学生社。
④三好美穂ほか 1995「平城京左京四条三坊十坪の調査　第 314 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成６年度、奈良市教育委員会。
⑤立石堅志ほか 1991「平城京左京四条四坊十三坪の調査　第 208 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成２年度、奈良市教育委員会。
⑥鐘方正樹ほか 1994「平城京右京二条三坊三坪の調査　第 273-2・283 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成５年度、奈良市教育委員会。
⑦蓮沼麻衣子ほか 2000「西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査　第 306 次・第 309 次」『奈良国立文化財研究所年報』2000-Ⅲ、奈良国立文化財研究所。
⑧齊藤明彦・今尾文昭 1989「四条大田中」『大和を掘る　1988 年度発掘調査速報展』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
片山昭悟 1994『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様』。
⑨花谷浩編 1996『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』26、奈良国立文化財研究所。
⑩奈良国立文化財研究所編 1991『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』21、奈良国立文化財研究所。
⑪山下史朗編 1988『深江北町遺跡』兵庫県教育委員会。

付編　讃良郡条里遺跡出土鏡の分析

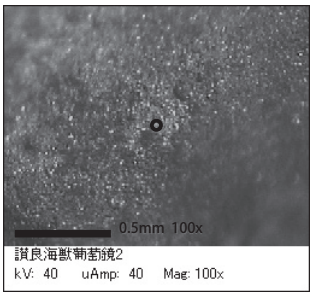
讃良郡条里遺跡で出土した銅鏡２点については、国立文化財機構奈良文化財研究所の降幡順子氏に依頼し、蛍光Ｘ線分析装置（EDAX 製 EAGLE Ⅲ）を用いた非破壊での成分分析を行った（図 681）。分析にあたっては発掘調査時のいわゆるガジリ部や、錆が剥がれた部分等比較的腐食の程度が少ない箇所を顕微鏡観察により分析位置として選択した。ただ、あくまでも非破壊での分析であり、表面腐食層の影響は排除できないため、分析した値は測定位置表面での値を示すにとどまることを記しておく。

また、この分析時に撮影した透過Ｘ線写真の分析の結果、降幡氏により柴垣柳樹双鳥鏡の外区部分にタタキ仕上げとみられる補修痕が見つかった（図 682）。



蛍光Ｘ線スペクトル

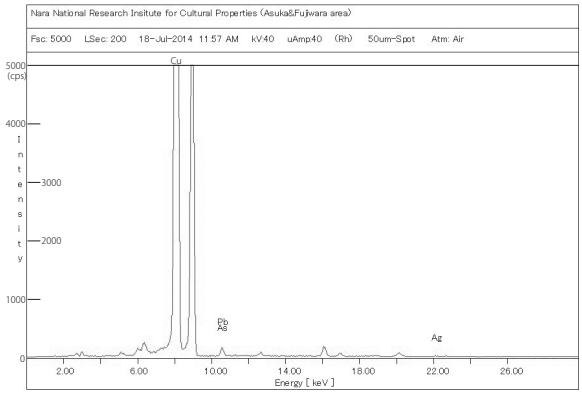
測定箇所（鏡背）



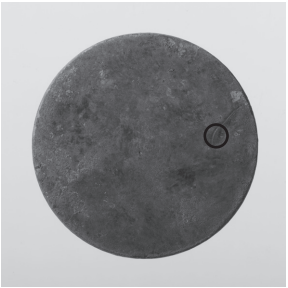
分析結果（wt%）

鉄（Fe）	銅（Cu）	鉛（Pb）	ビスマス（Bi）	銀（Ag）	錫（Sn）	アンチモン（Sb）
1.1	96.4	0.27	0.36	0.24	0.28	1.3

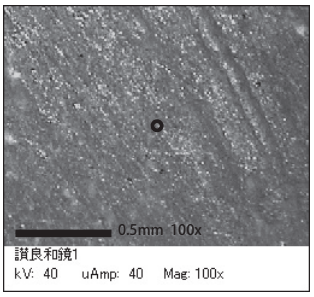
小型海獣葡萄鏡



蛍光Ｘ線スペクトル



測定箇所（鏡面）

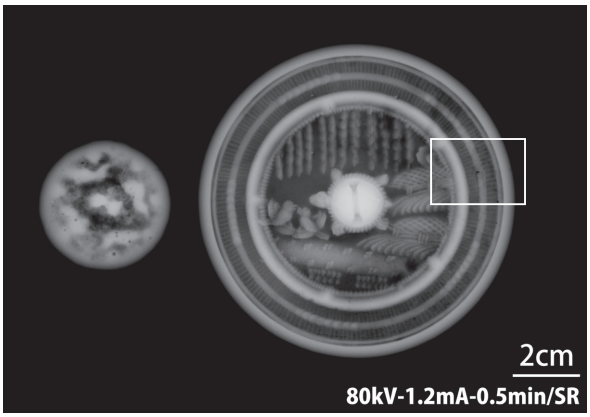


分析結果（wt%）

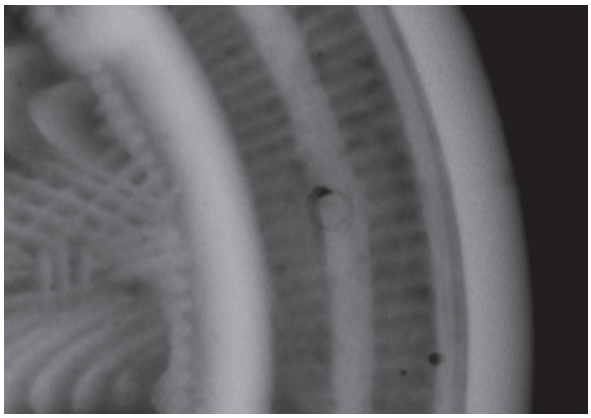
銅（Cu）	ヒ素（As）	鉛（Pb）	銀（Ag）
98.2	0.22	1.3	0.28

柴垣柳樹双鳥鏡

図 681　小型海獣葡萄鏡・柴垣柳樹双鳥鏡成分分析結果



透過Ｘ線写真



透過Ｘ線写真（左写真□で囲んだ部分）

図 682　小型海獣葡萄鏡・柴垣柳樹双鳥鏡透過Ｘ線写真